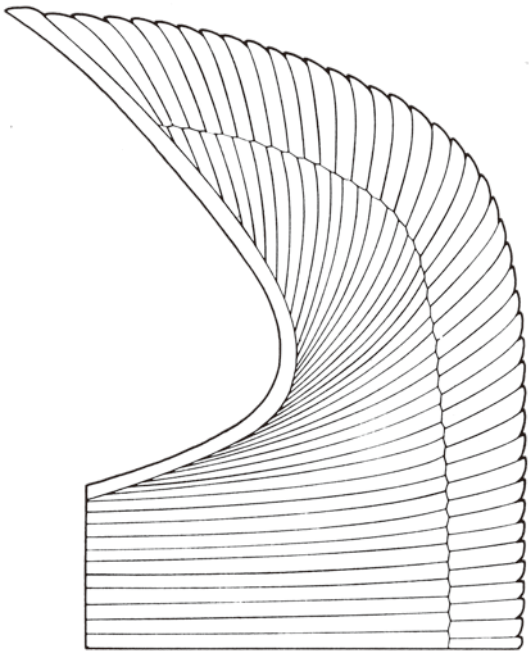
古代瓦研究会シンポジウム記録

古　代　瓦　研　究　XI

―鴟尾・鬼瓦の展開１　鴟尾―

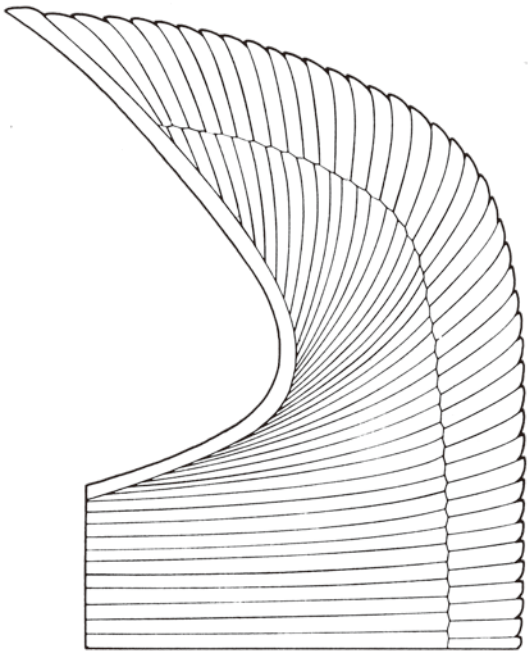


奈良文化財研究所

古代瓦研究会シンポジウム記録

古　代　瓦　研　究　XI

―鴟尾・鬼瓦の展開１　鴟尾―



奈良文化財研究所

例　言

１　本書は、奈良文化財研究所が主催する古代瓦研究会（事務局：奈良文化財研究所　都城発掘調査部平城地区）の成果報告である。

第１回～第19回シンポジウムおよび2001年度検討会の成果は、『古代瓦研究Ⅰ－飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで－』（奈良国立文化財研究所、2000年11月）、『古代瓦研究Ⅱ－山田寺式軒瓦の成立と展開－』（奈良文化財研究所、2005年３月）、『古代瓦研究Ⅲ－川原寺式軒瓦の成立と展開－』（奈良文化財研究所、2009年３月）、『古代瓦研究Ⅳ－法隆寺式軒瓦の成立と展開－、雷文縁・輻線文縁・重圏文縁複弁蓮華文軒丸瓦の展開－』（奈良文化財研究所、2009年11月）、『古代瓦研究Ⅴ－重弁蓮華文軒丸瓦の展開－、－藤原宮式軒瓦の展開－』（奈良文化財研究所、2010年３月）、『古代瓦研究Ⅵ－大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開－、－重圏文系軒瓦の展開－』（奈良文化財研究所、2014年２月）、『古代瓦研究Ⅶ－平城宮式軒瓦の展開１　6225 － 6663系－、－平城宮式軒瓦の展開２　6282 － 6721系－』（奈良文化財研究所、2017年２月）、『古代瓦研究Ⅷ－東大寺式軒瓦の展開、－飛雲文軒瓦の展開－』（奈良文化財研究所、2018年２月）、『古代瓦研究Ⅸ－一本づくり・一枚づくりの展開１（東日本編）－』（奈良文化財研究所、2020年２月）、『古代瓦研究Ⅹ－一本づくり・一枚づくりの展開２（西日本編）－』（奈良文化財研究所、2021年２月）として先に刊行した。本書はそれに続く下記のシンポジウムの成果を収録している。

第20回シンポジウム　鴟尾・鬼瓦の展開１－鴟尾－　　2020年２月１・２日
（会場：奈良文化財研究所　平城宮跡資料館講堂）

２　本書の編集にあたっては、体裁の統一や文意の明確化など、必要に応じて最低限の加筆・改訂をおこない、挿図や図版についても、一部で縮尺の変更や組み替えをおこなっている。そのため、報告者の提出原稿と異なる部分もあるが、ご諒承願いたい。なお、報告者の所属は、それぞれの文章の末尾に報告当時のものを記した。

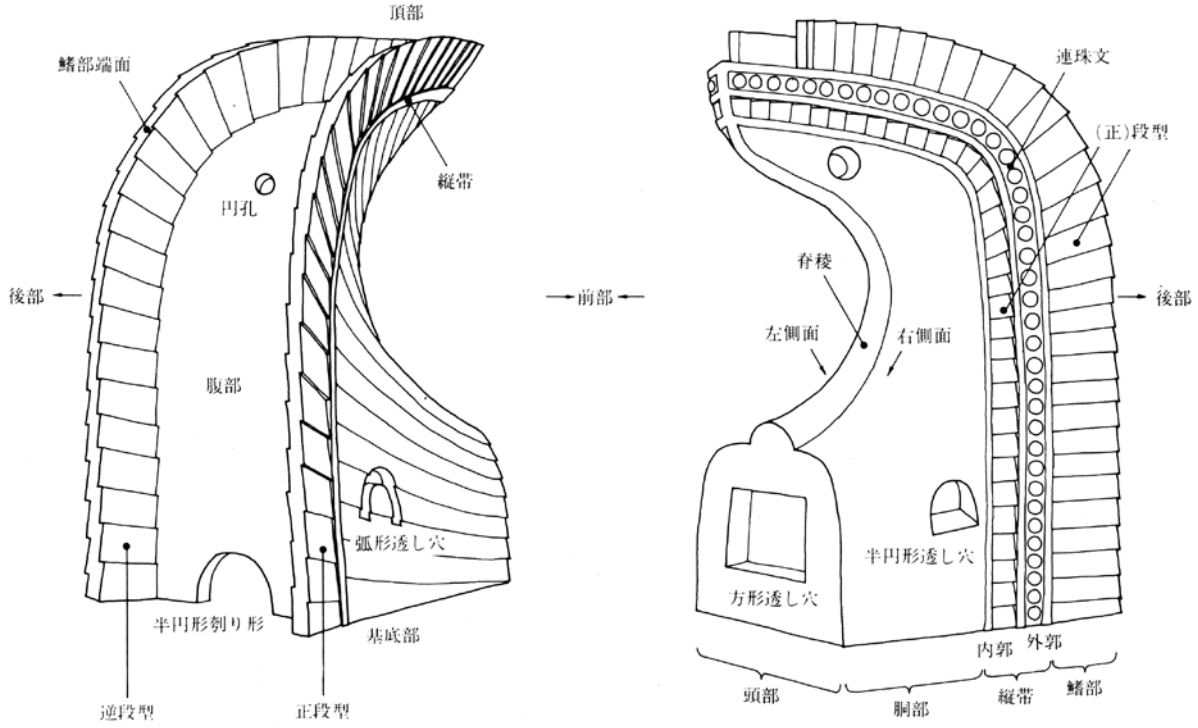
３　各研究報告は、報告者の用語を極力尊重する方針としたが、討議および出土一覧表の中では混乱を避けるため、用語の統一をおこなった（蓮華紋、紋様→蓮華文、文様など）。ただし､内容上必要な場合には統一せずに表記している。鴟尾の各部名称と用語については（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1980『日本古代の鴟尾』にしたがった（第１図）。出土一覧表については、全国地方公共団体コード順に配列している。

４　本書の編集は、都城発掘調査部考古第三研究室がおこない、道上祥武・岩永玲・田中龍一が担当し、森由季子がこれを補佐した。

５　シンポジウムの開催にあたっては、報告者をはじめ、関係者や下記の関係機関等の多大なご協力を得た。篤く感謝の意を表したい。

明石市市民生活局、安曇野市教育委員会、尼崎市教育委員会、石川県埋蔵文化財センター、出雲弥生の森博物館、伊勢崎市教育委員会、茨城県教育財団、大津市教育委員会、大津市歴史博物館、岡山理科大学、加古川市教育委員会、加西市教育委員会、元興寺文化財研究所、韓国国立文化財研究所、京都市考古資料館、京都市文化市民局文化芸術都市推進室、京都府埋蔵文化財調査研究センター、窪田照久、堺市役所文化部、さぬき市教育委員会、佐用町教育委員会、静岡県埋蔵文化財センター、高松市教育委員会、高松市埋蔵文化財センター、東北学院大学文学部、徳島県立博物館、鳥取県埋蔵文化財センター、豊岡市教育委員会、長野市教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、奈良市埋蔵文化財調査センター、寝屋川市教育委員会、東近江市教育委員会、東広島市教育委員会、東広島市出土文化財管理センター、彦根城世界遺産登録推進室、彦根市歴史まちづくり部、飛騨市教育委員会、兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部、兵庫県立考古博物館、福岡市経済観光文化局文化財部、藤井寺市教育委員会

（五十音順・敬称略）



第１図　鴟尾の各部名称

目　　次

－鴟尾・鬼瓦の展開１　鴟尾－

Ⅰ　報 告

1　奈良の鴟尾……道上　祥武・廣岡　孝信……3
白石　純・清野　孝之

2　京都・滋賀の鴟尾……熊谷　舞子・村田　和弘……30
北村　圭弘・福庭　万里子

3　大阪・和歌山の鴟尾……丸山　香代……70

4　兵庫の鴟尾……垣内　拓郎……81

5　山陽・四国地方の鴟尾……香川　将慶・妹尾　周三……139
岡本　治代・白石　純

6　東海地方の鴟尾……武田　寛生……174

7　山陰地方の鴟尾……久保　穣二朗・花谷　浩……189

8　九州地方の鴟尾……比嘉　えりか……214

9　韓国の鴟尾……洪　パルグム（홍　밝음）……230

10　東北地方の鴟尾……佐川　正敏……248

11　関東地方の鴟尾……出浦　崇・皆川　貴之……256

12　北陸地方の鴟尾……熊谷　葉月……264

13　中部地方の鴟尾……三好　清超・小林　新平……269

14　討　　議……291

II　鴟尾出土一覧表

1　宮城県 …… 323
2　福島県 …… 324
3　茨城県 …… 326
4　群馬県 …… 327
5　新潟県・石川県・福井県 …… 328
6　山梨県 …… 330
7　長野県 …… 331
8　岐阜県 …… 334
9　静岡県 …… 339
10　愛知県 …… 341
11　三重県 …… 344
12　滋賀県 …… 347
13　京都府 …… 355
14　大阪府 …… 373
15　兵庫県 …… 385
16　奈良県 …… 404
17　和歌山県 …… 422
18　鳥取県 …… 425
19　島根県 …… 435
20　岡山県 …… 439
21　広島県 …… 445
22　徳島県 …… 448
23　香川県 …… 449
24　愛媛県 …… 452
25　高知県 …… 453
26　福岡県 …… 455
27　熊本県 …… 459
28　大分県 …… 461

Ⅰ　報　告　編

1　奈良の鴟尾

道上　祥武・廣岡　孝信・白石　純・清野　孝之

A　はじめに

奈良県内では合計38遺跡で鴟尾が出土している。特に飛鳥地域周辺では日本最古の本格的寺院である飛鳥寺をはじめ、最古級の鴟尾が複数出土しており、日本における鴟尾の導入と変遷を考える上で重要な位置を占めることは多言を要しない。その多くは『日本古代の鴟尾』（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）で既に紹介されており、鴟尾の導入、変遷、製作技法について大脇潔の総合的な研究がある（大脇 1999・2002）。大脇は、百済の瓦工人を通して造瓦技術が伝わるとともに「百済様式」の鴟尾が導入され、７世紀を通して様々な系譜の鴟尾が展開すること、７世紀後半には「唐様式」の鴟尾が出現し、その後の主流となることを論じた。「百済様式」とは「両側面に幅の狭い段を刻み、胴部と鰭部を簡素な縦帯で区画し、鰭が頂部を一周する」もの、「唐様式」とは「鰭が頂部をめぐらずに途切れ、脊稜が前方に突出し、縦帯は複帯構成で内郭に山形と谷形を交互に削り出す特殊な段をあらわし、外郭にはコンパスを利用して下書きした連珠文を削り出す」ものを基本とする。近年、今井晃樹は東アジア地域の鴟尾を分析し、日本の鴟尾についても再検討をおこなった。今井は、大脇の百済様式を北朝以来の伝統をもつ「北朝様式」として捉え、日本では７世紀に断続的な朝鮮半島の影響を受ける中で、周辺諸国にみられる「隋唐様式」とは異なる「唐様式」の鴟尾が独自的に成立していくことを指摘している（今井 2018）。

B　飛鳥地域の鴟尾

ⅰ　飛鳥寺跡・飛鳥池遺跡（第１・２図）

1956・1957 年の第１～３次調査で伽藍中枢部が発掘され、多数の鴟尾片が出土した。その後、飛鳥寺東方・東南部・西門地区・南方・講堂・北方および飛鳥池遺跡、飛鳥池東方遺跡でも鴟尾が出土している。

A 類は最も薄手で胴部と鰭部に幅の狭い段をもつものである。

A１類　胴部、鰭部、腹部など合計 10 点が出土している。胴部および鰭部内面に正段、外面に逆段をもつ。胴部の段と鰭部の段が互い違いになる。胴部段幅が前方で 1.5 ～ 2.0cm、後方で 2.0 ～ 2.5cm、鰭部段幅が外面 2.7 ～ 3.0cm、内面 3.3cm と全体に狭い段をもつ。厚さは胴部前方で 1.2cm、胴部後方から腹部、鰭部で 1.8cm とかなり薄く仕上げられている。2.5 ～ 3.0cm の粘土紐を積み上げて成形しており、胴部と鰭部を一体とし、腹部は別の粘

土紐を積み上げた上で成形・接合する（以下、腹部接合式とする）。腹部との接合部は縦帯から５cm 程度後方にあり、腹部と鰭部後方の接合部が鈍角になっているため、鰭部が大きく外反する。胴部および鰭部の段はそれぞれ段幅の半分程度を削って成形しており、この他の７世紀初頭前後の例にも共通する古手の手法である。縦帯は１条の沈線と段の食い違いで表現され、段および縦帯を設定した際の痕跡も確認できる。緻密な胎土を用いており、焼成はやや軟質、内外面ともに灰白色を呈する。すべて１次調査で出土したもので、中金堂および西金堂所用とされる。『日本古代の鴟尾』鴟尾 A。

Ａ２類　胴部、腹部、鰭部、縦帯、脊稜など合計 10 点が出土している。胴部および鰭部外面に正段をもつ。鰭部内面の段の有無は不明。段幅は胴部後方および鰭部で 1.7 ～ 2.5cm、脊稜付近では約 1.2cm である。狭い段幅や胴部と鰭部の段が食い違う点はＡ１類と共通するが、鰭部が正段である点、約 0.5cm の断面方形の細い縦帯を削り出す点が異なる。縦帯の中心軸と左右端部の沈線は縦帯の設定痕か。脊稜は幅約６cm の断面半円形で中空。厚さは胴・鰭部で 1.5 ～ 2.0cm、腹部は１cm 前後とＡ１類よりなお薄い。3.5 ～ 4.0cm の粘土紐を積み上げる。位置は不明だが、Ａ１類と同様、縦帯よりも後方で取り付く腹部接合式であろう。緻密な胎土を用いており、須恵質で内外面ともに灰色を呈する。飛鳥寺旧境内東方および飛鳥池東方遺跡を中心に出土している。また、このＡ２類とみられる資料が明日香村の東山カワバリ遺跡で出土している（西光ほか 2000）。

Ｂ類はＡ類よりも段幅が広く、やや厚みを増したものである。

Ｂ１類　胴部、鰭部、腹部、縦帯など合計 11 点が出土している。胴部および鰭部外面に正段をもつ。鰭部内面の段の有無は不明。段幅は胴部４～５cm、鰭部 6.0 ～ 6.5cm。断面方形で幅 1.5cm の縦帯をもち、胴部と鰭部の段は互い違いになる。厚さは 1.5cm 程度である。４～５cm 程度の粘土紐を積み上げているが、粘土紐を平面Ｕ字状に折り曲げ、胴部と腹部を一体で成形する（腹部折り曲げ式）。腹部の位置は縦帯よりも後方になる。緻密な胎土を用いており、焼成はやや軟質、灰白色。西門付近で集中的に出土していることから、西門所用の鴟尾とされる。『日本古代の鴟尾』鴟尾 B。

Ｂ２類　鰭部を中心に頭部や腹部など合計 10 点が出土している。胴部および鰭部両面に正段をもつ。段幅は頭部から胴部で 4.5 ～ 6.0cm、鰭部外面が６～７cm、内面が 5.5 ～ 6.5cm。厚さは胴部および鰭部で 1.5 ～ 2.0cm、腹部は 2.5cm 程度であり、Ｂ１類よりやや分厚い。腹部接合式。２～４cm 程度の粘土紐を積み上げる。内外面をナデで調整し、段幅の半分程度（外面 2.5cm 前後、鰭部内面は２cm 前後）を削り出して正段を成形する。該当する破片がないが、縦帯をもつ可能性が高い。鰭端部に側面の段と位置をずらした正段を削り出す。焼成はやや軟質、外面黒色、断面灰白色を呈する。飛鳥寺旧境内東南部を中心に出土している。『日本古代の鴟尾』鴟尾 D。

Ｃ類　縦帯周辺から鰭部、腹部におよぶ破片が出土している。鰭部外面に幅 10cm 以上の広い正段をもち、面を広く削る。胴部および鰭部内面の段の有無は不明。幅２cm 以上の

幅広の縦帯をもつ。厚さは3cm以下、3～4cm程度の粘土紐を積み上げて成形する。腹部接合式。腹部は縦帯よりやや後方で鰭部に取り付き、外面にナデ調整をほどこす。焼成はやや軟質で、砂粒を含む粗い胎土を用いる。外面黄灰色、断面黒灰色である。講堂所用か。鰭部基底部と思われる破片が1点、飛鳥寺東方で出土している。幅9cm以上の逆段を外面にもち、複数のキザミ痕跡がみられる。『日本古代の鴟尾』鴟尾C。

D類　鰭部、胴部基底部、脊稜部の計3点が出土している。鰭部外面および胴部に正段を削り出す。厚さは3～4cm程度とやや分厚い。腹部は縦帯よりも後方に取り付くとみられる。縦帯は幅1cmの断面方形の突帯を2条、並行に削り出している。突帯の間に珠文または段が入る可能性がある。3.5cm程度の粘土紐を積み上げて成形する。細かい砂粒を多く含み、焼成はやや軟質で赤橙色。飛鳥寺旧境内東方から東南部、飛鳥池遺跡で出土。

E類　胴部から脊稜へと向かう屈曲部と思われる破片。厚さ2～3cm。内外面に細かいハケメ調整をほどこし、脊稜付近に平行タタキをほどこす。焼成はやや軟質、灰白色を呈する。北門付近で出土。『日本古代の鴟尾』鴟尾E。

F類　鰭部から胴部の計3点が出土している。鰭部外面に幅6.5cmの正段をもつ。幅1.5cmの断面方形の縦帯をもち、腹部は縦帯よりもやや後方にとりつく。腹部折り曲げ式か。厚さ1.7～3.5cm。砂粒を多く含む粗い胎土を用い、焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。中金堂南側参道付近、飛鳥寺北方で出土。『日本古代の鴟尾』鴟尾F。

G類　5点出土している。硬質の焼成で無文の鴟尾。最大厚8cmと分厚い。腹部接合式。胎土は緻密だが、一部粗い胎土を用いるものもある。須恵質。外面青灰色、内面灰色を呈する。東金堂葺き替え時に用いたものとされる。同様に、硬質かつ厚手の破片が飛鳥寺北方で出土している。ただし、両面に正段を有し、端部にも段を削り出す鰭部片の可能性がある。段幅約7cm、厚さ4.5～5.5cm。『日本古代の鴟尾』鴟尾G。

H類　頂部先端の破片がある。無文で上部が凹む。緻密な胎土を用い、焼成はやや軟質、鈍い黄土色を呈する。同形式とみられる破片は腹部基底部か。中央に半径15cmの半円形透かしを配置し、さらにその上に透かしを備えた可能性がある。厚さは5cmと分厚く、内面に縄タタキがみられる。頂部先端は東金堂周辺、基底部は飛鳥寺東方隅部で出土。

飛鳥寺周辺では多様な鴟尾が出土しているが、全体に狭い段を削り出し、極めて薄手に作られたA類は飛鳥寺創建期の主要伽藍に用いられたとみられる。B類はやや厚みを増し、段幅が広いが、A類に続くとみられる。C～F類にはその傾向が進行しており、葺き替え時の鴟尾であろう。無文化したG・H類も同様である。

ii　古宮遺跡（第3図）

1点が出土している。破片長13.0×11.8cm。厚さは1.2cmと極めて薄い。縦帯および胴部･鰭部にあたり、幅0.6cmの断面方形の細い縦帯を有し、胴部と鰭部にそれぞれ幅2.5～3.5cmの逆段を互い違いに削り出す。鰭内面はナデ調整で無文。内面に腹部との接合部が

認められず、さらに後方で腹部が取り付くとみられる。胴部に透かしの一部が残るが、形状は不明、降棟の透かし穴か。縦帯、鰭部、胴部の順に文様を削り出す。緻密な胎土を用い、焼成は須恵質で灰色。鰭・胴部ともに逆段だが、飛鳥寺Ａ類・豊浦寺Ａ類と特徴が共通する。その出土地点から創建期の豊浦寺での使用が想定されている。

ⅲ　豊浦寺跡（第４図）

Ａ類　胴部、縦帯、頭部、脊稜の破片が出土している。胴部全体に正段をもち、頂部周辺の段は沈線で表現される。段幅５～６cm。胴部後方の縦方向の沈線を境に正段の角度が大きく切り替わる。脊稜はやや角張った断面半円形、幅５cm の粘土を貼り付けて成形している。幅１cm の細い縦帯をもつ。鰭部の様相は不明。腹部は縦帯よりも後方で取り付くか。頭部に玉縁状の円形の突起をもつのが特徴。前方に５cm 程度突出しており、大棟に取り付く細工と考えられる。胴部下端の一部が方形にカットされており、降棟に接続する透かし穴とみられる。内面は基本的にナデ調整だが､一部同心円当て具の痕跡がみられる。外面は段を削り出し、ナデで平滑に仕上げる。厚さは 1.5 ～２cm 前後、基底部で 3.5cm。５cm 程度の粘土紐を積み上げて成形する。緻密な胎土を用い、やや軟質の焼成。暗黒灰色～灰白色。金堂周辺の奈良時代前半頃の瓦敷から出土している（清水 1995)。

Ｂ類　保井芳太郎採集資料（保井 1932)。右側面胴部、縦帯、鰭部が残存する。破片長縦 31cm、横 36cm。縦帯は幅 2.5cm の断面方形の突帯を２条、７cm の間隔を空けて配置し、内側に珠文をおく。中央に１条の沈線があり、その上に珠文を貼り付ける。珠文は直径 5.6cm で、2.6cm の間隔を空ける。５cm 前後の粘土紐を積み上げた後、胴部外面、縦帯よりも前方に厚さ 2.5cm の粘土を貼り足した上で文様をつくりだす。鰭部は外面のみ正段。縦帯取り付き部で段幅 16cm。腹部接合部は認められない。胴部文様は羽状段の可能性があり、残存幅は約 11cm。厚さは胴部で８cm、縦帯付近で 6.5cm、鰭部で５cm 程度とかなり分厚い。緻密な胎土を用い、焼成は堅緻。外面黒灰色、内面灰色。

Ｃ類　現在の向原寺南方で粘土紐の単位で剥離した鰭部片が出土している。鰭部外面に段幅４cm 以上の正段をもつ。厚さ 4.5cm、比較的Ｂに似るが、別個体である。

豊浦寺Ａ類は段表現や厚さは飛鳥寺Ｂ類に近いが屋根との取り付き部の成形は独特である。創建期に近い時期のものか。Ｂ・Ｃ類は葺き直し時のものとみられる。

ⅳ　甘樫丘東麓遺跡（第５図）

破片が１点出土している。幅５cm 程度の正段をもつ胴部片で、腹部との接合部をもつ。厚さ２～３cm 程度。縦帯の有無や鰭部の段は不明。焼成は軟質で淡橙色を呈する。

ⅴ　川原寺跡（弘福寺）（第６図）

弘福寺に頂部付近の縦帯片が所蔵されている。縦帯は内郭が段帯、外郭が珠文帯の複帯

構成。それぞれ幅１～ 1.5cm の断面方形の突帯で区画され、最も内側の突帯は２条１組である。内郭には山形と谷形を交互に配する段をあらわす。内郭幅 8.4 ～ 8.5cm、段幅 4.5 ～ 5.5cm。外郭の連珠文はコンパスで下書きをしている。珠文直径 3.5cm。鰭部はみられず、ドウジョウ遺跡例や橘寺例と同様、「唐様式」の特徴を示す。胎土は砂粒をやや含み、焼成は堅緻で灰褐色。発掘調査で出土したものではないが、諸特徴から川原寺創建期の鴟尾とみて支障ない（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。また、川原寺北面大垣の調査で鰭部片が一点出土している。両側面に正段をもち、段幅は８cm。厚さ約４cm。赤褐色のやや軟質の焼成。弘福寺所蔵資料とは別個体である。

vi　ドウジョウ遺跡（第７図）

飛鳥川東岸所在の「ミロク石」周辺で地元の耕作者が発見したもの。頂部先端の断片が見つかっている。頂部先端で幅 10cm 程度の断面半円形の太い脊稜をもち、その脊稜に沿って断面三角形の段を削り出す。段幅は頂部先端で１～ 1.3cm。縦帯は川原寺例と同様、断面方形の突帯で画する複帯構成をなす。最も内側の突帯は２条１組で、幅１～ 1.5cm。内郭は１単位４～５cm の山形と谷形を交互に配する段。内郭幅は 2.3cm と川原寺例よりも狭い。外郭は内側を幅１cm、外側を幅 1.2cm の突帯で区画し、コンパスを用いた直径 2.8cm の連珠文を配する。頂部上面は幅約６cm、高さ約１cm の土堤状に成形され、上面は平坦である。粘土塊を貼り付けて成形したとみられ、中実になっている。焼成は堅緻で須恵質、暗灰色を呈する。川原寺例より文様は小ぶりだが、帯の構成は酷似しており、同時期の製品とみてよい。その出土地から、飛鳥京苑池との関係性がうかがえる。

vii　橘寺（第８図）

保井芳太郎採集資料（保井 1932）。頂部先端付近の右側面縦帯部にあたる。胴部は無文か。縦帯は複帯構成で幅 1.2cm の断面方形の突帯で区画される。内郭は幅 3.5cm、段幅 2.5cm の逆段。外郭は直径３cm の連珠文帯。珠文中央にコンパスの針痕が確認できる。上端部が残存しており、頂部に鰭がめぐらないことがわかる。上端部から 1.5cm 程度の段差をもって腹部に取り付く。上面は平坦か。厚さ 2.5 ～ 3.0cm。緻密な胎土を用いる。軟質の焼成で外面灰赤色、内面橙色を呈する。川原寺例やドウジョウ遺跡例と同様「唐様式」の範疇になるが、段帯に簡略化が認められ、やや後出する資料である。

viii　奥山廃寺（第９図）

鰭部から胴部、腹部にいたる破片が１点、頂部先端付近の破片が１点出土している。鰭部片は左側面基底部にあたり、基底部から 25.5cm の間に段を設けず、それより上方で幅５cm 程度の正段を削り出し、一部は沈線で表現する。厚さ８mm、幅 2.0 ～ 2.5cm の粘土板を２条、1.7cm の間隔で貼り付けて縦帯を構成する。胴部側面および腹部に弧形の透かし

をもつ。腹部接合式で、厚さ 3.0 ～ 3.8cm の腹部が縦帯の真裏でとりつく。外面に格子タタキをほどこし、内面に同心円文当て具痕跡がみられる。鴟尾片は金堂周辺の瓦敷から出土しており、金堂所用の可能性が高い。金堂の創建は７世紀前半中頃にさかのぼりうるとされ（奈良国立文化財研究所 1990）、瓦敷は７世紀後半以降の金堂改修の最終段階に敷かれたとされる（箱崎･西川 2002）。もう一点は頂部付近の破片で縦帯の間隔がやや狭い。縦帯の下に２条の沈線があるほか、下方に薄い波状文がみられる。金堂出土のものと同形式とみられる。外面の格子タタキや文様構成から、岡山県寒風古窯跡群出土鴟尾との関係が指摘されており、今回その化学的分析をおこなった（後述）。寒風古窯跡群出土鴟尾のうち、奥山廃寺例は鰭部を正段とするＡ－１に該当する（馬場ほか 2009、大脇 2017）。

ix　日向寺（第 10 図）

端部を残す鰭部片が一点出土している。段幅 10cm 以上の幅の広い正段を内外面に削り出す。厚さ約４cm、軟質の焼成で灰白色を呈する。

x　膳夫寺（第 11 図）

腹部が取り付く右側面縦帯の破片とされる。縦帯は７cm の間隔で２条の沈線を刻んで表現する。縦帯の中央に径 4.5cm の珠文が１つ残る。腹部は無文とされ、外面には縄タタキの痕跡が残る。胴部の厚さ３cm、胎土は緻密で焼成は硬質、灰褐色。

xi　和田廃寺（第 12・13 図）

Ａ～Ｃ類の３種類の鴟尾が出土しており、Ｂ類が飛鳥資料館に展示されている。いずれも塔や築地塀、多数の掘立柱建物が検出された１次・２次調査で出土している。

Ａ類　外面にハケ目をほどこす個体。頭部、胴部、鰭部、腹部の合計 26 点が出土している。胴部および鰭部外面に正段をもつ。鰭部の段幅は７～ 11cm。胴部の段は頭部端より 20cm 後方から始まり、幅 3.3 ～ 5.5cm。幅２～ 2.8cm の薄い縦帯をもつ。縦帯とほぼ接する位置に、やや前方に傾く半円形の降棟透かしをもつ。腹部接合式であり、縦帯のほぼ真裏で接合する。粘土紐の単位は４～５cm。焼成は堅緻で灰色、砂粒を含むやや粗い胎土のものが多い。厚さ２～３cm 程度と比較的薄く、Ｂ・Ｃ類よりも小ぶりの鴟尾が想定される。このほか、軟質の焼成で灰白色、比較的緻密な胎土を用いる破片がある。

Ｂ類は胴部に羽状段をもつものである。今回、別個体の存在を確認した。

Ｂ１類　完形に復元された個体。頭部端から正段がはじまり、中ほどで羽状段に移行し、その上方にさらに短い羽状段を配置する。縦帯は幅２cm の突帯で、鰭部の内外面に正段を削り出す。脊稜は幅約９cm の断面半円形に突出する。腹部無文。腹部基底部中央には幅 20cm、高さ 10cm の半円形透かしがあり、その上には粘土板を庇状に配置する。高さ 127cm、頭部高・幅 48cm、長さ 76cm、腹部鰭端の幅 72cm。

B２類　胴部・鰭部片が６点出土している。全容は不明な部分が多いが、Ｂ１類に近い大きさか。羽状段の幅は脊稜付近で 7.5 ～ 7.8cm、胴部側面で 10.8cm 程度か。Ｂ１類よりやや幅広の羽状段が想定される。腹部の剥離痕と思われる部位があり、腹部がかなり内側で取りつく可能性がある。硬質の焼成で灰色、やや粗い胎土などＢ１類とは様相が異なる。また、鰭部に布目がよく残る。Ｂ１類出土地点付近で出土している。

C類　大型の個体。胴部および鰭部両側面に正段をもつ。胴部の段幅は頭部付近で 3.5 ～ 4.2cm、胴部で 4.0 ～ 6.3cm、脊稜付近で３cm。鰭部の段幅は基底部や胴部では 10 ～ 11cm と共通するが、頂部付近では外面の段幅が 7.5cm、内面の段幅が 12cm と異なる。厚さは４～６cm。縦帯の有無は不明。腹部の破片から接合式と考えられ、鰭部付近で大きく外反する可能性がある。胴部中ほどに半径 10cm 程度の半円形透かしをもち、頭部あるいは腹部基底部にも透かしがあった可能性がある。底面や側面に布目がみられる。基本的に４～５cm の粘土を積上げて整形し、頭部や胴部下方など一部に 1.5cm 厚の粘土板をさらに貼り付けて施文する。砂粒を多く含む粗い胎土。焼成は堅緻で灰色。想定頭部幅 40cm、頭部高 50cm 程度か。長さ 80cm 程度、高さ１m 前後の厚手で大型の鴟尾が想定される。

腹部に羽状段をもつＢ類と全体に正段をもつＡ・Ｃ類の２種類が存在し、Ａ・Ｃ類は全面に段をもち、一見古相だが、特にＣ類はかなり厚い。大阪府新堂廃寺でも胴部全体にやや狭い段をもつ厚手の鴟尾Ⅶ型式があり、７世紀第３四半期とされている（井西ほか 2001）。　Ｂ１類出土地点はＢ２類やＡ類など複数の鴟尾が混在し、中心伽藍を画する柵塀に近接する。その一方で、Ａ類が単独的に集中して出土した地点は大型建物 SB050 に近接しており、関係がうかがえる。

xii　坂田寺跡（第 14 図）

坂田寺では伽藍北西部の調査（１・２次、1995 － １次、８次）および仏堂の調査（３次、６次）で鴟尾が出土しており、合計６種類を確認した。

A類　胴部全体に幅の狭い正段をもつもの。頭部、胴部、縦帯、鰭部など計６点が出土。胴部の段幅３～５cm 程度。鰭部内外面に正段をもち、段幅は外面 6.5cm、内面５cm である。断面半円形、幅 1.5cm の１条の突帯で縦帯を表現する。基底部に半径 11cm の大きな半円形透かしを穿つ破片があり、腹部の可能性があるが、８～９cm の大ぶりの段をもつ。底面には成形台の痕跡がみられる。厚さは３～６cm。３～４cm 程度の粘土紐を積んで成形する。砂粒を含むやや粗い胎土を用い、焼成は軟質で茶褐色を呈する。頭部高 40cm 程度か。伽藍北西部で出土。

B類　胴部および鰭部外面にやや広い正段をもつもの。計 11 点が出土。胴部の段は頭部やや後方から始まる。段幅５～６cm。鰭部外面の正段は端部をめぐって腹部側に上がるが、内面におよばない。段幅 6.5 ～ 7.5cm。幅 0.5 ～ 1.4cm、断面方形の細い縦帯をもつ。厚さ３～４cm、頂部付近はやや薄い。４cm 前後の粘土を積み重ねる。砂粒を多く含む粗い胎

土を用いる。赤橙色で軟質の焼成。広く出土しているが、仏堂周辺にまとまりがある。

C 類　厚手で胴部および鰭部に正段をもつもの。胴部段幅５～ 5.5cm、鰭部段幅６～９cm。縦帯は断面方形で、幅 2.5 ～ 3.0cm。側面に 1cm 程度の穴が貫通する。４cm 前後の粘土紐を積み重ねて成形するが、一番下の粘土紐の剥離面にワラ圧痕がみられる。砂礫を多く含む粗い胎土を用い、赤橙色で軟質の焼成である。胎土と色調が異なる個体が表採されている。いずれも２次調査で出土。

D 類　厚手で無文のもの。胴部および腹部片が計 11 点出土している。腹部および胴部で厚さ６～７cm、基底部付近で８cm 程度。腹部を中心に複数箇所で 1.5 ～ 2.0cm の穴が貫通する。胎土や色調、焼成は鴟尾 C 類に近く、砂礫を含む粗い胎土、赤橙色で軟質のものが多い。色調や焼成の違いから４個体程度想定できる。伽藍北西部で出土。

E 類　100 点近くの破片が出土しており、ほぼ全体像がわかる。胴部は無文、鰭部外面に正段をもつ。鰭部は縦帯から後方に 10 ～ 11cm 程度延び、やや外反する。鰭部外面の正段は基底部付近で段幅５cm 前後、頂部に向かって３～４cm 程度まで狭くなる。頂部中ほどで鰭部が８cm 程度下方にくり込み、波状にやや立ち上がったのち、再び１～３cm 幅に収まる。縦帯は幅 1.5cm の断面半円形の突帯を２条並べて配置し、その間に連珠文を貼り付けて成形する。珠文は直径 2.5cm。１cm 程度の間隔をおいて配置される。突帯間隔は頂部に近づくほど狭くなり、珠文貼り付け後の調整によって、やや方形を呈するものもある。縦帯から 11cm ほど前方に半径 4.3cm 程度の降棟透しが穿たれる。頭部片が出土しており、上面は山形に盛り上がる。上半には弧形の透し穴、下半部は台形状に開口し、大棟に取り付くように細工されている。腹部の上部中央に円孔がある。２～５cm の粘土紐を積上げて成形する。厚さは胴部、腹部が３～４cm、鰭部は２～３cm 程度。頭部幅 25 ～ 30cm、鰭部幅 50cm。全体法量は頂部長 70 ～ 80cm、胴部長 60 ～ 70cm、高さ１m 程度か。破片から同様の個体が最低３～４個体想定できる。各調査で広く出土している。

F 類　その他小片。一点は羽状段となる可能性のある胴部片。一点は胴部に幅の狭い正段、断面半円形の縦帯をもつ。胎土・焼成は鴟尾 B に近い。伽藍北西部で出土。

坂田寺出土の鴟尾は多くが葺き替え時のものと考えられる。鴟尾 A のみが胴部全体幅の狭い段をもち、やや古相を示す。また、坂田寺出土鴟尾の中で唯一茶褐色の焼成で、胎土を含めて、坂田寺軒丸瓦５型式に近い様相といえる。

x iii　檜隈寺跡（第 15 図）

３種類確認した。いずれも検出遺構とは離れて出土しており、使用堂塔の判定は難しい。

A 類　珠文帯をもつもの。縦帯部片が２点出土している。幅 3.3cm の断面方形の縦帯に、直径 2.8cm の珠文を間隔を空けて配置する。コンパスの針痕がみられる。縦帯縁辺の沈線は設定痕か。鰭部外面に正段、胴部に羽状段をもつ。厚さは 2.5cm 程度。黒色粒を多く含む胎土を用い、黒灰色。もう１点は珠文の間隔が狭い。

B 類　A 類同様、胴部に羽状段をもつが、別個体か。鰭部を含む３点が出土。縦帯の有無は不明。厚さは３～ 3.5cm とやや厚い。焼成は軟質、灰白色。

C 類　鰭部外面に正段、内面に逆段をもつ。４点が出土。段幅 10cm 程度、厚さ 3.5 ～ 4.0cm。正段をもつ胴部片が１点出土しており、幅 2.5cm とやや薄手だが、胎土や色調は近い。側面に半円形透かしをもつ。焼成は堅緻、白色粒を多く含む胎土を用いる。灰色。

ｘiv　山田寺跡

最低 18 個体分、419 点の大量の鴟尾片が出土している。山田寺については報告書が既に刊行されており（毛利光ほか 2002）、鴟尾についても詳細な報告がある。ここでは簡単に述べ、詳しくは報告書を参照されたい。山田寺出土鴟尾は単頭の鴟尾と双頭の鴟尾に大別され、単頭の鴟尾５種、双頭の鴟尾４種の合計９種に細分されている。

単頭の鴟尾　胴部に稜線を表現する羽根形をもつ。羽状段の幅は 10cm 前後が多く、左右側面に７～８枚ずつ重ねる。脊稜を挟んだ２枚は羽状段が二重になる。鰭部内外面および端部に正段を削り出す。段幅８～９cm。縦帯はない。頭部に大棟に取り付く弧形の透かし穴と矩形の開口部を設ける点は坂田寺Ｅ類に近い。腹部には素弁あるいは重弁風の羽状段を表す。腹部下方に庇状の突帯をもつ個体があり、これは和田廃寺Ｂ１類と共通する。頭部幅 47cm、腹部幅 40cm 前後。頭部幅がほぼ等しい和田廃寺Ｂ１類を参考に、総高約 120cm、前後長約 85cm に復元されている。

双頭の鴟尾　単頭鴟尾同様、胴部全体に幅約 10cm の羽状段をもつ。左右側面に８枚ずつ羽状段を重ね、最も脊稜寄りの１枚は二重に表現される。鰭部も単頭鴟尾とほぼ同様である。腹部には素弁あるいは重弁風の羽状段を表し、庇状の突帯をもつものが多い。総高約１m、頭部高約 36cm、頭部基底部幅約 38cm。頭部の出は、右頭部 22.5cm に対し、左頭部 25.5cm とやや長い。基底部前後長約 80cm。単頭の鴟尾に比べると一回り小さい。

ｘｖ　安倍寺跡

A 類　胴部、縦帯、鰭部の破片が３点出土している。１点は伽藍西方を区画する石垣遺構付近で出土した胴部片。外面に段幅６～８cm のやや幅広の正段を削り出し、後方に広がる。胴部側面中ほどの破片か。段の表面は不定方向のケズリ調整。もう一点は、伽藍北方の安倍寺跡第 20 次調査地点で出土した鰭部片。段幅６cm 以上の正段を外面に削り出す。３～４cm 程度の粘土紐を積み上げた後、外側に厚さ 1.8cm 程度の粘土板を貼り付けて、正段の施文をおこなっている。いずれも外面は不定方向のケズリ、内面はケズリか粗いナデ調整をほどこす。大粒の砂粒を含むやや粗い胎土を用い、焼成は堅緻で灰褐色。

また、橿原考古学研究所附属博物館所蔵資料に胎土や色調が酷似するものがある。伽藍中枢部で出土しており、左側面縦帯部にあたる。縦帯は幅 2.8cm の断面方形、胴部に幅 9.7cm の正段を削り出す。桜井市教委の資料とは出土地点が大きく異なっており、同一形

式であるならば、複数地点で使用されていたことになる。

B 類　井内古文化研究室で保管されていた腹部をもつ左側面胴部片である。胴部外面に段は認められず、胴部無文の鴟尾とみられ、外面には斜方向のハケ目が残る。腹部と胴部の接合痕跡が明瞭であり、腹部接合式と判断できる。胴部に対してほぼ直角に接合され、腹部内外面には縦方向のタタキ調整をほどこす。胴部は前方内側に向かって緩やかにカーブし、やや小ぶりの鴟尾になる可能性が高い。砂粒の少ない緻密な胎土を用いており、焼成はやや軟質で、灰白色を呈する（道上 2021）。

C　奈良県各地の鴟尾

ⅰ　法輪寺

製作技法は粘土紐成形により、基底部に布目痕が認められる。いずれの資料の外面にも赤色顔料（ベンガラ）が塗布されていたことが確認されている。７世紀前半に属する。

ⅱ　尼寺廃寺跡（第 16 図）

複数種の個体が存在するが、全体像の確定には資料数がまだ十分ではない。いずれも７世紀後半に属するものか（第 20 図）。

１種　外面は無文で縄タタキ（またはケズリ仕上げ）が残り、内面には同心円文当て具痕が認められる。基底部にワラ圧痕が残る厚手の一群で、その基底部は安定性に欠ける。よく叩き締められており、粘土紐による成形か確定しがたい。内面に縄叩き痕のある鰭端部片（焼成はややあまく、灰白色を呈する。上記の一群よりも薄手であることから、別個体・別型式の可能性もある）を参照すれば、その鰭端部も正段に対応して段状となる。

２種　粘土紐成形で、鰭部外面に正段が削り出される。鰭外面端部には突帯が巡る。複帯構成の縦帯は、型押しされた連珠文の両側をそれぞれ２条の突帯で区画するようである。この種の頭部片は開口しないタイプで、頭部前面寄りには前面に平行する突帯２条が巡っている可能性がある。

３種　頭部近くの胴部の可能性がある２片で、外面は無文である。粘土紐をアーチ状に横架する成形技法を使用したと指摘できる剥離状況が認められる。上記の推定が正しければこの個体は小型品と思われる。

ⅲ　巨勢寺

製作技法は粘土紐成形により、腹部は別途接合される。焼成・胎土に注目すれば、灰色堅緻で白色砂粒を多く含む資料は７世紀後半頃の巨勢寺式軒瓦と類似する。これらの資料は厚手で段の幅が広く、外面にはハケ目調整が多用され、大型品と報告されている。ただし大型品と報告された資料の中には褐灰色を呈す資料も含まれ、その鰭部内面や胴部外面

に、雑な線刻波状文１条が加えられた例がある。上記以外の薄手の資料は７世紀前半～中頃の例と思われ、精良胎土で灰色～灰白色を呈し、段の幅が狭い。外面の仕上げ調整にはハケ目が認められない。なお、内・外面の糸切痕が明瞭な資料も報告されているが、それは有段磚となる可能性がある。

ⅳ　藤原京右京十一条二坊

製作技法は粘土紐成形による。外面は平行叩き､内面に同心円文当て具痕が認められる。外面鰭部には平行タタキの後に別途粘土を薄く貼付けた後、線刻で段の単位を下書きし、その後、ケズリ・ナデ仕上げで鰭の段を仕上げる。腹部は胴部・鰭部とは別作りで、粘土紐によって成形される。上部の鰭端部は面取りによって内傾する特徴がある。藤原宮期の遺構にともなう出土ではなく、同調査区からは田中廃寺同笵と思われる軒瓦が出土している。７世紀後半頃か。

ⅴ　下田東遺跡（第 17 図）

乾燥・焼成時の収縮による亀裂が目立つが、断面観察によって製作技法は比較的薄い粘土紐成形（粘土紐の厚さ２cm 前後）であることを確認した。部分的には粘土紐２条が並列して同時に積み上げられていることも観察できる。出土した２片はともに頂部付近の部位で、複帯構成である縦帯の連珠文はコンパス施文の後、一つずつ削り出して成形される。胴部・鰭部の正段は線刻によって割り付けた後に削り出しされるが、鰭部内面の段は外面よりも幅が広く、削り出しが不完全である。鰭部は先端へ向かって階段状に短くなるという形態的特徴がある。当遺跡では鴟尾所用建物は確認されておらず、むしろ当地の小字地名「瓦口」の存在や､馬見丘陵一帯に分布する窯業遺跡の存在（廣岡 2008）に着目すれば、窯業製品の集積・搬出口としての性格を想定したい。７世紀後半に属する。

ⅵ　只塚廃寺

製作技法は粘土紐成形で、腹部は別途貼り付けされる。胴部・鰭部の外面は通常の段ではなく、匙面状の曲面にケズリ仕上げされ、これが段に代わる外面文様である。匙面の幅は鰭端部に向かって幅広となる。鰭部内面にはこの匙面状段はなく、無文である。この匙面状段の類例は奈良県内には知られていない。７世紀後半に属する。

ⅶ　下茶屋地蔵谷遺跡

高さ９cm 程度のミニチュア製品であり、製作技法は、粘土塊からの成形と考えられる。中実品で、脊稜～頭部～底部に縦走する粘土接合痕が認められる。鰭部・縦帯は削り出し成形され、連珠文はコンパス施文される。胴部は無文で、頭部・脊稜・胴部はミガキ調整で仕上げられる。底部は断面蒲鉾形に浅く抉り仕上げされる。７世紀後半頃の瓦が共伴出

土しているが、寺院遺跡等は未確認で、この鴟尾は邸宅内の厨子に用いられたと推定されている。

viii　平城京右京三条四坊十坪

製作技法は比較的薄い粘土紐成形で、粘土紐の厚さ１～2.5cm、鰭部の厚さ５cm 程度である。焼成があまく瓦質の仕上がりで、粘土紐の単位で亀裂が生じている。鰭部の段は、一方がほぼ直立する正段で、もう一方はより傾斜が強い逆段となっている。正段の側を外面とすれば、鰭端部はやや内傾する。付近に礎石建物は確認されておらず、所用建物は不明である。８世紀に属する。

ix　唐招提寺

製作技法は粘土紐成形で、基底面に木目痕があり、胴部外面などに製作時の布目痕や薄い粘土による補修痕が認められる。胴部アーチ部分の内面にはコモ状の圧痕があり、成形時の支柱圧痕と推定されている。その外面には横方向に広がる亀裂が幾条も認められ、複数の粘土紐をアーチ状に横架することでこの部分が成形された可能性がある。鰭部の段は外面・内面ともに正段。複帯構成の縦帯の突帯は型挽きで整形され、その間の連珠文は１つずつ型押しされる。鰭部は頂部を巡らずに途切れ、縦帯は基底部に沿って頭部まで続くという形態的特徴がある。金堂大棟西端にあったが、風食状況の観察所見から、本来は大棟東端にあったと考えられている。８世紀末頃に属するものと推定しておく。

x　今井天神山瓦窯

五條市今井に所在する窯跡周辺で多数の破片が採集されている（近江 1977、岩戸・道上 2021）。胴部無段と有段の２種類が存在し、破片は前者が多い。後者は段幅約７～９cm 程度の正段をもち、頭部付近で途切れる。頭部には台形の透かし穴と大棟の平瓦を差し込む溝が存在する。鰭部は内外に正段を削り出す。外側の正段は縦帯の段帯と筋を揃え、鰭端部まで一連で削り出し、内側の正段は外側の正段幅のほぼ中央に位置をずらして配置される。段幅７～９cm 前後。縦帯は外郭に段帯、内郭に珠文帯を配し、１条の突帯で区画される。突帯幅は 1.4 ～ 1.5cm、断面台形状のものと蒲鉾形状のものの２種類が存在する。外郭段帯は「山形と曲面をなす谷形」が交互すると報告されているが、山形は稜線がなだらかで、谷形相当の段はほぼ平坦である。段幅は約 5.5 ～ 7.0cm、珠文帯は直径 4.2cm の珠文を密接するように削り出す。「腹部接合式」。明確に頂部に該当する破片はないが、頂部先端でとぎれる形式が想定できる。橿原考古学研究所附属博物館所蔵資料では、頂部付近に円形の透かしが復元されている（近江 1977）。

xi　斑鳩寺跡（若草伽藍）・法隆寺（毛利光 1992）

鴟尾１　全体像は不明だが、胴部全体に幅４～５cm の肉彫風の羽文様をもつ。文様の中央に沈線を２条刻んで稜線を表現しており、後の羽状段の祖型にあたる可能性がある。脊稜は幅４cm、高さ 2.5cm の断面台形の粘土帯を貼り付け、ヘラ描きと文様の削り出しで装飾する。脊稜上面はナデ調整。頂部付近の縦帯幅は約 2.5cm で、先端で脊稜が突出する可能性がある。頭部前方には大棟に取り付く刳り抜きがある。さらに、頭部やや後方に太い凹線を備えており、水切り用の細工とする見解がある。これらを同一個体とみた場合、頭部周辺には羽文様がおよばない。砂粒の少ない緻密な胎土を用いており、灰白色。若草伽藍金堂跡出土。

鴟尾２　法隆寺玉虫厨子の鴟尾。胴部は切り込み状の稜線をもつ羽状段。鰭部は丸みをもつ短い段を両面に表現する。腹部は無文で、猪目状の透かしを中心にもつ。

鴟尾３　胴部全体と鰭部両面に段幅４～７cm の狭い正段をもつ。下辺２cm、上辺 0.8cm の断面台形の細い突帯を縦帯とする。また、脊稜付近に合計３条の削り出し突帯をもつ。断面台形で下辺 2.5cm、上辺 1.5cm。厚さ 1.6cm 薄い鴟尾で、硬質な焼成と緻密な胎土をもつ。灰色。飛鳥寺Ｂ類に近く、形態的には最も古い。若草伽藍金堂跡および金堂北方、律学院北で出土している。若草伽藍金堂創建用に比定される。

鴟尾４・５　沈線で段を表現する鴟尾。鴟尾４は比較的狭い段をもつ個体で、頭部片がある。頭部前面に半円形の刳形と戯画をもつ。戯画の内容は不明。胴部の沈線は頭部までおよぶ。段幅は頭部付近で 5.5cm。厚さ２～４cm で、頭部と胴部は一連の粘土を折り曲げて成形する。鴟尾５は比較的広い段をもつ個体で、胴部片が１点出土している。段幅約９cm。外面調整はいずれもナデまたはケズリ、内面はナデ調整。砂粒の少ない緻密な胎土や灰色～灰白色の焼成、調整など共通点が多く、同一個体の可能性もあるが、破片が少なく、詳細は不明。それぞれ若草伽藍塔跡・金堂跡で出土している。

鴟尾６・７　コンパス文を刻んだ突帯で縦帯を区画する鴟尾。突帯幅はそれぞれ３～3.5cm。コンパス文は直径 2.2 ～ 2.5cm、心々間隔７～８cm を基本構成とし、頂部付近での間隔は 4.5cm 程度になる。２条の縦帯の内側には正段を削り出す。鰭部は鰭部外面に正段、内面に逆段を削り出す。段幅は鰭部外面、縦帯内部が８～ 10cm で、鰭端部では約 12 ～ 13cm。内面の段幅は７～ 11cm 程度である。胴部には火焔宝珠状の文様や蕨手文状の文様、多数の段および突帯をもつ。腹部は無文。突帯や胴部の各文様の縁辺に縁取りまたはコンパス文の下書きを施す破片が多数存在する。科学的な分析が必要だが、何らかの顔料を用いたものとみられる。コンパス文とそれに先行する下書きの円はほぼ同規模だが、位置が異なる。また、下書きに唐草文風の文様を描く個体も存在する。全体に一度文様を下書きしてから削り出したとみられ、檜前寺例に近い。また、段の設定痕とみられる沈線が突帯上面にみられる。鰭部の薄い部分で厚さ 2.4cm、腹部や胴部で 3.5 ～５cm 程度。西院伽藍大講堂周辺で出土している。

鴟尾８・９・10　胴部および鰭部に幅の広い正段をもち、縦帯は断面方形の突帯と断面三角形の突帯を２条重ねたもの２組で区画した内部に浮き彫りの忍冬唐草文を装飾する。突帯の上には六花文を等間隔に配置する。腹部には長さ約 18cm、幅約 9.5cm の角張った羽文様を削り出す。非常に分厚く作られており、最も大型の鴟尾８で胴部～鰭部の厚さ６～８cm、腹部の厚さ約 11cm である。突帯幅は１条につき 2.4cm 前後。内面には綾杉状タタキを残す。鴟尾８は伝法堂の礎石の根石に転用されていたほか、西院伽藍で出土しており、西院伽藍所用と指摘されている。鴟尾９は鴟尾８と同型式だが、やや薄い個体。西院伽藍金堂や東室で出土しており、金堂所用とされる。鴟尾 10 は同一型式の小型品とみられる。綱封蔵と伝法堂で出土している。

鴟尾 11　裏表両面に正段を削り出す鰭部片が一点出土している。腹部は無文か。厚さは鴟尾６に近いが、段幅がより広い。西院回廊東南隅外の整地土から出土。

鴟尾 12　腹部片。鴟尾８の腹部の羽根状文様に近いが、より先端が角張り、中央の稜はなくなっている。同一個体とみられる正段をもつ胴部片も出土している。妻室で出土しており、僧坊創建か金堂補修用と推定されている。

鴟尾 13　胴部に正段、縦帯は幅広の突帯で中央を沈線で区画する。焼成の様相から同一個体とみられる腹部片がみつかっている。羽状文様を削り出すが、やや平板。妻室で出土しており、僧坊創建か金堂補修用と推定されている。

D　おわりに　奈良県内の鴟尾の変遷と生産

i　６世紀末～７世紀前葉：飛鳥寺出土鴟尾と導入期の鴟尾

飛鳥寺Ａ・Ｂ類は、いずれも薄く作られており、段の食い違いと沈線のみで鰭部と胴部を区画するＡ１類は百済の様相を特に色濃く残している（扶蘇山廃寺例など）。それぞれを飛鳥寺創建期（６世紀末・７世紀初頭）とする大脇潔の見解に異論はない。Ｂ２類はＢ１類よりやや時期が降る可能性があるが、創建期の範疇におさまるだろう。

今回設定したＡ２類は、細い突帯で縦帯を表現するが、段幅や厚さはＡ１類に酷似することから同時期の同形式とした。この場合、飛鳥寺創建期には２種類の縦帯表現をもつ鴟尾が共存したと考えることができる。同様の縦帯表現は６世紀中頃の創建とされる百済定林寺例に既にあり、百済泗沘期の鴟尾を検討した洪パルグムは、縦帯が沈線から凸線（突帯）に変化することを指摘している（洪 2022）。こうした共存関係は、河内新堂廃寺１・２型式にもみられ（井西ほか 2001）、鴟尾の導入と定着を考える上で注目される。

豊浦寺Ａ類、古宮遺跡例も簡素な縦帯や狭い段、薄手のつくりから、ほぼ同時期とみられる。古宮遺跡例は６世紀末にさかのぼる可能性もあるが、豊浦寺Ａ類は胴部の段表現や頭部に工夫がみられ、古宮遺跡例や飛鳥寺Ａ類に比べて若干厚いなど新相を示し、飛鳥寺Ｂ類に並行する７世紀初頭とみても、いずれにせよ創建期の資料である。若草伽藍鴟尾３

はこれとほぼ同時期か後続するものとみられ、想定される創建時期とも一致する。

ii　７世紀中葉～後半：文様構成の多様化、唐様式鴟尾の導入と変容

羽状段をもつ山田寺の鴟尾は、単頭Ａ･Ｃ類がそれぞれ金堂と中門、双頭Ａ～Ｃ類が回廊の四隅に用いられ、その造営年代から７世紀中葉の年代が与えられる。檜前寺Ａ類や和田廃寺Ｂ類がこれに続くとみられ、檜前寺Ａ類の羽状段が比較的繊細であるのに対し、７世紀後半の和田廃寺Ｂ類の羽状段は簡略化がみとめられる。こうした羽状段の初現を斑鳩寺例に求める見解もあるが、さらなる検討が必要である[1]。

７世紀後半には鴟尾のバリエーションがさらに増加する。まず、各地で無文の鴟尾が増加する。その一方、和田廃寺Ｃ類のように、全体に段をもつ鴟尾も製作されていた。そして、ドウジョウ遺跡例・川原寺例など「唐様式」鴟尾が出現する。いずれもその出土状況は不明だが、胴部に段を残し、より細密な縦帯をもつドウジョウ遺跡例がやや先行するのであろう。縦帯表現に注目すると、天神山瓦窯例はなだらかな山谷段、橘寺例は単純な逆段でそれぞれ段帯を構成する。また、いずれも区画する突帯が１条であり、ドウジョウ遺跡、川原寺例からの簡素化が認められる。これがさらに、段帯を完全に省略した坂田寺Ｅ類や唐招提寺例に変遷する。珠文帯が基底部まで延びる唐招提寺例は金堂の創建年代から８世紀末頃と推定されるが、珠文帯の「縦帯」を維持する坂田寺Ｅ類はやや古相と判断できる。さらに、坂田寺Ｅ類の鰭部先端の段階的な途切れ方は河内鳥坂寺例に近く、複帯構成を保つ鳥坂寺例を７世紀末～８世紀初頭頃とすれば（大脇 2002）、山谷段を残す天神山瓦窯例はそれ以前の７世紀後葉頃、橘寺例が鳥坂寺例とほぼ同時期、坂田寺Ｅ類はそれよりも若干新しく、唐招提寺例より古い、８世紀前半頃の資料とみることができる。

iii　鴟尾の製作技法について

鴟尾の具体的な製作手順については和田廃寺Ｂ類や山田寺例にもとづく復元がある。今回の検討では、飛鳥地域の鴟尾はほぼすべて粘土紐積み上げ成形と判断した。ただし、積み上げた粘土紐の外側に粘土板を一部粘土板を貼り足して施文をおこなう例が豊浦寺Ｂ類や和田廃寺Ｃ類、安倍寺Ａ類にみられた。藤原京右京十一条二坊例も同様であろう。また、尼寺廃寺３種のアーチ状成形や、ドウジョウ遺跡の粘土塊成形も異なる成形方法として挙げられる。これらは７世紀中葉以降、多様化していくとみられる。

今回、腹部の成形方法に着目し、和田廃寺Ｂ１類のような「腹部折り曲げ式」と山田寺単頭鴟尾のような「腹部接合式」の２種類から把握を試みた。確認した限りでは接合式が圧倒的に多いが、飛鳥寺創建期の鴟尾Ｂ１類が折り曲げ式であり、鴟尾導入当初か、かなり早い段階で両技法が共存したことになる。ただし、その併用も想定すべきだろう。

また、段表現について、導入期の鴟尾は鰭の両側面または端部まで段をもち、逆段と正段の両方がみられる。その施文方法は、古い鴟尾ほど段の削り出しを最小限に留め、新し

いものほど表面を幅広く削る傾向がある。７世紀を通して鰭部内面や端部の段が省略され、段幅が広がる一方、「唐様式」の出現と並行するように、無文の鴟尾が主流となっていく。

iv　生産地・生産体制について

今回、胎土分析を通して、奥山廃寺出土鴟尾が寒風古窯跡群産の製品であることを追認した。鴟尾が出土した瓦敷は７世紀後半の瓦を多く含んでおり、寒風Ａ－１形式が出土した寒風Ⅰ－１号窯の操業時期も７世紀後半～８世紀初頭とされている。奥山廃寺出土鴟尾も７世紀後半から末にかけて製作、搬入されたものと考えられる。

鴟尾の生産地を直接明らかにすることは難しい。飛鳥寺創建期の鴟尾は、胎土や色調のありかたから「星組」による生産が以前から指摘されている（大脇 1999）。今回新たに取り上げたＡ２類も須恵質の堅緻な焼成であり、星組との関連は想定できる。

軒瓦と鴟尾の胎土・焼成の共通性は、例えば、坂田寺鴟尾Ａ類と坂田寺軒丸瓦５型式などに見出せる。裏を返せば、こうした関係性を明確に指摘できる例はむしろ少数派であり、鴟尾の胎土や焼成は軒瓦、丸・平瓦と異なる場合の方が多い。一般的な瓦磚類に対して、鴟尾生産が限定的かつ専門的であることに起因すると考えられ、鴟尾が個別的に生産されていた可能性も考慮する必要があるだろう。丸・平瓦を含めた検討をおこないつつ、今回のような胎土分析の積極的な活用が求められる。

Ｅ　付論　奥山廃寺出土鴟尾の産地について

i　調査の経緯

奥山廃寺は、奈良県高市郡明日香村奥山に所在する古代寺院で、出土瓦から創建は７世紀前半にさかのぼると考えられている。これまでの発掘調査により、数多くの瓦磚類が出土しているが、鴟尾については、その特徴に関する考古学的分析から、岡山県牛窓町寒風古窯跡群において生産されたとされ、胎土分析による確認の必要性が指摘されてきた（大脇 2007・2017）。そこで、これまでに寒風古窯跡群出土の須恵器や鴟尾を対象に、自然科学的手法による胎土分析をおこなってきた実績を持つ白石が、奥山廃寺出土鴟尾の胎土分析をおこなった結果、その産地に関する新たな知見を得ることができた。以下、その内容を報告する[2]。

ii　奥山廃寺出土鴟尾に関する考古学的知見

奥山廃寺では、鰭部から胴部、腹部にいたる鴟尾の破片が１点（箱崎・西川 2002）、立会調査で頂部先端付近の破片が１点出土している（Ｂ－viii参照）。このうち、今回、胎土分析の分析対象としたのは前者の鴟尾片で、透かしの配置から入母屋屋根用であり、金堂周

辺の瓦敷から出土したことから金堂所用とされる。奥山廃寺金堂の創建は発掘調査成果から７世紀前半中頃にさかのぼる可能性が指摘されており、瓦敷は７世紀後半以降進められた伽藍改修の最終段階、奈良時代に敷かれたものと推定されている。

この奥山廃寺出土鴟尾について、大脇潔は「その特有の叩き目や須恵質の焼成などから岡山県牛窓町を中心とする寒風古窯址群の製品として間違いない」とする（大脇 2007）。大脇はさらに、この奥山廃寺出土鴟尾について、寒風古窯跡群出土鴟尾Ａ－１型式に類するものとする（馬場ほか 2009）。また、奥山廃寺＝小治田寺＝大后寺跡とする近年の見解を踏まえつつ（吉川 2013）、奥山廃寺金堂の創建が 620 ～ 630 年の間であり、奥山廃寺出土鴟尾は７世紀後半における金堂改修の際に運び込まれたものとしている。

ⅲ　胎土分析の方法と分析結果

奥山廃寺出土鴟尾を対象に、自然科学的手法による胎土分析による産地推定をおこなった。これまでに、大脇氏によって寒風古窯跡群産と同定されている、大阪市細工谷遺跡出土の鴟尾についても同手法によって胎土分析を実施し、寒風古窯跡群から供給されたことを推定する成果を得ている（白石 2001）。分析方法・試料 分析は蛍光Ｘ線分析法で行い、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の差異について調べた。測定した元素は、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5 の 10 成分である。なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：SEA5120A（日立ハイテクサイエンス社製）を使用した。

測定条件：Ｘ線照射径 2.5mm、電流 4 ～ 200mA、電圧 50kV/15kV、測定時間 300 秒、測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：10 成分の定量値は地質調査所の標準試料 JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JB-1a（玄武岩）、の３試料を用いて検量線を作成し、定量値を算出した。

測定試料：分析試料は、試料表面の汚れを除去後、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製）で粉末（100 ～ 200 メッシュ）にしたものを加圧成形機で約 10 トンの圧力をかけ､コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる成分を横軸と縦軸にとり、散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。分析した試料は第１表に示したとおりである。
分析結果について 第 18 ～ 21 図の散布図では、寒風古窯跡群、寒風古墳、宮嶺窯跡から出土している鴟尾の分布範囲を四角い実線で、寒風古窯跡群出土須恵器（杯・甕類）の分布領域を破線で示した（白石 2009）。また､その他の生産地としては香川県十瓶山窯跡群､大阪陶邑窯跡、美濃須衛窯跡群から出土した須恵器を生産地の比較試料とした。そして、こ

れらの散布図に奥山廃寺出土の鴟尾をプロットすると寒風領域に入っている。

以上、奥山廃寺出土の鴟尾は、いずれの散布図でも寒風領域に入り寒風地域で生産されていると推定された。

iv　まとめ

今回、奥山廃寺出土鴟尾の自然科学的手法による胎土分析を実施し、奥山廃寺出土鴟尾は、寒風地域で生産されたと推定される結果を得た。今回の胎土分析結果は、大脇氏による考古学的分析結果と整合的に理解することができ、大脇説を裏付ける成果と評価できる。

これまで、奥山廃寺創建瓦の産地としては、奈良県大和天神山窯、京都府楠葉平野山窯、兵庫県高丘窯などが知られてきた。今回の成果により、奥山廃寺における造瓦や造営の実態、奥山廃寺の性格、初期寺院の造瓦体制などを考察するうえで、貴重な知見を加えることができたといえよう。

（奈良文化財研究所 / 奈良県立橿原考古学研究所 / 岡山理科大学）

謝　辞

資料調査に関わって、明日香村教育委員会：相原嘉之氏、岡山県古代吉備文化財センター：松尾佳子氏、香芝市教育委員会：西垣遼氏、弘福寺：扇谷明英氏、桜井市教育委員会：丹羽恵二氏・森暢郎氏、天理大学附属天理参考館：藤原郁代氏、奈良県立橿原考古学研究所：卜部行弘氏、水野敏典氏、小池香津江氏、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館：重見秦氏、奈良文化財研究所：田村朋美氏のご教示・ご協力を得た。また、大脇潔氏には鴟尾の分析に関して多くのご教示をいただいた。記してお礼申し上げます。

註

1　大脇潔は斑鳩寺鴟尾１が羽根表現の初現となる可能性を示す（大脇 2002）。また、今井晃樹は朝鮮半島の出土品には現状みられないものの、半島との関連の中で導入された可能性を指摘している（今井 2018）。

2　今回の分析は、岡山理科大学と奈良文化財研究所の間で連携研究協定を締結して実施したものであり、本文はその成果報告である。奈良文化財研究所においても同様に、現在、所蔵資料の材質データの分析を進めている。なお、Ｅのｉを清野が、ⅱを清野・道上が、ⅲを白石が、ⅳを清野・白石・道上がそれぞれ分担した。

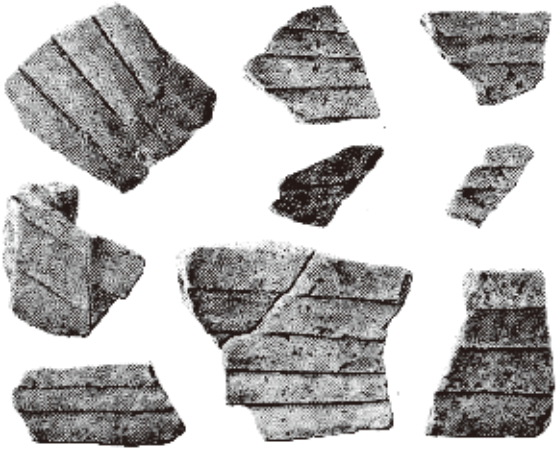
参考文献

井西貴子・広瀬雅信・堀　大輔・岩戸晶子・栄原永遠男・梶原義実 2001『新堂廃寺』 大阪府教育委員会
李　炳鎬 2015『百済寺院の展開と古代日本』 塙書房
今井晃樹 2018「東アジアにおける鴟尾の普遍性と多様性」『鴟尾、天の声を仰ぐ』 大韓民国国立扶餘博物館
岩戸晶子・道上祥武 2021「天神山瓦窯出土鴟尾の検討」『奈良文化財研究所紀要 2021』 奈良文化財研究所
大西貴夫（編）2003『只塚廃寺・首子遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所
大西貴夫 2011「11 区の調査」『平城京右京三条三坊・四坊』 奈良県立橿原考古学研究所
近江昌司 1977「五条市天神山瓦窯の遺跡と遺物」『國學院雑誌』第 78 巻第９号　國學院大學
大脇　潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』 至文堂
大脇　潔 2002「鴟尾の変遷」『瓦塔・鴟尾』 東京国立博物館
大脇　潔 2007「奥山廃寺再々考」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』 真陽社
大脇　潔 2017「寒風窯産の鴟尾再考」『岡山県備前市佐山東山窯にかかる須恵器窯の大型化をめぐる地域事例報

告および備前焼の窯構造』 窯跡研究会
河上邦彦 2004「鴟尾」『巨勢寺』 奈良県立橿原考古学研究所
神庭　滋 2012「98703 只塚廃寺」『葛城市歴史博物館資料目録』第 4 集　葛城市歴史博物館
黒崎　直 1997「川原寺の調査－ 1995 － 1 ・1996 － 1 次、1996 － 2 次」『奈良国立文化財研究所年報 1997 －Ⅱ』 奈良国立文化財研究所
小島靖彦・辰巳陽一（編）2011『下田東遺跡』 香芝市教育委員会
西光慎治・相原嘉之・清岡廣子 2000「1998 － 7 次 東山カワバリ遺跡」『明日香村遺跡調査概報平成 10 年度』 明日香村教育委員会
清水昭博 1995「豊浦寺金堂跡の調査」『奈良県遺跡調査概報 1994 年度（第 2 分冊）』 奈良県立橿原考古学研究所
白石　純 2001「科学が語る須恵器・瓦（鴟尾）の移動」『牛窓町史』通史編　牛窓町史編纂室
白石　純 2009「寒風窯跡群出土遺物の胎土分析」『史跡寒風古窯跡群』 瀬戸内市教育委員会
奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所（編）2009「瓦調査編」『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書［瓦調査・発掘調査編］』 奈良県教育委員会
奈良国立文化財研究所 1990「奥山・久米寺の調査 1989 － 1 次」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』20
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』
西垣　遼 2016「出土遺物」『尼寺廃寺Ⅱ』 香芝市教育委員会
箱崎和久・西川雄大 2002「奥山廃寺（奥山久米寺）の調査－第 114 － 8 次」『奈良文化財研究所紀要 2002』 奈良文化財研究所
馬場昌一・若松挙史・関　幸代・山磨康平・金田章大・西村　康・西口和彦・白石　純 2009『史跡 寒風古窯跡群』 瀬戸内市教育委員会
坂　靖 2000「下茶屋地蔵谷遺跡」『南郷遺跡群Ⅳ』 奈良県立橿原考古学研究所
平田政彦 2013「（6）法輪寺旧境内遺跡（05 － 1 次・第 15 次）調査」『斑鳩町内遺跡発掘調査概報平成 17（2005）年度』 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
廣岡孝信 2008「推古朝の「片岡」・馬見丘陵開発と王権の基盤」『王権と武器と信仰』 同成社
洪パルグム 2022「韓国の鴟尾」『古代瓦研究Ⅺ』 奈良文化財研究所
道上祥武 2021「安倍寺跡出土の鴟尾」『奈良文化財研究所紀要 2021』 奈良文化財研究所
毛利光俊彦 1992「鴟尾」『法隆寺の至宝 瓦』 小学館
毛利光俊彦ほか 2002『山田寺発掘調査報告』 奈良文化財研究所
保井芳太郎 1932『大和上代寺院史』 大和史学会
山下隆次 2000「鴟尾」『尼寺廃寺Ⅰ－北廃寺の調査－』 香芝市教育委員会
吉川真司 2013「小治田寺・大后寺の基礎的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告第 179 集』 国立歴史民俗博物館

図版出典

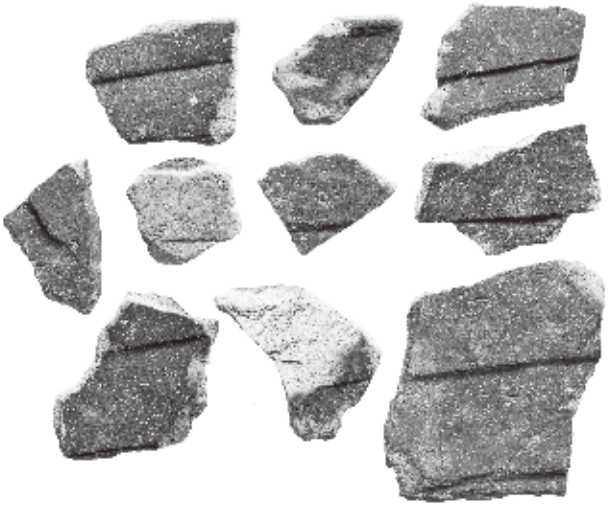
第 1 図 1 ・3、第 13 図 1 、第 18 図：大脇 1999。
第 1 図 5 ・ 7 ・ 8 、第 2 図 1 、第 3 図、第 11 図、第 14 図 1 、第 15 図 2 ：奈良文化財研究所飛鳥資料館 1980。
第 1 図 2 ・ 4 、第 2 図 2 、第 7 図、第 12 図、第 13 図、第 14 図 5 ・ 6 ：栗山雅夫撮影。
第 4 図 1 ：道上撮影（奈良県立橿原考古学研究所提供）
第 4 図 2 、第 8 図：道上撮影（天理大学附属天理参考館蔵）
第 5 図、第 10 図、第 14 図 1 ～ 4 、第 15 図 1 ：道上撮影。
第 6 図：道上撮影（弘福寺蔵）。
第 9 図：箱崎・西川 2002。
第 16 図、第 17 図：廣岡撮影（香芝市教育委員会所蔵）
第 1 表、第 18 ～ 21 図：白石作成。



1．飛鳥寺Ａ１類

2．飛鳥寺Ａ２類

3．飛鳥寺Ｂ１類



4．飛鳥寺Ｂ２類

第１図　飛鳥寺創建期の鴟尾

1．飛鳥寺Ｇ類　　2．飛鳥寺Ｈ類

第２図　飛鳥寺葺き替え時の鴟尾

第３図　古宮遺跡出土鴟尾

1．豊浦寺Ａ類（金堂出土、奈良県立橿原考古学研究所提供）　　2．豊浦寺Ｂ類（天理大学附属天理参考館蔵）

第４図　豊浦寺跡出土鴟尾

第５図　甘樫丘東麓遺跡出土鴟尾

第６図　川原寺跡出土鴟尾（弘福寺蔵）

第７図　ドウジョウ遺跡出土鴟尾

第８図　橘寺出土鴟尾
（天理大学附属天理参考館蔵）

第 10 図　日向寺出土鴟尾

第 11 図　膳夫寺出土鴟尾

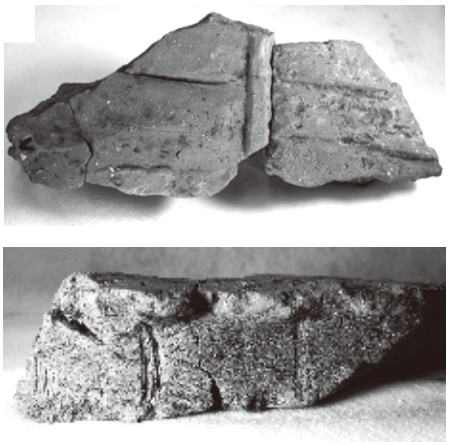
第９図　奥山廃寺出土鴟尾

第 12 図　和田廃寺出土鴟尾 A

第 13 図　和田廃寺出土鴟尾 C

1．坂田寺 A 類

2．坂田寺 B 類



3．坂田寺 C 類

4．坂田寺 D 類

5．坂田寺 E 類

6．坂田寺 E 類

第 14 図　坂田寺跡出土鴟尾

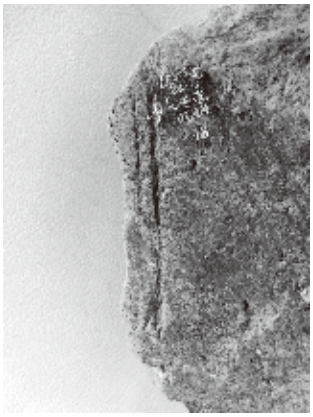
1．檜前寺Ａ類

2．檜前寺Ｃ類

第 15 図　檜前寺跡出土鴟尾

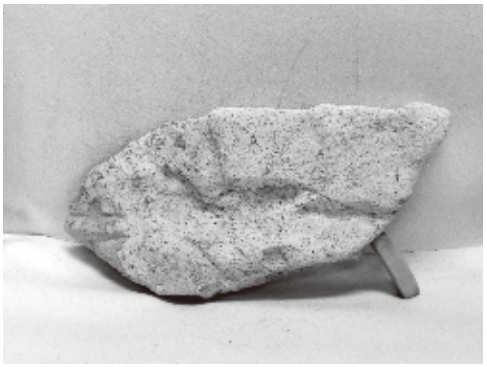
胴部内面

基底部



胴部外面

1．尼寺廃寺鴟尾１種



鰭部外面

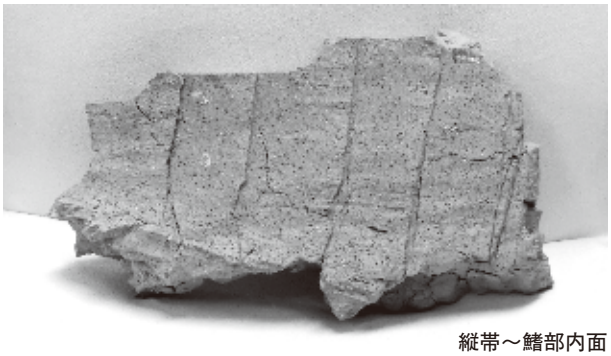
頭部

胴部外面

2．尼寺廃寺鴟尾２種

第 16 図　尼寺廃寺跡出土鴟尾
（香芝市教育委員会蔵）

縦帯～鰭部外面



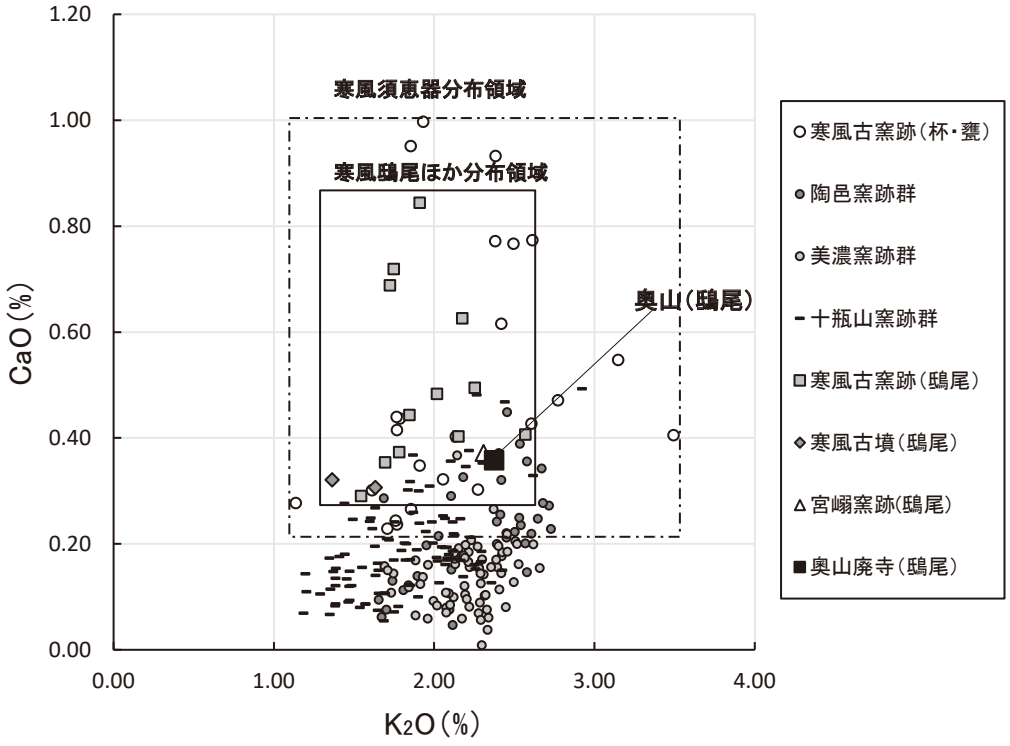
縦帯～鰭部内面

鰭部断面

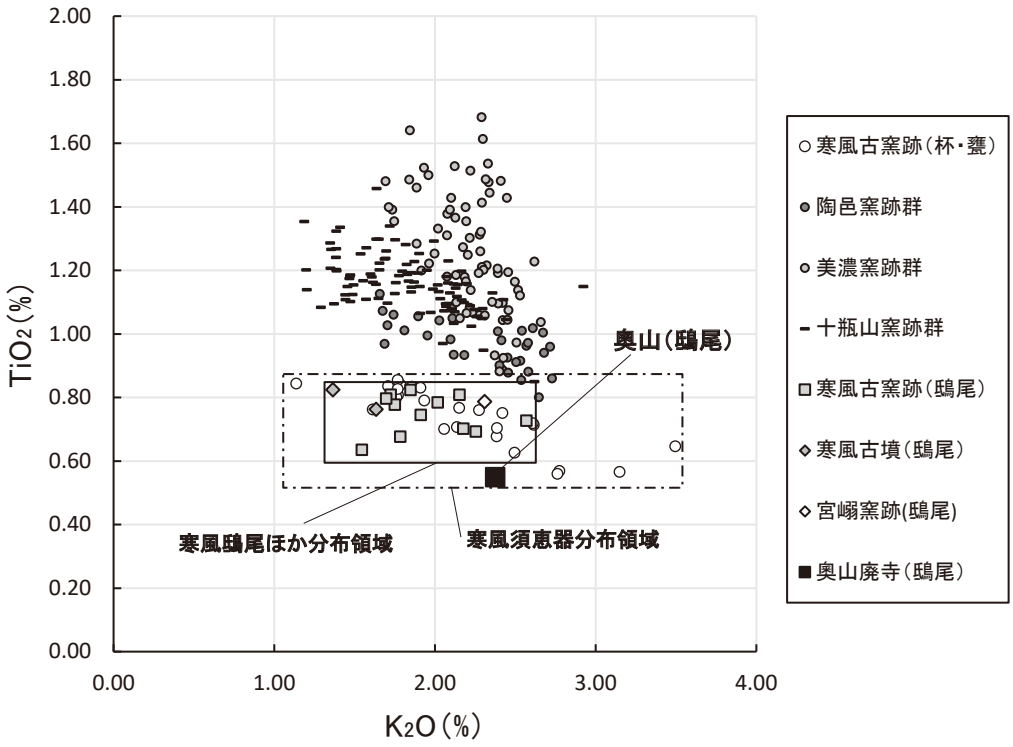
第 17 図　下田東遺跡出土鴟尾（香芝市教育委員会蔵）

第 1 表　奥山廃寺鴟尾ほかの分析試料一覧表（%）

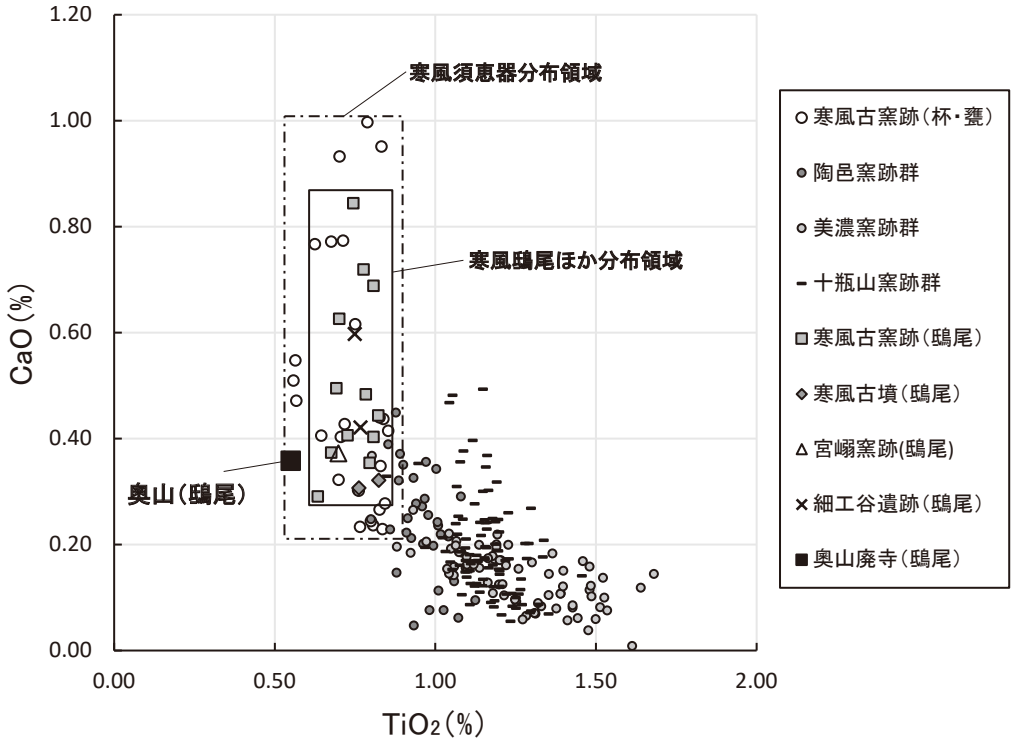
番号	遺跡名	器種	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5
1	寒風古窯跡	鴟尾	75.81	0.81	15.55	4.49	0.03	0.64	0.69	0.00	1.72	0.15
2	寒風古窯跡	鴟尾	76.00	0.78	15.05	4.44	0.03	0.77	0.72	0.21	1.75	0.16
3	寒風古窯跡	鴟尾	78.02	0.63	14.83	3.83	0.00	0.58	0.29	0.01	1.55	0.14
4	寒風古窯跡	鴟尾	79.28	0.68	13.50	3.77	0.00	0.40	0.37	0.01	1.78	0.11
5	寒風古窯跡	鴟尾	77.12	0.75	14.28	4.31	0.01	0.50	0.84	0.00	1.91	0.09
6	寒風古窯跡	甕	75.18	0.56	15.84	3.46	0.01	0.73	0.51	0.72	2.76	0.13
7	寒風古窯跡	甕	72.68	0.77	18.82	4.41	0.00	0.69	0.23	0.00	2.15	0.13
8	寒風古窯跡	杯	78.68	0.81	13.46	4.23	0.00	0.52	0.24	0.01	1.77	0.13
9	寒風古窯跡	杯	78.55	0.83	13.31	4.35	0.01	0.54	0.27	0.00	1.86	0.14
10	寒風古窯跡	杯	78.52	0.80	13.68	4.16	0.01	0.54	0.24	0.00	1.76	0.13
11	寒風古窯跡	杯	78.38	0.84	13.89	4.15	0.00	0.54	0.23	0.00	1.71	0.14
12	寒風古窯跡	杯	77.57	0.83	13.54	4.28	0.08	0.60	0.95	0.00	1.86	0.15
13	寒風古窯跡	杯	77.81	0.84	13.89	4.43	0.02	0.51	0.44	0.00	1.79	0.15
14	寒風古窯跡	杯	77.62	0.85	13.92	4.39	0.05	0.55	0.41	0.00	1.77	0.14
15	寒風古窯跡	杯	77.92	0.83	13.82	4.42	0.03	0.50	0.44	0.00	1.77	0.11
16	寒風古窯跡	高杯	77.86	0.79	13.18	4.21	0.09	0.58	1.00	0.00	1.93	0.10
17	寒風古窯跡	高杯	78.45	0.83	13.36	4.25	0.02	0.51	0.35	0.00	1.91	0.11
18	寒風古窯跡	杯	78.29	0.68	13.12	3.95	0.00	0.52	0.77	0.00	2.38	0.13
19	寒風古窯跡	杯	77.42	0.70	13.33	4.03	0.00	0.62	0.93	0.21	2.39	0.13
20	寒風古窯跡	杯	74.68	0.75	16.11	4.42	0.00	0.70	0.62	0.01	2.42	0.13
21	寒風古窯跡	高杯	78.57	0.84	13.73	4.48	0.00	0.63	0.28	0.00	1.14	0.18
22	寒風古窯跡	高杯	79.26	0.76	13.14	4.11	0.00	0.48	0.30	0.00	1.61	0.18
23	寒風古窯跡	杯	70.47	0.86	17.88	4.87	0.04	1.44	1.43	0.78	1.96	0.13
24	寒風古窯跡	杯	77.28	0.71	13.67	4.27	0.03	0.39	0.77	0.00	2.61	0.13
25	寒風古窯跡	杯	78.12	0.71	14.24	3.78	0.02	0.39	0.40	0.01	2.14	0.10
26	寒風古窯跡	杯	77.44	0.72	14.60	3.43	0.04	0.51	0.43	0.00	2.61	0.13
27	寒風古窯跡	杯	74.01	0.57	17.59	3.62	0.02	0.69	0.47	0.01	2.77	0.15
28	寒風古窯跡	杯	74.70	0.63	16.83	3.44	0.02	0.70	0.77	0.18	2.50	0.12
29	寒風古墳	鴟尾	78.61	0.76	13.77	4.11	0.00	0.46	0.31	0.08	1.63	0.19
30	寒風古墳	鴟尾	76.80	0.82	15.30	4.50	0.00	0.61	0.32	0.02	1.36	0.17
31	寒風古窯跡	鴟尾(時実資料)	77.22	0.68	13.31	3.19	0.09	0.45	1.99	0.00	2.75	0.15
32	寒風古窯跡	鴟尾(時実資料)	79.82	0.69	13.15	2.90	0.02	0.43	0.49	0.01	2.25	0.14
33	宮嶺窯跡	鴟尾	78.03	0.79	13.93	3.72	0.02	0.55	0.37	0.00	2.31	0.15
34	奥山廃寺	鴟尾	77.18	0.55	13.78	3.05	0.00	1.71	0.36	0.00	2.37	0.88



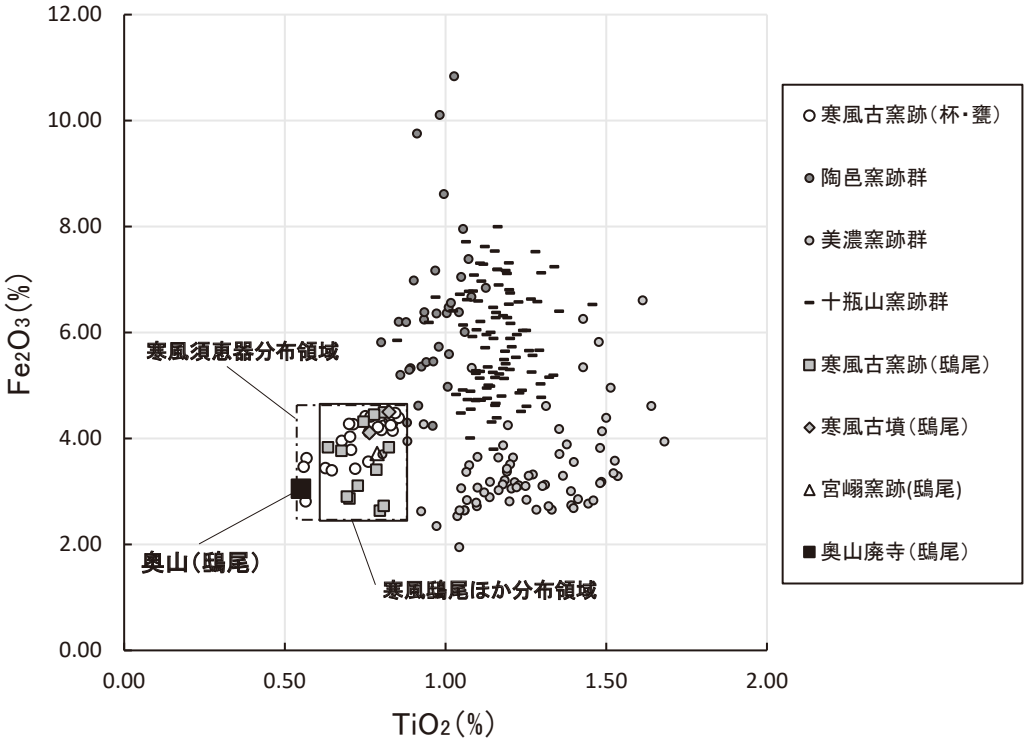
第 18 図　奥山廃寺出土鴟尾の産地推定（K_2O-CaO）



第 19 図　奥山廃寺出土鴟尾の産地推定（K_2O-TiO_2）



第 20 図　奥山廃寺出土鴟尾の産地推定（TiO_2-CaO）



第 21 図　奥山廃寺出土鴟尾の産地推定（TiO_2-Fe_2O_3）

2　京都・滋賀の鴟尾

熊谷　舞子・村田　和弘・北村　圭弘・福庭　万里子

A　京都府の鴟尾

京都府内の鴟尾は近年、集成がおこなわれており、48 遺跡で出土が確認されている（岩戸・堀 2009）。上記の成果をもとに、今回、発掘調査で新たに出土した事例を加えて整理した結果，遺跡数は 49 遺跡となった。

本章では、まず京都市内出土の鴟尾について概観し、次章で 2009 年の集成以降新たに出土が確認された美濃山廃寺の鴟尾について紹介する。なお、京都市内の鴟尾は、いわゆる白鳳期と平安時代前期に出土が集中するため、以下で、時期ごとに概観したい。

ⅰ　白鳳期の鴟尾（第１図）

概要　北野廃寺・広隆寺（葛野郡）、北白川廃寺・木野墓窯（愛宕郡）、大宅廃寺・法琳寺（宇治郡）、樫原廃寺瓦窯（乙訓郡）などで出土している。表採資料が多く、出土数は各遺跡で数点に留まる。全体の分かるものはほとんどないが、鰭部の厚さが３～４cm 程度のものが多い。

特徴的なものとしては、大宅廃寺例・法琳寺例が蓮華文帯鴟尾であり、木野墓窯例が沈線文鴟尾であることが知られる（大脇 1999）。

製作技法　胴部～鰭部が残る法琳寺例（第１図１）と木野墓窯例（第１図３）を比較すると、いずれも胴部と鰭部の間の突帯は貼り付けによるが、法琳寺例の突帯が幅 3.5cm、高さ２cm であるのに対し、木野墓例の突帯は幅１cm、高さ 0.7cm と細く低い。鰭部について、法琳寺例はヘラで切り取って段を付けた後ナデを施すが、木野墓例は沈線で表現する。また、法琳寺例は縦帯部に唐草文をヘラ書きで表現し、木野墓例は胴部外面をハケ調整後に沈線を施す。

胴部～鰭部が部分的に残る他の出土例に、北白川廃寺塔跡の基壇版築土から出土した鴟尾（第１図４・５）があり、残存高 40cm、幅 14cm、厚さ４cm で、突帯は貼り付けによる。鰭部の段は非常に浅いものの、ヘラで削り出して段を表現している。なお、同種の鴟尾の鰭部が、塔付近で 2020 年に実施した発掘調査で出土している（京都市文化市民局 2021）。

木野墓例は須恵質の焼成で、硬く焼き締まる特徴を持つが、法琳寺例、北白川廃寺例は、軟質である。

ⅱ　平安時代前期の鴟尾（第２～６図）

概要　時期は、大多数が平安時代前期に属する。出土した鴟尾は、建物の格によって大きさや装飾が異なると考えられ、大きく３種類にまとめられている（大脇 1999）。

Ａ類（第２図）：胴部に鳳凰文を浮彫し、突帯で区画する複帯構成の内郭に唐草文や宝相華唐草文、外郭に連珠文を飾り、鰭部外面に逆段、内面に正段を表す例が多い。緑釉を施す例がある（第２図５）。

Ｂ類（第３図）：胴部無文、突帯で区画する複帯構成の内郭に逆段か正段、外郭に連珠文を飾る。鰭部の特徴はＡ類と類似するが、鰭部内面が無文のものも存在する。

Ｃ類（第６図）：胴部無文、突帯で区画する縦帯に連珠文を表す。

分布　出土傾向としては、①朝堂院・豊楽院を中心とした宮内堂舎や西鴻臚館、高陽院[1]など消費地での出土、②生産地（窯跡）での出土（窯の構築材として利用された例を含む）、③平安京内の流路等からの二次的な出土の、大きく３種類に分けられる。

Ａ類は、①の内、朝堂院・豊楽院や、生産地での出土に限定される。朝堂院や豊楽院出土の鴟尾には、緑釉が施されるものがある。

最も出土数が多いと考えられるのはＢ類で、平安宮内堂舎や西鴻臚館、高陽院などで出土する他、西賀茂鎮守庵瓦窯（以下、鎮守庵瓦窯）付近の土坑からもまとまって出土している（京都市埋蔵文化財研究所 1986）。

Ｃ類は、比較的少数で、幡枝西窯出土の小型例などが知られる（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。

規格　鴟尾の大きさについては、上ノ庄田瓦窯の発掘調査から、大・中・小、それぞれ高さ 180・120・90cm のものがあると推定されている。胴部に鳳凰文の浮彫を持つものは、大型品に限られる（南 2003）。なお、同窯から出土した双頭鴟尾については、小型（高さ 60 ～ 90cm）と想定されている（今井・中川 2015）。

また、鎮守庵瓦窯から出土した鴟尾も３種の大きさに分類できるとされ（京都市埋蔵文化財研究所 1986）、小型例については、Ｂ類の特徴を持つが、鰭部内外面と縦帯内郭の段を沈線で表現するものが出土している。なお、平安宮太政官出土例は、中型（高さ 150cm）に復原されている（第３図２）。

製作技法　最も点数が多いＢ類を中心に取り上げる。

全体の成形について、粘土紐積み上げと報告される例が多いが、その痕跡は明瞭ではない。鎮守庵瓦窯出土例では、縦帯～鰭部にかけて、外面側と内面側を貼り足したような痕跡を持つものが確認できる。

鰭部外面は、平行叩き後に段を削り出すが、叩きが消されずに残ることが多い。内面は段をつけるもの（第３図３・４）と、つけないもの（第４図１）があり、内面が無文の場合は同心円の当て具痕がナデ消されずに残ることがある。

複帯構成の縦帯は、断面半円形の貼付け突帯で区画され、内郭に段、外郭に連珠文が施

される。突帯や連珠文を貼り付ける前におこなった平行叩きの痕跡がそのまま残る例が多く、剥離した状態で出土した突帯や連珠文の剥離部には、明瞭に平行叩きの痕跡が残る。また、突帯を貼り付ける前に、接合のための刺突や沈線を入れる例がある。連珠文は型押しである。上ノ庄田瓦窯出土例では、貼り付け後に円筒で押さえつけた痕跡が残るものが多い。側面は平行叩きが残る場合と、ナデ消す場合がある。

鰭部と縦帯は基底部まで続かない事例が多く、突帯下端を含め、下端部をナデ調整する例が、上ノ庄田瓦窯、鎮守庵瓦窯、豊楽殿、西鴻臚館例などで確認できた（第４図２）。基底部には、離れ砂が明瞭に残るもの、残らないものの両方が存在する。

胴部は外面平行叩き、内面同心円の当て具痕を残す例が多い。突帯沿いに平行叩きを市松文様風に施す例がある（第４図５）。

頂部は出土点数が多くないが、内面はナデ調整である。幡枝西窯例は内面をヘラで押さえた痕跡が残り、腹部上面に楕円形の穴がある（第６図２）。

なお、Ａ類は、厚みが 10cm 前後あるものが多く、厚さ１～３cm ほどの粘土を貼った後に施文している。また、鰭部の段も高く、立体的な作りになっている。

iii　鴟尾の生産・供給体制について

白鳳期　瓦の生産･供給関係が明らかになっているのは、岩倉地域に存在する木野墓窯と、北白川廃寺である。木野墓窯から北白川廃寺へ、山田寺式軒丸瓦や特殊叩き平瓦を供給していたことが明らかになっている[2]。

北白川廃寺の造営過程は４段階に整理されている（網 1994)。まず、造営の第Ⅰ段階には東方基壇の造営がおこなわれる。その後、塔の造営が開始する第Ⅱ段階に、岩倉地域の瓦窯から供給を受けるようになり、第Ⅲ段階には、北白川廃寺の塔造営が一段落し、岩倉地域の瓦窯から北野廃寺や広隆寺にも供給していたとされる。第Ⅳ段階は、堂塔の建立を終え、金堂院と塔院が整備される時期とされる。

木野墓窯と北白川廃寺からそれぞれ鴟尾が出土しているものの、両者の鴟尾は製作技法や焼成など異なる点が多い。北白川廃寺に瓦を供給していた窯は複数考えられることから，木野墓窯以外の窯からも鴟尾が供給されていた可能性が考えられる。

木野墓窯・北白川廃寺・北野廃寺・広隆寺は、山田寺式軒丸瓦と特殊叩き平瓦が出土する点が共通しており、軒丸瓦は北白川廃寺系列として整理されている。北白川廃寺系列の軒丸瓦と近い文様を持つ瓦は、播磨地域に分布しており、山背地域と播磨地域との間における瓦技術の交渉が指摘されている（菱田 2005)。鴟尾の地域色として挙げられる東播系と西播系の鴟尾（菱田 1988）が、いずれも山背地域で確認されていることとも無関係ではないと考えられるが、今後の検討課題である。

平安時代前期　平安宮・京に瓦を供給した、西賀茂地域の窯跡群と、栗栖野瓦窯を中心とする岩倉幡枝地域の窯跡群から鴟尾が出土している。

多量の鴟尾が出土した上ノ庄田瓦窯は、西賀茂地域の最北に位置する。上ノ庄田瓦窯では、出土した鴟尾の半数が腹部で、部位が限られること、破片同士がほとんど接合しないこと、色調・焼成も様々であることなどから、他の瓦窯から窯の構築材として持ち込まれたと考えられている（南 2003）。上ノ庄田瓦窯の鴟尾が他の瓦窯から持ち込まれたとすると、少なくともその鴟尾は上ノ庄田瓦窯の操業以前に製作されていたものである。上ノ庄田瓦窯以降、西賀茂地域では瓦生産がしばらくおこなわれなくなり、栗栖野瓦窯へ生産拠点が統一されるとみられることから、西賀茂地域で鴟尾生産が落ち着く時期を考える上で、上ノ庄田瓦窯の操業時期[3]が一つの定点となる。

一方、現在の所、岩倉幡枝地域での鴟尾の出土数は西賀茂地域ほど多くないが、栗栖野瓦窯を中心に確認されている。そのうち、栗栖野 20 号窯の灰原と考えられる落込み遺構から、平安時代前期の緑釉瓦や須恵器と共に、緑釉の鴟尾が出土している（第５図３）。栗栖野瓦窯は、大同３年（808）には完成していた[4]豊楽殿の創建軒瓦が栗栖野瓦窯産の緑釉瓦であること（網 2011）から、少なくともそれ以前には生産が開始されていたとみられる。

消費地で時期が判明している例として、豊楽殿では、豊楽殿と清暑堂とをつなぐ北廊の基壇版築土から、全面に緑釉を施したＡ類の鴟尾が出土しており、北廊造営以前の豊楽殿に葺かれていたと考えられる（鈴木 1995）。

また、出土軒瓦の検討から、西鴻臚館は平安宮の主要地区とほぼ同時期に造営され、９世紀中頃には完成していたと推定されている（鈴木 1987）。西鴻臚館で出土した鴟尾もこの頃までに製作され、主要堂舎に葺かれたと想定できる。

平安京左京二条二坊に位置した高陽院でも比較的まとまって鴟尾が出土している。軒瓦や文字瓦などの出土状況から、高陽院には平安宮から搬入された一群の瓦が存在する可能性が指摘されている（前田 1994）。高陽院で出土した鴟尾は、平安宮出土例や西賀茂瓦窯群の出土例などと類似する点が多い。

なお、史料や絵画から、平安宮では金銅製や鉛製、さらには木製の鴟尾があったことが分かる（大脇 1999）。遺物として残りにくいため詳細は不明だが、平安時代中・後期には、瓦製ではない鴟尾が葺かれていた可能性がある。

ⅳ　まとめ

以上、京都市内の白鳳期と平安時代前期の鴟尾について概観した。白鳳期の鴟尾は点数こそ少ないものの、山背地域と他地域との関連を推察することができる資料が存在する。一方、平安時代前期の鴟尾は、平安京造営という一大事業の中で生み出された、公的な要素が強いものと言える。その生産・供給体制について、鴟尾単体で考えることは難しく、瓦の生産・供給体制の中で考える必要がある。

今回集成を進める中で，出土資料には未報告資料が多いことが判明したため、今後は整

理を進めるとともに、詳細な比較検討をおこなうことが課題である。（熊谷）

B　京都府内新規出土鴟尾

i　美濃山廃寺（綴喜郡）

八幡市美濃山古寺に所在する（伊野・関廣 2012、伊野・筒井・村田ほか 2013）。

発掘調査では、礎石や基壇などの伽藍に関連する遺構は検出されていないが（第７・８図）、大量の瓦類や大型の掘立柱建物跡、ひさご形土製品や覆鉢形土製品など特殊な遺物が出土した。寺院存続時期は、７世紀後半から８世紀末と考えられる。７世紀後半から８世紀中頃までは、特殊な土製品などがあり信仰形態には独自性がみられ、瓦から新羅系渡来人の影響を受けた可能性がうかがえる。8 世紀後半になると平城宮と同文の軒瓦が出土することから、朝廷の仏教施策の影響を受けたと考えられる。

瓦の生産年代については不明で、生産地（窯）についても確認されていない。

出土した鴟尾は４点で（第９図）、１～３は同一個体の可能性があり、縦帯内に連珠文があり、１の鰭は逆段である。１の内面には粘土紐積み上げ痕跡が残り、強いナデが施されている。４は鰭部片で鰭が正段である。（村田）

C　滋賀県の鴟尾

滋賀県は近江一国からなる。昭和 55 年刊『日本古代の鴟尾』所載の鴟尾出土遺跡分布図・同地名表によると、近江（滋賀県）における古代の瓦製（陶製）鴟尾の出土遺跡は No.43 ～ 48 の６遺跡であった（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。そして、その 20 年後の平成 11 年刊『日本の美術　No.392 鴟尾』では９遺跡をかぞえた（大脇 1999、p.40）。それからさらに 20 年を経た今回、あらためて集成をこころみたところ、その数は 22 遺跡にのぼることがわかった。

本稿では、近江における鴟尾について、まずその分布状況と遺跡ごとの概要を近江の南北にわけて報告し、ついで生産遺跡としての希有な調査事例である大津市山ノ神遺跡について詳細を報告する。（北村）

i　近江国北部

近江国北部として高島郡（湖西地域）、伊香郡、浅井郡、坂田郡（以上、湖北地域）、犬上郡、愛知郡、神崎郡、蒲生郡（以上、湖東地域）を扱う。この８郡における鴟尾出土遺跡数は高島郡１、坂田郡２、犬上郡２、愛知郡２、神崎郡２、蒲生郡３の６郡 12 遺跡である。出土した鴟尾はいずれも白鳳期の所産と考えられる。伊香・浅井両郡については今のところ鴟尾出土遺跡は知られていない。

（１）大宝寺跡（高島郡：高島市新旭町熊野本・安井川）

安曇川が高島平野へと流れ出る箇所の北側の饗場野台地上に位置する。すぐ西側には北陸道（西近江路）が通過する。寺院跡とされる。昭和 28 年（1923）からの開拓工事に際し軒瓦等が採集された（林 1989）。鴟尾は３片が報告されている。『日本古代の鴟尾』ではこのうち２点の頭部（基底部）片をほぼ同部位と見てＡ、Ｂの２個体と認識し、鰭部片１点は胎土や焼成等の特徴からＢの一部としている（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。その後、昭和 50 年代（1975 ～ 1985）頃に多数の鴟尾片等が掘り出された（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1991）。これらの鴟尾片には、脊稜と縦帯の頂部付近の交差箇所が少なくとも３点はあるので、３個体分以上の破片が混在するとみられている（大脇 1999、第 23 図解説）。

今回、飛鳥資料館において 99 点を実見した。文様や胎土、焼成等の特徴から、大きくⅠ群（第 10 図１～７）、Ⅱ群（第 10 図８～ 11）、Ⅲ群（第 10 図 12 ～ 15）に分類した。『日本古代の鴟尾』報告のＡ、ＢはともにⅢ群にあたるとみられる。Ⅰ～Ⅲ群には少なくとも各群２個体ずつ以上が含まれると見込まれるが、それぞれ群ごとに胎土や焼成、色調が似るため、個体を識別することは難しい。したがって、ここでは群ごとに特徴を述べ、鴟尾出土遺跡一覧表の部位については原則として若い番号に集約する。

鴟尾１・２　Ⅰ群（第 10 図１～７）である。砂粒の多い粗い胎土で、長石粒がかなり目立つ。焼成は硬質で色調は暗灰色から青灰色を呈するものが多い。粘土紐を積み上げて作り（第 10 図１・２・６）、最後に粘土紐を巻いてつくった粘土円盤を背面の穴に詰め込んで蓋をする（第 10 図５）。脊稜と縦帯の頂部付近の突帯交差箇所の破片（第 10 図６・７）から２個体以上はあったことがわかる（鴟尾１・２）。これらによると、脊稜は突帯で表現し、胴部にはヘラ削りによって正段型をつくる。そして胴部の脊稜の両側に１個ずつの円孔がうがたれる。突帯は胴部の外側に２条あるとみられる。２条目の突帯は鰭部外面の端縁にあるから、１条目と２条目の突帯間が鰭部であり（第 10 図１・３・４）、そこにヘラ削りによって正段型をつくる。突帯はいずれも貼り付けによる。脊稜と１条目の突帯は幅 2.8 ～ 3.5cm 程度で、高さは前者が 2.5cm 程度、後者が 1.5cm 程度である。２条目の突帯は幅 4.2 ～ 6 cm 程度、高さは 1.5cm 程度である。

塗り分け　Ⅰ群には突帯を黒く塗り、段型を交互に塗り分けるという顕著な特徴がある。塗り分けは黒く塗る部分と、なにも塗らずにそのままにしておく部分とをつくるということである（以下、同じ）。黒く塗るとは墨を塗るとされる（大脇 1999、第 23 図解説、p.44）。その場合は焼成後の塗布である。確かに筆のようなもので黒く塗った痕跡がある（第 10 図７）。しかしながら段型のヘラ削りと黒塗りとの関係を観察すると、ヘラ削りのラインが塗り分けの境界となっている（第 10 図３）。そして、段型の段端面が黒塗りになる場合とそうでない場合とがあり（第 10 図３・４）、しかも細部に滲みが出ることもない。おそらく段型も含めて全体がいったん完成した後、焼成前に黒塗りし、その後で黒塗りのはみ

出しや滲みを含めて全体を再度ヘラ削りして調整すると考えられる。焼成すれば消える墨でなく、焼成すれば黒くなると知っていてベンガラ（小澤毅氏のご教示）を塗っているのであろう。

鴟尾３・４　Ⅱ群（第 10 図８～ 11）の胎土は細かな粒子の粘土に砂粒が混じる。焼成はやや軟質で、色調は灰色から灰褐色、淡褐色を呈するものが多い。粘土紐を積み上げてつくる（第 10 図８）。脊稜と縦帯の頂部付近の突帯交差箇所の破片から２個体以上はあったことがわかる。そのうち、鴟尾３（第 10 図８）によると、脊稜は突帯で表現し、素文の胴部の脊稜の両側に１個ずつの楕円孔をうがつ。突帯は胴部の外側に３条あり、１条目と２条目の突帯間が幅広の縦帯になっている。突帯はいずれも貼り付けによる。３条目の突帯は鰭部外面の端縁にあるから、２条目と３条目の突帯間が鰭部になる（第 10 図９～ 11）。この２箇所の突帯間にはヘラ削りによって正段型を作り、それを交互に塗り分けるという特徴がある。脊稜と１条目、２条目の突帯は幅２～ 2.5cm 程度、高さ 1.5cm 程度である。素文であり、黒塗りもない（第 10 図８）。３条目の突帯は幅広（６～７cm 程度）で、ヘラ描きによって鋸歯文を描き、底面が内側に向く三角形部分だけを黒く塗るという特徴がある（第 10 図９～ 11）。

鴟尾５～８　Ⅲ群（第 10 図 12 ～ 15）はⅡ群と似る。胎土はⅡ群よりも砂粒が多く混じる。あまく瓦質に焼成され、表面が黒色ないし灰黒色、断面が暗灰色ないし灰色を呈するものが多いという特徴がある。他群に見るような塗り分けがないこと、および内面に同心円文の工具痕をのこす個体（第 10 図 14）があることも特徴的である。『日本古代の鴟尾』報告のＡ（鴟尾７）・Ｂ（鴟尾８）をあわせて、４個体以上はあると見込まれる。脊稜と縦帯の頂部付近の突帯の交差箇所の破片（鴟尾５、第 10 図 13）によると、脊稜は突帯で表現する。そして第 10 図 12 ～ 14 からは３条の突帯によって縦帯がつくられるとみられる。突帯はいずれも幅３cm 程度の素文である。１条目の突帯の内側が胴部であり、それは素文の可能性がある（第 10 図 14）。１条目と２条目の間（第 10 図 13・14）、２条目と３条目の間（第 10 図 12・13）が縦帯であり、そこにはいずれもヘラ削りによる正段型がある。鰭部については必ずしも明確でないが、鴟尾８の鰭部外面の端縁には突帯があり、そこにはⅡ群に似たヘラ描きの鋸歯文がある。同様の鰭部片は他にもあり、それは瓦質に焼成されるという特徴をもつ。なお、第 10 図 14 に直交しない２本の突帯があることから、胴部を横断するような突帯があるとみられる。

頭部の製作技法　頭部の基底部は底面と底面から３cm 程度の高さまでの内外面に布目圧痕がつく（鴟尾５、第 10 図 15）。底面幅は３cm 程度である。山本遺跡（第 18 図１・２）等は腹部の基底部とみられ、底面幅は約 5.3 ～ 5.6cm ある。それらよりも底面が狭い第 10 図 15 は腹部よりも自重がかからない頭部の基底部とみられる。大宝寺遺跡には鴟尾７・８をあわせて、同様の破片が都合９点ある。基底部の形状に合わせた幅狭の布を敷いて使っていることは確かである。他群も含めた複数個体が混じる可能性もあるが、多くは表面が

黒色に焼成される瓦質品である。基底部の内面につく突帯は 1.5 ～ 2.5cm 程度と幅狭ながら高さは 3.5 ～ 3.7cm ある。鴟尾７の基底部片の内面突帯も高さは約５cm ある。これらの内面突帯は補強用とみられる。基底部は布をかぶせた型作りの可能性が指摘されている（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。確かに内外面の突帯はともに布をはずしてから貼り付ける場合が多く、基底部の底面に布目圧痕はあっても、突帯の底面には布目圧痕がない場合がある（鴟尾８）。しかし、底面の布目圧痕につぶれや擦痕はなく、底面から布をはずした形跡は認めにくい。また、基底部から連続する布目圧痕が、内面の突帯の底面や側面にもつくものがある（鴟尾５、第 10 図 15）。型作りというよりも、おそらく基底部がやわらかい段階に、簡易な構造の補強材によってこれを支保した痕跡と考えられる。

（２）磯堂谷遺跡（坂田郡：米原市磯）

琵琶湖と入江内湖干拓地とにはさまれた磯山の東麓に位置する。遺跡の北側には琵琶湖上交通の要港朝妻港がある。坂田郡朝妻郷の遺称地である。遺跡の所在する谷部は南東方向に開口し、古代においては入江内湖に面していたと推定される。寺院跡とされるが、昭和 16 年８月に「古瓦出土地を発掘せしに、数多の平瓦傾斜面に層をなして埋没されたり」というから（坂田郡教育会 1941、p.853）、窯跡の可能性もあるだろう。鴟尾の出土は昭和 35 年（1960）以前に知られていた（彦根市 1960、pp.124 － 125）。三重弧文軒平瓦や凸面に格子叩きをまばらに施す平瓦、行基葺式丸瓦も出土している（彦根市 1960、西田 1989）。これらは複数の地元住民の手から最終的に一箇所に集められたらしい（西田 1989）。鴟尾は鰭部を主体とする３点が知られる（第 11 図１～３）[5]。それぞれを鴟尾１～３とする。胎土はいずれも砂粒を少量含む細かい粘土で、焼成は硬質からやや軟質、色調は暗灰色から灰褐色である。

鴟尾１・２　第 11 図１・２に該当する。左右別面である。接合しないが、同一個体の可能性はある。１の鰭部外面には端縁に並行する幅 2.4cm の突帯が１条あり、その両側に正段型がある。鰭部の内面はナデ調整し、素文である。厚さは 2.8 ～ 3.5cm である。２の胴部外面は素文であり、頂部付近には鉤爪形（弧形）の透し孔がある。外面には端縁に並行する２条の突帯があり、この突帯間から鰭部にかけて正段型が連続し、突帯間は縦帯を表現するようにみえる。鰭部内面は素文であり、厚さ約 3.5cm である。

鰭部端面の段差　１の鰭部端面に段差（→）があり、その箇所の端面に平行する面はヘラで削り、端面に垂直する面は破面のまま無加工である。２の鰭部端面にも段差（→）がある。これについては端面を斜めに加工して段差を表現するようにみえる。１と２のこの端面の段差は西琳寺例や寒風窯跡例の鰭部端面くびれとは逆段差になっている。

文様の作り直し　１・２ともに突帯や正段型は 0.2 ～ 0.4cm と浅くつくられる。突帯の破面を観察しても粘土の貼り付け痕は認めがたく、段型と同様に浅く削り出されたと考えられる[6]。２については鰭部外面から外側の突帯にかけて表面が薄くはがれ、その剥離面に

線描きの円形文様が見える箇所がある。また突帯箇所の剥離面にも線描きが見える箇所がある。このうち円形文様は下描きとされるが（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）、それは表面の文様には反映していない。また、突帯箇所の剥離面の線描きは段差を伴うことから、それは表面の突帯をつくるための下描きでなく、それそのものが突帯であったと考えられる。つまり、胴部側の突帯から鰭部にかけては、最初につくった円形文様と貼り付けによる突帯[7]をわざわざ粘土で埋め殺し、表面を整えてから改めて突帯や正段型を浅く削り出し、作り直したと考えられる。

鴟尾３　第 11 図３は鰭部である。厚さは約 1.8cm であり、１・２に較べて全体に小ぶりである。鰭部外面の端縁に直径 4.2cm の連珠文３個が並ぶ。これは珠文の円の中心に凹点があることから、コンパスによるとされる（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。そして、連珠文の内側に幅 2.3cm で平行する２条のヘラ描き線によって突帯を表現する。

（３）法勝寺廃寺（坂田郡：米原市高溝）

天野川北岸の平野部に位置する。遺跡の南北には、琵琶湖へと西流する小河川がある。瓦片が出土し、伝礎石もあることから、古くより寺院跡とされてきた。坂田郡朝妻郷ないし阿那郷の比定範囲にある。息長氏との関連が推定される。昭和 62 年（1987）からのほ場整備事業に伴う発掘調査で、多数の瓦類に混じって鴟尾片４点が出土した（近江町教育委員会 1990）。

鴟尾１　鰭部片である（第 12 図１・２）。２には端面の一部が遺存する。４点とも互いに接合しないが、胎土はいずれも砂粒を含む細かな粘土で、おおむね硬質に焼成され、色調は暗灰色を呈す。同一個体とみられる。外面は全面をヘラ削り後、ヘラ描きにより段型と縦帯を表現する（第 12 図１）。内面には腹部の取り付き箇所が残存し、その基部内面付近に同心円文の工具痕がある（第 12 図１・２）。

（４）鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡、犬上郡：彦根市正法寺町）

東海道新幹線と名神高速道路とが最接近する同彦根インターチェンジのすぐ南側に位置する。付近は東山道鳥籠駅の比定地である。遺跡があった正法寺山には地名「鳥籠山」があることから、壬申の乱の戦場「鳥籠山」（『日本書紀』天武天皇元年（672）７月９日条）の比定地の一つである。しかし現在では南西側に位置する大堀山こそ「鳥籠山」と考えられていることもあって正法寺瓦窯跡と呼ぶこともある（谷口 1992）。

平成元・３年度（1989・91）の発掘調査で、西向きの緩やかな斜面地から灰原等が検出され、未焼成品を含む大量の瓦等が出土した（彦根市教育委員会 1992）。報告書等によると、出土した軒丸瓦は山田寺式が最も多いが、川原寺式等もある。軒平瓦には四重弧文や平城宮式等がある。平瓦には桶巻き作り、丸瓦には行基葺き式がある。須恵器も出土したことから瓦陶兼業窯とされるが、よくわからない。製品の主要な供給先は彦根市竹ヶ鼻廃寺と考えられる。

鴟尾１　鰭部片が１点である（第 13 図１）。外面は素文だが、珠文１個（直径 7.5cm）が

貼り付けられる。そして、その珠文付近から外側（鰭側）はヘラ状工具によって磨いた後、端縁に沿って削る。内面は腹部の取り付けの剥離痕を境界として、外側（鰭部側）はヘラ状工具によって磨き、内面は粘土紐の積み上げ痕とそれを指で押さえた痕跡をそのまま残す。なお、安養寺廃寺（第 21 図１）に珠文の小さい類例がある。

（５）八坂東遺跡（犬上郡：彦根市八坂町）

琵琶湖に注ぐ犬上川の河口南岸に位置する。犬上郡青根郷の比定範囲に含まれる。滋賀県立大学の建設工事に先立ち、平成４年（1992）に彦根市教育委員会が試掘調査を実施して発見し、平成５年（1993）に滋賀県教育委員会が確認調査を実施した（滋賀県教育委員会 1995）。調査の結果、柱列や瓦溜等が検出され、川原寺式軒丸瓦と簾状重弧文軒平瓦を含む大量の瓦片や「寺」と墨書された須恵器坏等が出土した。寺院跡とされる。鴟尾の破片数は 37 点で、少なくとも２個体はある（第 14 図１～ 15）。

鴟尾１　第 14 図１～３の鰭部片は内外面にヘラ削りによる正段型がある。端面の傾斜面が向く側が内面である。外面の段型は内面の段型に較べて段差が大きくエッジもシャープである。３は粘土紐作りである。

鴟尾２　第 14 図 12・13 の鰭部片は外面の端縁に突帯がある。突帯は貼り付けで、幅約４cm、高さ約 1.5cm である。端面は内面に傾斜し（第 14 図 12）、正段型は外面のみで内面に段型はない（第 14 図 12 ～ 15）。

鴟尾１と２の胎土や焼成等の特徴に顕著な差異は認めにくい。胎土はいずれも長石粒が目立つ細かい粘土で、焼成はやや軟質から硬質、色調は灰色から暗灰色である。したがって、胴部等の破片（第 14 図４～ 11）については鴟尾１・２のいずれとも判別しがたいため、鴟尾出土遺跡一覧表においては便宜的に鴟尾１の一部としておく。胴部には、弁端が外側に向く花弁形（羽根形）がヘラによって削り出される（第 14 図４）。そしてそれを囲うような突帯がヘラによって削り出され（第 14 図４・５）、胴部と鰭部とを区画するようにみえる。第 14 図６～９には貼り付け突帯がある。第 14 図６は頂部に近い側で、鰭部とみられる段型がある。第 14 図７～９は基底部に近い側とみられ、第 14 図９には粘土紐作りの痕跡がある。第 14 図 10 は腹部で、直径約 2.5cm の円孔がある。第 14 図 11 は腹部の基底部と推定される。内面には斜め方向のハケ目の下部に高さ４～６cm 程度の布目圧痕があり、経緯の布端痕がみえる。底面幅は 4.5cm 程度で、そこに内面から連続する布端痕が認められる。明確でないが、布目圧痕も同じく連続するとみられる。外面にも部分的に布目圧痕がつく。同様の破片は法堂寺廃寺（第 17 図５）、山本遺跡（第 18 図１～３）、宮井廃寺（第 19 図１）にある（山本遺跡で詳述）。

（６）塔ノ塚廃寺（軽野塔ノ塚廃寺、軽野廃寺、愛知郡：愛荘町蚊野）

宇曽川上流の北岸に位置する。俯瞰すると愛知川扇状地の北側の一角にあたる。愛知郡蚊野郷の比定範囲にある。湖東式軒瓦の分布の中心として知られ、依智秦氏の氏寺とされる。昭和 53・57 年（1978・82）にほ場整備事業に伴って発掘調査され、法隆寺式伽藍配

置とされる寺院跡（滋賀県教育委員会 1979a、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）と瓦窯跡２基が見つかっている（滋賀県教育委員会 1983)。鴟尾は３片が出土した。

鴟尾１　第 15 図１は『日本古代の鴟尾』報告のＢの胴部片である。砂粒を含む胎土で、焼成は硬質、色調は灰褐色を呈する。外面は格子叩きをヘラで消し、頭部の縁取りとして、幅２cm 程度、高さ 0.5cm 程度の突帯を貼り付ける。内面には指頭圧痕がある。

鴟尾２　第 15 図２は、『日本古代の鴟尾』報告のＡの鰭部片２点のうちの１点にあたるとみられるが、同書の写真や図等の掲載がないので照合できない。胎土は砂粒を多く含む。焼成はおおむね硬質で、色調は黄灰色だが、鉄分の沈着が多くみられる。外面の突帯は幅 1.7cm、高さ１cm で、それと端縁との間に２条の段差を削り出し、段型を表現する。

（７）野々目廃寺（愛知郡：愛荘町南野々目・東円堂）

愛知川と宇曽川の間に位置する。塔ノ塚廃寺の西側約 2.5km にあたる。愛知郡大国郷の比定範囲に含まれる。湖東式軒瓦が出土することから、依智秦氏の氏寺の一つとされる。昭和 53 年（1978）にほ場整備事業に伴って発掘調査され、掘立柱建物跡等が検出された（滋賀県教育委員会 1979b)。

鴟尾１　鴟尾片は溝跡から２片が出土した（第 16 図１・２)。胎土はいずれも砂粒をわずかに含む細かい粘土で、焼成はあまく、色調は灰白色から褐色を呈する。第 16 図１は『日本古代の鴟尾』に報告の脊稜部である。脊稜は幅 2.8cm、高さ 0.8cm の突帯で表現され、その両側に１条、もしくは２条のヘラ描き沈線で段型を示す。第 16 図２は１に近い部位の突帯片とみられる。

（８）法堂寺遺跡（神崎郡：東近江市佐野町）

愛知川下流の南岸に位置する。神崎郡垣見郷の遺称地に近接する。塔心礎があり、瓦も出土することから、古くより古代寺院跡と考えられてきた。平成６～９年（1994 ～ 1997）に遺跡公園の整備事業に伴って発掘調査され、大官大寺式に類似した伽藍配置の寺院跡が見つかっている（能登川町教育委員会 1999)。大量の瓦が北瓦溜（金堂跡付近）と南瓦溜（中門跡付近）を中心に出土した。鴟尾片は 72 点ある。焼成はいずれも軟質で、色調は灰白色から灰褐色である。胎土もよく似るが、砂粒が目立つ粘土（鴟尾１）とほとんどそれが目立たない細かい粘土（鴟尾２）とがある。２個体分以上が混じるとみられるものの、多くが小破片であるため、区別することは難しい。

鴟尾１　第 17 図１は頂部に近い腹部である。胎土は砂粒が目立つ粘土で、焼成は軟質、色調は灰白色である。外面に横位の突帯（幅、高さとも３cm 程度）を貼り付ける。そして、その頂部側には突帯に平行する正段型を、腹部側には突帯に斜行する方向の正段型をヘラ削りによってつくる。第 17 図２は鰭部である。胎土、焼成、色調ともに第 17 図１とよく似る。外面の端縁に平行する突帯（幅５cm 程度、高さ 2.5cm 程度）を貼り付ける。そして、これによって鰭部と胴部を区画し、その両方にヘラ削りによって正段型をつくる。鰭部の内面は素文である。

鴟尾２　第 17 図３は胴部片である。焼成、色調とも第 17 図１・２と似るが、胎土は細かい粘土で、砂粒はほとんど目立たない。粘土紐を積み上げた痕跡がよくのこる。第 17 図４は脊稜部である。胎土は細かい粘土で、砂粒はほぼ含まない。焼成は硬質で、灰白色である。脊稜は幅約５cm の貼り付け突帯で表現され、その片側に幅約４cm 程度、高さ 0.5cm の細長い平面を削り出す。第 17 図５は腹部の基底部と推定される。胎土は細かい粘土で、砂粒はほぼ含まない。焼成は硬質で、灰白色である。底面から内外面の高さ約 10cm までの範囲に、連続する布目圧痕がつく。同様の破片は八坂東遺跡（第 14 図 11）、山本遺跡（第 18 図１～３）、宮井廃寺（第 19 図１）にある（山本遺跡で詳述）。

（９）山本遺跡（神崎郡：東近江市五個荘山本町）

東山道清水駅の遺称地の東側に位置する。昭和 62 年（1987）以降の発掘調査で東山道の東側溝とみられる溝跡や９～ 10 世紀の掘立柱建物跡群が検出されている。第３次と第５次調査でみつかった大型土坑跡から、山田寺式軒瓦を含む瓦片が大量に出土した。東側約 600 mに位置する木流廃寺の瓦がもちこまれた可能性も指摘されている（五個荘町教育委員会 2005）。鴟尾は第３次調査時に７点が出土した（第 18 図１～３）。いずれも腹部の基底部片とみられる。砂粒を多く含む粗い胎土で、おおむね硬質に焼成され、色調は表面が灰褐色から褐色、断面が灰黒色を呈するものが多い。同部位の破片があることから、２個体以上の破片が混じるとみられる。

鴟尾１　第 18 図１は底面幅 5.3cm で、底面を接地すると、全体にやや内傾する。底面から連続する布目圧痕が内面で最高５cm まで、外面で最高 7.5cm までの範囲に認められる。それより高い部分は、全体の調整にあわせて布目圧痕をナデ消している。そして底面からの高さ 33cm 程度の箇所に円孔がある[8]。また、底面からの高さ 25cm 程度の箇所に、中房の蓮子が「１＋５」の有子葉単弁８葉蓮華文をスタンプする[9]。これは通常とは凹凸が逆の文様で、当該遺跡で出土する山田寺式軒丸瓦から重圏文縁を欠いた瓦当部を作り、それをスタンプしていると考えられる。また、第 18 図１の外面には蓮華文の両側に縦位にヘラ状工具で連続して斜めに突いた痕跡がいくつもある。生乾き段階での割れの修復か、蓮華文と一体の文様として施文したのであろう。

鴟尾２　第 18 図２は底面幅 5.6cm で、底面から連続する布目圧痕が内面で最高５cm までの範囲に認められ、それより高い部分は、全体の調整にあわせて布目圧痕をナデ消している。外面では最高２cm までの範囲に布端が認められ、それより高い部分はナデ調整する。第 18 図１と同様に、底面を接地すると全体にやや内傾する。また、底面からの高さ 23cm 程度の箇所に同様の円孔がある。第 18 図３には第 18 図１と同様の蓮華文がある。同部位の腹部片と考えられる。

腹部の製作技法　第 18 図１・２はこれまで同一個体とされてきた。その根拠はこの２点が並んで出土したためである（五個荘町教育委員会 1997、PL.8）。そして、今回底面とした箇所を、報告書では胴部内面に接着する腹部の端面とし（五個荘町教育委員会 1997、

p.30fig.26 ナ)、基底部ではない腹部の一部としている。そうした場合の製作技法を復元するなら、あらかじめ型で腹部をつくっておき、それを生乾き段階で胴部内面に接合することになる。しかし、今回あらためてこれらを観察したところ、第 18 図１と２には接点がなく、同一個体である根拠が薄いことがわかった。また、上述のとおり、これらと同様の破片が八坂東遺跡（第 14 図 11)、法堂寺遺跡（第 17 図５)、宮井廃寺（第 19 図１）で出土しているものの、いずれの遺跡においても、これらが胴部内面の接合箇所からはずれた痕跡(接着面にできる布目圧痕の反転痕等)をもつ鴟尾片はみつかっていないこともわかった。円孔（第 18 図１・２、第 19 図１）があるうえ、蓮華文（第 18 図１・３）もあることから、これらを鴟尾の腹部とすると、半円形刳り形等の痕跡があるわけではないが、他事例からみて基底部と考えておくのがよいだろう。つまり基底部の形状に合わせて、製作台上にあらかじめ幅狭の布を敷いて作りはじめ[10]、基底部が乾燥しない段階では、その布を腹部の内外面に折り曲げて補強材で支保しておいたと考えておきたい。これは湖西地域の大宝寺跡の頭部の基底部の作り方とよく似ている。いずれにせよ、胴部や鰭部は粘土紐を積み上げて作り、腹部はそれらとは別粘土（おそらく粘土板）でつくるという技法が、湖東地域に存在した可能性を指摘しておきたい。

(10) 宮井廃寺（蒲生郡：東近江市宮井町）

日野川の中流域において、同川と佐久良川とが合流する箇所の南岸に位置する。蒲生郡東生郷の比定範囲に含まれる。昭和 56 ～ 58 年（1981 ～ 83）の発掘調査で金堂跡と塔跡、そして北方と西方の基壇上に礎石建物跡がみつかり、紀寺式軒丸瓦等を含む大量の瓦片が出土した（蒲生町教育委員会 1985)。隣接する野瀬遺跡の発掘調査で「□本寺」のほか「造仏」などといった墨書土器 28 点が出土している（蒲生町教育委員会 1989)。

鴟尾１　出土した鴟尾は２点である（第 19 図１・２)。胎土はいずれも砂粒を含む粘土で、焼成はやや軟質、色調は灰白色である。第 19 図１は腹部片であり、円孔がある。外面には布目圧痕がつき、縦位の布端の外側には木肌のような微細な圧痕が観察できる。内面には粗雑な横位のナデがあり、指頭圧痕がのこる。全体に八坂東遺跡（第 14 図 11)、法堂寺遺跡（第 17 図５)、山本遺跡（第 18 図１～３）と似た特徴をもつ（山本遺跡で詳述)。第 19 図２は横位に曲面をもつ。胴部とみられる。外面は指頭で縦位に強くナデつけた後、部分的にヘラで削る。

(11) 野瀬遺跡（蒲生郡：東近江市宮井町）

宮井廃寺の周囲を野瀬遺跡という。野瀬遺跡のなかに宮井廃寺があるといってもよい。昭和 58 ～ 59 年（1983 ～ 84）にほ場整備事業に伴って発掘調査が実施され、第５地区のＢ地区西端の斜面地を中心に大量の瓦片が出土した。軒瓦等の構成は宮井廃寺に等しい。上述の如く多くの墨書土器も出土している（蒲生町教育委員会 1989)。

鴟尾１　第 20 図１は鬼瓦、もしくは鴟尾の可能性があると報告されている。素文の縦帯の可能性がある。最大厚は６cm である。全体をナデ調整する外面に、断面半円形の突帯(幅

２cm、高さ２cm）２条が縦位に貼り付けられる。内面は指頭で粗くナデつけた痕跡がのこる。第５調査区Ｃ地区 SK527 から出土した。

（12）安養寺遺跡（蒲生郡：近江八幡市安養寺町）

日野川下流域の南岸に位置する。蒲生郡桐原郷の比定範囲に含まれる。南側には東山道が通過する。平成 25 ～ 26 年（2013 ～ 14）の県道工事に伴う発掘調査で、南北方向の溝から大量の瓦片が出土したほか、寺域の南限とみられる東西方向の柵も見つかった（滋賀県教育委員会 2017）。

鴟尾１　鴟尾片は２点ある。第 21 図１の胎土は長石粒が混じる粘土である。おおむね硬質に焼成され、色調は外面が淡灰褐色、断面が灰黒色である。厚さ 4.2cm を測り、外面に直径 4.2cm の珠文がつく。鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡、第 13 図１）の珠文は直径 7.5cm であるから、かなり小さい。内面はナデ調整する。もう１点は未報告だが、珠文の有無を除けば同じ特徴をもつ。同一個体であろう。（北村）

ⅱ　近江国南部

近江国南部として野洲郡、栗太郡、滋賀郡（湖南地域）、甲賀郡（甲賀地域）の４郡を扱う。鴟尾出土遺跡は野洲郡２、栗太郡４、滋賀郡４の３郡 10 遺跡であり、出土した鴟尾はいずれも白鳳期の所産と考えられる。なお、甲賀郡では今のところ鴟尾の出土遺跡は知られていない。

（１）福林寺遺跡（野洲郡：野洲市小篠原）

福林寺遺跡は、近江富士として知られる三上山の北に並ぶ妙光寺山から、さらに北へ連なる丘陵裾部と平坦地にかけて広がる。寺域想定地内での野洲中学校建設に伴う発掘調査で大量の瓦や須恵器が出土したことで廃寺跡と確認され、東寺文書から天武天皇の代の建立とされる福林寺跡と推定された（野洲市教育委員会 2005a）。

鴟尾１　平成７年（1995）の調査時に破片１点（第 22 図）が出土するが、遺構に伴うものではない（同 2005a）。なお､同報告掲載写真では２片に分かれるが接合する。赤褐色で、焼成は硬質、約３cm の厚みがある。粘土紐貼り付け突帯が付く。

（２）八夫遺跡（野洲郡：野洲市八夫）

野洲川の沖積平野の北側にあって、北東から南西方向にのびる微高地上に立地する複合遺跡である。白鳳～奈良時代の瓦片が多く出土しており、周辺に古代寺院跡の存在が推定される。これまでの発掘調査で、鴟尾とみられる破片２点が出土している（中主町教育委員会 1985，野洲市教育委員会 2005b）。

鴟尾１・２　鴟尾１（第 23 図１）は、昭和 59 年（1984）の第１次調査で出土した。鰭部と腹部の接合部分の破片とみられる。色調は灰白色で焼成はやや軟質であり、鰭部・腹部ともに約４cm の厚みがある。鴟尾２（第 23 図２）は、平成 16 年（2004）の第 12 次調査で出土した。腹部の破片とみられ、端面に刻み線があり、鰭部への接合面とみられる。

（３）手原遺跡（栗太郡：栗東市手原）

栗東市北部の平野部で、野洲川と草津川にはさまれた扇状地上に位置する。下鈎東遺跡、蜂屋遺跡と接している。古代官衙としての機能が考えらえる遺構、遺物が確認されている。手原遺跡の西側にある手原廃寺は、７世紀後半に成立したとされる寺院跡で、川原寺式軒瓦等が出土する。８世紀以降も存続するとみられる。鴟尾は、昭和 57 年（1982）の調査時に破片１点が出土した（栗東町教育委員会ほか 1999）。

鴟尾１　色調は灰白色で、焼成はやや軟質である。厚み約６cm で、線刻などから段型を表す鰭部の破片とみられる（第 24 図）。

（４）下鈎東遺跡（栗太郡：栗東市蜂屋・下鈎）

手原遺跡の西側に位置する。平成 21 ～ 22 年（2009 ～ 2010）にかけての発掘調査で、７世紀後半～８世紀初頭の遺物を含む溝跡や建物跡が確認された。鴟尾は、トレンチ９・トレンチ 11 から出土し、２個体分とみられる破片がある。小片が多く、全形は不明であるが、トレンチ８で検出された 15.5m × 16.5 mの規模になる基壇上の瓦葺建物に使用されたものと推定された（栗東市教育委員会ほか 2011）。

鴟尾１　色調は灰白色で、焼成はやや軟質である。第 25 図写真右側５点などがある。高さ 0.4cm 程度の浅い段型を表す鰭部の破片が複数確認できる。鰭部の厚みは４cm 程度である。

鴟尾２　色調は灰褐色で、焼成はやや軟質である。第 25 図写真左側６点など鰭部や胴部とみられる破片がある。第 25 図１は、粘土紐貼り付け突帯による縦帯に、直径約４cm の珠文が付く。第 25 図２は、鰭部の破片で、厚みは４cm 程度、表面のケズリにより浅く段型が表されている。

（５）蜂屋遺跡（栗太郡：栗東市蜂屋）

手原遺跡、下鈎東遺跡の北側に隣接する。平成 30 年度（2018）の発掘調査で、古代寺院跡の寺域西側を区画すると推定される溝跡が確認され、多数の瓦類とともに鴟尾も出土した。瓦は、忍冬文単弁蓮華文軒丸瓦と法隆寺式軒瓦が出土したことで、法隆寺との深い関わりが注目された（滋賀県文化財保護協会 2018a・2018b・2019）。

この発掘調査成果については、現在、滋賀県文化財保護協会にて整理中のため正式報告は出ていない段階であるが、今回出土した鴟尾について実見の機会を得たので簡単に所見を記す。鴟尾と考えられる破片は、コンテナ 11 箱分が出土しており、少なくとも型式の異なる２個体がある。

鴟尾１　焼成はやや軟質で色調は灰白色、表面は薄灰色が一部に残る。残存する破片の厚みは５～６cm で、鰭部から胴部にかかる破片が多く、腹部への接合部や基底部、頂部付近の破片（第 26 図１）もみられる。胴部から鰭部にかけて線刻で段型を表す。幅約４～4.5cm の線刻による帯２条を配置して縦帯としている。線刻帯２条には、直径 2.8cm のスタンプ刻印による連珠文が約４cm 間隔で配置される（第 26 図２）。鰭部端面から外側の帯まで

が幅約 15.5cm、帯２条の間隔は約 11cm である。

鴟尾２　色調は赤褐色で焼成はやや軟質である。腹部の基底部近くで厚みが 10cm 程度にもなる破片があり、鴟尾としてはかなり厚みがあるつくりになる。腹部や鰭部とみられる破片がある。第 26 図３は、腹部側底面の刳り形とみられる部分から鰭部の接合部分までと考えられる破片で、全体を復元すると、おおよそ鰭部側の基底部幅 60cm 以上の大型の鴟尾の可能性がある。粘土積み上げの単位ごとに剥離したとみられるブロック状の破片が複数ある。これは粘土紐を二重に並べて 10cm 程になる厚みを出し、さらに高さ５cm 程の単位で積み重ねたものとみられる。

（６）南滋賀町廃寺（滋賀郡：大津市南志賀一丁目ほか）

琵琶湖西岸の山麓下に広がる扇状地上に立地する史跡である。大津宮跡中枢部の錦織遺跡から北に約 500 m離れている。昭和３・13 年（1928・1938）に実施された発掘調査を契機として、瓦積基壇の建物と、川原寺式伽藍配置をもつ大規模な寺院跡が確認された。鴟尾は､胴部と鰭部に段型を表すもの（『日本古代の鴟尾』報告のＡ）と、無文のもの（『日本古代の鴟尾』報告のＢ）の２種類の個体が確認されている（柴田 1940、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980)。

鴟尾１・２　『日本古代の鴟尾』の復元図のように、胴部と鰭部の表面を削り出すことで正段型が表現された鴟尾である（第 28 図)。『滋賀県史蹟調査報告第９冊』に頂部付近などの破片７点（鴟尾１）が報告された（柴田 1940、図版 45)。鴟尾２は、頂部先端にあたる大型の破片（第 27 図、現在は高浜市やきものの里かわら美術館所蔵）で、頂部先端で脊稜と縦帯をなす突帯が縦横に交差しており、頂部付近の両側面に楕円形の孔の痕跡がある。脊稜と縦帯の形状、側面の頂部近くにあけられた２つの円孔など、高島市大宝寺跡出土の鴟尾（第 10 図）と類似しており、同じ工人集団による製作の可能性が指摘されている（大脇 1999)。

鴟尾３　『日本古代の鴟尾』で第 29 図のように復元された。段型などの外面の文様はみられない。戦前の調査では、全形が復元可能なほどの破片が出土したと報告され、大きさは高さ約 127cm、基底部の前後の長さ約 64cm と推定されている。この際の報告写真（柴田 1940、図版 38 下段）を見ると、石膏等で復元されている箇所も多いが、鰭部、腹部、胴部、頭部とかなりの破片が出土したとわかる。隣接する榿木原瓦窯跡でも同様とみられる鴟尾片が出土する。

（７）榿木原遺跡（滋賀郡：大津市南志賀一丁目）

南滋賀町廃寺の西端で検出された築地塀跡の外側に位置する。築地塀跡北側に工房跡、その南斜面に瓦窯跡があり、７世紀後半の登窯５基、奈良～平安時代の平窯５基の 10 基が検出された。南滋賀町廃寺の瓦を生産・供給しており、鴟尾片は約 50 ～ 60 点が出土したという（滋賀県教育委員会 1975・1981)。

鴟尾１・２　第１次と第３次調査時に窯内や灰原から出土した。第 30 図のように、胴部、

鰭部から腹部に続く破片などが複数あるが全体像は不明である。厚みは３～４cm 程で、表面にハケ目調整痕が残るが、文様などは確認されなかったと報告される（滋賀県教育委員会 1975）。南滋賀町廃寺の鴟尾３（無文の鴟尾）と同様とみられる。一方、南滋賀町廃寺の鴟尾１・２については出土していない。複数の生産場所があったことが想定できる。

（８）穴太遺跡（滋賀郡：大津市穴太二丁目ほか）

琵琶湖西岸の山麓下に広がる扇状地上にあり、大津宮跡中枢部から北東へ約３km 離れて位置する。昭和 59 年から実施された発掘調査で、主要な伽藍遺構が確認され、穴太廃寺跡として史跡になった。７世紀前半の前期穴太廃寺に始まり、７世紀後半の大津宮にやや先行する後期穴太廃寺創建寺院、大津宮以降の後期穴太廃寺再建寺院の３時期にわたる寺院の存在が想定されている。鴟尾は、いずれも再建寺院金堂北と東の土石流内と屋根瓦倒壊散乱面から出土した（滋賀県教育委員会 2001）。

鴟尾は、胴部と鰭部に段型を表す鴟尾１・２（第 33 ～ 35 図）と、少なくとも鰭部には段型を表しておらず全体に無文と考えられる鴟尾３（第 36 図）がある。

鴟尾１　第 33 図のように復元され、全形の復元値は高さ 127cm、基底部（頭部側）幅 47cm、基底部（鰭部側）幅 72cm、基底部前後の長さ 76cm と報告された。色調は黄灰白色で焼成はやや軟質である。正段型は頭部から鰭部までの外面全体に表されるとみられ、鰭部は内外面に段型を削り出している。鰭部と胴部の境には、幅２cm の突帯１条がめぐり、縦帯を表す。

鴟尾２　鴟尾１より一回り小さいものと推定され、破片３点が確認できる（第 34･35 図）。色調は灰白色で焼成はやや軟質である。第 34 図１は頭部側の端面、第 34 図２は頭部近くの破片とみられる。外面のみに段型が削られ、段の幅も２～３cm と狭いことからである。第 34 図１の内面には指圧痕が残る。第 34 図３は鰭部端面を残す破片で、段の幅７～８cm 程度で内外面ともに段型が削り出されている。厚みはいずれも２cm 程度と比較的薄い作りである。

鴟尾３　再建寺院金堂跡と塔跡の瓦溜りから出土した大型の破片（第 36 図）で、頂部の半面にあたるとみられる。全体復元された鴟尾１と同等かこれより横幅の広い鴟尾と考えられる。外面は、頂部の前側と鰭部端面が残るが、いずれも文様はみられない。鰭部端面は丸く成形され、腹部との接合痕までは幅 10 ～ 11cm 程度である。頂部の内側には格子叩き目と布目圧痕がみられる。後述する山ノ神遺跡出土の鴟尾から想定される製作工程からすると、頂部付近で最終的に手や工具が入らない程の狭さになる箇所に叩き目の調整痕があることに疑問が残る。胎土はスサの混ざった粗土で、その上に粘土を塗り重ね、表面は細かい白土で仕上げている。厚みは 2.5 ～３cm 程で、腹部側も接合痕から同等の厚みになると考えらえる。

（９）真野廃寺（滋賀郡：大津市真野一丁目・二丁目）

平成 21 ～ 25 年（2009 ～ 2013）にかけての発掘調査で、方形基壇状遺構と礎石、瓦窯

跡などが確認された。基壇状遺構の周囲で、単弁八弁蓮華文軒丸瓦など５種類の軒丸瓦と２種類の軒平瓦が出土しており、鴟尾は１点が出土した（大津市教育委員会 2014）。

鴟尾１　頭部右側面の上部角とみられる破片１点がある（第 31・32 図）。色調は薄灰色で焼成は硬質である。全形は不明だが、残存幅から頭部上側で幅 30cm 以上となる。表面にハケ目調整、頭部を縁取るように幅４cm の突帯がついており、この突帯が頭部中央と右側面の胴部に沿って頂部まで伸びていたと考えられる。突帯上の角には刻み線が認められ、珠文を貼り付けた痕跡とみられる。（福庭）

ⅲ　山ノ神遺跡出土の鴟尾

山ノ神遺跡は、瀬田川東岸の瀬田丘陵上に位置する（栗太郡：大津市一里山三丁目）。周辺には、古代の製陶・製鉄遺跡が点在しており、この山ノ神遺跡と、７世紀後半の製鉄遺跡である源内峠遺跡（大津市）、奈良時代の製鉄遺跡である野路小野山遺跡（草津市）は、「瀬田丘陵生産遺跡群」として一括して史跡指定を受けている。

山ノ神遺跡は、７世紀中頃から後半にかけて操業した窯跡（１～４号窯）や灰原、工房とみられる建物跡などが確認される生産遺跡である。７世紀中頃から須恵器を焼成し、７世紀後半に最盛期を迎える短期間の操業であった。４号窯は、焼成途中に起こった天井部分の崩落によって埋没した状態で残されており、窯内からはほぼ同形同大の大型鴟尾４基（鴟尾１～４、第 37 図は鴟尾３）が出土した。焼成時の状況を残していたことで、その全形や製作技法が復元できる貴重な例となった。また、４号窯全体を覆う暗黄色土（遺物包含層）からは、小型鴟尾（鴟尾５、第 40 図）とみられる破片も出土している（大津市教育委員会 2005・2012）[11]。

４号窯（古）　山ノ神遺跡で最も古い窯は４号窯で、大きく２時期にわたって使用されている（第 39 図）。古い時期の窯を４号窯（古）、鴟尾を焼成した新しい時期の窯を４号窯（新）とする。７世紀中頃、最も早くから操業を始めた４号窯（古）は、斜面を利用した全長約 14 ｍのトンネル式窖窯である。側壁は２時期分が確認され、最低２回の焼成がおこなわれたことがわかる。焚口から煙り出しまでのうち後方部分にあたる約６ｍは、天井部の崩落によって、焼成途中の段階で埋没し、窯詰めされた状態の須恵器が床面から出土した。出土した須恵器は、杯Ｈのセットや長脚２段２方向透かしのある有蓋高杯などがあり、古墳築造が続いていた時期の生産とみられる。

１～３号窯　４号窯（古）が埋没した後、山ノ神遺跡での生産は一時中断し、７世紀後半に須恵器生産が再開されたとみられ、この時期に１～３号窯が相次いで造られた。ここで焼かれた製品は杯と身が逆転した杯Ｇ、杯Ａ、杯Ｂが主体となる。また、４号窯にともなう灰原では、最下層から杯Ｈが出土し、それより上層から杯Ｇ、杯Ａ、杯Ｂが出土することが確認されており、杯Ｈと杯Ｇ・杯Ａ・杯Ｂが同時に焼成されることはなかったことがわかる。

４号窯（新）　４号窯は、崩落をまぬがれた前方部分の約 9.5m を再利用して造り直される。この４号窯（新）では、最終的に４基の大型鴟尾を一度に焼成したが、これも焼成途中で天井が崩落し埋没した。出土状況から、鴟尾１・２は焚口から約８ｍの地点で窯の奥壁に頭部を向けて、２基がほぼ隙間なく並べられていた。その手前に窯の主軸から約 60 度ずらした状態で鴟尾３が、焚口よりで窯主軸から約 30 度ずらして鴟尾４が設置されていた（第 38 図）。また４号窯（新）の床面からは、須恵器の杯Ａ身と杯Ｂ蓋・身が出土している（第 41 図）。この３点の須恵器は、ともに焼成不良で、大型鴟尾と同時に焼成されていたものである。大型鴟尾の製作時期は７世紀後半となり、大津宮の造営時期前後にあたる。大津宮周辺の古代寺院から出土する鴟尾との関連性も考えられる。なお、４基の鴟尾および共に出土した須恵器３点は重要文化財となった。

灰原は、最も厚い箇所で３ｍを超える厚みで堆積しており、大量の須恵器が出土した。山ノ神遺跡で出土した須恵器は、一部に飛鳥Ⅱの特徴を持つものが含まれるが、ほとんどが飛鳥Ⅲの時期にあたる。杯蓋からかえりが消失する段階のものは見られず、７世紀後半に一時的に大量の須恵器生産がおこなわれた後、生産を終えたものといえる。その急速な変化は、大津宮の造営～廃絶の時期に合うともいえる。出土遺物は、須恵器杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｇ、杯Ｈを主体とし、その他に皿・盤・高杯・甕・壺・陶硯・土馬など多様な器種がある。鴟尾以外の大型製品では、陶棺があり、草津市・横土井古墳群から出土した陶棺と類似していることが注目される。

鴟尾１～４　４号窯（新）から出土した４基は、焼成途中の窯の崩落により倒壊していたが、前述のとおり窯内に設置された状況をよく残していた。４基ともほぼ同様の作りである（第 37 図は鴟尾３）。胎土は精良でわずかに砂粒が混じる。酸化焔焼成の途中で窯ごと崩れたため、焼成は不良でもろく、表面の剥落もある。最後まで焼成がおこなわれていれば、須恵質の鴟尾となったであろう。４基は、細部はやや異なるものの、ほぼ同形同大である。全体の高さ約 140cm、頭部から鰭部までの基底部長約 100cm、頭部幅約 40cm、頭部高約 38cm、鰭部幅約 60cm となる（大津市教育委員会 2012）。

厚みは部位によって異なるが、底面付近で３cm 程度である。鴟尾２を例に挙げると[12]、腹部の底面にあたる刳り形で厚み約３cm、腹部は約２～３cm、胴部の中央あたりで約３cm である。最も厚みがある鰭部で３～５cm 程になる。鰭部には粘土を補てんすることで、厚みを出している。

胴部と鰭部の境には、二重の粘土紐貼り付け突帯により幅約 10cm の縦帯を表す。また、縦帯から鰭部端面まで、上下に約７～８本の粘土紐を貼り付ける[13]。鰭部を突帯で区画したような形となるが、段型の表現を簡略化したものと考えらえる。縦帯内には、粘土を丸めた径約６cm の連珠文を片側５～６個ずつ貼り付ける。粘土紐や連珠文の接着面には、鴟尾本体に刻み目が入れられる。鰭部の突帯や連珠文の数は、左右で一定ではなく、非対称となる。なお、鰭部は頂部まで一周せず、頂部先端の手前で段を成す。

鴟尾１～４は頂部先端に、突起が付く[14]。突起は、高さ約９～10cm、厚さ約４cmで上部は丸く、後部側にくぼみがあり、中央には径約1.5cmの穴をあける。中央の穴とくぼみから、飾り紐などをかけたとも想像できるが、この突起の用途は不明である。頂部への突起部分の接着は簡易といえ、鴟尾３は成形途中で一度外れたらしく、粘土紐をまくことで接合しなおしている。

鴟尾５　４号窯（新）の窯全体を覆う遺物包含層から、小型鴟尾とみられる破片が出土している（第40図）。復元された高さは約70cmで、大型鴟尾の半分ほどの大きさになるものとみられる。焼成は良好で、須恵質である。頂部付近の後部側や、基底部付近の鰭部と腹部にまたがる破片が出土した（大津市教育委員会2005）。また、昭和50～60年代の調査でも、この須恵質の小型鴟尾と同一個体とみられる破片が複数出土していた（未報告）。小型鴟尾の全形や用途については不明である。

製作手順　４号窯（新）から出土した大型鴟尾は、４基ともに基底部の下から炭化した台座が検出された。特に、鴟尾１・２の台座は残りがよく、角材のほぞ組みも確認された。製作の初めから、窯詰めに至るまで全てこの台座の上でおこなわれたとみられる。製作手順は次のように復元される（第42図）。

台座は、10×10cm程の角材４本で組まれる。角材の長さは胴部側約120cm、頭部側約50cm、腹部側約66cmで、胴部に沿う角材にほぞ穴を開け、頭部・腹部の粘土を乗せる角材をはめ込んでいる。この台座上に、基底部から高さ約５cmのブロック状とした粘土（粘土帯）を重ねて、乾燥・調整・積み上げを繰り返しながら成形している。まず、胴部側の粘土帯で、頭部と腹部の基底部となる粘土帯を挟む。その後、高さ約５cm程で粘土を水平に積み上げ、外面平行タタキによって叩き締める。内面や鰭部内面に同心円文の工具痕が確認できるものもある。４基の鴟尾は、約153～179kgの重さがあったが、自重で形が崩れることのないよう、一時乾燥を繰り返しながら、粘土帯を積み上げていったものとみられる。基底部は、内外面ともにヘラ削りが施されている。頭部の上面を作る際には、胴部と胴部をつなぐように横方向に粘土を継ぐ。

胴部上半分も、下半分と同様に５cm程度の単位で粘土帯を積み上げる。内面はナデ仕上げとなる。頂部は、鰭部分を先に作った後、腹部側を閉じていったとみられる。頂部先端の最後の数帯は、その内面に粘土帯のつなぎ目が明瞭に残っており、ナデ調整していたが、最終的に手が入らなくなり、外面のみが調整されたものとわかる。最後は丸めた粘土で閉じ、先端に突起を取り付けている。鴟尾３の突起は、取り付け後に一度剥がれたのを補修したのか、頂部との接着面に粘土紐を巻き付けて接合している。突起接合部分の強度はあまりなく、完成しても簡単に外れるようなつくりといえる。

頭部・腹部の刳り形、側面の透かし穴は、その周囲にヘラ状工具であたりをつけたような割り付け線が乱雑に残る。側面の透かし穴は、幅約10cm、高さ約５cm程度しかなく、個体によって不均一で、実用性があるとは考えられない。全体の装飾は簡素で、縦帯の区

切りと鰭部へ粘土紐の突帯を貼り付ける。また、団子状の粘土で連珠文をつける。個体によって差異があるが、全体をハケ目で整えるものもある。

山ノ神遺跡の鴟尾は、大型で同形同大の鴟尾が、その全容を残して発見されたことで注目されたが、鰭部の表現や頂部突起など、周辺地域の同時期の鴟尾には見られない特徴もある。今後の類例の発見が期待される。（福庭）

（京都市文化市民局 / 京都府埋蔵文化財調査研究センター / 彦根市歴史まちづくり部 / 大津市歴史博物館）

謝　辞

本稿を作成するにあたり、下記のみなさまに資料調査にご協力、ご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

奈良文化財研究所飛鳥資料館、滋賀県埋蔵文化財センター、大津市埋蔵文化財調査センター、草津市教育委員会、甲賀市教育委員会、長浜市長浜城歴史博物館、長浜市高月観音の里歴史民俗資料館、東近江市埋蔵文化財センター、彦根市、米原市教育委員会、野洲市教育委員会、栗東市教育委員会、栗東市出土文化財センター、愛荘町立歴史文化博物館、愛知県高浜市やきものの里かわら美術館（国県市町ごとに五十音順）

磯崎清、上村和直、大立目一、岡山仁美、小竹志織、小島孝修、小谷徳彦、佐伯英樹、佐々木悦也、杉浦隆支、鈴木久史、高橋順之、田中久雄、竹村吉史、内藤京、西原雄大、福井智英、福井知樹、堀大輔、三尾次郎、若杉智宏（五十音順）

註

1　もとは桓武天皇の皇子賀陽親王の邸宅であったが、後に藤原摂関家の邸宅となった場所である。

2　岸本 1992。ただし、木野墓窯は瓦陶兼業窯であり、その供給は塔への補足的なものとされる（網 1994）。

3　上ノ庄田瓦窯から出土した軒丸・軒平瓦は、淳和院跡や雲林亭跡など淳和天皇の離宮からまとまって出土することから、操業時期は、在位期間である弘仁 14 年～天長 10 年（823 ～ 833）の前後が想定されている。ただし、離宮のために瓦窯が設けられたのではなく、平安宮の何らかの修造を目的としたものとされる（南 2003）

4　延暦 18 年（799）正月七日の白馬節会の際には「豊楽殿未成功」であり（『日本後紀』）、未完成であったことがわかる。また、平成天皇の大嘗会が豊楽院で執り行われていることから（『日本紀略』）、その頃までには完成していたとみられる。

5　長浜城歴史博物館の寄託品リスト記載の鴟尾４点のうち１点は鬼瓦の可能性がある。

6　鬼瓦の可能性がある１点も同じ特徴をもつ。

7　文様は第２図３と似る可能性がある。

8　高さは円孔の推定中心までの高さ。

9　高さは中房の中心蓮子までの高さ。

10　宮井廃寺第 10 図１は、他と較べて布幅がかなり広い。

11　山ノ神遺跡の調査成果及び鴟尾の製作復元の所見については、大津市教育委員会 2005･2012 及び調査担当者の田中久雄氏のご教示によるところが大きい。

12　鴟尾１、鴟尾３、鴟尾４は全体に接合･復元されているが、鴟尾２のみ残りがやや悪く破損箇所が多いため、３分割して復元されている。このため、断面の構造など内部観察が可能である。

13　ただし、鴟尾３の右側面は下半分の４本のみで、上半分には鰭部を横に区切る突帯の痕跡がない。

14　鴟尾１は突起部分が出土していないが、残存する頂部の剥離痕から同様に突起部分をつけたとわかる。調査時に、窯壁崩落の危険があったため鴟尾１の周囲は一部掘り残しており、その中に含まれている可能性が高い。

参考文献

網　伸也 1994「北白川廃寺の造営過程－北山背古代寺院の考古学的考察－」『古代』第 97 号　早稲田大学考古学会

網　伸也 2011「平安宮造営と瓦生産」『平安京造営と古代律令国家』　塙書房

伊野近富・関廣尚世 2012『京都府埋蔵文化財情報　第 117 号』　京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊野近富・筒井崇史・村田和弘ほか 2013『京都府遺跡調査報告集』第 154 冊　京都府埋蔵文化財調査研究センター

今井晃樹・中川二美 2015「大極殿院鴟尾の検討－第一次大極殿院の復原研究 16－」『奈良文化財研究所紀要 2015』　奈良文化財研究所

岩戸晶子・堀　大輔 2009「奈良・大阪・京都における鴟尾資料集成」『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究　4　瓦・屋根』奈良文化財研究所学報第 80 冊　奈良文化財研究所

近江町教育委員会 1990『法勝寺遺跡』（近江町文化財調査報告第６集）

大津市教育委員会 1985『山の神遺跡発掘調査報告書』（大津市埋蔵文化財調査報告書９）

大津市教育委員会 1991『山ノ神遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（大津市埋蔵文化財調査報告書 17）

大津市教育委員会 2005『山ノ神遺跡発掘調査報告書Ⅲ』（大津市埋蔵文化財調査報告書 38）

大津市教育委員会 2012『山ノ神遺跡出土鴟尾調査報告書』（大津市埋蔵文化財調査報告書 64）

大津市教育委員会 2014『真野廃寺発掘調査報告書Ⅰ』（大津市文化財調査報告書 82）

大津市歴史博物館 2017『大津の都と白鳳寺院』

大脇　潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂

小笠原好彦 1989「宮井廃寺」『近江の古代寺院』　同刊行会

小笠原好彦 1989「福林寺跡」『近江の古代寺院』　同刊行会

梶川敏夫・馬瀬智光 1999「平安宮豊楽院東華堂跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成 10 年度』　京都市文化市民局

蒲生町教育委員会・滋賀大学考古学ゼミナール 1985『宮井廃寺』

蒲生町教育委員会 1989『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（蒲生町文化財資料集７）

岸本直文 1992「７世紀北山背岩倉の瓦生産」『岩倉古窯址群』　京都大学考古学研究会

京都市文化市民局 2021『京都市内遺跡発掘調査報告 令和２年度』

京都市埋蔵文化財研究所 1986「150 鴟尾」『平安京跡発掘資料選（二）』

京都市埋蔵文化財研究所 1995『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 13 冊

京都市埋蔵文化財研究所 1996『木村捷三郎収集瓦図録』

五個荘町教育委員会 1997『滋賀県神崎郡山本遺跡第３次調査』（五個荘町文化財調査報告書 33）

五個荘町歴史博物館 1999『神崎地宝』

五個荘町教育委員会 2005『滋賀県神崎郡山本遺跡第２次調査』（五個荘町文化財調査報告書 42）

坂田郡教育会 1941『改訂近江国坂田郡志第３巻上』p.853

柴田　實 1940『大津京阯（上）　南滋賀の遺蹟とその遺物』（滋賀県史蹟調査報告第９冊）

滋賀県教育委員会 1975『榿木原遺跡発掘調査報告』

滋賀県教育委員会 1978『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ』

滋賀県教育委員会 1979a『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ－４』

滋賀県教育委員会 1979b『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ－５』

滋賀県教育委員会 1981『榿木原遺跡発掘調査報告Ⅲ』

滋賀県教育委員会 1983『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ－１』

滋賀県教育委員会 1995『（仮称）滋賀県立大学整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　八坂東遺跡』

滋賀県教育委員会 2001『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』

滋賀県教育委員会 2017『県道安養寺入町線補助道路整備工事に伴う発掘調査報告書　安養寺遺跡』

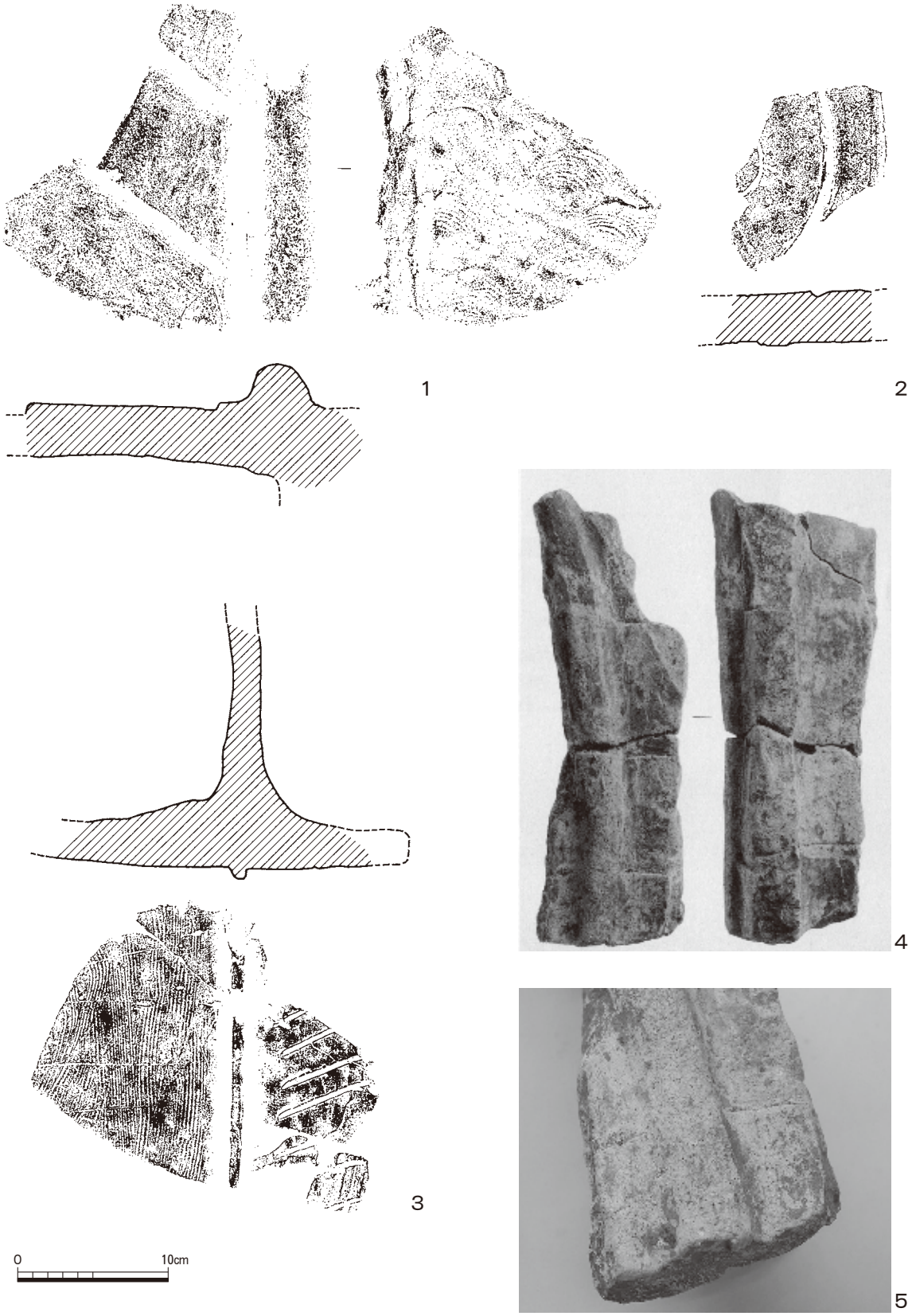
滋賀県文化財保護協会 2018a『蜂屋遺跡発掘調査現地説明会資料』

滋賀県文化財保護協会 2018b『おうみ文化財通信 vol.38』
滋賀県文化財保護協会 2019『レトロ・レトロの展覧会 2019 初夏の特別ミニ陳列 法隆寺から伝来した近江の瓦』
滋賀県立近江風土記の丘資料館 1978『'78 秋季特別展「近江の瓦」』
鈴木久男 1987「平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦聚成（本文編）』向日市埋蔵文化財調査報告書第 20 集　向日市教育委員会
鈴木久男 1995「豊楽院跡」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 13 冊
谷口　徹 1992「彦根の古代寺院（一）」『彦根城博物館　研究紀要第３号』
中主町教育委員会 1985『中主町文化財調査報告書 第３集』
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1991『飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』
西田　弘 1977「近江の古瓦Ⅱ湖西・湖北」『文化財教室シリーズ 18』滋賀県文化財保護協会
西田　弘 1988「近江の古瓦ⅩⅢ補遺１（湖西・湖北）」『文化財教室シリーズ 98』滋賀県文化財保護協会
西田　弘 1989「磯廃寺」『近江の古代寺院』 同刊行会
西田　弘 1989「手原廃寺」『近江の古代寺院』 同刊行会
能登川町教育委員会 1999『滋賀県史跡法堂寺廃寺跡－法堂寺遺跡公園発掘調査報告書』（能登川町蔵文化財調査報告書第 47 － 2 集）
林　博通 1989「大宝寺跡」『近江の古代寺院』 同刊行会
林　博通 1989「南滋賀廃寺 付 榿木原瓦窯」『近江の古代寺院』 同刊行会
林　博通 1989「穴太廃寺」『近江の古代寺院』 同刊行会
東近江市埋蔵文化財センター・帝塚山大学附属博物館 2018『東近江の古代寺院とその源流～東アジアからの道～』
彦根市 1960『彦根市史上巻』
彦根市教育委員会 1992『鳥籠山遺跡発掘調査概要報告書』
菱田哲郎 1988「鴟尾の生産と地域色－東播系と西播系の鴟尾－」『古代文化』第 40 巻第６号　古代學協會
菱田哲郎 2005「山背の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ』 奈良文化財研究所
米原町教育委員会 1988『米原町内遺跡分布調査報告書』（米原町埋蔵文化財調査報告Ⅷ）
米原町教育委員会 2010『天野川流域の古代寺院　壬申の乱から聖武行幸へ－地方寺院の役割』
前田義明 1994「中期の瓦」『平安京提要』 古代学協会・古代学研究所
丸川義広 1993『岩倉幡枝２号墳－木棺直葬墓の調査－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 12 冊
南　孝雄 2003「上ノ庄田瓦窯跡」『平成 12 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 京都市埋蔵文化財研究所
野洲市教育委員会 2005a『1995 年　埋蔵文化財調査年報』
野洲市教育委員会 2005b『平成 16 年度 野洲市内遺跡発掘調査概要Ⅱ』
吉村正親 1996「北白川廃寺塔跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成７年度』 京都市文化市民局・京都市埋蔵文化財研究所
吉本健吾 1992「栗栖野瓦窯跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成３年度』 京都市文化観光局・京都市埋蔵文化財研究所
栗東市教育委員会ほか 2011『下鈎東遺跡発掘調査報告書』（栗東市文化財調査報告書 32）
栗東町教育委員会ほか 1999『1980 ～ 1982 年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』

図版出典

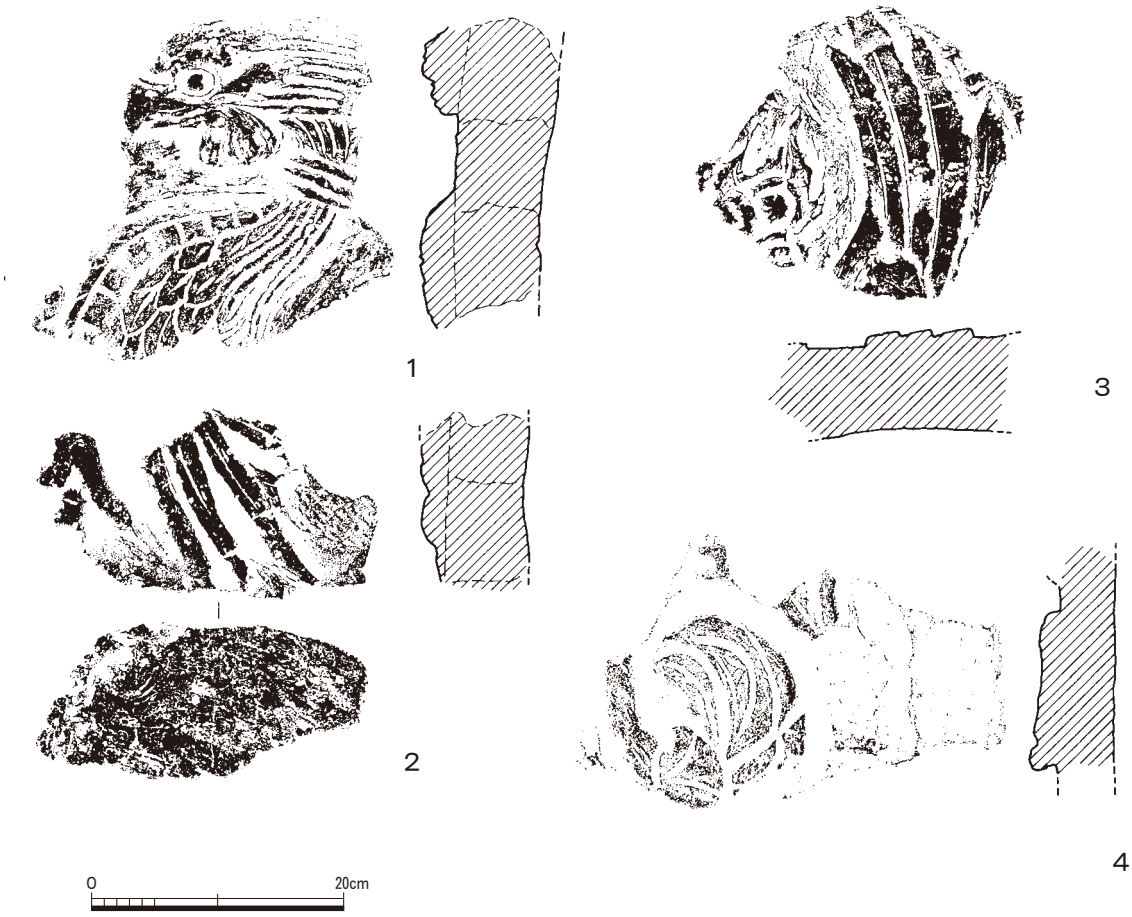
第１図１～３：京都市埋蔵文化財研究所 1996。４：吉村 1996。５：筆者撮影。
第２図１～４：京都市埋蔵文化財研究所 1996。５：京都市埋蔵文化財研究所 1995。６：奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980 を一部改変。
第３図１：筆者撮影。２：京都市埋蔵文化財研究所 1986。３・４：京都市埋蔵文化財研究所 1996。
第４図１・４・５：京都市埋蔵文化財研究所。２：梶川・馬瀬 1999。３：丸川 1993。

第５図　吉本 1992。
第６図１・２　京都市埋蔵文化財研究所 1996。３：奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980 を一部改変。
第７～９図：伊野・関廣 2012 より転載。
第 10・12・13・16・19 図：北村作成。
第 11 図：写真は北村撮影。拓本は西田 1989 より転載。
第 14 図：一部は滋賀県教育委員会 1995 より転載（断面図は北村トレース）。他は北村作成。
第 15 図：１は奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980 より転載。２は北村作成。
第 17 図：１・２の拓本。３の写真は北村作成。他は能登川町教育委員会 1999 より転載（断面図は北村トレース）。
第 18 図：拓本・写真は北村作成。断面図は五個荘町教育委員会 1997 より転載（北村トレース）。
第 20 図：蒲生町教育委員会 1989 より転載（断面図は北村トレース）。
第 21 図：拓本は北村作成。断面図は滋賀県教育委員会 2017 より転載（北村トレース）。
第 22 図：野洲市教育委員会蔵（福庭撮影）。
第 23 図：写真は福庭撮影。図は野洲市教育委員会 2005a・b より転載。
第 24 図：写真は福庭撮影。図は栗東町教育委員会ほか 1999 より転載。
第 25 図：写真は栗東市教育委員会提供。図は栗東市教育委員会ほか 2011 より転載。
第 26・34・36 図：滋賀県教育委員会蔵（福庭撮影）。
第 27 図：高浜市やきものの里かわら美術館蔵（福庭撮影）。
第 28・29 図：奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980 より転載。
第 30 図：滋賀県教育委員会 1975 より転載。
第 31 図：大津市教育委員会 2014 より転載。
第 32 図：大津市埋蔵文化財調査センター保管（福庭撮影）。
第 33 図：滋賀県教育委員会蔵・提供。
第 35 図：滋賀県教育委員会 2001 より転載。
第 37・38 図：大津市教育委員会 2012 より転載。
第 39 図：大津市・田中作成、福庭加筆。
第 40・41 図：大津市教育委員会 2005 より転載。
第 42 図：福庭作成。

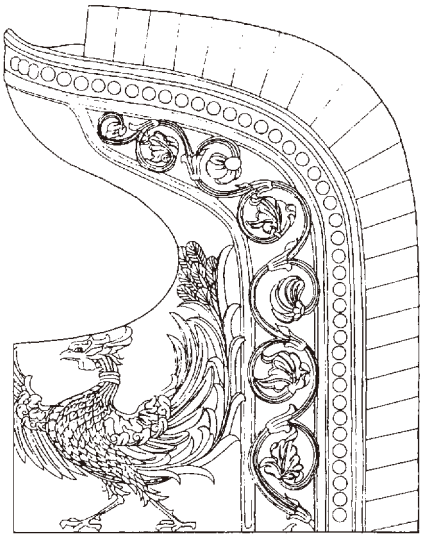


第１図　白鳳期の鴟尾（１～３＝１：４）

１・２　法琳寺　３　木野墓窯　４・５　北白川廃寺塔跡



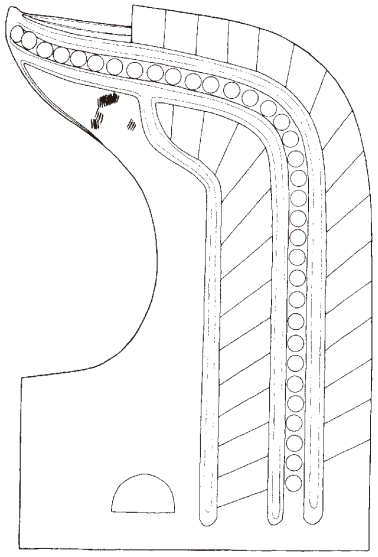
5


6

第２図　平安時代の鴟尾（A 類）（１～４＝１：６）

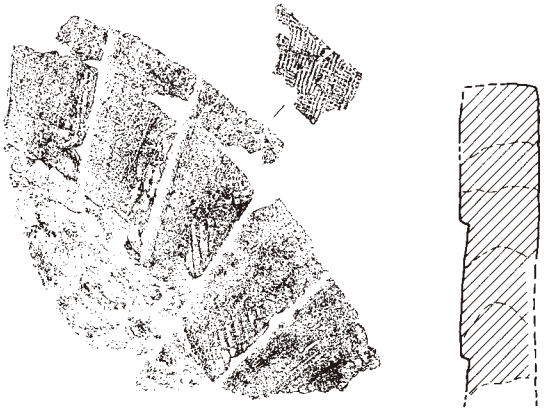
１～３　上ノ庄田瓦窯　４　幡枝西窯　５　豊楽殿　６　上ノ庄田瓦窯出土鴟尾復原例

1

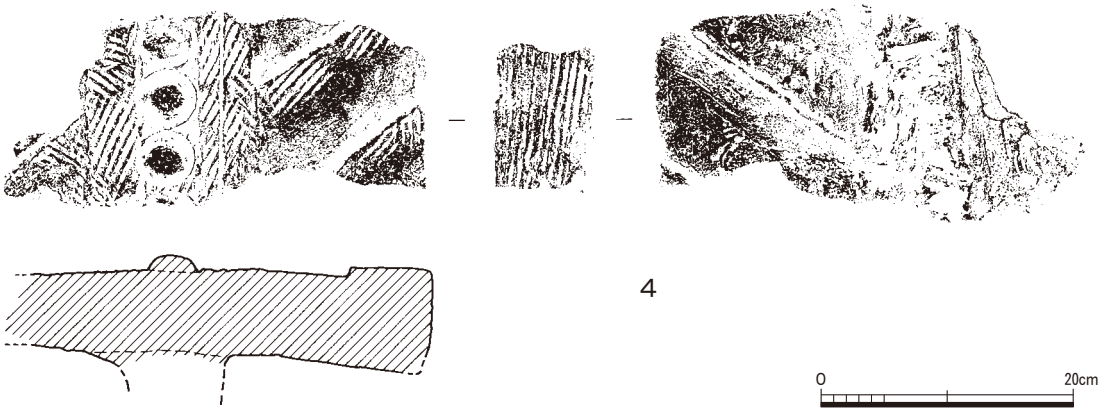


2

0　50cm



3

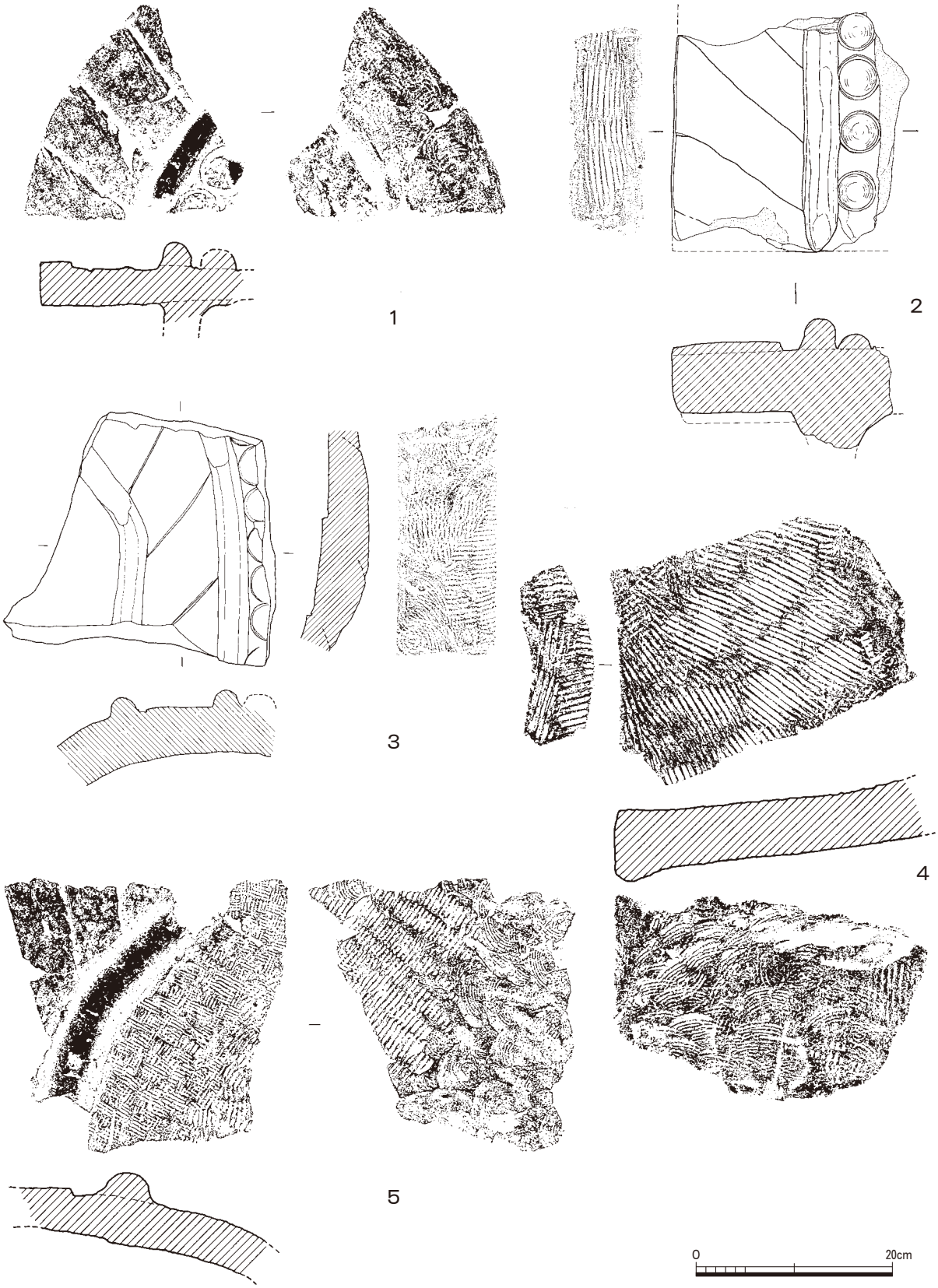


4

0　20cm

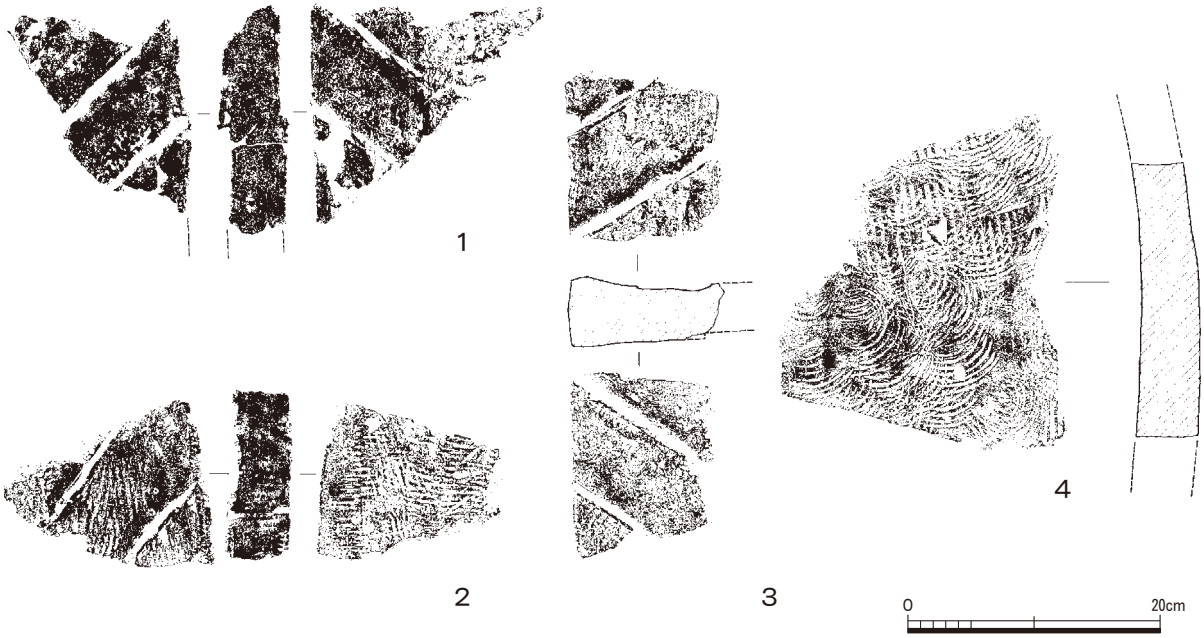
第３図　平安時代の鴟尾（B 類）（２＝１：20　３・４＝１：６）

１　高陽院　２　太政官出土鴟尾復原図　３・４　上ノ庄田瓦窯



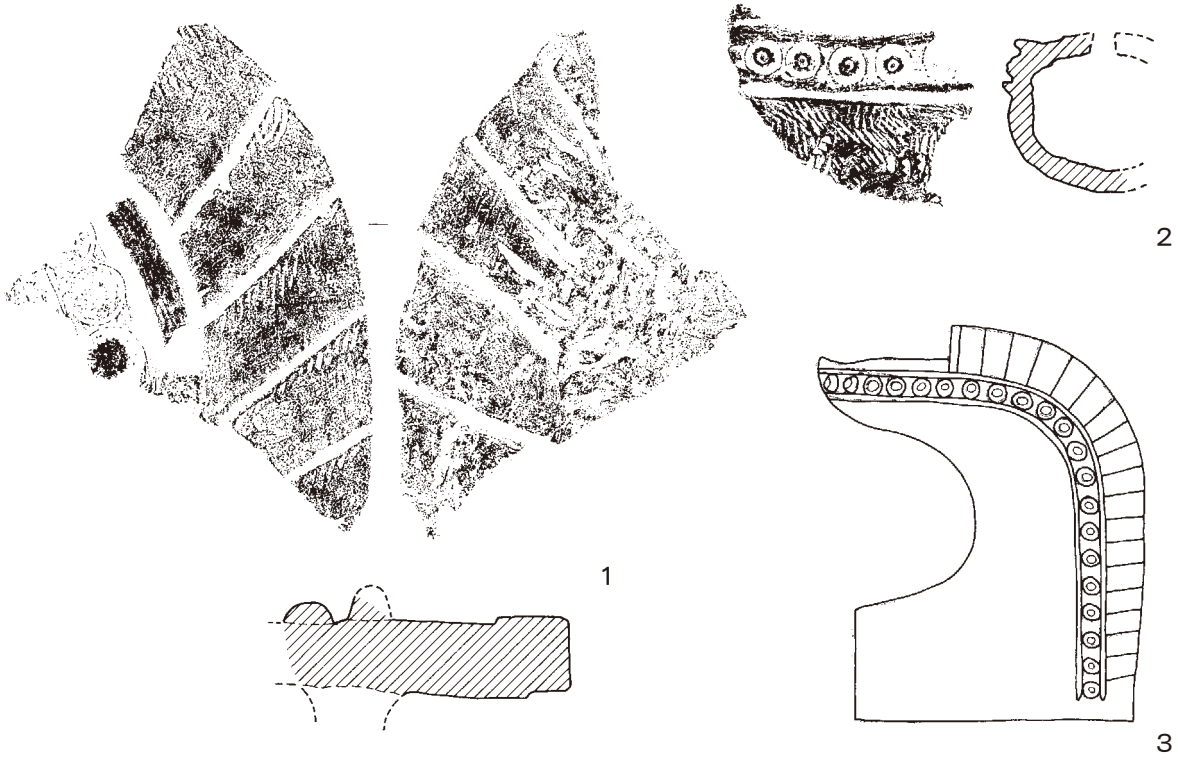
第４図　平安時代の鴟尾（１：６）

１・４・５　上ノ庄田瓦窯　２　豊楽殿　３　南ノ庄田瓦窯



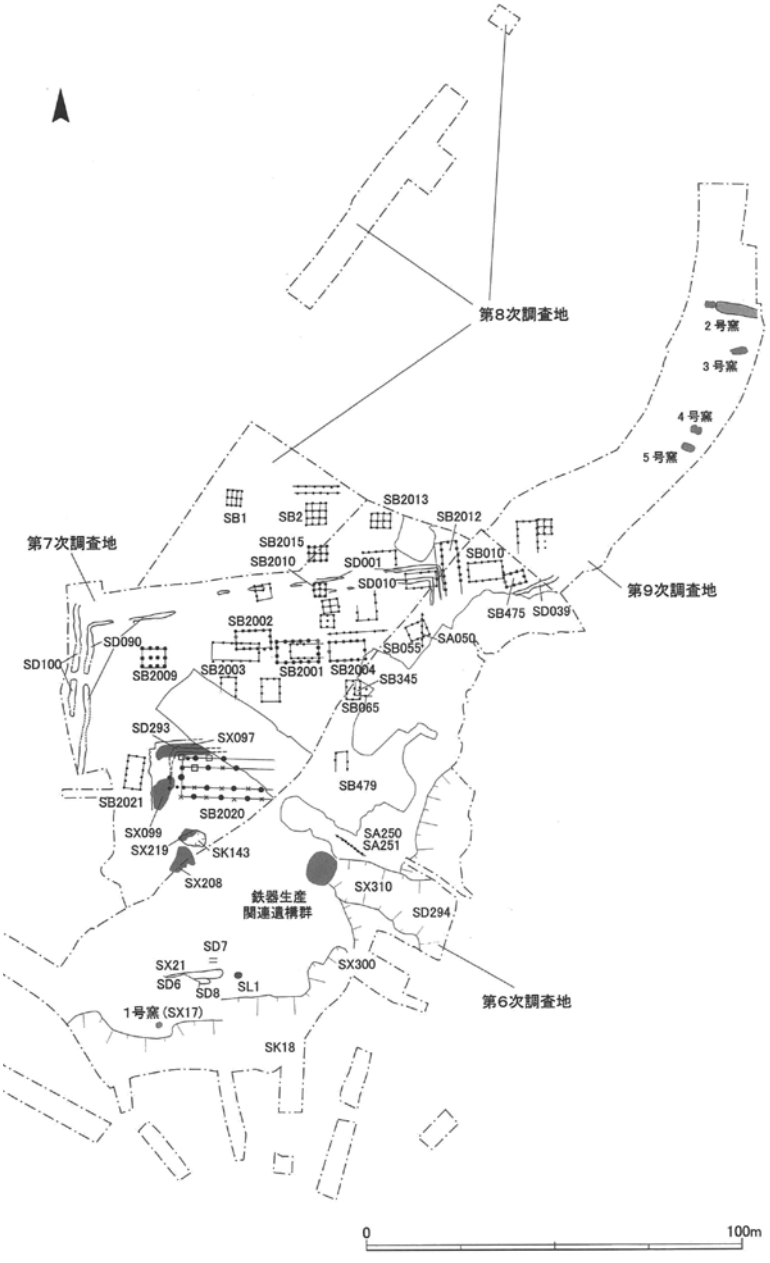
第５図　平安時代の鴟尾（１：６）

１～４　栗栖野瓦窯

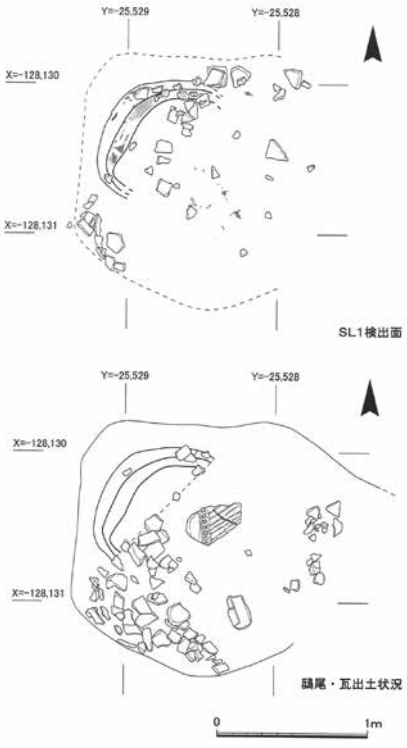


第６図　平安時代の鴟尾（C 類）（１～２＝１：６）

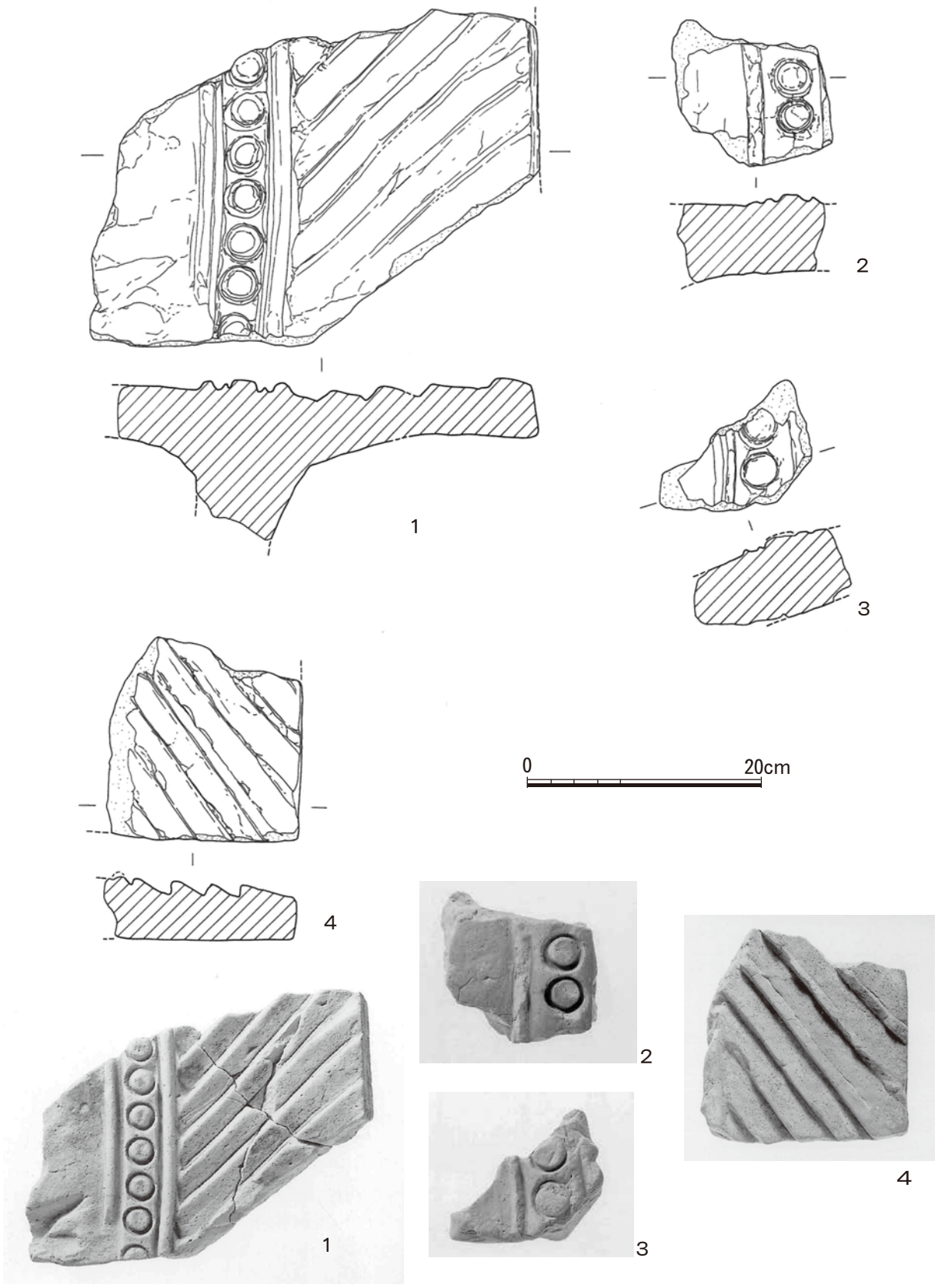
１・２　幡枝西窯　３　幡枝西窯出土鴟尾復原図



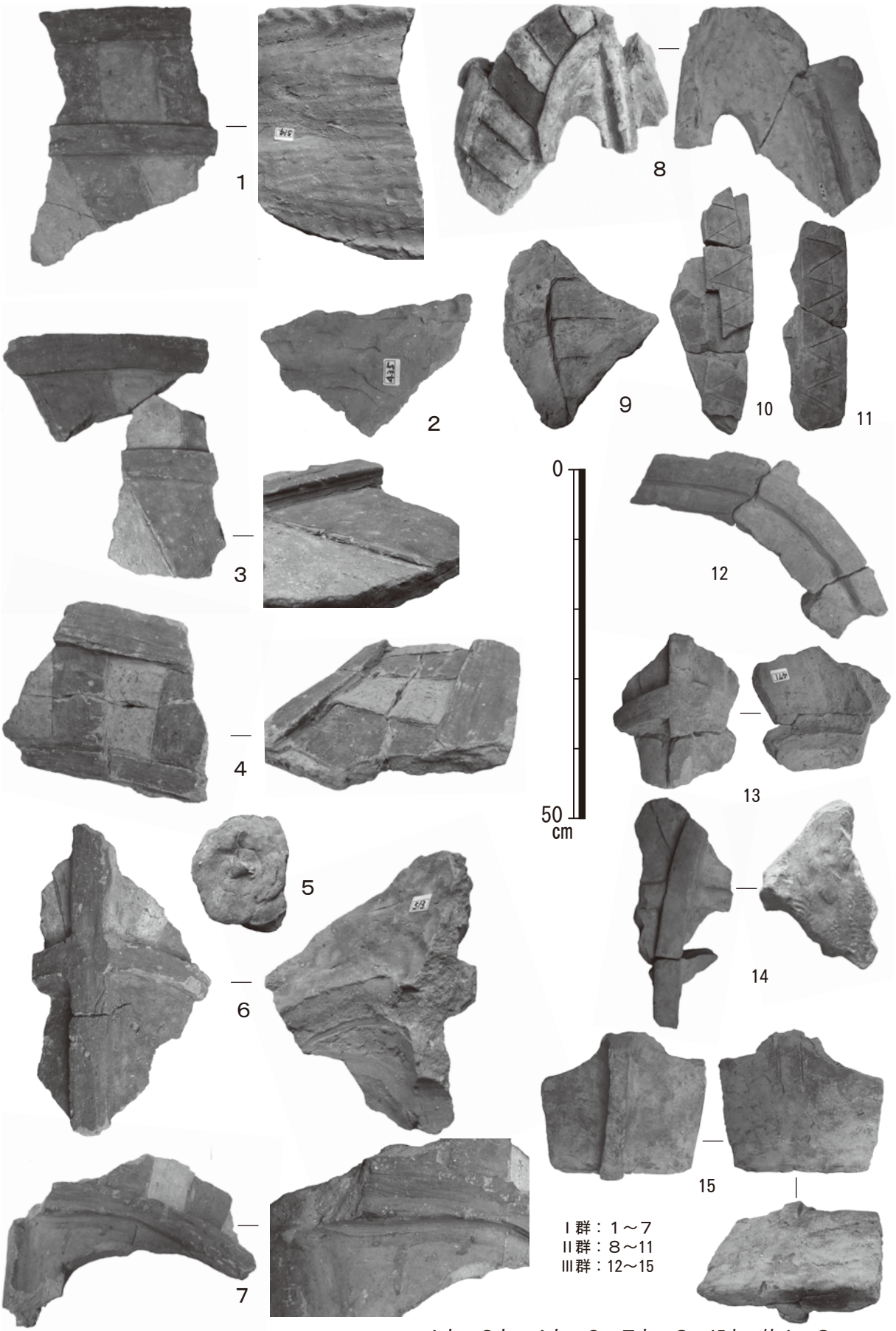
第７図　美濃山廃寺調査区配置図（１：2,000）



第８図　落ち込みSX20平面図（１：50）

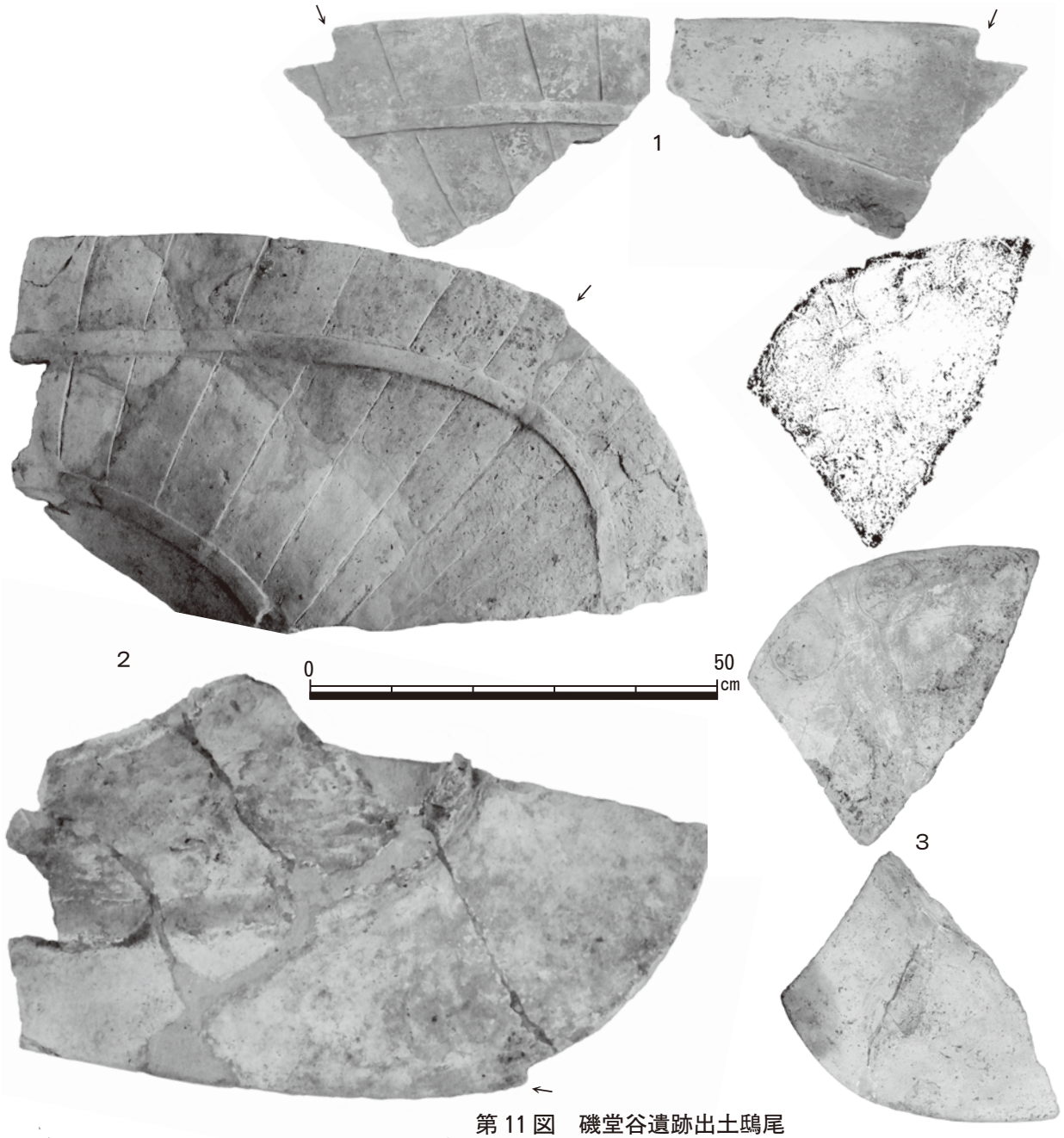


第９図　美濃山廃寺出土鴟尾（１：５）

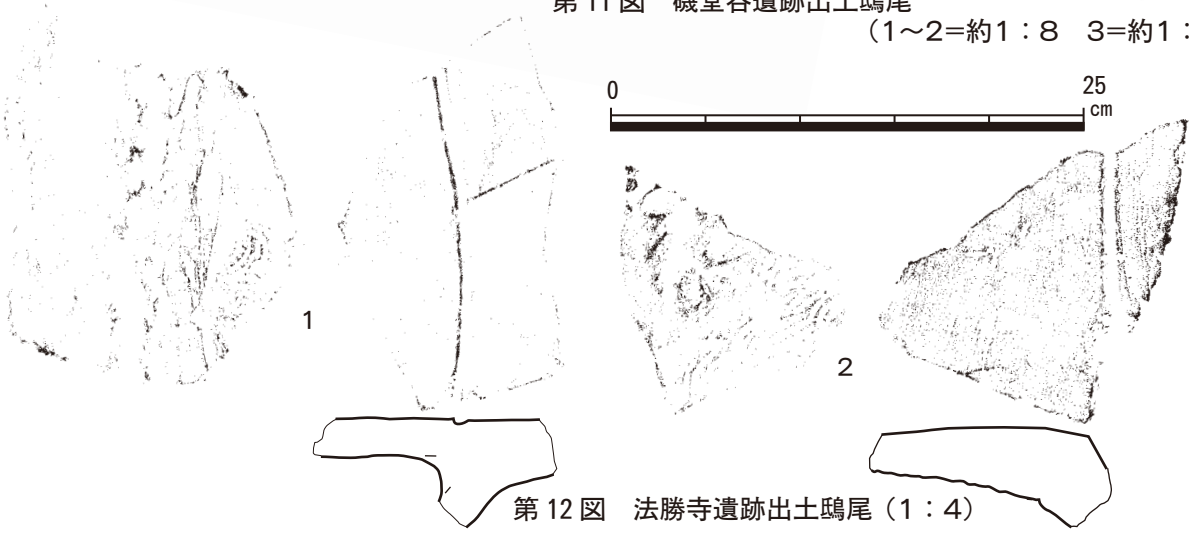


第 10 図　大宝寺遺跡出土鴟尾

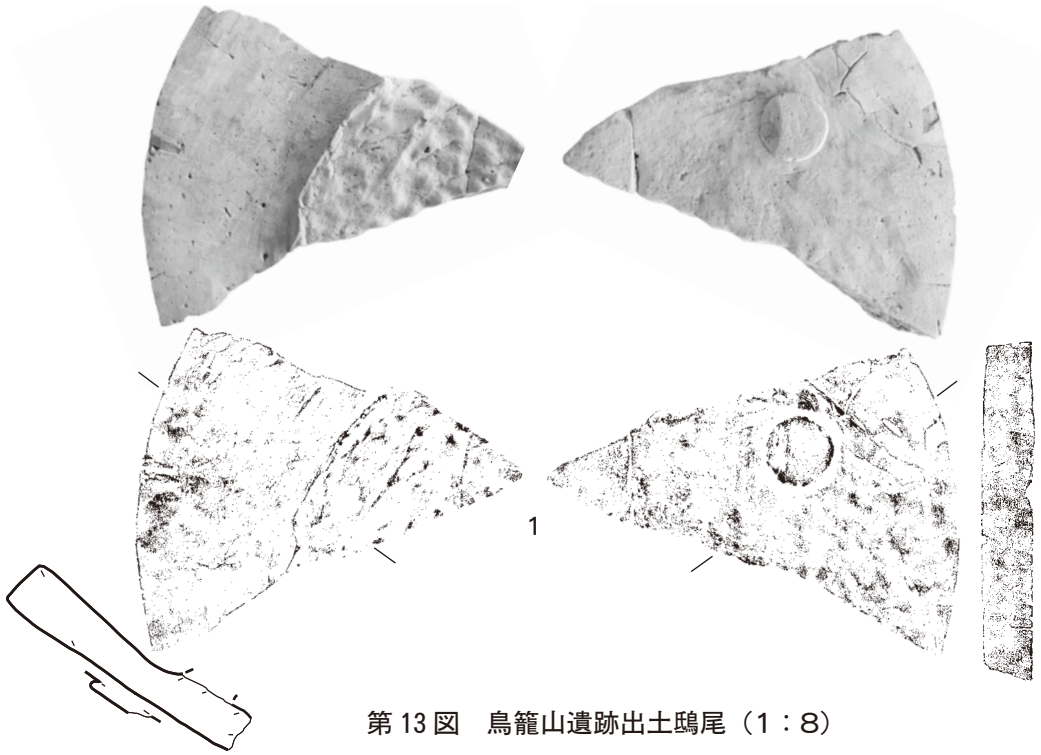
１左・３左・４左・６・７左・８～15上＝約１：８



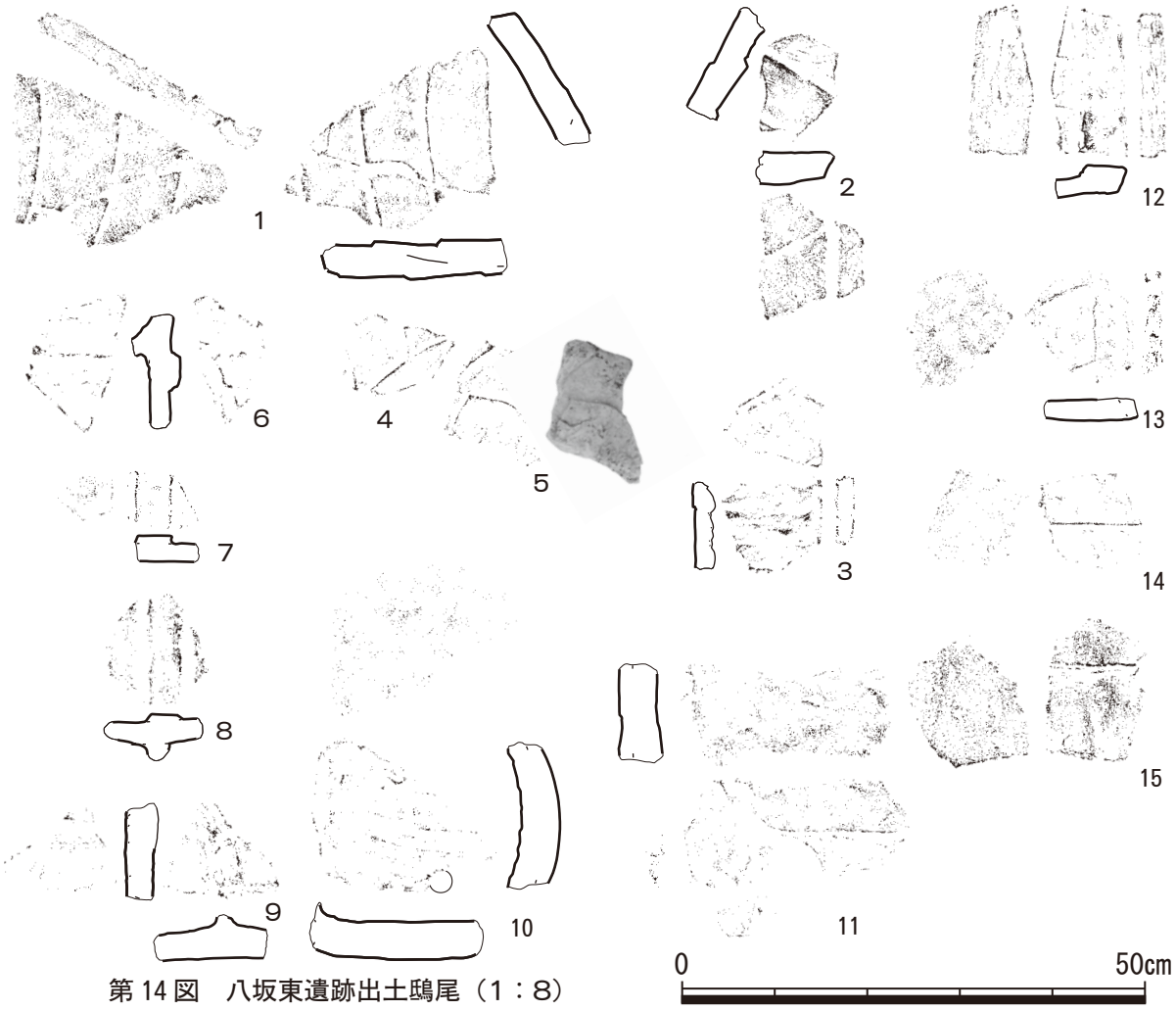
第 11 図　磯堂谷遺跡出土鴟尾
（1～2=約1：8　3=約1：4）



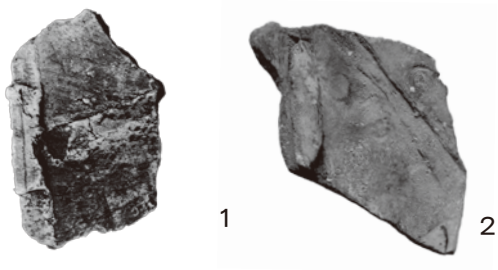
第 12 図　法勝寺遺跡出土鴟尾（1：4）



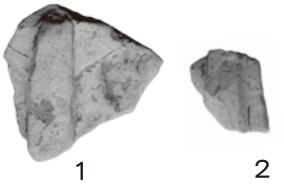
第 13 図　鳥籠山遺跡出土鴟尾（1：8）



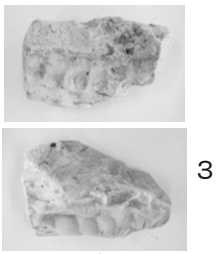
第 14 図　八坂東遺跡出土鴟尾（1：8）

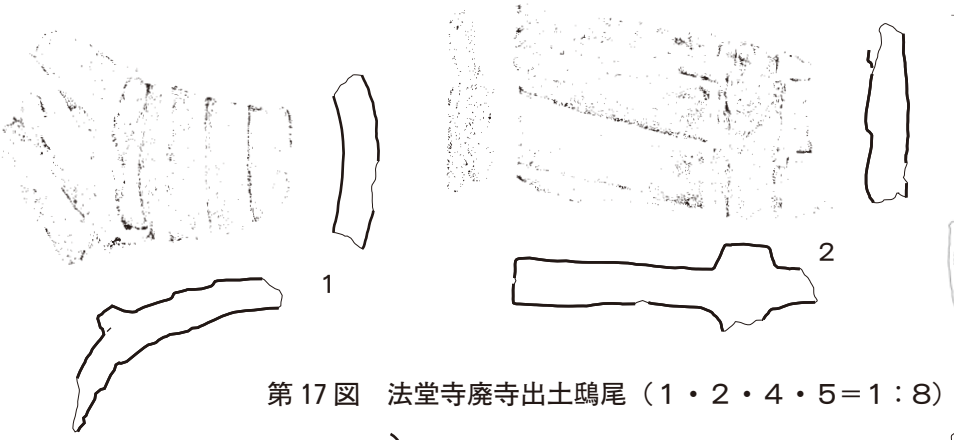


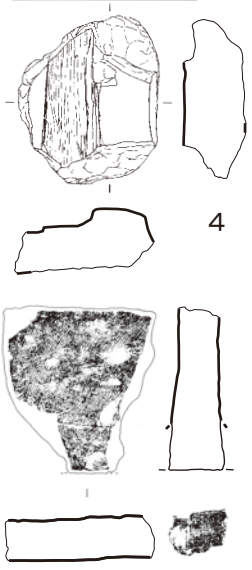
第 15 図　塔ノ塚廃寺出土鴟尾



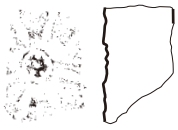
第 16 図　野々目廃寺出土鴟尾

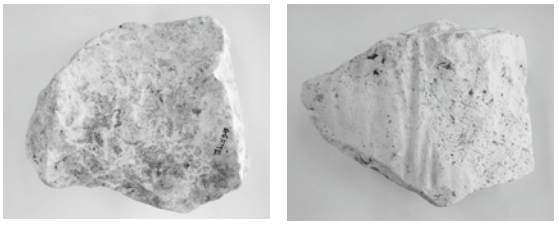




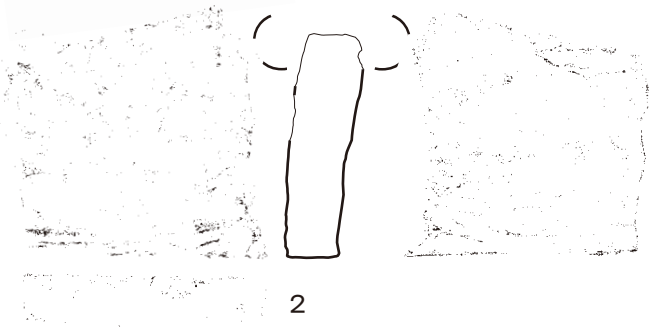


第 17 図　法堂寺廃寺出土鴟尾（1・2・4・5＝1：8）

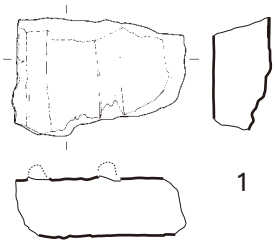




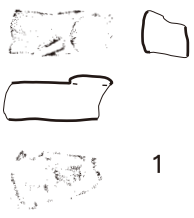
第 19 図　宮井廃寺出土鴟尾（1：8）



第 18 図　山本遺跡出土鴟尾　（1：8）

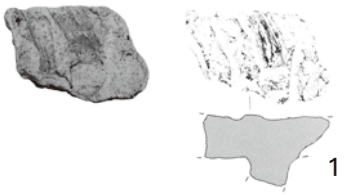


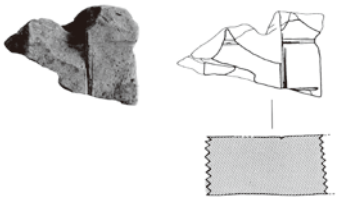
第 20 図　野瀬遺跡出土鴟尾　（1：8）



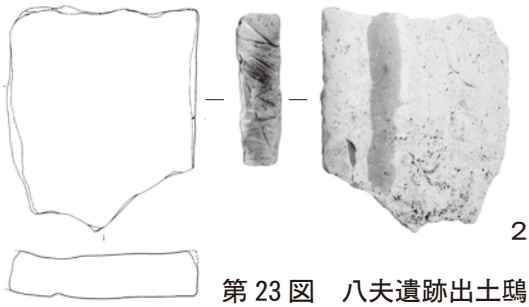
第 21 図　安養寺廃寺出土鴟尾　（1：8）

第 22 図　福林寺遺跡出土鴟尾（１：８）

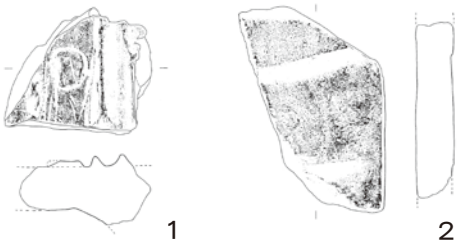




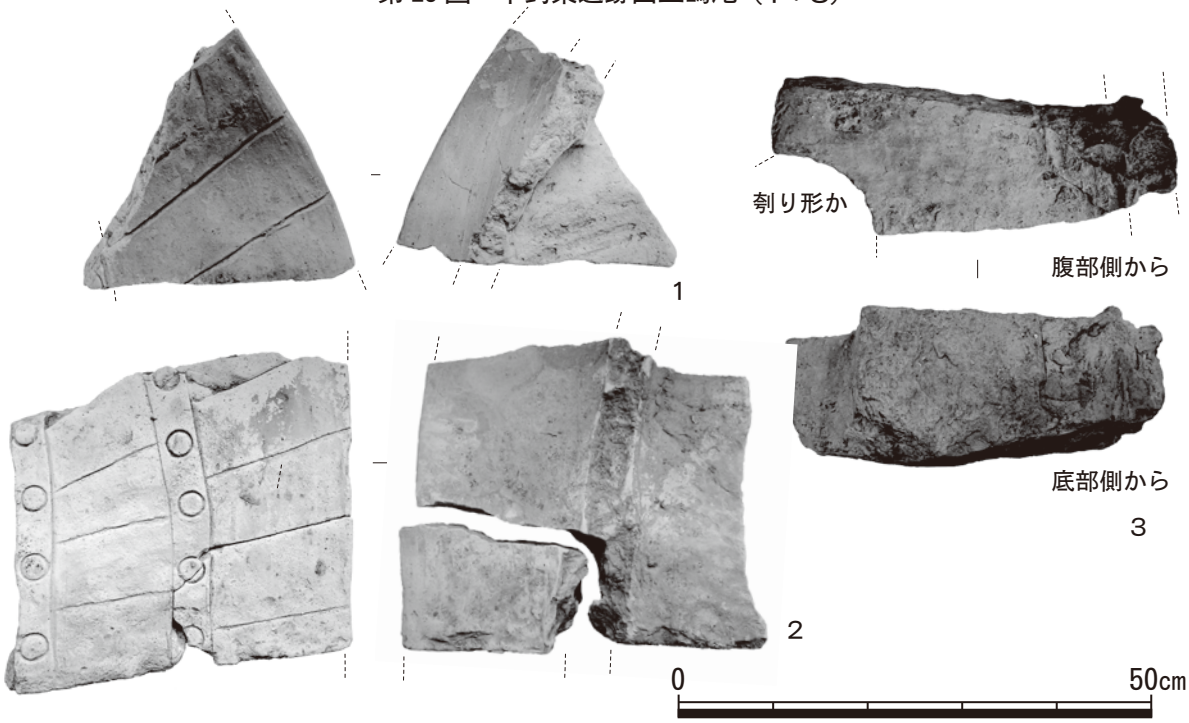
第 24 図　手原遺跡出土鴟尾（１：８）



第 23 図　八夫遺跡出土鴟尾（１：８）

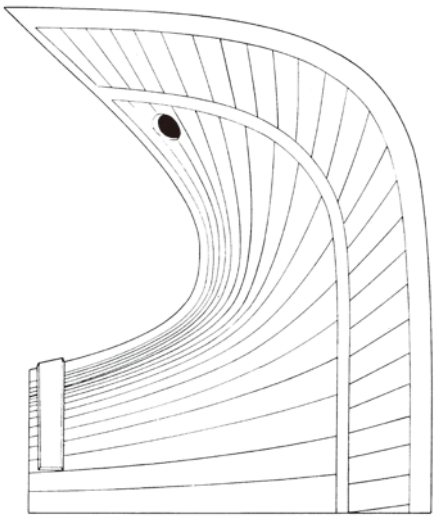


第 25 図　下鈎東遺跡出土鴟尾（１：８）

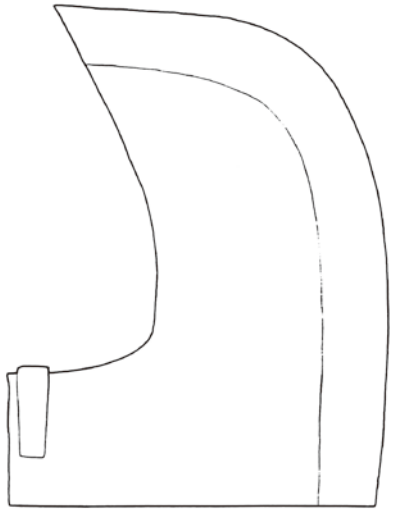


第 26 図　蜂屋遺跡出土鴟尾（１：８）

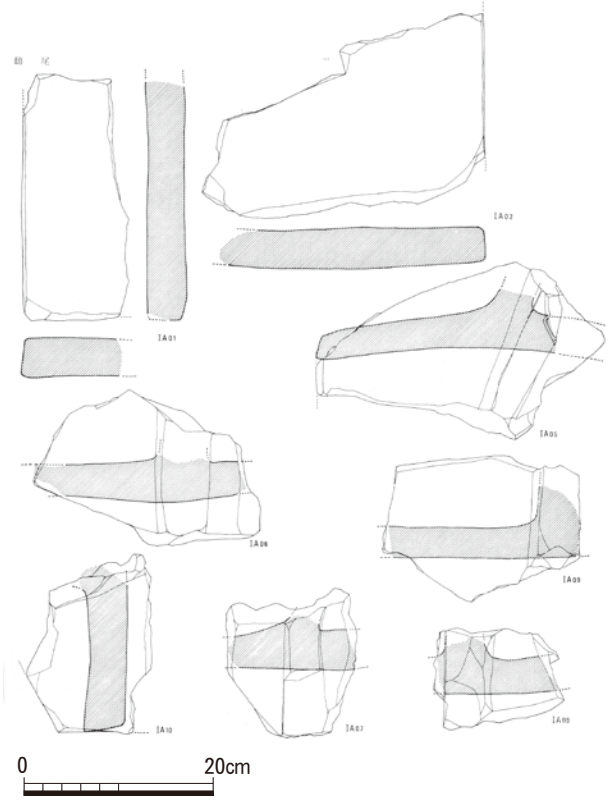
第 27 図　伝南滋賀町廃寺出土 鴟尾（A）頂部



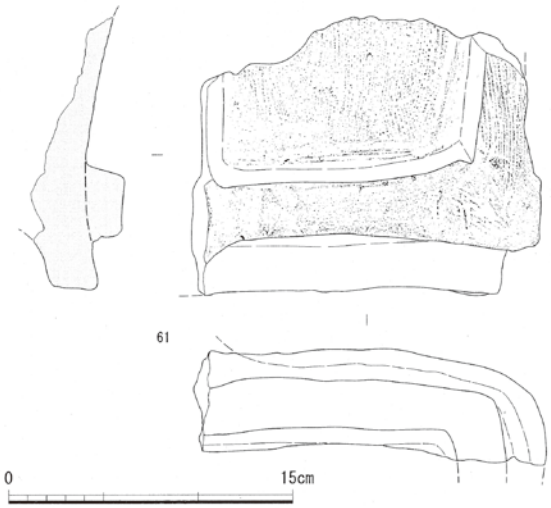
第 28 図　南滋賀町廃寺 鴟尾 A 復元図



第 29 図　南滋賀町廃寺 鴟尾 B 復元図



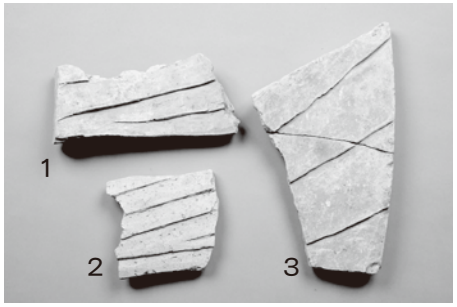
第 30 図　榿木原遺跡出土鴟尾（1：8）



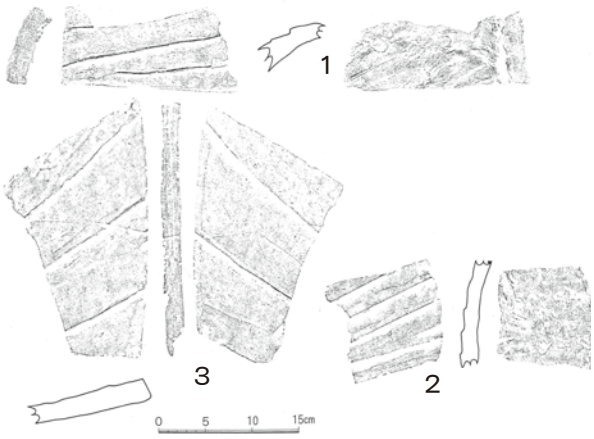
第 31 図　真野廃寺出土鴟尾（1：4）

第 32 図　真野廃寺出土鴟尾

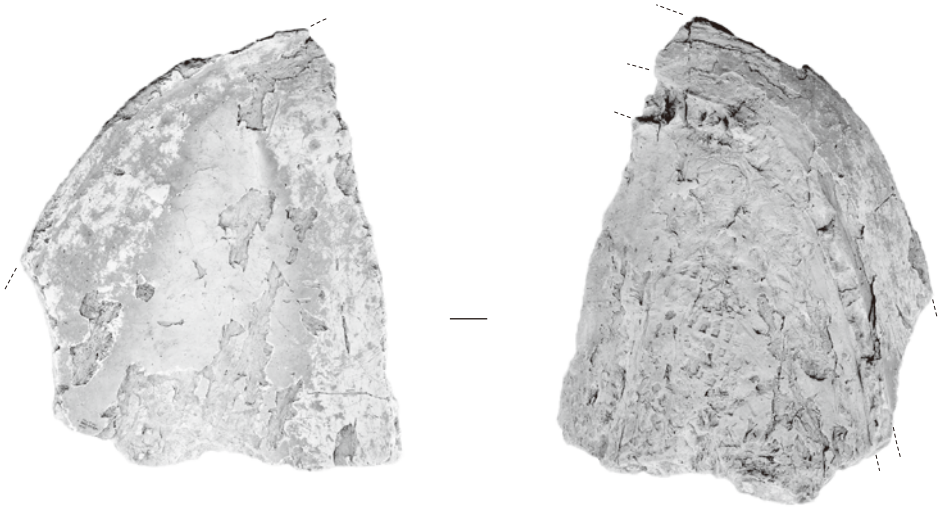
第 33 図　穴太廃寺出土復元鴟尾（A）



第 34 図　穴太廃寺出土鴟尾（A）

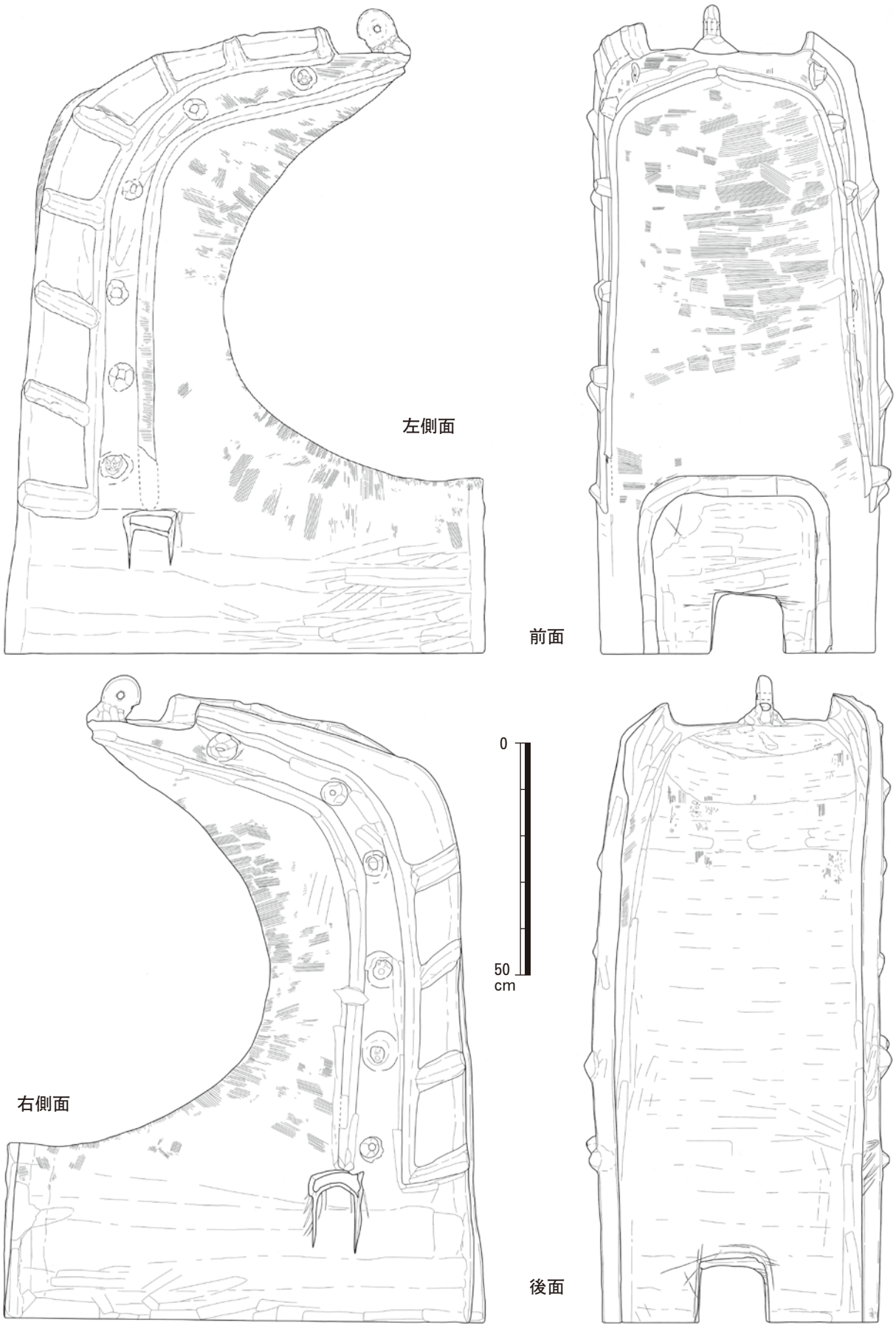


第 35 図　穴太廃寺出土鴟尾（A）（1：8）

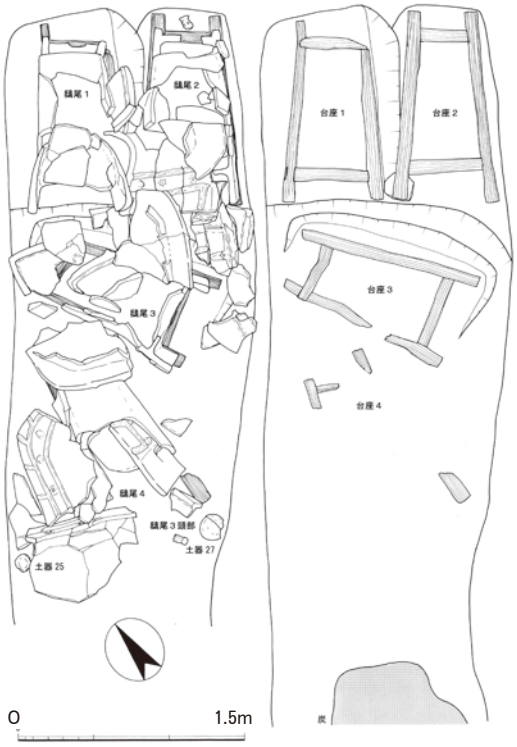


外面　　内面

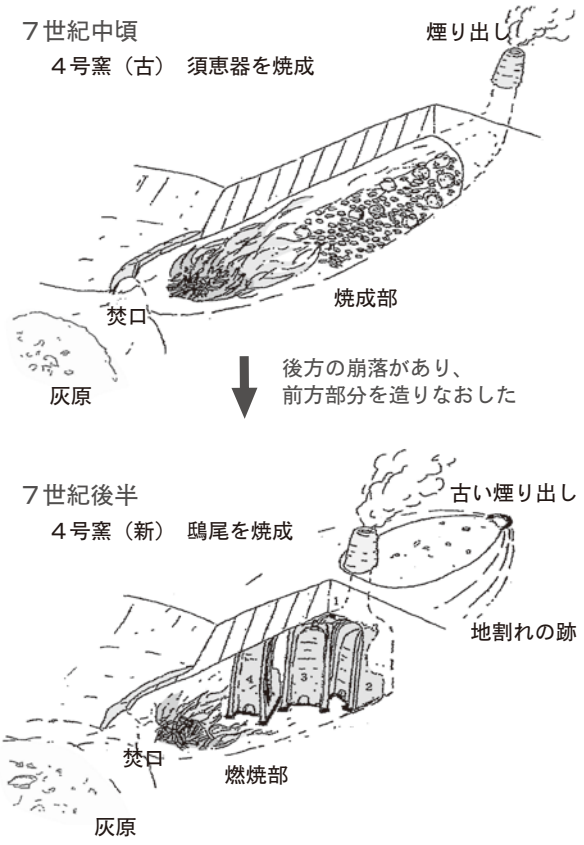
第 36 図　穴太廃寺出土鴟尾（B）



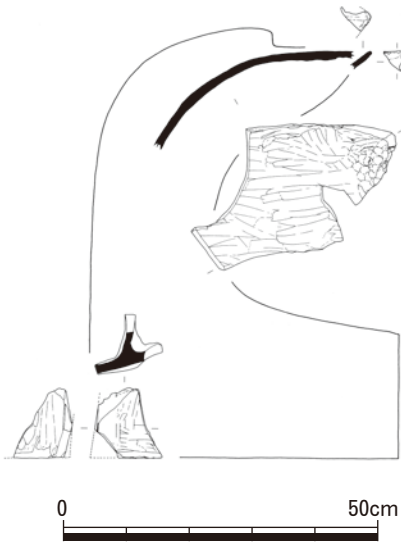
第 37 図　山ノ神遺跡出土 鴟尾３（1：12）



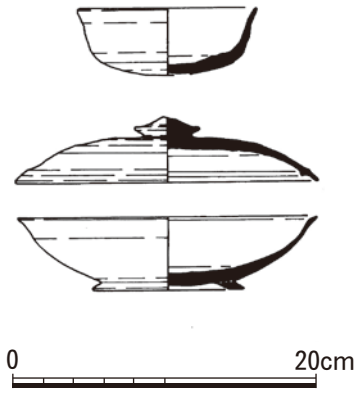
第 38 図　鴟尾（４号窯跡）出土状況（1：50）



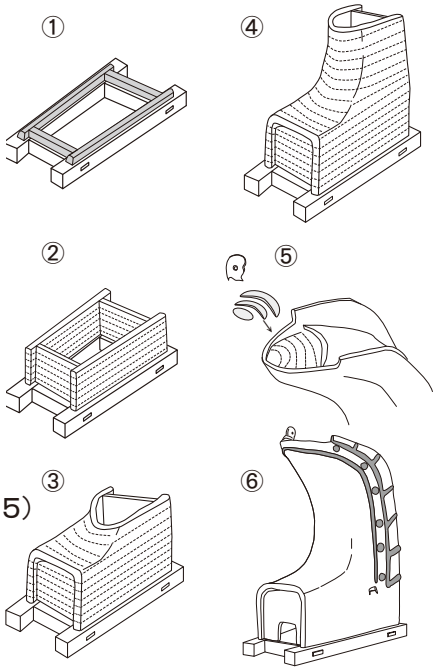
第 39 図　山ノ神遺跡４号窯の変遷復元図



第 40 図　山ノ神遺跡出土小型鴟尾（1：12）



第 41 図　山ノ神遺跡
４号窯（新）床面出土土器（1：5）



第 42 図　山ノ神遺跡出土鴟尾　製作工程復元図

3　大阪・和歌山の鴟尾

丸山　香代

A　はじめに

大阪府下では摂津・河内・和泉のいずれの地域においても古代寺院が数多く建立されている。しかし、その中でも鴟尾の出土が確認できた遺跡は 32 遺跡である。以下、摂津・河内・和泉の順で地域ごとに出土した資料の特徴を見ていく。なお、型式や資料番号については本誌掲載の鴟尾出土一覧表と対応している。参考文献を含めてそちらを参照されたい。

B　摂津の鴟尾

摂津地域では、上町台地上に位置する難波宮跡、四天王寺、細工谷遺跡から鴟尾が出土している。以下、時期別にその特徴を見ていく。

ⅰ　飛鳥時代

飛鳥時代に属するものは難波宮跡、四天王寺で出土している。

難波宮跡　難波宮下層遺跡で出土している。胴部、鰭部ともに無文で縦帯を持たない。

四天王寺　胴部と鰭部内外面にかけて正段を削り出す鴟尾と、無文の鴟尾が出土している。段をもつ鴟尾については、縦帯をもたない A 型式と、断面方形の縦帯をもつ B 型式がそれぞれ確認されている。無文の鴟尾（D 型式）は胎土や焼成、厚みなどにおいて、難波宮下層遺跡出土例と類似している。

ⅱ　白鳳時代

白鳳時代に属するものは難波宮跡、四天王寺、細工谷遺跡で出土している。

難波宮跡　特殊な例として、ミニチュア品とみられる資料が出土している。胴部、鰭部内側は無文で、鰭部外側には正段を削り出す。腹部には羽根状の文様を持つ。復元高約 17cm、基底部長約 10.5cm で、鴟尾に用いられた可能性が指摘されている。

四天王寺　当該期の資料として、沈線で段を表現する C 型式、蓮華文帯鴟尾の E 型式がある。いずれも講堂で出土している。E 型式は胴部にヘラ描きによる唐草文を描き、２条の貼り付け突帯で区画された縦帯の内側に貼り付け蓮華文を配する。E 型式の蓮華文の笵型は２種類（笵型 a・b）が確認されている。同笵の蓮華文を配置した鴟尾が兵庫県打越窯で出土している。また、近年の再整理から、胴部に削り出し正段を持つ F 型式が確認された。これは中門で使用されたと考えられる。

細工谷遺跡　細工谷遺跡では寒風窯系（ⅠＡ型式）と打越窯系（ⅡＡ型式）の２種類の鴟尾が出土している。Ⅰ Ａ型式は鰭部の内側に斜格子タタキ、外側に葉状文を持ち、幅約2.4cmの削り出し縦帯、頭部に庇を持つ。Ⅱ Ａ型式は鰭部に正段を削り出し、蓮華文帯による縦帯を持つ。Ⅱ Ａ型式の蓮華文は四天王寺Ｅ型式の蓮華文（b）と同笵の可能性がある。

ⅲ　奈良時代

難波宮跡　後期難波宮に関わる資料（Ｃ型式）が出土している。胴部、腹部ともに欠損しているが、鰭部内側には逆段、外側には正段を削り出す。縦帯は断面半円形の突帯で、外郭に連珠文、内郭に浮彫唐草文を配する複帯構成をとる。これと同一型式と考えられている頂部片が一点出土している。この頂部片には口径約５mmの方形の穴が10～11個穿たれており、棒状の鳥よけである「拒鵲」をつける穴と考えられている。

摂津地域の資料のうち産地が分かる例として、まず、四天王寺講堂跡出土の沈線文鴟尾（Ｃ型式）が兵庫県明石市の高丘窯系、蓮華文帯鴟尾（Ｅ型式）が姫路市打越窯系である。また、細工谷遺跡のⅠ Ａ型式は寒風窯系、Ⅱ Ａ型式は四天王寺Ｅ型式と同様、打越窯系と判断される。このように、地方窯で制作された鴟尾の搬入が確認できる。後述するが、楠葉・平野山瓦窯から四天王寺への供給も明らかになっている。

Ｃ　河内の鴟尾

河内地域は府内でも特に出土例が多く、22遺跡で鴟尾が出土している。そのうち、衣縫廃寺跡（飛鳥時代）、高宮廃寺跡、田辺遺跡（白鳳時代）、由義寺跡（奈良時代）の鴟尾については破片資料のため、詳細不明である。また、龍泉寺でも、新堂廃寺跡や衣縫廃寺出土鴟尾のように、古式とみられる薄手の鴟尾が存在するとされているが、詳細不明のため、一覧表からは除いている。

ⅰ　飛鳥時代

野中寺　野中寺旧伽藍跡では鰭部の破片が確認されている。鰭部は正段を削り出し、縦帯は１条の突帯を残している。

新堂廃寺跡　当該時期とみられる鴟尾は４個体分（Ⅰ～Ⅳ型式）が確認されている。胴部・鰭部ともに厚さが２cm以下とかなり薄手に作られている。鰭部と胴部に幅の狭い正段を削り出し、Ⅰ型式が不明であることを除いて鰭の裏面にも段を削り出していることが確認されている。いずれも胴部と鰭部の段は互い違いになるように配置されており、その段のくい違いによって胴部と鰭部を明示するⅡ型式と、細い縦帯をもつⅠ・Ⅲ・Ⅳ類が存在する。

楠葉・平野山瓦窯　生産遺跡での出土事例として京都府八幡市と大阪府枚方市の境に位置する楠葉・平野山瓦窯が挙げられる。５個体分が確認されているが、確認されている破片は正段で削り出し突帯の縦帯を持つ型式がほとんどである（Ａ～Ｄ型式）。Ｃ型式は胴部から鰭部にかけて削り出し正段を持ち、厚さが薄く、胴部に半円形の透かし穴がある。Ｂ、Ｃ型式は四天王寺中門出土の資料と類似しており、創建時に供給されたものと考えられる。Ｅ型式だけが胴部から鰭部にかけて逆段を削り出しており、縦帯は２条の削り出し突帯の間に逆段を配する。

ⅱ　白鳳時代

白鳳時代に属するものは、16 遺跡で確認されている。

中山観音寺跡　鰭部および縦帯付近の破片が３点が出土しており、いずれも同一個体の資料である。鰭部の段および縦帯は沈線で表現されている。胴部は無文とみられる。縦帯付近の破片は下り棟の丸瓦を納める透かし穴を残している。

正法寺跡　１点が出土している。鰭部から縦帯、胴部を残す破片で、胴部と鰭部には縦帯を削り出している。縦帯は貼り付け突帯である。

河内寺廃寺跡　１点が採集されている。鰭部の破片で外面に削り出し正段を持つ。

渋川廃寺　西大溝から破片がまとまって出土している。いずれも同一個体とみられる。胴部は無文で、鰭部の段および縦帯は沈線で表現する。縦帯の真裏で腹部が取り付く。

大県南廃寺（山下寺跡）　３点の破片が出土しており、いずれも同一個体である。縦帯の破片が確認されており、棟上の丸瓦を納める半円形透かしが残っているほか、直径約４cm の輪郭のみを印刻した円文を配する（第１図－１）。

太平寺廃寺（智識寺跡）　太平寺廃寺出土とされる大型の破片が確認されている。複帯構成の縦帯をもつことがわかっており、断面半円形の突帯を２条貼り付けて、その内側に葡萄唐草文を立体的に表現する（内郭）。その後方に直径約５cm の連珠文を貼り付けた痕跡が残っている（外郭）。胴部は無文で、鰭部は残存していない。

高井田廃寺（鳥坂寺跡）　高井田廃寺（鳥坂寺）ではＡ～Ｅ型式が確認されている。Ａ型式は胴部と鰭部内側が無文で、鰭部外側に削り出し正段を持つ。縦帯は断面方形の削り出し突帯を３条設定することで複帯構成をとり、内郭には削り出し正段、外郭には削り出した連珠文を配置する。腹部は中央の上下に複弁蓮華文を貼り付け、基底部中央には半円形の刳り形を備える。Ｂ型式は側面の意匠はＡ型式に類似しているが、腹部の様相が異なり、湾曲した段型状文様を持つ。Ｃ型式は胴部が無文で鰭部に削り出し正段を持つ。縦帯は断面方形の貼り付け突帯を１条巡らせる。厚さや調整方法によって細分されている（第１図－２）。Ｅ型式は胴部のみが確認されているが、沈線で段を表現している。Ａ～Ｄ型式が唐様式の鴟尾であるのに対し、Ｅ型式は百済系の様式を呈している（第１図－３）。

拝志廃寺　拝志廃寺からは鰭部片が一点出土している。正段を削り出し、その各段に直径

約３cm のコンパス文が２個以上横並びで配置されている（第１図－４）。

野中寺跡　頂部先端で左右両側面の鰭部が交わる部分と脊稜の一部、底部が見つかっている。鰭部には正段を削り出している。

西琳寺　３個体分の鴟尾片が確認されている。１は胴部に羽根形文様を施し、縦帯は削り出し突帯である。２は胴部が明らかとなっていないが、鰭部に削り出し正段を持ち、縦帯も削り出しによる突帯である。胴部外面や接地面に粗い布目痕跡を残している。３は完形復元されている資料である（第１図－５）。頭部から胴部後方に向かい約 24cm の範囲で削り出し正段を施し、帯状を呈する削り出しの段を１段挟み羽根状の文様、そしてさらに後方に火炎文を削り出す。両側面の下方に半円形の透かしを持つ。縦帯をもたず、胴部と鰭部の区画は段を削り出すことによって表現する。鰭部は削り出し正段を持つ。腹部は上部から火炎宝珠、火炎文とそれに接続する変形曲線、側視形蓮華文を飾る。腹部下方には、鰭部と接続するように庇状の部位が取り付き、基底部には半円形の刳り形（横幅約 17cm、高さ約 10cm）を持つ。

埴生廃寺（善正寺跡）　２個体分の鴟尾片が確認されている。１は胴部が無文で鰭部に削り出し正段を持つ。縦帯は削り出し突帯を２条１組として２列配し、その内側に連珠文を配する。また頂部付近から脊稜に沿って断面半円形の削り出し突帯が１条めぐる（第２図－１）。２は胴部に削り出し正段を持つ資料で、頭部中央には方形の透かし穴の一部が確認できる。基底部に布目圧痕が残る。

細井廃寺　２型式（Ａ・Ｂ）が確認されている。Ａは胴部に二重の花弁に近い形を呈した沈線による羽根形文を飾る。鰭部内側は削り出し逆段、外側は削り出し正段を持つ。腹部には沈線による剣頭文風に変化した羽根形文を配する（第２図－２）。縦帯の破片を欠く。Ｂは胴部から鰭部の破片で、Ａと同じ特徴を持つが、焼成が異なる（第２図－３）。

新堂廃寺跡　Ⅴ～Ⅶの３型式が当該時期の資料である。Ⅴ型式は鰭部の内外ともに正段を持ち、縦帯は低い突帯で表現される。鰭部の出と胎土に含まれる長石の含有量の違いによってⅤａ～Ⅴｃに細分されている。Ⅴａは縦帯上面にヘラ書きが見られる。腹部が縦帯のやや後方で取り付く。Ⅵ型式は鰭部外側の正段の幅の違いによってⅥａ・Ⅵｂに細分されているが、同一個体である可能性も同時に提示されている。縦帯には直径３cm の半円形が取り付く。Ⅶ型式は胴部の段が他と比べ比較的細く、縦帯に向かって巻き込むように施されている。腹部の取り付き部分は縦帯のほぼ真裏にあたる。

太井遺跡　当該期の寺院以外での鴟尾の出土例としては太井遺跡がある。黒山廃寺に隣接し、７世紀末から８世紀初めころの掘立柱建物群と鋳造工房と考えられる遺構も検出されている。鴟尾は溝から出土したもので、縦帯部分の破片と考えられる。縦帯は粘土帯を貼り付けたもので、縦帯から斜め後方に粘土帯を貼り付けており、鰭部の段を表現していると思われる。また、破片の裏側には突起が残っており、丸瓦の刳り形を覆う庇と考えられる。しかし破片資料であるため鴟尾と断定することはできない（第２図－４）。

ⅲ　奈良時代

奈良時代に属する鴟尾は４遺跡で確認されている。

百済寺跡　百済寺跡ではこれまでの調査で合計 19 点が出土しているが、いずれも破片資料である。その内、同一個体であるかは不明だが、１～７型式に分けられ、うち３・４型式は詳細がわかっている。３は胴部を沈線による蕨手状唐草文で飾り、鰭部は内側、外側ともに削り出し正段を持つ。縦帯は断面方形でその上面に貼り付け連珠文を配する（第２図－５）。４は鰭部のみの資料であるが、内外ともに削り出し正段である。

黒山廃寺　黒山廃寺では縦帯部分のみが確認されている。断面半円形の突帯の間に連蓮文を配置する。

萱振遺跡　萱振遺跡では当該期のものとみられる鴟尾片が出土している。中世の井戸に転用されていたもので､隣接する西郡廃寺所用と考えられる。縦帯の一部が確認されており、突帯１条と珠文２個が残存しているのみである。

D　和泉の鴟尾

和泉での出土例はいずれも白鳳時代か奈良時代のもので、飛鳥時代にまで遡るものは確認されていない。白鳳時代の鴟尾が７遺跡、奈良時代の鴟尾が１遺跡で出土している。

ⅰ　白鳳時代

陶邑窯跡群　陶邑窯跡群 TG226 － １号窯で２個体分が確認されている。いずれも胴部無文で、鰭部に削り出し正段を持つ。うち１点は縦帯まで確認できる。縦帯は複帯構成で、内郭は沈線で段を表現、外郭は３段に重ねた突帯の上に連珠文を張り付ける。鰭端部は正段の位置に応じた鋸歯状の切込みになっている。鰭端部には切込みに沿った突帯が貼り付けられる。脊稜は２条の沈線で表現され、幅７cm 前後で中央に低い稜を有する。もう１点は頭部に方形透かし穴をもつ。基底部が残存しており、細かい布目圧痕が認められる。

野々井遺跡　野々井遺跡は陶邑窯跡群内に位置し、周辺に須恵器窯跡も存在することから、鴟尾の産地に比定できる。遺跡内で出土した鴟尾片は 16 点で、それぞれ別個体と思われる。このうち白鳳時代に属するものは３個体である。焼成はいずれも須恵質であり、須恵器窯で生産されたことは疑いない。ただ、近隣の寺院で野々井遺跡と同様の鴟尾は出土していないことから、その搬出先は不明である。胴部は無文で、鰭部の段は沈線で表現される。縦帯が確認できる資料をみたところ、やや退化した複帯構成である。

原山４号古墓　原山４号古墓も野々井遺跡と同じく陶邑窯跡群内に位置している。出土した鴟尾は完形に復元されており、高さ約 1.4m を測る。この鴟尾も焼成後に搬出されることなく、古墓に利用されている。胴部の両側面に羽根形文様を削り出し、鰭部は内外ともに削り出し正段を持つ。２条の沈線で区画することで、低い突帯とした縦帯の上面にはコ

ンパスで連珠文を描く。腹部には剣頭文風に変化した羽根形文様を沈線で表現している。腹部下端には半円形の刳り形が備わっている（第３図－１）。

海会寺跡　海会寺跡では寺院に付随して作られた瓦窯の灰原から鴟尾片が出土しており、生産場所と供給場所がセットになった例といえる。合計 46 点が出土しており、その特徴から２個体以上が推定できるが、その使用堂塔は不明である。胴部から鰭部にかけては削り出し正段を持つ。縦帯は削り出し突帯に画され、２条の削り出し突帯の間に逆段を持つもの、ヘラ状工具による線刻と突帯の剥離痕跡が見られるものの３種類が確認できる。基底部部分が残存しているものについてはいずれも布目圧痕が確認できる。

その他の寺院では、秦廃寺跡でまとまった資料が確認されている。出土位置から南門での使用が推定できるが、正段を持つ鰭部以外は破片資料のため、詳細は不明である。和泉寺跡や小松里廃寺跡でも出土しているが、いずれも破片資料のため、詳細は不明である。

ⅱ　奈良時代

野々井遺跡　奈良時代に属するものは破片資料が 17 点出土している。その内１点（11）は細片のため詳細は不明である。胴部のみが残存する資料は５点あり、３点（２、４、16）は沈線で段を表現しており、いずれも沈線の間隔が異なっている。２点（９、10）は無文であり、10 は基底部に布目圧痕、頭部に方形透かし穴の一部を残す。鰭部のみが残存する資料は３点（１、13、14）あり、鰭部内側は無文、外側に削り出し正段を持つ。鰭端部には鋸歯状の切込みをおこなっている。いずれも正段の幅が異なり、13、14 の資料は正段に沈線を施す。また、14 の鰭部外側の端部には突帯を貼り付けている。３は脊稜部分のみの破片で、脊稜の両側に沈線を配している。

胴部から鰭部を残す資料は２点（８、15）ある。８は胴部に沈線を持ち、鰭部は 14 と同じ特徴を持つ。15 は胴部の段を沈線で表現し、鰭部内側は無文である。鰭部外側は削り出し突帯、縦帯は貼り付け突帯の上面の左右に２条の突帯を巡らせ、その中央に連珠文を配置する（第３図－２）。17 は腹部片である。外面にはヘラ削りによる調整後、ヘラ状工具による沈線で家屋等が描かれる。下部には「道」と考えられる字が見られる（第３図－３）。

E　紀伊の鴟尾

和歌山県内では７遺跡から鴟尾が出土している。その内一つは瓦窯跡からの出土である。

ⅰ　飛鳥時代

西国分塔跡　飛鳥時代の鴟尾が２個体分確認されている。いずれも胴部に幅の狭い削り出し正段を持つ鴟尾で薄手に作られている。

ii　白鳳時代

白鳳時代の資料は５遺跡から出土している。

佐野廃寺　白鳳期の鴟尾が２個体分出土している。１点は胴部無文の鴟尾である。鰭部にのみ削り出し逆段を持つ。胴部側面に半円形の刳り形をもち、縦帯は２条の沈線によって表現する。もう１点は胴部が未確認であるが、鰭部に削り出し正段を持ち、縦帯を突帯によって表現し、区画する。

上野廃寺　鰭部および胴部側面基底部の破片が出土している。胴部は無文、鰭部に削り出し正段を持つ。縦帯は断面方形の突帯を２条１組で削り出す。基底部に布目圧痕が残る。

荒見廃寺　荒見廃寺で出土した鴟尾は胴部および鰭部外側には正段を削り出し、鰭部内側には逆段を削り出している。縦帯には竹管状連珠文を配している。

北山廃寺　北山廃寺で出土した鴟尾は出土の記載のみで詳細が不明だが、胴部から鰭部には段を持ち、細く彫られた縦帯をもっていたとされる。

堂ノ谷瓦窯跡　和歌山県内の生産遺跡としては堂ノ谷瓦窯跡で鴟尾が出土している。２個体分の鴟尾片が出土しており、うち一片は左側面の大部分が残っていたため、完形に復元されている。胴部、鰭部、腹部いずれも無文であり、胴部の両側面に扁平な弧形の透かし穴を持つ。縦帯は幅約４cm の貼り付け突帯上に型押しによる連珠文を配する。

iii　奈良時代

薬勝寺廃寺　奈良時代の鴟尾が１点出土している。胴部が残っていないが、胴部側から鰭部にかけて段の異なる縦帯を持っており、中心点のある型押し連珠文を配する縦帯が２条、その間に正段を持つ縦帯がめぐっている。

F　まとめ

各地域について、時期別に個々の出土例を紹介したが、大阪府内で出土している鴟尾の特徴をまとめると以下の通りである。

初期寺院に使用された鴟尾は摂津地域を除き、胴部から鰭部にかけて、削り出しによる段で装飾するものがほとんどである。大部分の資料は正段で、ごく一部に逆段がみられる。摂津地域で出土した鴟尾は胴部から鰭部にかけて無文のものと、段によって装飾されるものとに分かれる。確認されている有段鴟尾はいずれも正段によるものである。

全国的に寺院数が増加する白鳳時代は、府内でも多くの寺院跡が調査で明らかになっており、鴟尾も多数確認されている。その多くが初期寺院の装飾の流れをくむもので、胴部無文の鴟尾か、胴部もしくは鰭部に正段を施す鴟尾が多数である。一方、沈線による蕨手状唐草文や羽根形文、浮彫による唐草文など、全体に装飾性を備えた鴟尾も出現する。また、縦帯部分に注目すると、削り出しにより成形された縦帯の上面に連珠文を持つものや、

２条の縦帯の内側に文様を加えるものなど装飾的な縦帯をもつ鴟尾が目立つようになる。この時期の摂津地域では播磨地域の高丘窯系、打越窯系、寒風窯系といった地方の窯からの搬入品が見られる。

奈良時代の寺院における出土例は少ない。その中でも生産遺跡と考えられる野々井遺跡の出土例をみると、胴部は沈線ないし無文で、鰭部に正段を持つ。いずれにせよ破片資料であり、資料を確認できる遺跡も限られていたため、大阪府で出土する奈良時代の鴟尾の特徴が抽出されているとは言い難い。

紀伊地域で出土している鴟尾については、出土例が限られているだけでなく、出土資料も破片のため、時期ごとの特徴が把握しにくい。しかし、各時期の装飾を見る限りでは、大阪府下の特徴と類似していると思われる。

紀伊地域の初期寺院では１例のみの確認であるが、胴部に幅の狭い削り出し正段を持つ鴟尾が西国分塔跡で出土している。白鳳時代の出土例を見ると胴部が無文もしくは正段で、鰭部に正段を持つものが多数を占めており、縦帯の装飾についても連珠文をともなうものが登場する。奈良時代の出土例は１点のみであるが、２条の縦帯の内側に段を配する鴟尾などは、時期が異なるものの、白鳳時代の和泉地域でみられるものと共通する。

以上、大阪府と和歌山県で出土した鴟尾についてみてきた。同様な問題を抱える地域もあると思うが、生産遺跡での出土例が限られていることや各寺院跡からの出土量が少なく、破片資料が多いことから、地域としての特徴をつかみにくいところが現状である。

（寝屋川市教育委員会）

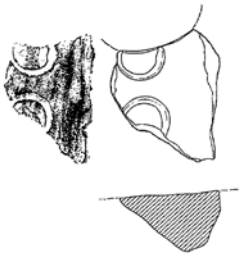
謝　辞

資料調査をおこなうにあたり下記の機関や方々にご協力をいただきました。また、末尾の鴟尾出土一覧表作成には、近藤康司氏（堺市文化観光局文化財課）、上田睦氏（藤井寺市教育委員会）のご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。（以下、敬称略）

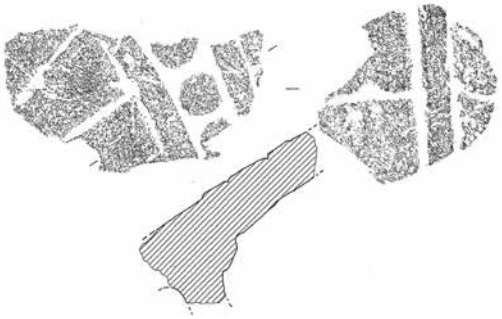
和宗総本山四天王寺、大阪府教育庁、岸和田市教育委員会、泉南市教育委員会、四條畷市教育委員会、一本崇之、竹原伸次、山岡邦章、河田康之、實盛良彦

図版出典

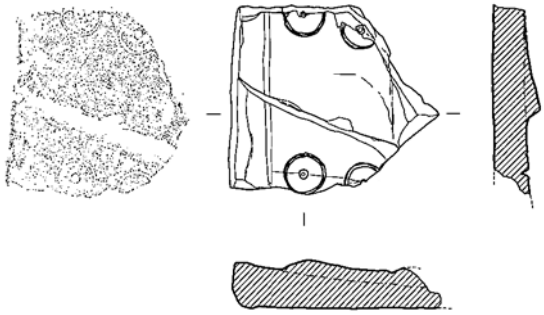
図１　１　柏原市教育委員会 1985『柏原市文化財概報 1984 － Ⅴ　大県南遺跡－山下寺跡寺域の調査－』。
　　２・３　柏原市教育委員会 2011『鳥坂寺跡発掘調査報告書』。
　　４　藤井寺市教育委員会 1987『藤井寺市及び周辺の古代寺院（下）』。
　　５　羽曳野市教育委員会 2002『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成 11 年－』。
図２　１　羽曳野市教育委員会 1980『古市遺跡群Ⅱ　羽曳野市埋蔵文化財調査報告書５』。
　　２・３　大阪府教育委員会 1985『大阪府文化財調査概要 1984 年度』。
　　４　大阪府教育委員会、大阪府文化財調査研究センター 1996『太井遺跡－近畿自動車道松原すさみ線および府道松原大津線建設に伴う発掘調査報告書－』。
　　５　枚方市教育委員会 2015『枚方市文化財調査報告書第 80 集　特別史跡　百済寺跡』。
図３　１　大阪府教育委員会 1990『陶邑Ⅶ　大阪府文化財調査報告書第 37 輯』。
　　２　大阪府教育委員会 1987『陶邑Ⅵ－３　大阪府文化財調査報告書第 35 輯』。
　　３　大阪府教育委員会 1987『陶邑Ⅵ－１　大阪府文化財調査報告書第 35 輯』。



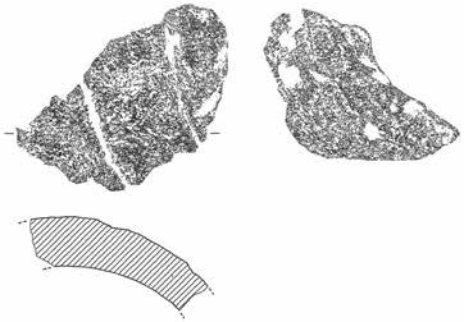
1　大県南廃寺



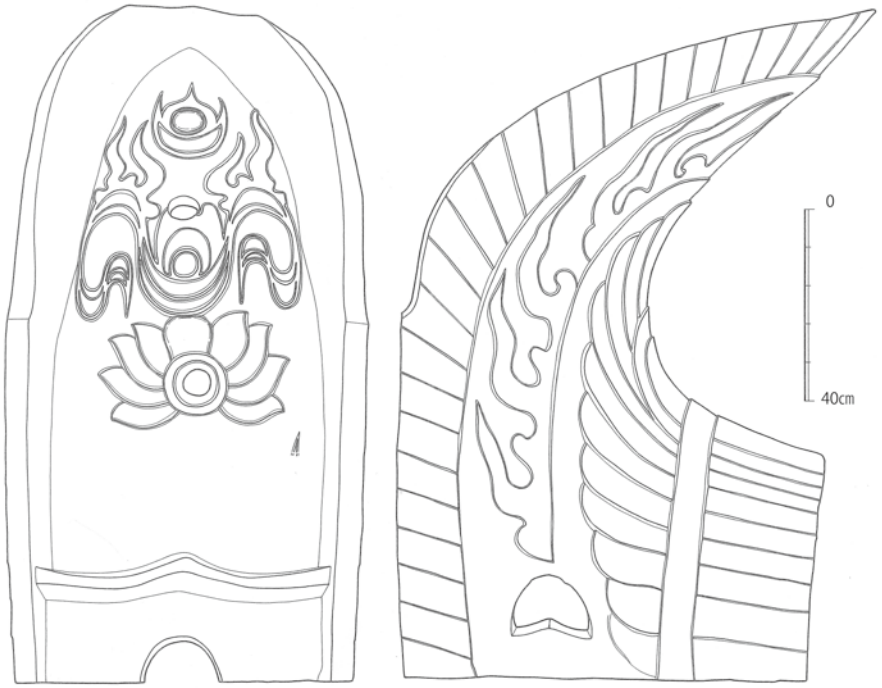
2　鳥坂寺C′型式



4　拝志廃寺

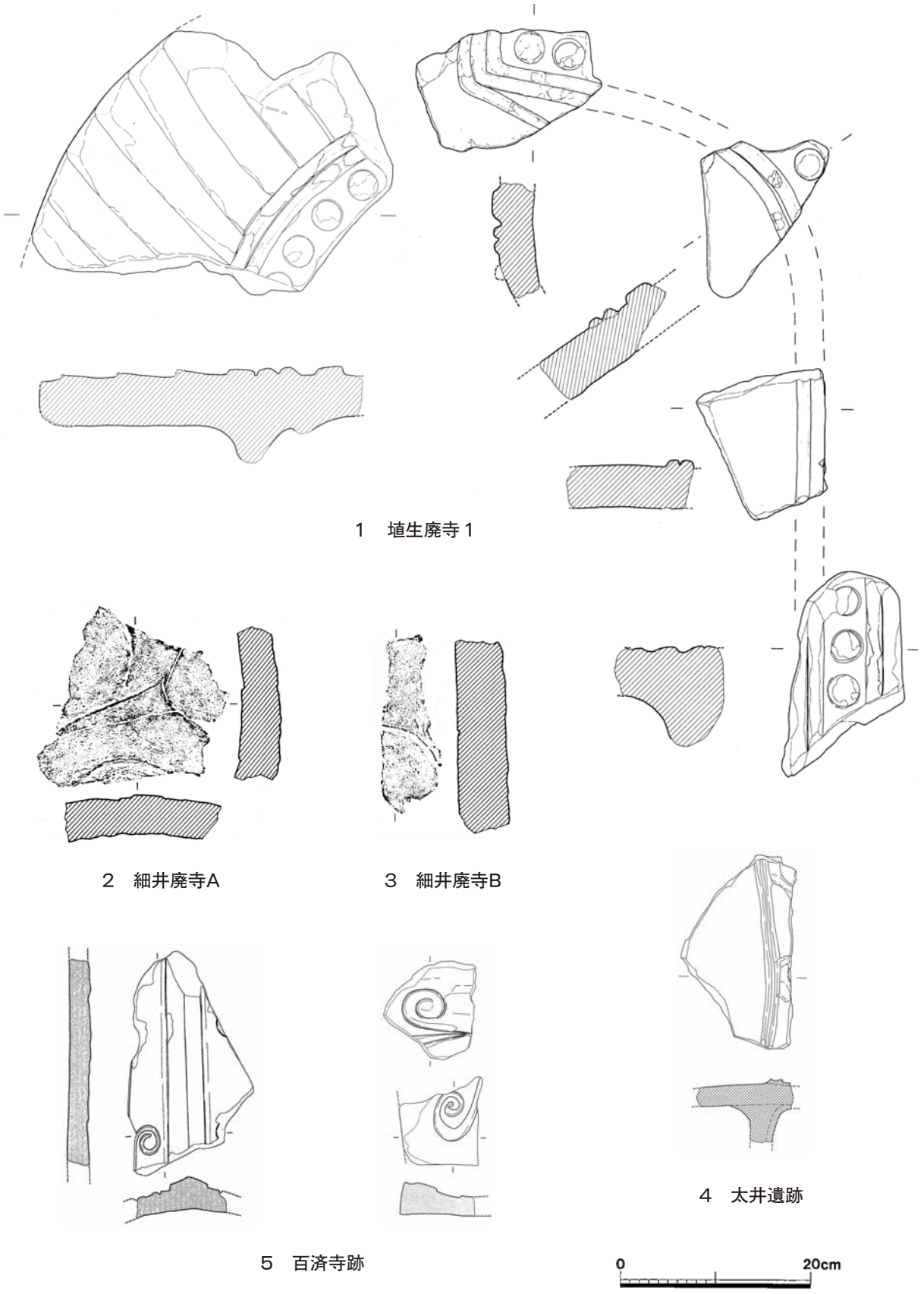


3　鳥坂寺E型式

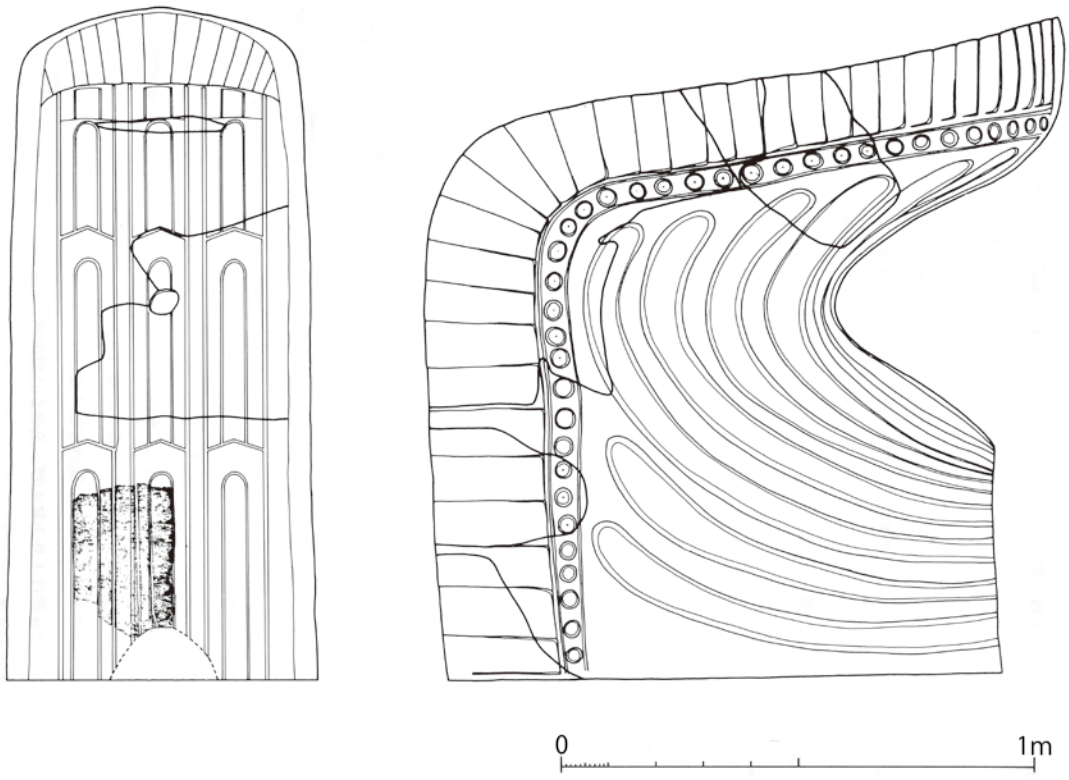


5　西琳寺

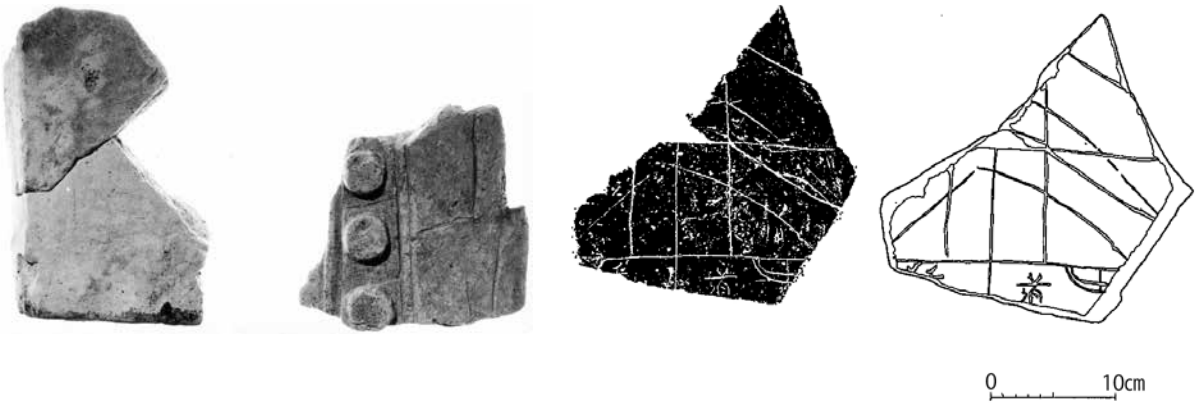
第１図　大阪府出土の鴟尾(1)　（１～４＝１：６　５＝１：16）



第２図　大阪府出土の鴟尾(2)（１：６）



1　原山4号古墓



2　野々井遺跡(15)

3　野々井遺跡(17)

第３図　大阪府出土の鴟尾(3)（１＝１：16　３＝１：６）

４　兵庫の鴟尾

垣内　拓郎

Ａ　出土鴟尾の分布状況と様相の概観

兵庫県の出土鴟尾は基本的に瓦製である。鴟尾の出土は、但馬国２箇所、丹波国２箇所、摂津国西部１箇所、播磨国 27 箇所の、淡路国を除いた旧４国合計 32 箇所の遺跡においてこれまでに確認されている（第１図）[1]。中でも播磨国では、古代寺院も多く見つかっていることもあり、分布の集中が顕著といえる。

兵庫県の鴟尾の様相について、古代鴟尾の包括的な研究を進める大脇潔氏の分類（大脇 1980・1999・2002）に拠って見ていくと、まず「百済様式」の中でも古く位置づけられる「胴部有段鴟尾の系列」があり、それらの文様が簡略化された「沈線文鴟尾の系列」と装飾化された「蓮華文帯鴟尾の系列」が認められる。そして、これらとは異なる「唐様式」に位置づけられるものや、「山陰系鴟尾」や「寒風窯系鴟尾」といった「地域色」を持つ鴟尾も確認できる。「沈線文鴟尾の系列」や「蓮華文帯鴟尾の系列」については、それぞれ播磨国の東側と西側に偏った分布のあり方を示すことから、「東播系鴟尾」、「西播系鴟尾」と呼称され、「地域色」を持つ鴟尾としても認識されている（菱田 1988）。また、その他として、資料的な制約から分類を保留せざるをえない、分類未詳の鴟尾（以下、その他分類未詳鴟尾と呼ぶ）も僅かに存在する。

各国での状況をみると、但馬国では、「山陰系鴟尾」と「寒風窯系鴟尾」が、丹波国西部では、「胴部有段鴟尾」・「沈線文鴟尾」・その他分類未詳鴟尾が、摂津国西部では「唐様式」の鴟尾が、播磨国では「沈線文鴟尾」・「蓮華文帯鴟尾」・「寒風窯系鴟尾」・その他分類未詳鴟尾が確認できる。

本稿では、上記の兵庫県下出土の鴟尾について各分類をもとに取り上げ、その具体的な様相や特徴についてみていくことにしたい。

なお、今回の一覧表作成にあたり、確認できた鴟尾には、出土地単位で各鴟尾に番号を個別に番号を付し、同一個体と判断した複数の破片資料については枝番を与えている。そこで、本稿では、図版掲載の鴟尾を個別に指す場合、「７－鴟尾５- １」のように「一覧表遺跡番号－鴟尾番号」を表記する。また、紙幅の都合上、未掲載資料があるため、鴟尾番号は連続せず不揃いとなっているものもあることをご了承願いたい。

また、シンポジウム後に沈線文鴟尾および蓮華文帯鴟尾の新資料が報告されたことやシンポジウム討論や論考での指摘を受けて、要旨集から改めて検討を加えて一部内容の追記・修正を行ったことを付言しておきたい。

B　兵庫県の胴部有段鴟尾

i　兵庫県の胴部有段鴟尾

胴部有段鴟尾は、「両側面に棟積みの熨斗瓦列から変化した幅の狭い段を刻み、胴部と鰭部を簡素な縦帯で区画し、鰭部が頂部を一周する」特徴をもち、「百済様式」のなかでも最も古く位置づけられている（大脇 2002）。

兵庫県では、播磨国の河合廃寺・吸谷廃寺・江ノ下遺跡、丹波国の天神窯跡（４号窯）において出土例が認められる。以下に、各例を概観し、分布・年代等について検討する。

河合廃寺　河合廃寺は、小野市河合中町に所在する古代寺院跡である。河合廃寺例については左側面の縦帯部を中心とする破片（第２図 12 －鴟尾１）と脊稜と縦帯部の破片（第２図 12 －鴟尾２）の２点が知られている（井内 1967･1971）。胴部と鰭部を幅 1.5 ～ 2.5cm の断面方形の低い突帯を削り出して画し、胴部と鰭部外面に正段を互い違いに削り出す。また脊稜は幅約７cm の断面半円形の突帯で表す（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。写真で見る限りでは、外面に段を削り出す際につけたとみられる沈線が部分的に認められる。鰭部内面に段を削り出すかは欠損のため不明である。河合廃寺例について、大脇氏は７世紀中葉における百済様式の畿内外への広がりの一例として指摘している（大脇 2002）。

吸谷廃寺　吸谷廃寺は、加西市吸谷町に所在する古代寺院跡である。吸谷廃寺例は鰭部の破片１点（第２図 14 －鴟尾１）のみ知られる（井内古文化研究室 1990）。資料の所在が不明のため、写真のみの判断だが、鰭部内外面に正段を削り出しているとみられる。

江ノ下遺跡　江ノ下遺跡は、加西市谷口町長近に所在し、吸谷廃寺とはその南側の丘陵を挟んだ比較的近接した箇所に位置する。調査によって焼土や灰原状堆積層が検出され、窯壁片が出土することから、窯跡の存在が考えられている。灰原状の堆積層からは、須恵器や瓦が出土しており、出土須恵器から８世紀前葉の操業が推定されている（永井 2010）。鴟尾は６点の破片が確認されているが、内３点を図示した（第２図 15）。縦帯部が残る資料（第２図 15 －鴟尾 1 - 2）は、幅約３cm の縦帯部が断面方形の低い突帯に削り出されて鰭部と胴部を画す。僅かに残る胴部には、鰭部とともに外面に正段を互い違いに削り出している。縦帯部の内側には削り出しの目安にしたとみられる沈線が２条残る。また、頂部側の鰭部資料（第２図 15 －鴟尾 1 - 1）では、鰭部の内外面に正段を削り出していることが分かり、また腹部の剥離痕から、別の粘土を接合して鰭部と腹部を製作したとみられる。そして、脊稜付近を含む胴部の破片（第２図 15 －鴟尾２）には、胴部に正段に削り出された２条の段の端が僅かに認められるが、頭部側に向かって徐々に段差が解消され、頭部側はケズリ調整痕のみ残り、無文に仕上げられていることが観察できる。脊稜については、河合廃寺例の様な突帯は作り出されていない。そして、粘土の剥離痕から粘土を積

み上げて胴部を成形している状況が認められる。

天神窯跡（４号窯）　天神窯跡は、丹波市市島町に所在し、北西に近接する古代寺院の三ッ塚廃寺の造営時に瓦を供給した４基からなる７世紀末の瓦陶兼業窯である。３号窯と４号窯から焼成中に失敗して窯ごと放棄された鴟尾が３個体見つかっており、４号窯から胴部有段鴟尾２個体（第３図４－鴟尾１・２）が出土している（梶原 2000）。鴟尾１は、全長 89cm、高さ 79cm、最大幅 54cm に復元されている。幅 6.0cm の縦帯を削り出し、鰭部外面と胴部に縦帯を挟んで概ね連続するように正段を削り出して頭部まで到達する。鰭部外面の段の幅は全体的に 10cm を超える幅広いものだが、鰭部内面は無文となっている。段の最上部の削り出しは脊稜となって頂部まで伸びて十字状に縦帯と連続している。基本的に粘土紐を積み上げて製作され、胴部と鰭部の粘土紐は連続するが、腹部は別の粘土紐を接合している。鴟尾２は、全長 87cm、高さ 79cm、最大幅 51cm という鴟尾１とほぼ同じ規格になっている。また、意匠や製作技法についても鴟尾１とほぼ同様であり、一対の鴟尾として製作されていたことがわかる。なお、３号窯から出土している鴟尾３（第９図４－鴟尾３）について、大脇氏は規格や「指またはヘラ状工具で浅い溝状の段をあらわす」意匠、製作技法などが鴟尾１・２と異なる点に注目して別系譜の工人の関与を指摘しつつ、胴部有段鴟尾の項目で取り上げている（大脇 2002）。本稿では、施文技法の簡略化と縦帯部の表現方法を重視して、次項の沈線文鴟尾において取り上げることとする。

ⅱ　胴部有段鴟尾の分布と製作年代

播磨において胴部有段鴟尾は、古代寺院の多い賀毛郡に集中し、江ノ下遺跡と吸谷廃寺については比較的近接している。河合廃寺例の年代について大脇氏は７世紀中葉に位置づける一方（大脇 2002）、菱田氏は「７世紀後半でも古い段階に位置づけ」、「東播系の鴟尾が成立する以前」の型式として指摘する（菱田 1988）。河合廃寺の創建瓦は、重圏文縁素弁九葉蓮華文軒丸瓦や、重圏文縁素弁六葉蓮華文軒丸瓦といった比較的古い様相を示しており、７世紀中葉でも新しい段階、少なくとも７世紀後半の古い段階の、７世紀第３四半期頃までの位置づけが考えられそうである。吸谷廃寺例については、創建瓦が川原寺式の面違鋸歯文縁複弁八葉蓮華文軒丸瓦であり、寺院の創建が少なくとも７世紀第４四半期以降～７世紀末頃に想定されることから、この頃まで生産されていた可能性がある。窯跡と想定される江ノ下遺跡と吸谷廃寺や河合廃寺への供給関係については、２寺院の資料の現所在が不明のため現時点では実物資料による検討は不可能となっている。写真による比較からは、河合廃寺例と江ノ下遺跡例は類似しているといえるものの、断定はできない。鴟尾という特別な瓦である点や地理的な近接性、後述する「東播系鴟尾」と呼称される後続の沈線文鴟尾の分布のあり方から、生産・供給において少なくとも何らかの関連性があると類推しても大過はないであろう。

一方、丹波国の天神窯跡４号窯例については、文様の簡略化などから胴部有段鴟尾のな

かでも終末期に位置づけられている（梶原 2000）。天神窯跡は、７世紀末創建の三ッ塚廃寺を対象に瓦を供給する近接した窯であり、これまでに周辺に寺院等が確認されていないことから、三ッ塚廃寺単独所用のために鴟尾が生産されたと考えられる[2]。時期的に先行する河合廃寺例等の播磨国賀毛郡の胴部有段鴟尾との関連性については、江ノ下遺跡例の胴部正段の削り出しが頭部まで到達しない点を重視すれば、直接的に関連する可能性は低く、異なる系譜下にあるとみられる。

C　兵庫県の沈線文鴟尾

i　兵庫県の沈線文鴟尾

沈線文鴟尾は、胴部有段鴟尾の「簡略化が進み、段を削る工程を省略し沈線だけで段、あるいは縦帯を表現する」（大脇 2002）もので、その分布が播磨東部に集中する特徴から「東播系鴟尾」とも呼称される（菱田 1988）。

兵庫県では、播磨国の太寺廃寺・高丘古窯跡群（３号窯・17 号窯・18 号窯・谷八木表採例）・野口廃寺・石守廃寺・広渡廃寺・新部大寺廃寺・繁昌廃寺・姥懐古墓・見野廃寺・市之郷廃寺・今宿遺跡・桜峠窯跡（５号窯）、丹波国の天神窯跡（３号窯）での出土が認められる。『日本古代の鴟尾』（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）や菱田氏の研究時（菱田 1988）から沈線文鴟尾がみつかった遺跡数や資料数も増えており、その様相や特徴がさらに明らかになってきたといえる。本節では、増加した資料も踏まえて沈線文鴟尾について分類し、その特徴、製作年代、生産供給について検討する。

ii　沈線文鴟尾の分類

沈線文鴟尾については、縦帯部の表現と沈線の太さに着目し、Ⅰ類、Ⅱ類、Ⅱ′類に分類できる（第１表）[3]。

沈線文鴟尾Ⅰ類　鰭部外面または胴部の段、あるいは縦帯部を細い沈線で表現するものである。鰭部内面には文様を施さない。特に鰭部や胴部の沈線は、工具の先端部で約 1.5 ～ 2.5mm、深さ約１mm 以下と細く、浅く施される（第４～６図）。そして、Ⅰ類のなかでも平行する２条の細い沈線で幅約 1.5 ～ 2.5cm（沈線の外郭線で計測）の縦帯部を表現するものを、Ａ種として抽出できる（以下ⅠＡ類と呼称）。ⅠＡ類は、県下では播磨国の太寺廃寺・高丘古窯跡群（17 号窯例・谷八木表採例）・野口廃寺例・広渡廃寺例・見野廃寺例（第４・５図）が挙げられ、全体が分かる資料として高丘窯産とされる摂津四天王寺Ｃ例がある。縦帯部の沈線も概ね鰭部・胴部の沈線と同様に細いものがあるが、太寺廃寺例（第４図６－鴟尾２- ４・４- ２）や広渡廃寺例のように、幅 3.5 ～４mm と僅かに幅広くなり、沈線の断面形も半円状に丸くなって、後述する鴟尾Ⅱ類の沈線に近くなるものもある。いずれの資料も、沈線は縦帯部の２条を施した後、鰭部・胴部に施される。また、断

片資料のため縦帯部が確認できていないが、胴部または鰭部の段に、同様の細い沈線を施されるものとして、高丘古窯跡群（18 号窯例）、石守廃寺例、新部大寺廃寺例、市之郷廃寺例（第６図）があり、これらもおそらくＩＡ類に含まれる可能性が高い。また、太寺廃寺では細い沈線で段が表される胴部または鰭部の小片に、直径 1.5cm のコンパス文が沈線で施された資料が新たに見つかっている（第４図６－鴟尾５）。この資料には平行する２条の段の沈線があり、その片方の沈線上に中心を持つ２つのコンパス文が、段の沈線文の上から施されている。コンパス文の中心間距離は約 2.5cm となっている。これまでに沈線文鴟尾Ⅰ類でこのようなコンパス文は確認されておらず、今後も属性や他の資料との関連性についても注意を要するが、ここでは段の装飾のあり方の一例として捉えておく。

Ⅰ類の製作技法の特徴としては、鰭部外面や端面は最終的にナデやケズリ等で平滑にされるが、ハケメ調整痕が多く認められる点が指摘できる。成形については、腹部は鰭部・胴部とは別の粘土紐を積み上げて接合しており、頭部については、別の粘土紐を積み上げて胴部と接合する資料が広渡廃寺例にある。胎土については、Ⅰ類のなかで大きく異なることもなく、焼成についても、軟質で断面白色、外面は燻されて黒色を呈するものから、灰色～青灰色を呈し須恵器のように硬質のものも認められる。

なお、桜峠窯跡５号窯例鴟尾１- ３・４（第７図 24 －鴟尾１- ３・４）については、現所在不明のため資料を実見できていないが、拓本を見る限り鰭部の沈線は細いものと判断され、Ⅰ類に含めておきたい。

沈線文鴟尾Ⅱ類　縦帯部に装飾を加えるもので、鰭部外面や胴部の段は概ね太い沈線で表現される。鰭部内面には文様を施さない。沈線は、先端がやや丸い工具等で施されたとみられ、幅約５～６mm、深さ約２mm で断面形は半円状を呈する。Ⅱ類のなかでも、縦帯の装飾方法によって、Ａ～Ｄ種に細分できる（以下、ⅡＡ類～ⅡＤ類と呼称）。

Ａ種は、粘土珠文を貼り付けるもので、繁昌廃寺例（第７図 13 －鴟尾３）が挙げられる。繁昌廃寺例は、平行する２条の沈線を施して作り出した幅 1.7cm の縦帯部の中軸に粘土を貼り付けて、板状工具等で押し当てて直径約３cm 高さ約１cm の円盤状に珠文を作り、珠文の中央には直径 1.4cm の竹管文を施す。繁昌廃寺例の縦帯部および胴部・鰭部外面に沈線が施されており、ＩＡ類と同じように 1.5 ～２mm 程度の幅の細いものとなっている（第７図 13 －鴟尾１～３）。珠文は、縦帯部と鰭部の沈線が施されたあとに貼り付けられており、ＩＡ類に珠文の装飾が施されたものと考えられる。なお、幅約４cm の断面台形の脊稜が残る資料（第７図 13 －鴟尾１）も出土しているが、鴟尾３と同一個体とすれば、縦帯部の沈線と珠文が脊稜部とどのように接続していたかは不明である。

Ｂ種は、縦帯部に突帯を貼り付けるもので、今宿遺跡例（第７図 20 －鴟尾２- ４・５）が挙げられる。今宿遺跡例では、幅約１cm の断面台形を呈する突帯が１条貼り付けられているのが確認できるが、断片資料のため２条になるか不明である。鰭部外面には、突帯を貼り付けた後に棒状の工具で幅約５～６mm の太い沈線が施される。また拒鵲用とみら

れる穿孔をもつ脊稜部の破片（第７図 20 －鵐尾２- ２）も出土しており、脊稜部の両裾に同様の沈線が１条認められるが、胴部全体にも同様の沈線が施されていたか不明である。

Ｃ種は、縦帯部に２条の突帯と連珠文を貼り付けるもので、高丘古窯跡群３号窯例（第８図７－鵐尾１・３）が該当する。縦帯部には、割り付け用とみられる細い沈線が施されており、その上に幅約 0.7 ～ 1 cm の断面台形ないし半円形の突帯が２条貼り付けられ、縦帯部は概ね 2.5 ～ 3 cm の幅を持つ。突帯は、基底部から 10cm 前後上方あたりで終わる。突帯間はナデ調整によって、断面半円形の溝ができており、その部分に珠文となる粘土を概ね一定の間隔に貼り付ける。珠文は、上から板状工具を押し当てられ、表面が直径約２cm の円盤状を呈する。ただし、珠文は全体に施されておらず、突帯のみで空白となっている部分もある。鰭部外面および胴部には、突帯を貼り付けた後に工具で幅５～６mm の太い沈線が施されて段が表現されており、鰭部側の突帯には、施文時に工具が当たった痕跡が認められる。胴部の沈線文は、縦帯部を挟んで鰭部沈線文と互い違いに施され、頭部まで到達する。鰭部の内外面には、ハケメ調整の痕跡が残る。成形時には、胴部・鰭部と腹部は別の粘土紐を積み上げて接合したとみられる。

Ｄ種は、縦帯部に２条の突帯を貼り付け、突帯間に施文するもので、失敗品を棺として転用した姥懐古墓例（第８図 16 －鵐尾１）が該当する。姥懐古墓例は、断面方形の突帯を２条貼り付け、縦帯部の幅は７cm 程度になるとみられる。２条の突帯は、基底部まで到達するが、脊稜部までは巡らず、頂部の手前で胴部側の突帯と合流する。胴部の中程あたりの突帯間には、沈線で円弧状の文様を連続で施す。鰭部外面には、太い沈線が施されるが、沈線の幅は不明である。また、胴部は無文となっている。

沈線文鵐尾Ⅱ′類　縦帯部に装飾を加え、鰭部や胴部の段には凹線ともいえる幅広く太い沈線が施されるもので、天神窯跡３号窯例（第９図４－鵐尾３）が該当する。胴部や鰭部には、段を削り出したと言えそうな狭い間隔で、指または工具等によって幅広く、深い鉋目状の凹線が施されている。凹線は幅約１～２cm、断面形はＵ字ないしＶ字状を呈し、段の切り取りのように工程を分けずに概ね単一動作で施文される。前述のとおり、これまで天神窯跡３号窯例については、４号窯で出土した胴部有段鵐尾とは異なる系譜として位置づけられるも、胴部有段鵐尾の文脈のなかで取り扱われてきた（大脇 2002）。しかし、天神窯跡３号窯例の縦帯部に注目すると、２条の同様の凹線が鰭部と胴部の凹線を画する様に縦方向に平行して施されており、残りの良い破片資料を参考にすると３号窯例の縦帯部の幅は約 10cm となっている。そして、縦帯部の中央部分には、幅約１～ 1.5cm 断面台形の突帯が貼り付けられ、その両裾は貼り付け時のナデツケの筋が浅い溝状に残り、突帯の中央も細い溝状の窪みができているのが確認できる[4]。この点を重視し、縦帯部に突帯の装飾を持ち、鰭部外面と胴部に幅広く深い沈線＝凹線を施す鵐尾として、沈線文鵐尾Ⅱ′類に分類した。胴部の凹線は、頭部付近まで施される。成形は４号窯例とは異なり、胴部と腹部を同じ粘土紐を積み上げて、後に別粘土で鰭部を足す。そして、外面には叩き板

を用いて整形する。叩き目は１号窯・３号窯の平瓦と類似しており、瓦工人の鴟尾製作への関与が推測されている（梶原 2000）。３号窯例は、いずれにしても胴部有段鴟尾が簡略化、稚拙化されつつも、装飾が加えられた後出的な鴟尾と考えられるが、幅広い縦帯には４号窯例の要素が引き継がれている可能性も指摘できよう。４号窯例と異なる系譜の工人が鴟尾製作に関与した点は首肯されるが、異なる系譜の一つとして「東播系鴟尾」との関係や、４号窯例より少し遅れて製作された可能性も検討する必要がある。

ⅲ　沈線文鴟尾の展開

沈線文鴟尾の変遷と製作年代　ここで新出資料も加えた沈線文鴟尾の製作年代について、菱田氏の研究（菱田 1988）を元に検討してみたい。菱田氏は、全形が分かる沈線文鴟尾として、四天王寺Ｃ・高丘古窯跡群３号窯鴟尾１（以下、同様の特徴をもつ鴟尾２・３も含めて高丘３号窯例と呼称）・姥懐古墓例を取り上げ、窯跡から出土した須恵器の年代と鴟尾の型式比較編年作業の検討を経て、それぞれ７世紀後半、８世紀前葉、８世紀と位置づけた。その他の寺院（広渡廃寺・繁昌廃寺・太寺廃寺・石守廃寺・新部大寺廃寺）については７世紀後葉～８世紀前葉の年代幅を持たせた。四天王寺Ｃは、本節で分類した２条の平行する沈線を縦帯部とするＩＡ類に該当し、またＩＡ類である可能性の高いＩ類（腹部に沈線で格子目の施文を持つ桜峠５号窯鴟尾１を除く）についても、ほぼ同時期以降のものとして考えられよう。さらに、ＩＡ類が出土する各寺院から出土する軒瓦から判断すれば、７世紀後半よりも少し降った７世紀後葉以後の所産と考えられる。そして、沈線文鴟尾ⅡＡ類として分類した繁昌廃寺鴟尾３は、ＩＡ類の要素を残しつつ、珠文を貼り付ける装飾的な新しい要素を取り入れていることから、ＩＡ類と、ⅡＣ類となる突帯と連珠文をさらに装飾する高丘３号窯例との間で、過渡的な資料として位置づけられよう。同じく、突帯のみを貼り付けるⅡＢ類の今宿遺跡鴟尾２についても、鰭部の沈線の太さは高丘３号窯例と共通する一方、突帯のみを貼り付け、珠文を施さない過渡的な様相を示すことから、同様にＩＡ類とⅡＣ類の間に位置づけられよう。そして、ⅡＤ類として分類した姥懐古墓例は、菱田氏の指摘するとおり、高丘３号窯例に比べて退化の方向で理解できるため、ⅡＣ類に後続するといえる。沈線に注目すると、ＩＡ類からⅡＢ・Ｃ・Ｄ類へ新しくなるにつれ、沈線は細いものから太いものに変化することが指摘できる。桜峠窯跡５号窯鴟尾１については、資料を実見できていないため断定できないが、腹部に沈線で格子目を施すことから、ＩＡ類よりは後出すると考えられる。したがって、段階として桜峠窯跡５号窯鴟尾１はⅡＡ・Ｂ類と同じ時期を考えておき、ＩＡ類とⅡＣ類の間の７世紀末～８世紀初頭頃に位置づけておく。そして、播磨から離れた丹波の天神窯跡３号窯例のⅡ′類については、１条の突帯を縦帯部に貼り付けている点でⅡＢ類の要素を指摘できるが、鰭部・胴部の段の凹線による表現を考慮するとⅡＢ類よりも後出するものと推測される。

沈線文鴟尾の分布と展開　新出資料を加えた沈線文鴟尾の分布範囲については、菱田氏の

研究（菱田 1988）で指摘された通り、播磨東部＝東播地域を中心に分布するという点は大きく変わらないといえる。しかし、市之郷廃寺や見野廃寺、今宿遺跡で見つかるなど、沈線文鴟尾の分布する範囲が、播磨西部に含まれる餝磨郡まで広がることが明らかとなった（第１・27 図）[5]。

そして、分類別に見ていくと、全体像のわかる四天王寺Ｃのような縦帯部に２条の沈線を施すＩＡ類の沈線文鴟尾は、出土地が６箇所、ＩＡ類の可能性が高い資料の出土地を含めると 10 箇所と最も多い。これに対してⅡ類については、出土地は４箇所、ⅡＡ～Ｄ類に細分すると各１箇所となる（第１表）。また、Ｉ類は東播地域を中心として分布するのに対し、Ⅱ類になると高丘古窯跡群３号窯例を除いて、Ｉ類の分布域の北側から西側に個別に点在する傾向にある。

このように見ていくと、東播系鴟尾とも呼ばれる播磨東部を中心に分布する沈線文鴟尾は、沈線文鴟尾ＩＡ類が、その「基本形（定型）」であったといえ、「東播系沈線文鴟尾ＩＡ類」あるいは「東播系鴟尾ＩＡ類」と呼称できよう[6]。そして前述のように、Ｉ類からⅡ類への変化は、沈線のみで表現された縦帯部に珠文や突帯の装飾が加えられるようになることと、鰭部や胴部の段が細い沈線から太い沈線になることとが指摘できる。沈線文鴟尾Ⅱ類についても、同様に「東播系沈線文鴟尾Ⅱ（Ａ～Ｄ）類」あるいは「東播系鴟尾Ⅱ（Ａ～Ｄ）類」と呼称できよう。ただし、Ⅱ′類については、地理的にも離れ、沈線文の特徴も「東播系」の一群と異なるため､関係性が明瞭に確認できるまでは「沈線文鴟尾Ⅱ′類」の呼称のままとしておく。

以上の変化を段階区分すると、２条の沈線で縦帯部を表現する東播系鴟尾ＩＡ類の第１段階から、縦帯部に装飾を加えたⅡ類の第２段階へと変化していったと考えられる。そして、ⅡＡ・Ｂ類と同時期に位置づけた桜峠５号窯鴟尾１については、第２段階に位置づけられよう。その分布の様相は、後述のように第１段階に高丘窯を生産供給の軸として播磨東部を中心に展開し、第２段階に第１段階の分布域の西側および北側周縁域へ広がる形で展開していったといえよう。これまでの検討を以下のとおり、まとめておく。

《兵庫の沈線文鴟尾「東播系鴟尾」の展開》※〔　〕内の数字は出土遺跡数

第１段階：播磨東部を中心に分布

【７世紀後葉～】　ＩＡ類〔6 ※桜峠窯跡５号窯例を除くＩ類含めると 10〕

第２段階：第１段階の分布域の西側、北側周縁域に単発的に分布

【７世紀末～

８世紀初頭】→Ｉ類〔１〕（桜峠５号窯鴟尾１- ３・４）・ⅡＡ類〔１〕・ⅡＢ類〔１〕

【８世紀前葉】→ⅡＣ類〔１〕・（Ⅱ′類？〔１〕）

【８　世　紀】→ⅡＤ類〔１〕

ⅳ　東播系沈線文鴟尾の生産供給ついて

沈線文鴟尾は、播磨東部に鴟尾が展開し「東播系」の地域色として指摘されるほど偏在的に分布するが、その生産の中心地は高丘窯が想定されてきた（菱田 1988）。また、これまでにもＩＡ類に含まれる谷八木表採資料（第４図７－鴟尾８-３、９-１）は、高丘窯産と指摘され、ＩＡ類の四天王寺Ｃについては、谷八木表採例を介して、共通する形態や施文技法をもつⅡＣ類の高丘３号窯例との関連づけることで、その生産供給についても高丘窯との関連性が考えられてきた（春成 1983）[7]。そして、今回ＩＡ類として取り上げた、高丘古窯跡群 17 号窯で表採された鴟尾５（第４図７－鴟尾５-１・２）の存在は、ＩＡ類が高丘窯で生産されていたことを明確に示すものであり、高丘窯で生産されたＩＡ類が第１段階に播磨東部に供給され､展開していったとみることができる。さらに､第２段階では､ＩＡ類と沈線文が共通するⅡＡ類の繁昌廃寺例や高丘窯で生産されたⅡＣ類の３号窯例については、高丘窯の生産供給の系譜下にあったものとして理解しやすい。また、Ⅱ′類については、明らかに三ッ塚廃寺近傍の天神窯跡３号窯で生産されたことは間違いない。しかし、ⅡＢ類やⅡＤ類の生産地については高丘窯の技術的系譜と関連性は指摘できるが、高丘窯で生産されたものかさらに検討する必要がある。ここで注目したいのが峯相山窯跡群の桜峠窯跡５号窯例であるが、確認されている沈線文を持つ鴟尾資料は、第２段階に高丘窯から沈線文鴟尾の技術的系譜を持つ工人が峰相山窯跡群での鴟尾生産への関与を示唆する。また、今宿遺跡例に施された断面台形の突帯についても、後述する蓮華帯鴟尾にも類似する点は同様の関連性を想起させる[8]。誤解を恐れずにいえば、第２段階において沈線文鴟尾に関連する工人や技術、生産の一部が峰相山窯跡群に編入されるなど何らかの形で関与した可能性がある。ただし、その資料も限られており明言は難しく、今後の検討課題としたい。

Ｄ　兵庫県の蓮華文帯鴟尾

ⅰ　兵庫県の蓮華文帯鴟尾

蓮華文帯鴟尾は、縦帯部に蓮華文を飾ることを特徴とする（大脇 2002）。その分布が播磨西部に集中する特徴から「西播系鴟尾」とも呼称される（菱田 1988）。

兵庫県では、播磨国の溝口廃寺･市之郷廃寺･今宿遺跡･打越窯跡･赤坂窯跡（１号窯）･下太田廃寺・金剛山廃寺・中井廃寺・中垣内廃寺・千本屋廃寺・伝伊勢村例、但馬国の三宅廃寺[9]の出土例が挙げられる。

蓮華文帯鴟尾については、次の前提で取り扱うことを明確にしておきたい。まず、播磨国については、溝口廃寺・金剛山廃寺・千本屋廃寺では、蓮華文が飾られた縦帯部の資料はこれまでに確認されていない。大脇氏や菱田氏の蓮華文帯鴟尾の研究では、唐草文が施される胴部や、特徴的な段の調整技法を持つ鰭部といった断片資料は、蓮華文帯鴟尾と推

測して取り扱われている（大脇 1983、菱田 1988）[10]。しかし、代表的な蓮華文帯鴟尾の四天王寺Ｅに特徴的に表れるように、胴部唐草文の存在から蓮華文帯鴟尾と推測することは可能だが、後掲の早瀬瓦窯跡例のように蓮華文帯鴟尾以外で鰭部に段をもつ鴟尾が見つかったこともあり、頂部から基底部までの鰭部の全容を把握できていない時点での断定的な区別は容易ではない。このことから、鰭部の段の断片資料のみで蓮華文帯鴟尾であると明確に特定することは困難といえる。従って、本稿では胴部唐草文の断片のみが出土する場合については蓮華文帯鴟尾として取り扱うが、鰭部の段のみの出土では蓮華文帯鴟尾としての取り扱いを保留する。

次に、但馬国の三宅廃寺例については、縦帯部に蓮華文をもつが、寒風窯系の特徴も併せ持つことから、後節で取り上げることにしたい。

以上のことを踏まえて、本節では蓮華文帯鴟尾について分類し、その特徴、分布、製作年代、生産供給について検討する。その際、これまでの蓮華文帯鴟尾の研究で取り扱われた、兵庫県以外から出土が報告された蓮華文帯鴟尾についても適宜取り上げる。

ⅱ　蓮華文帯鴟尾の分類

蓮華文の笵型の種類と分類　兵庫県の播磨地域を中心に分布する蓮華文帯鴟尾については、同笵の蓮華文を元に工人の移動を検討する大脇氏の研究（大脇 1983）や、菱田氏の沈線文鴟尾＝「東播系鴟尾」との対比の研究（菱田 1988）がある。蓮華文の笵型に関しては、他地域出土の蓮華文帯鴟尾との同笵関係も認められることから、これらの研究では『日本古代の鴟尾』（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）や大脇氏の研究（大脇 1983）で付与された笵Ａ、笵Ｂの名称が使用されてきた。

その一方で、今里幾次氏は播磨の蓮華文帯鴟尾を継続的に追究し、現在までに５種の笵型の蓮華文を確認しており、貼り付けられた蓮華文について「華文飾板」の名称を用いて分類を試みている（今里 1995c・1997・2001・2007・2010a）。今里氏の華文飾板の分類では、当初「①・②・③」（今里 1995c）の記号を用いていたが、後に資料が増加した際、番号順と編年を合わせるため「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの各型」（今里 1997・2001）と分類記号を変更している。そして、後に確認された中垣内廃寺例（第 17 図 28 －鴟尾１）を、既存の分類の間に差し込んで「Ⅲ型」の記号を与え「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ型の５種」（今里 2007・2010a）の新しい分類を提示している。つまり、今里氏の華文飾板の分類は、中垣内廃寺例確認前の「旧分類」と、確認以後の「新分類」のⅢ型～Ⅴ型の間で記号のズレが生じている。ただし、中垣内廃寺例については慎重な取り扱いを要する旨の意見もあることから[11]、本稿では取り扱いを保留しておきたい。このような今里氏の新分類に対して、旧分類のⅠ～Ⅳ型は、華文飾板の面違鋸歯文縁から線鋸歯文縁へ、複弁から単弁へという変化を、記号の順序と編年の順序を合わせて、理解しやすく提示するものとなっている。そして、華文飾板Ⅰ型・Ⅱ型は、前述の笵Ａ・Ｂに対応している。従って本稿では、研究史を

重視しつつ今里氏の新旧分類の記号の錯綜を避け、第10図のように、今里氏の旧分類のⅠ～Ⅳ型に対してそれぞれ笵型Ａ～Ｄの記号を付して、第２表のとおり出土地や諸属性と合わせて整理した。以下に各笵型の文様について列挙しておく。笵型の製作順序については、今里氏の旧分類でⅠ～Ⅳ型の順を指摘するとおり（今里1997・2001)、笵型Ａ→Ｂ→Ｃ→Ｄになると考えられる。

笵型Ａ：面違鋸歯文縁複弁六葉蓮華文/中房蓮子１＋４＋８（配置は蓮弁の中軸に合う）

※今里旧分類のⅠ型、大脇（1983）の笵Ａ対応。

笵型Ｂ：線鋸歯文縁変形単弁十一葉蓮華文/中房蓮子４+10

※今里旧分類のⅡ型、大脇（1983）の笵Ｂ対応。

笵型Ｃ：線鋸歯文縁単弁十一葉蓮華文/中房蓮子不明

※今里旧分類Ⅲ型対応。

笵型Ｄ：線鋸歯文縁単弁九葉蓮華文（復元）（※十葉以上か？）/中房蓮子不明

※今里旧分類Ⅳ型対応。

蓮華文帯鴟尾の笵型と諸属性の関係　大脇氏（大脇1983）や菱田氏（菱田1988）が蓮華文帯鴟尾について検討するうえで着目した属性が、①縦帯部の蓮華文の笵型、②胴部唐草文と施文方法、③鰭部の段である。その他に、本稿で見ておきたい属性として④縦帯部の貼り付け突帯が挙げられる[12]。以下に、第２表と合わせて①笵型Ａ～Ｄと、②③④の属性の関係性について概観する。

①縦帯部の蓮華文の笵型Ａ～Ｄ　笵傷進行が確認できるのは笵型Ａのみである。大脇潔氏は、笵型Ａの損傷が生じたものについて「Ａ′」の記号を与え、後述する美作の大海廃寺例から笵傷が生じ始めるとしている（大脇1983)。ここで改めて新出資料も含めて、笵型Ａから笵型Ａ′への笵傷について明瞭なものを中心に観察すると、蓮華文の周縁外の笵傷１～５、中房の笵傷、弁区の笵傷が認められる。その笵傷進行は、少なくとも周縁外の笵傷１・２〈・４？〉（大宅廃寺例）→周縁外の笵傷３・中房の笵傷・弁区の笵傷（市之郷廃寺例）→周縁外の笵傷５（四天王寺Ｅ）という順序が考えられる（第11図)。笵型Ｂ～Ｄについては基本的に資料数が少なく、笵傷進行については不明である。

②胴部唐草文　まず胴部への施文の有無を確認できる資料は基本的に笵型Ａに対応する資料の一群しかない。笵型Ｂ・Ｃ・Ｄは、対応する胴部唐草文を施す出土例がこれまでに確認されておらず、施文の有無自体が不明となっている。ただし、笵型ＡとＢが併存する四天王寺Ｅが笵型Ｂの中で唯一胴部の唐草文が確認できる資料となる。なお､打越窯跡例(第16図22－鴟尾２）には、腹部とみられる破片に１条の沈線で渦巻き状の唐草文を施しているが、笵型Ｂに胴部の唐草文がともなうかどうか断定できず、今後も検討を要する[13]。

胴部唐草文の施文技法には、これまでに３種類の技法が確認されている。１つ目は胴部の外面を凸型に削り出して唐草文を施文する「凸型削り出し」技法で、兵庫の事例としては下太田廃寺例（第13図25－鴟尾１・２）・中井廃寺例（第13図27－鴟尾２- ２）・金

剛山廃寺例（第 14 図 26 －鴟尾１）･辻井廃寺例（第 13 図 21 －鴟尾３）･今宿遺跡Ａ類（第 14 図 20 －鴟尾５）が挙げられる。２つ目は胴部の外面を凹型に削り取って唐草文を施文する「凹型削り取り」技法で、兵庫の事例としては千本屋廃寺（第 14 図 29 －鴟尾１）が挙げられる。３つ目は、胴部外面に唐草文の輪郭を篦書き沈線で描いて施文する「篦書き沈線」技法で、兵庫の事例としては、千本屋廃寺例（第 15 図 29 －鴟尾３）･溝口廃寺例（第 15 図 17 －鴟尾３）・市之郷廃寺例（第 15 図 19 －鴟尾４、８- ４）が挙げられる。大脇氏や菱田氏は、施文技法が凸型・凹型の立体的に作り出す技法から、篦書き沈線による技法へと簡略化、稚拙化していく変化を想定する（大脇 1983、菱田 1988）。さらに、菱田氏は、凸型削り出し、または凹型削り取り技法を用いるものを「古段階」、篦書き沈線技法を用いるものを「新段階」として区分する（菱田 1988）。これまで古段階に位置づけられていた千本屋廃寺例、溝口廃寺例には、新たに篦書き沈線で胴部唐草文を表現した断片資料が見つかったため、「新段階」には千本屋廃寺例（第 15 図 29 －鴟尾３）・溝口廃寺例（第 15 図 17 －鴟尾３）が含まれることになる。

③鰭部の段　笵型Ａ～Ｄの蓮華文帯鴟尾の鰭部は基本的に外面を正段に作り出し、内面については、菱田氏が笵型Ａ・Ｂの事例で無文に作られることを強調したように（菱田 1988）、笵型Ｃ・Ｄについても共通して無文となっている。

鰭部外面の正段の製作過程としては、平滑に仕上げた鰭部外面に対して直交方向に近い角度でヘラ状工具を差し込んで沈線あるいは切り取るための筋を入れた後、その下から沈線（切り取り筋）に向かって外面に対して斜めに差し込んで粘土を削り（切り）取って段を成形する。その後、切り取った面は段に沿ってナデ調整される。大脇氏は、この鰭部の段について蓮華文帯鴟尾の特色として、調整段階に「接触面が曲線を描く型板を用いる点」を指摘し、「型板を使用することによって、一定の曲面を持つ段を幾段も連ねることができる」とし、「曲線を描く型板を用い、段の断面形が弧状を呈するものを１類、型板を用いず、断面形が鋸歯状を呈するものを２類」に分類し、先後関係が明らかな笵型Ａ・Ｂとの相関性から１類→２類への変化することが示された（大脇 1983）。一方、菱田氏は、「鰭部の段には、板状工具によって明確に削り出すものと、削り取る部分が少なくて沈線に近くなっているものがある」とし、他に段の幅の狭さも蓮華文帯鴟尾の共通の要素として挙げている（菱田 1988）。

段外面の断面形について、筆者のシンポジウム要旨集では、笵型Ａに対応する段について、断面形は「概ね曲線を描くが、型板の使用や明瞭な差異については判別できなかった」とし、笵型Ｂ・Ｃに対応する段についても「断面形の曲線はやや緩やかになる印象はあるが、笵型Ａに対応する鰭部段との明確な差異は見受けられない」とした（垣内 2020）。その後、久保穣二朗氏からのシンポジウム討論でのご指摘や因幡斎尾廃寺出土鴟尾の論考（久保 2020）において、「笵Ａの鴟尾では、正段の断面は綺麗な曲面（弧状）を呈するが、笵Ｂ段階以降の鴟尾では、そのような曲面を確認することができ」ず、「笵Ａ段階に見られ

る曲面（弧状）は単なるナデ調整で創作されるものではなく、大脇潔氏が指摘するように型板などを使用しないと困難であろう。鴟尾が変遷していく過程で鰭部正段の製作技法（手法）も変化していっていることに注意する必要があろう」との指摘をいただいた。これを受けて改めて検討した結果について記しておきたい。

兵庫県内に所在する資料のうち今回実見して検討できた鰭部資料は、笵型Ａに推定も含めて対応する下太田廃寺例（第 13 図 25 －鴟尾７他）・中井廃寺例（第 13 図 27 －鴟尾２-４・５）・今宿遺跡例（第 14 図 20 －鴟尾１- ４）・千本屋廃寺例（第 14 図 29 －鴟尾２）・溝口廃寺例（第 15 図 17 －鴟尾 1）・市之郷廃寺例（第 15 図 19 －鴟尾１、８- ８・９他）、笵型Ｂに対応する可能性がある赤坂窯跡１号窯例（第 16 図 23 －鴟尾１）、笵型Ｄに対応する下太田廃寺例（第 17 図 25 －鴟尾 14 他）である。県内資料だが都合により実見が叶わなかった笵型Ａに対応する可能性のある辻井廃寺例（第 13 図 21 －鴟尾１）および県外所在資料については、各関係文献の報告・写真・図面や展示物に基づく検討となる。

検討の結果、笵型Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄに対応する鰭部の段の削り取りは、縦帯部の突帯を貼り付けた後に行われており、突帯にヘラの痕跡が認められるものや、削り取りが突帯の手前で止まるものが認められた。そして、外面の正段は、段の削り取り（切り取り）方が深くなるものと浅くなるものの２種に分けられる。深いものについては、段差が１cm 前後で沈線（切り取り筋）の下からの削り取る角度が大きい傾向にあり、その後の削り取り面は調整によって外面の断面形が曲線（弧状）を描いて曲面をもつ。また、鰭部の位置や幅によっては曲線が緩やかになる部分もみられる。削り取り面への調整は、板状の工具を用いてナデ調整されて曲面に仕上げられ、砂粒の動きが見えるものや、なめし革等で丁寧にナデ調整されて滑らかになるものも見られる。段への接触面が内湾する曲線を呈する板状工具が用いられた可能性も考えられ、特に笵型Ａに対応する下太田廃寺例（第 13 図 25 －鴟尾７他）や対応が推定される溝口廃寺例（第 15 図 17 －鴟尾１）は外面の断面形は中央付近が膨らむような曲線となっている。その他に県内資料で曲面が見られるのは、中井廃寺例（第 13 図 27 －鴟尾２- ４・５）、辻井廃寺例（第 13 図 21 －鴟尾１）で、いずれも削り取りでできた角を調整によって曲面に仕上げられている。その他の県外資料については第２表にまとめた。また、段差部分に沿ってナデ調整したとみられ、隣接する上段の縁辺には連続する調整痕が認められ、凹線状になるものや面が僅かに屈曲するもの、縁辺が僅か立ち上がるものも見られる。

一方、浅いものは、段差が 0.5cm 前後で沈線（切り取り筋）の下から削り取る角度が小さく、その後の削り取り面への調整の仕方によって外面は概ね平坦に近くなり、鰭部の位置によっては外面の断面形が僅かに曲線を描くものもある。削り取り面への調整は、板状工具によるナデ調整が施され、砂粒の動きが見えるものや、なめし革等で滑らかになるものも見られる。県内資料で該当するのは、笵型Ａに対応する市之郷廃寺例（第 15 図 19 －鴟尾１、８- ８・９他）や対応が推定される千本屋廃寺例（第 14 図 29 －鴟尾２）、縦帯部

に近い部分のみの確認であるが今宿遺跡例（第 14 図 20 －鴟尾 1 - 4）と、笵型Ｂに対応する可能性がある赤坂窯跡 1 号窯例（第 16 図 23 －鴟尾 1）、笵型Ｄに対応する下太田廃寺例（第 17 図 25 －鴟尾 11・14 他）で、その他の県外資料については第 2 表にまとめた。笵型Ａに対応する市之郷廃寺例や笵型Ｂに対応する可能性がある赤坂窯跡 1 号窯例には外面の断面形の中央が僅かに膨らむ曲線を持つものもみられ、接触面が僅かに曲線を呈する板状工具も用いられた可能性もある。また、段差部分に沿ってナデ調整しており、隣接する上段の縁辺には連続する調整痕が認められものや、縁辺が小さな突線状に僅かに立ち上がるものも見られ、特に市之郷廃寺例に顕著である。

明らかに段の断面形が異なるのは、笵型Ｄに対応する下太田廃寺例（第 17 図 25 －鴟尾 14 他）で、沈線を入れて削り取った面は丁寧に板状工具などでナデ調整されて平坦となっており、連続する段の断面形は鋸歯状をなしている。笵型Ｄは、他の笵型に比べて径も小さく、鴟尾の規模も小さく、鰭部の段の幅も狭くなっている。

以上のことから、同一資料で蓮華文と鰭部の段が確認できるものおよび別資料でも蓮華文と鰭部の対応関係が明らかなものを中心に見ていくと、鰭部の正段は段の削り取りが深く、外面の断面形が曲線を描いて曲面をもつものから、削り取りが浅く、外面の断面形が僅かな曲線または直線的になって平坦に近い形に変化するといえる。この変化は、笵型Ａに対応する鴟尾の製作の中で見られ、笵型Ｂ・Ｃに対応する鰭部の段は概ね削り取りの浅い部類に所属し、笵型Ｄでは段の外面形は平坦となり、先に確認した笵型Ａ～Ｄの製作順序と矛盾しない。ただし、鰭部段と胴部唐草文の施文方法との関連性については、新たに溝口廃寺や千本屋廃寺で篦書き沈線の資料が見つかったことにより、これまでとは異なって製作段階の想定された順序と各部位の関係がやや錯綜する様相を呈している。同一資料で胴部唐草文と鰭部の段を確認できる資料が殆ど無いため、その相関性を段階的に明確に区分できるのか判断が難しいが、少なくとも、笵型Ａに対応する鴟尾の胴部唐草文の施文技法が「凸型削り出し」から「篦書き沈線」へ遷移するなかで、鰭部の段も漸次的に深い削り取りと曲面をもつものから、浅い削り取りであまり曲面を持たない（平坦な）ものに変化を遂げたといえよう。

④縦帯部の貼り付け突帯　笵型Ａ～Ｄの蓮華文が残る鴟尾の断片資料には、縦帯部に突帯が貼り付けられているのが確認できる。特に笵型Ａの資料については断面方形の 2 条の突帯が基本的に縦帯部に貼り付けられる（第 13 図 25 －鴟尾 1、第 15 図 19 －鴟尾 1）。そして、笵型Ｂ～Ｄの断片資料では、貼り付け突帯が 1 条のみ残存する状況が確認できる。笵型Ｂの鴟尾については、四天王寺Ｅを参考にすれば、同様に縦帯部には蓮華文を挟む 2 条の突帯が貼り付けられたと考えられる。そして、笵型Ｄの鴟尾については、下太田廃寺例鴟尾 9 ・14（第 17 図 25 －鴟尾 9 ・14）を見ると、縦帯部には蓮華文を挟む 2 条の突帯が貼り付けられたことが推測できる。笵型Ｃの鴟尾についても、四天王寺Ｅや遺存良好な笵型Ａや、笵型Ｂ･Ｄの想定を踏まえると同様に 2 条の貼り付け突帯の存在が推測できる。

したがって、笵型Ａ～Ｄを貼り付けた鴟尾は、基本的には平行する２条の突帯の間に蓮華文を貼り付けて縦帯部とし、胴部と鰭部を画すものとなっていると考えられ、縦帯部となる２条の貼り付け突帯は、播磨の蓮華文帯鴟尾で共通する属性といってよい。

播磨の蓮華文帯鴟尾の全体像　上記を踏まえて、笵型Ａ～Ｄを貼り付けた蓮華文帯鴟尾の全体像で共通するのは、２条の貼り付け突帯の間に蓮華文を貼り付けて縦帯部とし、鰭部外面は正段に削り出し、内面を無文とする点である。そして、資料の出土例がもっとも多い笵型Ａの蓮華文帯鴟尾については、これらの共通属性に加えて、全体像を把握できる資料として以前より参考とされる摂津の四天王寺Ｅの蓮華文帯鴟尾の大型の破片から分かるとおり、胴部に渦巻き状の唐草文が施されることが共通する。唐草文は、凸型削り出し、凹型削り取り、篦書き沈線の３種の施文方法がとられ、概ねこの順序で変遷した（大脇1983・菱田1988）。ただし、笵型Ｂ～Ｄの蓮華文帯鴟尾の胴部に唐草文が施されたかは不明である。さらに、笵型Ａをもつ鴟尾の脊稜部分については、凸型の唐草文をもつ中井廃寺例（第13図27－鴟尾２-２）や金剛山廃寺例（第14図26－鴟尾１）や篦書き沈線の唐草文をもつ市之郷廃寺例（第15図19－鴟尾４）をみると山形の稜線を持つことが分かる。また、下太田廃寺例（第13図25－鴟尾１）は、縦帯部から凸型唐草文が施される胴部に向かう面が縦帯部に対して鋭角に接続していることから、おそらく脊稜は鰭部の頂部前面を除いて頭部まで山形稜線を呈していたと考えられる[14]。また、笵型Ｄについても下太田廃寺例（第17図25－鴟尾９）の縦帯部と胴部の接合する角度や形が、前掲の下太田廃寺鴟尾１と類似することから、同様の山形稜線をもつ脊稜であるか、単純に断面が丸くならない胴部になる可能性が高い。

西播系蓮華文帯鴟尾の分類　以上のような共通する縦帯部と鰭部の属性をもつ鴟尾が、播磨の蓮華文帯鴟尾の特徴といえよう。このような特徴をもち、笵型Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの蓮華文を縦帯部に貼り付ける播磨の蓮華文帯鴟尾について、播磨西部を中心に分布する傾向から「西播系鴟尾」とも呼称されることと合わせて、それぞれ「西播系蓮華文帯鴟尾Ａ･Ｂ･Ｃ・Ｄ類」または「西播系鴟尾Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類」と呼称する。また、笵型ＡとＢが併存する四天王寺Ｅについては、「西播系蓮華文帯鴟尾ＡＢ類」と呼ぶこととする。そのなかでも、胴部に唐草文を施し、山形稜線の脊稜をもつ西播系鴟尾Ａ類は、後述のように出土数や出土地点が最も多く、蓮華文の笵型もＡ→Ｂ→Ｃ→Ｄへと変遷すると考えられることから、西播系蓮華文帯鴟尾の「基本形（定型）」になると考えられる。そして、西播系鴟尾Ａ類は、胴部唐草文の施文方法に変化をみせながら、鴟尾Ｂ類となり、さらに鴟尾Ｃ・Ｄ類へと展開していったといえる。

ⅲ　西播系蓮華文帯鴟尾の分布および生産供給

播磨国内での分布と生産供給　西播系鴟尾Ａ～Ｄ類の出土地点は、播磨国の西部を中心に分布しており、播磨国内では鴟尾Ａ類が９箇所、鴟尾Ｂ類が１箇所、鴟尾Ｃ類が２箇所、

鴟尾Ｄ類が１箇所である（第２表）。西播系鴟尾Ａ類の播磨国における分布状況をみると、面的に展開する一方、鴟尾Ｂ・Ｃ・Ｄ類については、単発的に分布していることが分かる（第１・27 図）。

播磨国における西播系鴟尾の生産地については、姫路市西部の丘陵地にある峰相山窯跡群が有力視されている（今里 1981、大脇 1983、菱田 1988）。峰相山窯跡群は、須恵器を焼成した窯が殆どだが、西播系鴟尾Ｂ類が採集されたと推定される打越窯跡（第 16 図 22 －鴟尾３）や、鴟尾Ｃ類の断片資料が出土した赤坂窯跡１号窯（第 16 図 23 －鴟尾２）も含まれ、まだ見つかっていない鴟尾Ａ類やＤ類が焼成された窯についても存在している可能性が高い。生産には須恵器工人が関わっていたと考えられている（大脇 1983、菱田 1988）。

播磨国西部における鴟尾Ａ類の分布のあり方は、峰相山窯跡群を中心に面的に展開していることから、ほぼ同時期におこなわれた多数の寺院造営に対応して生産・供給されたことを示すものと考えられる。なお、鴟尾Ａ類については播磨国外でも分布が確認されており、次項で詳述する。

鴟尾Ｂ類については、生産地の一つとして打越窯の可能性が挙げられる。その供給先は不明である。鴟尾Ｃ類については赤坂窯跡１号窯とそこから直線距離で約５km 離れた辻井廃寺（第 17 図 21 －鴟尾２）で出土している[15]。赤坂窯跡１号窯では辻井廃寺と同笵の複弁八葉蓮華文軒丸瓦も出土しており、辻井廃寺の瓦を生産供給していたと想定される。また、鴟尾Ｄ類については、下太田廃寺でのみ出土しており、下太田廃寺のみに向けた生産供給の可能性がある。辻井廃寺では鴟尾Ａ類とＣ類が、下太田廃寺では鴟尾Ａ類とＤ類が出土しており、鴟尾の単発的な分布を示す消費地遺跡は、西播系鴟尾が重複して出土する地点であるといえる。しかも、いずれの鴟尾Ａ類も凸型の胴部唐草文を施す古段階のものであること考慮すれば、鴟尾Ｃ・Ｄ類は、寺院の伽藍整備に合わせて追加する形で単発的に生産供給された鴟尾と考えられ、鴟尾Ｂ類についてもその可能性がある。

播磨国外での分布と生産供給　播磨国外でも西播系蓮華文帯鴟尾の出土が確認されている。鴟尾Ａ類については、美作の大海廃寺、山背の大宅廃寺・法琳寺跡、摂津の四天王寺（四天王寺Ｅ）の４箇所で確認され、また、鴟尾Ｂについては摂津の細工谷遺跡から断片資料が出土している[16]。四天王寺Ｅは、笵型Ａ・Ｂが同一個体に貼り付けられた西播系鴟尾で、笵型Ａの損傷が進行して製作時に使用不可となったため、笵型Ｂへ移行したとされる（大脇 1983）。鴟尾Ｂ類の断片資料が出土した摂津の細工谷遺跡も合わせて考慮すると、摂津に向けた生産供給のなかで鴟尾Ａ類は最後を迎え、鴟尾ＡＢ類から鴟尾Ｂ類へと推移していったことがわかる。基本的に播磨国外に向けた製作を展開し、生産供給されたのが西播系鴟尾の「基本形（定型）」である鴟尾Ａ類だったといえる。

播磨国外の各出土地点については、播磨国から遠隔地となり単発的にみえるが、山背の大宅廃寺と法琳寺跡、摂津の四天王寺と細工谷遺跡については各国で地理的に非常に近接

している点は特徴的である[17]。播磨国外における各地の寺院造営に向けた鴟尾の生産・供給のあり方は、播磨からの工人の移動を伴った寺院近傍での生産や、各地域での在拠点地的生産、あるいは局地的な製品の搬入の可能性も考えられるが、今後の検討課題である。

西播系鴟尾Ａ類の生産供給のあり方　これまでにみてきた播磨国内外における西播系鴟尾Ａ類の生産供給のあり方について、鴟尾Ａ類の変化から検討してみたい。西播系鴟尾Ａ類について、菱田氏は胴部唐草文の篦書き沈線化の前後で古段階と新段階に区分し、新段階に遠隔地への生産が行われたことを指摘する（菱田 1988）。今回、増加した資料と蓮華文の笵傷進行と胴部唐草文の施文技法の関係も踏まえて検討した結果、篦書き沈線文の有無での明確な区分は難しいが、篦書き沈線による胴部唐草文の出現時には概ね播磨国内で一定程度の生産供給がおこなわれており、その出現後には国外に向けた生産も開始し、同時に播磨国内の寺院への供給も随時おこなっていたと考えられる（第２表）。千本屋廃寺例は、凹型削り取り技法と篦書き沈線技法の両方の胴部唐草文の断片資料（第 14 図 29 －鴟尾１、第 15 図 29 －鴟尾３）が確認されており、その過渡期として位置づけられる。また、播磨国内外の生産供給が随時おこなわれていたこと示す裏付けとして、播磨の市之郷廃寺例（第 15 図 19 －鴟尾１・８- ９）が挙げられる。市之郷廃寺例については、笵型Ａの中房や弁区にある笵傷がかなり損傷の進んだもので、その位置づけは美作や山背の寺院への生産供給の後、そして笵型Ａが使用不可となる摂津四天王寺Ｅの生産の前に、播磨の市之郷廃寺例の生産供給があったと考えられる（第 11 図・第２表）（垣内 2013）。このことは、鴟尾Ａ類の生産供給が、播磨国外への製作の間に国内で需要がある寺院に対しても生産供給をおこない、その後に再び国外に向けた製作をおこなうという、国内外各地の寺院に対して製品や製作工人が適宜差配されながらおこなわれていたことを示すといえよう。そして、このような状況には、その差配を管理する主体や体制の存在も想定され、その管理主体と国内外の寺院造営主体との間に存在する様々な関連性のなかで、鴟尾Ａ類の生産供給がおこなわれたと考えることができる。

さらに市之郷廃寺については、蓮華文帯鴟尾の他に東播系沈線文鴟尾Ⅰ類（ⅠＡ類の可能性が高い）も出土しており、摂津の四天王寺と同様に東播系鴟尾と西播系鴟尾が生産供給されたことがわかる。これまでに播磨国外でみつかった沈線文鴟尾の可能性のある断片資料はいくつかあるが、東播系鴟尾の生産供給例として知られるのは、今のところ四天王寺Ｃ例だけである。西播系鴟尾ほど頻繁に行われたものではないかもしれないが、東播系鴟尾についても多少の展開はあった可能性がある。しかし、東播系鴟尾と西播系鴟尾の双方を播磨国内の市之郷廃寺と国外の摂津四天王寺への生産供給が可能となった背景には、四天王寺の造営・伽藍整備の主体との関連性だけではなく、播磨国内において両系統の製作工人や製品の生産供給を差配できる主体や体制が推測できよう。

ⅳ　西播系蓮華文帯鴟尾の製作年代と展開について

製作年代について　西播系蓮華文帯鴟尾Ａ類の製作年代については、これまでの研究において大脇氏は「様式上の特色と、笵Ａおよび共伴する軒瓦の瓦当文様の様式から」、「天武朝から持統朝にかけて」の年代幅を指摘し（大脇 1983）、菱田氏は「古段階の例については、」「出土寺院の創建瓦の年代観から７世紀後葉から８世紀初頭」とし、推定打越窯跡表採例の存在から「新段階の年代」は「８世紀前葉」とする（菱田 1988）。そして、今里氏は新分類の華文飾板Ⅰ～Ⅴ型について「７世紀末葉から８世紀前葉に及ぶもの」としている（今里 2010 ａ）。

鴟尾Ａ類の年代について、大脇氏、菱田氏の研究時にはみつかっていない、赤坂窯跡１号窯から 1987 年実施の発掘調査で出土した西播系鴟尾Ｃ類の製作年代をふまえて検討しておく。赤坂窯跡１号窯からは、鴟尾Ｃ類とともに須恵器が出土しており、平城京編年Ⅰ～Ⅲ期の併行期に位置づけられ、８世紀前葉の年代が与えられている（小柴 2019）。このことと既往の研究を合わせて考慮すれば、鴟尾Ｃに先行する鴟尾Ａ類については、少なくとも７世紀後葉～８世紀初頭に位置づけられる。鴟尾Ｄ類については年代を決定する決め手にかけるが、鴟尾Ｃ類と同様な生産供給のあり方が推測されることから、同時期の所産として考えておきたい。鴟尾Ｂ類については、四天王寺Ｅの存在から鴟尾Ａ類の最終段階とほぼ同時期であり、また、鴟尾Ｃ・Ｄ類との播磨国内でのあり方も考慮すれば、鴟尾Ａと後出する鴟尾Ｂ・Ｃ・Ｄ類の製作年代の間には大きな隔たりは無いと考えられる。

西播系蓮華文帯鴟尾の展開　以上の製作年代に加え、これまでの分類およびその分布と生産供給のあり方について検討を加えた西播系蓮華文帯鴟尾の展開の結果を、次のとおり段階を設定してまとめておく。

《兵庫の蓮華文帯鴟尾「西播系鴟尾」の展開について》※〔　〕内の数字は出土遺跡数

第１段階：基本形となる西播系蓮華文帯鴟尾Ａ類の成立と展開。

：播磨国内で面的展開、国外で点的（局地的）展開。

：播磨国内の生産地は峰相山窯跡群か。

【７世紀後葉～８世紀初頭】

第１－１段階：播磨西部を中心に面的に分布。国内の寺院造営に対応する生産供給。

鴟尾Ａ類（胴部唐草文凸型削り出し・凹型削り取り）

供給先：播磨国内〔４～６〕

第１－２段階：随時、播磨国内寺院への生産供給。

播磨国外の地域に向けて点的に生産供給開始。

鴟尾Ａ類（胴部唐草文篦書き沈線）

→鴟尾ＡＢ類（笵型Ａ損耗）→鴟尾Ｂ類

供給先：播磨国内〔３〕

播磨国外〔美作１、（伯耆１）、山背２、摂津２〕

第２段階：播磨国内で単発的に出土地分布。
　　寺院の伽藍整備等に個別対応した追加的生産供給：生産地は峰相山窯跡群。
【８世紀前葉】　→鴟尾Ｂ類（生産地：推定打越窯跡→供給地：不明）
　　鴟尾Ｃ類（生産地：赤坂窯跡１号窯→供給地：辻井廃寺）
　　鴟尾Ｄ類（生産地：不明→供給地：下太田廃寺）

まず、第１段階と第２段階に区分される。第１段階は西播系蓮華文帯鴟尾の基本形となる西播系蓮華文帯鴟尾Ａ類が成立し播磨国内外に展開する段階で、７世紀後葉～８世紀初頭に位置づけられる。播磨国内では基本的に峰相山窯跡群が生産地となっていたとみられる。播磨国内では面的に、播磨国外では点的（局地的）に展開する。第２段階は、播磨国内で単発的に出土地が分布する段階で、寺院の伽藍整備等に個別対応した追加的生産供給がおこなわれたと考えられる。その生産地も峰相山窯跡群となり、鴟尾Ｂ・Ｃ・Ｄ類が展開した。さらに第１段階については、鴟尾Ａ類の胴部唐草文の篦書き沈線文の出現を軸にその前後でそれぞれ第１－１段階と第１－２段階に区分できよう。第１－１段階では、鴟尾Ａ類の胴部唐草文が凸型削り出し技法と凹型削り取りの技法によって施文される。この段階では、播磨国内の多数の寺院造営に対応して鴟尾Ａ類が生産供給される。一定程度の播磨国内の需要に対応した後、第１－２段階では、胴部唐草文が篦書き沈線技法によって施されるようになる。この段階では､随時播磨国内の寺院へ生産供給をおこなうとともに、播磨国外の地域に向けた点的（局地的）な生産供給が開始する。国外の各地域において寺院個別に対応していたか、各地の拠点的な生産地から複数の供給先に向けて生産していたのか、あるいは播磨から製品の移動搬入がおこなわれていたかは現時点では不明である。鴟尾Ａ類の生産は、笵型Ａの使用不可とともに摂津四天王寺への生産供給が最後となり、新たに笵型Ｂを創出して摂津の需要に対応した後は播磨国外への生産供給が見られなくなる。そして、第２段階には播磨国内のみの生産供給へ戻り、新たな展開を迎えたと考えられる。

Ｅ　兵庫県の唐様式の鴟尾

ⅰ　兵庫県の唐様式の鴟尾

唐様式の鴟尾は、「天智朝に突如出現」し、「随から初唐にかけての鴟尾の影響を間接的に受けたと思われるもので鰭が頂部をめぐらずに途切れ、脊稜が前方に突出する」が、「縦帯を複帯構成にして仏像の光背と共通する文様を飾る点など創作的要素が強い」とされる（大脇 2002）。兵庫県では、唯一摂津国の猪名寺廃寺での出土が確認される。

猪名寺廃寺　講堂と塔西側から出土した２点がある。講堂跡出土例（第 18 図５－鴟尾１）は、左側面の縦帯が強く屈曲して頂部へ伸びる部分の破片で、縦帯は断面半円形の削り出し突帯で画する複帯構成である。内郭は２条１組の突帯で画して胴部と断面山形とやや浅

い谷形の段を交互に削り出し、外部は両側を各１条の突帯で画して連珠文を削り出す。鰭部は欠失しているが僅かに残る基部から、内外面に逆段を表しているとみられる。腹部にも削り出された文様の一部が残っているが、意匠構成は不明である。破片の内面には、腹部と縦帯部分を別の粘土で接合したとみられる剥離痕が認められる。また、破片の下方には粘土紐を積み上げたとみられる剥離痕も残る。塔跡出土例（第 18 図５－鴟尾２）は、左側面の胴部の破片で、幅の狭い段を削り出し、一部の先端は蕨手状となっている。

類例は大和の川原寺やドウジョウ遺跡等にあり、また川原寺をはじめ、猪名寺廃寺も含む川原寺式軒瓦が出土する寺に用いられた例が多く、その出現時期は、「川原寺が創建された 665 年から 670 年代のこと」とされる（大脇 2002）。猪名寺廃寺例については、７世紀後葉の所産の位置づけが考えられる。生産地についてはこれまでのところ判明していない。これまでに兵庫県では唐様式の展開は見られず、大和からの直接的な影響があったと考えられる。

Ｆ　地域色をもつ鴟尾（１）―兵庫県の山陰系鴟尾―

ⅰ　兵庫県でみられる山陰系鴟尾

兵庫県下では、山陰系鴟尾の展開が認められる。山陰系鴟尾として、但馬国の長見寺廃寺例（第 19 図１－鴟尾１- １・２）が挙げられる。出土地点も単発的に分布している点が特徴的である（第１・28 図）。以下に、まず山陰系鴟尾の呼称と特徴について整理し、兵庫県の山陰系鴟尾についてみていくこととする。

ⅱ「山陰系鴟尾」と「山陰型鴟尾」について

「山陰系鴟尾」や「山陰型鴟尾」の用語法と定義については研究者により微妙に異なる。以下に研究史を簡単にまとめ、本稿での呼称と定義について明確にし、あわせてその特徴をみていきたい。

大脇潔氏は、鳥取県及び島根県に分布する独特な文様を施す一群の鴟尾について、その特色を「縦帯の前方に鱗状の文様を沈線で表す」ことを挙げ、「山陰の地方色」として最初に提示した（大脇 1980）。その後、中原斉氏は、「縦帯の前方に鱗状の文様を沈線で描」くものについて、「他地域では見られず、山陰地方に独特な存在であることから」、「山陰型鴟尾」と呼称し、鰭部に段をつくるものと突帯で「段型を表現するもの」で細分できるとする（中原 1995）。さらに大脇氏は、「山陰系の鴟尾」または「山陰系鴟尾」と呼称して、「鳥取県から島根県にかけて山陰型と呼ばれる独特の鴟尾が分布」し、「共通する属性は、縦帯と段を細い貼り付け突帯で表現すること」で、「縦帯に沿って沈線で半円形ないしは鱗形の紋様を飾り」、「ボタン状の珠文を飾る例」もあるものとし、内面には須恵器と同じ「叩き目」を残す例が多いため、山陰地方のどこかの須恵器生産地で作られたとする（大

脇 1999・2002)。また、岸本浩忠氏は「山陰系鴟尾は、縦帯前方に沈線で鱗状の文様を描くという特徴をもつ」ものとし、縦帯や鰭部の貼り付け突帯については、山陰系鴟尾の特徴ではなく新旧を判断する要素として取り扱う（岸本 2004）[18]。そして、妹尾周三氏は、中原氏が提唱する「山陰型鴟尾」の語を統一して用いて、「縦帯と鰭部の段を細い貼り付け突帯で表現し、胴部（縦帯の前側）には沈線による鱗状の文様が見られるなど、他に類例のない特異なもの」として認識する。また、形状がある程度まで復元（推定）でき、山陰型の鴟尾を代表する等ヶ坪廃寺例、上淀廃寺例（鴟尾Ａ～Ｃ）、来美廃寺例について検討し、「山陰型の鴟尾を代表するもので、鱗状の文様の中にはボタン状の連珠文を貼り付けている」という属性も抽出している（妹尾 2011)。また、近年では、久保穣二朗氏が、山陰地方の鴟尾を集成し、これまでに「山陰系鴟尾」と呼称されてきた鴟尾の形態的・製作技法的特徴を整理し、狭義の「山陰型鴟尾」について再定義している（久保 2015)。その中で久保氏は「山陰型鴟尾」の定義において、次の４項目を提示する。①「縦帯と鰭部の段は貼り付けた突帯で表現する」こと、②「縦帯の前方に鱗状沈線文を２条ないしは１条を施文する」こと、③「鱗状沈線文内にボタン状の珠文を貼り付ける」こと、④「内外面に叩き成形痕を残し、焼成は堅く須恵質である」という４点である。中原氏もこれを踏まえて、「縦帯・鰭部を突帯で表現し、縦帯の前方に鱗状の文様を沈線であらわしている」ものについて「山陰系鴟尾」の呼称も挙げつつ、基本的には「山陰型鴟尾」の名称を用いる（中原 2017)。

以上から、「山陰系鴟尾」や「山陰型鴟尾」として認識できる形態的特徴については、久保氏の指摘する①②③につきるといえる。これらのいずれかが確認できれば、「山陰系（型）鴟尾」として取り扱われている[19]。

「山陰系」と「山陰型」との関係性を考えるうえで重要となるのは、これまでの「山陰系（型）鴟尾」の編年観に対する妹尾氏（妹尾 2011）の次の指摘である。妹尾氏は、縦帯前側に篦書き沈線で鱗状文様を施す野方弥陀ヶ平廃寺Ａ[20]について、縦帯に２条の沈線をもち、鰭部外面に正段を削り出す特徴も有することから型式学的にこれまで最も古く位置づけているが（大脇 1980、岸田 2004 ほか)、上淀廃寺例よりも後出するもので、周辺に点在する他型式との折衷品を考えることが可能であるとする。そして、「現状では年代的に最も古い上淀廃寺の鴟尾が作られて以後、段階的な型式変化を遂げずに長期にわたり定型化したものが認められる」と主張する。また、妹尾氏は、「特定の須恵器工人がこの鴟尾を山陰各地に広めたとは考えにくく、図案（絵画か？）などを利用して、その寺院の檀越（造営者）などと関係の深い須恵器工房に製作が依頼された可能性が高い」とも述べており、展開の過程についても一元的ではない可能性を指摘する。つまり、久保氏が「山陰型鴟尾」として挙げた形態的特徴①②③を全て備え、妹尾氏が最も古いと位置づける上淀廃寺例については「山陰系（型）鴟尾」の「基本形（定型)」と認識でき、それが周辺に展開する中で変容した一例が、野方弥陀ヶ平廃寺Ａと考えることができる。

これに対して久保氏は、野方弥陀ヶ平廃寺Ａを除いて狭義の「山陰型鴟尾」を定義し、むしろその祖型として位置づける。そして、玉鉾等ヶ坪廃寺Ａ・Ｂを「山陰型鴟尾」の始まりに位置づけて、鱗状沈線文の施文範囲が胴部中程から頂部までの狭い範囲に施される前三例から、頭部まで拡張される上淀廃寺例へ変遷すると想定している。

玉鉾等ヶ坪廃寺例、上淀廃寺例の前後関係について、ここでは簡単に結論は出せないが、いずれにせよ両例は①②③の形態的特徴を有し、「基本形（定型）」になると考える。そこで、本稿では上淀廃寺例や玉鉾等ヶ坪廃寺例を代表とし、久保氏が示す形態的特徴①②③の特徴をもつもの、特に②については鱗状沈線文を２条施文するものについて、「基本形（定型）」としての「山陰型鴟尾」と呼称し、それらと文様・意匠の系譜関係がみられるものも含めて「山陰系鴟尾」としておく[21]。

以上のような立場から、兵庫県の事例をみると但馬国の長見寺廃寺から、貼り付けた突帯で段を表現した鰭部の破片が出土しており、山陰系鴟尾に位置づけられる。

ⅲ　兵庫県の山陰系鴟尾

長見寺廃寺　長見寺廃寺からは、山陰系鴟尾と判断できる鰭部の破片が３点出土しており、うち残りのよい２点を図示している（第 19 図１－鴟尾１- １・２）。鰭部には、幅約１cm、高さ約１cm の断面三角形の突帯を貼り付けて段を表す。鴟尾１- ２には、突帯の下に浅く細い篦書き沈線で割り付け線が認められる。また、鰭部端部側には、主に外面に平行叩き目、内側に同心円文の当て具痕が残り、鰭部の成形には須恵器甕等の製作と同様の技法によって行われたことが明瞭に分かる。基本的には、これらの痕跡の上からナデ調整され、特に外面は叩き目が薄く残ることが多い。また鴟尾１- ２については、鰭部端面に平行叩き目があり、端部側内面にも当て具痕の上に平行叩き目が残り、補足の叩きが施されたものと見られる。鴟尾１- １の鰭部端面は、ケズリによって仕上げられている。焼成は、堅緻で須恵質を呈する。

山陰系鴟尾の分布と長見寺廃寺例の位置づけ　山陰系鴟尾は鳥取県から島根県に広がることがこれまでに指摘されているが（大脇 1999・2002）、但馬の長見寺廃寺例はその分布範囲の最東端となる。久保氏は、「山陰型鴟尾」について突帯の形状等からＡ～Ｄ類に細分しており、「基本形」となる玉鉾等ヶ坪廃寺Ａ・Ｂや上淀廃寺ＡはＡ類に、上淀廃寺ＢはＢ類として分類され、長見寺廃寺例はＣ類として分類されている。そして、概ねＡ類→Ｂ類→Ｃ類の変遷を想定し、Ａ・Ｂ類をⅠ期、Ｃ類をⅡ期として時期区分をしている（久保 2015）。本稿では先述の観点からⅠ期のＡ・Ｂ類を山陰型鴟尾として、Ⅰ期もⅡ期のＣ類も含めて山陰系鴟尾として捉えておく[22]。

ここで製作年代についてみると、妹尾氏によれば、伴出する軒瓦等から上淀廃寺例は天武天皇 12 年（683）年以前、玉鉾等ヶ坪廃寺例が７世紀末葉～８世紀初頭とする。一方、久保氏は、Ⅰ期の両例については、７世紀の第４四半期に位置づけ、Ⅱ期の長見寺廃寺例

を含む一群の製作年代について、８世紀第１四半期に位置づけている（久保 2015）[23]。「山陰型鴟尾」を間の時期幅も考慮して７世紀第４四半期～８世紀初頭に、後続するⅡ期の「山陰系鴟尾」の長見寺廃寺例は８世紀第１四半期の位置づけを考えておく。

長見寺廃寺例の生産供給　長見寺廃寺の鴟尾は、「遺跡周辺で焼成されたのではなく、上淀廃寺例との胎土の類似から」、「山陰地方で生産されたものが持ち込まれたものと考えたい」との意見があるが（山田 2007）、指摘される胎土の類似については、十分な説明はなされておらず、鴟尾の搬入の有無について簡単に判断できない。その一方、長見寺廃寺例に認められた平行叩き目が鰭部端面に残される技法は、因幡の上原南遺跡例にも認められ、因幡・但馬の地域以外では見られない技法で、同一工人の製作も指摘されており（久保 2015）、そこには、工人の移動も推測される。先述の妹尾氏の主張のように、特定の須恵器工人が山陰各地に広めたのではなく、図案を利用して各地の寺院造営に関連する須恵器生産地で製作されたとも想定でき（妹尾 2011）、そのなかに但馬の長見寺廃寺例も含めて考えることもできる。久保氏の意見も踏まえれば、各地の寺院造営に関連する生産地のなかには、図案とともに工人の移動があった可能性も考えられる。ここでは十分に検討できないため今後の課題としておきたい。

Ｇ　地域色をもつ鴟尾（２）―兵庫県の寒風窯系鴟尾―

ⅰ　兵庫県の寒風窯系鴟尾

寒風窯系鴟尾は、須恵器の産地として知られる備前国の寒風窯を中心にその周辺の窯でも生産された鴟尾で、特異な鰭の文様や形態に大きな特徴があるとされ、岡山県や香川県、大阪府でも類例が知られるようになってきている（大脇 2002）。『日本古代の鴟尾』では、鰭部の文様・形態からＡ～Ｄの「４型式」に分類されており、Ａは、通常の段型とするもの、Ｂは蕨手状の段型とするもの、Ｃは段型の代わりに文様を陰刻して並べるもの、Ｄは無文のものとしている（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。

兵庫県の出土資料の中にも、ＢやＣと共通、類似する属性を認めることが可能で、寒風窯系鴟尾として、但馬国の三宅廃寺例と播磨国の早瀬瓦窯跡例が挙げられる。いずれの出土地点も離れて単発的に分布している点が特徴的である（第１･28 図）。以下に三宅廃寺例、早瀬瓦窯跡例についてみていくこととする。

ⅱ　但馬国三宅廃寺出土の鴟尾について

三宅廃寺　三宅廃寺では、頭部の他に、縦帯部や鰭部の破片が採集されている（第 20 図２－鴟尾２- １、３- １・２・３）。縦帯部は、幅約 7.2 ～ 7.5cm、高さ約１cm の凸型断面方形で幅広い１条の帯の上に、直径 7.2cm の単弁七葉蓮華文が連続に笵型を押捺して施文される（第 20 図２－鴟尾２- １、３- １）。花弁は凸線で輪郭を描き、弁央は匙面状に窪む。

間弁は表現されない。無文でボタン状の中房の周りには１条の突線が巡り、弁の基部と接続する。また、鰭部外面には、削り出しによって正段が作り出され、段の端部は蕨手状に下方に向かって曲線を描いて下段の端部上辺に接続し、羽根が重なるように表現されている（第 20 図２－鴟尾２合成拓本・写真、鴟尾３- ２）。段の曲線と鰭部の縁辺との間には、狭くても約１cm の余白があり、板状工具によるナデ調整痕が残る。鰭部内面は板状工具で撫でつけて無文となる。幅約４cm の鰭部の端面には、華文のスタンプが連続に並んで押捺される。スタンプの文様面は、縦 4.7cm、横 4.0cm の長方形を呈し、その内側に一回り小さい長方形を太さ約３mm の突線で表現し、さらに内側の長方形の区画の中心に縦横 2.7cm の十字状の素弁四葉の花弁をもつ華文が配置され、間弁とみられる×状の突線がスタンプおよび内側長方形の対角を結び、華文の中心を通る文様となっている。実物は確認できなかったが、拓本では華文スタンプの中心に拒鵠用の穿孔が一つ置きに施されるものもあるようである（第 20 図２－鴟尾２合成拓本）。鴟尾２- １の内面の剥離痕の観察から、腹部と鰭部・縦帯部は別粘土を接合して成形したとみられる。いずれの資料も概ね灰色を呈し、硬質に焼成される。胎土は、石英等の１～２mm の粗い砂粒が目立つ特徴的なもので、三宅廃寺や三宅廃寺瓦窯で見つかっている創建瓦と考えられる単弁九葉蓮華文軒丸瓦や、輻線の間に珠文と矩形文を配する周縁を持つ単弁六葉の蓮華文軒丸瓦とも類似する。

三宅廃寺例の寒風窯系の要素と讃岐の鴟尾　三宅廃寺例は、縦帯こそ蓮華文が押捺される蓮華文帯をもつが、西播系蓮華文帯鴟尾とは異なり、直接的な系譜は辿りにくい。一方、鰭部段の端部が曲線を描く点は、蕨手状の段型を持つ寒風窯系Ｂと類似し、その中でも「先端を丸めた均一な段の連続文様」（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）の〈Ｂ－３〉に近似する。また、それ以上に酷似する鴟尾は、讃岐国の東部に分布する石井廃寺例・極楽寺跡例・願興寺例に認められる（大脇 1999）（第 22 図）。

讃岐国の古代鴟尾については、川畑聰氏の研究（川畑 1996b）が詳しく、以下の各例の数値等の詳細についてはこれを元に記述する。石井廃寺例では、縦帯部には、幅６cm、高さ 0.5cm の凸型１条の帯上に直径 5.2cm の単弁八葉蓮華文を連続に笵型を押捺して施文する。蓮華文は、「外縁および蓮弁輪郭と中房周囲を沈線で表現し、蓮弁および間弁と中房を凸で表現している」。胴部には、縦帯の前方に大きい鋸歯文が浅い沈線によって施される。鰭部は外面を正段に削り出し、先端には「弧形」を表す。鰭端部には２条の突帯を巡らせている。極楽寺跡例は、鰭部外面に正段を削り出し、先端を「弧形」に表す。鰭端部は、布目が外面から内面にかけて連続して残り、段と布目の間に斜格子の叩き目が残る。縦帯部の一部が残り、「断面台形の突帯と径１cm の珠文」が見られるという。また鰭部端面には、拒鵠用の穿孔が認められる。願興寺例は、縦帯部には幅６cm、高さ１cm の凸型１条の帯の上に直径 5.7cm の単弁八葉蓮華文を連続に笵型を押捺して施文する。蓮華文は、「くぼんだ円盤形に蓮弁輪郭と中房を陽刻した表現で、間弁は見られない」（川畑 1996b）。縦帯前方の胴部には浅い沈線によって、鋸歯文とみられる文様が施される。鰭部

外面には正段が削り出されるが、端部については欠損のため不明となっている。

以上の鴟尾と三宅廃寺例を比較すると、縦帯部単弁七葉蓮華文の表現は、単弁八葉蓮華文の願興寺例と、弁数と直径を除き、弁形や中房の表現や特徴は極めて類似しているといえる。また、鰭部の段や段端部の曲線（「弧形」）が下段の端部に接続する仕舞い方については、極楽寺跡例とも石井廃寺例とも類似するが、鰭端部の余白部分の状況に違いが認められる。ただし、鰭部端面に拒鵠用の穿孔が認められる点は、極楽寺跡例と共通する。このような類似性を見ていくと、三宅廃寺例は讃岐のこれらの鴟尾と特徴が非常に類似、共通することが明らかである。ここで寒風窯跡〈Ｂ－３〉の鰭部端部の仕舞い方について見ると、下段の端部と接続せずやや離れている状況が分かる[24]。このことを勘案すれば、三宅廃寺例は、寒風窯よりも讃岐の鴟尾との影響関係が密接であるといえる。逆に、讃岐では寒風窯跡〈Ｂ－２〉と類似する片山池１号窯跡例や、寒風窯跡Ｃと頭部の表現が類似する鴨廃寺例もあり、寒風窯跡との関連性が強いと考えられ、特に「東讃においては長い期間にわたって寒風窯跡と関係を保っていた可能性」も指摘されている（川畑 1996b）。

讃岐の鴟尾との関係性　問題となるのは、讃岐の鴟尾と三宅廃寺例の前後関係についてである。讃岐の鴟尾の変遷について、川畑氏は、寒風窯跡の〈Ｂ－２〉から〈Ｂ－３〉への変化と讃岐の鴟尾を対比し、片山池１号窯跡例→石井廃寺例・極楽寺跡例の変遷を想定する。そして、縦帯部蓮華文の表現の簡略化という視点から、石井廃寺例→願興寺例の変遷を指摘する（川畑 1996b）。鰭部の比較から前後関係を導き出すのは難しいが、縦帯部蓮華文の簡略化という視点から、文様の細部表現は類似するものの弁数が減少するという点を重視すれば、讃岐石井廃寺例→讃岐願興寺例→但馬三宅廃寺例の変遷が考えられる。これに合わせて文様の直径も順に 5.2cm → 5.7cm → 7.2cm と次第に大きくなり、縦帯の幅も讃岐石井廃寺・願興寺例６cm →但馬三宅廃寺例 7.5cm と大きくなっていく。このような数値の推移も変遷の傍証といえよう。

ここで注目したいのは、三宅廃寺の創建瓦のひとつと考えられる単弁九葉蓮華文軒丸瓦である（第 21 図）。中房蓮子数は１＋８で、弁区は、凸型の子葉に対して蓮弁の弁央がやや深く窪む、彫りの深い文様で、隣接する間弁同士は端部が連結し、周縁は素文の平縁となっている点は特徴的といえる。奇しくも同様の平縁を有し、蓮弁の特徴も類似する瓦当文様は讃岐極楽寺跡出土の軒丸瓦 GK101 にも認められる[25]。GK101 は細単弁十二葉蓮華文軒丸瓦で、中房蓮子数は１＋８＋12、蓮弁は凸型の子葉と弁央が少し窪む蓮弁となっており、間弁同士は端部が連結し、弁区外斜面に線鋸歯文を施し、周縁は素文の平縁となる。三宅廃寺例と比較すると、GK101 とは素文平縁の周縁や弁区の意匠は共通するが、弁数の減少、外側の中房蓮子の減少、そして弁区外斜面の線鋸歯文の欠如が認められ、文様の簡略化が確認できる。つまり、鴟尾と同様に但馬三宅廃寺と讃岐極楽寺跡の軒丸瓦の間で文様の類似と簡略化の現象が指摘でき、軒丸瓦においても讃岐極楽寺跡 GK101 →但馬三宅廃寺軒丸瓦の前後関係を考えることができる[26]。このことを重視すれば、具体的な

展開過程についてここでは明らかにしえないが、讃岐東部に広がる類似意匠の鴟尾が軒丸瓦とともに但馬三宅廃寺へ伝わったといえよう。

したがって、寒風窯系鴟尾として把握できる三宅廃寺例は、寒風窯跡との直接的な関係よりも、讃岐を介した系譜関係が求めることができる。なお、但馬においては、現在のところ同様の鴟尾を三宅廃寺以外では確認できていないが、軒丸瓦の展開とともに鴟尾が展開した可能性も想起される。

三宅廃寺例の製作年代　三宅廃寺の鴟尾は、先述のとおり縦帯部蓮華文の意匠が、願興寺例に最も近いと考えられる。川畑氏は、願興寺例の製作年代については資料の制限から言及していないため（川畑 1996b）、後出する三宅廃寺例の製作年代は簡単に明らかにしえない。しかし、三宅廃寺創建軒丸瓦との関連性が考えられる極楽寺跡出土軒丸瓦 GK101 も含めその他の関連する鴟尾を手がかりにして考えておきたい。まず、川畑氏は、GK101 については「川原寺式の蓮弁を二分した十六葉から派生したもの」として「白鳳末期」に位置づける。また、鴟尾については願興寺跡に先行する石井廃寺例については「藤原宮造営以後、白鳳末期から奈良時代初頭」としており、極楽寺跡例については「白鳳末期から奈良時代前半に属する」としている（川畑 1996b）。そして、三宅廃寺の創建軒丸瓦や三宅廃寺の鴟尾はこれらより後出することを合わせて考えると、概ね８世紀初頭～前葉頃の位置づけが推測される。

三宅廃寺例の生産供給　但馬における寒風窯系鴟尾は、これまでに三宅廃寺例しか確認されていない。先述のとおり、三宅廃寺例の創建軒丸瓦と特徴的な胎土が類似しており、また、三宅廃寺の瓦を焼成した三宅瓦窯が寺院西側近傍の斜面に確認されていることから、鴟尾についても寺院近傍の窯で生産・供給されていた可能性が高い。そして、鴟尾については讃岐からの影響が強く見られ、関連性の高さは指摘できるが、讃岐から工人が移動して製作したかどうかは、検討も不十分なため現時点では断定はできない。また、須恵器の製作工人の関与については、頭部の破片に格子叩き目が残るが特徴的な成形技法の痕跡が確認できていないため、現時点では不明である。そして、このように但馬に単独で讃岐に関連する鴟尾等が存在する背景については、地理的関連性とは異なる軸の、例えば政治的関連性などが想起されるが、にわかに明らかにできず、今後の検討課題としたい。

ⅲ　播磨国早瀬瓦窯跡出土の鴟尾について

早瀬瓦窯跡　早瀬瓦窯跡は、早瀬廃寺の北側に近接して築かれた５基の瓦窯である。発掘調査によって３号窯の焼成部が部分的に検出されており、半地下式有階登窯であることが分かっている。出土した鴟尾は、主に３号窯の２回目操業面の下層の整地層中に階段状の瓦列として検出されているほか、周辺からも破片が採集されている。

これまでに見つかった早瀬瓦窯跡の鴟尾は、「青灰色還元硬質焼成」された一群（第 23 図 31 －鴟尾１～３のうち 1 - １～４・６のみ図示）と「橙色酸化軟質焼成」（第 23 図 31 －

鴟尾４～11のうち4-1・５、７、８のみ図示）の一群に大別され、それぞれの破片から２種類の復元図が提案されている（第24図）（藤木2004・2006）。ここでは、便宜的に前者の還元硬質焼成される一群をＡ類、後者の酸化軟質焼成される一群をＢ類と呼称する。

還元硬質焼成の一群＝Ａ類　鴟尾1-１・２は、鰭部外面を削り出して正段を作る。段の上辺と下辺の輪郭は端部に向かって上方に曲線を描き、段は端まで抜けずに鰭部端部が帯状に縁取られた無文帯となる。鴟尾1-１のように、鰭部端部の無文帯は、頂部に向かって湾曲する肩部あたりで一部内側に向かって波打つように屈曲する特徴的な部分がある（以後、この屈曲部分を「波状屈曲部」と呼称する）。鴟尾1-３は、頂部に近い突帯状の脊稜と正段をもつ胴部の破片で、脊稜は両縁に円形の抉り込みを一定間隔空けて連続に施して鋸歯状を呈する。鴟尾1-４は胴部の破片で、外面に削り出しによって正段が作り出される。鴟尾1-６は頭部の上部前端の破片で、上面に凸型長楕円形の飾りが貼り付けられる。頭部は、前面部が内側に入り込むソケット状になっている。

酸化軟質焼成の一群＝Ｂ類　鴟尾4-１は、鰭部外面に削り出して正段を作る。鴟尾７は、鴟尾1-１・２と同様に鰭部端部に無文帯を持つ。鰭部の段の輪郭は僅かに上方に曲線を描くとみられる。鴟尾4-５は、胴部～頭部の破片だが、外面には特に文様は施されない。頭部の前面部は、内側に入り込むソケット状になっている。鴟尾８は、鰭部外面に正段の表現と鴟尾1-３の脊稜の表現に似た鋸歯状の抉り込みの一部が残る幅広の突帯をもつ。

Ａ類・Ｂ類の特徴　Ａ類、Ｂ類ともに鰭部外面の段は曲線を描き、鰭部端部は無文帯で縁取られる。Ａ類については、鰭部端部の無文帯が、鰭部の肩あたりに特徴的な波状屈曲部をもつことが確認できる。また、脊稜には鋸歯状に装飾された突帯が貼り付けられる。胴部は外面に正段を持ち、頭部上方に装飾が施される。縦帯部は持たないとみられる。Ｂ類は、胴部から頭部にかけて無文とみられる。鰭部の基部にはＡ類の脊稜のような鋸歯状の飾りを持つ突帯が貼り付けられる部分がある。

早瀬瓦窯跡例にみる寒風窯系の要素　早瀬瓦窯跡例Ａ類・Ｂ類の鰭部の特徴として、曲線を描く段と鰭部端部の無文帯が挙げられる。また、Ａ類については鰭部の肩部に認められる波状屈曲部分もその特徴として表れる。これらの鰭部の特徴が、それぞれ寒風窯跡〈Ｂ－２〉・〈Ｂ－３〉や寒風窯跡Ｃの特徴と類似または共通していることが指摘できる（第25図上）。

寒風窯跡Ｂは、鰭部の段を蕨手状の段型とするもので、〈Ｂ－２〉は「均等に弧状の段型を削り出してそれを二つづつ継」ぎ、「鰭端に削り残す突帯に格子叩き目が残る」ものとなっている（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1980）。早瀬瓦窯跡例Ａ類・Ｂ類の鰭部の曲線を描く段と無文帯と形状は全く同じではないが、〈Ｂ－２〉の段をつなぐ工程が欠如し、鰭部端の無文帯の幅が広くなったもの、すなわち基本的な施文の過程は同じだが、僅かに過程と意匠を変容させたものといえよう。また、段を作り出す際に、段の端部側にも削り出しが入れられており、寒風窯跡〈Ｂ－３〉に見られる段端部に曲線を削り出す工

程が、直線的になったために無文帯が残されていると見ることも可能である。早瀬瓦窯跡例Ａ類・Ｂ類は、無文帯に叩き目は残らず、基本的には段を削り出す前に鰭部全体を板状工具で撫でつけて平滑になるように調整されており、西播系蓮華文帯鴟尾の段の製作方法など異なる系譜の技法の影響も認められる。そして、早瀬瓦窯跡例Ａ類の鰭部肩の波状屈曲部については、寒風窯跡Ｃ全般に認められる特徴である。寒風窯跡Ｃの鰭部肩の屈曲部は、概ね鰭部が頂部に向かって曲線を描く部分よりも下方に位置するため屈曲が強くなり段に近い形状となっている。それに対し、早瀬瓦窯跡例Ａ類は概ね鰭部が曲線を描く途中にあるため波状になっているとみられる。また、寒風窯跡Ｃの鰭部に特徴的な陰刻の文様は、早瀬瓦窯跡例に採用されていない点についても、鰭部に正段を作り出す西播系蓮華文帯鴟尾や寒風窯系〈Ｂ－２〉の影響が現れている可能性も考えられる。

以上のように、早瀬瓦窯跡例Ａ類・Ｂ類について見ていくと、寒風窯系鴟尾の要素を変容させながら取り入れられており、また同時に西播系蓮華文帯鴟尾の影響も取り込まれている可能性も指摘できよう。ただし、いずれも寒風窯系や西播系の製作工人の関与等、直接的な関連性は低いと考えられ、後出的な要素が強いといえる。

なお、鰭部端部の幅広い無文帯は、因幡国の奥谷窯跡例（第 25 図下）や土居百井廃寺でも確認することができ、因幡街道を通じた関連性を想起させる。

早瀬瓦窯跡例の製作年代　早瀬瓦窯跡３号窯からは、複弁八葉蓮華文軒丸瓦と窯に付属する排水溝に用いられた顎面施文四重弧文軒平瓦が出土している。軒丸瓦は、摩滅により不明瞭だが、周縁は斜縁で線鋸歯文が施され、川原寺式の系譜に位置づけられる。また、顎面施文軒平瓦については、今里幾次の研究に詳しく、８世紀第１四半期に位置づけられている（今里 1987）。出土軒瓦から、早瀬瓦窯跡例についても同様の時期の所産と考えられる。

早瀬瓦窯跡例の生産供給　早瀬瓦窯跡は、早瀬廃寺の北側に近接し、寺院へ瓦を供給する窯跡とされる（藤木 2006）。鴟尾も同様に寺院へ供給するために製作されたものといえる。そして、早瀬瓦窯跡例は県下でも類例がなく、単独的に分布していることから、基本的には早瀬廃寺のみへの供給のために生産されたものと考える。製作工人については、先述のとおり直接的ではないが寒風窯系や西播系等の影響が認められ、鴟尾の生産が展開していく中で、様々な鴟尾の影響を取り込んでいった過程がうかがえる。ただし、特定の工人の存在やその移動があったのか不明である。

Ｈ　兵庫県のその他分類未詳の鴟尾

その他の鴟尾として、破片資料のため全体の意匠や文様の構成が不明のため、現時点では上記の分類や新分類として認識することが困難な資料である香山廃寺例について取り上げることとする[27]。

香山廃寺　縦帯部・鰭部・腹部・胴部が一体となった破片資料１点のみである（第 26 図）。

縦帯部には高さ約２cm、幅約 2.5cm の断面台形の比較的大きな突帯が１条貼り付けられている。鰭部に段はなく、胴部に文様も認められず、ナデ調整の痕跡が残るのみとなっている。破片資料のため断定できないが、無文鴟尾の系列に分類できる可能性がある。また、成形技法は、胴部と腹部を同一の粘土紐を内傾に積み上げて作り、鰭部は別の粘土紐を外傾して積み上げている。接合の傾きの違いは、成形時における鴟尾に対する工人の立ち位置に関係すると考えられる。製作年代は、出土する創建軒瓦から８世紀前半頃が推測される。また、香山廃寺例の類例は周辺で認められず、単独で存在することから香山廃寺のみへの生産と供給が考えられる。ただし、縦帯部の貼り付け突帯は、香山廃寺が播磨西部に位置することから、西播系蓮華文帯鴟尾からの影響の可能性がある。成形技法が異なる点は、蓮華文帯鴟尾の生産よりも後出的であり、ある程度の時間的な隔絶があったと考えられる。

Ⅰ　兵庫県の鴟尾について　―導入と展開―

これまでに、兵庫県で出土した鴟尾の様相について大脇氏の分類をもとに概観し、検討を加えつつ具体的な様相をみてきた。これを踏まえて、以下に兵庫の鴟尾の導入と展開について、出土例がない淡路国を除く、播磨国、丹波国（西部）、摂津国（西部）、但馬国、の旧４国を軸にまとめておきたい。

播磨国　兵庫県で最も古く位置づけられる鴟尾は、播磨国の河合廃寺で出土した胴部有段鴟尾であり、その創建年代から７世紀第３四半期頃が導入の初現となる。胴部有段鴟尾は播磨国の賀毛郡に集中して分布しており、７世紀第４四半期～７世紀末頃まで寺院近傍の窯から生産供給されていた可能性がある。

その後、胴部有段鴟尾が簡略化された沈線文鴟尾は、基本形となるＩＡ類が７世紀後葉から高丘窯で基本的には生産され、播磨東部を中心とする多数の寺院造営にむけて供給される。また７世紀末～８世紀前葉にかけて、沈線文鴟尾は縦帯部に装飾を加えられる変化を伴い、当初供給を展開した範囲の外側での寺院造営にあわせて単発的に生産供給されたとみられる。また、桜峠窯跡５号窯例のように、沈線文鴟尾の生産が播磨西部の峰相山窯跡でも一部行われた可能性を想起させる資料も認められる。

一方、播磨西部においても、基本形となる笵型Ａの蓮華文が縦帯部に貼り付けられた蓮華文帯鴟尾Ａ類が、７世紀後葉～８世紀初頭にかけて多数の寺院造営に向けて生産供給される。その生産の中心地は、峰相山窯跡群にあったとみられる。そして、胴部の唐草文が篦書き沈線になる段階で、美作（・伯耆）・山背・摂津といった播磨国外の地域に向けた生産供給が開始するとともに、国内の寺院の需要にも随時対応している。摂津の生産供給において蓮華文が笵型Ｂに替わった後、国外に向けた生産供給はみられなくなる。８世紀前葉には蓮華文帯鴟尾Ｂ類～Ｄ類が、寺院の伽藍整備等に個別に対応して単発・追加的な

生産供給がなされるようになる。

そして、８世紀第１四半期には美作国や備前国に隣接する讃容郡では、寒風窯系の影響を受けた早瀬瓦窯跡例が確認できる。近接の早瀬廃寺に供給する瓦窯であり、鴟尾も早瀬廃寺創建にあたって生産供給されたものとみられる。早瀬瓦窯跡例には、鰭部に寒風窯系〈Ｂ－３〉やＣの別形式の特徴が同一個体に認められるほか、西播系蓮華文帯鴟尾からの影響や、因幡国の土師百井廃寺や奥谷窯跡との類似性も見られた。早瀬瓦窯跡例からは、鴟尾の生産供給が近縁地域周辺からの複数の影響を受けながら成立し、各地の鴟尾情報が複雑な形で伝播しながら取り込まれ展開していったことがわかる。

播磨国の現状で最後とみられるのが、８世紀前半頃の創建が考えられる香山廃寺例で、断片資料のため分類は未詳だが、胴部・鰭部ともに無文の可能性があり、貼り付け突帯が１条残るのみとなっている。突帯に西播系鴟尾の要素が残っているかもしれないがかなり後出的なものとみられ、香山廃寺のみに向けて生産供給されたと考えられる。

播磨国において、鴟尾導入当初の７世紀第３四半期頃では、胴部有段鴟尾の生産は、供給寺院の比較的近傍でおこなわれたとみられる。７世紀後葉～８世紀初頭には、多数の寺院造営に合わせて、東播系沈線文鴟尾ＩＡ類を播磨東部に、西播系蓮華文帯鴟尾Ａ類を播磨西部に展開する形で、東部の高丘古窯跡群や西部の峰相山窯跡群をそれぞれ生産の拠点として多数の鴟尾の生産供給に対応した。その最終段階には、市之郷廃寺や四天王寺などにみられるように東西両生産地を動員して両鴟尾を生産供給するようになったと考えられる。それ以後、概ね８世紀前葉～前半の寺院造営や追加の鴟尾生産の対応については、各寺院へ個別単独的、単発的に対応していったとみられる。そして、寒風窯系の早瀬瓦窯跡例やその他分類未詳の香山廃寺例にみられるように、次第に寺院近傍で個別的な生産・供給がおこなわれるようになっていった可能性がある。その後の鴟尾の生産はみられなくなったと考えられる。

丹波国（西部）　播磨国東部で展開した胴部有段鴟尾と沈線文鴟尾の組み合わせは、７世紀末創建の丹波国三ッ塚廃寺の近傍で、寺院へ向けて瓦を生産供給した天神窯跡において確認できる。胴部有段鴟尾は４号窯で確認され、３号窯では大きく括ると沈線文鴟尾に分類できる鴟尾が見つかっている。天神窯跡４号窯例は播磨の胴部有段鴟尾とは文様系譜も異なり、後出するものとみられる。また３号窯の沈線文鴟尾は、胴部・鰭部の段は沈線よりも太く深い削り取りで凹線とも呼べるものだが、縦帯部には突帯を貼り付ける装飾が施されている。文様的にみても東播系鴟尾よりも後出的であり、直接的な文様系譜は認めにくい。しかし、４号窯例も３号窯例ともそれぞれ意匠として播磨と共通する要素があり、異なる意匠の鴟尾が同一寺院へ向けて生産供給される状況から、鴟尾の導入にあたって寺院創建期の７世紀末に播磨国東部から何らかの影響があった可能性がある。

摂津国（西部）　７世紀後葉に創建された猪名寺廃寺に、唐様式の鴟尾が導入される。唐様式の鴟尾は、周辺やその後の展開はみられない。大和にある川原寺例等の出土例に類似

性が指摘でき、むしろ大和などの摂津より東部の地域から、強く影響を受けていた可能性が高く、個別単発的に鴟尾が生産供給されたものと考えられる。

但馬国　山陰系鴟尾が８世紀第１四半期に日本海に面した美含郡の長見寺廃寺に、寒風窯系鴟尾が８世紀初頭～前葉頃に内陸側に位置する出石郡の三宅廃寺に、いずれも単発的に導入される。山陰系鴟尾については、伯耆の上淀廃寺例や因幡の玉鉾等ヶ坪廃寺例が基本形の「山陰型鴟尾」としてあり、それらに文様系譜を持つ鴟尾が伯耆・因幡・出雲の山陰地方を中心に分布している。但馬の長見寺廃寺例はその分布域の最東端となる。生産地は不明だが、類似する技法痕跡をもつ鴟尾は因幡で確認されていることもあり、地理的・地縁的な関連性のなかで山陰系鴟尾が但馬へ展開していったとみられる。一方、三宅廃寺例は、寒風窯系の要素を示すが、寒風窯と直接的に関係せず、むしろ讃岐東部を介した寒風窯系鴟尾との系譜関係が想定された。讃岐東部の鴟尾と極めて類似することや同一系譜の軒丸瓦の存在からも、山陰系鴟尾とは異なり、讃岐という遠隔地からの直接的に近い鴟尾の展開が考えられ、地理的な関連性とは異なる、政治的関連性も含めた別軸の背景も想起される。讃岐からの工人の移動の有無は不明だが、文様等の詳細な情報を伝達できるような存在は推測される。寺院へ瓦を供給する瓦窯が近傍にみつかっており、鴟尾もおそらく寺院近傍で生産供給されたとみられる。

兵庫県の鴟尾について　以上のように、律令制の旧五国で構成される兵庫県という特質もあるが、播磨国と丹波国（西部）・摂津国（西部）・但馬国の３国とでは様相が大きく異なることが明らかとなった。基本的に、多くの古代寺院を有する播磨では、胴部有段鴟尾の導入後、短期間に多数の寺院造営に対応するにあたって、東西異系統の鴟尾の各生産拠点と供給範囲をもつ独自の体制が確立されていた、あるいは確立していったといえよう。さらに、播磨国外の寺院造営に向けて製作しつつ、国内寺院への生産供給にも対応するという状況や、市之郷廃寺や摂津四天王寺には東西の鴟尾が生産供給される状況、後に峰相山窯へ東播磨系鴟尾の影響が及んだ可能性があることなどから、播磨において鴟尾の生産供給を管理できる体制と主体の存在も想定される。その実態や背景については今後の検討課題としたい。

また、このような播磨の状況と比べて後者３国の鴟尾はいずれも単独的に存在し、むしろ他国・他地域を生産の中核とする鴟尾が展開していくなかで導入されており、非常に対照的である。すなわち、播磨を生産の中核とする鴟尾が他国・他地域へ点的（局地的）に展開する形と同様に、山陰系、寒風窯系、唐様式それぞれの展開のあり方があり、その生産と供給の関係する範囲が複数の国・地域を跨いで重なっているため、その一部が特に但馬、摂津に確認できたといえよう（第 28 図）。こういった違いが兵庫の鴟尾の特徴の一つといえるが、その差異の背景に一体何があるのか疑問は依然残る。残された検討課題は多いが、ここで擱筆としたい。

（兵庫県まちづくり技術センター）

謝　辞

本稿作成にあたり、下記の各機関、諸氏からご協力、ご教示いただきました。記して感謝申し上げます。

明石市役所、尼崎市教育委員会、小野市立好古館、加古川市教育委員会、加西市教育委員会、佐用町教育委員会、宍粟市教育委員会、たつの市立埋蔵文化財センター、丹波市教育委員会、豊岡市立歴史博物館「但馬国府・国分寺館」、姫路市埋蔵文化財センター、兵庫県立考古博物館、池田征弘、稲原昭嘉、井上　亮、上田健太郎、小川真理子、神所尚暉、岸本道昭、下山文隆、永井信弘、仲田周平、新田宏子、春成秀爾、菱田哲郎、堀　寛之、藤木　透、山上真子、山中リュウ、山本原也、山下大輝（50 音順・敬称略）

註

1　本稿では、高丘古窯跡群等の複数窯の集合や出土地土詳の伝伊勢村例も 1 箇所として計算している。

2　三ッ塚廃寺からは、腹部や縦帯部の断片資料が出土している（丹波三ッ塚遺跡発掘調査団 1975）。いずれも断片資料で、胴部有段鴟尾と断定できないため、本稿ではその他分類未詳鴟尾として取り扱うが、天神窯跡から供給された可能性がある。

3　桜峠 5 号窯の鴟尾 2-2･3（第 8 図 24 －鴟尾 2-2･3）については、現所在が確認できず資料を実見できなかった。拓本では太い沈線が認められるも縦帯部が不明のため、分類を保留する。

4　報告書（梶原 2000）の実測図では確認しづらいが、明瞭に縦帯部の 2 条の凹線や突帯が施される未報告の断片資料が複数確認できる。

5　桜峠窯跡 5 号窯例については、資料を実見できていないため明言は難しいが、沈線文鴟尾Ⅰ類として確実であれば、さらに西側に峯相山窯跡群まで沈線文鴟尾の分布域が広がることになる。

6　沈線文鴟尾Ⅰ類については、縦帯部の資料が出土しておらず、2 条の沈線の縦帯を確認できなかったため細分を保留している。縦帯をもつものについては、Ⅰ類の資料と差別化を図るために、A種として細分している。今後、2 条の沈線の縦帯を確認できなかった資料が資料の増加等でⅠA類と判別できれば、最終的に「東播系鴟尾Ⅰ類」としてすべて包括して呼称してもよいと考える。

7　『日本古代の鴟尾』（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）では河内中山観音寺にもⅠA類に分類できる鴟尾の断片資料が紹介されている。また、大和の法隆寺若草伽藍からも頭部に沈線が施される沈線文鴟尾と認識可能な資料も見つかっている。それらとの関連性については今後の課題としたい。

8　今宿遺跡と類似する資料として、山背の木野墓窯跡例があり、沈線文鴟尾として認識されている（大脇 1999･2002）。また、山背では、大宅廃寺や法琳寺跡で播磨の工人が関与したとみられる蓮華文帯鴟尾が確認されている。木野墓窯例との関連や蓮華文帯鴟尾の展開のあり方との関係性について今後の検討課題としたい。

9　三宅廃寺は、過去に薬琳寺跡とも呼称されているが、本稿では煩雑さを避けるため便宜的に三宅廃寺の呼称を用いる。

10　溝口廃寺例については、大脇氏（大脇 1983）、菱田氏（菱田 1988）の蓮華文帯鴟尾の検討では、篦書き沈線を持つ胴部唐草文の断片資料（第 15 図 17 －鴟尾 3）の存在が未周知または未出土のためか触れられておらず、鰭部段の断片資料（第 15 図 17 －鴟尾 1）が主な対象となっていたと考えられる。

11　たつの市埋蔵文化財センター岸本道昭氏から、中垣内廃寺例は一般個人表採資料で、出土地については信憑性に欠けるため、実際の出土地については今後の発掘調査資料との検証が必要との意見を得ている。

12　蓮華文帯鴟尾の成形技法としては、胴部と腹部は別の粘土紐を積み上げて接合する傾向にあるようだが、共通する属性として検討が不十分のためここでは保留しておきたい。

13　「打越窯跡例」と今まで呼称されてきた現在国立歴史民俗博物館に所蔵される大型の蓮華文帯鴟尾破片（第 16 図 22 －鴟尾 3）の出土地については、「傳播磨峰相山発見」説（大貫 1937）や、「太市村付近で発見されたとの所傳」から近隣の古代寺院所用と推測する「傳西脇廃寺阯発見」説（鎌谷 1942）、「播磨国揖保郡峰相山鶏足寺出土」説（宇野 1957）と諸説がある。今里氏は鴟尾 3 の来歴に関する聞き取り調査から得た「打越の谷川家の所有山林から発見」されたという証言と、自身が打越窯跡で採集した資料と同一個体であるという主張から、「打越窯址出土」と推測している（今里 1980）。しかし、確かな出土地については結局のところ不明であり、今回今里氏の資料も実見できておらず、同一個体かも明確に判断できない。したがって、鴟尾

３については打越窯跡周辺で採集されたと推定される鴟尾という理解にとどめておく。本稿では、打越窯跡産の鴟尾と今里氏が主張する、鴟尾３については、「推定打越窯跡採集鴟尾」あるいは「推定打越窯跡採集例」として呼称し、今里氏が採集した鴟尾３・２について「打越窯跡鴟尾」、「打越窯跡例」と呼称する。

14 『播磨上代寺院址の研究』（鎌谷 1942）では、推定打越窯跡表採例とともに脊稜の延長に対応する鰭部・縦帯部破片資料（香呂藤次氏蔵）の写真が掲載されており、これを見ると、縦帯部の突帯間にも鈍い山形稜線が確認できる。

15 たつの市の図録（たつの市立埋蔵文化財センター 2007）では、下太田廃寺から笵型Ｃの出土が指摘されているが、同図録では掲載図等がなく、管見の限り確認できなかったためここでは取り扱わない。

16 山背の法琳寺跡については、蓮華文帯鴟尾の蓮華文を貼り付けた縦帯部は確認されていないが、突帯を持ち鰭部外面が正段となる断片資料と、胴部に唐草文とみられる篦書き沈線が施された断片資料が出土している（大脇 1999）。胴部の唐草文および突帯と正段の鰭部の存在から、検討した蓮華文帯鴟尾の属性とも矛盾しないため、西播系蓮華文帯鴟尾Ａ類として取り扱う。また、これまでの研究では、伯耆の斎尾廃寺、美作の土居廃寺も西播系蓮華文帯鴟尾の他国への分布例として取り上げられている（大脇 1983・1999、菱田 1988）。まず、土居廃寺については、管見の限り、外面削り出し正段をもつ鰭部の断片資料の出土のみ確認されていることから、蓮華文帯鴟尾である可能性は否定できないが、明確でないためここでは取り扱いを保留する。次に、伯耆の斎尾廃寺の蓮華文帯鴟尾の蓮華文の笵型は、これまで笵型Ａと同笵であると認識されてきた。しかし、今里幾次氏の研究によって笵型Ａが複弁六葉であるのに対し、複弁八葉に復元され、語句のみの提示だが異笵であることが指摘されている（今里 2007、たつの市立埋蔵文化財センター 2007）。筆者も写真のみの確認であるが、弁区幅や弁端の形状が異なる点や、中房蓮子の配置も僅かにずれることから異笵と考える（第 12 図）。しかし、斎尾廃寺例は、縦帯部に蓮華文と突帯を貼り付ける資料や、外面に削り取りによって正段を作り出す鰭部、篦書き沈線で唐草文を施した胴部破片も知られており、西播系蓮華文帯鴟尾Ａ類と共通する属性が確認できる。久保穣二朗氏は、斎尾廃寺例の形態的特徴・製作技法を西播系鴟尾Ａ類と詳細に比較検討した結果、ほとんど差異が認めがたいことから、西播磨地域の同一工人グループが現地まで赴いて製作した可能性が高く、複弁八葉蓮華文の採用は斎尾廃寺建立者の意図によるものと推測している（久保 2020）。笵型は異なるものの特徴や技法が共通することから西播系蓮華文帯鴟尾Ａ類に対応する蓮華文帯鴟尾の播磨国外への展開の一様相と認識でき、後述する第１－２段階の位置付けが考えられる。しかし、笵型Ａとは異なる蓮華文の採用や関連性については、今回資料が実見できておらず十分な検討ができないため積極的な取り扱いを保留とし、今後の検討課題としたい。

17 美作の大海廃寺についても、今回取り扱いを保留した土居廃寺との距離は、播磨国内の分布圏内の距離と大差はあまりないといえる。

18 岸本氏は、研究（岸本 2004）のなかで鱗状の文様が施された資料が残っていない岩井廃寺例、大権寺廃寺例、上原南遺跡例、大御堂廃寺Ⅱ類等の資料について、鰭部の段に貼り付け突帯を有するものも、山陰系鴟尾として分類しており、鱗状文様以外に鰭部段や縦帯部の貼り付け突帯についても山陰系鴟尾として分類する基準としている。

19 久保氏（久保 2015）の指摘する、成形技法や焼成の程度は結果的に「山陰系（型）鴟尾」に特徴的に表れるが、この属性のみでは「山陰系（型）鴟尾」とは判断できない。ここではあくまで製作技法的特徴と形態的特徴を区別して考え、形態的特徴のみを「山陰系（型）鴟尾」の属性としておきたい。

20 妹尾氏は、縦帯に２条の沈線と鰭部外面に正段を持つ野方弥陀ヶ平廃寺Ａについて、「弥陀ヶ平廃寺出土の鴟尾（Ｂ）」（妹尾 2011）として論を進めているが、ここでは大脇氏（大脇 1999）や久保氏（久保 2015）の分類にあわせて「Ａ」としておく。

21 基本的には、①②③のいずれかの属性が認められれば、「山陰系鴟尾」と認識できるが、たとえば、２条に施文された鱗状沈線文とその中にボタン状の珠文が貼り付けられた断片資料が確認できれば、「山陰型鴟尾」として認識しやすく、すべての属性が必ずしも確認できる必要がない場合もあろう。本稿では、野方弥陀ヶ平廃寺例Ａについては「山陰系鴟尾」の範疇に含めておきたい。

22 久保氏の分類と変遷については、厳密にはＡ類がＡ１類とＡ２類、Ｃ類がＣ１類とＣ２類にさらに細分され、

Ａ１類→Ａ２類→Ｂ類→Ｃ１類→Ｃ２類という流れとなっている（久保 2015）。しかし、山陰型鴟尾の中での前後関係については久保氏の説と妹尾氏の説とでは異なっており、本稿では十分に検討ができないため、Ⅰ期のＡ類・Ｂ類を山陰型鴟尾の一群として、久保氏の分類では「山陰型鴟尾」として捉えられるⅡ期のＣ類については、先述のとおり山陰系鴟尾として認識する程度に留めておきたい。なお、長見寺廃寺例はＣ１類に分類される。

23　久保氏は、Ａ１・２類をⅠａ期７世紀第４四半期、Ｂ類をⅠｂ期７世紀末～８世紀初頭、長見寺廃寺例が属するＣ１類はⅠａ期８世紀第１四半期、Ｃ２類は８世紀第２四半期に年代区分する。

24　『日本古代の鴟尾』（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）p.25 左下写真。

25　型式番号は、『讃岐の古瓦展』（川畑 1996a）に基づく。

26　讃岐極楽寺跡 GK101 は、讃岐西部に位置する弘安寺跡 KA101A から変化した KA102 と同笵である。他にも讃岐東部上高岡廃寺、阿波郡里廃寺とも同笵で、笵傷から弘安寺跡が最も古いとされる。また極楽寺跡では、GK101 と類似するが中房連子数を減らす後続する型式 GK102 が展開する（川畑 1996a）。讃岐や阿波での展開と、但馬への影響や具体的な展開のあり方については、ここでは簡単に明らかにできない。しかし、讃岐から但馬への軒丸瓦の関連性については、前岡孝彰氏の先行研究があり、讃岐弘安寺跡 KA102 から三宅廃寺例への展開の間に但馬南部の養父郡池ノ内遺跡で出土する素文平縁単弁十一葉蓮華文軒丸瓦の存在や播磨の小神廃寺の素文平縁単弁九葉蓮華音軒丸瓦の存在を挙げて、讃岐から但馬への同様の素文平縁の特徴をもつ単弁蓮華文軒丸瓦が伝わったことを指摘し、さらに三宅廃寺例に後続して但馬内や丹後へも展開することも指摘している（前岡 2007）。讃岐・但馬・丹後内での具体的な展開のあり方については改めて検討が必要だが、軒丸瓦の文様が、讃岐から但馬・丹後へ展開するなかで、弁数減少や、弁形の変化、中房蓮子数を減少させながら形骸化や簡略化していく方向性は概ね首肯される。

27　丹波国三ッ塚廃寺から出土する鴟尾についても、断片資料のため分類未詳だが、近傍の天神窯跡例から概ね同様の鴟尾が供給されたことが類推できるため、本節での取り扱いはしない。

参考文献

明石市 2020『太寺廃寺Ⅰ』明石市文化財調査報告第９冊

井内　功・井内　潔 1967「播磨の鴟尾（上）」『史迹と美術』第 37 集６（376 号）　史迹と美術同攷会

井内　功・井内　潔 1967「播磨の鴟尾（下）」『史迹と美術』第 37 集７（377 号）　史迹と美術同攷会

井内　潔 1971「播磨の古瓦資料１　河合廃寺」『井内古文化研究室報６』　井内古文化研究室

井内古文化研究室 1990「４　吸谷廃寺」『東播磨古代瓦聚成』　真陽社

井内　潔 2013「明石・高丘窯の屋瓦と鴟尾」『帝塚山大学考古学研究所研究報告　ＸＶ』　帝塚山大学考古学研究所

石田松蔵 1965『目で見る豊岡の文化史』　豊岡市教育委員会

五十川伸矢 1982「３　鴟尾」千本屋廃寺跡発掘調査団（編）『播磨千本屋廃寺』　山崎町教育委員会

今里幾次 1980「播磨打越窯址の鴟尾瓦」『播磨考古学研究』　今里幾次論文集刊行会（※初出 1960「播磨打越窯址の鴟尾瓦」歴史考古学研究会『歴史考古』４）

今里幾次 1981「餝磨郡漢部里」『歴史と神戸』（第 20 巻６号）　神戸市学会

今里幾次 1987「第７章　播磨・香山廃寺の古瓦」『香山』新宮町文化財調査報告７　新宮町教育委員会

今里幾次 1995a『播磨古瓦の研究』　真陽社

今里幾次 1995b「播磨古瓦研究序説」『播磨古瓦の研究』　真陽社

今里幾次 1995c「太子町の古瓦出土遺跡」『播磨古瓦の研究』　真陽社（※初出は 1989『太子町史』第３巻　太子町）

今里幾次 1995d「揖保川町金剛山廃寺の古瓦－律令制における地方豪族のあり方－」『播磨古瓦の研究』　真陽社（※初出は 1985「播磨・金剛山廃寺の古瓦」『兵庫史の研究』　神戸新聞出版センター）

今里幾次 1997「第３章　龍野市奥村廃寺の古瓦」『奥村廃寺－調査の概要と出土瓦の研究－』龍野市教育委員会

今里幾次 2001「龍野市中井廃寺の蓮華文帯鴟尾」『歴史と神戸』第 40 巻第１号　神戸史学会

今里幾次 2007「西播磨の古代寺院　－蓮華文帯鴟尾とその背景－」『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』講演会資料　たつの市埋蔵文化財センター
今里幾次 2010a「下太田廃寺」『姫路市史』第七巻下　資料編考古　姫路市
今里幾次 2010b「溝口廃寺」『姫路市史』第七巻下　資料編考古　姫路市
今里幾次 2010c「辻井廃寺」『姫路市史』第七巻下　資料編考古　姫路市
今里幾次 2010d「市之郷廃寺」『姫路市史』第七巻下　資料編考古　姫路市
今里幾次 2010e「打越窯跡」『姫路市史』第七巻下　資料編考古　姫路市
宇野信四郎 1957「兵庫県揖保郡鶏足寺址出土の鴟尾ついて」『歴史考古』１　歴史考古学会
梅原末治 1941「第五　八千種村の特殊古墓」『兵庫縣史蹟名勝天然紀念物』第十五輯　兵庫県
大谷輝彦 1999「４　下太田廃寺（第３次・第４次調査）」『TSUBOHORI　平成９年度（1997）　姫路市埋蔵文化財調査略報』　姫路市教育委員会
大貫繁次 1937「図版第参　傳播磨峰相山発見鴟尾瓦」『郷土文化』第５輯　巻頭図版　（写真の掲載のみ）
大脇　潔 1980「日本古代の鴟尾」『日本古代の鴟尾』　奈良国立文化財研究所飛鳥資料館
大脇　潔 1983「古代寺院の造営と工人の移動－蓮華文帯鴟尾を中止として－」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集刊行会
大脇　潔 1999「飛鳥白鳳時代の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂
大脇　潔 2002「鴟尾の変遷」『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術報告書　瓦塔・鴟尾』　東京国立博物館
岡田　務 1984「第４章　第１節　５．鴟尾」『尼崎市猪名寺廃寺跡』尼崎市文化財調査報告 第 16 集　尼崎市教育委員会
垣内拓郎 2013「第５章　第３節　市之郷廃寺出土瓦」『姫路市　市之郷遺跡Ⅴ　ものづくり大学校整備事業に伴う市之郷遺跡・市之郷廃寺発掘調査報告』兵庫県文化財調査報告第 454 冊　兵庫県教育委員会
垣内拓郎 2020「兵庫県の鴟尾について」『第 20 回シンポジウム　鴟尾・鬼瓦の展開Ⅰ　発表要旨集』奈良文化財研究所
梶原義実 2000「第Ⅱ部　第３章２ 鴟尾」丹波三ッ塚廃寺発掘調査団『丹波三ッ塚遺跡Ⅳ』兵庫県氷上郡市島町
加藤史郎 2010「桜峠５号窯跡」『姫路市史』第七巻下　資料編考古　姫路市
鎌谷木三次 1942「西脇廃寺」『播磨上代寺院址の研究』　成武堂
川畑　聰 1996a『讃岐の古瓦展』　高松市歴史資料館
川畑　聰 1996b「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第５号　香川考古刊行会
岸本道昭 2001「金剛山廃寺」揖保川町史編纂専門委員会（編）『揖保川町史』第３巻（史料編）　揖保川町
岸本宏忠 2004「鳥取県内の鴟尾－山陰系鴟尾を中心に－」『郷土と博物館』第 49 号（通巻 93 号）　鳥取県立博物館
久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』６　鳥取県埋蔵文化財センター
久保穣二朗 2020「斎尾廃寺の鴟尾について」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』11　鳥取県埋蔵文化財センター
小柴治子 2019「峰相山窯跡群の須恵器生産」第 19 回播磨考古学研究集会実行委員会（編）『須恵器生産からみた播磨』第 19 回播磨考古学研究集会　記録集
四天王寺文化財管理室　1986『四天王寺古瓦聚成』　柏書房
篠宮　正 2008『今宿遺跡Ⅰ　緊急街路整備事業山吹線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１』　兵庫県教育委員会
新宮町教育委員会　1987「第３章　第２節　（ｄ）古瓦」香山遺跡発掘調査団（編）『香山』新宮町文化財調査報告７　新宮町教育委員会
妹尾周三 2011「出雲へ伝わった仏教の特質－古代寺院から見た地域間交流とその背景」『古代出雲の多面的交流の研究』　島根県古代文化センター
竹原伸二 1987「Ⅳ（３）高丘古窯址群　２、３号窯　鴟尾」同志社大学考古学研究室（編）『明石市域の遺跡詳細分布調査（Ⅰ）－ 1984・1985 年度の調査－』　明石市教育委員会
たつの市立埋蔵文化財センター 2007『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』

丹波三ッ塚遺跡発掘調査団 1975「Ⅲ　A（3）鴟尾片」『丹波三ッ塚遺跡Ⅱ』 兵庫県氷上郡市島町
永井信弘 2010「第５章　加西の古代　第２節　考古代 22　江ノ下窯跡」『加西市史』第７巻史料編Ⅰ考古　加西市史編纂委員会
中村　浩 1992「第５章　江ノ下遺跡」『江ノ下・西ノ側－窯跡群等の発掘調査報告書－』加西市埋蔵文化財報告９　兵庫県加西市教育委員会
中原　斉 1995「上淀廃寺伽藍の創建と変遷－軒瓦の変遷を中心に－」『上淀廃寺』 淀江町教育委員会
中原　斉 2017『よみがえる金堂壁画　上淀廃寺』 新泉社
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』
西川英樹 2004「第２章　第３節　1.（3）鴟尾」『野口廃寺発掘調査報告』加古川市文化財調査報告 19　加古川市教育委員会
西田　猛・久語紀子 2005「６　（6）その他の瓦類　鴟尾」『国史跡広渡廃寺跡発掘調査』小野市文化財調査報告第 26 集　小野市教育委員会
春成秀爾 1983「明石発見の鴟尾新資料」『藤澤一夫先生古希記念　古文化論叢』藤澤一夫先生古希記念論集刊行会
春成秀爾 2013「Ⅳ　明石の古瓦集成」『明石の古代』 発掘された明石の歴史展実行委員会
菱田哲郎 1987「Ⅳ 1 C 1 鴟尾」『播磨繁昌廃寺　寺跡と古窯跡』 加西市教育委員会
菱田哲郎 1988「鴟尾の生産と地域色－東播系と西播系の鴟尾－」『古代文化』第 40 巻６号　財団法人古代學教會
姫路市埋蔵文化財センター編 2020『今宿遺跡－第４次発掘調査報告書－』 姫路市埋蔵文化財センター調査報告第 98 集　姫路市教育委員会　図版５・８
兵庫県教育委員会 2007『香美町　長見寺廃寺址－国道 178 号香住道路ランプ部道路改良事業に伴う発掘調査－』兵庫県文化財調査報告第 315 冊　兵庫県教育委員会
兵庫県教育委員会 2013『姫路市　市之郷遺跡Ⅴ　ものづくり大学校整備事業に伴う市之郷遺跡・市之郷廃寺発掘調査報告』兵庫県文化財調査報告第 454 冊
藤木　透 2004「５　早瀬瓦窯」『平成 14 年度　埋蔵文化財調査年報』佐用郡文化財報告８　佐用郡教育委員会
藤木　透 2006「第３章　第３節　遺物」『早瀬瓦窯跡』佐用町文化財報告書 14　佐用町教育委員会
文化財保護委員会　1967『四天王寺』埋蔵文化財調査報告第６
前岡孝彰 2007「但馬の古代寺院とその軒瓦」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』 小笠原好彦先生退任記念論集刊行会
山田清朝 2007「第３章　第２節　4.（8）Ⅳ. 鴟尾」『香美町　長見寺廃寺址－国道 178 号香住道路ランプ部道路改良事業に伴う発掘調査－』兵庫県文化財調査報告第 315 冊　兵庫県教育委員会
山本博利・山本和子 2010「赤坂窯跡」『姫路市史』第七巻下　資料編考古　姫路市

図版出典

第１図：筆者作成。
第２図〔12. 河合廃寺〕１、２：井内 1971 より転載。〔14. 吸谷廃寺〕１：井内 1990 より転載。〔15. 江ノ下遺跡〕1-１・２、２：加西市教育委員会提供。
第３図〔４. 天神窯跡４号窯〕：梶原 2000 より転載。
第４図〔６. 太寺廃寺〕2-４、4-２：筆者拓本・実測・トレース。５：明石市 2020 より転載。〔７. 高丘古窯跡群 17 号窯〕5-１・２：井内 2013 より転載。〔７. 高丘古窯跡群谷八木表採〕8-３、9-１：春成 1983 のトレース図を転載し、筆者拓本を再配置。
第５図〔８. 野口廃寺〕１：西川 2004 のトレース図に筆者拓本を再配置。〔10. 広渡廃寺〕2-１・４：西田・久吾 2004 より転載。〔18. 見野廃寺〕１：筆者拓本・実測・トレース。
第６図〔７. 高丘古窯跡群 18 号窯〕6-２・３：春成 2013 より転載。〔９. 石守廃寺〕１：井内 1990 より転載。〔11. 新部大寺廃寺〕１：筆者拓本・実測・トレース。〔19. 市之郷廃寺〕9-１・２：兵庫県教委 2013 より転載。

第7図〔24. 桜峠窯跡5号窯〕1-3・4：加藤2010より転載。〔13. 繁昌廃寺〕1～3：菱田1987より転載。〔20. 今宿遺跡〕2-2・4・5：篠宮2008より転載。

第8図〔7. 高丘古窯跡群3号窯〕1：竹原1987より転載。3：竹原1987を左右反転のうえ転載。〔16. 姥懐古墓〕1：トレース図は梅原1941より転載。写真は奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1980より転載。〔24. 桜峠窯跡5号窯〕2-2・3：加藤2010より転載。

第9図〔4. 天神窯跡3号窯〕3：梶原2000より転載。

第10図：拓本は今里2010aより転載。

第11図：写真左は筆者撮影。写真右は四天王寺文化財管理室1986より抜粋して転載。

第12図：たつの市立埋蔵文化財センター2007より転載。

第13図〔25. 下太田廃寺〕1・7：今里2010aより転載。2：大谷1999より転載。〔27. 中井廃寺〕2-1・2・4・5：今里2001より転載。〔32. 伝 伊勢村〕1：今里1995dより転載。〔21. 辻井廃寺〕1：今里1995dより転載。3：今里2010cより転載。

第14図〔20. 今宿遺跡〕1-3・4：篠宮2008より転載。5：姫路市埋文2020より転載。〔26. 金剛山廃寺〕：岸本2001より転載。〔29. 千本屋廃寺〕1：トレース図は五十川1982より転載し、筆者拓本を再配置。2：五十川1982より転載。

第15図〔29. 千本屋廃寺〕3：筆者実測・拓本・トレース。〔17. 溝口廃寺〕1：井内1990より転載。3：筆者実測拓本トレース。〔19. 市之郷廃寺〕1・4：今里2010dより転載。8-4・8・9：兵庫県教委2013より転載。

第16図〔22. 打越窯跡〕1・2・3：今里2010eより転載。〔23. 赤坂窯跡1号窯〕1・2：山本博利・山本和子2010より転載。

第17図〔21. 辻井廃寺〕2：今里2010cより転載。〔25. 下太田廃寺〕9・10・11・14：大谷1999より転載。〔28. 中垣内廃寺〕1：たつの市立埋蔵文化財センター2007より転載。

第18図〔5. 猪名寺廃寺〕1：拓本（外面）は尼崎市教育委員会提供。筆者拓本（内面）・実測・トレース。2：岡田1984より転載。

第19図〔1. 長見寺廃寺〕1-1・2：久保2015より転載。

第20図〔2. 三宅廃寺〕2：拓本は大脇1999より転載。写真は石田1965より転載。2-1、3-1～3：筆者拓本・実測・トレース。

第21図：拓本（上）は前岡2007より転載。拓本（下）は、川畑1996aより転載。

第22図〔讃岐願興寺・極楽寺跡〕：川畑1996aより転載。極楽寺跡縦断面は左右反転して転載。〔讃岐石井廃寺〕：川畑1996bより転載。

第23図〔31. 早瀬瓦窯跡〕：藤木2006より転載。

第24図：藤木2004より転載。一部加筆。

第25図：写真（上）は奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1980より転載。図（下）は久保2015より転載。

第26図〔29. 香山廃寺〕1：新宮教育委員会1987より転載。

第27図：筆者作成。

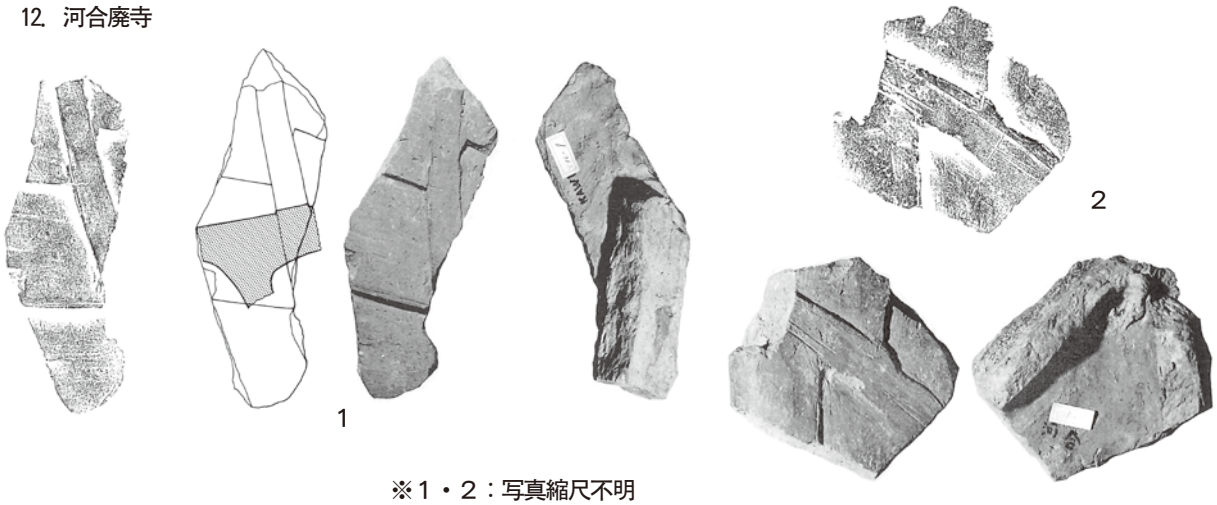
第28図：大脇1999をもとに筆者が加筆修正して作成。

1　長見寺廃寺	9　石守廃寺	17　溝口廃寺	25　下太田廃寺
2　三宅廃寺（薬琳寺跡）	10　広渡廃寺	18　見野廃寺	26　金剛山廃寺
3　三ツ塚廃寺	11　新部大寺廃寺	19　市之郷廃寺	27　中井廃寺
4　天神窯跡（3・4号窯）	12　河合廃寺	20　今宿遺跡	28　中垣内廃寺
5　猪名寺廃寺	13　繁昌廃寺	21　辻井廃寺	29　香山廃寺
6　太寺廃寺	14　吸谷廃寺	22　打越窯跡	30　千本屋廃寺
7　高丘古窯跡群	15　江ノ下遺跡	23　赤坂窯跡（1号窯）	31　早瀬瓦窯跡
8　野口廃寺	16　姥懐古墓	24　桜峠窯跡（5号窯）	32　伝伊勢村例（※）

（※）出土地不詳のため位置図に掲載しない。

第１図　兵庫県の古代鴟尾出土地位置図　（１：1,000,000）

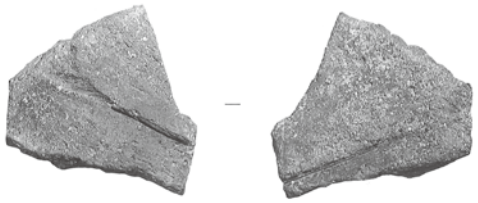
12. 河合廃寺



※1・2：写真縮尺不明

《河合廃寺》1：鰭部・縦帯部　2：脊稜・縦帯部（井内古文化研究室旧蔵）

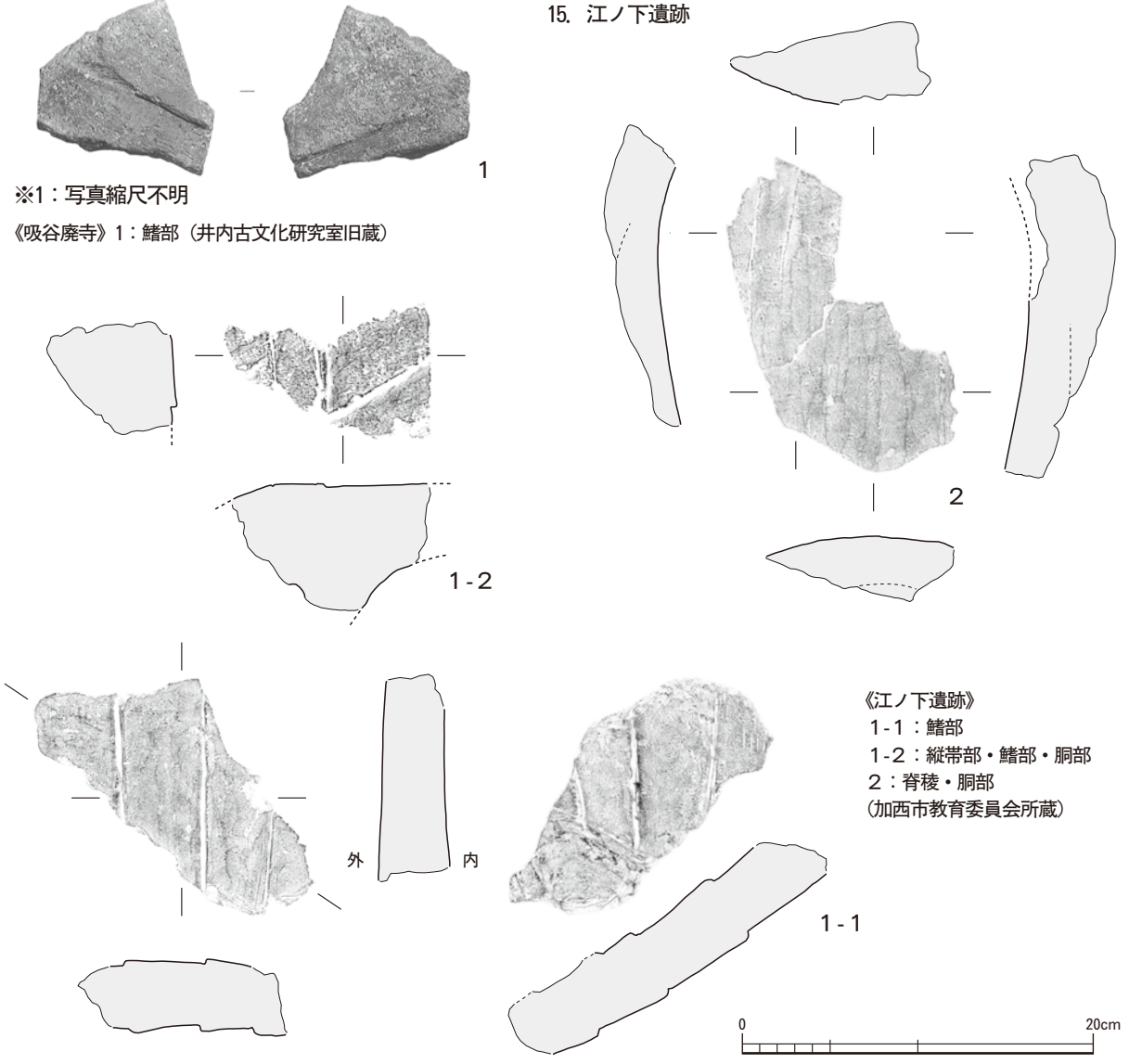
14. 吸谷廃寺



※1：写真縮尺不明

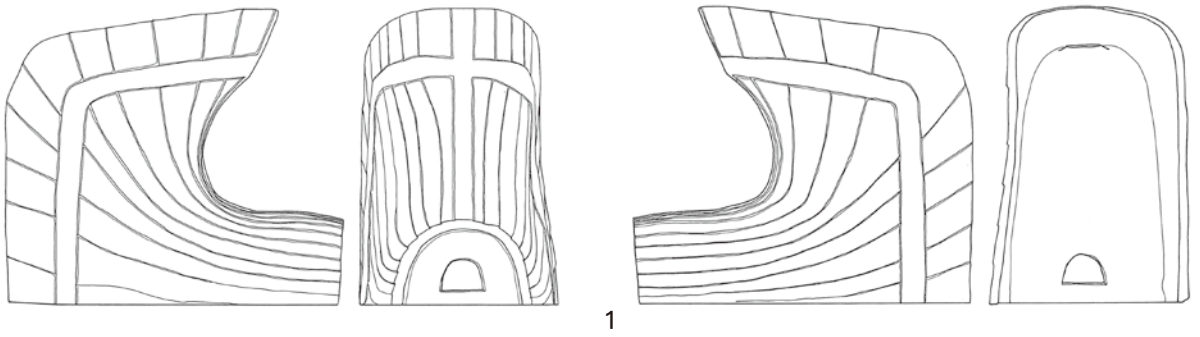
《吸谷廃寺》1：鰭部（井内古文化研究室旧蔵）

15. 江ノ下遺跡

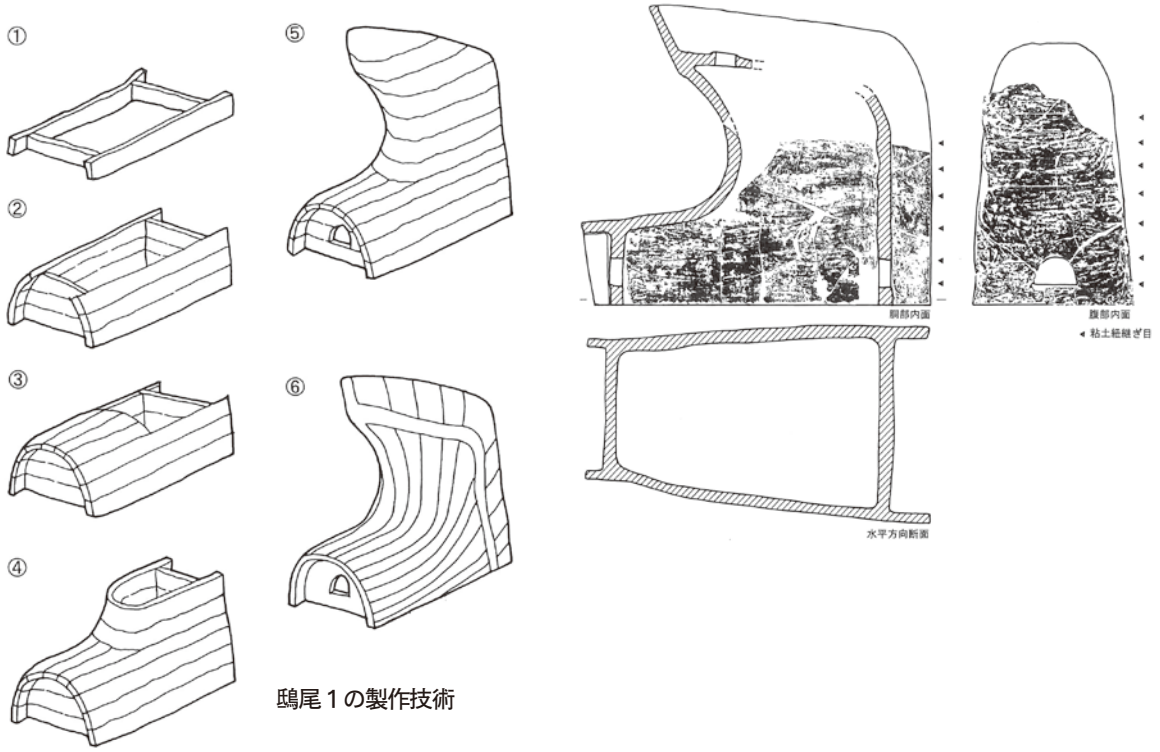


《江ノ下遺跡》
1-1：鰭部
1-2：縦帯部・鰭部・胴部
2：脊稜・胴部
（加西市教育委員会所蔵）

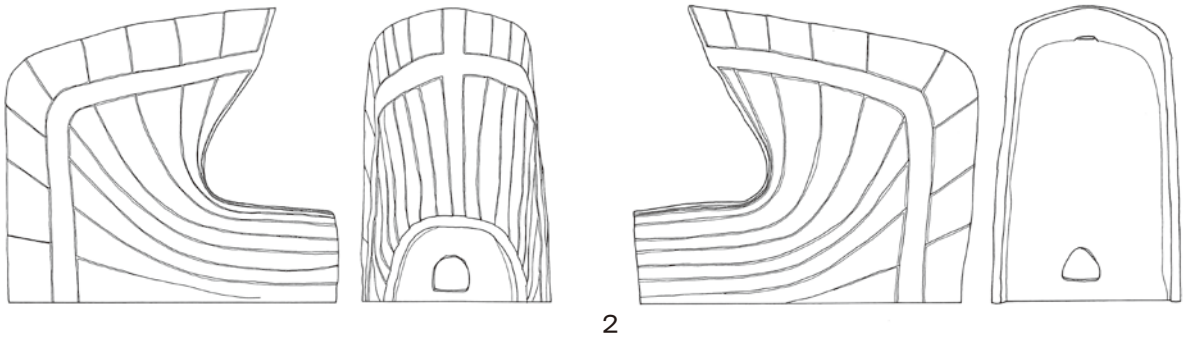
第２図　兵庫県出土の胴部有段鴟尾（1）（1：4）



1



鴟尾１の製作技術

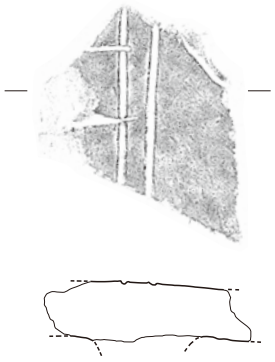


2

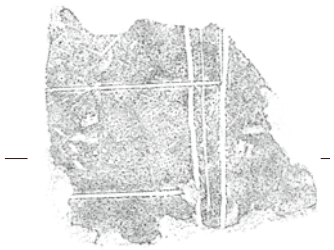
１：鴟尾１（II39）　２：鴟尾２（II40）（丹波市教育委員会所蔵）

第３図　兵庫県出土の胴部有段鴟尾（２）（１：20）

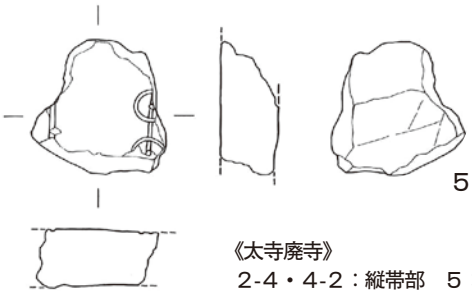
6．太寺廃寺



2-4



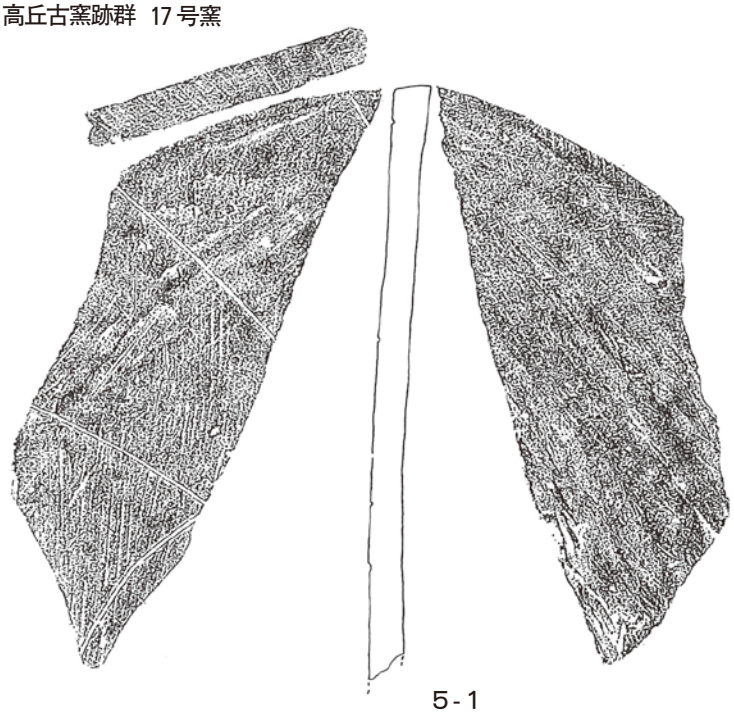
4-2



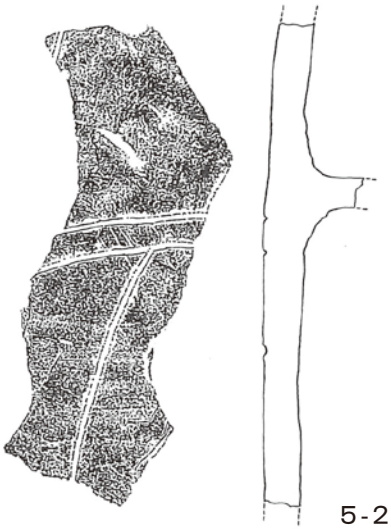
5

《太寺廃寺》
2-4・4-2：縦帯部　5：胴部 or 鰭部
（明石市立文化博物館所蔵）

7．高丘古窯跡群　17 号窯



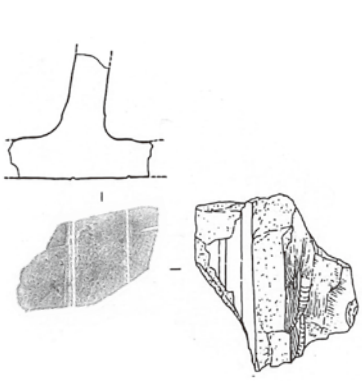
5-1



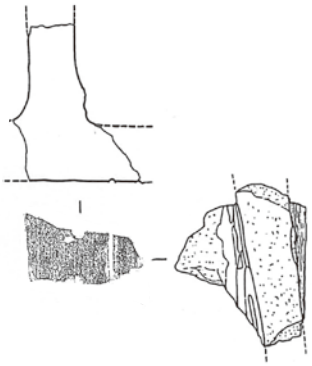
5-2

《高丘古窯跡群　17 号窯》
5-1：鰭部　5-2：鰭部・縦帯部・胴部
（井内古文化研究室旧蔵）

7．高丘古窯跡群
谷八木表採（推定高丘窯産）



8-3



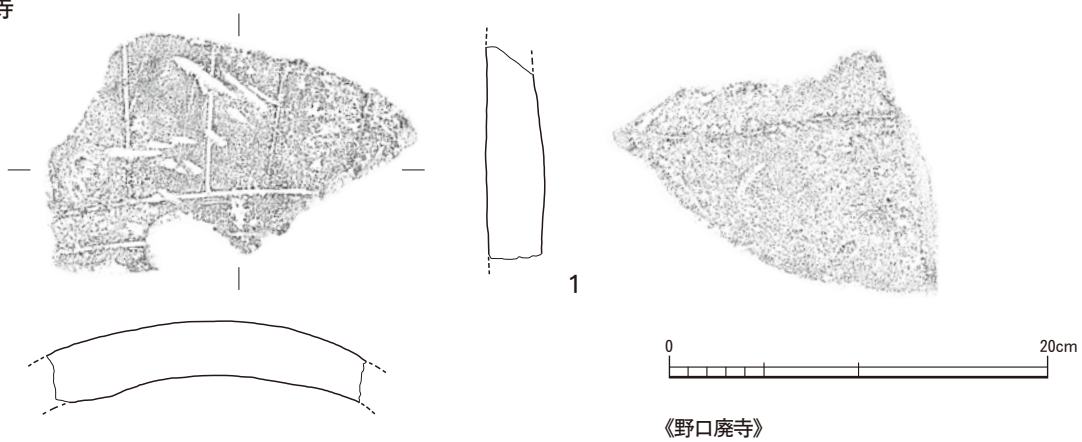
9-1

《高丘古窯跡群　谷八木表採（推定高丘窯産）》
8-3：縦帯部・腹部
9-1：胴部・縦帯部・鰭部・腹部
（明石市立文化博物館所蔵）

0　20cm

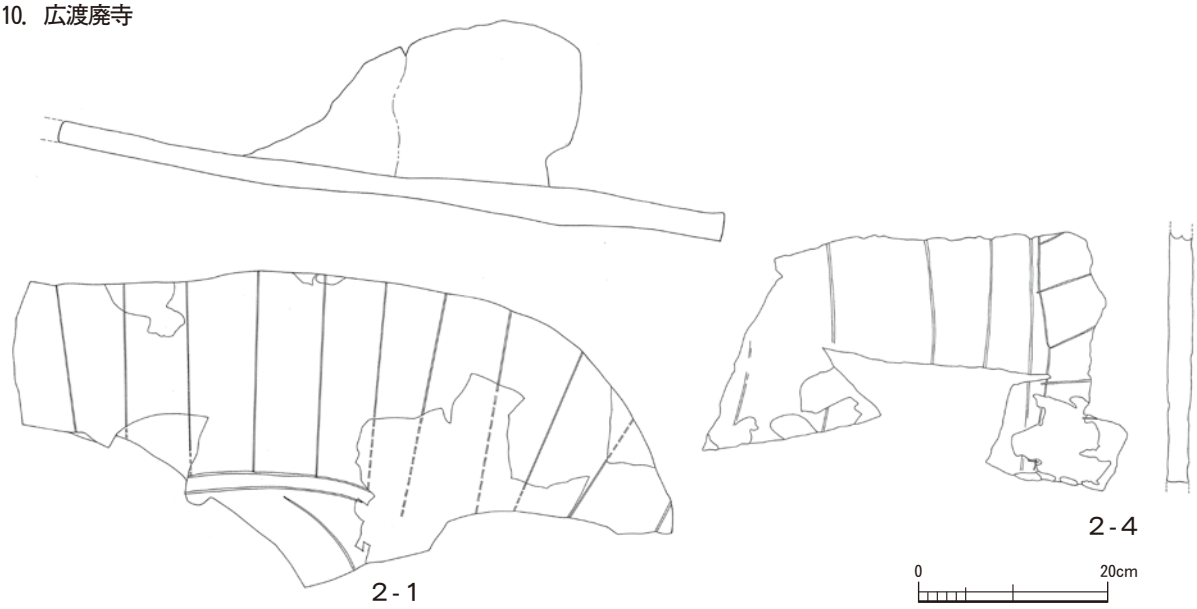
第４図　兵庫県の沈線文鵐尾ⅠＡ類（１）（１：４）

8. 野口廃寺



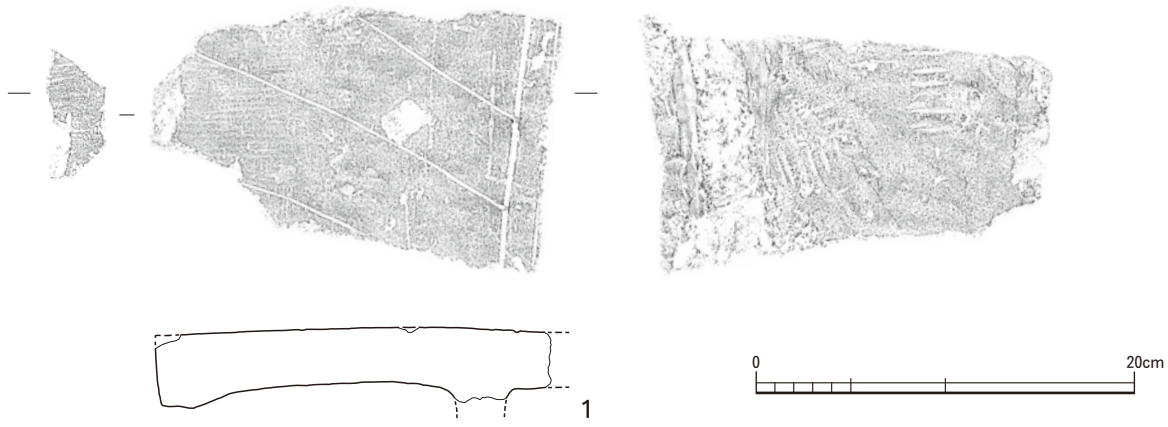
《野口廃寺》
1：鰭部・縦帯部（加古川市教育委員会所蔵）

10. 広渡廃寺



《広渡廃寺》
2-1・2-4：鰭部・縦帯部・腹部（小野市教育委員会館所蔵）

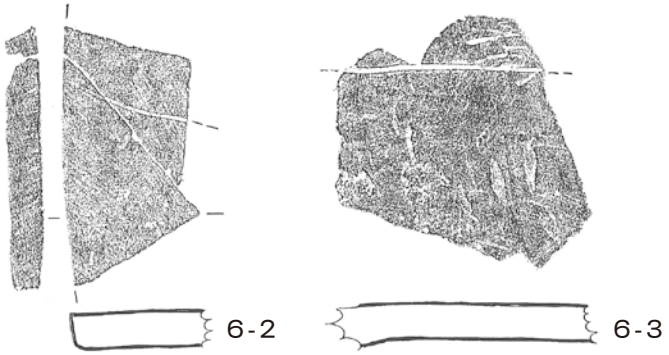
18. 見野廃寺



《見野廃寺》
1：鰭部（姫路市埋蔵文化財センター所蔵）※転載不可

第５図　兵庫県の沈線文鴟尾ＩＡ類（２）（８・18＝１：４　10＝１：８）

7．高丘古窯跡群　18 号窯



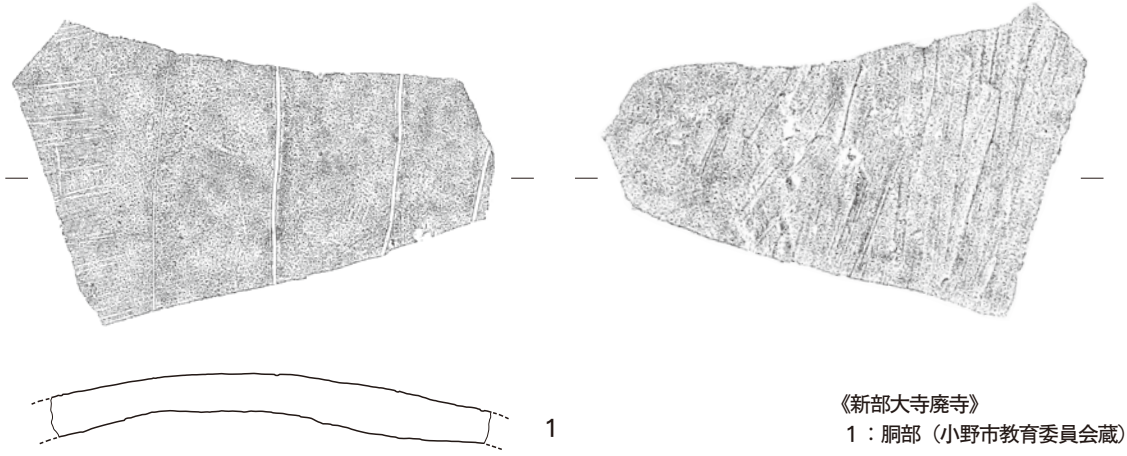
《高丘古窯跡群　18 号窯》
6-2：鰭部　6-3：胴部（井内古文化研究室旧蔵）

9．石守廃寺

※1：縮尺不明

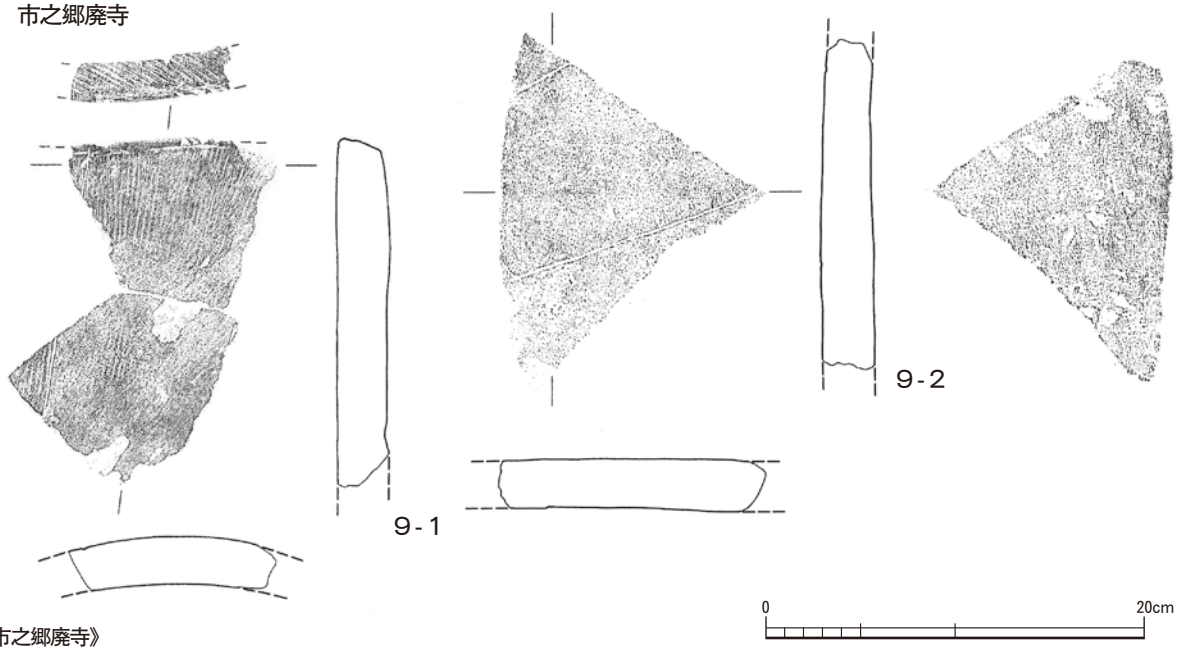
《石守廃寺》
1：鰭部または胴部（井内古文化研究室旧蔵）

11．新部大寺廃寺



《新部大寺廃寺》
1：胴部（小野市教育委員会蔵）

19．市之郷廃寺

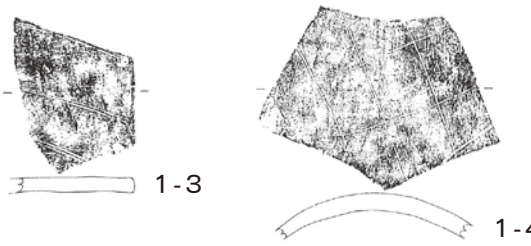


《市之郷廃寺》
9-1・9-2：鰭部（兵庫県立考古博物館所蔵）

第６図　兵庫県の沈線文鴟尾Ⅰ類（1）（1：4）

【沈線文鴟尾Ⅰ類】

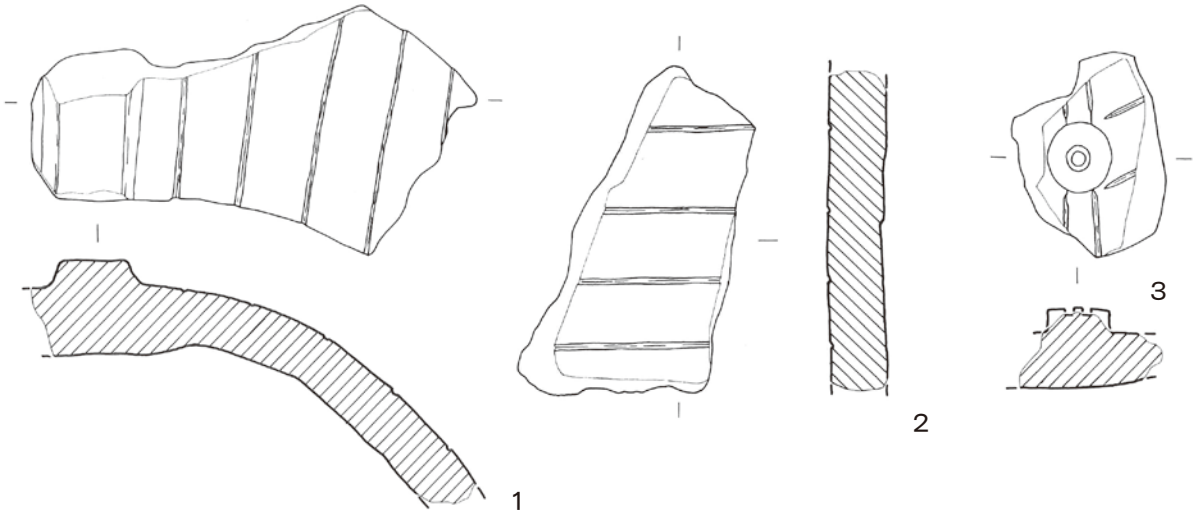
24. 桜峠窯跡　５号窯



《桜峠窯跡　５号窯》
1-3：鰭部　1-4：腹部（所在不明）

【沈線文鴟尾ⅡA類】

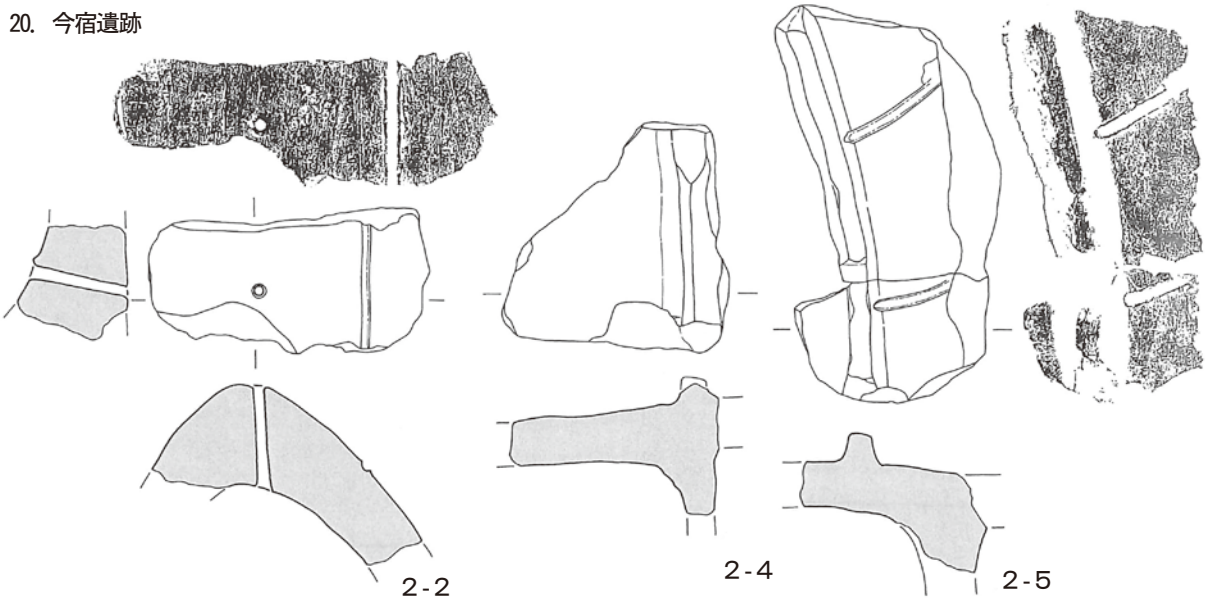
13. 繁昌廃寺



《繁昌廃寺》
１：脊稜・胴部　２：鰭部　３：縦帯部・鰭部（加西市教育委員会所蔵）

【沈線文鴟尾ⅡB類】

20. 今宿遺跡

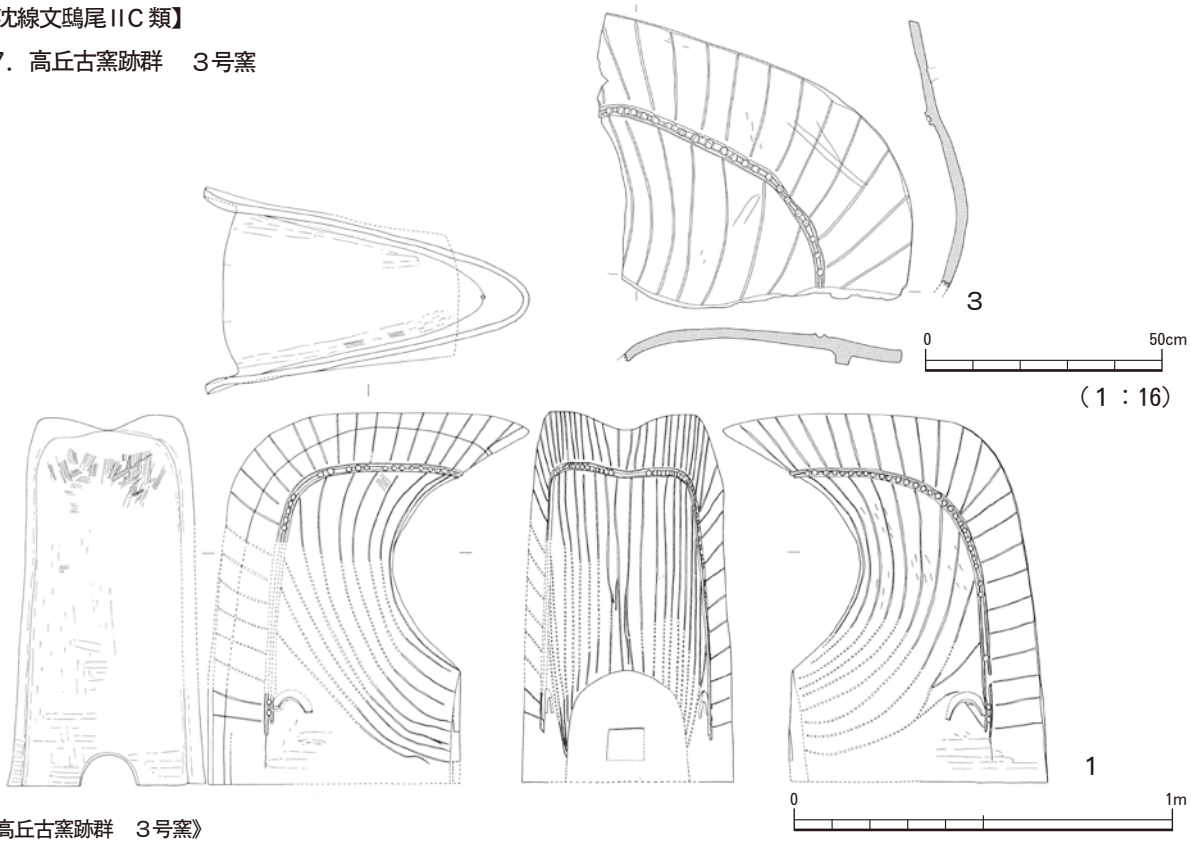


《今宿遺跡》
2-2：脊稜　2-4：胴部・縦帯部　2-5：鰭部・縦帯部
（兵庫県立考古博物館所蔵）

第７図　兵庫県の沈線文鴟尾Ⅰ類（２）・Ⅱ類（１）（13・20＝１：４　24＝１：８）

【沈線文鴟尾ⅡC類】

7. 高丘古窯跡群　3号窯

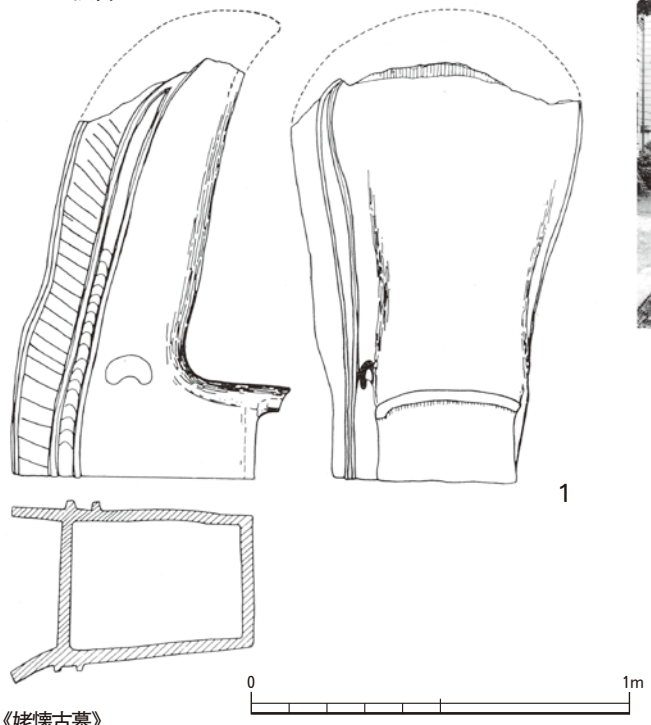


《高丘古窯跡群　3号窯》

1：〔鴟尾A（第1号）〕全体　3：鰭部・縦帯部・胴部（明石市立文化博物館所蔵）

【沈線文鴟尾ⅡD類】

16. 姥懐古墓



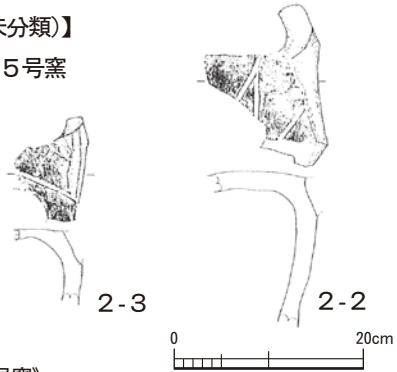
《姥懐古墓》

1：頭部・胴部・脊稜・縦帯部・鰭部・腹部（頂部欠失）（京都大学総合博物館蔵）

※1：写真縮尺不明

【沈線文鴟尾（未分類）】

24. 桜峠窯跡　5号窯



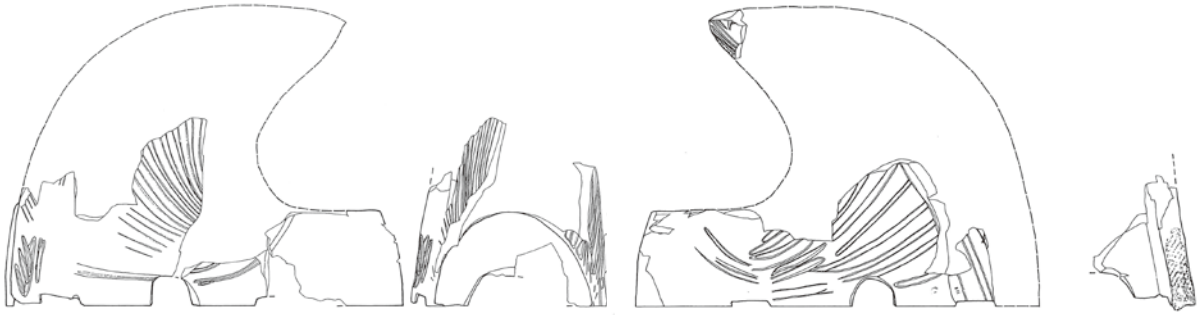
《桜峠窯跡　5号窯》

2-2・2-3：鰭部・腹部（所在不明）

第8図　兵庫県の沈線文鴟尾Ⅱ類（2）・未分類

【沈線文鴟尾II’類】

4．天神窯跡　3号窯



《天神窯跡　3号窯》
3：鰭部・縦帯部・胴部・頭部・頂部・腹部（II41）
（丹波市教育委員会所蔵）

第９図　兵庫県の沈線文鴟尾II’類　（１：20）

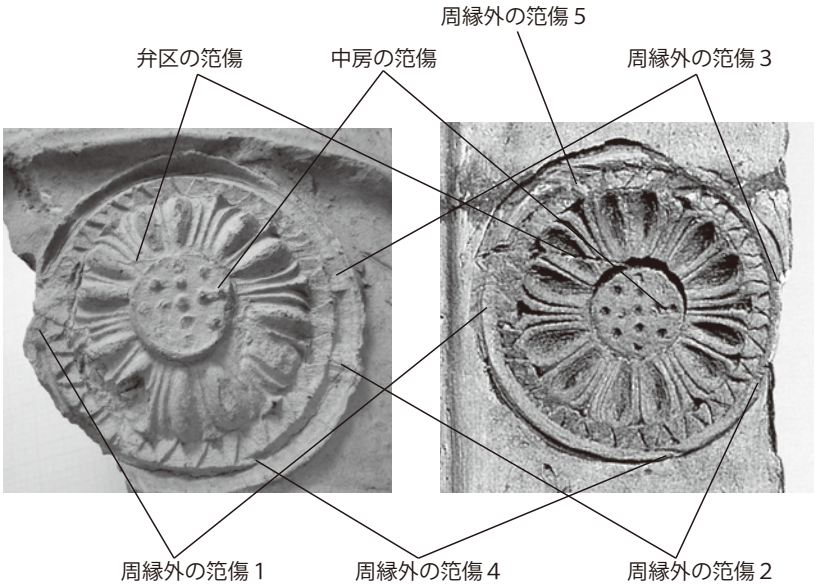
第１表　兵庫県の沈線文鴟尾の分類と一覧

分類と特徴			番号	出土地	参考 鴟尾番号	鰭部の段	縦帯部	胴部の段	菱田（1988）の対象	備　考
Ⅰ類	鰭部や胴部の段、縦帯部を細い沈線で表現する。									
	A	縦帯部を二条の細い沈線で表現	6	太寺廃寺	2-4･4-2	細い沈線	二条の細い沈線	細い沈線	○	鴟尾5は鰭部または胴部に沈線のコンパス文
			7	高丘古窯跡群 17号窯	5-1･5-2	細い沈線	二条の細い沈線	細い沈線	×	
			7	高丘古窯跡群 （谷八木表採）	8-3	細い沈線	二条の細い沈線	不明	○	
			8	野口廃寺	1	細い沈線	二条の細い沈線	不明	×	
			10	広渡廃寺	2-1	細い沈線	二条の細い沈線	細い沈線	○	
			18	見野廃寺	1	細い沈線	二条の細い沈線	不明	×	
	未細分	鰭部または胴部の段に細い沈線	7	高丘古窯跡群 18号窯	6-1･6-2	細い沈線	不明	不明	×	
					6-3	不明	不明	細い沈線	×	
			9	石守廃寺	1	細い沈線	不明	不明	○	
			11	新部大寺廃寺	1	不明	不明	細い沈線	○	
			19	市之郷廃寺	9-1･9-2	細い沈線	不明	不明	×	県報告（2013）の鴟尾Ⅱ類
			24	桜峠窯跡 5号窯	1-3	細い沈線？	不明	不明	×	鴟尾1-4は腹部に格子状の沈線文
Ⅱ類	縦帯部に装飾を加えるもの。鰭部や胴部の段は主に太い沈線で表現する。									
	A	縦帯部に珠文貼り付け	13	繁昌廃寺	2	細い沈線	二条の細い沈線で表した縦帯の上に竹管文を押した珠文を貼り付け。	不明	○	
					1	不明	不明	細い沈線	○	脊稜突帯あり
					3	細い沈線	不明	不明	○	
	B	縦帯部に突帯貼り付け	20	今宿遺跡	2-5	太い沈線	貼り付け突帯 （一条のみ確認）	不明	×	県報告（2008）の鴟尾B類
					2-4	不明	貼り付け突帯 （一条のみ確認）	無文？	×	
					2-2	不明	不明	太い沈線 （頂部のみ？）	×	
	C	縦帯部に二条の突帯と連珠文を貼り付け	7	高丘古窯跡群 3号窯	1～4	太い沈線	二条の貼り付け突帯に粘土貼り付け連珠文	太い沈線	○	
	D	縦帯部に二条の貼り付けた突帯の間に沈線文	16	姥懐古墓	1	太い沈線？	二条の突帯の間に半円状の文様を沈線で並べて表現	文様なし	○	
Ⅱ’類	縦帯部に装飾を加えるもの。鰭部または胴部の段を凹線で表現する。									
	—	縦帯部に突帯貼り付け	4	天神窯跡 3号窯	3	凹線	二条の凹線で表した幅広の縦帯の間に一条の貼り付け突帯	凹線	×	
分類保留			24	桜峠窯跡 5号窯	2-2	太い沈線？	不明	不明	×	詳細不明のため分類保留

笵型Ａ	笵型Ｂ	笵型Ｃ	笵型Ｄ	保留
華文飾板　今里新分類（今里 2007・2010a）				
Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅳ型	Ⅴ型	Ⅲ型
華文飾板　今里旧分類（今里 1997・2001）				
Ⅰ型	Ⅱ型	Ⅲ型	Ⅳ型	—
蓮華文笵　分類（大脇 1983）				
A	B	—	—	—

※拓本 S=1/4。笵型 C・D の拓本は一部合成。

第 10 図　蓮華文帯（西播系）鴟尾の笵型分類



写真左：市之郷廃寺（鴟尾 1）　　写真右：四天王寺鴟尾Ｅ

第 11 図　蓮華文帯（西播系）鴟尾笵型Ａの主な笵傷

第 12 図　笵型Ａと異笵の伯耆斎尾廃寺例

【第２表の凡例】

大脇潔による蓮華文帯鴟尾の分析視点（大脇 1983）

《笵Ａの笵傷進行》　※番号は筆者が付与。
①比較的損傷少ない。
②やや損傷多い。
③弁区横断して中房に達する（外縁外側にも傷が広がるか）。

《胴部唐草文の分類》
１類：幅 3cm 前後、高さ約 0.5cm の低い突帯を削り出して唐草文を表す。
２類：幅約 1 ～ 2cm、高さ 0.3 ～ 0.4cm の極めて低い突帯を削り出し、
　　その両側を篦描き沈線で縁取るもの。
３類：２条の篦描き沈線で唐草文を表現するもの。

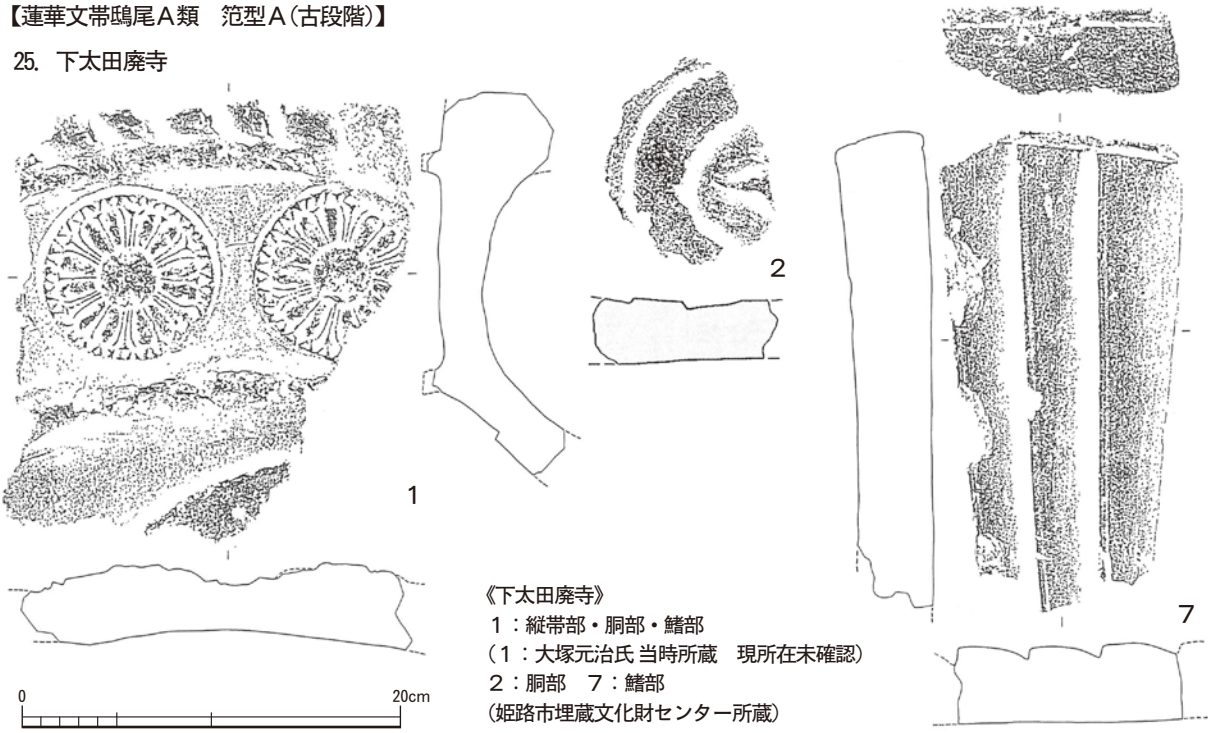
《鰭部段の分類》
１類：曲線を描く型板を用い、段の断面形が弧状を呈するもの。
２類：型板を用いず、断面形が鋸歯状を呈するもの。

第２表　蓮華文帯（西播系）鴟尾一覧表

縦帯部蓮華文笵型分類	華文飾板今里新分類【今里旧分類】	番号	出土地：〈旧国名〉遺跡名（分類名）	縦帯部蓮華文部分の確認可能資料 鴟尾番号（笵傷の有無と部位・番号）〈県外の確認資料掲載文献〉	胴部唐草文の施文方法（鴟尾番号）	鰭部の段 外面：製作技法と外面形（鴟尾番号）/内面（鴟尾番号）	各文献の取扱対象（鴟尾番号）			大脇の分析視点（大脇1983）					菱田の分析視点（菱田1988）			本稿西播系鴟尾分類
							大脇1983	菱田1988	大脇1999・2002	段階	笵	笵Aの笵傷進行	胴部唐草文	鰭部の段	胴部唐草文と段階区分		鰭部の段と内面（裏面）	
笵型A	Ⅰ型【Ⅰ型】	25	下太田廃寺	1（笵傷なし：中房・弁区・周縁外）	凸型削り出し（1・2）	外面正段：深い削り取り・曲面あり（1・7他）/内面無文（7）	○	○	○	第Ⅰ段階	笵A	①	1類	1類	古段階	削り出し	外面に段、内面は素文	A類
		27	中井廃寺	1（笵傷なし：中房・弁区、笵傷不明：周縁外1～5）	凸型削り出し（2-2）	外面正段：深い削り取り・曲面あり/内面無文（2-4・2-5）	○	○	○	第Ⅰ段階	笵A	①	＝	1類	古段階	？		
		32	伝伊勢村	1 ※拓本のみ。現物所在不明。（笵傷不明：中房・弁区・周縁外1～5）	不明	不明	○	○	×	第Ⅰ段階	笵A	①	？	＝	古段階	？		
		26	金剛山廃寺	なし ※推定笵型A	凸型削り出し（1）	不明	○	○	○	第Ⅰ段階	↓	①	1類	＝	古段階	削り出し	？	
		21	辻井廃寺	なし ※推定笵型A	凸型削り出し（3）	外面正段：深い削り取り・曲面あり/内面無文（1）	×	○	○	—	—	—	—	—	古段階	？	外面に段、内面は素文	
		20	今宿遺跡（A類）	1-3・1-4 ※周縁部の破片のみ（笵傷不明：中房・弁区・周縁外1・3～5、笵傷あり：周縁外2）	凸型削り出し（5）	外面正段：浅い削り取り・曲面なし？/内面無文（1-4）	×	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—	
		30	千本屋廃寺	なし ※推定笵型A	凹型削り取り（1）	外面正段：浅い削り取り・曲面なし/内面無文（2）	×	○	○	—	—	—	—	—	古段階	削り取り（凹型）	—	
				なし ※推定笵型A	篦書き沈線（3）	不明	×	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—	
		17	溝口廃寺	なし ※推定笵型A	篦書き沈線（3）	外面正段：深い削り取り・曲面あり/内面無文（1）	○（1）	○（1）	○（1）	第Ⅰ段階	？	？	？	1類	古段階	？	外面に段、内面は素文	
		—	〈美作〉大海廃寺	あり （笵傷不明：中房・弁区・周縁外1～3・5、笵傷あり？：周縁外4）〈奈文研1980 p.20・大脇1999 p.58・たつの市2007 p.22〉	篦書き沈線（奈文研1980 p.118）	外面正段：深い削り取り・曲面あり/内面無文〈縦帯部と同一資料〉	○	○	○	第Ⅱ段階	笵A’	①	2類	1類	新段階	篦書き沈線		
		—	〈山背〉大宅廃寺	あり （笵傷なし：中房・弁区・周縁外5、笵傷あり：周縁外1・2・〈4?〉）、笵傷不明：周縁外3）〈奈文研1980 p.20・大脇1999 p.58・たつの市2007 p.22〉	不明	外面正段：浅い削り取り・曲面なし/内面無文〈縦帯部と同一資料〉	○	○	○	第Ⅳ段階	笵A’	②	＝	2類	新段階	？		
		—	〈山背〉法琳寺跡	なし ※推定笵型A’	篦書き沈線（大脇1999 p.59）	外面正段：浅い削り取り・曲面なし/内面無文〈大脇1999 p.59〉	×	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
		19	市之郷廃寺（Ⅰ類）	1・2-1・2-2・8-9（笵傷あり：中房・弁区・周縁外1～4）	篦書き沈線（4, 8-4, 8-5）	外面正段：浅い削り取り・曲面なし/内面無文（1・8-8・8-9他）	×	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
		—	〈摂津〉四天王寺(E)	笵型A’（笵傷あり：中房・蓮弁・周縁外1～5）	篦書き沈線（縦帯部と同一資料）	外面正段：浅い削り取り・曲面なし/内面無文（縦帯部と同一資料）	○	○	○	第Ⅴ段階	笵A’→笵B	③	3類	2類	新段階	篦書き沈線	外面に段、内面は素文	AB類
笵型B	Ⅱ型【Ⅱ型】			笵型B 〈四天王寺1986 第2図版〉			○	○	○									
		—	〈摂津〉細工谷遺跡	あり ※周縁部の破片のみ〈大阪市文協1999 p.107 〉	不明	外面正段：浅い削り取り・曲面なし/内面無文〈縦帯部同文献頁〉	×	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—	B類
		22	推定打越窯採集	3	不明	外面正段：浅い削り取り・曲面なし/内面無文（3）	○	○	○	第Ⅵ段階	笵B	—	？	2類	新段階	？	外面に段、内面は素文	
		22	打越窯跡	なし ※推定笵型B	一条の篦書き沈線（2）（※腹部？）	外面正段：浅い削り取り？・曲面なし？/内面不明（1）	×	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
笵型C	Ⅳ型【Ⅲ型 】	21	辻井廃寺	2	不明	不明	×	×	○(2?)	—	—	—	—	—	—	—	—	C類
		23	赤坂窯跡1号窯	2 ※蓮華文部の破片のみ	不明	外面正段：浅い削り取り・曲面なし/内面無文（1）	×	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—	
笵型D	Ⅴ型【Ⅳ型】	25	下太田廃寺	9・10他	不明	外面正段：浅い削り取り・曲面なし・平坦/内面無文（11・14）	×	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—	D類
保留	Ⅲ型【—】	28	中垣内廃寺	1	不明	外面正段：浅い削り取り・曲面なし/内面無文（1）	×	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—	保留
保留	複弁八葉	—	〈伯耆〉斉尾廃寺	あり ※笵型Aとは異笵。〈奈文研1980・たつの市2007 p.19・久保2020 pp.7-9〉	篦書き沈線（奈文研1980 p.136、菱田1988 p.25、久保2015 p.42、久保2020 p.6,8）	外面正段：深い削り取り・曲面あり/内面無文〈鳥取県博2003 p.91,久保2015 p.42〉	○	○	○	第Ⅲ段階	笵A’	①	3類	1類	新段階	篦書き沈線	—	保留
保留	—	—	〈美作〉土居廃寺	なし	不明	外面正段：削り取り・曲面不明/内面無文〈奈文研1980 p.118〉	×	○	○	—	—	—	—	—	？	？	外面に段、内面は素文	

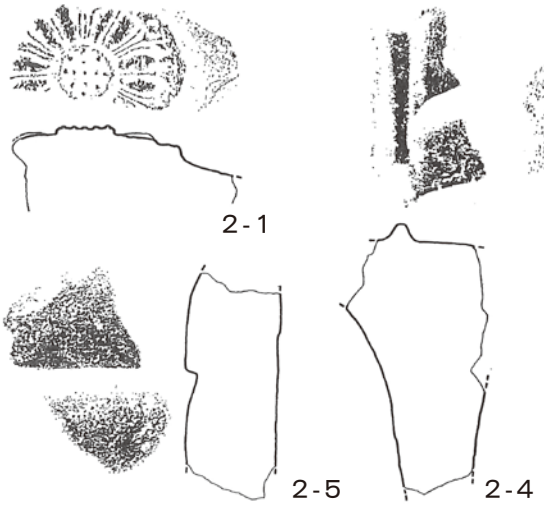
【蓮華文帯鴟尾Ａ類　笵型Ａ（古段階）】

25. 下太田廃寺

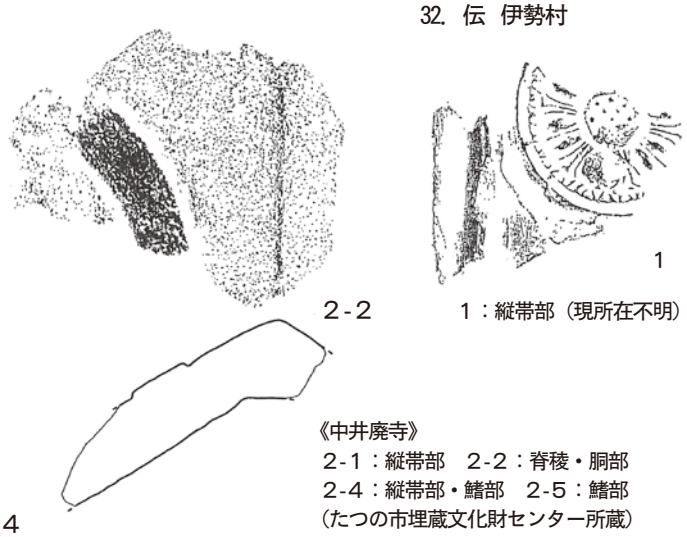


《下太田廃寺》
１：縦帯部・胴部・鰭部
（１：大塚元治氏 当時所蔵　現所在未確認）
２：胴部　７：鰭部
（姫路市埋蔵文化財センター所蔵）

27. 中井廃寺



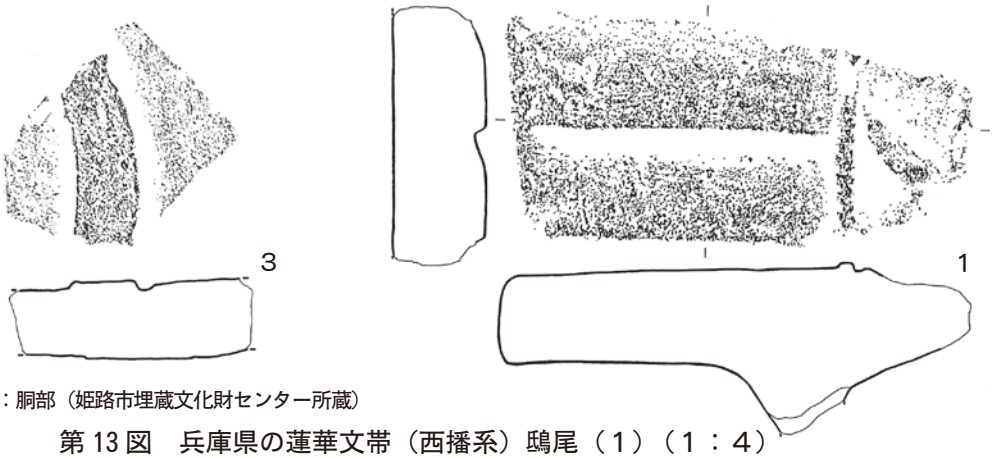
32. 伝 伊勢村



１：縦帯部（現所在不明）

《中井廃寺》
2-1：縦帯部　2-2：脊稜・胴部
2-4：縦帯部・鰭部　2-5：鰭部
（たつの市埋蔵文化財センター所蔵）

21. 辻井廃寺

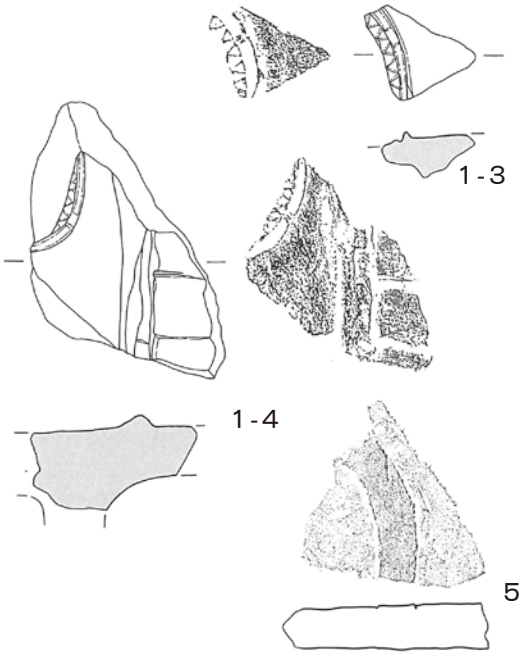


《辻井廃寺》
１：鰭部・縦帯部　３：胴部（姫路市埋蔵文化財センター所蔵）

第 13 図　兵庫県の蓮華文帯（西播系）鴟尾（１）（１：４）

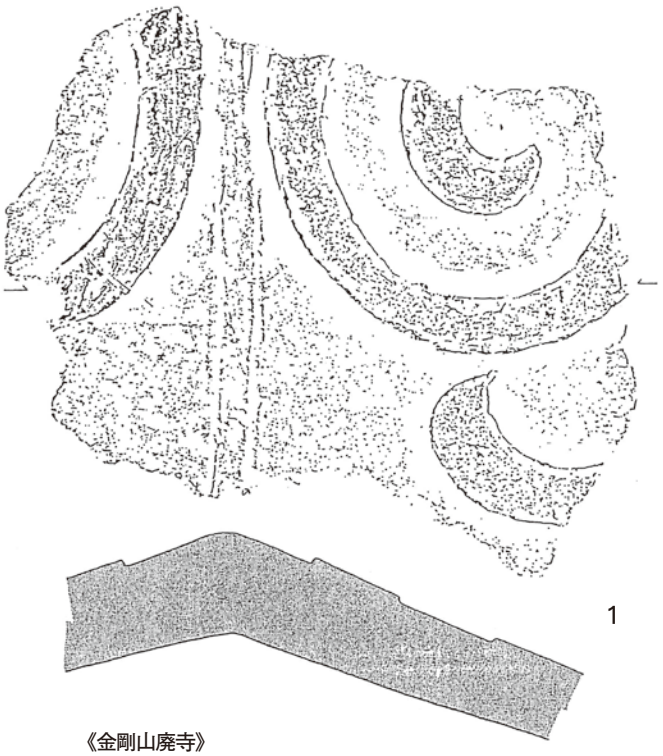
【蓮華文帯鴟尾Ａ類　笵型Ａ（古段階）】

20. 今宿遺跡



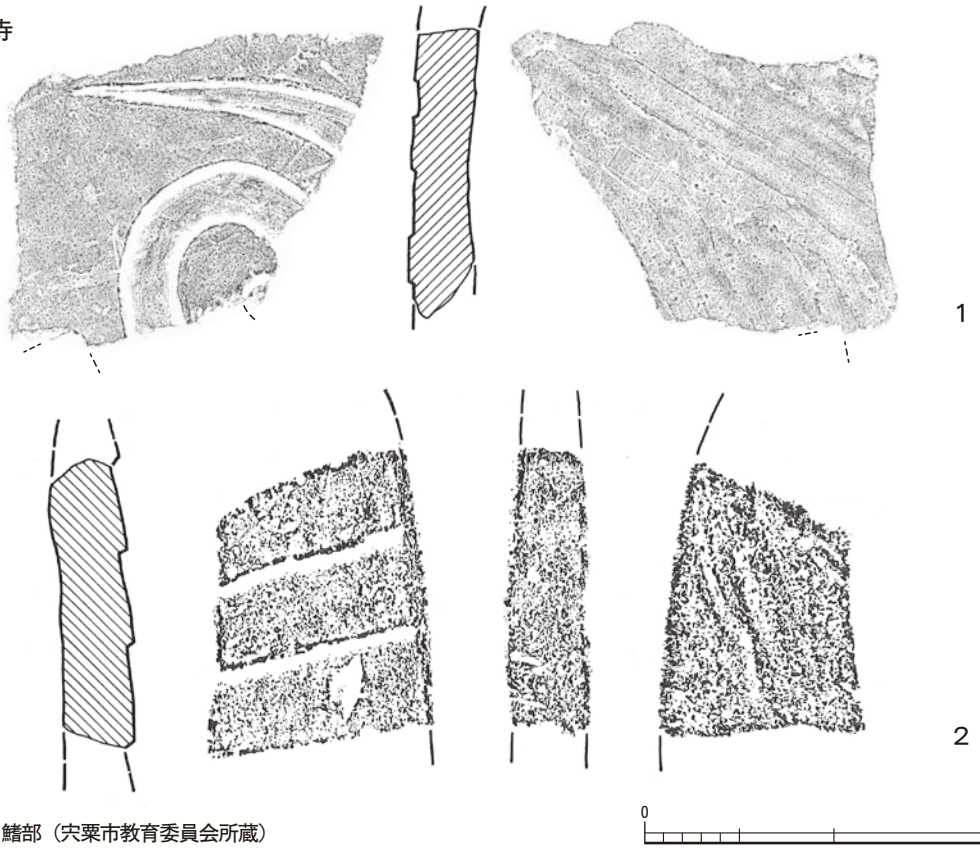
《今宿遺跡》
1-3：縦帯部・鰭部　1-4：縦帯部
（兵庫県立考古博物館所蔵）
５：胴部（姫路市埋蔵文化財センター所蔵）

26. 金剛山廃寺



《金剛山廃寺》
１：脊稜・胴部（萩本忠市氏当時所蔵　現所在未確認）

29. 千本屋廃寺

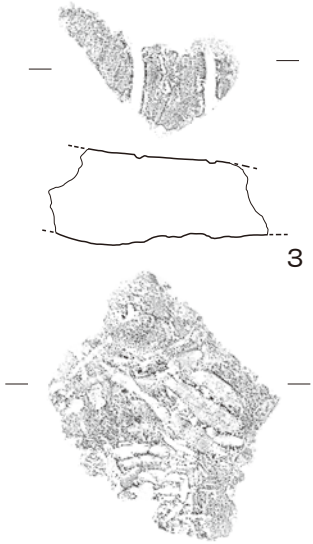


《千本屋廃寺》
１：胴部、２：鰭部（宍粟市教育委員会所蔵）

第 14 図　兵庫県の蓮華文帯（西播系）鴟尾（２）（１：４）

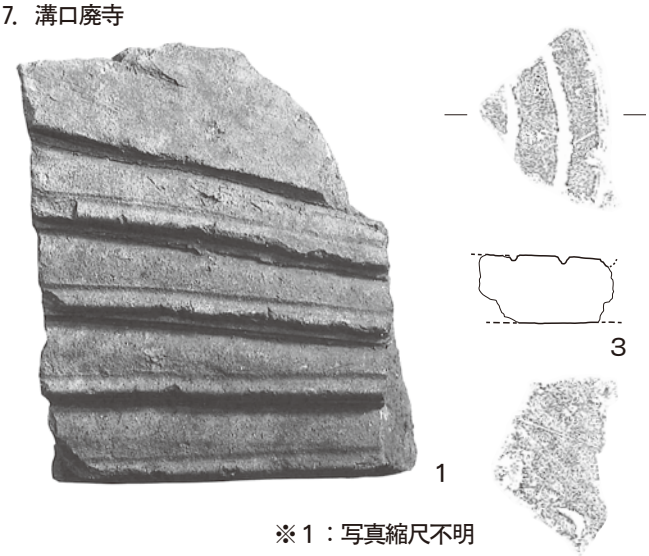
【蓮華文帯鴟尾Ａ類　笵型Ａ（新段階）】

29. 千本屋廃寺



《千本屋廃寺》
３：胴部（たつの市埋蔵文化財センター所蔵）

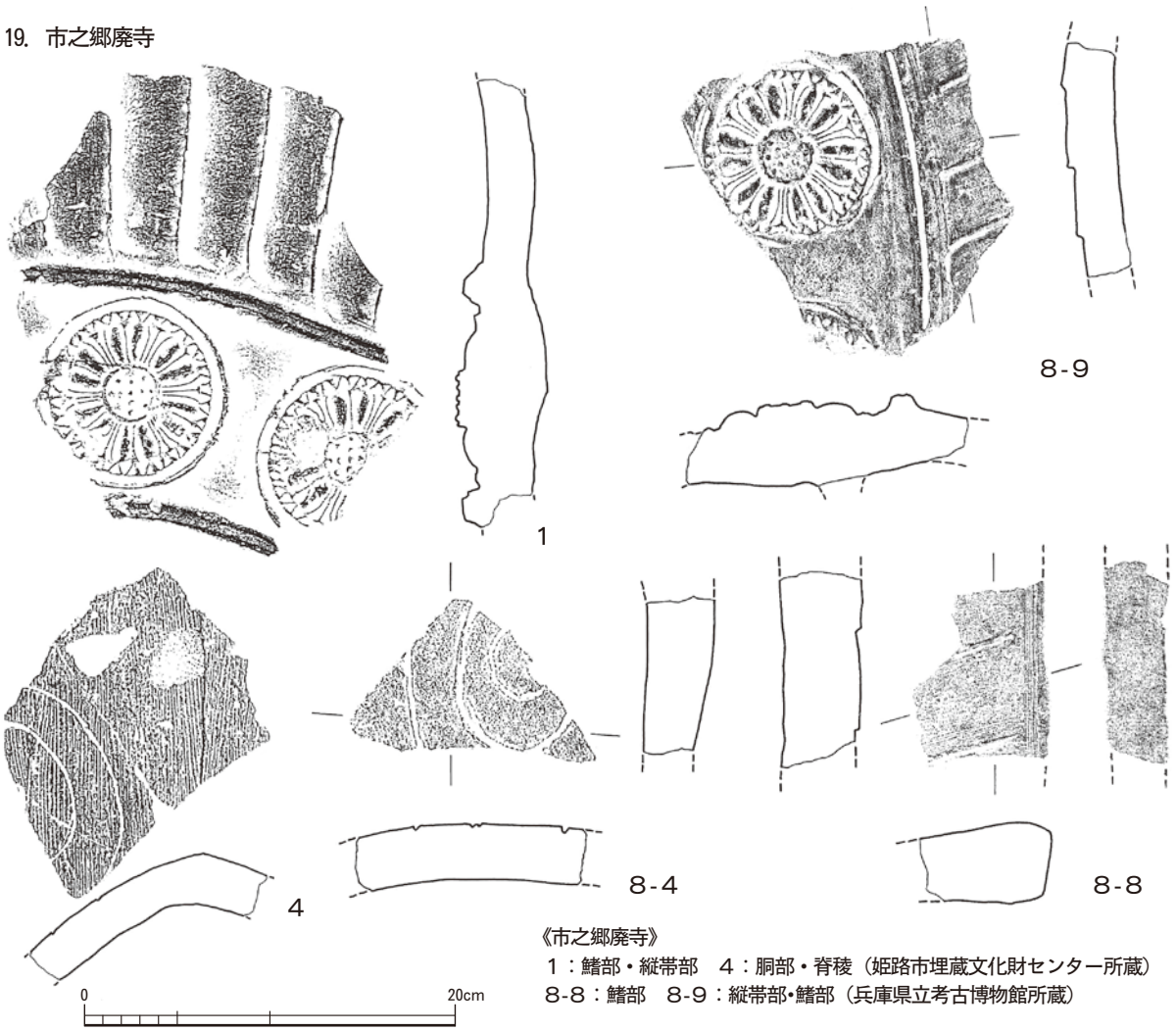
17. 溝口廃寺



※１：写真縮尺不明

《溝口廃寺》
１：鰭部（井内古文化研究室旧蔵）
３：胴部（兵庫県立考古博物館所蔵）

19. 市之郷廃寺



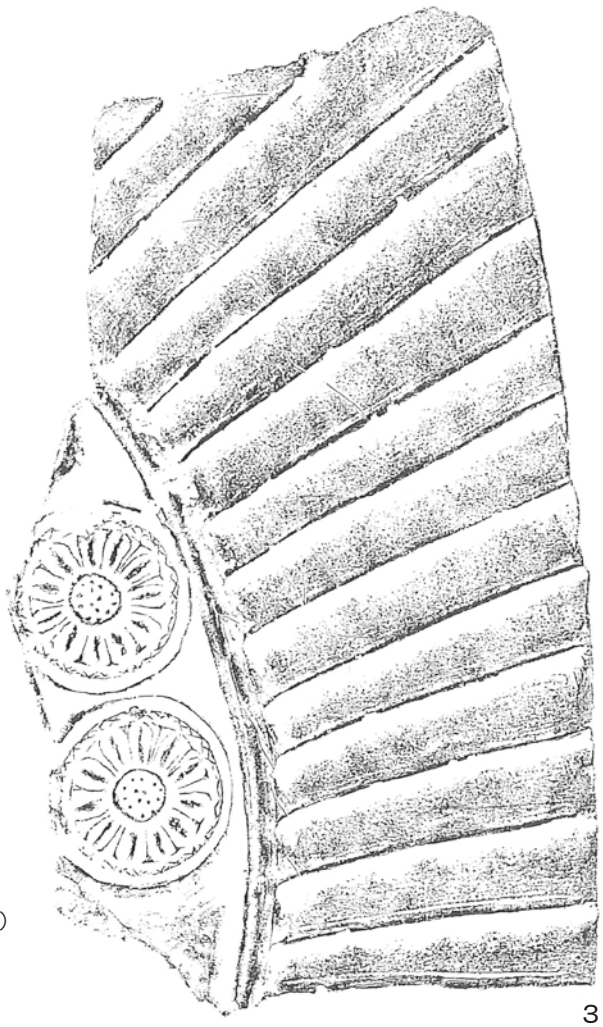
《市之郷廃寺》
１：鰭部・縦帯部　４：胴部・脊稜（姫路市埋蔵文化財センター所蔵）
8-8：鰭部　8-9：縦帯部・鰭部（兵庫県立考古博物館所蔵）

第 15 図　兵庫県の蓮華文帯（西播系）鴟尾（３）（１：４）

【蓮華文帯鴟尾Ｂ類　笵型Ｂ】

22. 打越窯跡

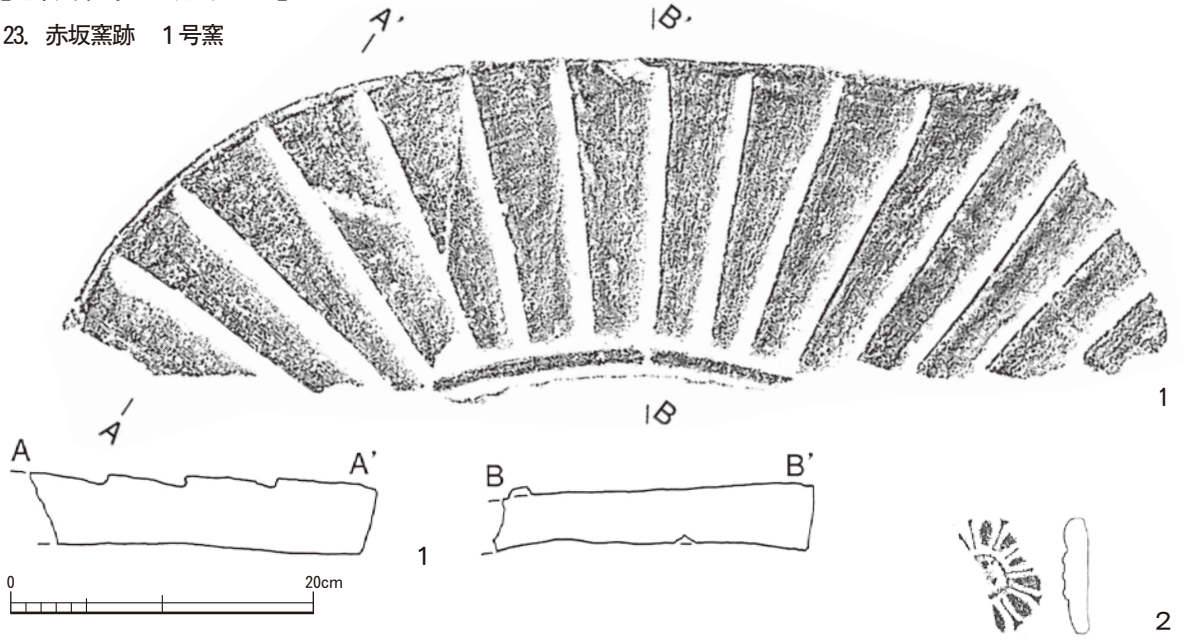
《打越窯跡》
１：鰭部頂部
２：腹部
（今里幾次氏所蔵
　現所在未確認）



《推定打越窯跡採集》
３：鰭部・縦帯部
（国立歴史民俗博物館所蔵）

【蓮華文帯鴟尾Ｃ類　笵型Ｃ】

23. 赤坂窯跡　１号窯



《赤坂窯跡（１号窯）》
１：鰭部　２：縦帯部（姫路市埋蔵文化財センター所蔵）

第 16 図　兵庫県の蓮華文（西播系）帯鴟尾（４）（22・23－２＝１：４　23－１＝１：５）

【蓮華文帯鴟尾Ｃ類　笵型Ｃ】

21. 辻井廃寺

《辻井廃寺》
２：縦帯部・鰭部（姫路市埋蔵文化財センター所蔵）

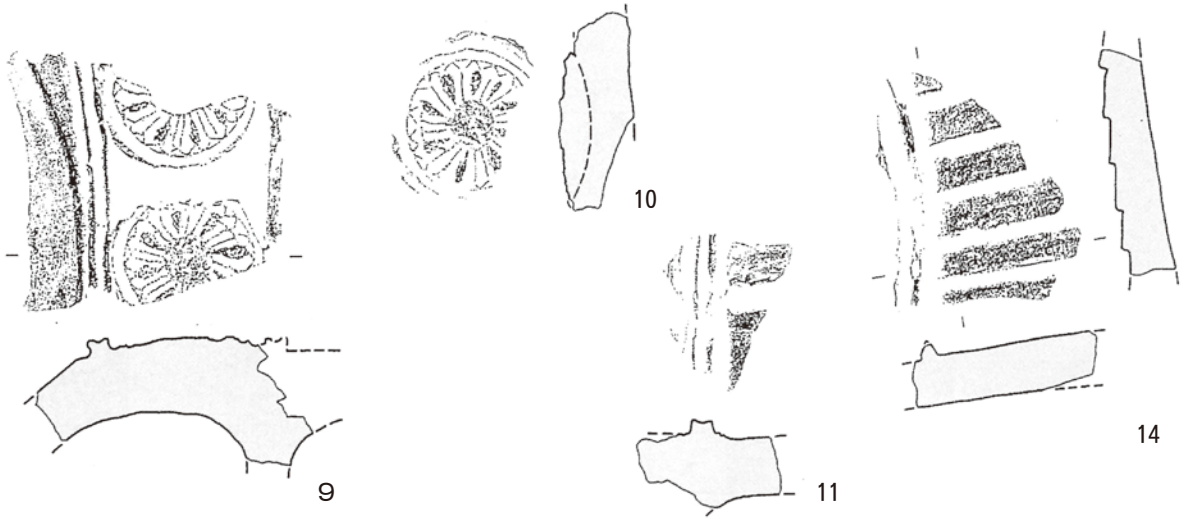
【蓮華文帯鴟尾　※保留】

28. 中垣内廃寺

《中垣内廃寺》
１：縦帯部・鰭部
（たつの市埋蔵文化財センター所蔵）

【蓮華文帯鴟尾Ｄ類　笵型Ｄ】

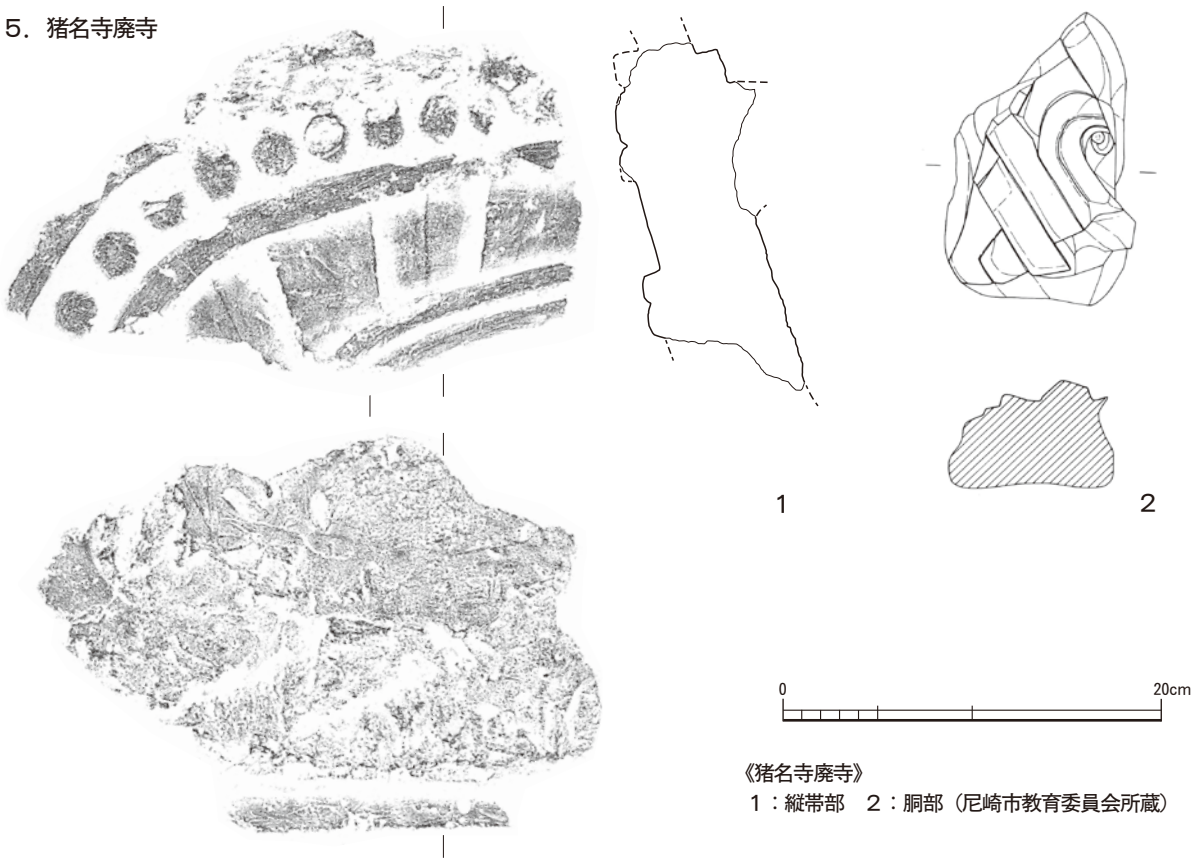
25. 下太田廃寺



《下太田廃寺》
９：縦帯部・胴部　10：縦帯部
11・14：鰭部・縦帯部（姫路市埋蔵文化財センター所蔵）

第 17 図　兵庫県の蓮華文帯（西播系）鴟尾（５）（１：４）

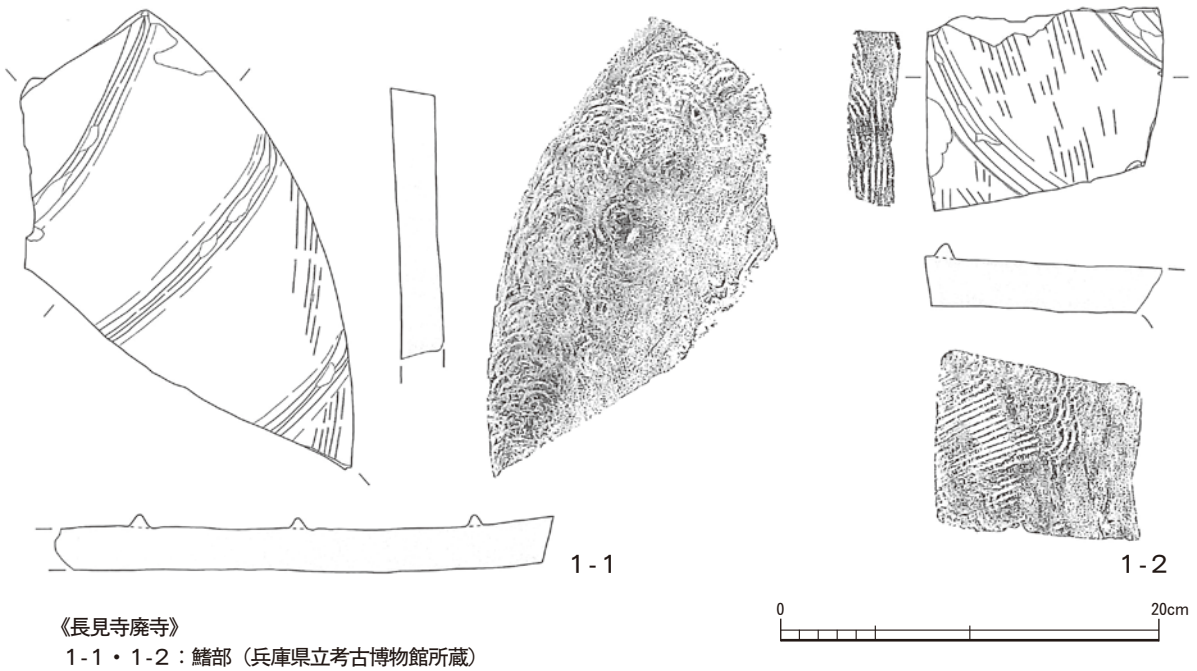
5．猪名寺廃寺



《猪名寺廃寺》
1：縦帯部　2：胴部（尼崎市教育委員会所蔵）

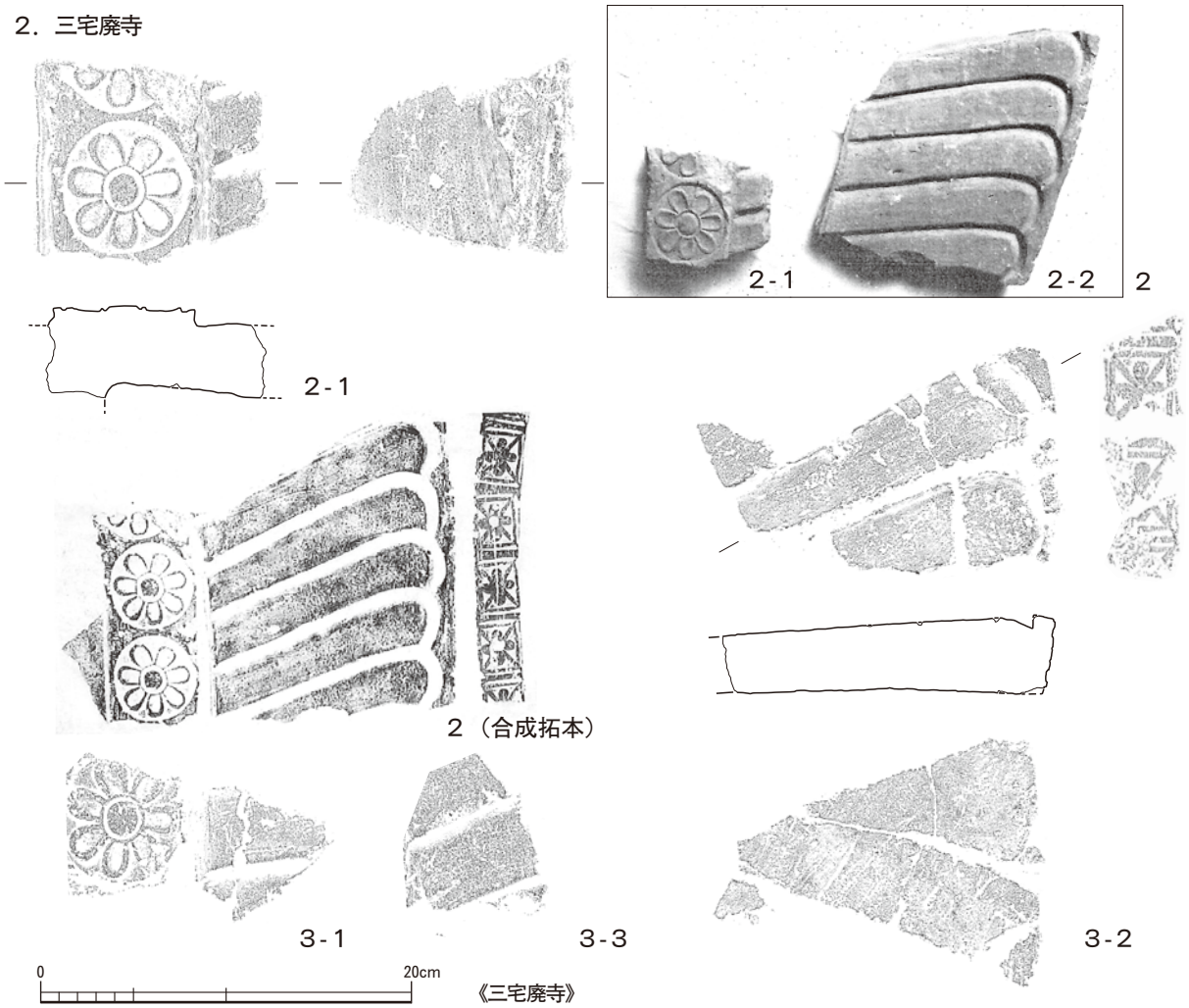
第 18 図　兵庫県出土の唐様式の鴟尾　（1 ：4）

1．長見寺廃寺



《長見寺廃寺》
1-1・1-2：鰭部（兵庫県立考古博物館所蔵）

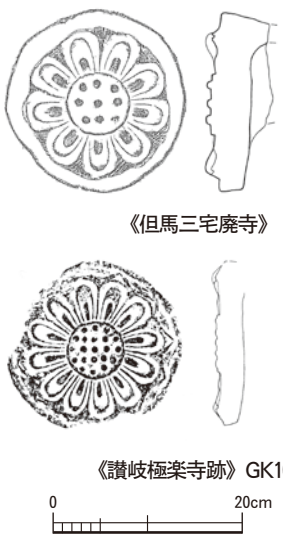
第 19 図　兵庫県出土の山陰系鴟尾　（1 ：4）



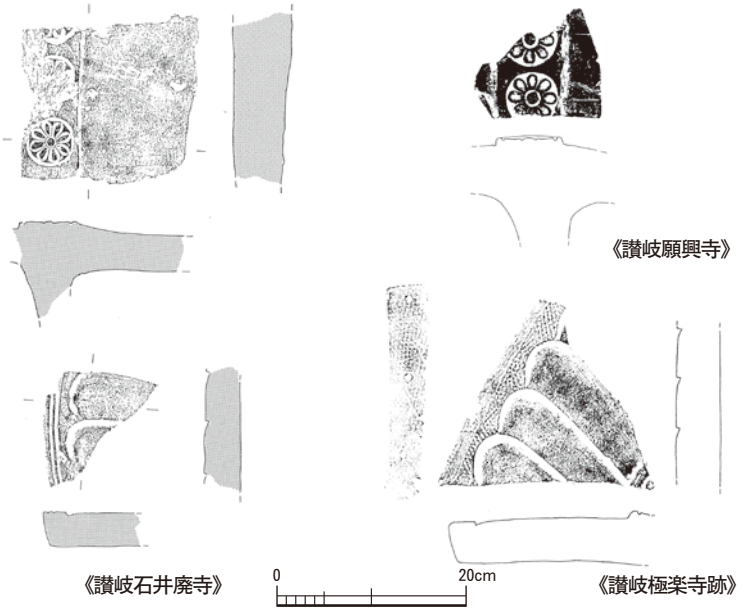
※写真２・合成拓本：縮尺不明

《三宅廃寺》
2-1：縦帯部　3-1：縦帯部　3-2・3-3：鰭部（豊岡市歴史博物館蔵）

第 20 図　兵庫県出土の寒風窯系の蓮華文帯鴟尾（１：４）



第 21 図　但馬三宅廃寺と讃岐極楽寺跡
出土軒丸瓦の比較（１：８）

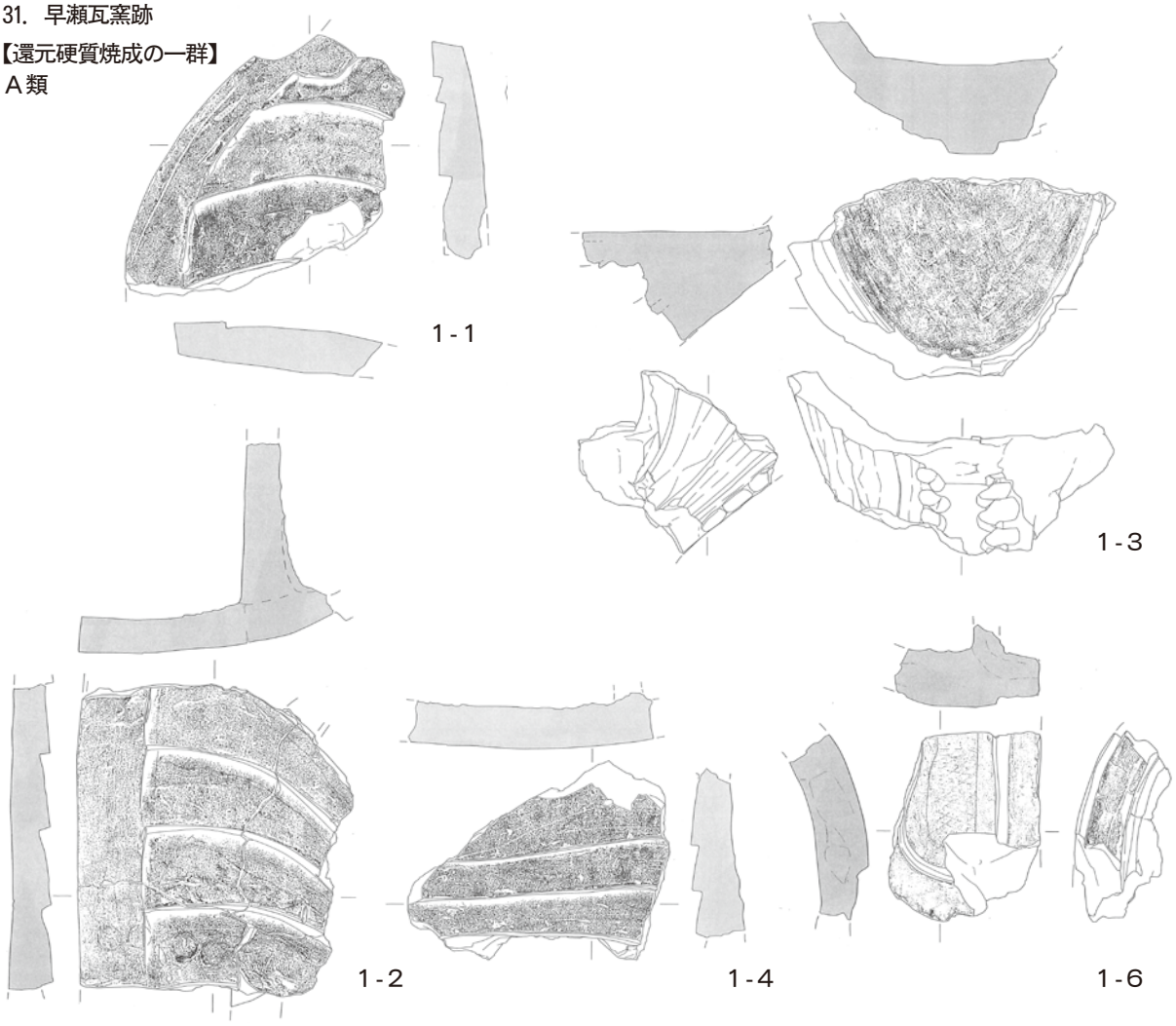


第 22 図　但馬三宅廃寺と類似する
讃岐の寒風窯系の蓮華文帯鴟尾（１：８）

31. 早瀬瓦窯跡

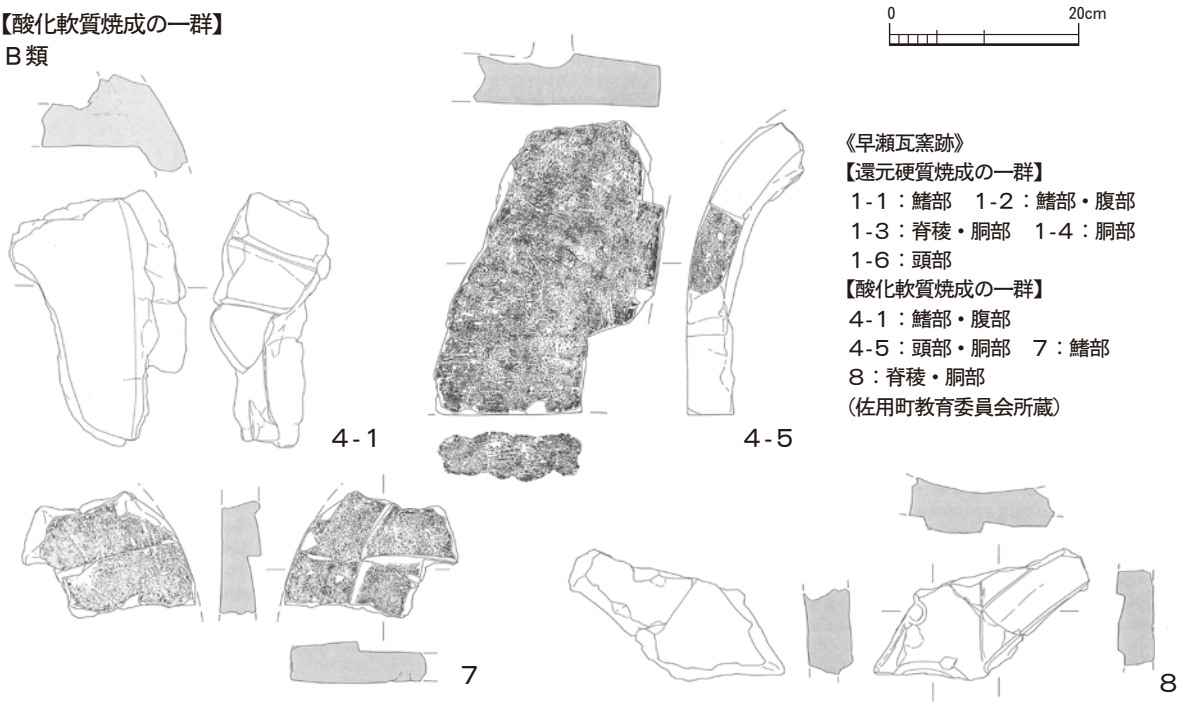
【還元硬質焼成の一群】

Ａ類



【酸化軟質焼成の一群】

Ｂ類



《早瀬瓦窯跡》

【還元硬質焼成の一群】

1-1：鰭部　1-2：鰭部・腹部

1-3：脊稜・胴部　1-4：胴部

1-6：頭部

【酸化軟質焼成の一群】

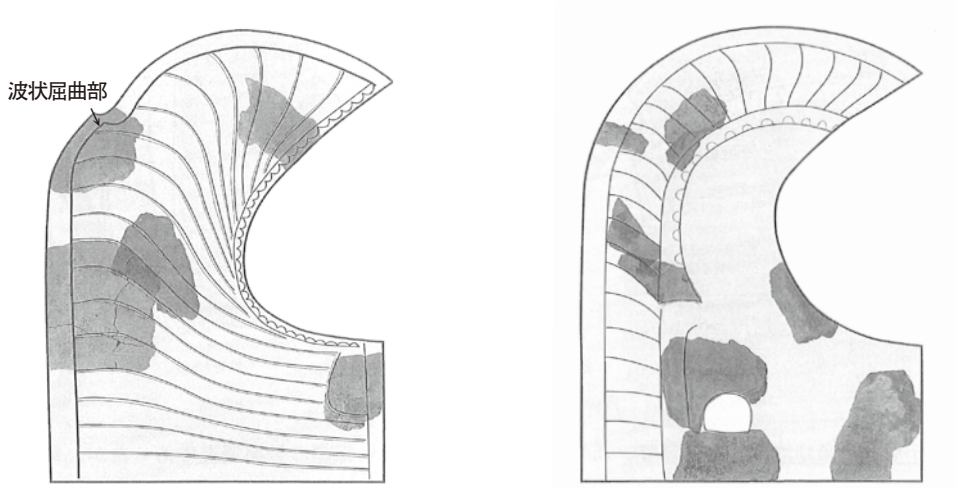
4-1：鰭部・腹部

4-5：頭部・胴部　7：鰭部

8：脊稜・胴部

（佐用町教育委員会所蔵）

第 23 図　兵庫県出土の寒風窯系の特徴をもつ鴟尾　（１：８）

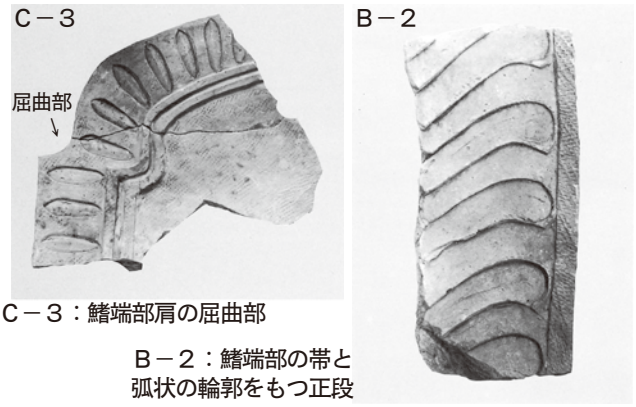


【還元硬質焼成の一群】
A 類

【酸化軟質焼成の一群】
B 類

第 24 図　早瀬瓦窯跡出土鴟尾の破片の位置と復元図

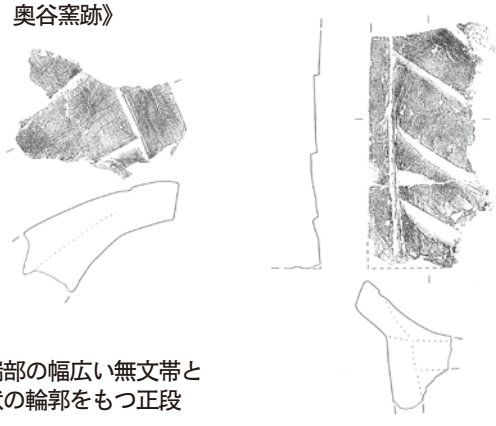
《備前　寒風窯跡》



C－３：鰭端部肩の屈曲部

B－２：鰭端部の帯と
弧状の輪郭をもつ正段

《因幡　奥谷窯跡》

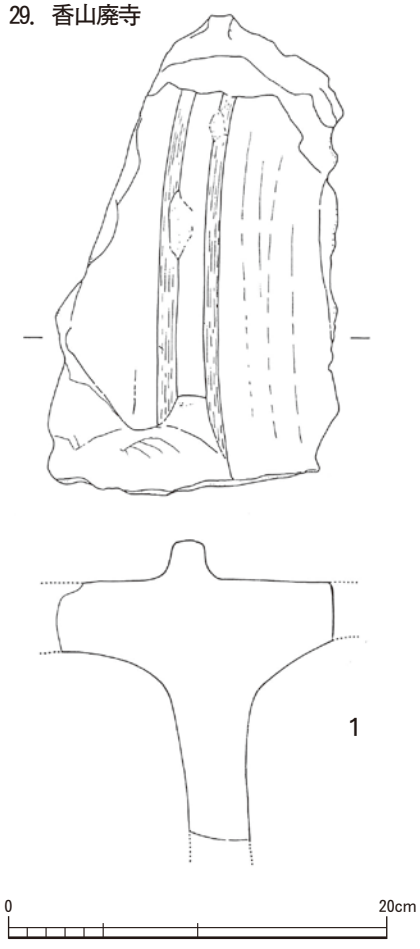


鰭端部の幅広い無文帯と
弧状の輪郭をもつ正段

0　20cm

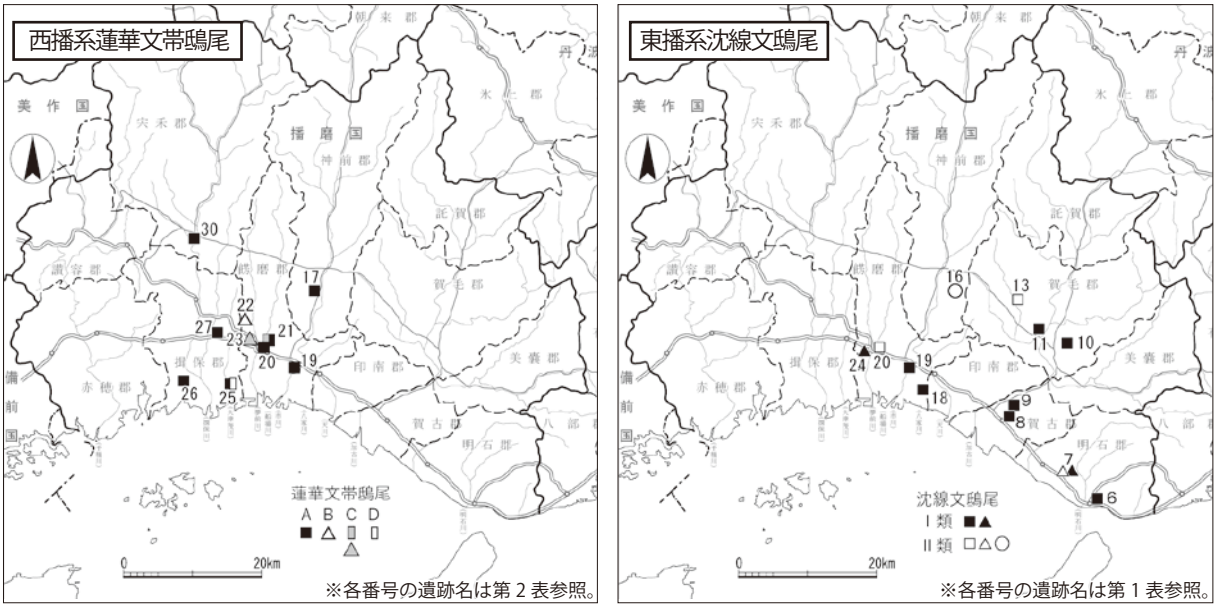
第 25 図　早瀬瓦窯跡出土鴟尾の鰭部における
他遺跡出土鴟尾との共通性（１：８）

29. 香山廃寺

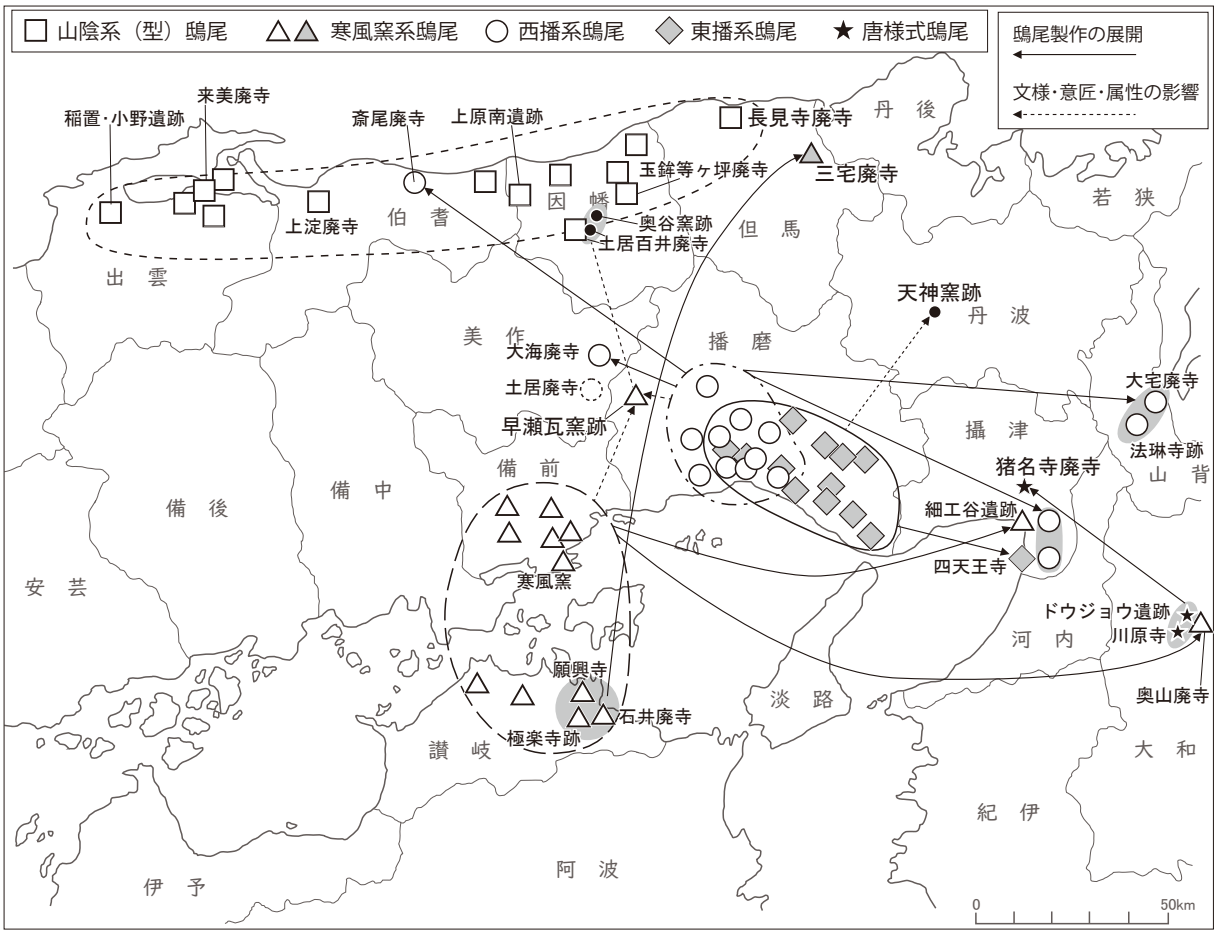


《香山廃寺》
1：縦帯部・鰭部・腹部・胴部
（たつの市埋蔵文化財センター所蔵）

第 26 図　兵庫県出土のその他の鴟尾（１：４）



第 27 図　播磨の東播系沈線文鴟尾・西播系蓮華文帯鴟尾の分布と展開（1：1,100,000）



第 28 図　兵庫県に関連する東播系・西播系・山陰系・寒風窯系
・唐様式鴟尾の分布と展開（１：2,000,000）

５　山陽・四国地方の鴟尾

香川　将慶・妹尾　周三・岡本　治代・白石　純

Ａ　はじめに

山陽・四国地域については、次のように本文を構成し、執筆を分担した。なお、山口県では鴟尾の出土例は確認されていない。また、発表時に記載できなかった遺跡の資料を可能な限り掲載している。

Ｂ　岡山県、Ｄ　香川県　　香川　将慶（高松市文化財課）
Ａ　はじめに、Ｃ　広島県　　妹尾　周三（東広島市教育委員会）
Ｅ　愛媛県、Ｆ　徳島県、Ｇ　高知県　　岡本　治代（徳島県立博物館）
Ｈ　岡山県・香川県出土鴟尾の胎土分析　　白石　純　（岡山理科大学）

Ｂ　岡山県

ⅰ　概要

古代の岡山県は備前国と備中国､和銅６年（713）に備前国から分立した美作国からなる。現在、鴟尾が確認されている遺跡は備前国は生産地４ヶ所、消費地５ヶ所の計９ヶ所で、備中国は生産地２ヶ所、消費地３ヶ所の計５ヶ所、美作国は４ヶ所であり、岡山県で計18ヶ所である。

ⅱ　備前国の鴟尾

寒風古窯跡群（第１～３図）　寒風古窯跡群は岡山県瀬戸内市牛窓町長浜5136番地他に所在する。邑久地域の西部に広がる千町平野の東側奥となる本条地区から南東に谷筋を入る、二方向からの谷筋の交わる標高50～60ｍの南東に張り出した丘陵の南に所在する。

鴟尾はこれまでの発掘調査や表採資料から４型式17種類に分類されることが明らかになっている（馬場ほか2009)。これまでに昭和初期に時實黙水氏によって200点もの鴟尾が採取されている。平成17～19年度に瀬戸内市教育委員会が実施した確認調査でも多く出土し、表採資料も含め、相当量出土している。寒風系鴟尾の特徴は鰭部の文様を指標にＡ～Ｄ型式に分類される。Ａ型式は鰭部を正段型とするもの、Ｂ型式は鰭部を蕨手状の段型とするもの、Ｃ型式は鰭部に段型を作らず、文様を印刻して並べるもの、Ｄ型式は無文の鴟尾である。Ａ型式は２種、Ｂ型式は７種、Ｃ型式は７種、Ｄ型式は１種類に分類され

る。そのうち、Ｂ、Ｃ型式が寒風系鴟尾の指標で出土量や種類は群を抜いている。

Ａ－１：全面を格子叩きした上に、幅約７～ 10cm 幅の鰭部上縁部を浅く正段に削りだし段型とし、縦帯は断面方向に突帯を２条貼り付け、約 15cm 間隔で２条の縦帯間を粘土塊で継ぐ。胴部は無文であるが、縦帯の内側に最大径 11cm の粘土円板を片面７枚貼り付ける。その下方には半円形の透かし穴がある。脊稜部左右には２条の突帯を貼り付ける。全高は 120cm 以上になると推測される。粘土円板は西播磨地域の古代寺院で使用された鴟尾の縦帯部分に飾られる蓮華文の変形と考えられる。

Ａ－２：段型は沈線による線刻に近く、より形骸化している。

Ｂ－１：蕨手文様のオリジナルと考えられるもので、文様を独立して面違いにしながら、全体として正段型を構成する。鰭部の前後を断面方形の突帯で挟み、胴部は無文である。外面はすべて丁寧にヘラケズリする。この型式では最も先行すると考えられる。

Ｂ－２：Ｂ－１と同様の衣装であるが、均等に弧状の段型を削り出して、それを２つずつ継ぐという機械的な手法に変化する。鰭部に削り残す突帯には格子叩きが残る。

Ｂ－３：先端を丸めた均一段型の連続文様である。鰭端部は稜を丸く落として仕上げる。格子叩きをヘラケズリで整形している。縦帯は２条の突帯で表す。

Ｂ－４:段型先端の巻き込みが弱くなり、接続しない波状文様となる。鰭部は丸く仕上げ、格子叩きが多く残る。

Ｂ－５：段型よりヘラで形状表現を行った沈線に近く、その線もシャープさにかけ、単に直線に円弧を付加したような形である。鰭部に稜を残し全面をヘラケズリで調整する。

Ｂ－６：段型が波状にうねり、全く任意の曲線となる。ヘラ書き部分以外は格子叩きが全面に残る。

Ｂ－７：格子叩きを施す面に、単に山形の沈線を施すのみであり、最終期に位置すると考えられる。

Ｃ－１：伸びのある葉状文を５cm 間隔で比較的に密に配する。縦帯は断面方形の突帯を２条貼り付け、葉状文が縦帯に付着するものが特色である。葉状文は輪郭を内側から斜めに削り取って、中央部に平坦な部分を残す。外側はヘラケズリであるが、内面には格子叩き目の痕跡が残る。

Ｃ－２：やや角ばった葉状文が縦帯にわずかに触れる程度に配され、文様中央にはしのぎが付く。接合可能な大破片があり、全体の意匠を復元し得る。全高約 140cm、基底部前後約 122cm である。鰭部は縦帯にならって肩のあたりで段差がつくのが外形の特徴となる。縦帯は幅約 2.5cm の断面方形の突帯を２条並行して貼り付け、変曲部で段差を付ける。胴部は無文で、基底から約 26cm の高さを底面とする。径約 17cm の半円形透かし穴がある。背面も無文と推測される。頭部には格子状に突帯を貼り付けて巡らし、前後を突帯で挟む。頭部端面は上方中央に庇上に長さ約 21cm の突帯を貼り付け、大棟とのなじみをよくしており、下端中央には幅約 27cm、高さ約 19cm の弧状の刳り形がある。

外形は放物線に近く、基底幅約 67cm、高さ約 42cm である。腹部は無文で、下端中央に刳り形が一部残る。鰭部内面も無文で、鰭部端面は中央で縦方向に段差を付け、外側を突出させるものもある。内面には同心円文のあて具痕を一部に残すが、眼に触れる面はすべて刷毛目が残り、丁寧に調整されている。全体としてはいかにも独特で大胆な意匠で、高さに比例して前後の長さが大きい点も重厚感を与える。

Ｃ－３：意匠はＣ－２に類似するが、葉状文は縦帯から遊離したり、しのぎがなくなって底面が平たんになる傾向がある。外面全体に格子叩きが残る。

Ｃ－４：形や文様構成、調整等はＣ－３によく似るが、鰭部の文様が短冊状になる。やはり中央にしのぎがあり、文様中ほどで輪郭がねじれるという特徴的なものである。縦帯の段差の前方に、径９cm の円孔がある。

Ｃ－５：鰭の段差の部分から下の２つが葉状文、上の短冊文と両者を併用している。段差の上下で使い分けたものである。斜格子叩き目が残る。

Ｃ－６：Ｂ型式の蕨手状文様を採用している例である。これにも、段差の上にかろうじて短冊文を残している破片があり、Ｂ型式とＣ型式の併用型である。

Ｃ－７：Ｂ型式の蕨手状文様を採用したものであるが、段型をつくらず蕨手状文様を印刻していることからＣ型式として新たに設定した型式である。鰭部の文様や縦帯・脊稜部側面の突帯はヘラ状工具による沈線やケズリを施すことにより表現している。鰭部は２条の沈線で区画された約 18.5cm の幅の中にヘラ状工具により右側面は蕨手を右方向に、左側面は蕨手を左方向に下線として細かく描き、蕨手のみ対になるように下線を細かく描く。そして、下線の２つの蕨手と軸部を「V」字状にヘラ工具でケズリとる。この二股となった蕨手を連続して文様を施す。縦帯は２条の沈線、脊稜部側面の突帯は１条の沈線で表現している。縦帯の下には約 3.5cm の円孔を施す。外面は格子叩き後全体に斜め下方向にヘラケズリを施す。内面は同心円文のあて具痕の上にナデを施す。鰭部の先端部は斜めであり周囲にヘラケズリを施す。

Ｄ：全高約 125cm、腹部からの鰭の出は約９cm で鰭部は外に開き、鰭部内面と腹部外面は一体の曲面となる。左右鰭部の端面部の距離は上方で約 42cm、基底部を復元すると約 70cm と、かなり上方ですぼまる。腹部下端には復元幅約 10cm、高さ約８cm の弧状の刳り形がある。緩やかなカーブを持つ鴟尾であったと考えられる。外面はヘラケズリで調整する。

出土した鴟尾はⅠ－１号窯跡と窯跡群内に位置する寒風古墳から出土している。Ⅰ－１号窯跡では焼成部１点、焚口部７点出土している。窯構造は地下式無段登窯で、階の有無は不明である。出土した須恵器の年代が寒風Ⅰ－１式に分類されるものが出土することから、７世紀後半から８世紀初頭頃に操業を終えたと考えられる（馬場ほか 2009）。

また、出土位置は不明だが、小型陶棺か瓦塔と考えられる小型鴟尾が出土している（牛窓町 1997）。また、寒風古窯跡群で確認された型式の鴟尾は備前国や讃岐国等の遺跡でも

確認され、他の遺跡で出土する類似型式のものは寒風Ａ型式、寒風Ｂ型式等のように報告書の型式名を参考に呼称する。

寒風古墳（第１図３） 当古墳は寒風古窯跡内に位置し、羨道の閉塞構造物の一部として２点出土した。古墳の形状は後世の削平等で不明だが､石室は横穴式石室である。時期は、出土した須恵器から西川編年「寒風３式」（西川 1970）とされ、TK48 ～ MT21 の年代である７世紀末頃と考えられる。

その他に、生産地として新林（宮嶺）窯跡（亀田 2006)、切明窯跡（亀田 2006）や大城谷南窯跡（亀田 2006）で確認され、寒風系鴟尾の特徴を持つ鴟尾を生産している（第３図２・３)。

服部廃寺（第４図） 岡山県瀬戸内市長船町服部に所在する（池田ほか 1997)。発掘調査により金堂跡・講堂跡・回廊跡や数棟の建物跡が確認できている。創建期は軒丸瓦、軒平瓦の年代から７世紀末ごろと考えられ、平安時代末から鎌倉時代前半頃に講堂火災を契機とした再建期を経て規模を縮小しながら、14 世紀初頭前後に廃絶したと考えられる。

鴟尾は８点出土し、講堂周辺から７点、西側建物跡から１点出土した。第４図１は鰭部、縦帯、胴部、腹部の部分である。全体的に整形時の格子叩きが見られ、裏面にも格子叩きや同心円文が見られる。縦帯は、断面形状が台形状の突帯を２条貼り付けている。突帯縦帯の間に直径約４cm 珠文を配置する。鰭部は正段型である。寒風 A 型式である。

賞田廃寺（第４図） 賞田廃寺は岡山県岡山市賞田に所在する（高橋ほか 2005)。２次にわたる調査の結果、東塔跡、西塔跡、金堂跡、西門跡、回廊跡（南、西)、寺域区画施設が検出された。創建は飛鳥時代の軒丸瓦が出土していることからこの頃の小堂の建築が想定される。その後、白鳳期になり金堂のみ造営され瓦が大幅に増加する。さらにその後、東塔、西塔の順序で築造され、最終的な伽藍配置は薬師寺式伽藍配置になると考えられる。

鴟尾は１次調査分も含め、９点出土している。出土位置は T6、T8（東塔跡）T26（南区画施設)、T28（南回廊推定地)、T37（東塔南）である。部位を特定できるものは少ないが、寒風型鴟尾が出土している。寒風型鴟尾と判明できるものは３点である。その内、第４図５は寒風Ｂ型式で左鰭部の一部である。先端が蕨手状になる陰刻の葉状文を配し、端部や葉状文内部以外に小さめの叩き目が残る。その他に、同様の鰭模様をもつものや半円形の透かし穴が確認できたもの、縦帯を幅４cm の突帯で表現しているもの等が挙げられる。内面に同心円文のあて具痕跡がみられるものや表面に斜格子叩き具で成型したものも存在する。

幡多廃寺（第４図） 岡山県岡山市中区赤田に所在する（岡山市 1975、草原 2015)。これまでの発掘調査で塔跡・金堂跡等の建物跡が確認されている。創建時期に位置づけられる年代は７世紀末頃と推測され、廃絶時期は明確な時期は不明だが 12 世紀後半の瓦がわずかに出土しており、この時期の可能性がある。

第４図２は縦帯､鰭部である。縦帯は２条の突帯が貼り付け縦帯の間に珠文が見られる。

縦帯貼り付け後に格子叩きを施し、整形する。鰭部は正段型と考えられる。焼成や縦帯の特徴から寒風Ａ型式と考えられる。

その他、赤磐市瀬戸町塩納に所在する吉岡廃寺（柳瀬 1982）（第４図６）で鴟尾が出土している。

ⅲ　備前国の鴟尾の特徴

寒風古窯跡を中心に計５か所で鴟尾を生産し、各地へ供給した一大生産地である。生産の背景には大規模な須恵器生産地であることに加え、陶棺といった大型製品を生産しており､鴟尾のような大型品を製造する技術があったと考えられる。供給先も備前国をはじめ、讃岐国や摂津国（細工谷遺跡）等多方面で確認している。また、讃岐国の小型蓮華文帯の鴟尾（願興寺、石井廃寺）の鰭部は寒風Ｂ型式の特徴を有するが、寒風古窯跡群では蓮華文帯の鴟尾が確認されていないため、工人等が移動して他地域で生産された可能性がある。

ⅳ　備中国の鴟尾

関戸廃寺（第５図２）　関戸廃寺は岡山県笠岡市関戸字唐臼･前田･下前田に所在する（安藤・岩崎 1997)。これまでの発掘調査で塔跡、金堂跡、回廊跡、東方建物、区画施設（西側築地、北側溝跡）が確認された。

鴟尾は採集品も含めて３点出土し、部位は縦帯と鰭部、胴部のものが出土している。胴部のものは円形の剥離痕があり、寒風系鴟尾に類似するが胎土や焼成が大きく異なる。

その他に、倉敷市日畑に所在し、白鳳期に創建の日畑廃寺（小野ほか 2005）（第５図１）や伝出土とされる備中国分寺（津山市 2000）（第５図４)、総社市宿に所在し、７世紀前半から白鳳期にかけて操業した末ノ奥古窯跡（山手村 2003a）や道金山古窯跡群（山手村 2003b)（第５図３）から鴟尾が出土している。また末ノ奥古窯跡では陶棺も出土している。

ⅴ　美作国の鴟尾

大海廃寺（第５図７・８）　岡山県美作市作東町山手大海寺に所在する。発掘調査で塔跡・金堂跡・講堂跡・南門跡・築地塀跡等が確認され、法起寺式伽藍配置であることが明らかになっている（岡山県教委 1978・1979)。創建時期は白鳳期前半で奈良時代末～平安時代初頭には火災で焼失したと考えられる。

出土した鴟尾は 23 点で、鰭部、蓮華文を飾る縦帯、沈線で唐草文を表したと考えられる胴部等が出土した。特徴のあるものとして、蓮華文帯の縦帯は四天王寺Ｅ例と同笵の笵型ａを押して施文しているものや胴部には蕨手状に反転する唐草文を表したと考えられる沈線が見られる。

この他に、土井廃寺（岡山県作東町）や五反廃寺（岡山県真庭市）で鴟尾が出土してお

り、五反遊古墳では陶棺の上に乗せたと考えられる鴟尾が発見されている（第５図５・６）。

C　広島県

i　概要

古代の広島県は、備後国と安芸国で東西に分かれていた。現在、鴟尾が確認されている寺院跡は備後国５ヵ所、安芸国２ヵ所である。窯跡からの出土はない。また前者の５ヵ所については、すべて寺町廃寺式軒丸瓦が葺かれていた備後北部の寺院跡で、備後南東部での出土は確認されていない[1]（第６図）。

ii　備後国の鴟尾

寺町廃寺（第７・８図）　広島県三次市向江田町寺町（古代の備後国三谷郡）に所在し、古くから『日本霊異記』にある「三谷寺」に比定されてきた寺院跡。霊異記には、斉明７年（661）に百済へ出兵した三谷郡の大領の先祖が禅師弘済を伴って帰国し、三谷寺を建立したとある。伽藍は、塔と金堂が東西に並び、中央北の講堂に回廊が取り付いた法起寺式伽藍配置と考えられているが、中門や南門、僧房などは確認されていない。

鴟尾は、頂部の大型片、脊稜部、胴部、縦帯、鰭部などの破片が出土している。現在、史跡整備に伴い第Ⅱ期の発掘調査が進められているため、ここでは鰭部の形状からＡ～Ｄの４種類に分けて紹介するが、詳細については調査の終了を待ちたい。

Ａは、頂部の大型断片（１）。外側にのみ段を付けたもので、沈線を 4.0 ～ 5.0cm 間隔で１条ずつ引き、その上側をわずかに削った浅い逆段型の鰭である。端面近くには段を作っていない。縦帯は幅約 2.0cm の細長い粘土紐を貼り付け、中央に凹線を施すことで２条突帯としているため、脱落した突帯のみの破片も出土している。また突帯が剥離した面には下書き線が認められる。鰭部の厚さは約 4.5cm。胎土に多量の砂粒を含み、焼成はやや軟質、色調は灰褐色を呈する。胴部の詳細は明らかでないが、同一個体と考えられる破片には、蕨手文状の文様が線刻されている（２）。図示した資料は右側面の胴部片で、右端には貼付突帯と浅い段鰭が施されていたと推定され、厚さは約 4.5cm、内側には腹部との取り付きがある。蕨手文状の文様からは他の沈線が上下に延びている。胎土に多量の砂粒を含むが、二次焼成を受けているため器面の剥落が著しい。

Ｂは、鰭部から縦帯にかけての破片（３）。外側にのみ段を付けた鰭で、表面に下書き線を 7.0 ～ 9.0cm 間隔で２条一組（約 2.0cm 幅）引き、その中を方形に削り込んだもので、端面側についても裾に沿って突帯を残した逆段型の鰭部である。幅約 2.5cm の縦帯は削り出しによる断面方形で、内側には腹部が取り付いている。縦帯の胴部側にはカキ目状の調整が認められ、鰭部は約 5.0cm、腹部は 3.0 ～ 3.5cm の厚さを測る。胎土に砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は淡灰白色を呈する。

Ｃは、鰭部から縦帯にかけての破片（４）。外側にのみ段を付けたもので、表面に下書き線を約 5.0cm 間隔で１条引き、その上側を削った浅い逆段型の鰭部である。貼り付けによる縦帯は欠落しているが、器面には下書きの沈線が鰭側に認められる。厚さは約 5.0cm を測る。胎土は多量の砂粒を含み、焼成は堅緻、色調は青灰色を呈している。

Ｄは、鰭部から縦帯にかけての破片（５）。外側にのみ段を付けたもので、２条一組の縦帯と浅い正段型の鰭は削り出しによっており、その間隔は 5.0cm 前後、厚さは約 6.0cm である。内側には腹部との取り付きが見られる。胎土には多量の砂粒を含み、焼成はやや軟質、色調は灰色を呈している。

上山手廃寺（第８・９図）　広島県三次市向江田町上山手（古代の備後国三谷郡）に所在し、先の寺町廃寺は北東約 1.2km の位置にある。伽藍は金堂と講堂の基壇が確認されたことから、一時は法起寺式伽藍配置とも考えられたが、塔は建てられていなかったらしい。ここでは発掘調査（1978 ～ 1980 年）以外に、1996 年と 2005 年の工事立会で出土した資料についても紹介しよう。

鴟尾は、これまで頭部、脊稜部、胴部、縦帯、鰭部、笠形珠文などの破片が出土しているが、胎土・焼成と色調などの違いからＡ・Ｂの２種類に分けられる。

Ａは、胎土に砂粒を含み、焼成は軟質、色調は灰白色を呈した一群。図示していないが、頂部や胴部など大型の破片も見られ、厚さは 4.5 ～ 5.0cm を測る。鰭部は外側にのみ段を付けており、幅は 5.0cm 程度の逆段型である。また縦帯は幅約 2.0cm、高さ約 1.5cm の細長い粘土紐を貼り付け、中央に凹線を施すことで２条としている。縦帯が剥離した部分には、下書き線が２条認められ、これによって胴部と鰭部を区画していたと考えられる。内側には腹部との取り付きがある。

Ｂは、胎土に石英などの砂粒を多量に含み、焼成は軟質、色調は暗灰色～一部黒色を呈する一群。脊稜部、胴部、縦帯、鰭部、笠形珠文などの破片が出土している（６～ 11）。胴部厚は 3.5 ～ 4.0cm、脊稜部は幅約 9.0cm、高さ約 4.0cm、外側は磨き状のナデで仕上げている。縦帯は幅約 2.0cm、高さ約 1.0cm の突帯２条一組を２列貼り、その間に笠形珠文を貼り付けている。この珠文は杯蓋の頂部に付くつまみに類似したもので、笠型の頭部は直径約 6.0cm、柱部は直径 3.5 ～ 4.0cm、高さ約 3.0cm を測る[2]。２点出土しているが、ともに器面に直接貼り付け、柱部の粘土を縦帯側にナデ付けただけの接合方法である。鰭部は外側にのみ段を付けたもので、鋭利な刃物を上方と横方向から入れて粘土を切り取り、その後ナデを加えている。段幅は 3.0 ～ 5.0cm で、内側から外側に向かって広がる正段型の鰭だが、端面には段を作っていない。厚さは 3.0 ～ 5.0cm である。

寺戸廃寺（第 11 図）　広島県三次市三次町寺戸（古代の備後国三次郡）に所在した寺院跡。伽藍は南北２棟の建物基壇と、その南側に中門と推定される遺構が明らかとなっており、中門の北側の基壇は塔跡と考えられている。

鴟尾は、建物の屋根に乗せられていた通有の大きさのものと、瓦塔の屋根に乗せられて

いた小型のものが出土しており、前者をA、後者をBと呼ぶ。

Aは、胴部と鰭部の破片（12・13）。胴部には蕨手文状の文様が線刻され、貼り付けによる縦帯は幅約1cmの突帯が2条施され、内側には腹部が取り付いている。また鰭部は外面にのみ段を付けたもので、段幅は4.0～4.5cmで逆段型に削り出しているが、端面にはノコギリ歯状の切り込みが設けられている。厚さは3.0～3.5cmと薄い。胎土は砂粒を含み、色調は黄褐色だが、全体的に摩耗が著しい。

Bは、小型鴟尾（14）。頭部は欠損するが、高さ約5.3cm、基底部長さ約3.5cm、幅約2.3cmで、断面は三角形をなす。手捏ねだが、縦帯、半円形状の透穴、脊稜はそれぞれ粗い沈線で描いており、鰭部端面にはノコギリ歯状の切り込みを入れている。胎土は石英粒を含み、焼成は堅緻、色調は灰白色を呈している。

なお、この他に瓦塔の建物入口部分と考えられる破片も出土している[3]（亀田2002）。

法塔崎廃寺（第11図）　広島県庄原市上原町法塔崎（古代の備後国恵蘇郡）に所在した寺院跡。伽藍は1棟の建物基壇が確認され、東に亀井尻瓦窯跡（平窯）が存在する。

鴟尾は、胴部から縦帯にかけての破片（15）。貼り付けによる縦帯は幅約1.5cmの突帯が2条施され、胴部には同じ貼り付けによる蕨手文状の文様が見られる。また内側には腹部が取り付いている。鰭部は大半が欠損しているが、段は外面のみで、正段型であることがうかがえる。厚さは胴部が約4.0cm、鰭部は約5.5cmと厚い。胎土は多量の砂粒を含み、焼成は軟質、色調は灰白色だが、全体的に摩耗が著しい。

康徳寺廃寺（第11図）　広島県世羅郡世羅町寺町（古代の備後国世羅郡）に所在した寺院跡。伽藍は、北方建物基壇とその南東に南方建物基壇が検出され、前者は金堂、後者は講堂の可能性が推測されている。

鴟尾は、胴部から縦帯にかけての破片（16）。接合しないが、胴部に曲線文様（蕨手文状の文様か）が線刻されており、貼り付けによる縦帯は幅約1cmの突帯が2条施され、内面には腹部が取り付いている。器壁は2.5～3.0cmと他の個体に比べて薄い。胎土は砂粒を含み、焼成は軟質、色調は黄灰白色や灰白色で、全体的に摩耗が著しい。

iii　備後国の鴟尾の特徴

以上、備後国の鴟尾について見てきた。この国での最大の特徴は、先述したように鴟尾の分布が偏っていることであろう。ここで紹介した5寺院はすべて備後北部地域に点在しており、しかもこれらは寺町廃寺式軒丸瓦（いわゆる「水切り瓦」）が葺かれた寺院である（松下1969、妹尾1991ほか）。白鳳時代創建の古代寺院が集中する備後南東部地域（7寺院以上）では、これまで鴟尾の出土は確認されていない（妹尾1998）。

鴟尾自体について見ると、鰭部の段は外側にのみ設けられているが、その形状はさまざまで、縦帯についても粘土紐の貼り付けや削り出し、また前者の中央に凹線を施すことで2条突帯とするなど、一定していない。しかし、これらの胴部には蕨手文状の文様が線刻

（法塔崎廃寺例は貼付け突帯）されているものが多く、こうした施文の鴟尾が広がっていた可能性が考えられる。またこれらとは別に、上山手廃寺の鴟尾Ｂ（笠形珠文鴟尾、６～11）に注目したい。花谷浩氏のご教示によるものだが（花谷 2016、久保・花谷 2022）、島根県出雲市斐川町の三井Ⅱ遺跡瓦窯出土の鴟尾との類似点が多いものである。この瓦窯出土の軒丸瓦は、寺町廃寺の軒丸瓦ＦＩＢ類と同笵で製作技法も類似し、しかも笵傷の状態から、「備後三谷寺工房（仮称だが・・・）」の瓦工らが瓦笵を携えて中国山地を越え、出雲に移動した可能性が考えられてきた（花谷 2010、妹尾 2011、日浦 2015 ほか）。上山手廃寺の創建軒丸瓦ＦＩＡ類は軒丸瓦ＦＩＢ類に先行するが、この二寺は一対の寺院（僧尼寺）として同じ氏族（「三谷郡の大領の先祖」）が檀越となって造営したと推測される（妹尾 2017）。このため、工房は同じ可能性が高く、鴟尾についてもこの工房からの工人の移動が考えられるのである（第 10 図）。

ⅳ　安芸国の鴟尾

安芸国の鴟尾については、資料が少なく共通した特徴を見いだすことができない。このため、個体別の説明にとどめたい。

横見廃寺（第 11・12 図）　広島県三原市本郷町下北方（古代の安芸国沼田郡）に所在した寺院跡。大和檜隈寺の山田寺式軒丸瓦との同笵品（横見廃寺式軒丸瓦）が出土することで知られるが、それが葺かれていたのは小規模な仏堂であったと考えられている（妹尾 1994 ほか）。その後、東側の西面した講堂には回廊が取り付き、北側に基壇建物（塔か？）が設けられるなど、変則的な伽藍が検出されている。

鴟尾は、胴部片を中心に出土しているが、ここでは段をもつものをＡ、無文のものをＢと呼ぼう。

Ａは、胴部全面に削り出しによる段をもつ（17）。正段型で、段幅は 3.6 ～ 4.5cm。削り出しの後に段部をナデによって平滑気味に仕上げているが、内側と断面には 3.0cm 前後の粘土紐を積み上げた痕跡が明瞭に見られる。厚さは 2.0 ～ 3.8cm と薄い。胎土には多量の砂粒を含み、焼成は軟質、色調は灰白色だが、断面は瓦質状である。

Ｂは、文様のない無文の胴部（18）。外側は粗いヘズリを施しているが、内側は青海波文状のタタキが認められ、弧状の透かし穴も存在する。厚さは 3.0 ～ 4.0cm、胎土には多量の砂粒を含み、焼成は軟質、色調は灰白色～灰褐色を呈している。

明官地廃寺（第 12 図）　広島県安芸高田市吉田町中馬（古代の安芸国高宮郡）に所在した寺院跡。「高宮郡内部寺」とヘラ書きされた平瓦が出土している。伽藍は東面し、金堂と塔が北南に並ぶ法隆寺式伽藍配置が想定されているが、再検討が必要であろう。軒丸瓦は先述の横見廃寺との同笵品（横見廃寺式軒丸瓦）が存在する（妹尾 2018）。

鴟尾は、脊稜部、頭部から胴部、鰭部が出土（19 ～ 21）。半裁竹管状の工具で頭部や脊稜部から縦帯に向かって２条一組の条線を約 9.0cm 毎に引き、さらに基底部から上部には

蛇行する２条一組の条線を施している。厚さは 4.0 ～ 6.0cm と一定していない。また頭部には大棟に接続するように長さ約 4.0cm のソケット状をなす段が見られる。鰭部は外側にのみ段を付けた削り出しによる正段型で、その間隔は 6.0 ～ 7.0cm だが、端面にも同じ段を作っている。胎土には多量の砂粒を含み、焼成は軟質、色調は外面が灰白色、内面は灰黒色である。

D　香川県

i　概要

古代の讃岐国は、現在の香川県の範囲に位置づけられる。鴟尾が確認されている遺跡は生産地である窯跡から２カ所、消費地である寺院跡から８カ所から鴟尾が出土している。

ii　讃岐国の鴟尾

末古窯跡（第 13 図１）　末古窯跡は香川県さぬき市志度町に所在する。昭和 43 年に登窯１基の調査がおこなわれ、須恵器とともに鴟尾が出土した（六車・溝淵 1969）。鴟尾は燃焼室床面より出土しており、窯壁の補強材等２次利用された可能性がある。出土した鴟尾は胴部１点である。破片上部は弧型の透かし穴が見られる。胴部は無文だが、斜格子叩きがみられ、裏面には同心円文が見られる。色調は、表面は淡黄色で裏面は黒褐色を呈し、焼成は軟質の須恵質で胎土は粗い。

窯の年代は、焼成室から出土したものは少ないものの、周辺に窯跡が存在しないことから灰原出土の資料で判断すると７世紀前半から８世紀初頭である。このことを考慮すると、片山池１号窯のようにもともと使用したものを再利用したのではなく、焼成中に破損したものを再利用したと推測され、窯の年代観と大きなずれはないと推測する。一方で白石氏による胎土分析の結果、寒風産の可能性があり、同遺跡で出土する須恵器の胎土分析も含めて慎重に検討しなければならない。

石井廃寺（第 13 図）　石井廃寺は香川県さぬき市（旧寒川町）石井に所在し、高松平野から南東にのびる内陸平野に所在する。周辺に礎石が残るが詳細は不明である。

出土鴟尾は縦帯と胴部の一部が３点出土している。第 13 図３は蓮華文帯の縦帯と胴部に浅い沈線で表した鋸歯文が見られるものである。縦帯は胴部に比べ段上げしている。素弁八葉蓮華文である。第 13 図４は蓮華文の縦帯と鰭部である。蓮華文の状況は前者と同じである。鰭部は破損して全容は不明であるが、正段または寒風Ｂ類の鰭形状と推測される。第 13 図５は鰭部で寒風系Ｂ類の鰭形状である。また、鰭端部には２条の突帯を貼り付ける。

極楽寺跡（第 13 図２）　極楽寺跡は香川県さぬき市（旧寒川町）石田東に所在し、高松平野から南東に延びえる内陸平野奥部に位置する。興福寺金堂地鎮具である唐花双鸞八花鏡

の踏み返し鏡と、宝珠形輪頭の鉄錫杖が出土している。現在の極楽寺の周辺に位置すると考えられるが詳細は不明である。

鴟尾は１点出土し、寒風Ｂ型式の鰭形状をしている。端部に布目が表面から裏面にかけて広がっている。鰭部と布目の間に斜格子叩きが残り、裏面も丁寧になでる。わずかに縦帯が残り、珠文と考えられる突起が見られる。また、端面に約８cm 間隔で、垂直よりやや後方に傾いた円孔が穿たれており、「拒鵲」のためと推測される（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。色調は灰色を呈し、焼成は堅緻な須恵質で、胎土は精良である。

願興寺（第 13 図６）　願興寺は香川県さぬき市（旧長尾町）に所在し、高松平野から南東に延びる内陸平野北側丘陵上に位置する。これまでに発掘調査はおこなわれておらず、出土遺物は表採資料であるため、寺院や出土遺物の位置づけは難しい状況である。

鴟尾は１点出土し、石井廃寺と文様構成が類似しているものである。蓮華文帯の縦帯と胴部の一部である。蓮華文の文様は素弁八葉蓮華文である。石井廃寺の例と比較すると抽象化が進行し、くぼんだ円盤形に蓮弁輪郭と中房を陽刻した表現である。鰭部がわずかに残っており、段型と推測される。腹部に１条の沈線が確認できる。色調は灰色で焼成は硬質な須恵質で胎土はやや粗い。

片山池１号窯跡（第 13 図）　片山池１号窯跡は香川県高松市西春日町に所在する（渡邊ほか 2009）。周辺には白鳳期末から室町時代の寺院である坂田廃寺が存在する。窯跡は平安時代中期のロストル式の瓦窯である。

鴟尾は２点確認している。第 13 図７は窯壁の補強材として使用されたものである。寒風 B-2 型式に位置づけられる。前述したように窯の年代は平安時代中頃と考えられており、坂田廃寺で使用されたものが２次的に利用されたと考えられる。

開法寺（第 14 図）　開法寺は坂出市府中町に所在する（今井ほか 2020）。寺域は讃岐国府跡の国府域内に位置し、これまでの発掘調査等で塔跡、北方の礎石建ち建物２棟（講堂、僧房か？）が確認されている。報告で７世紀中頃に位置づけている軒丸瓦が出土しているが、創建年代については諸説ある。

鴟尾は表採資料も含め３点出土している。第 14 図１は縦帯部分で蓮華文帯鴟尾である。文様は複弁八葉蓮華文で、周環を持つ蓮子が１＋４＋９で配置される。２条の突帯が確認できる。裏面は同心円文による整形が確認できる。第 14 図２は開法寺出土と伝えられている鴟尾の鰭部である。いずれもハケ調整後に沈線をヘラ書き等で表現している。

鴨廃寺（第 14 図３）　鴨廃寺は香川県坂出市加茂町に所在し、開法寺から北に 1.4km に位置する。開法寺と同笵の瓦が出土する。調査事例はないが、塔心礎が現地に残る。

鴟尾は３点出土しており、縦帯と推測されるものが２点、頭部に近い胴部が１点出土している。各破片の裏面には同心円文や格子叩きが確認できる。表面は基本的にナデ調整を行っていることから、突帯を貼り付けた後にナデ調整をおこなっていることが分かる。近接している開法寺のものとは文様構成や調整が異なることから、それぞれ生産地が異なる

と推測される。

田村廃寺（第 14 図） 香川県丸亀市田村町に所在する（東 2002）。中心部を発掘調査した事例はないが、周辺に塔心礎があり、地名に「塔の前」や「ゴンゴン堂」等の地名が残っている。周辺は田村遺跡と称され、瓦類や鴟尾等が出土している。

発掘調査で５点の鴟尾が出土している。第 14 図４は SP04 で出土し、鰭部と縦帯部分である。正段型で格子叩き具による整形後に鰭を削りだしている。裏面は同心円文が見られる。第 14 図５は SP07 で出土し、胴部と考えられる部分である。表面には格子叩き後に粘土円盤を貼り付けた痕跡が見られ、寒風Ａ型式と考えられる。裏面には同心円文が見られる。

仲村廃寺（第 15 図１） 仲村廃寺は善通寺市富士見町に所在する（川畑 1996）。発掘調査はほとんど実施されていないが、礎石が確認でき、古図に土壇があったことが伝えられている。出土瓦から奈良時代から平安時代後期に存続した寺院である。

鴟尾は縦帯部分１点が出土している。縦帯は突帯２条分と唐草文をあしらった内区と外区で構成される。突帯は区画分けされている。裏面には格子叩きが残っている。色調はにぶい褐色で焼成は良好であるが、土師質に近く、胎土はやや粗い。

善通寺（第 15 図２） 善通寺は善通寺市善通寺町に所在する（川畑 1996）。現在まで法灯を伝える寺院で、出土瓦から創建期は白鳳期と推測される。現在の善通寺は東院・西院にわかれ、東院の土塁に囲まれた範囲が旧寺域と推測され、規模は方２町に相当される。

鴟尾は鰭部１点で善通寺出土として同寺に伝えられている遺物である。鰭は正段で成形は内外に及び鰭部端部にまで及ぶ。鰭部端部に拒鵲と考えられる穿孔が見られる。色調は黒褐色で焼成は軟質、胎土は精良である。

大興寺跡（第 15 図３・４） 大興寺跡は三豊市山本町辻に所在する（川畑 1996）。大興寺の故地は三豊平野奥部に位置し、現在の四国八十八ヶ所第 67 番札所となっている大興寺は移転先となる。発掘調査が実施されていないため詳細は不明だが、故地からは瓦類が採取され、白鳳期から奈良時代前期の創建が推測される。

鴟尾は現在所在不明となっているが、拓本資料等でその概要を知ることができる。確認される鴟尾は縦帯から鰭部の破片が２点確認された。縦帯は２条の突帯が確認でき、鰭部側に唐草文を配している。唐草文の巻き込み側には三角形の点を配する。

ⅲ　讃岐国の鴟尾の特徴

型式の特徴や胎土分析の結果を考慮すると寒風型鴟尾の製品が多く出土していることがわかる。対岸を挟んで運搬しやすい環境であったことが要因であろう。また、年代差等が考えられるが、唐草文帯や蓮華文帯の鴟尾も確認され、バリエーションに富む。出土する寺院は寒川郡（願興寺等）、阿野郡（鴨廃寺等）、那珂郡（田村廃寺等）、多度郡（善通寺等）といった限られた郡でしか確認できていないことも特徴とする点である[4]。

E　愛媛県

愛媛県は古代伊予国に相当する。松山市来住廃寺跡で鴟尾が確認されている。

来住廃寺跡（第16図1～3）　松山市来住町に所在する。法隆寺式の伽藍配置と推定されていたが、近年の調査で塔跡とされてきた基壇が金堂跡であることが明らかになり、伽藍配置を再検討する必要が生じている。金堂跡のすぐ西には久米官衙遺跡群が広がる。

昭和52年度（1977）に実施された第2次調査において、SD33[5]から、少なくとも2型式3個体の鴟尾が出土している（小笠原1979、森1986）。第16図1は、鰭部及び胴部に近い下端部などの破片が確認されており、現在、松山市考古館において大阪府・四天王寺の鴟尾をもとに復元展示されている。鰭部には、幅約5.0～6.0cmの連続する段（正段）が設けられている。残存部を見る限り胴部は無文で、下端部に半円形の透孔をもつ。第16図2・3は、胴部下端と、頂部に近い鰭部から胴部の破片である。第16図1とは異なり、胴部下部に透孔はなく、下端部が肥厚する。鰭部の文様はヘラ描沈線で表現する。また、胴部と鰭部の接続部を見ると、鰭部が胴部と連続するのではなく、大きく外に開く角度で接続する。

F　徳島県

徳島県は古代阿波国に相当する。美馬市郡里廃寺跡で鴟尾が確認されている。

郡里廃寺跡（第16図4～6）　美馬市美馬町に所在する。昭和42・43年度（1967・1968）に行われた1・2次調査によって、法起寺式の伽藍配置が想定されている。第16図4は、平成18年（2006）の4次調査において「西外郭塀西溝」（4－6tr）から出土した鰭部で、蕨手状の文様を施す。寒風窯跡B型式に類似している。また4次調査では縦帯も出土している。第16図5・6は、ヘラ描沈線で木葉状の文様を表現した鰭部である。第16図5は側面に小円孔を有し、拒鵲を立てたものと推定される。四国においては香川県さぬき市極楽寺跡や善通寺市善通寺において、拒鵲を立てた例が確認されている。郡里廃寺跡と極楽寺は同笵の軒丸瓦をもつことに加え、どちらも寒風系の鴟尾を有することから、両寺の関係が注目される。

G　高知県

高知県は古代土佐国に相当する。香美市新改小山田遺跡、南国市比江廃寺跡、高知市秦泉寺廃寺跡で鴟尾が確認されている。

新改小山田遺跡（第16図8）　香美市土佐山田町新改に所在する。平成10年（1998）、11年（1999）に実施されたトレンチ調査において、窯跡に起因するものと推定される包含層

から、沈線で段型を表現する鰭部、縦帯、方形透し孔のある頭部，半円形透し孔のある胴部破片が出土している（土佐山田町教育委員会 2002）。

比江廃寺跡（第 16 図 7） 南国市比江に所在する。塔基壇のほかに、礎石建物 SB － 1 ・SB － 2 が検出されており、金堂もしくは講堂の可能性も指摘されている（出原 2007）。平成 2 年度（1990）の調査で SK 1 の埋土（Ⅱ層）、及び瓦群 1 層から、鴟尾が出土している。頂部に近い脊稜から胴部にかけての破片で、脊稜と交差する凸帯を配する。脊稜と突帯の交差する位置に直径約 7.0cm の珠文をひとつ配する。脊稜及び突帯上面には沈線で表現した直径約 2.5cm の円形の文様を並べる。胴部には、脊稜と平行する方向の幅 2.0cm ～ 3.0cm の櫛描文を、約 2.0 ～ 5.0cm の間隔を空けて施す。

秦泉寺廃寺跡（第 16 図 9 ～ 11） 高知市秦泉寺に所在する。昭和 50 年（1975）以来、平成 29 年（2017）まで、８次にわたる発掘調査が実施されており、基準方位の異なる複数の掘立柱建物跡が検出されている。３次・６次（SD ２・３東の包含層）・７次調査（SD ４）で、少なくとも２型式の鴟尾が出土している。櫛状工具で鱗状の文様を表現する鰭部（第 16 図 9）、比江廃寺跡出土例と同様の円形の文様を配する脊稜（第 16 図 10）、櫛状工具で波状文を施す縦帯（第 16 図 11）、などが確認できる。比江廃寺跡出土例と同系譜の型式と考えられる。

H　岡山県・香川県出土鴟尾の胎土分析

i　はじめに

自然科学的手法による胎土分析により大阪市細工谷遺跡出土の鴟尾が、寒風窯跡から供給されたことが推定された（白石 2001）。

この鴟尾の胎土分析では、新たに岡山県瀬戸内市の服部廃寺と香川県高松市片山池 1 号窯、香川県さぬき市石井廃寺、願興寺、末古窯跡の 4 ヶ所から出土した鴟尾の産地推定を行った。

ii　分析方法・試料

分析は蛍光Ｘ線分析法で行い、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の差異について調べた。測定した元素は、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5の10成分である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：SEA5120A（日立ハイテクサイエンス社製）を使用した。

測定条件：Ｘ線照射径 2.5mm、電流 4 ～ 200mA、電圧 50kV/15kV、測定時間 300 秒、測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：10 成分の定量値は地質調査所の標準試料 JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、

JB-1a(玄武岩)、の３試料を用いて検量線を作成し、定量値を算出した。

測定試料：分析試料は、試料表面の汚れを除去後、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製）で粉末（100 ～ 200 メッシュ）にしたものを加圧成形機で約 10 トンの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる成分を横軸と縦軸にとり、散布図を作成し、胎土の違いについて検討した。

分析した試料は表１に示している。

ⅲ　分析結果について

第 16 ～ 18 図の各散布図では、服部廃寺、片山池１号窯、石井廃寺、願興寺廃寺、末窯跡より出土している鴟尾の産地推定を行った。

各生産地の差異については、寒風窯跡他（寒風古墳、宮峪窯跡）から出土している鴟尾の分布範囲を四角い実線で、寒風出土鴟尾と須恵器（杯・甕類）の分布領域を破線で示した。そして、この散布図に服部廃寺、片山池１号窯、石井廃寺、願興寺、末窯跡の鴟尾をプロットすると、いずれの鴟尾も寒風の領域に分布した。

以上、今回の分析で生産地推定を実施した鴟尾は、すべて寒風地域で生産されていると推定された。なお、さぬき市末窯跡出土の鴟尾も寒風産と推定されたが、末窯跡出土試料の胎土分析を実施し、再検討する必要がある。

（高松市埋蔵文化財センター / 東広島市教育委員会 / 徳島県立博物館 / 岡山理科大学）

謝　辞

資料調査および胎土分析をおこなうにあたり、阿部鋭二、池澤俊幸、大谷博志、梶原瑞司、久家隆芳、小島靖彦、小玉亜紀子、下村裕、杉原賢治、浜田恵子、松尾佳子、松浦誠仁、松田朝由、山本一伸、渡部明夫、安芸高田市歴史民俗資料館、出雲弥生の森博物館、高知県立埋蔵文化財センター、高知市教育委員会、さぬき市教育委員会、瀬戸内市教育委員会、世羅町教育委員会、高松市教育委員会、広島県教育事業団、広島県立歴史博物館、広島県立歴史民俗資料館、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、松山市教育委員会、松山市考古館、美馬市教育委員会、三次市教育委員会（個人・機関の順、五十音順、敬称略）などの関係者の皆さまにお世話になりました。記して感謝申し上げます。

註

1　備後南部の本郷平廃寺（尾道市御調町丸門田）出土と伝わる鴟尾が２点紹介されている（広島県立府中高等学校地歴部 1979）。しかし、掲載されている写真は塼の破片で、その後の発掘調査でも鴟尾は出土していない（御調町教育委員会 1989）。

2　報告書では「異形土器」と分類し、「土師器の土器であり、何らかの器種のつまみ部分」として報告されている（広島県教育委員会 1981）。

3　報告書では「竈の破片」（三次市教育委員会 1971）、企画展の展示図録では「道具瓦（用途不明）」（広島県立歴史資料館 1998）とされているものである。

4　古代讃岐国は計 11 郡で構成される。

5　森光晴 1986 の本文中には SD13 と記されているが、挿図では SD33 とされている。

参考文献

東　信男 2002『田村遺跡発掘調査報告書』　丸亀市教育委員会　株式会社百十四銀行

安藤康宏・岩崎仁司 1997『関戸廃寺』　笠岡市教育委員会

池田　浩ほか 1997『服部廃寺』　長船町教育委員会

今井和彦ほか 2020『開法寺Ⅰ』坂出市教育委員会

牛窓町史編纂委員会 1997「寒風古窯跡」『牛窓町史　資料編Ⅱ』考古・古代・中世・近世　牛窓町

愛媛県史編さん委員会編 1986『愛媛県史　資料編　考古』　愛媛県

愛媛県埋蔵文化財センター 2017『伊予の古代－未知なる伊予国府の探求に向けて－』　愛媛県埋蔵文化財センター

大脇　潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』　至文堂

岡本治代 2020「四国の鴟尾－伊予・阿波・土佐を中心に－」『徳島県立博物館研究報告』第 30 号　徳島県立博物館

岡山県教育委員会 1976『楢原廃寺跡緊急発掘調査概報』

岡山県教育委員会 1978『大海廃寺緊急発掘調査報告書』

岡山県教育委員会 1979『大海廃寺緊急発掘調査報告書Ⅱ』

岡山県史編纂委員会 1987「五反廃寺」『岡山県史』第 18 巻　岡山県

岡山市教育委員会 1975『幡多廃寺発掘調査報告』

小笠原好彦 1979「E　鴟尾」『来住廃寺』　松山市教育委員会

小野雅明ほか 2005『日畑廃寺』　倉敷埋蔵文化財センター

亀田修一 2002「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下　古代吉備研究会

亀田修一 2006「新林（宮嵩）窯跡」「切明窯跡」『邑久町史　考古編』　瀬戸内市

川畑　聡 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第５号　香川考古刊行会

草原孝典 2015『幡多廃寺』　岡山市教育委員会

久保穣二朗・花谷　浩 2022「山陰地方の鴟尾」『古代瓦研究Ⅺ』　奈良文化財研究所

高知県教育委員会編 1991『比江廃寺跡発掘調査概報』　高知県教育委員会

高知市教育委員会編 2004『秦泉寺廃寺（第６次調査)』　高知市教育委員会

高知市教育委員会編 2018『秦泉寺廃寺跡（第７次調査)』　高知市教育委員会

高知市史編さん委員会考古部会編 2019『遺跡が語る高知市の歩み　高知市史考古編』　高知市

白石　純 2001「科学が語る須恵器・瓦（鴟尾）の移動」『牛窓町史』通史編　牛窓町史編纂室

白石　純 2009「寒風窯跡群出土遺物の胎土分析」『史跡寒風古窯跡群』　瀬戸内市教育委員会

妹尾周三 1991「安芸・備後の古瓦（その１）－素弁から複弁へ－」『古文化談叢』26　九州古文化研究会

妹尾周三 1994「横見廃寺式軒丸瓦の検討－いわゆる「火焔文」軒丸瓦の分布とその背景－」『古代』97　早稲田大学考古学会

妹尾周三 1998「備後南部の「藤原宮式」軒瓦について」『文化財論究』１　東広島市教育文化振興事業団

妹尾周三 2011「出雲へ伝わった仏教の特質－古代寺院から見た地域間交流とその背景－」『古代出雲の多面的交流の研究』　島根県古代文化センター

妹尾周三 2017「備後寺町廃寺と上山手廃寺の再検討－「三谷法師寺」と「三谷尼寺」の提唱－」『古代吉備』28　古代吉備研究会

妹尾周三 2018「安芸に伝わった仏教文化－明官地廃寺（高宮郡内部寺）の位置づけと今後の課題－」『芸備』50（特集　広島県の考古学）　芸備友の会

高橋伸二ほか 2005『史跡賞田廃寺跡』　岡山市教育委員会

津山市郷土博物館 2000『国分寺　天平時代の国家と仏教』

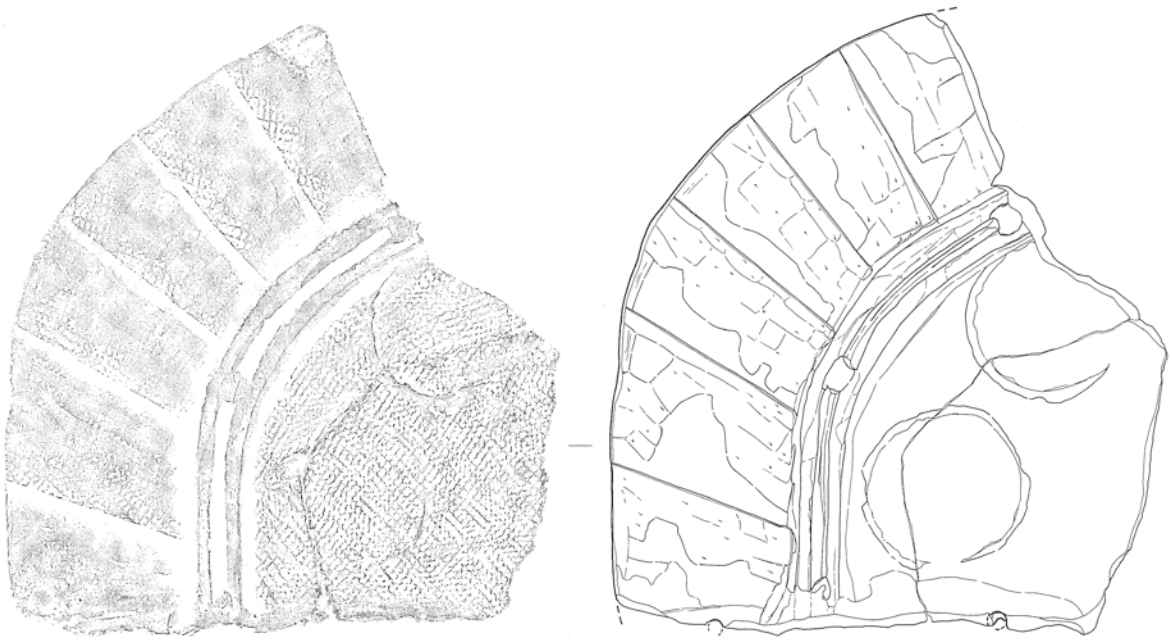
出原恵三 2007『比江廃寺跡Ⅲ』　高知県文化財団埋蔵文化財センター

出宮徳尚ほか 1971『賞田廃寺発掘調査』　賞田廃寺発掘調査団
徳島県立博物館編 2015『瓦から見る古代の阿波－寺院と役所－』　徳島県立博物館
土佐山田町教育委員会編 2002『新改小山田遺跡』　土佐山田町教育委員会
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』
西川　宏 1970「備前の古窯」『古代の日本』４　角川書店
花谷　浩 2010「古代寺院の瓦生産と古代山陰の領域性－出雲西部を中心に－」『出雲国の形成と国府成立の研究－古代山陰地域の土器様相と領域性－』　島根県古代文化センター
花谷　浩 2016「付論　三井Ⅱ遺跡の瓦窯と瓦について」『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群－出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』　出雲市教育委員会
馬場昌一ほか 2009「鴟尾」『史跡寒風古窯跡群』　瀬戸内市教育委員会
日浦裕子 2015「備後国から出雲国への造瓦工人の活動に対する再検討－寺町廃寺ＦＩＢ型式を対象に－」『島根県考古学会誌』32　島根考古学会
広島県教育委員会 1981『上山手廃寺発掘調査概報』（３）
広島県立府中高等学校地歴部 1979「広島県の古瓦類（府中高校所蔵資料の紹介⑧）」『地歴』７
広島県立歴史資料館 1998『ひろしまの古代寺院　寺町廃寺と水切り瓦』（平成 10 年度考古企画展）
松下正司 1969「備後北部の古瓦－いわゆる「水切り瓦」の様相－」『考古学雑誌』55 － 1　日本考古学会
松本和男 1975「五反廃寺」『久世町史』　久世町教育委員会
丸山美和 1993「来住廃寺出土瓦について」『来住廃寺遺跡－第 15 次調査－』　松山市教育委員会
御調町教育委員会 1989『本郷平廃寺』
美馬市教育委員会編 2007『郡里廃寺跡第４次調査概要報告書』　美馬市教育委員会
美馬市教育委員会編 2018『郡里廃寺跡発掘調査報告書』　美馬市教育委員会
美馬町教育委員会編 1968『立光寺跡の発掘調査』　徳島県教育委員会・美馬町教育委員会
美馬町教育委員会編 1969『阿波・立光寺跡発掘調査概報』　徳島県教育委員会・美馬町教育委員会
美作町史編集委員会 2007「美作地方の陶棺」『美作町史　通史偏』　美作市
三次市教育委員会 1971『寺戸廃寺跡発掘調査概報』２
六車恵一・溝淵茂樹 1969「香川県須恵古窯跡発掘調査報告」『文化財協会報』特別号９　香川県文化財保護協会
森　光晴 1986「12　来住廃寺」『愛媛県史資料編　考古編』　愛媛県
柳瀬昭彦 1982『吉岡廃寺』　岡山県教育員会
山手村史編纂委員会 2003a「末ノ奥古窯跡」『山手村史』　山手村
山手村史編纂委員会 2003b「道金山古窯跡」『山手村史』　山手村
山本哲也 1984『秦泉寺廃寺跡－第３次発掘調査－』　高知市教育委員会
渡邊　誠ほか 2009『片山池窯跡群』　高松市教育委員会

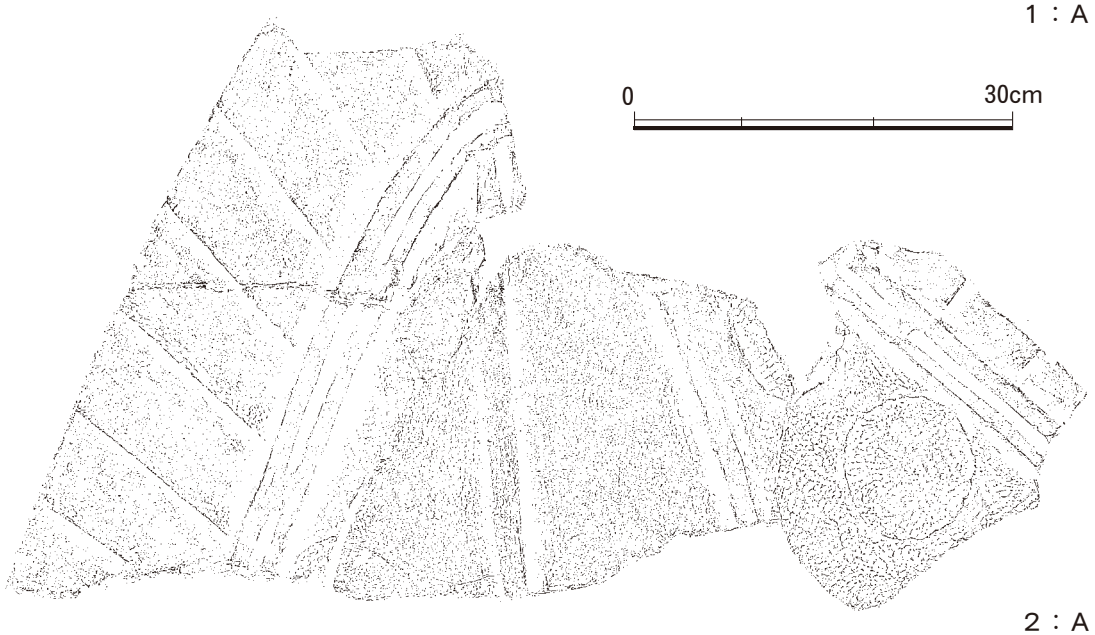
図版出典

第１・２図、第３図１：馬場ほか 2009（一部改変）。
第３図２・３：亀田 2006（一部改変）。
第４図１：池田ほか 1997（一部改変）。　２：岡山市 1975（一部改変）。
３～５：高橋ほか 2005（一部改変）。　６：柳瀬 1982（一部改変）。
第５図１：小野ほか 2005。　２：安藤・岩崎 1997。
３：山手村史 2003 ｂ。　４：津山市 2000。
５：美作町史編集委員会 2007。　６：柳瀬 1982。
７・８：岡山県 1978・1979。
第６図：　妹尾作成。
第７図１、第８図４・５：三次市教育委員会所蔵。
第８図２：和田 2011（一部改変）。

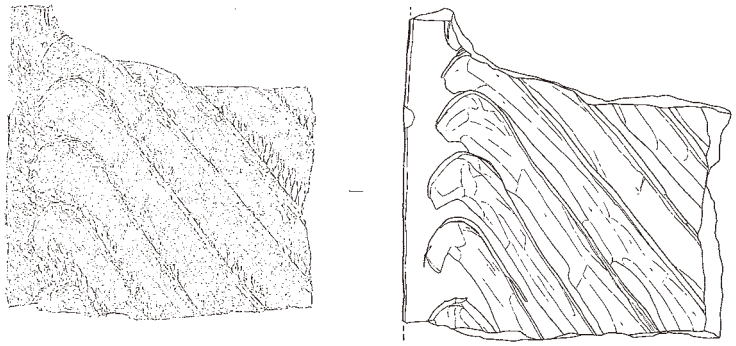
第８図３：広島県立歴史博物館所蔵。
第８図６、第９図８～10：広島県立歴史民俗資料館所蔵。
第９図７・11：三次市教育委員会所蔵。
第 10 図：妹尾 2011（一部改変）。
第 11 図 12 ～ 14：三次市教育委員会 1970（一部改変）。
第 11 図 15：広島大学大学院文学研究科考古学研究室所蔵。
第 11 図 16：世羅町教育委員会 1995（一部改変）。
第 11 図 17、第 12 図 18：広島県教育委員会 1972（一部改変）。
第 12 図 19 ～ 21：広島県立埋蔵文化財センター 1987（一部改変）。
第 13 図１：六車・溝淵 1969。
第 13 図２～７、第 14 図３、第 15 図１～４：川畑 1996（一部改変）。
第 14 図１・２：今井ほか 2020。
第 14 図４・５：東 2002（一部改変）。
第 16 図１：小笠原 1979 所収の図を再トレース。松山市教育委員会（松山市考古館）所蔵。
２・３：岡本作成。松山市教育委員会（松山市考古館）所蔵。
４：岡本作成。美馬市教育委員会所蔵。
５・６：美馬市教育委員会 2018 所収の図を再トレース。美馬市教育委員会所蔵。
７：岡本作成。高知県立埋蔵文化財センター所蔵。
８：土佐山田町教育委員会 2002 所収の図を再トレース。土佐山田町教育委員会所蔵。
９～ 11：岡本作成。高知市教育委員会所蔵。



1：A



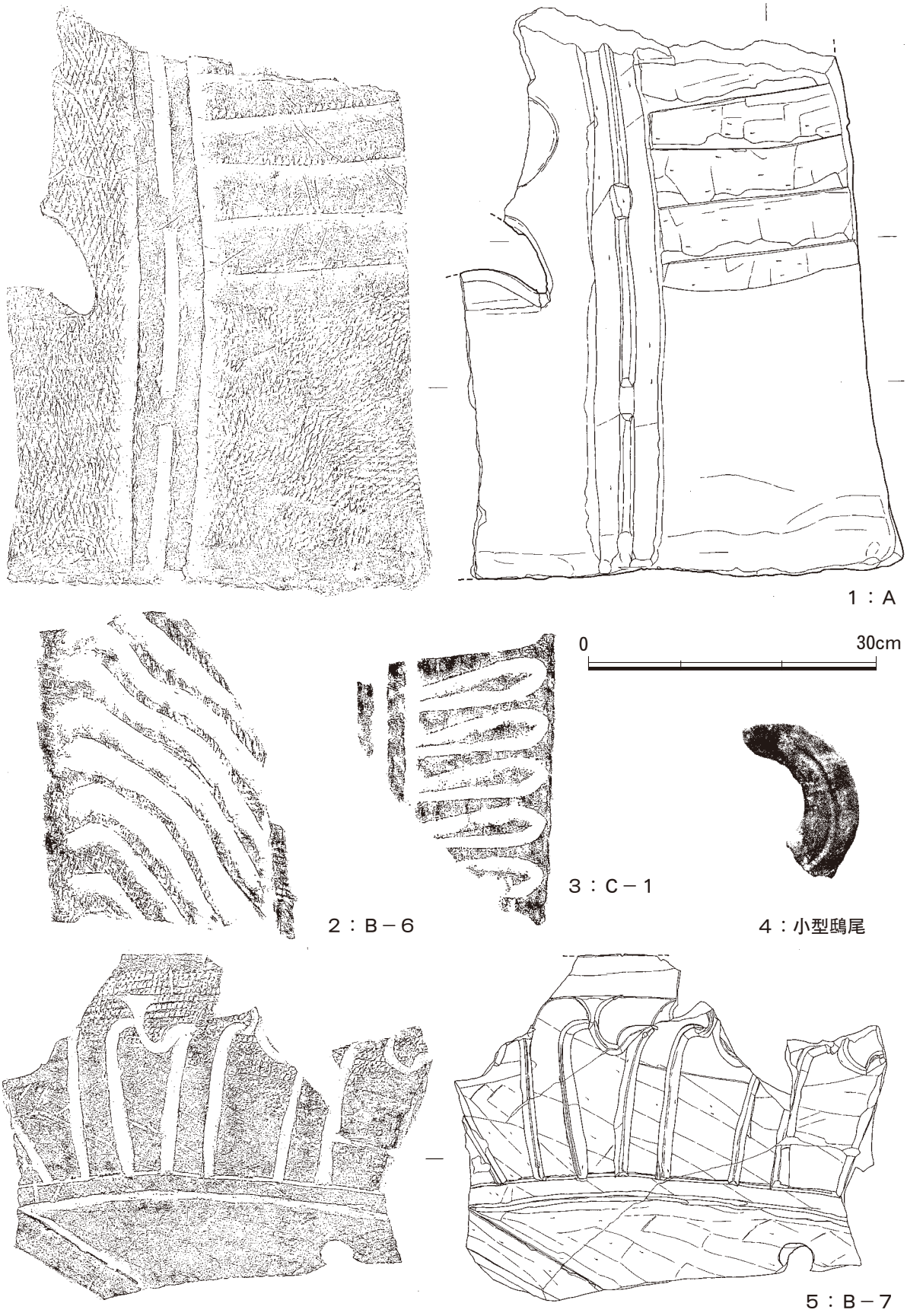
2：A



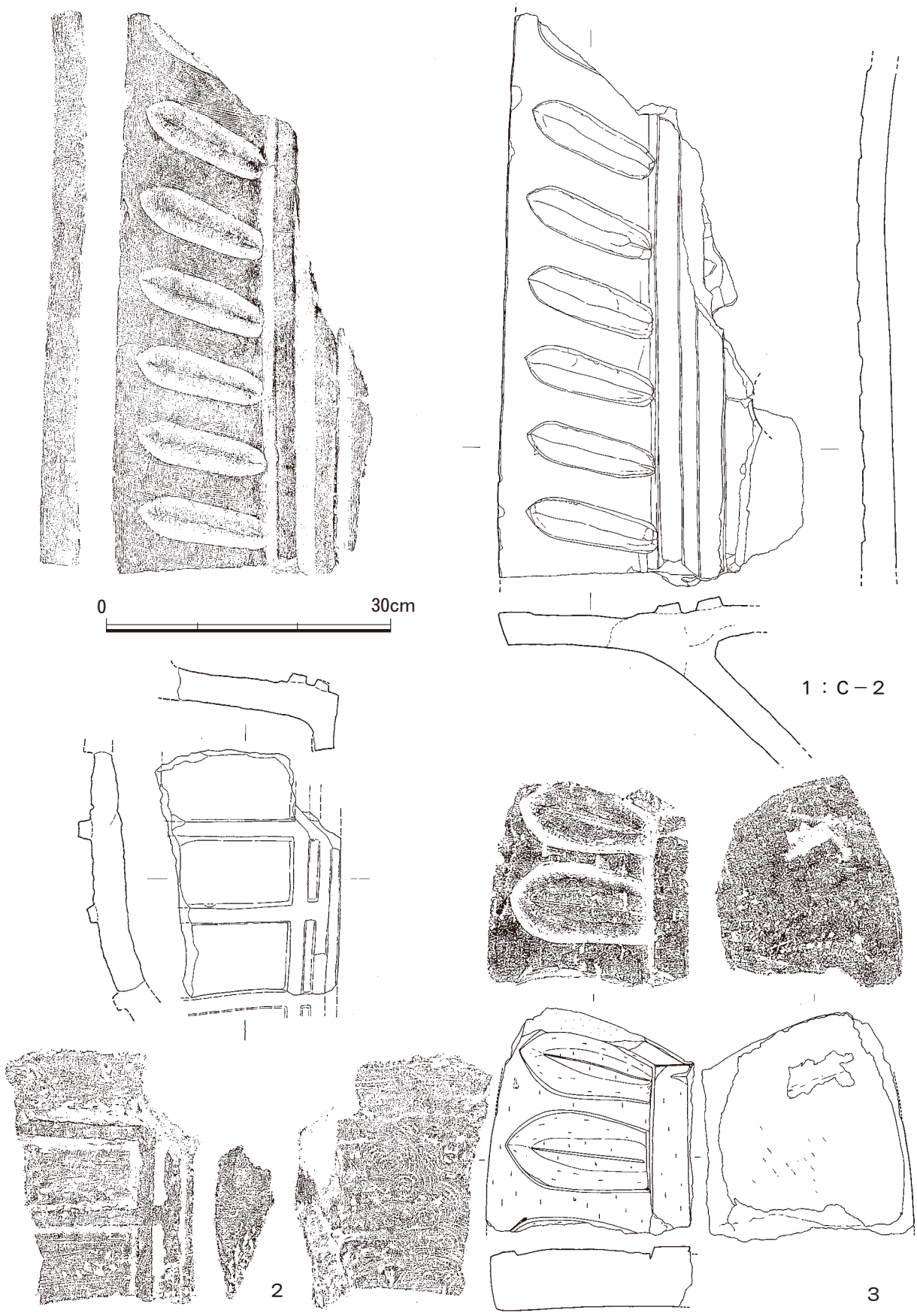
3：B－3

4：B－5

第１図　岡山県の鴟尾①（１：６）
（１・２・４：寒風古窯跡　３：寒風古墳）

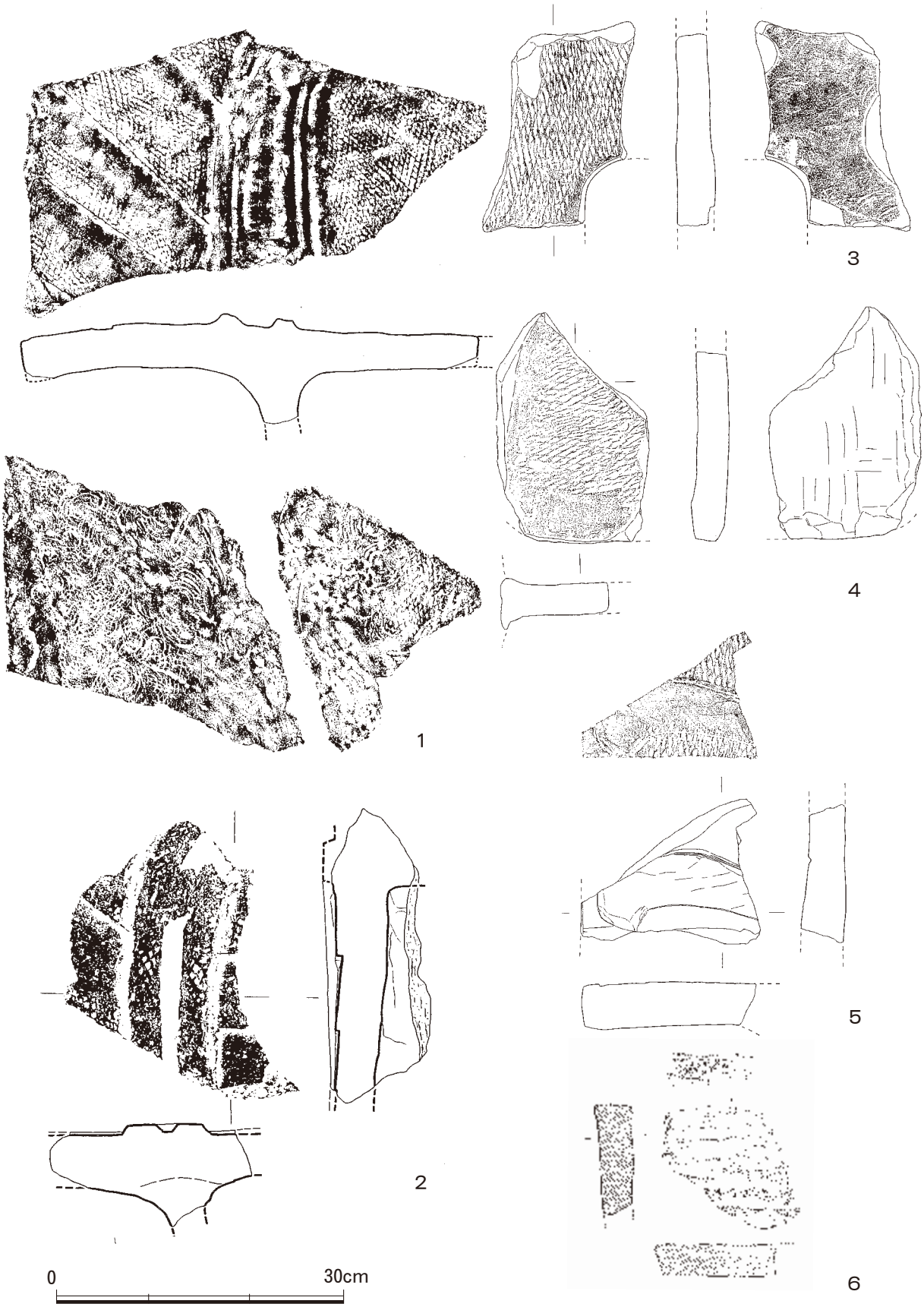


第２図　岡山県の鴟尾②（１：６）
（1～5：寒風古窯跡）



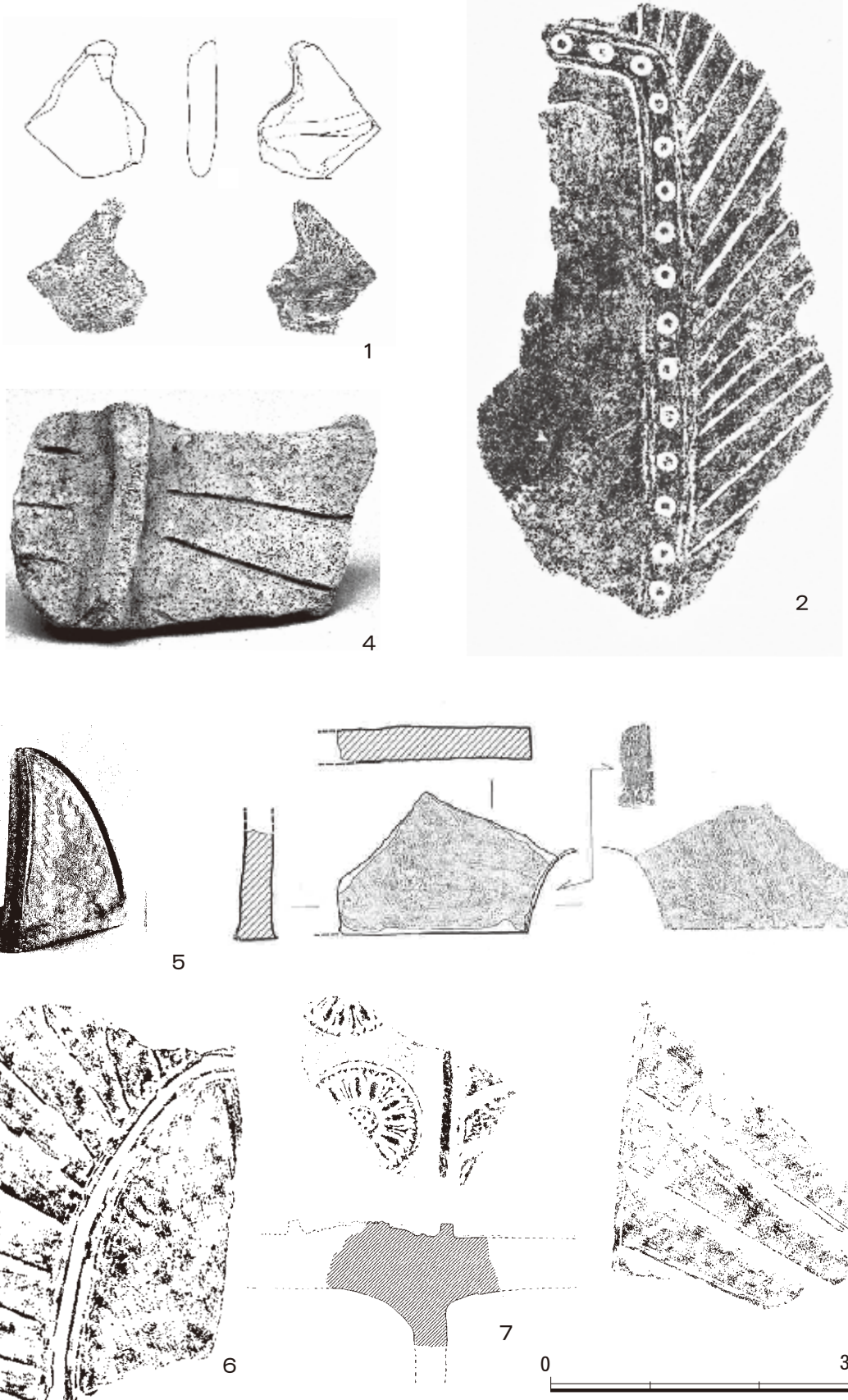
第３図　岡山県の鴟尾③（１：６）

（１：寒風古窯跡　２：切明窯跡　３：新林窯跡）

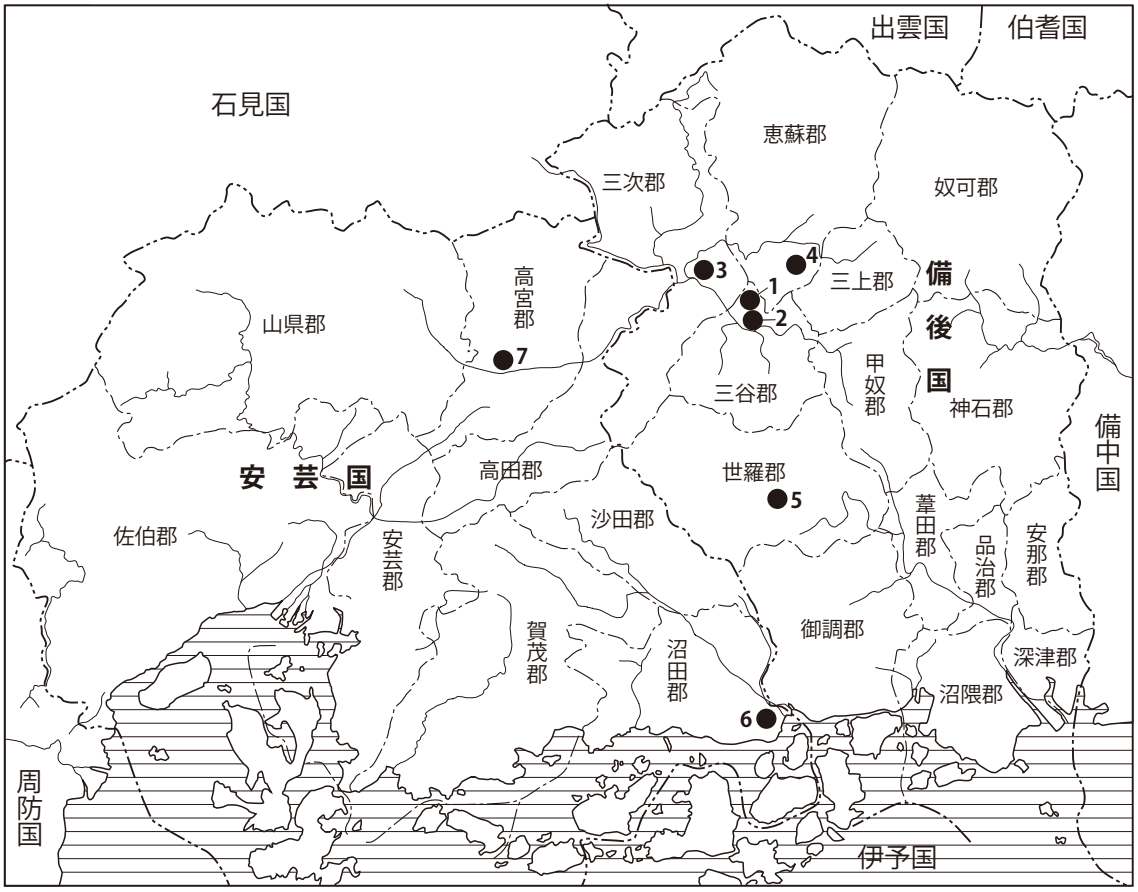


第４図　岡山県の鴟尾④（１：６）

（１：服部廃寺　２：幡多廃寺　３～５：賞田廃寺　６：吉岡廃寺）

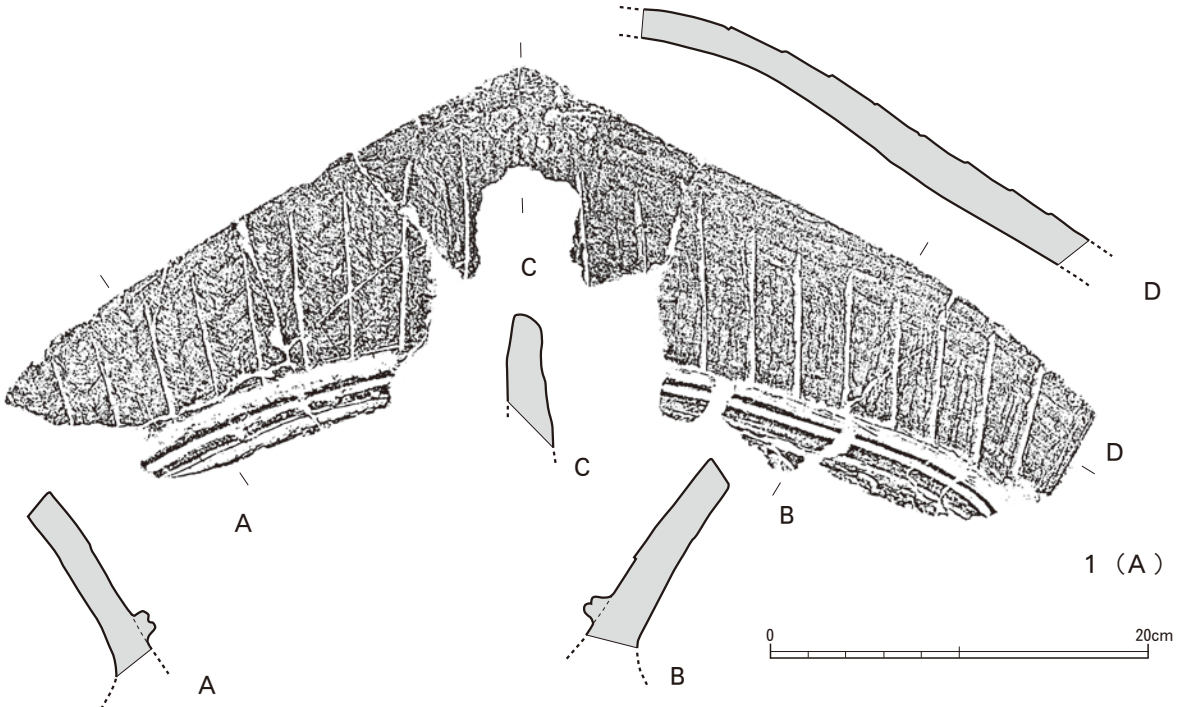


第５図　岡山県の鴟尾⑤（１：６）
（１：日畑廃寺　２：関戸廃寺　３：道金山古窯跡　４：備中国分寺
５：五反迯古墳　６：五反廃寺　７・８：大海廃寺）



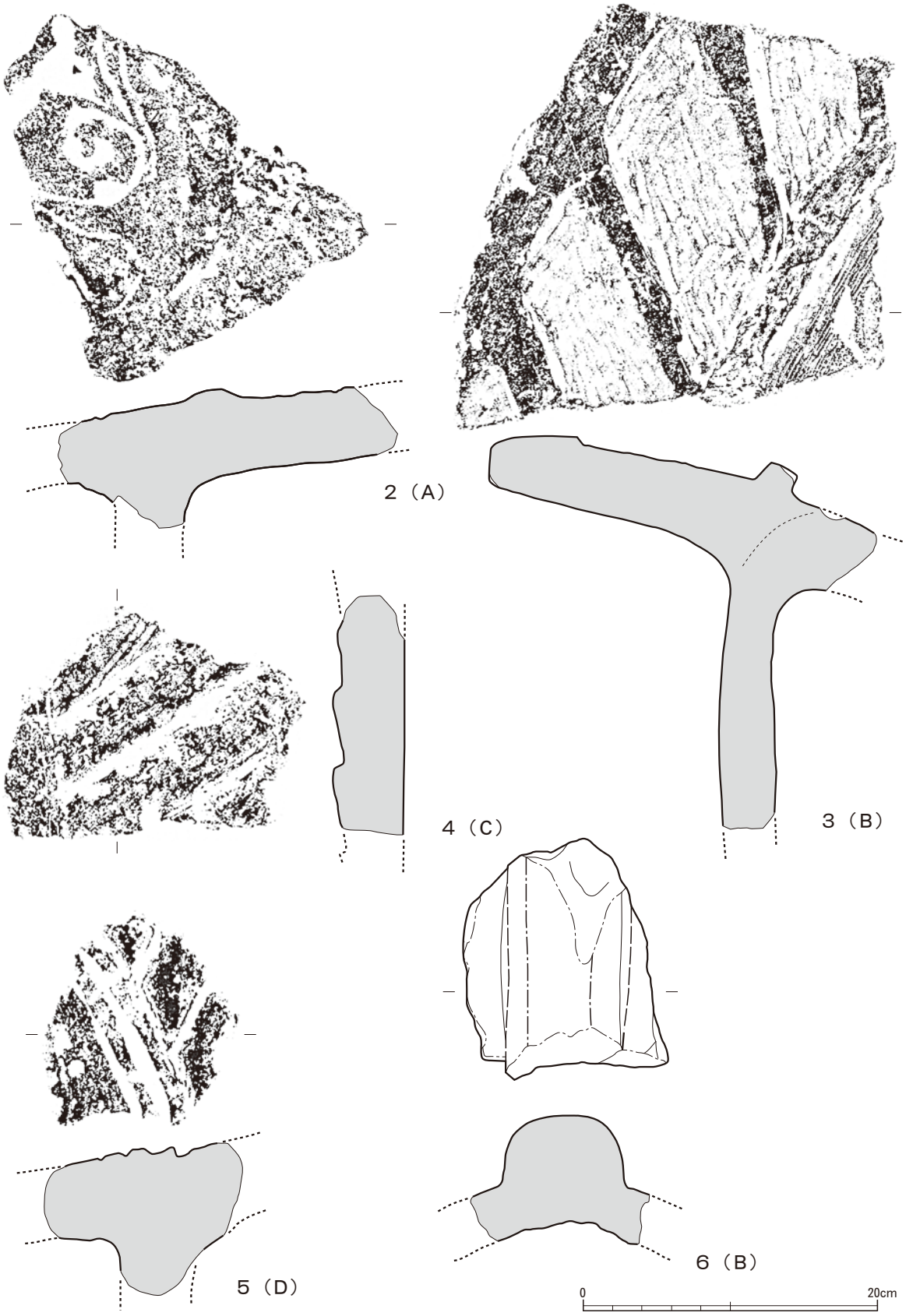
第６図　鴟尾が出土した広島県内の寺院

（１：寺町廃寺、　２：上山手廃寺、　３：寺戸廃寺、　４：法塔崎廃寺、　５：康徳寺廃寺
６：横見廃寺、　７：明官寺廃寺）

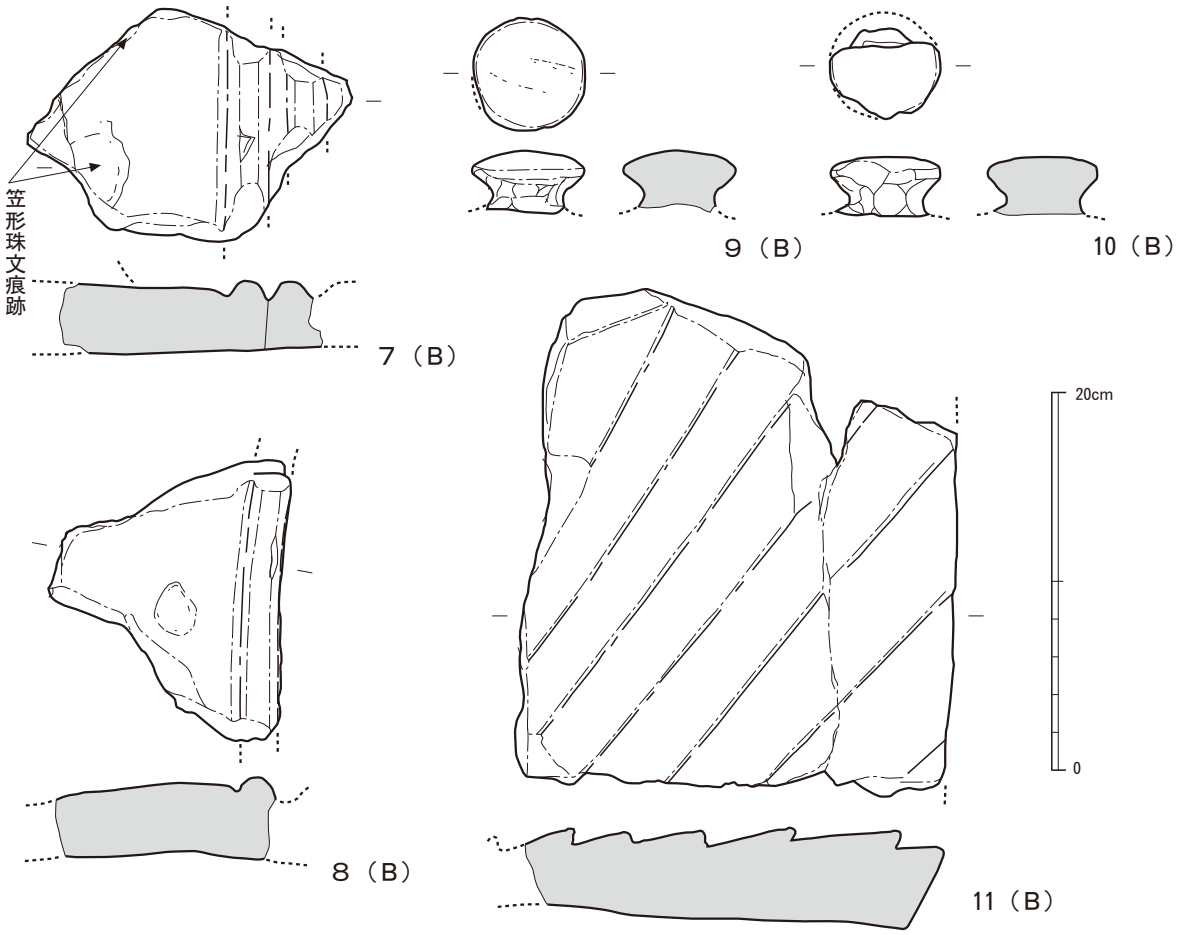


第７図　広島県の鴟尾（１）（１：４）

（１：寺町廃寺）

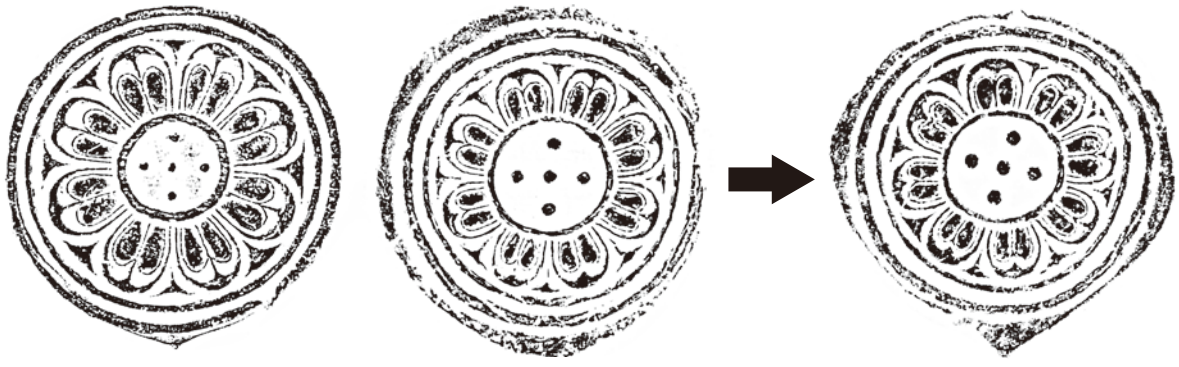


第８図　広島県の鴟尾（２）（１：４）
（２～５：寺町廃寺　６：上山手廃寺）



第９図　広島県の鴟尾（３）（１：４）

（７～11：上山手廃寺）



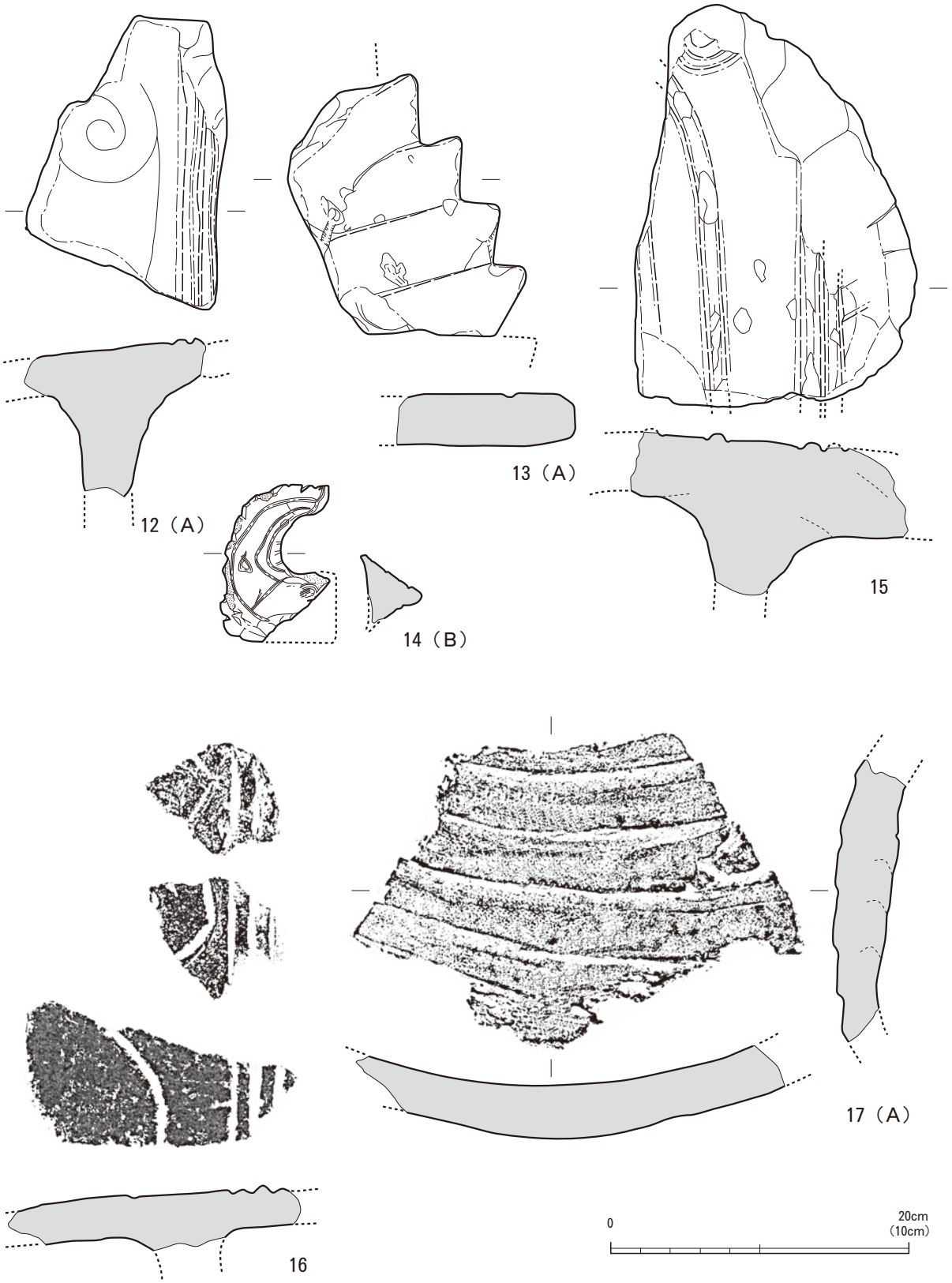
上山手廃寺創建瓦（ＦⅠA）、寺町廃寺　替瓦（ＦⅠB）

＜備後三谷寺工房＞

三井Ⅱ遺跡瓦窯（ＦⅠB）

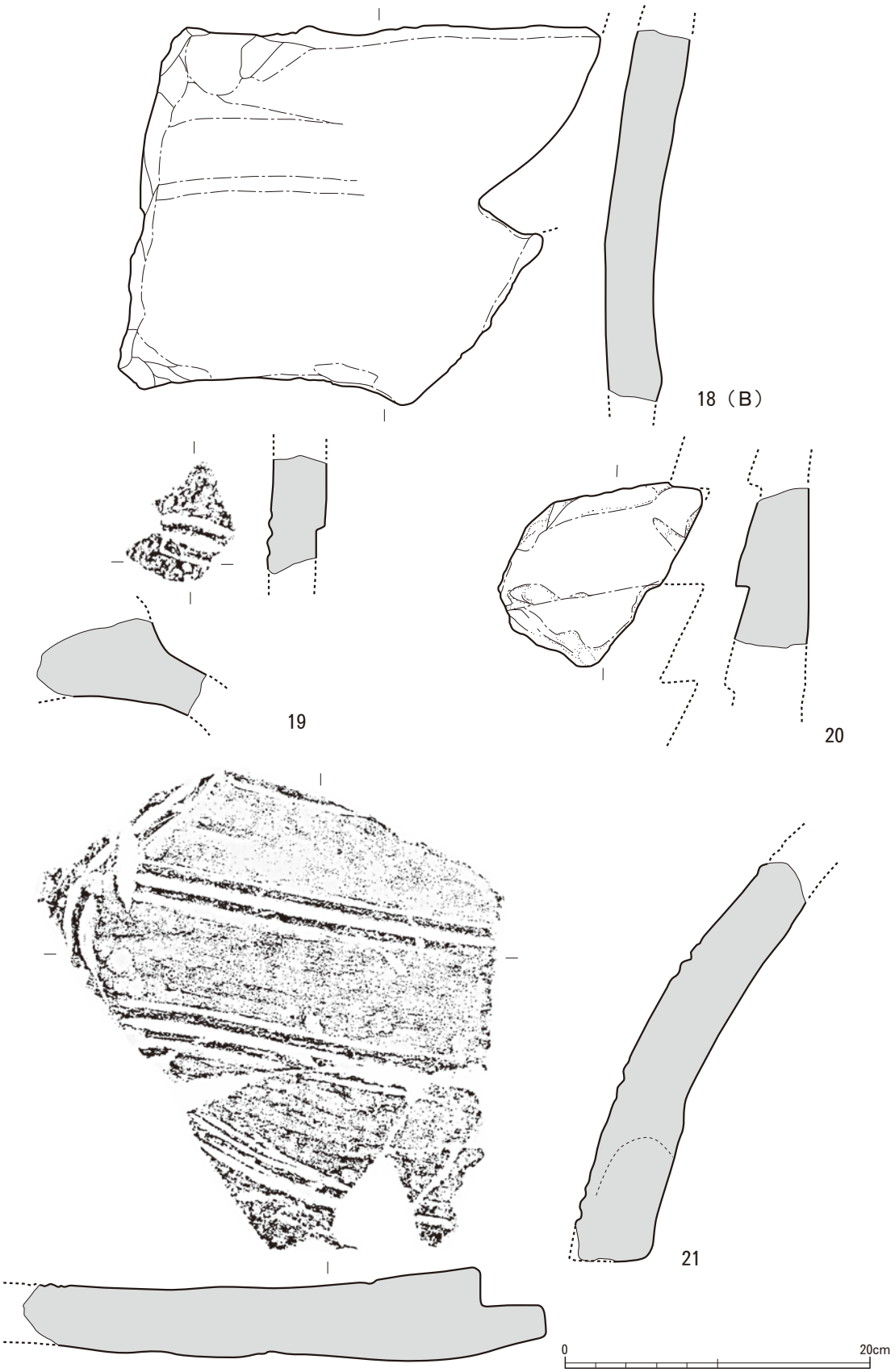
＜出雲三井工房＞

第 10 図　備後から出雲に伝播した軒丸瓦（１：４）



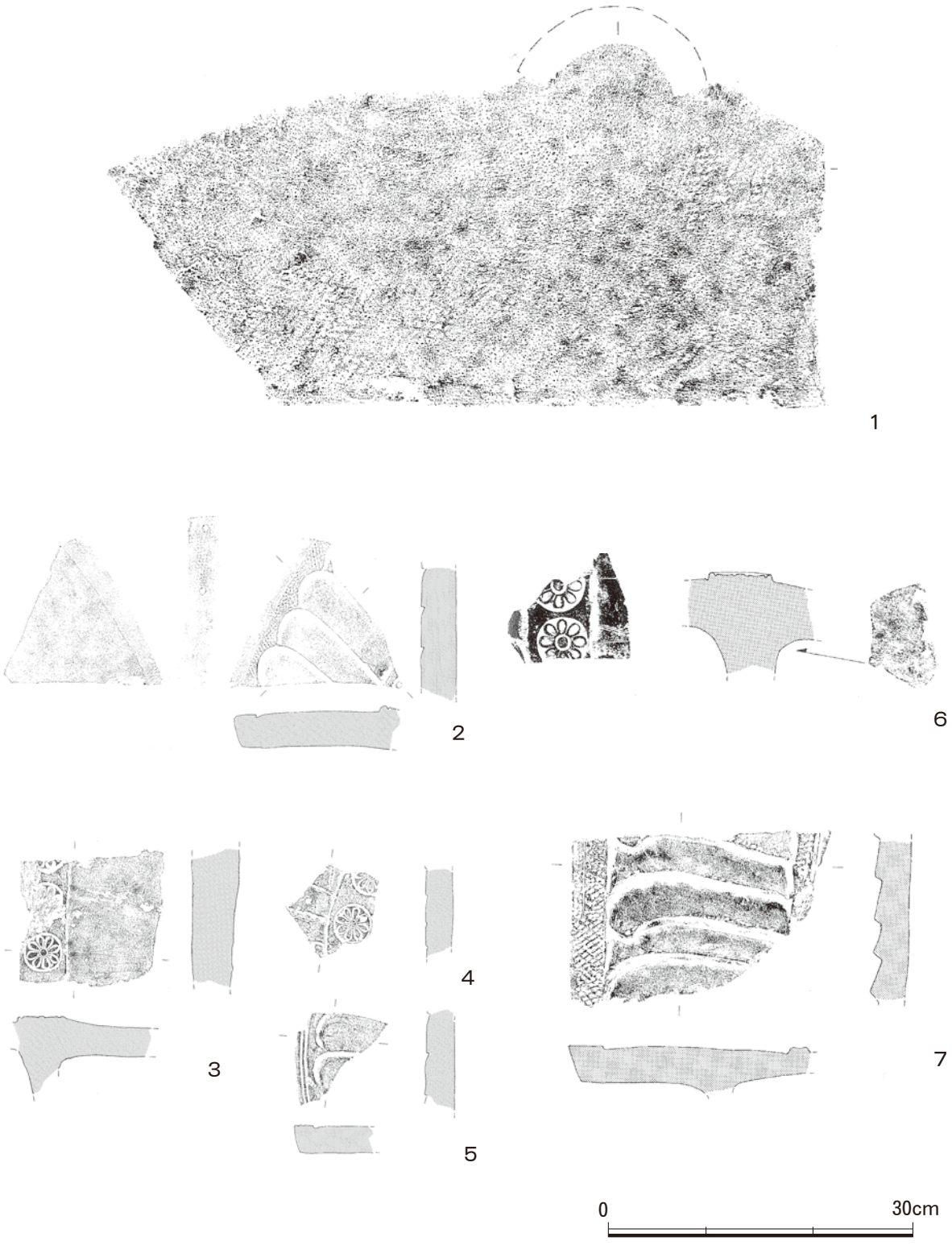
第 11 図　広島県の鴟尾（4）（14＝１：２　他＝１：４）

（12 ～ 14：寺戸廃寺　15：法塔崎廃寺　16：康徳寺廃寺　17：横見廃寺）



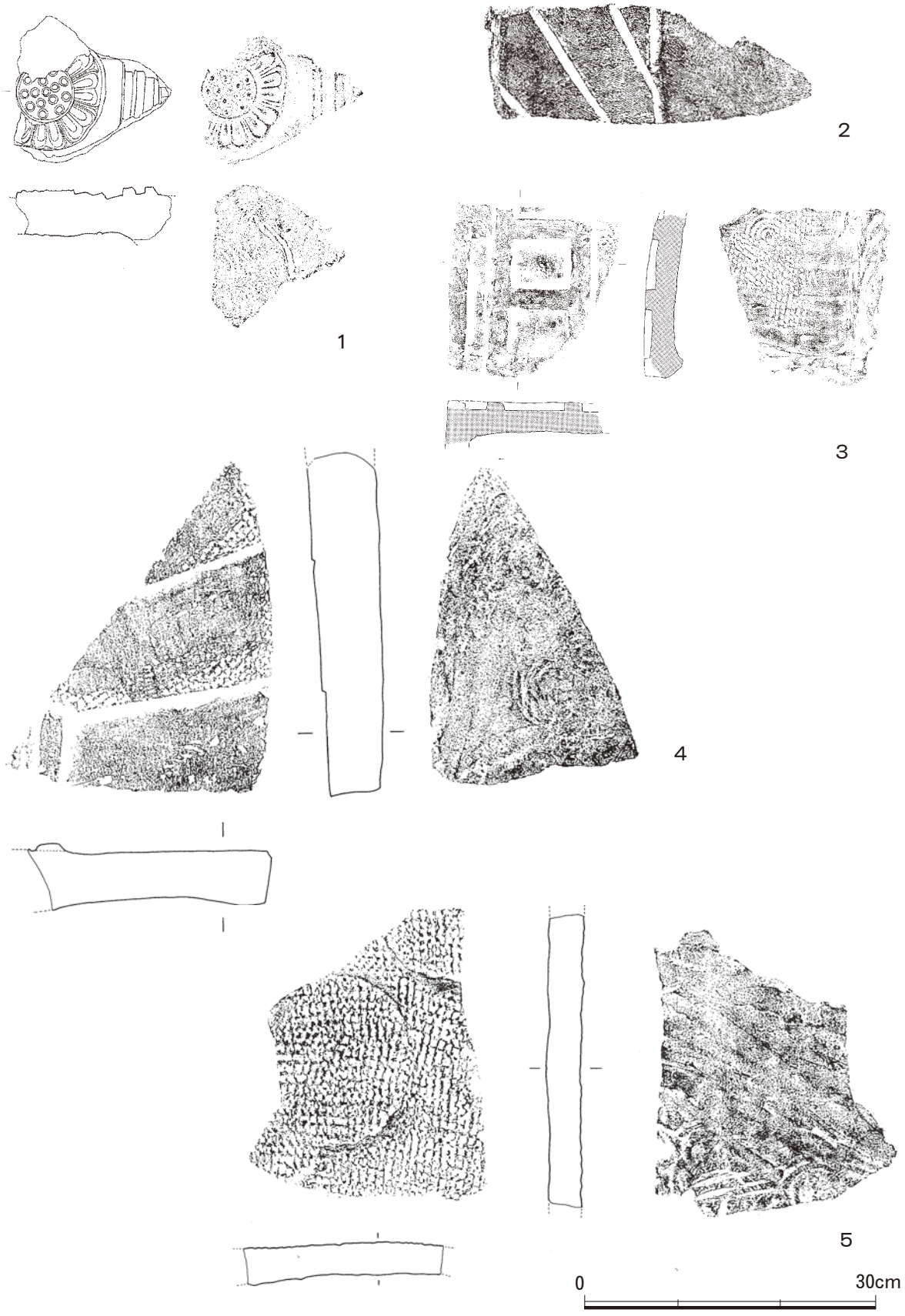
第 12 図　広島県の鴟尾（5）（1：4）

（18：横見廃寺　19 ～ 21：明官地廃寺）



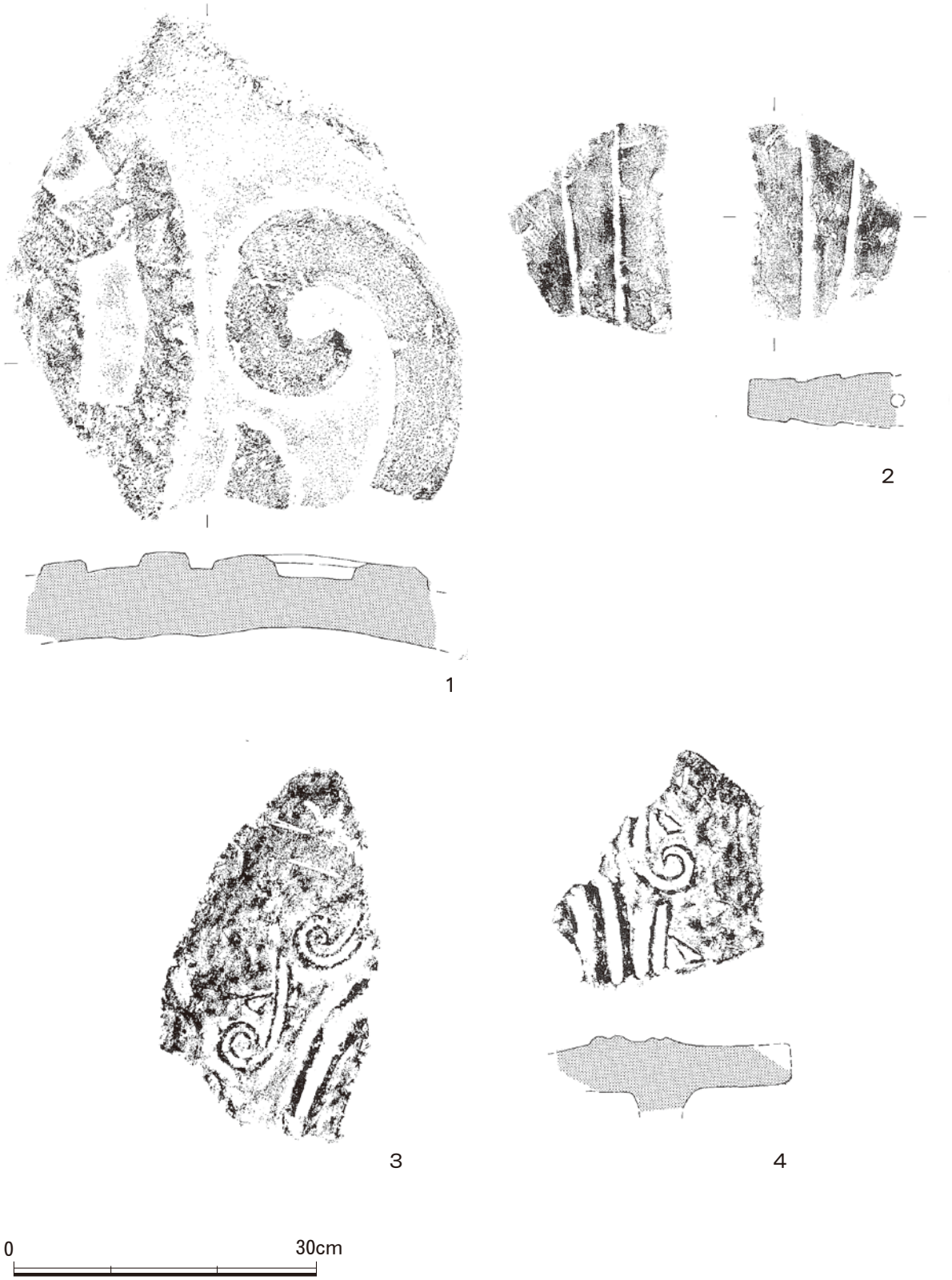
第 13 図　香川県の鴟尾①（１：６）

（１：末古窯跡　２：極楽寺　３～５：石井廃寺　６：願興寺　７：片山池１号窯）

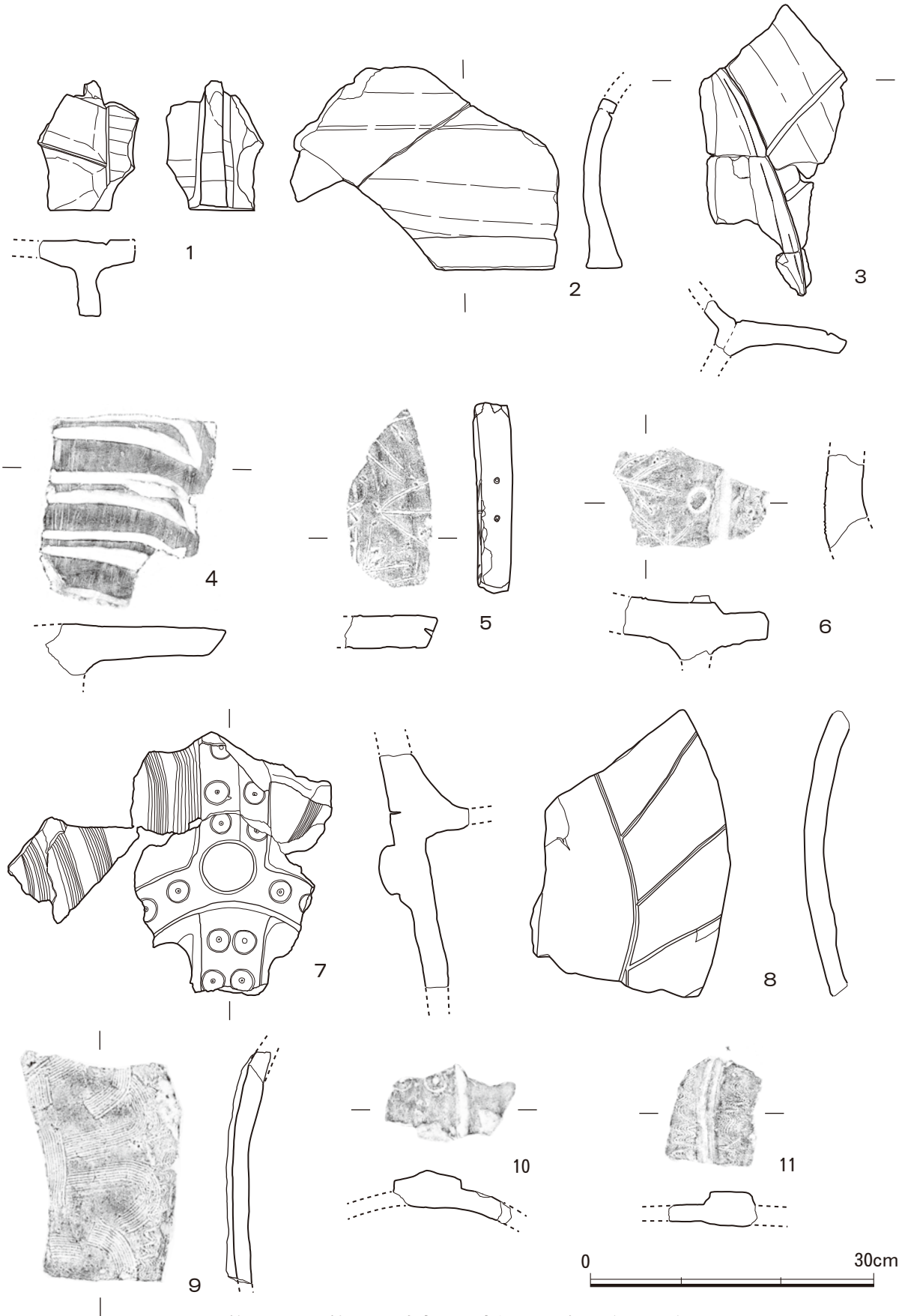


第 14 図　香川県の鴟尾②（１：６）

（１・２：開法寺跡　３：鴨廃寺　４・５：田村遺跡［田村廃寺］）

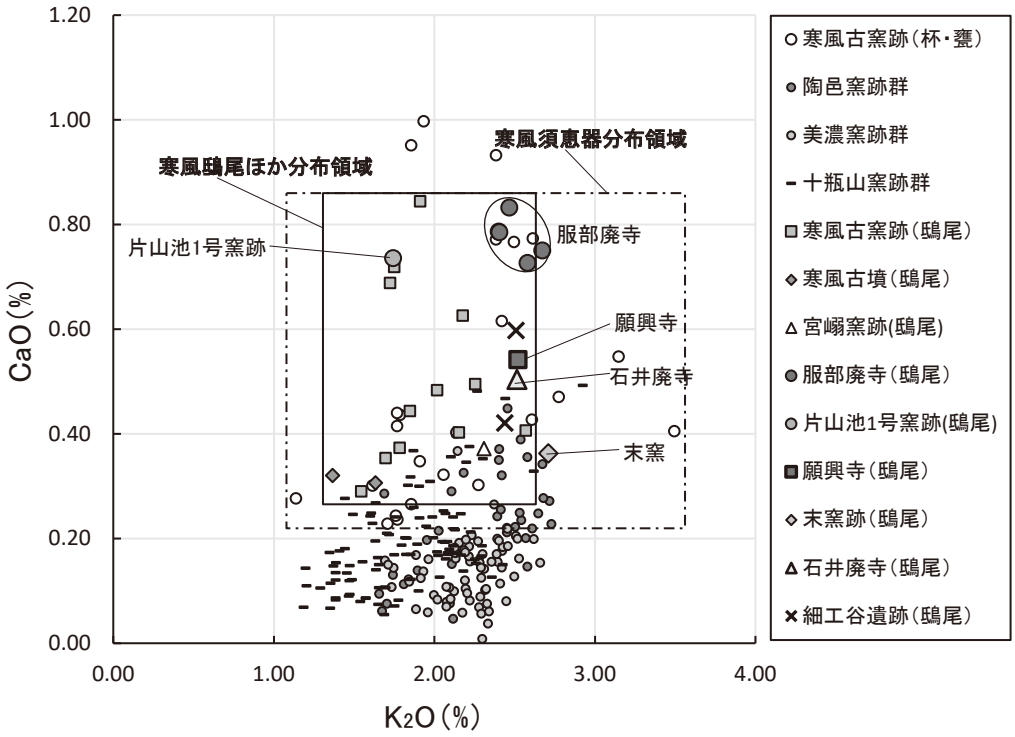


第 15 図　香川県の鴟尾③（１：６）
（１：仲村廃寺　２：善通寺　３・４：大興寺）

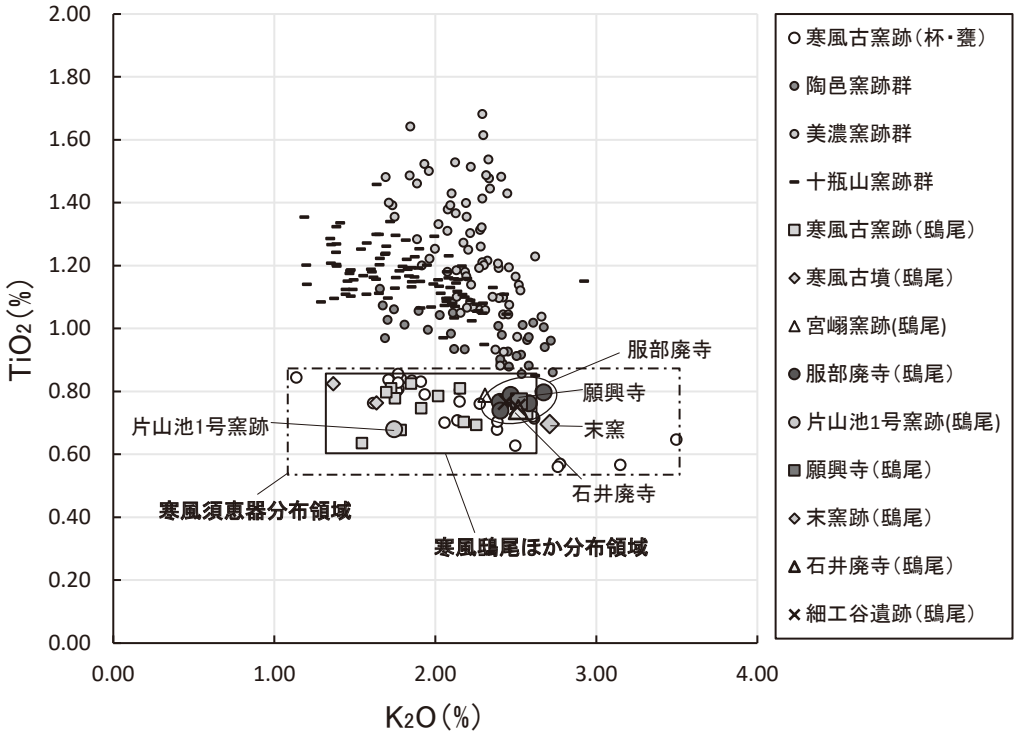


第 16 図　愛媛県・徳島県・高知県の鴟尾（１：６）

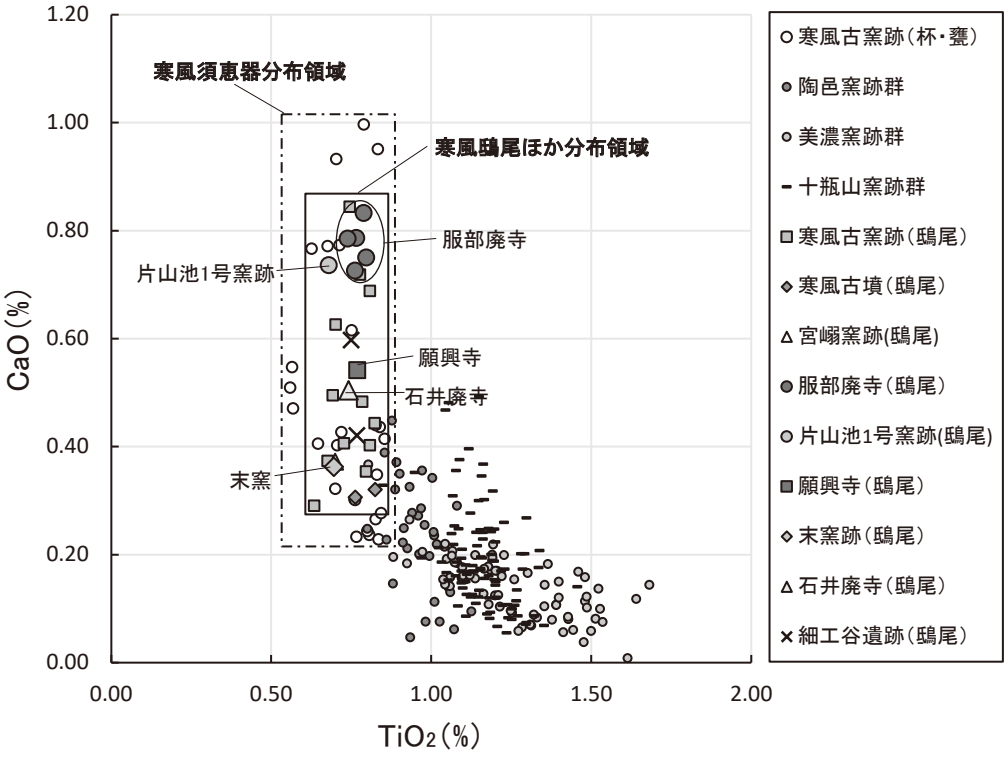
（１～３：来住廃寺跡　４～６：郡里廃寺跡　７：比江廃寺跡　８：新改小山田遺跡　９～ 11：秦泉寺廃寺跡）



第 17 図　各遺跡出土鴟尾の産地推定（K_2O-CaO）



第 18 図　各遺跡出土鴟尾の産地推定（K_2O-TiO_2）



第 19 図　各遺跡出土鴟尾の産地推定（TiO_2-CaO）

第１表　寒風窯跡ほか出土鴟尾等の分析試料一覧表（％）

番号	遺跡名	器種	SiO_2	Ti_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5
1	寒風古窯跡	鴟尾	75.81	0.81	15.55	4.49	0.03	0.64	0.69	0.00	1.72	0.15
2	寒風古窯跡	鴟尾	76.00	0.78	15.05	4.44	0.03	0.77	0.72	0.21	1.75	0.16
3	寒風古窯跡	陶棺(蓋)	78.58	0.89	14.12	3.60	0.04	0.55	0.49	0.13	1.30	0.18
4	寒風古窯跡	鴟尾	78.02	0.63	14.83	3.83	0.00	0.58	0.29	0.01	1.55	0.14
5	寒風古窯跡	鴟尾	79.28	0.68	13.50	3.77	0.00	0.40	0.37	0.01	1.78	0.11
6	寒風古窯跡	鴟尾	77.12	0.75	14.28	4.31	0.01	0.50	0.84	0.00	1.91	0.09
7	寒風古窯跡	陶棺(身)	76.24	0.69	16.34	3.57	0.00	0.62	0.34	0.00	1.92	0.15
8	寒風古窯跡	陶棺(身)	71.19	0.90	17.17	6.55	0.03	0.61	0.39	0.32	2.62	0.10
9	寒風古窯跡	甕	75.18	0.56	15.84	3.46	0.01	0.73	0.51	0.72	2.76	0.13
10	寒風古窯跡	甕	72.68	0.77	18.82	4.41	0.00	0.69	0.23	0.00	2.15	0.13
11	寒風古窯跡	陶棺(身)	75.86	0.65	16.97	3.55	0.00	0.61	0.31	0.00	1.82	0.14
12	寒風古窯跡	陶棺(脚)	75.88	0.67	16.59	3.61	0.01	0.58	0.33	0.00	2.06	0.14
13	寒風古窯跡	陶棺(脚)	73.18	0.62	16.81	4.28	0.01	0.76	0.95	0.54	2.57	0.14
14	寒風古窯跡	陶棺(蓋)	78.47	0.90	14.29	3.67	0.01	0.53	0.25	0.00	1.69	0.11
15	寒風古窯跡	杯	78.68	0.81	13.46	4.23	0.00	0.52	0.24	0.01	1.77	0.13
16	寒風古窯跡	杯	78.55	0.83	13.31	4.35	0.01	0.54	0.27	0.00	1.86	0.14
17	寒風古窯跡	杯	78.52	0.80	13.68	4.16	0.01	0.54	0.24	0.00	1.76	0.13
18	寒風古窯跡	杯	78.38	0.84	13.89	4.15	0.00	0.54	0.23	0.00	1.71	0.14
19	寒風古窯跡	杯	77.57	0.83	13.54	4.28	0.08	0.60	0.95	0.00	1.86	0.15
20	寒風古窯跡	杯	77.81	0.84	13.89	4.43	0.02	0.51	0.44	0.00	1.79	0.15
21	寒風古窯跡	杯	77.62	0.85	13.92	4.39	0.05	0.55	0.41	0.00	1.77	0.14
22	寒風古窯跡	杯	77.92	0.83	13.82	4.42	0.03	0.50	0.44	0.00	1.77	0.11
23	寒風古窯跡	高杯	77.86	0.79	13.18	4.21	0.09	0.58	1.00	0.00	1.93	0.10
24	寒風古窯跡	高杯	78.45	0.83	13.36	4.25	0.02	0.51	0.35	0.00	1.91	0.11
25	寒風古窯跡	杯	78.29	0.68	13.12	3.95	0.00	0.52	0.77	0.00	2.38	0.13
26	寒風古窯跡	杯	77.42	0.70	13.33	4.03	0.00	0.62	0.93	0.21	2.39	0.13
27	寒風古窯跡	杯	74.68	0.75	16.11	4.42	0.00	0.70	0.62	0.01	2.42	0.13
28	寒風古窯跡	高杯	78.57	0.84	13.73	4.48	0.00	0.63	0.28	0.00	1.14	0.18
29	寒風古窯跡	高杯	79.26	0.76	13.14	4.11	0.00	0.48	0.30	0.00	1.61	0.18
30	寒風古窯跡	杯	70.47	0.86	17.88	4.87	0.04	1.44	1.43	0.78	1.96	0.13
31	寒風古窯跡	杯	77.28	0.71	13.67	4.27	0.03	0.39	0.77	0.00	2.61	0.13
32	寒風古窯跡	杯	78.12	0.71	14.24	3.78	0.02	0.39	0.40	0.01	2.14	0.10
33	寒風古窯跡	杯	77.44	0.72	14.60	3.43	0.04	0.51	0.43	0.00	2.61	0.13
34	寒風古窯跡	杯	74.01	0.57	17.59	3.62	0.02	0.69	0.47	0.01	2.77	0.15
35	寒風古窯跡	杯	74.70	0.63	16.83	3.44	0.02	0.70	0.77	0.18	2.50	0.12
44	寒風古墳	鴟尾	78.61	0.76	13.77	4.11	0.00	0.46	0.31	0.08	1.63	0.19
45	寒風古墳	鴟尾	76.80	0.82	15.30	4.50	0.00	0.61	0.32	0.02	1.36	0.17
50	寒風古窯跡	鴟尾(時実資料)	77.22	0.68	13.31	3.19	0.09	0.45	1.99	0.00	2.75	0.15
51	寒風古窯跡	鴟尾(時実資料)	79.82	0.69	13.15	2.90	0.02	0.43	0.49	0.01	2.25	0.14
1	宮嶺窯跡	鴟尾	78.03	0.79	13.93	3.72	0.02	0.55	0.37	0.00	2.31	0.15
443	細工谷	鴟尾	78.10	0.77	13.72	3.67	0.01	0.53	0.42	0.00	2.44	0.17
442	細工谷	鴟尾	77.50	0.75	13.97	3.83	0.02	0.52	0.60	0.00	2.51	0.18
1	服部廃寺	鴟尾1	75.33	0.76	13.75	5.21	0.04	0.71	0.73	0.65	2.58	0.12
2	服部廃寺	鴟尾2	75.21	0.77	13.96	5.45	0.05	0.65	0.79	0.39	2.40	0.18
3	服部廃寺	鴟尾3	76.24	0.74	13.42	4.74	0.06	0.76	0.79	0.64	2.40	0.12
4	服部廃寺	鴟尾4	74.96	0.80	13.83	5.53	0.05	0.62	0.75	0.43	2.67	0.17
5	服部廃寺	鴟尾5	75.95	0.79	13.34	5.12	0.04	0.64	0.83	0.56	2.47	0.16
	片山池1号窯跡	鴟尾	78.39	0.68	13.96	3.68	0.02	0.49	0.74	0.00	1.74	0.15
	願興寺	鴟尾	74.05	0.77	15.65	4.53	0.06	0.64	0.54	0.98	2.52	0.11
	末窯跡	鴟尾	70.02	0.70	20.50	4.67	0.01	0.58	0.36	0.14	2.71	0.16
	石井廃寺	鴟尾	73.90	0.74	16.68	4.01	0.01	0.76	0.50	0.66	2.51	0.13

6　東海地方の鴟尾

武田　寛生

A　はじめに

三重県・愛知県・静岡県（以下、「東海」という。）では、寺院や瓦窯など瓦を出土する遺跡が比較的多く確認されている中で、鴟尾については出土事例が少なく、その様相が明確にならない状況にあった。1980 年に刊行された『日本古代の鴟尾』においても、東海の鴟尾については、南小山廃寺[1]と智積廃寺の２遺跡が紹介されたのみである（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編 1980）。

その約 20 年後に刊行された『日本の美術　No.392 鴟尾』（大脇 1999）では、三重県５遺跡・愛知県５遺跡・静岡県１遺跡と、出土事例が増加している。この中で大脇氏は、尾張元興寺跡例について、百済様式の東西への広がりがわかる畿内以外の事例とし、辻垣内瓦窯跡から出土した２体の鴟尾について、全形がわかる好例で「おなじ工房で異なる意匠の鴟尾が同時に作られていたことがわかる」と紹介している。鴟尾の分布については、「東海から北陸では岐阜７遺跡・愛知５遺跡がやや目立つ。畿内との系譜がたどれる作品もいくつかあるが、その東では長野２遺跡・山梨１遺跡・静岡１遺跡と極端に少なくなり、独特の形・紋様をもつ例が多い」と指摘している。

筆者も 2009 年に、東海地域（岐阜県を含む）の鴟尾を集成したことがある（武田 2009）が、東ノ谷瓦窯で採取された未報告資料の紹介を主眼としたものであったため、鴟尾についての詳細な検討は行えなかった。今回は、近年発見された新資料も含めて、意匠や施文方法、製作技法等の視点から地域的な特徴について検討したい。

B　鴟尾の分類

現在のところ、東海で出土している鴟尾は 17 遺跡（三重県５遺跡・愛知県９遺跡・静岡県３遺跡）である（第１～６図）。出土数は増えているものの、そのほとんどが破片資料であり不明な部分が多い状況だが、小型の鴟尾を除き、鰭部や胴部の段型の有無や縦帯の文様の特徴に注目すると、次の５種類に分類することができる（第７図）。

A類　胴部と鰭部に段型を刻み、１条の突帯を配して縦帯とするもの。

尾張元興寺跡のみで出土している。尾張元興寺跡例には、鰭部の内外両面に段型が刻まれている。段型は胴部と鰭部外面は正段で、鰭部内面は逆段となる。段型の幅は、鰭部約 10cm、胴部約 8.5cm とやや広い。縦帯は断面長方形の突帯を１条削り出している。厚さ

は５～８cm 程度と厚手である。

出土した遺構や共伴遺物からは鴟尾の年代を特定できないが、飛鳥寺例を典型とする古式の様式（大脇 1999）である。尾張元興寺跡は、尾張地域最古の寺院とされており、創建期に製作されたものとすれば７世紀第３四半期前半頃に位置付けられる（梶原 2010）。胴部と鰭部内面に段型を刻む鴟尾は、東海ではＡ類のみである。

Ｂ類　胴部は無文で、鰭部外面に段型を刻み、１条の突帯を配して縦帯とするもの。

辻垣内瓦窯跡と篠場瓦窯跡、東ノ谷瓦窯の３遺跡で出土している。このうち辻垣内瓦窯跡と篠場瓦窯跡出土の２個体は、全形が復元されている。辻垣内瓦窯では、復元されたものとは別個体となる破片も出土している。

辻垣内瓦窯跡例（鴟尾Ⅱ）は、前方は基部から頂部まで約 55％が残存し、高さ 148.6cm、長さ 119.2cm の規模で復元されている。基底部の幅は頭部 48.0cm、後部 77.2cm であり、後方へ幅が広くなる形態である。篠場瓦窯跡例（鴟尾Ａ）は、後方を中心に全体の約 22％が残存し、高さ 132cm、長さ 95cm と辻垣内瓦窯跡例より一回り小さな規模で復元されている。基底部の幅は頭部 44cm、後部 49cm であり、わずかに後方へ広がる形態である。

２例ともに、縦帯は断面四角形の突帯を削り出しており、鰭部外面の段型は正段である。文様の構成が単純なこともあるが、全体的にはよく似た意匠である。ただし、細部に着目すると異なる点もみられる。辻垣内瓦窯跡例では頭部正面がやや後方で閉じているが、篠場瓦窯跡例ではそのような構造は有していない。また、辻垣内瓦窯跡例では胴部内面に格子叩き等の叩き目が残るが、篠場瓦窯跡例ではナデ調整で仕上げられ叩き目が認められない。辻垣内瓦窯跡例が胴部と腹部を一体の粘土でつくり、篠場瓦窯跡では胴部と鰭部を一体の粘土でつくっている等、技法においても差異が認められる。

篠場瓦窯跡では須恵器も焼成されており、須恵器から鴟尾が出土した３号窯は７世紀末に位置付けられる。

Ｃ類　胴部は無文で、鰭部外面に段型を刻み、縦帯は２条の突帯とその間に立体的な珠文を配するもの。複帯構造となり内郭に複合鋸歯文を配するものもある。

辻垣内瓦窯跡、篠場瓦窯跡、南小山廃寺の３遺跡で出土している。このうち辻垣内瓦窯跡出土の１個体（鴟尾Ⅰ）は、全形が復元されている。全体の約 85％が残存し、高さ 124.8cm、長さ 97.3cm の規模に復元されている。基底部の幅は頭部 54.2cm、後部 77.6cm で、Ｂ類の鴟尾Ⅱと同様に後方へ幅が広くなる形態である。頭部端が突帯状に厚くなり、正面は鴟尾Ⅱと同様にやや後方で閉じる構造となっている。

鰭部外面の段型は正段で、縦帯の２条の突帯を貼り付けている点は３例に共通する。縦帯の珠文は、辻垣内瓦窯跡例と南小山廃寺例が球形であるのに対し、篠場瓦窯跡例（鴟尾Ｂ）は頂部が平らな断面台形で形状が異なっている。両者の違いは、珠文の形状だけでなく技法にも認められる。珠文の接着方法は、前者が球形の粘土から捻り出した突起を穴に差し込んで固定しているのに対し、後者は粘土を単純に本体に貼り付けている。胴部内面

は、前者には叩き目が多く残されているのに対し、後者はナデ調整で仕上げられている。また、脊稜部の形状についても、前者が曲線状であるのに対し、後者は明確な稜を有している。南小山廃寺例は、内郭に複合鋸歯文が配している点では辻垣内瓦窯跡例と異なるが、技法では多くの点で共通している。

辻垣内瓦窯跡例と篠場瓦窯跡例は、Ｂ類の鴟尾と同じ窯で焼成されており、同じ年代に位置付けられる。

Ｄ類　胴部は無文で、縦帯に平面的な珠文を配するもの。鰭部は、外面に段型を刻むものと無文のものがある。

智積廃寺、甚目寺遺跡、別郷廃寺、寺部遺跡の４遺跡で出土している。智積廃寺例は、鰭部外面は正段で、幅約 6.5cm の断面長方形の突帯を貼り付け、上面に沈線で直径約 3.5cm の珠文が描かれている。脊稜部は明確な頂点を有している。甚目寺遺跡例の縦帯は、低い断面四角形の突帯に沿って、型板によるコンパス珠文が施文されている。珠文は直径約 10cm と大きい。破片は縦帯の後方及び鰭部を失っているが、岐阜県柄山瓦窯跡の類例から、２条の突帯の間に珠文を配し、鰭部外面に段型を有していると推定される。別郷廃寺例の珠文は、コンパス工具で当り線を入れ、珠文の輪郭と鰭側を彫り込んでいる。鰭部外面は一枚おきに段型を削り、縦帯との境をわずかに突帯状に残している。寺部遺跡例は、縦帯を沈線のみで表現している。複帯構成で、１条の沈線を挟んで両側にコンパス珠文が配される。珠文は胴部側が一回り大きい。鰭部は無文であり、段型を表現していない。

遺構や共伴遺物などから個々の年代を特定することは困難であるが、コンパス珠文は隣接する岐阜県で多く出土しており、その系譜の中で捉えることが可能であろう。また、寺部遺跡例にみられる、鰭部の段型の省略は後出する要素といえる。

Ｅ類　胴部は無文で、縦帯に弧状の段型を表現するもの。鰭部は、外面に弧状の段型を表現するものと無文のものがある。この地域に特有の文様構成の鴟尾である。

鳳凰寺遺跡、大宝院廃寺、寺領廃寺の３遺跡で出土している。鳳凰寺遺跡例は、縦帯及び鰭部をすべて沈線で描いている。縦帯は複帯構造で、外郭は２条の沈線の間に珠文を配す。内郭は胴部との境を１条の沈線で画し、外郭側が下がる弧状の段型を描く。鰭部には、縦帯側から弧状に上がる沈線で段型を表現する。大宝院廃寺例の縦帯は、１条の突帯の前方に突帯側が下がる弧状の段型が刻まれている。鰭部は段型が省略され、無文となっている。寺領廃寺例は、鰭部との境を１条の沈線で画し、胴部側に上がる弧状の沈線で段型を描いている。鰭部は無文である。

個々の年代の特定は困難であるが、鰭部外面の段型が沈線で表現される点や省略されて無文となっている点は、Ａ～Ｄ類よりも後出する要素といえる。

小型の鴟尾　小型の鴟尾については、東畑廃寺、大宝院廃寺、鳳凰寺遺跡の３遺跡で出土している。東畑廃寺例は、縦帯と鰭部が立体的に表現されており、Ｃ類を忠実に小型化している。一方、大宝院廃寺例と鳳凰寺遺跡例は、独創的な意匠である。大宝院廃寺例は、

珠文帯の鴟尾を意識しているが、珠文は不揃いで規則性を欠き、一部鰭部にも描かれている。鳳凰寺遺跡例は、脊稜部と縦帯にヘラで羽状の模様を描いており、自由な発想で製作している印象を受ける。

C　分布と展開

各分類の鴟尾の分布を示したものが、第８図である。分類できない破片資料を除くと、資料数が限定されており傾向を見出すことは難しい。ただし、D類のコンパス珠文を配するものについては、尾張地域から西三河地域に集中する状況が確認できる。コンパス珠文を用いる鴟尾は、美濃・飛騨地域に多いことが知られており、その外縁部として捉えられる。特に甚目寺遺跡例は、型板による大型のコンパス珠文であり、美濃・飛騨地域からの直接的な影響が認められる。西三河地域の別郷廃寺例と寺部遺跡例は、明確な突帯を有しない点や鰭部に段型を表現しない点など独自の要素がみえ、二次的な波及によりもたらされたものと推測される。D類以外については、散在的な分布を示しており、各地域で軒丸瓦など多くの瓦が面的な広がりを示すのとはやや異なった状況にあるといえる。

また、瓦との関係では、同じ種類の鴟尾が採用されている遺跡でも、瓦の内容とは一致しない場合が多い。静岡県の篠場瓦窯跡と大宝院廃寺は、天竜川を挟んで直線にして約15kmと近い。例えば、篠場瓦窯跡では３号窯→２号窯→１号窯の順で窯が構築されており、川原寺式軒丸瓦は３号窯と２号窯、連珠文軒平瓦は２号窯で焼成されている。２号窯での生産終了後、川原寺式軒丸瓦の瓦笵は大宝院廃寺に運ばれ、連珠文軒平瓦や蓮弁文軒丸瓦などの瓦に影響を与えている（武田編 2013）。篠場瓦窯跡で鴟尾が焼成されたのは３号窯であるが、篠場瓦窯跡ではＢ・Ｃ類、大宝院廃寺でＥ類と全く異なる種類のものが採用されており、両遺跡に関係性はみられない。

また、辻垣内瓦窯跡と南小山廃寺とは、距離は直線にして約 60km と離れているが、Ｂ類の鴟尾には製作技法に共通性が認められる。しかし、軒丸瓦は辻垣内瓦窯跡が複弁蓮華文、南小山廃寺が単弁蓮華文、軒平瓦は辻垣内瓦窯跡が重弧文、南小山廃寺が型押し簾状文、平瓦は辻垣内瓦窯跡で凸面布目瓦があるが南小山廃寺では出土していない等、瓦の内容は全く異なっている。瓦と陶製鴟尾は、同じ寺院の屋根を覆う窯業製品であるが、鴟尾の工人と瓦の工人は必ずしも一体の組織として活動していたわけではなく、別行動をしていた場合が想定できる。

年代については、Ａ類の尾張元興寺例が、胴部と鰭部の内外面に段型を有する古式の様相を呈しており、創建期に製作されたものとすれば７世紀第３四半期前半頃に位置付けられる。Ｂ類とＣ類が出土している篠場瓦窯跡（３号窯）では、須恵器も焼成しており、７世紀末の年代に比定される。辻垣内瓦窯跡でも、同じ窯（２号窯）でＢ類とＣ類が焼成されており、Ｂ類とＣ類が同時期に存在したことは明らかである。遺構や共伴遺物等から鴟

尾の個々の年代を比定することは困難であるが、Ａ類の尾張元興寺跡例を除き、いずれも胴部が無文であることから、東海では白鳳期以降に陶製鴟尾の生産が急速に広まっている様子が見て取れる。全体の大きな流れとしては、鰭部の内外面に段型を有するものから、外面のみ段型を有するものになり、省略されて無文のものへと変化する様相が想定できる。

Ｄ　まとめ

東海において、鴟尾は 17 遺跡（三重県５遺跡・愛知県９遺跡・静岡県３遺跡）で出土が確認された。その数は依然少ない状況ではあるが、近年の調査の進展に伴って増加している。特に空白に近い状況であった三河地域で新たな資料が確認された点や、遠江地域で全形の判明する窯資料が出土した点は大きな進展である。

現状において、東海における陶製鴟尾の東限は、遠江地域の天竜川流域である。近年駿河地域でも、中心伽藍や瓦窯が調査された静岡市尾羽廃寺や、区画整理事業に伴い総計千箱以上の瓦が出土している沼津市日吉廃寺[2]など、寺院遺跡の比較的大規模な調査事例は増えているが、これまで陶製鴟尾の出土は１例も確認されていない。この状況を踏まえると、将来分布が多少東へ広がることがあったとしても、遠江地域あたりまでが限界であろう。陶製鴟尾は製作に高度な技術を要する一方で、必要となる数が少なく、鬼瓦や他の材質の鴟尾での代用も可能である。東遠江地域以東では、寺院の建立に不可欠なものとは認識されていなかった可能性も考えられる。

鰭部や胴部の段型の有無や縦帯の文様の特徴から、Ａ～Ｅ類の５つに分類でき、この他に小型の鴟尾も認められる。分布はＤ類のコンパス珠文を配するものが、尾張地域から西三河地域に分布する傾向がみられるが、他のものには特定の地域への偏りは認められない。

年代については、篠場瓦窯跡のＢ類とＣ類が７世紀末であることが判明している。出土遺構や共伴遺物等から個々の資料の年代を特定することは難しいが、Ａ類は古い様式であり、唯一該当する尾張元興寺跡例の創建期とすれば、７世紀第３四半期前半頃に位置付けられる。全体の大きな流れとしては、鰭部の内外面に段型を有するものから、外面のみのものとなり、さらに省略されて段型を表現しないものへという変化が想定できる。

製作技法の面では、同じ分類の中でも相違点が認められる。Ｂ類では、辻垣内瓦窯跡例が胴部と腹部を一体の粘土で作るのに対し、篠場瓦窯跡例では胴部から鰭部を一体の粘土で作っており、粘土積み上げ時の技法が大きく異なる。また、胴部内面の調整も、辻垣内瓦窯跡例が斜格子を中心とする叩き目を残すのに対し、篠場瓦窯跡例では指ナデ調整であり叩き目は認められない。全体の意匠はよく似ているが、技法の点から同一系譜の工人による製作は想定し難い。またＣ類では、辻垣内瓦窯跡例と南小山廃寺例は、南小山廃寺例

が複帯構造で内郭に複合鋸歯文を配しているため、意匠が異なる印象を受けるが、珠文の製作においては、両者とも球形の粘土から突起を捻り出し、本体に空けた穴に突起を差し込んで固定するという独特な手法が用いられており、工人の直接的な関係性を想定できる。一方で、篠場瓦窯跡例は、全体的な意匠は辻垣内瓦窯跡例と似ているが、珠文の製作方法は粘土を本体に貼り付けただけである。また、珠文が截頭円錐形で、脊稜部に明確な稜を有するなど細部の形状も異なっており、辻垣内瓦窯や南小山廃寺の工人との間で直接的な関係性は認められない。

なお、製作技法に関する痕跡としては、南小山廃寺と寺部遺跡、篠場瓦窯跡の３遺跡で出土した鴟尾の腹部内面に、支えとみられる痕跡が確認されている。南小山廃寺例と寺部遺跡例には角材とみられる痕跡が残り、篠場瓦窯跡例には竹笹類の痕跡が残る。また、鴟尾の基底面においては、辻垣内瓦窯跡例で布の痕跡が残り、篠場瓦窯跡例では木目の痕跡が認められる。製作時における作業台の使用がうかがえる痕跡である。

東海の鴟尾は、資料数が年々増加してはいるものの未だ少なく、ほとんどが破片資料である。将来、古代の寺院や瓦窯の発掘調査が進み、鴟尾の詳細な様相が明らかになることを期待したい。

（静岡県埋蔵文化財センター）

謝　辞

資料の実見にあたり、所蔵する各機関（桑名市・四日市市・松阪市・稲沢市・あま市・名古屋市・東海市・豊田市・安城市・磐田市）の担当職員の方々と東海古瓦観察会の皆様に、ご配慮とご教示を賜りました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

註

１　『日本古代の鴟尾』では「小山廃寺」として掲載されている。現在の遺跡名は「南小山廃寺」である。

２　沼津市教育委員会の小崎晋氏の教示による。

参考文献

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』

大脇　潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』　至文堂

武田寛生 2009「資料調査報告　東ノ谷瓦窯跡」『浜松市博物館報』21　浜松市博物館

梶原義実 2010「第１章総論 第３節編年及び編年表　軒瓦」『愛知県史』資料編４　愛知県

武田寛生編 2013『篠場瓦窯跡・上海土遺跡』　静岡県埋蔵文化財センター

図版出典

第１図１：岡田　登 2002「第七節　南小山廃寺」『多度町史　資料編Ⅰ考古・古代・中世』　多度町。写真は筆者撮影。

第１図２：藤井　功・石井則孝 1968「第４章 遺物」『智積廃寺発掘調査報告書』（四日市市埋蔵文化財調査報告第３集）四日市市教育委員会。

第１図３：山田　猛　1981「Ⅸ　一志郡嬉野町　天花寺廃寺」『昭和 55 年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財調査報告 44）三重県教育委員会。

第１図４：筆者撮影。

第１図５：境　宏 1988「白鳳･奈良時代瓦類」『鳳凰寺遺跡発掘調査報告書』大山田村教育委員会。山本雅靖 1988「付編　薬師寺保管の鳳凰寺廃寺関係遺物について」『鳳凰寺遺跡発掘調査報告書』大山田村教育委員会。

第２図：竹内英昭 1988「第２章　出土遺物」『辻垣内瓦窯跡群』嬉野町教育委員会。

第３図１：浅野清春編 1983「Ⅲ　御土井廃寺」『岩倉市稲荷町・大山寺町　岩倉南部土地区画整理事業地内所在埋蔵文化財発掘調査報告』岩倉市教育委員会。

第３図２：北條献示 1993「Ⅳ　出土遺物」『東畑廃寺発掘調査報告書（Ⅴ）』（稲沢市発掘調査報告 40）　稲沢市教育委員会。北條献示 1995「Ⅳ　出土遺物」『稲沢市内遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）』（稲沢市発掘調査報告 42）　稲沢市教育委員会。

第３図３：内山伸也 1993「第４章　遺物」『甚目寺町文化財報告書Ⅳ　甚目寺遺跡』 甚目寺町教育委員会。写真は筆者撮影。

第３図４：服部哲也 1994「第５章　遺物」『尾張元興寺発掘調査報告書』（名古屋市文化財調査報告 28）名古屋市教育委員会。市澤泰峰 2010「第５章　調査の成果」『尾張元興寺跡第 14 次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会。

第３図７：仲座琢磨 2019「第Ⅲ章　調査の成果」『寺部遺跡Ⅸ』（豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 81 集）豊田市教育委員会。

第４図５：立松　彰 1988「Ⅳ　遺物」『トヽメキ遺跡』東海市教育員会。

第４図６：永井邦仁 2011「三河国賀茂郡の古瓦」『豊田市史研究』２　豊田市。

第４図７：第３図７と同じ。

第４図８：安城市ホームページ「文化財ニュース　県内最大の鴟尾、出土」（https://www.city.anjo.aichi.jp/shisei/shisetsu/kyoikushisetsu/maibun-bunkazainews-sibi.html）。

第４図９：永井邦仁 2004「第７章　瓦」『寺領廃寺』（安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第 12 集）安城市教育委員会。

第５図：武田寛生編 2013『篠場瓦窯跡・上海土遺跡』 静岡県埋蔵文化財センター。

第６図１：第５図と同じ。

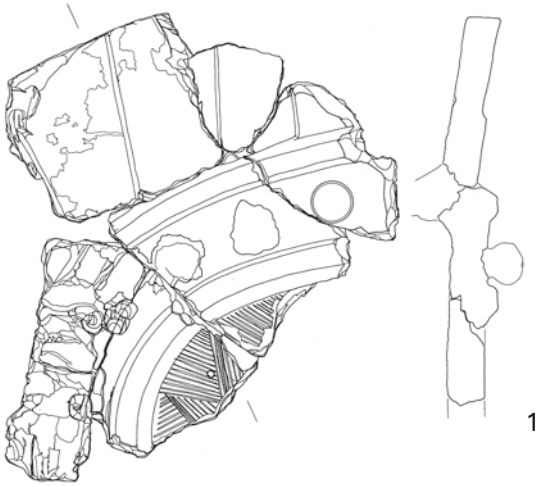
第６図２：武田寛生 2009「資料調査報告　東ノ谷瓦窯跡」『浜松市博物館報』第 21 号　浜松市博物館。

第６図３：佐口節司 1996「第５章遺物　第３節瓦・塼」『大宝院廃寺跡－第７次発掘調査報告書－』磐田市教育委員会。写真は筆者撮影。

第７図：筆者作成。

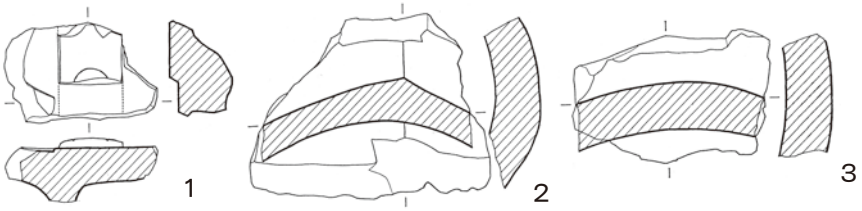
第８図：筆者作成。

１　南小山廃寺

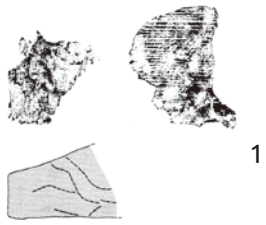


内面

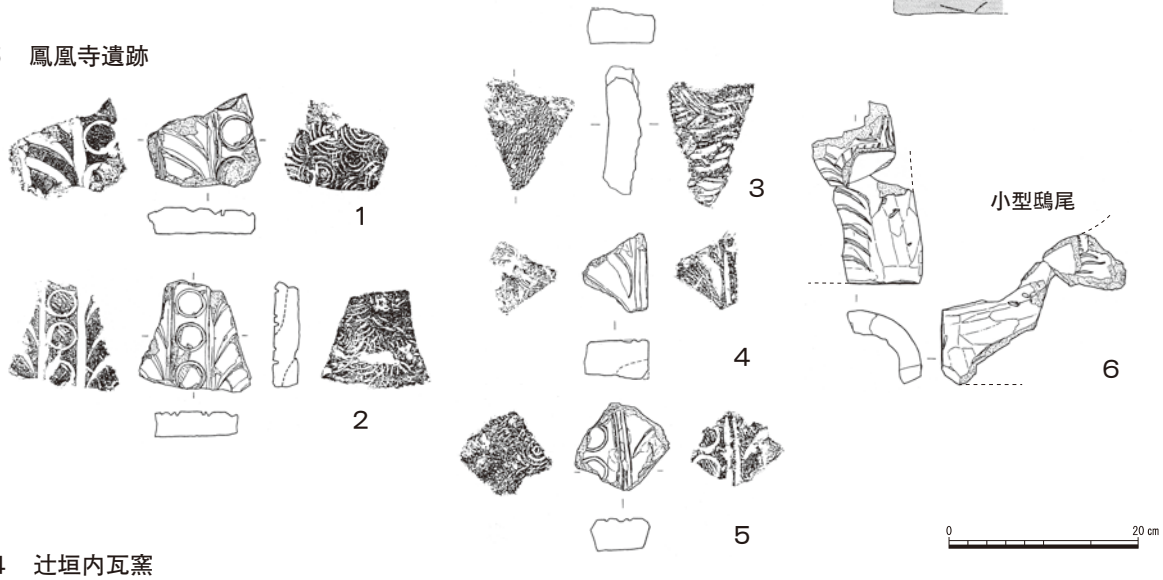
２　智積廃寺



３　天花寺廃寺



５　鳳凰寺遺跡



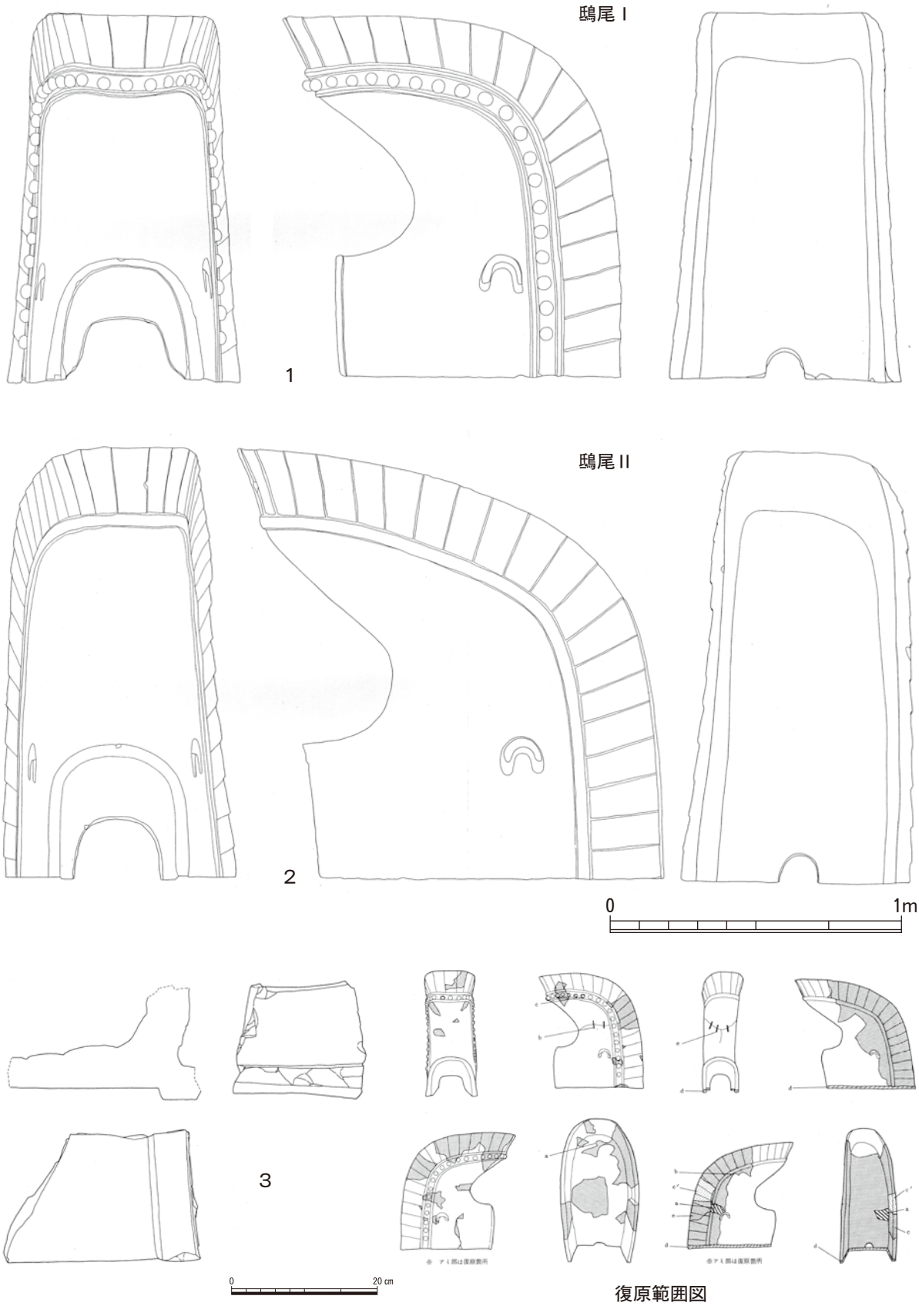
４　辻垣内瓦窯

腹部付近の粘土接合

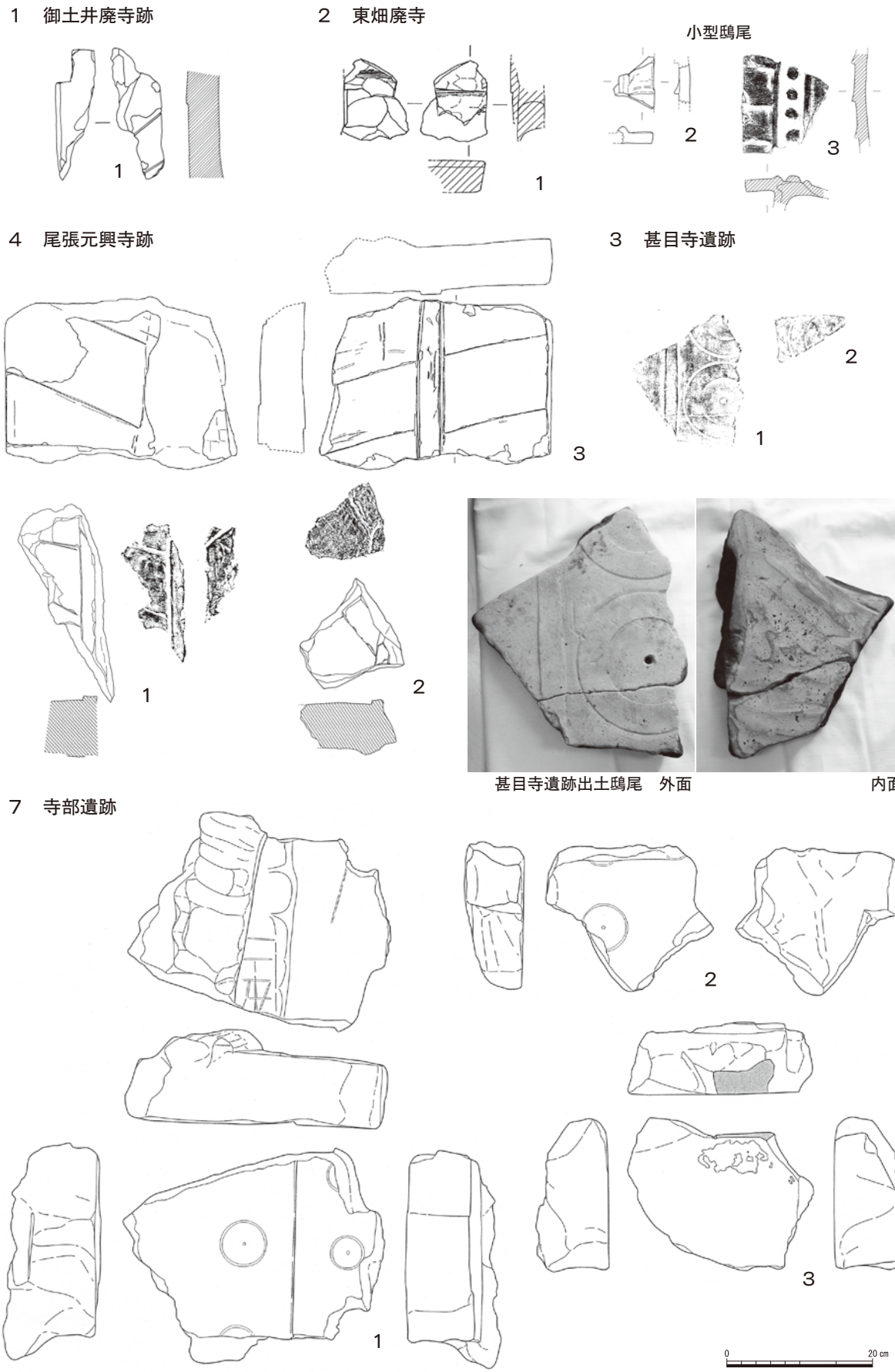
基底面の布目痕

第１図　東海出土の鴟尾（三重県）　（１：８）

３　辻垣内瓦窯

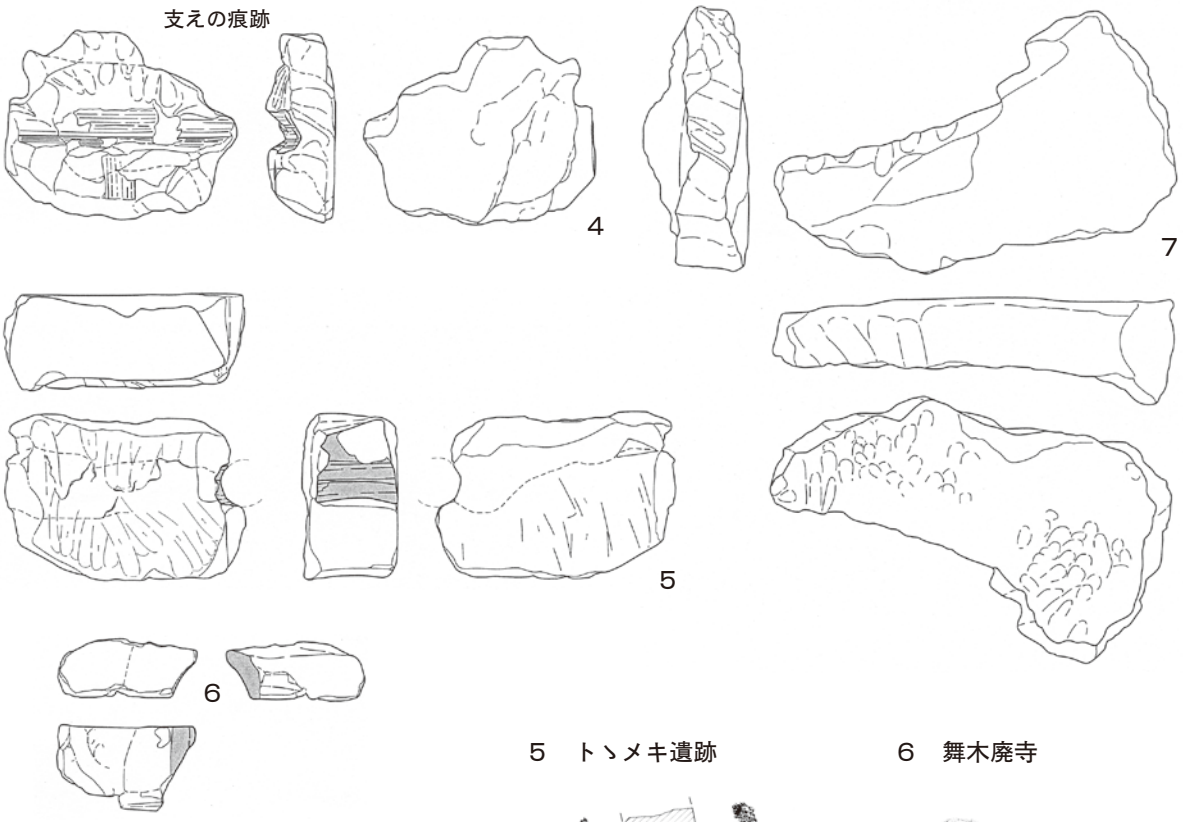


第２図　東海出土の鴟尾（三重県）（１・２＝１：20　３＝１：８）



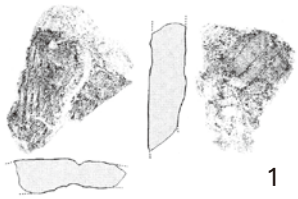
第３図　東海出土の鴟尾（愛知県）（１：８）

7　寺部遺跡

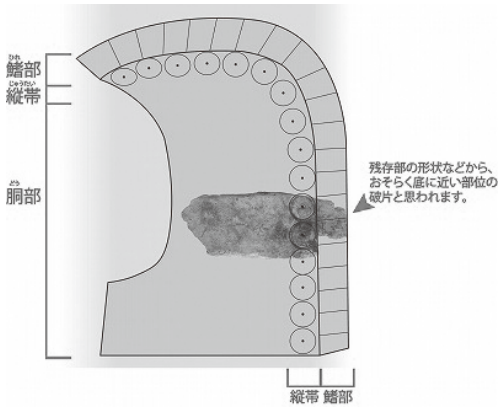


5　トンメキ遺跡

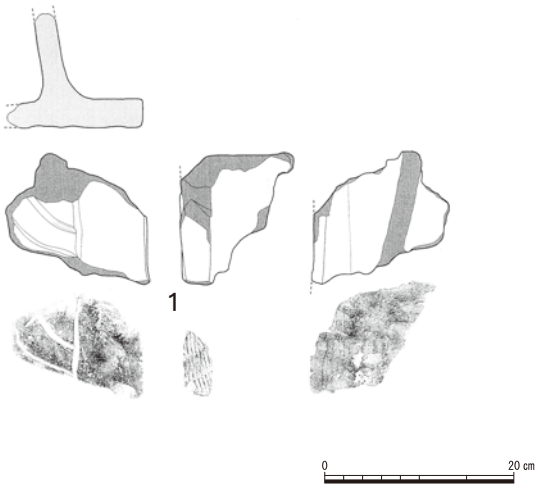
6　舞木廃寺



8　別郷廃寺

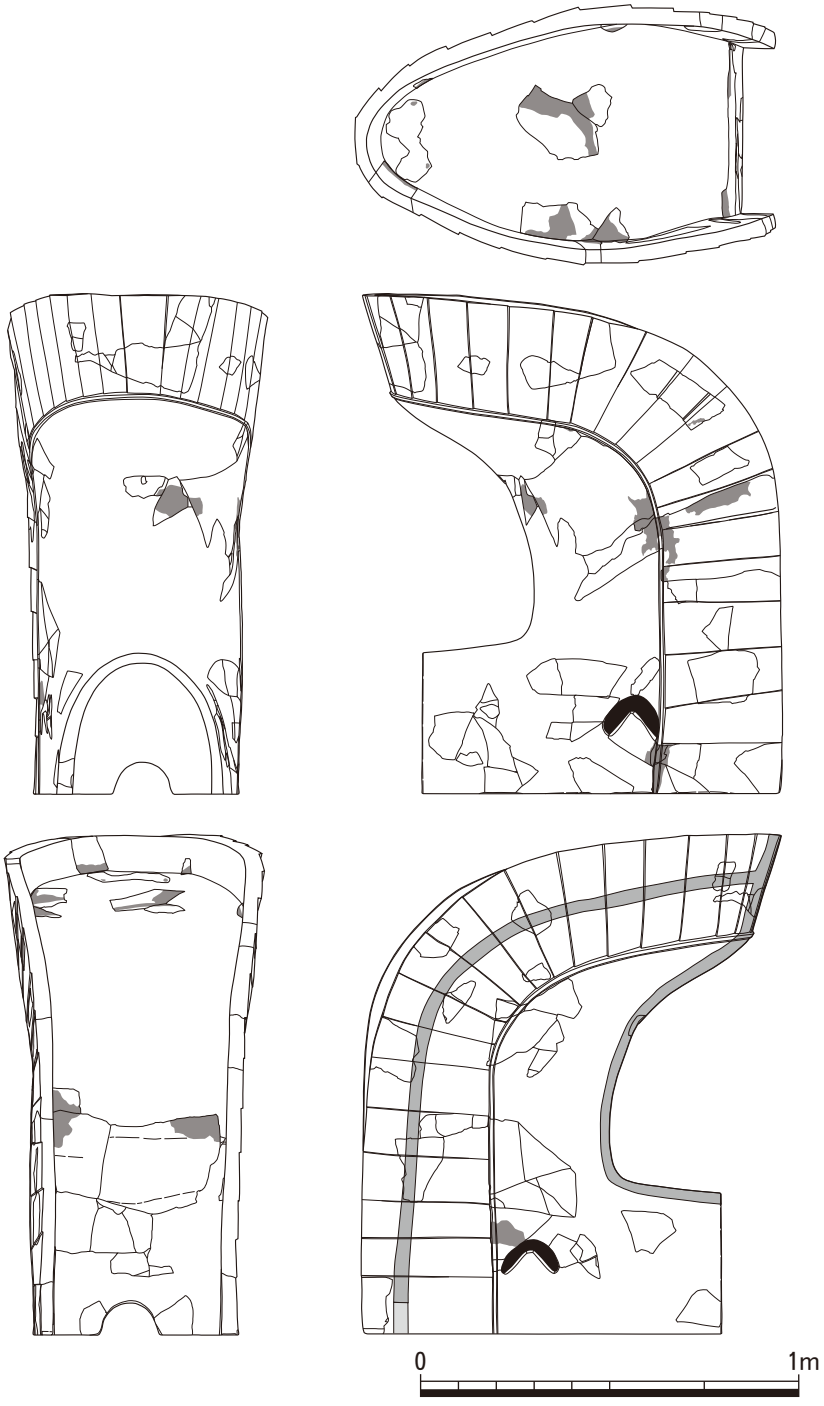


9　寺領廃寺



第４図　東海出土の鴟尾（愛知県）（１：８）

１　篠場瓦窯跡

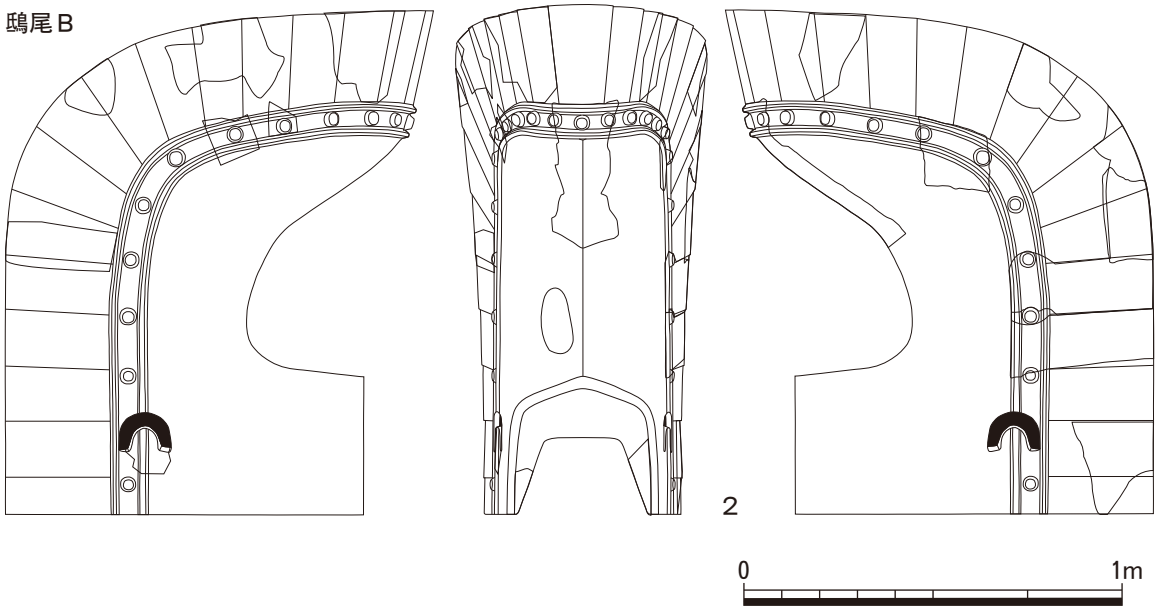


基底面の木目痕

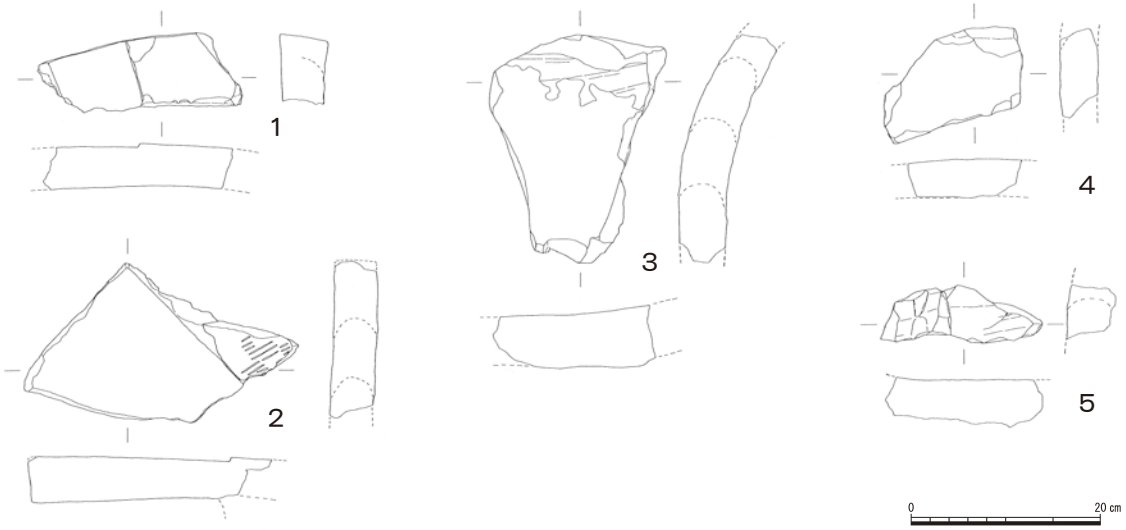
腹部内面の竹笹類の痕跡

第５図　東海出土の鴟尾（静岡県）（１：20）

1　篠場瓦窯跡



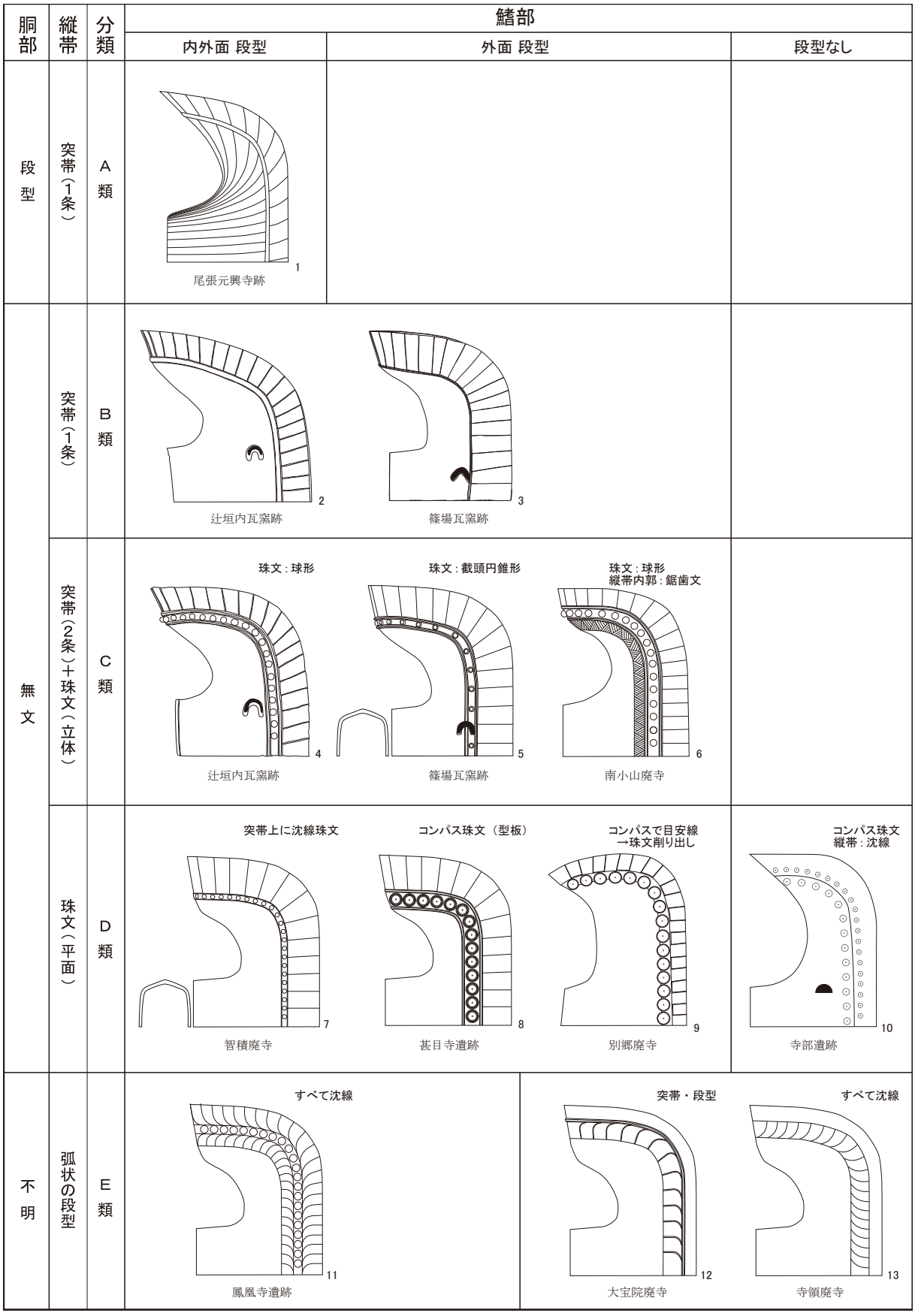
2　東ノ谷瓦窯



3　大宝院廃寺跡

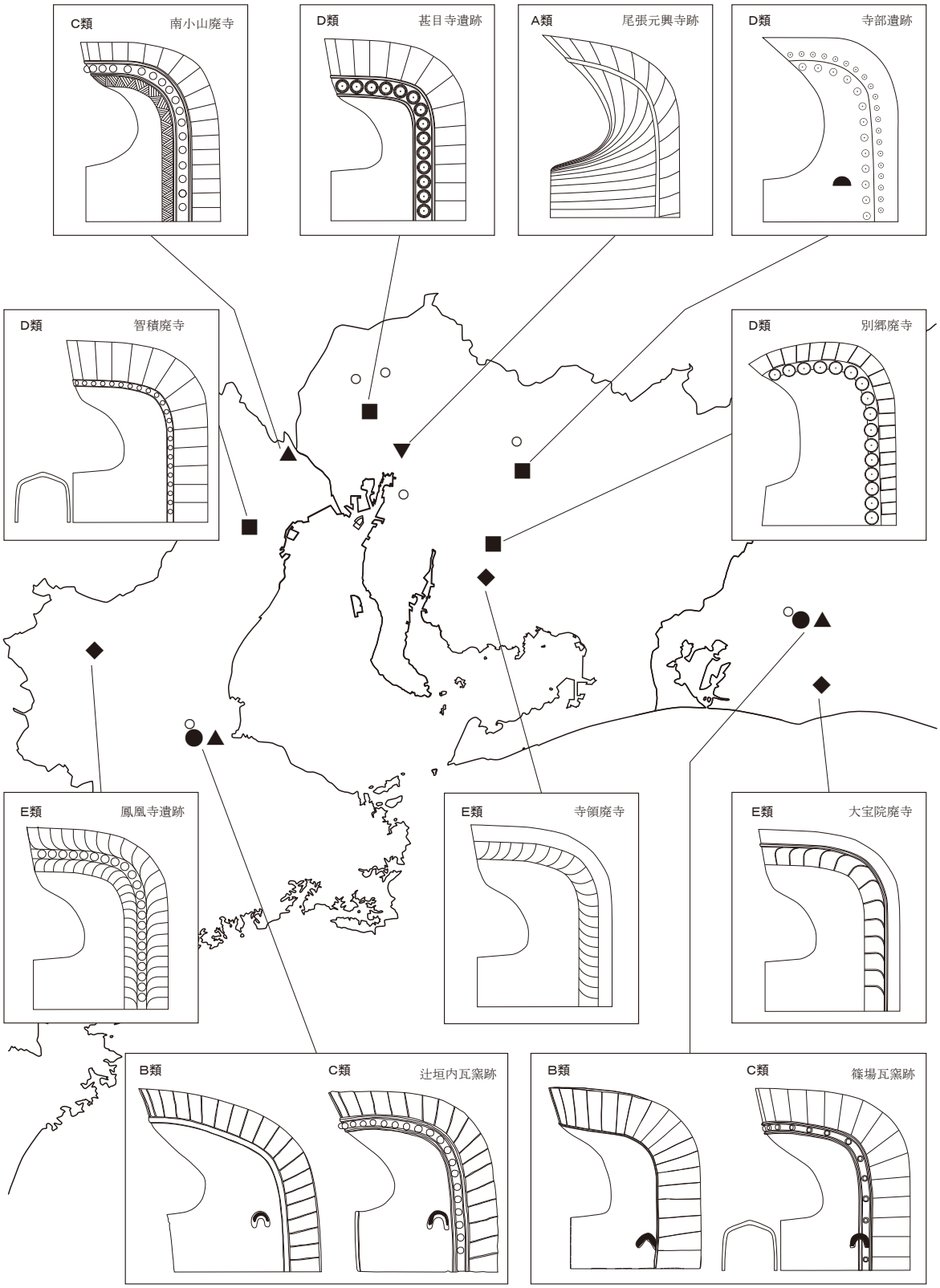
小型鴟尾の胴部～縦帯

第６図　東海出土の鴟尾（静岡県）（１＝１：20　２・３＝１：８）



＊2～4以外は、 破片からの復元模式図
＊縮尺不同

第7図　東海出土鴟尾の分類



第８図　東海出土鴟尾の分布

7　山陰地方の鴟尾

久保　穣二朗・花谷　浩

A　はじめに

山陰地方の鴟尾について、以下のように分担執筆した。

鳥取県（因幡国・伯耆国）：久保穣二朗、島根県（出雲国・石見国）：花谷浩

B　鳥取県（因幡国・伯耆国）の鴟尾

ⅰ　鴟尾の分布と一覧

鳥取県内の鴟尾は陶棺の鴟尾も含めると14箇所の古代寺院や窯跡等から出土している（第１図・第１表）。

○因幡国…８箇所〔寺院跡５、官衙遺跡１、窯跡１、古墳１（陶棺の鴟尾）〕

○伯耆国…６箇所〔寺院跡６〕

ⅱ　鴟尾の種類と特徴

胴部無文鴟尾、山陰型鴟尾、蓮華文帯鴟尾の三つに大別できる（第２図）。

（１）胴部無文鴟尾（第９・10・12図）

⑦土師百井廃寺Ａ（第９図10・11）、⑧奥谷窯跡（第10図14～16）、⑩大御堂廃寺Ａ（第12図22）の鴟尾が該当し、２寺院跡と１窯跡から出土している。各寺院の創建瓦から山陰では他の鴟尾よりもいち早く、７世紀第３四半期後半から７世紀第４四半期前半頃に出現か。時期は下るが大寺廃寺の石製鴟尾も胴部は無文である。

形態的特徴　○胴部は無文で、鰭部外面は正段型に削り出している。○鰭部外面の端部は無文帯（奥谷窯跡・土師百井廃寺Ａ）。○縦帯部は無文帯（土師百井廃寺Ａ）や断面三角形の突帯状の高まりをもつ（大御堂廃寺Ａ）。

製作技法的特徴　○内外面にハケメ調整やヘラ削りが施される。○外面に平行叩きが施される鴟尾もある（奥谷窯跡）。○焼成は硬く須恵質で、暗灰褐色や青灰色を呈する（奥谷窯跡・土師百井廃寺Ａ）。○胴部・腹部を先に作り、鰭部をあとから接合する（奥谷窯跡）。

（２）山陰型鴟尾（第６～９、11～14図）

②玉鉾等ヶ坪廃寺Ａ・Ｂ（第６図１～３、第７図６）、⑤上原南遺跡（第８図７・８）、⑦土師百井廃寺Ｂ（第９図12）、⑨野方弥陀ヶ平廃寺Ｂ（第11図19）、⑩大御堂廃寺Ｂ（第12図23～25）、⑬上淀廃寺Ａ・Ｂ・Ｃ（第13図28～31、第14図33～35）などの鴟尾

が該当し、９寺院跡と１遺跡から出土している。

形態的特徴　○縦帯と鰭部の段は貼り付け突帯で表現する。○縦帯は頭部に取りつき、その前方に鱗状の沈線文（以下、鱗状沈線文と呼称する。）を２条ないし１条描く。○第１列目（縦帯側）の鱗状沈線文内にボタン状の珠文が貼り付く。○頭部は閉じていない。○基底部近くに半円形透し穴を空ける。○腹部の底部に半円形刳り形を空ける。

製作技法的特徴　○外面に平行叩き、内面に同心円文当て具の痕跡が残る場合が多い。○突帯や鱗状沈線文の施文に当たっては、沈線で下描き（割り付け）をおこなっている場合が多い。○外面は平行叩き成形後、ハケ目調整やナデ調整をおこなっている。○鰭部の端面を平行叩き成形する場合がある（上原南遺跡・但馬の長見寺廃寺）。○焼成は硬く須恵質で､灰色や青灰色を呈する。○基底部や鰭部端部に布目痕が残る。○底部に「編みワラ」の圧痕が残る。その痕跡単位から粘土紐の積み上げが考えられる（上淀廃寺Ａ・大御堂廃寺Ｂなど）。○胴部・鰭部を先に作り、腹部をあとから接合する。

山陰系鴟尾　野方弥陀ヶ平廃寺Ａの鴟尾（第 11 図 18）は、○鰭部を正段型に削り出し、縦帯は二本の沈線で表現されている。○鱗状沈線文は２条施されるがボタン状の珠文は見られない。○焼成は土師質、内面に平行叩き痕が残る。このことから、「山陰型鴟尾」とは区別して「山陰系鴟尾」と呼称する。

（３）蓮華文帯鴟尾（第 15・16 図）

山陰では⑫斎尾廃寺から唯一出土が確認できる。斎尾廃寺は白鳳期創建の寺院で、金堂跡や塔跡、講堂跡のほか中門跡と推測される土壇跡が地上遺構として良く残り、これらの主要伽藍は法隆寺式伽藍配置を採用している。

鴟尾は破片資料であるが現在 15 点[1]確認することができる。製作技法的特徴から２個体存在する（第 15 図 37 ～ 40、第 16 図 44 ～ 50）。鴟尾は金堂跡の東斜面から出土しており（梅原 1944）、金堂の大棟を飾っていたものと考えられる。鴟尾の年代は、創建軒瓦の雷文縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦（小山廃寺式［紀寺式］）・法隆寺式系の軒平瓦（第 15 図 42・43）から７世紀第４四半期後半頃の時期が考えられる。

形態的特徴　○蓮華文は複弁八弁蓮華文（径は 9.2cm 前後）で、中房には１＋４＋８の蓮子を整然と配するが、線鋸歯文は乱雑である（第 15 図 41）。○胴部には２条のヘラ描き沈線で唐草文を表現する。沈線の断面の形状は正「Ｖ」字状ではなく、一方の傾斜が緩やかである[2]。○鰭部外面に型板などを使用して正段型を削り出している。その正段の上段に沿ってナデによる凹線が横走する。さらに、鰭部端面に沿って凹線（沈線）を施している。○鰭部端面にもナデによる緩やかな凹線が走っている。○弧形透し穴（幅：約 12cm）は縦帯の胴部側突帯をまたぎ、前方（胴部側）に向かって傾斜して空けられている（第 16 図 48）。弧形透し穴を空ける位置やその傾き方は、たつの市の中井廃寺の鴟尾と良く似ている。その他、美作市の大海廃寺、大阪市の四天王寺Ｅの鴟尾でも弧形透し穴が確認できる。

製作技法的特徴　鰭部正段の製作技法とその工程[3]は以下のように整理できる。

①成形段階：○鰭部正段型の製作に当たっては、最初に鰭部外面を平滑に仕上げる。○次に等間隔にヘラ状工具で深く沈線を入れ、その沈線の下を端部側から縦帯側に向かって削り取って段とする。その際、鰭部端面に沿って走る凹線（幅４～５mm）の一部は削り取られる（第 16 図 47）。

②調整段階：○その後、曲面（弧状）を持った段とするため型板で段をナデ仕上げる。このナデ仕上げは、姫路市の下太田廃寺・今宿遺跡、大海廃寺などの鴟尾でも確認できるが、四天王寺Ｅ、姫路市の打越窯跡・赤坂窯跡の鴟尾の正段は曲面を呈さず、断面が鋸歯状をなす。

なお、第 16 図 50 の鰭部端面に沿って走る凹線は同図 47 よりも狭く、幅２～３mm の沈線に替わっている。さらに、その沈線は正段製作後の最終段階に施されている。

その他の製作技法等としては、○第 16 図 49 の腹部の頂部近くではドーナツ状に巻いた粘土紐が確認できる。唐草文を描いた胴部破片資料（京都大学総合博物館所蔵資料）では粘土板の痕跡が確認できる。○さらに同図 49 の腹部は、鰭部内面への貼り付け粘土が認められ、胴部・鰭部を先に作り、腹部をあとから接合したと推測される。姫路市の市之郷廃寺・今宿遺跡、京都市の大宅廃寺の鴟尾でも、胴部・鰭部を先に作り、腹部をあとから接合したことが確認できる。

以上、斎尾廃寺の蓮華文帯鴟尾は、その蓮華文が複弁八弁蓮華文であることの違いは認められるが、西播磨地域などから出土する蓮華文帯鴟尾と形態的・製作技法的特徴にほとんど差異が認めがたく、西播磨地域の同一の工人グループが現地にまで赴き製作した可能性が強い。しかし、最終的には大脇潔氏が指摘するように胎土の理化学的分析が必要であろう（大脇 2002）。

ⅲ　山陰型鴟尾の変遷と時期

山陰型鴟尾について、その観察からＡ１類からＤ類までの６分類を試みた（第３表）。

Ｄ類を除くＡ１類からＣ２類までの各属性の様相を見ると、Ａ１類からＣ２類の５類はＡ１類→Ａ２類→Ｂ類→Ｃ１類→Ｃ２類と変遷していくものと想定される（第５図）。

Ａ２類上淀廃寺Ａの鴟尾の年代　寺院の創建は「癸未年」紀年銘瓦（683 年）から７世紀第４四半期頃と言われており、鴟尾の年代もその頃の年代が考えられる。

Ａ１類玉鉾等ヶ坪廃寺Ａ・Ｂの鴟尾の年代　野方弥陀ヶ平廃寺Ａの鴟尾の鱗状沈線文の施文範囲の様相に類似しており、型式学的に見て、Ａ２類上淀廃寺Ａの鴟尾よりも先行する時期を想定したい。

Ｂ類来美廃寺の鴟尾の年代　創建瓦の軒丸瓦Ⅰ類単弁蓮華文軒丸瓦・軒丸瓦Ⅱ類単弁十弁蓮華文軒丸瓦から８世紀初頭頃と考えられる。

Ｃ１類上原南遺跡の鴟尾の年代　鴟尾と共伴すると考えられる軒丸瓦ＩＣ型式素弁八弁蓮

華文軒丸瓦は８世紀初頭と考えられているが（山中編 2006）、８世紀第１四半期頃と想定したい。

Ｃ２類上淀廃寺Ｃの鴟尾の年代　この鴟尾は金堂改修の際、使用されたもので、金堂・中塔の大規模改修に使用された上淀廃寺Ⅱ類軒丸瓦[4]の年代から８世紀第２四半期後半頃と考えられる。

ⅳ 山陰型鴟尾の生産地など

起源　朝鮮半島の高句麗や新羅の鴟尾の影響を考えた時期もあったが、山陰地方で創作されたと考える方が穏当であろう。

製作者　須恵器工人が深く関わった。

生産工房　「Ａ地域：東出雲（大井窯跡群）から伯耆の地域」と「Ｂ地域：因幡の地域」の２グループの工房を想定したい。Ａ地域の鴟尾は平行叩き成形後、ハケ目調整。Ｂ地域ではハケ目調整は確認できない。また、鰭部端面を平行叩き成形する鴟尾が認められる（上原南遺跡や但馬の長見寺廃寺）。最終的には胎土の理化学的分析が必要であろう。

Ｃ　島根県（出雲国・石見国）の鴟尾

ⅰ　鴟尾の分布　（第 17 図）

島根県内の鴟尾は、10 遺跡から 15 個体ほどが出土している。

○出雲国…７遺跡　〔寺院跡１、官衙遺跡２、窯跡１（２基）、遺跡３〕

○石見国…３遺跡　〔寺院跡２、窯跡１〕

ⅱ　出雲の鴟尾

旧出雲国（島根県東部）では、７遺跡から 10 個体ほどの鴟尾が出土している（第 20 図）。西部（出雲市斐川町）に所在する三井Ⅱ遺跡例以外は、山陰型鴟尾である（第２・３表）。

来美（くるみ）廃寺跡（松江市来美町、第 17・18 図）『出雲国風土記』（733 年）に日置君鹿麻呂の父・日置君目烈の造営と記された「山代郷北新造院跡」（国史跡）である。伽藍北中央に位置する金堂跡（第２基壇）の周辺から 30 数点の鴟尾片が出土した。胴部の大型片などから全形を推定復元できる「鴟尾１」（第 17・19 図）と、鰭部ほかのみの「鴟尾２」（第 18 図１～３）がある。島根県埋蔵文化財調査センター・八雲立つ風土記の丘展示資料館所蔵（柳浦編 2002、林編 2007）。

鴟尾１は、上淀廃寺跡Ａよりやや小型で、鰭部の突帯は久保ａ・ｂタイプ（第４図）が混在する。縦帯の突帯および鱗状文と円形貼付け文は頭部まで延び、鱗状文は縦帯貼付け後に割付け施文されている。鰭部外面に「弟世方女／艮」などのヘラ書文字がある（第 17 図８）。頭部・胴部と鰭部の内面には同心円と平行の当て具痕が残る。久保分類の山陰

型鴟尾Ｂ類（第２表）。

山代二子塚古墳北東隣接地（松江市山代町、第 18 図４）　日露戦争後に松江衛戍した旧陸軍歩兵第 63 聯隊の射撃場建設時に出土した資料（花谷 2013）。山本清先生の記録から来美廃寺跡とは約 500m 離れた地点と判明する。胴部の鱗状文がわかる資料で、同廃寺跡例より軟質の焼きである。久保分類の山陰型鴟尾Ｂ類。出雲弥生の森博物館所蔵。

寺の前遺跡（松江市山代町、第 18 図５）『出雲国風土記』に大原郡少領出雲臣弟山（のち出雲国造就任）造営と記された四王寺（しわじ）跡（山代郷南新造院跡）の南西の谷部から出土した資料（瀬古 1995）。山陰型鴟尾の左側面縦帯の小片。松江市歴史まちづくり部所蔵。

出雲国府跡（松江市大草町、第 18 図６）　六所神社脇の出雲国府跡（国史跡）正庁区域の北側、官衙区域と推定される宮ノ後地区西部から、山陰型鴟尾の鰭部断片が１点出土した（稲田編 2013）。突帯は、久保ｂタイプで細い。国府跡からの鴟尾出土は珍しい。久保分類の山陰型鴟尾Ｃ類。島根県埋蔵文化財調査センター所蔵。

山津窯跡群（松江市大井町、第 21 図１・２）　中海西岸に立地する古墳時代以来の一大須恵器窯群の一支群である山津１号窯跡と山津２号窯跡から、１点ずつの山陰型鴟尾が出土した（岡崎 2003、藤原編 2006）。

山津１号窯跡灰原からは、左側面鰭部と腹部の断片が出土した（第 21 図１）。鰭部の突帯は細く、断面は久保ｂタイプ。内面には当て具痕をとどめない。久保分類の山陰型鴟尾Ｃ１類。山津２号窯跡出土資料（第 21 図２）は、胴部右側面の断片。鱗状文が１段で、かつ各鱗状文が独立する。縦帯ならびに鰭の突帯は、久保ｂタイプで細い。内面の当て具痕をナデ消す。Ｃ２類。松江市歴史まちづくり部所蔵。

三井Ⅱ遺跡（出雲市斐川町、第 22・23 図）　出雲最大の河川、斐伊川の約 3.5km 丘陵地に広がる遺跡で、その中の瓦陶兼業窯跡の灰原から出土した。鴟尾片は 40 点ほどで、赤褐色軟質の「鴟尾１」（第 22 図）と灰色硬質の「鴟尾２」（第 23 図）の２個体がある（花谷 2016）。

鴟尾１は、胴部左側面、鰭部右側面、脊稜、腹部などの破片がある。胴部に２条一対の突帯を上下に間隔を置いて配置し、その間に笠形珠文を飾る。笠形珠文は胴部にくぼみを作って挿入されている。

鴟尾２は、胴部右側面、胴部から鰭部の左側面、腹部、笠形珠文などの破片がある。意匠や製作手法は、鴟尾１とほぼ同じである。腹部外面に雨仕舞の張り出しが付く。出雲市文化財課所蔵。

三井Ⅱ遺跡の窯跡から出土した複弁八弁蓮華文軒丸瓦は、三次市寺町廃寺跡軒丸瓦ＦＩＢと同笵である。鴟尾の意匠も三次市上山手廃寺跡の鴟尾と同じであり、備後の瓦工人が出張製作した作品として注目される。

稲城・小野遺跡（出雲市斐川町、第 21 図３～７）　斐伊川の東約 2.5km の丘陵裾から沖積地に広がる遺跡。円面硯や杯蓋硯（転用硯）が多数出土することから、出雲郡家跡あるい

はその関連遺跡と推定される。５点の小片が出土（露梨 2005）。出雲市文化財課所蔵。

須恵質の焼成で、細い突帯や外面平行叩き・内面同心円当て具痕の製作技法から、山陰型鴟尾に類似するが、鱗状文は確認できない。久保分類の山陰型鴟尾Ｄ類。

稲城・小野遺跡からは、安来市野方廃寺跡（教昊寺跡）の軒丸瓦Ⅰ型式Ｂと同笵の上淀廃寺式単弁八弁蓮華文軒丸瓦（妹尾 2011）や、複弁八弁蓮華文軒丸瓦（水切り瓦、同笵例なし）などが出土するが、丸平瓦の出土量からは、総瓦葺き建物は復元しがたい（花谷ほか 2014）。出雲郡家関連の官衙遺跡出土例として貴重。

ⅲ　石見の鴟尾

旧石見国（島根県西部）では、３遺跡から５個体の鴟尾が出土している。

久本奥窯跡（江津市嘉久志町、第 24 図・第 25 図１・２）　石見中部を流れる江の川河口約１km の左岸丘陵地（標高 60m）にある窯跡。道路改良工事にともなう発掘調査で須恵器（７世紀後半～８世紀後半）と瓦が出土した（広江編 1995）。鴟尾は３個体分がある。島根県埋蔵文化財調査センター所蔵。

鴟尾１は、鰭部に二重円文をコンパスで描くもので胴部縦帯から鰭部および腹部の断片など６点がある（第 24 図１～５・第 25 図２）。胴部の縦帯は、断面Ｍ字形の突帯が２条並び、その間は無文である。鰭部には正段形を表し、二重円文を２個ないし３個割り付ける。３個並ぶとすると鰭部の長さは 20cm を超える。腹部下端には半円形刳り形がある。腹部外面には平行叩き痕、内面には同心円文当て具痕がある。鰭部の内外面は丁寧なヘラケズリ調整。

鴟尾２は、鰭部の大型断片１点がある（第 25 図１）。コンパスによる円文を１個だけ正段形中央に描く。鴟尾１に比べるとヘラケズリ調整が雑で平行叩き痕や当て具痕が残る。

鴟尾１・２は、鰭部端部の断面形が方形に仕上げられているが、鴟尾３（第 67 図６～９）とした一群は、断面に丸みがあり、内外面の調整がナデ主体で円文を描かないのが特徴である。

鴟尾とともに出土した丸平瓦は、８世紀後半以降のものと報告されているが、出土した鋸歯文縁重弁八弁蓮華文軒丸瓦は、浜田市下府廃寺跡の創建軒丸瓦と同笵である（７世紀第４四半期）。しかし、久本奥窯跡出土の鴟尾はいずれも、浜田市下府廃寺跡の鴟尾とは意匠・胎土ともに一致しない。久本奥窯跡の鴟尾片は、須恵器生産に際して置台として持ち込まれたものと推測される。江津市内に下府廃寺跡と同笵の軒丸瓦を用いた未知の古代寺院跡があり、そこに使用された鴟尾の可能性がある。

下府廃寺跡（浜田市下府町、第 25 図３）　下府川北側の丘陵裾に南面して建てられた古代寺院跡。塔を西、金堂を東に置いた法起寺式伽藍配置。塔跡のみ国指定史跡（原・大谷 1993）。地名から石見国府跡が近辺に推測されているが未発見である。石見国分寺跡・尼寺跡は、この寺院跡の北約１km にある。

塔跡と金堂跡の間から右側面鰭部の断片が１点出土した。段を低い台形断面の突帯で表現する。焼成は軟質で胎土は粗く、須恵質で硬質の焼きをした久本奥窯跡例とは違う。浜田市教育委員会所蔵。

重富廃寺跡（浜田市旭町重富、第 25 図４）　浜田市街地の東方約 20km の山間部に立地する寺院跡（榊原・藤田 2013）。下府廃寺跡と類似した線鋸歯文縁重弁九弁蓮華文軒丸瓦を創建瓦とし、石見最古の寺院跡である（妹尾 2016）。

山陰型鴟尾の胴部に付けられたボタン状の円文の断片が１点出土している。鰭部に貼り付けてあったのか、胴部に貼り付けてあったのかは不明だが、胴部とすると三次市上山手廃寺跡の鴟尾との関係がうかがえそうである。

（元鳥取県埋蔵文化財センター / 出雲弥生の森博物館）

謝　辞

蓮華文帯鴟尾の調査に当たって、下記の方々や諸機関にご協力を賜りました。末尾ながら記して感謝申し上げます。（順不同、敬称は省略させていただきました。）

東京国立博物館　国立歴史民俗博物館　京都大学総合博物館　京都大学大学院文学研究科考古学研究室　兵庫県立考古博物館　岡山県古代吉備文化財センター　京都市考古資料館　姫路市埋蔵文化財センター　鳥取県立博物館　琴浦町教育委員会　島根県埋蔵文化財調査センター　浜田市教育委員会　山本亮　村木二郎　阪口英毅　横山操　上田健太郎　松尾佳子　高橋潔　森恒裕　山下大輝　小山浩和　野口良也　下村嘉輝

註

1　琴浦町教育委員会（11 点）、鳥取県立博物館（２点）、京都大学総合博物館（１点）、東京国立博物館（１点）で所蔵されている。東京国立博物館所蔵の鴟尾は左側面の鰭部頂部付近の資料で、正段型に削り出されている。

2　特に唐草文が蕨手状に曲線化する箇所では一方の傾斜が緩やかであったり（京都大学総合博物館所蔵の鴟尾）、その傾斜が曲面を呈する（京都市の法琳寺跡出土鴟尾）。

3　大脇潔氏は文献（大脇 1983）のなかで、成形・調整段階の工程について論じられ、さらに、調整段階の型板の使用について指摘されている。

4　伯耆国分寺の創建瓦の一つと考えられる軒丸瓦 615 型式と上淀廃寺Ⅱ（a・b）類軒丸瓦を妹尾周三氏によって突き合わせ比較がおこなわれ、同笵であることが確認され、615 型式には笵傷が多いことや文様の摩耗が激しいことから上淀廃寺Ⅱ類軒丸瓦が先行することが明らかにされている（妹尾 2015）。

参考文献

梅原末治 1944「伯耆齋尾廢寺趾と出土塼佛」『史迹と美術』第十五輯ノ九（第一六五號）　史迹美術同攷會

稲田陽介編 2013『史跡出雲国府跡－９　総括偏－』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 22　島根県教育委員会

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』

大脇　潔 1983「古代寺院の造営と工人の移動－蓮華文帯鴟尾を中心として－」『文化財論叢』　奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集刊行会

大脇　潔 1999『日本の美術　№.392 鴟尾』　至文堂

大脇　潔 2002「鴟尾の変遷」『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書 瓦塔・鴟尾』　東京国立博物館

岡崎雄二郎 2003『山津窯跡調査報告書』松江市文化財調査報告書第 93 集，松江市教育委員会

久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』６　鳥取県埋蔵文化財センター

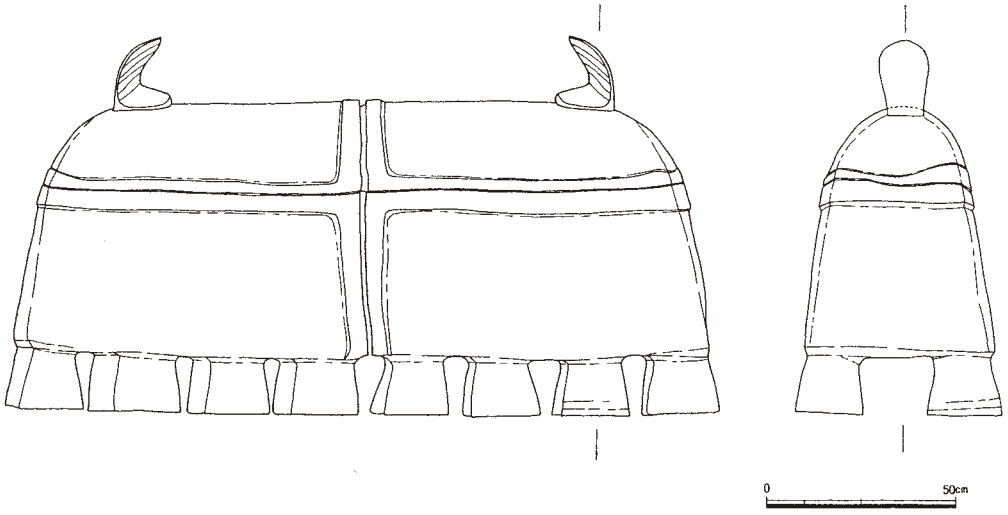
久保穣二朗 2017「土師百井廃寺の瓦について」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』８　鳥取県埋蔵文化

財センター
榊原博英・藤田大輔 2013『島根県浜田市遺跡地図Ⅴ（旭自治区）・浜田市治和町鰐石試掘調査』平成 23 年度市内遺跡発掘調査報告書　浜田市教育委員会
眞田廣幸ほか編 2001『史跡 大御堂廃寺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 107 集　倉吉市教育委員会
妹尾周三 2011「出雲へ伝わった仏教の特質－古代寺院から見た地域間交流とその背景－」『古代出雲の多面的交流の研究』 島根県古代文化センター
妹尾周三 2015「軒瓦から見た伯耆国庁と国分寺の造営」『古代文化研究』第 23 号　島根県古代文化センター
妹尾周三 2016「石見の古代寺院と瓦づくり」『日本古代考古学論集』 同成社
瀬古諒子 1995『寺の前遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 62 集　松江市教育委員会・松江市教育文化振興財団
谷岡陽一ほか編 1977『蔵見古墳群発掘調査報告書』福部村埋蔵文化財調査報告書第 11 集　福部村教育委員会
露梨靖子 2005『小野遺跡』県道木次直江停車場線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，斐川町文化財発掘調査報告書第 31 集　斐川町教育委員会
中原　斉編 1995『上淀廃寺』淀江町埋蔵文化財調査報告書第 35 集　淀江町教育委員会
花谷　浩　2013「瓦礫陶拾遺　その３　－「長谷川コレクション」の全容　Ⅱ－」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第３集，出雲弥生の森博物館
花谷　浩 2016「付論　三井Ⅱ遺跡の瓦窯と瓦について」『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群　出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市の文化財報告 31　出雲市教育委員会
花谷　浩・平野芳英・原　俊二 2014「楯縫郡と出雲郡の古瓦　－収蔵瓦の再評価－」『しまねミュージアム協議会共同研究紀要』第４号　しまねミュージアム協議会
林　健亮編 2007『史跡山代郷北新造院跡』出雲国山代郷遺跡群北新造院跡（来美廃寺）発掘調査報告書　島根県教育庁文化財課
原　裕司・大谷晃二 1993『下府廃寺跡』平成元年度～平成４年度市内遺跡発掘調査報告書　浜田市教育委員会
姫路市市史編集専門委員会編 2010『姫路市史　第七巻』下　資料編　考古　姫路市
広江耕史編 1995『鹿伏山・半田浜西・二宮Ｃ遺跡・久本奥窯跡』一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１　島根県教育庁
藤原　哲編 2006『大井窯跡群　山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第 104 集　松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団
柳浦俊一編 2002『来美廃寺　－「山代郷新造院」推定地発掘調査報告書』風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書 13　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
山中敏史編 2006『郡衙周辺寺院の研究－因幡国気多郡衙と周辺寺院の分析を中心に－』 奈良文化財研究所

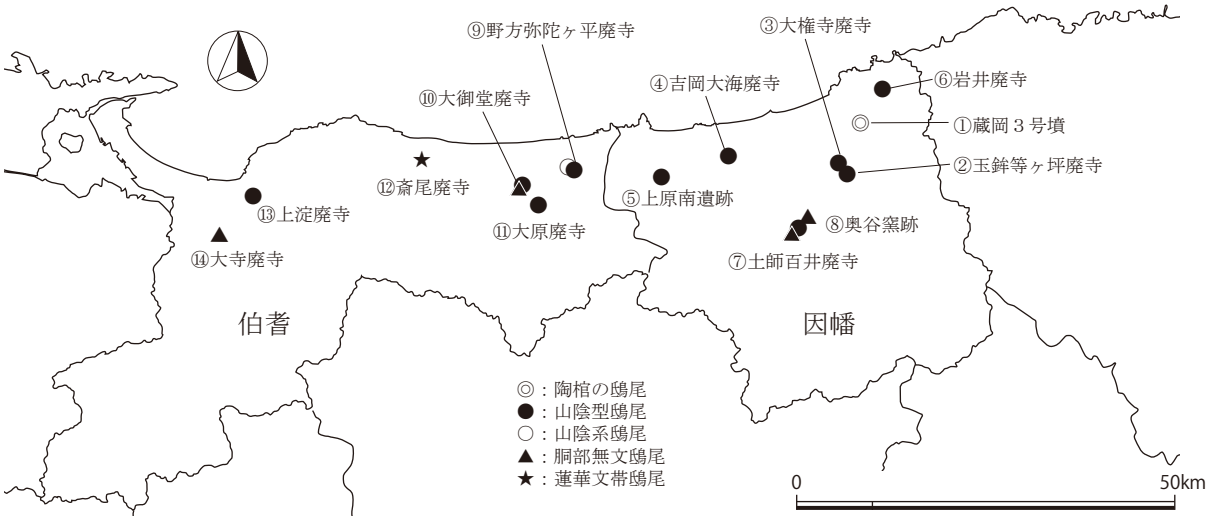
図版出典

第２図：大寺廃寺（石製）の図は大脇ほか編 1980 より転載。
第８図９：山中編 2006 より転載。
第 11 図 21：眞田ほか編 2001 より転載。
第 12 図 26・27：眞田ほか編 2001 より転載。
第 13 図 32・第 14 図 36：中原編 1995 より転載。
第１～16 図のうち、上記以外の図・表：久保 2015・2017 より転載及び久保作成。
第 17 図２・４・５の拓本と４・５の断面：久保 2015 から転載（一部改変）。
第 18 図１・５・６：久保 2015 から転載（一部改変）。
第 18 図４：花谷 2013 から転載。
第 20 図：久保 2015 を改変。
第 21 図１～７：久保 2015 から転載（一部改変）。

第 25 図 1 の拓本と 3 ・ 4 ：久保 2015 から転載（一部改変）。
第 18 ～ 25 図のうち、上記以外の図：花谷作成。
附図：谷岡ほか編 1977 より転載。



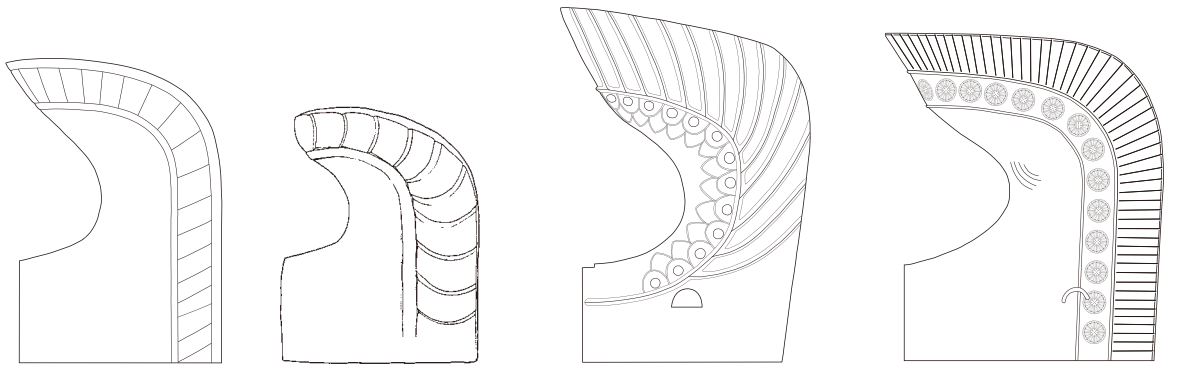
附図　蔵見3号墳出土鴟尾付陶棺図　（1：20）



第１図　鴟尾の分布図　（１：1,000,000）

第１表　鳥取の鴟尾一覧表

旧国	番号	遺跡名（資料名）		所在地	鴟尾の種類
因幡	①	蔵岡３号墳		鳥取市福部町南田	◎陶棺の鴟尾
	②	玉鉾等ヶ坪廃寺	A・B	鳥取市国府町玉鉾	●山陰型鴟尾
	③	大権寺廃寺		鳥取市国府町中郷	〃
	④	吉岡大海廃寺		鳥取市吉岡温泉町	〃
	⑤	上原南遺跡		鳥取市気高町飯里ほか	〃
	⑥	岩井廃寺		岩美郡岩美町岩井	〃
	⑦	土師百井廃寺	A	八頭郡八頭町土師百井	▲胴部無文鴟尾
			B		●山陰型鴟尾
	⑧	奥谷窯跡		八頭郡八頭町奥谷	▲胴部無文鴟尾
伯耆	⑨	野方弥陀ヶ平廃寺	A	東伯郡湯梨浜町野方	○山陰系鴟尾
			B		●山陰型鴟尾
	⑩	大御堂廃寺	A	倉吉市駄経寺	▲胴部無文鴟尾
			B		●山陰型鴟尾
	⑪	大原廃寺		倉吉市大原	●山陰型鴟尾か。
	⑫	斎尾廃寺		東伯郡琴浦町槻下	★蓮華文帯鴟尾
	⑬	上淀廃寺	A・B・C	米子市淀江町福岡	●山陰型鴟尾
	⑭	大寺廃寺		西伯郡伯耆町大殿	▲胴部無文鴟尾（石製）



第２図　鴟尾の種類　（１：30）

第２表　山陰型（山陰系）鴟尾の分析

（単位：cm）

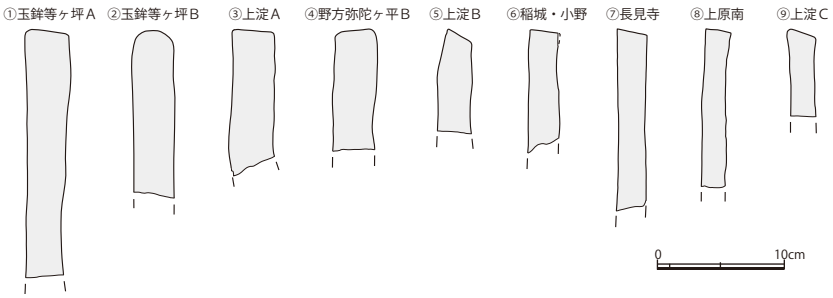
属性／遺跡名	突帯			器壁の厚さ		同心円文	鱗状沈線文				外面成形・調整				内面成形・調整				鰭部端部		底部	備考
	形状	高さ	幅	頂部	底部	最大径	条数	連続性	施文範囲	珠文	平行叩き	削り	ハケ目	ナデ	平行叩き	同心円文	削り	ナデ	平行叩き	布目	布目	
玉鉾等ヶ坪廃寺Ａ	a	1.2～1.9	3.0～3.8	3.0～3.5	4.7	7.0	2	連続	ア	○	○			○	○	○		○		○	○	半円形透し穴 半円形刳り形
玉鉾等ヶ坪廃寺Ｂ	a	1.2～1.6	3.0～3.8	3.2～3.5	－	7.0	2	連続	ア	○	○			○	○	○		○		○	○	半円形透し穴
大権寺遺跡	-	-	-	(3.2～3.4)	－	－	－	－	－	-	○					○						
吉岡大海廃寺	-	-	-	(2.5～2.8)	－	－	2	連続	－	-		○					○					
上原南遺跡	b	0.9～1.0	1.2～1.7	2.0	3.4～3.5	3.8～3.9	2か	-	－	－	○			○	○	○	○	○	○		○	半円形透し穴
岩井廃寺	a・b	1.1～1.3	2.3～2.4	(2.4～2.6)	－	6.9	-	－	－	－	○			○	○			○				
土師百井廃寺	－	－	－	(3.2～4.0)	－	7.0	2か	－	－	－	○			○		○		○				
野方弥陀ヶ平廃寺Ａ	－	－	－	(3.5)	－	－	2	連続	ア	×		○	○	○	○			○				焼成土師質
野方弥陀ヶ平廃寺Ｂ	a	1.7～2.2	3.3～4.0	3.2～3.3	4.1	7.2	2	連続	イ	○	○		○	○	○	○	○	○			○	半円形透し穴
大御堂廃寺Ｂ	a	1.8	(3.0)	(3.0～3.6)	－	6.5以上	2か	連続	－	－	○		○	○		○		○				編みワラ圧痕
大原廃寺	－	0.8以上	3.0	(3.2～3.4)	－	－	－	-	－	－				○				○				焼成瓦質
上淀廃寺Ａ	a	2.0	3.5～3.8	3.3～3.4	－	7.0	2	連続	イ	○	○		○	○	○	○		○				半円形透し穴 編みワラ圧痕
上淀廃寺Ｂ	a・b	1.2～1.3	1.3～1.6	2.7～2.8	3.2～3.6	6.4	2か	－	－	－	○		○	○	○	○		○			○	半円形透し穴
上淀廃寺Ｃ	b	0.8～1.1	1.1～1.4	2.0～2.1	(3.0)	4.0	1か	独立	－	○	○		○	○		○		○			○	
来美廃寺	a・b	1.4～1.8	3.0～3.8	(2.8～3.8)	4.4	6.5～7.0	2	連続	イ	○	○	○	○	○	○	○		○			○	半円形透し穴
寺の前遺跡	a	(1.8)	3.0	(3.1～3.2)	－	－	－	－	－	－						○						
出雲国府跡	b	1.0	1.3～1.4	(2.0～2.3)	－	－	－	－	－	－	○		○	○				○				
山津１号窯跡	b	0.9	0.7～1.1	(2.0)	－	－	－	－	－	－	○			○		○		○				
山津２号窯跡	b	0.7～1.0	1.0～1.4	(2.3～5.2)	－	－	1	独立	イ	○				○		○		○				
稲城・小野遺跡	c	0.8～1.0	2.0～2.3	2.0～2.5	－	3.8	－	－	－	－	○			○		○		○				
長見寺廃寺	b	0.6～1.0	1.0～1.4	2.3～2.4	－	4.0	2か	－	－	－	○			○	○	○			○			

※１突帯の形状：ａタイプ突帯はａ、ｂタイプ突帯はｂ、ｃタイプ突帯はｃと表記。
※２器壁の頂部の厚さ：鰭部の頂部から肩部辺りの計測値。その部位が欠損している場合は、胴部の厚さを（　）書きで表記。
※３鱗状沈線文：鱗状沈線文が連続するものを連続、連続しないものを独立と表記。その施文範囲が、「胴部途中から頂部まで」の施文をア、「頭部から頂部まで」の 施文をイと表記。

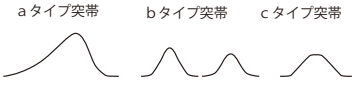
第３表　山陰型（山陰系）鴟尾の属性と分類

（単位：cm）

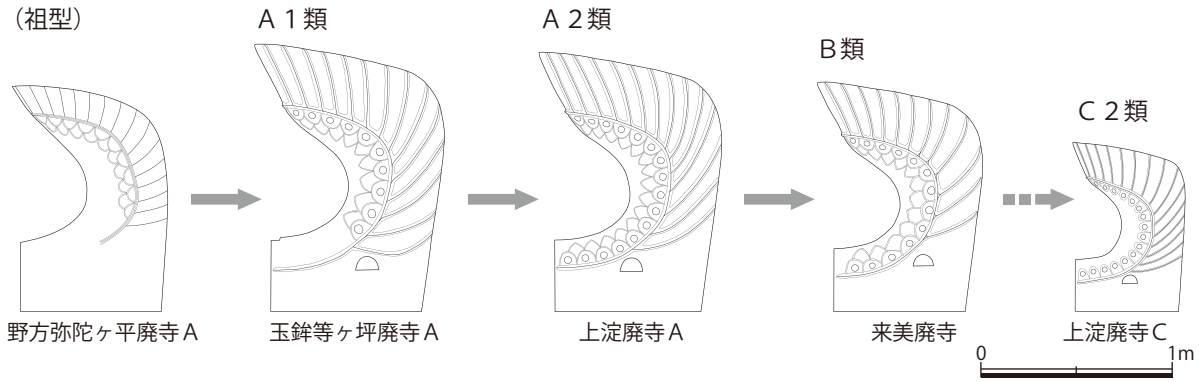
分類		遺跡名	突帯			器壁の厚さ	同心円文の最大径	鱗状沈線文		
			形状	高さ	幅			条数	連続性	施文範囲
A	1	玉鉾等ヶ坪廃寺 A	a	1.2～19	3.0～3.8	3.0～3.5	7.0	2	連続文	胴部途中～頂部まで
		玉鉾等ヶ坪廃寺 B		1.2～1.6	3.0～3.8	3.2～3.5	7.0	2	連続文	胴部途中～頂部まで
	2	上淀廃寺 A	a	2.0	3.5～3.8	3.3～3.4	7.0	2	連続文	頭部～頂部まで
		野方弥陀ヶ平廃寺 B		1.7～2.2	3.3～4.0	3.2～3.3	7.2	2	連続文	頭部～頂部まで
B		上淀廃寺 B	a・b	1.2～1.3	1.3～1.6	2.7～2.8	6.4	2？	連続文？	頭部～頂部まで？
		来美廃寺		1．4～1.8	3.0～3.8	(2.8～3.8)	6.5～7.0	2	連続文	頭部～頂部まで
C	1	上原南遺跡	b	0.9～1.0	1.2～1.7	2.0	3.8～3.9	2？	連続文？	頭部～頂部まで？
		長見寺廃寺		0.6～1.0	1.0～1.4	2.3～2.4	4.0	2？	連続文？	頭部～頂部まで？
	2	上淀廃寺 C	b	0.8～1.1	1.1～1.4	2.0～2.1	4.0	1？	独立文	頭部～頂部まで？
		山津２号窯跡		0.7～10	1.0～1.4	(2.3～5.2)	－	1	独立文	頭部～頂部まで
D		稲城・小野遺跡	c	0.8～1.0	2.0～2.3	2.0～2.5	3.8	－	－	－



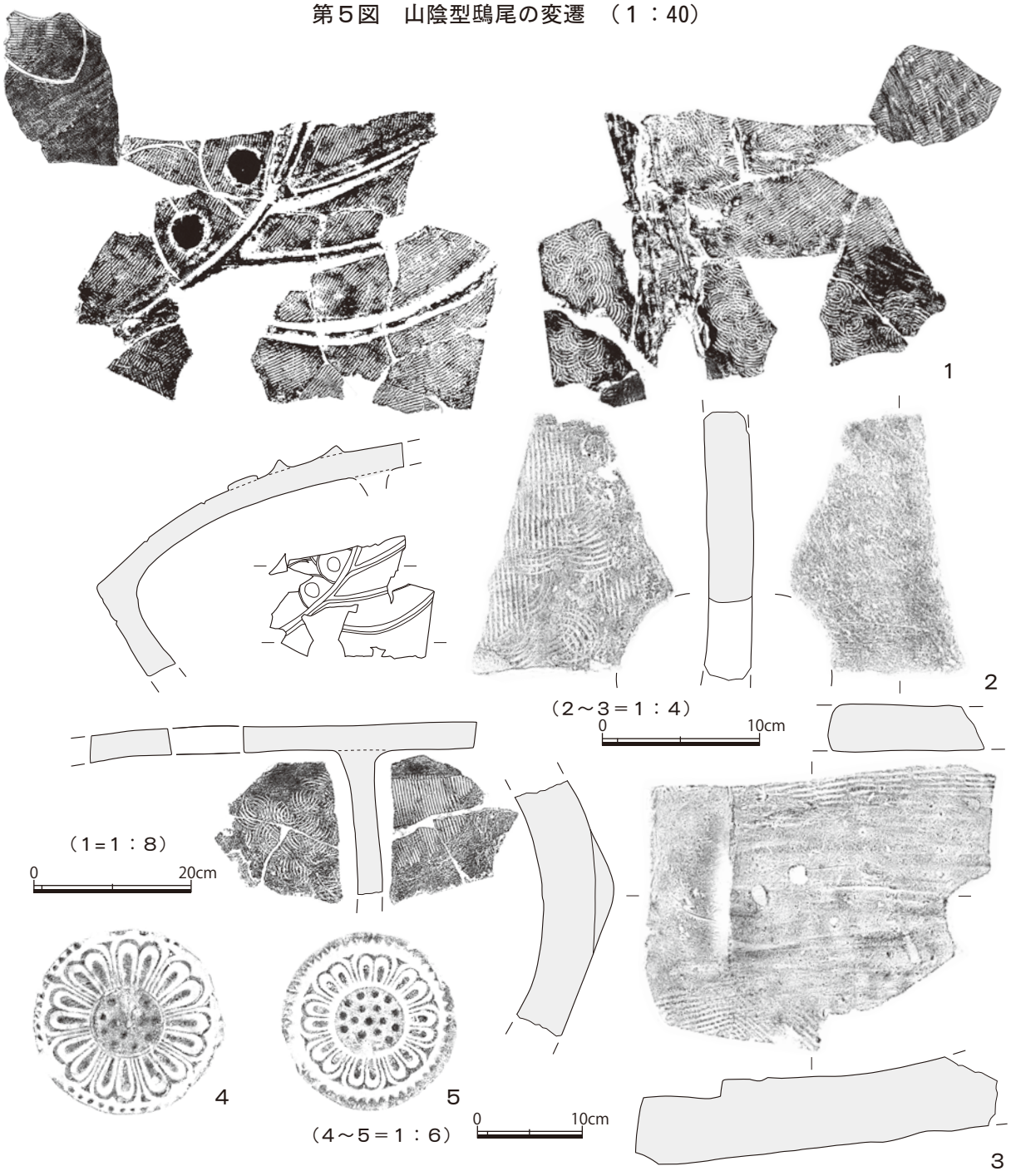
第３図　山陰型（山陰系）鴟尾の器壁の厚さ　（１：６）



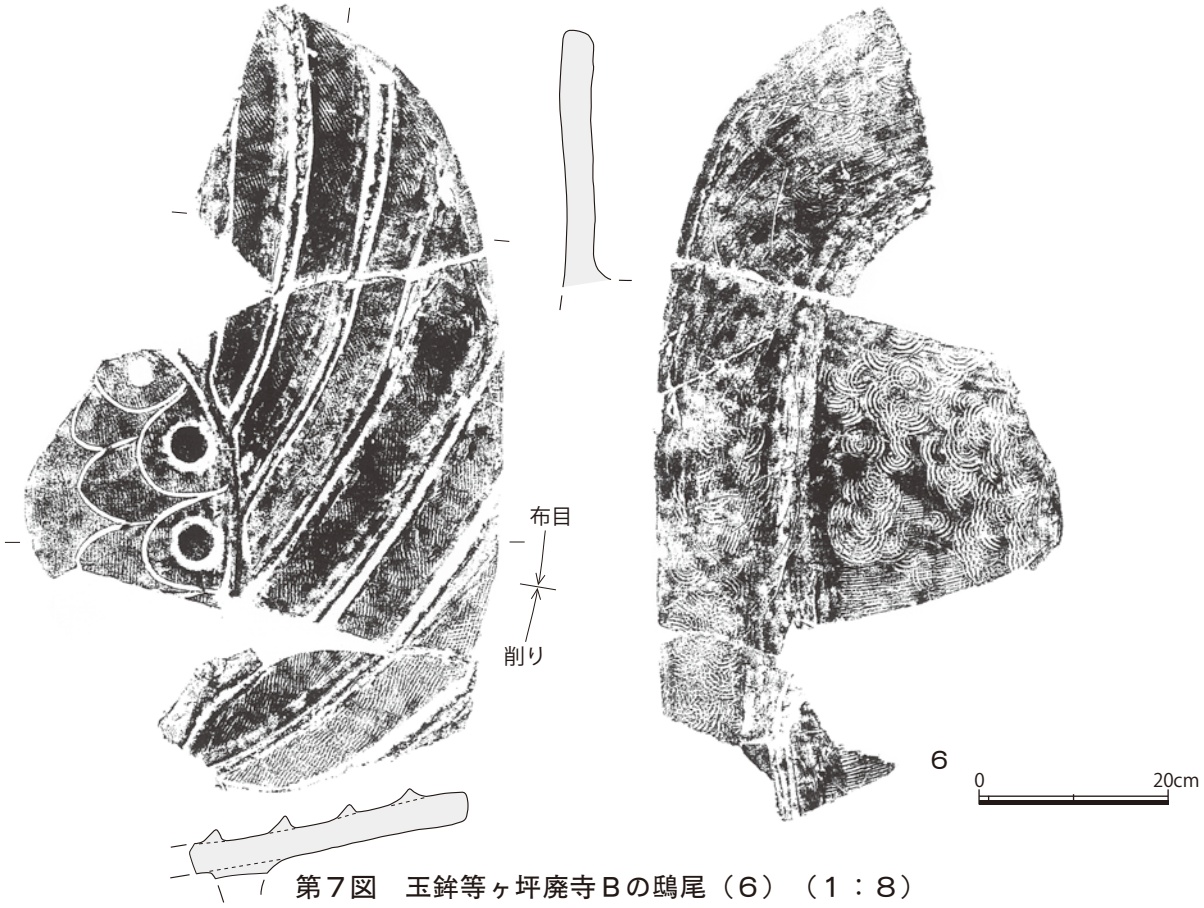
第４図　凸帯のタイプ



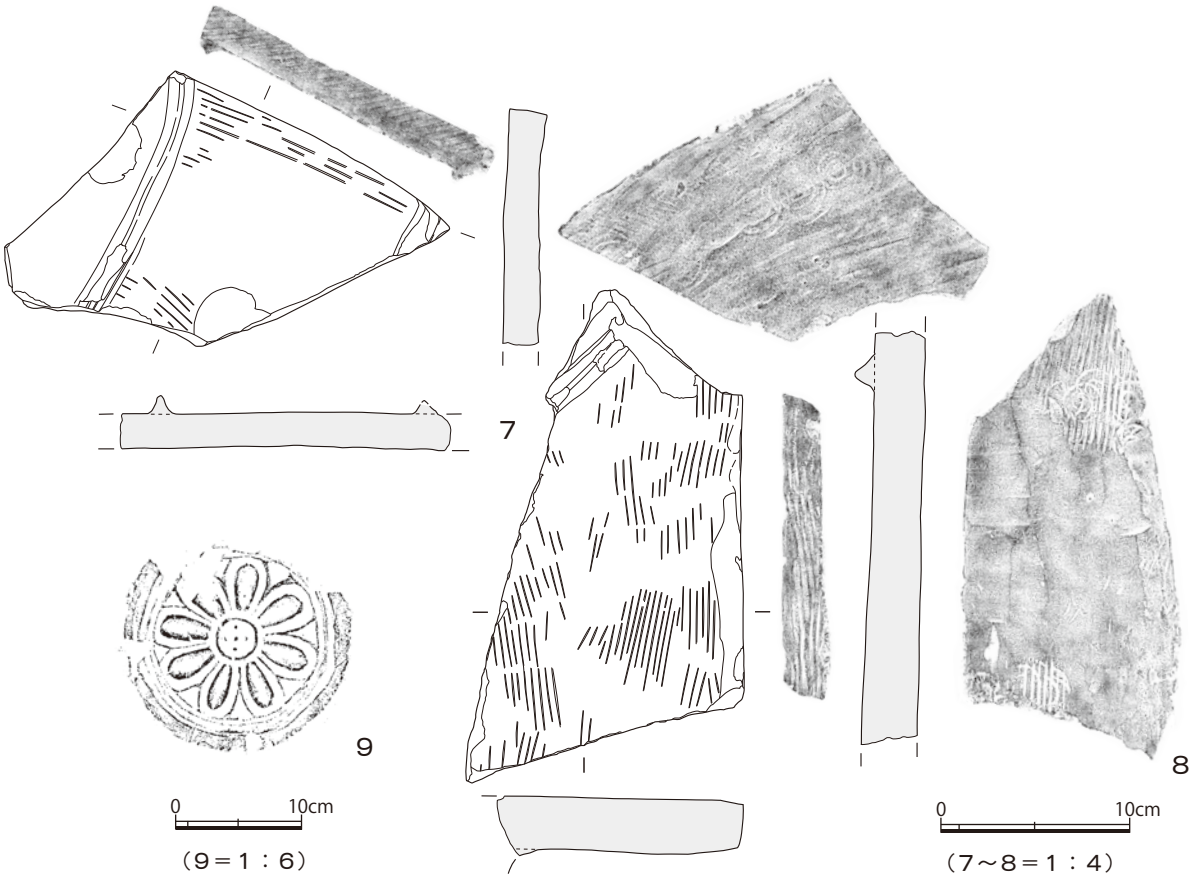
第５図　山陰型鴟尾の変遷　（１：40）



第６図　玉鉾等ヶ坪廃寺Ａの鴟尾（１～３）と軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ類（４・５）

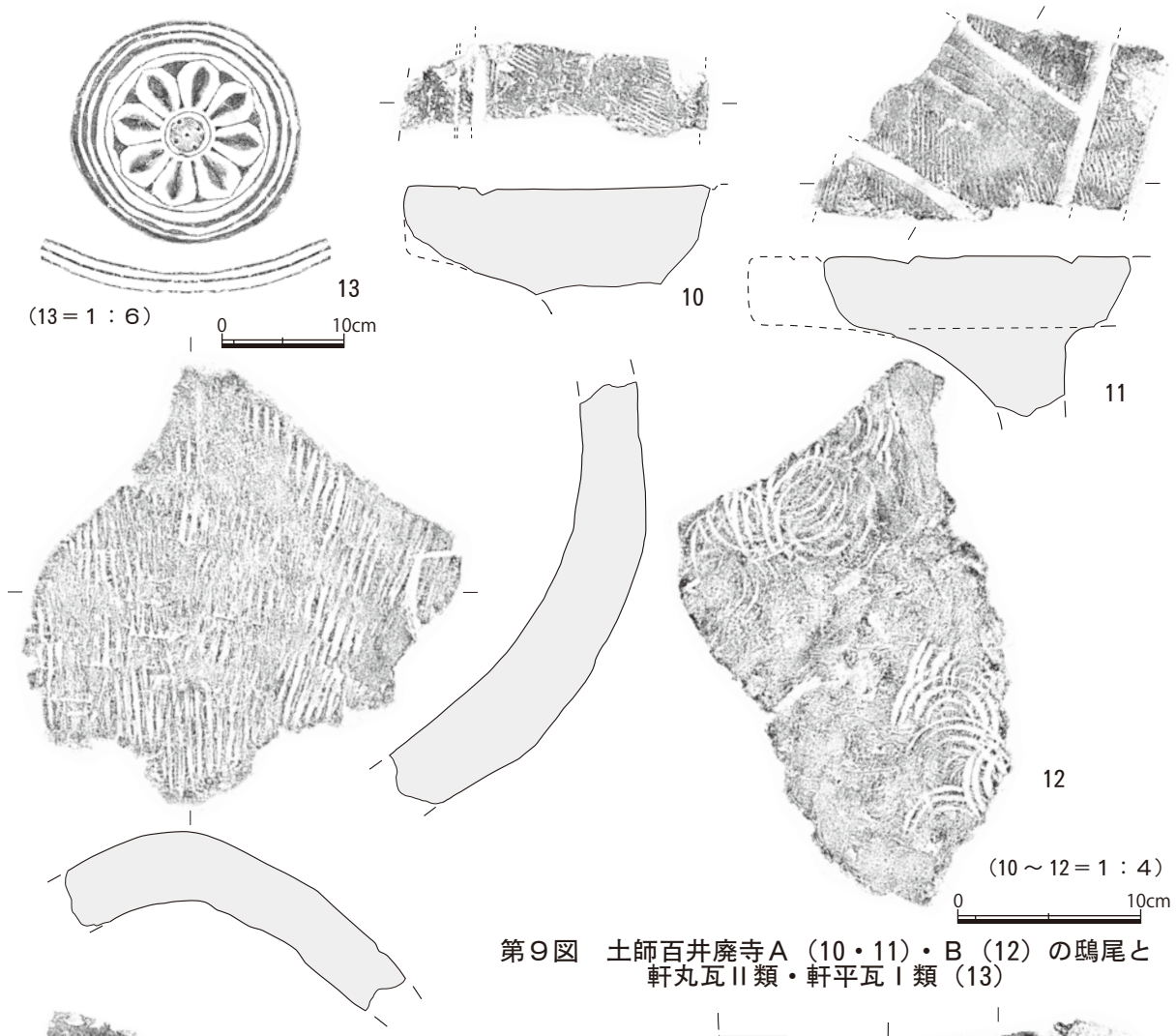


第７図　玉鉾等ヶ坪廃寺Ｂの鴟尾（６）（１：８）

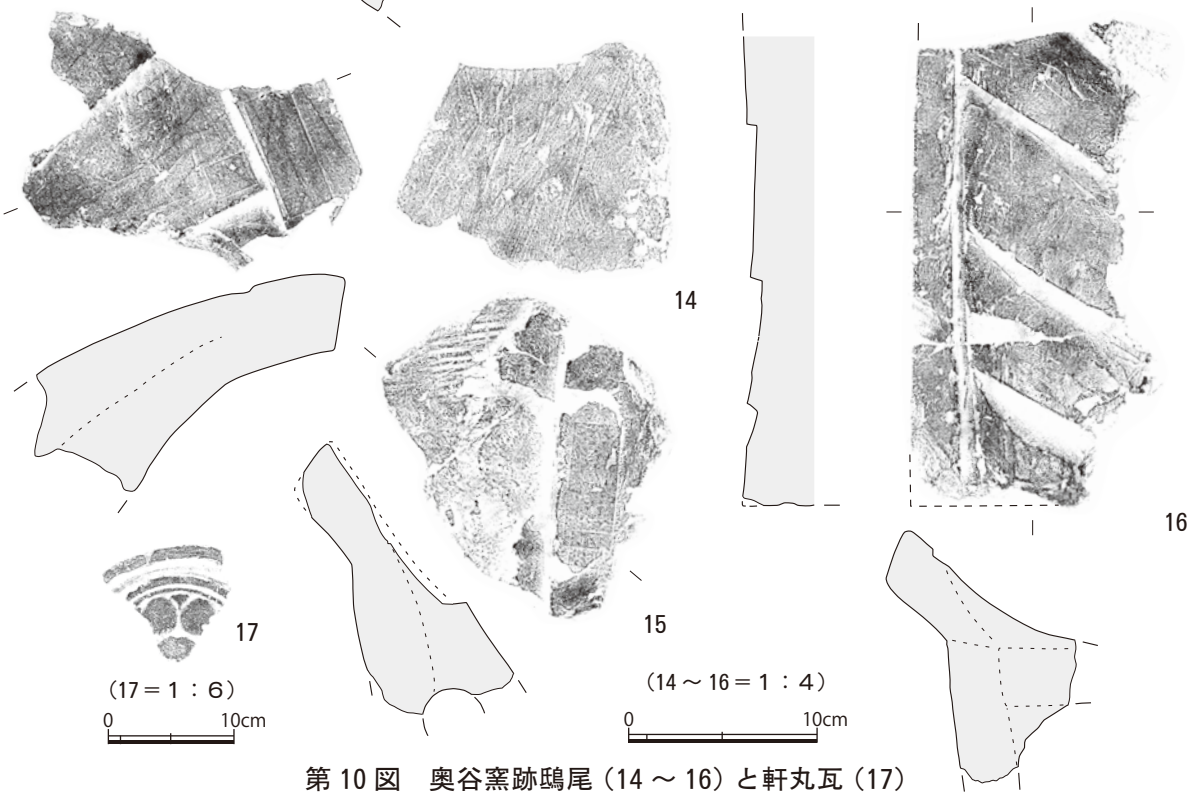


（９＝１：６）　（７～８＝１：４）

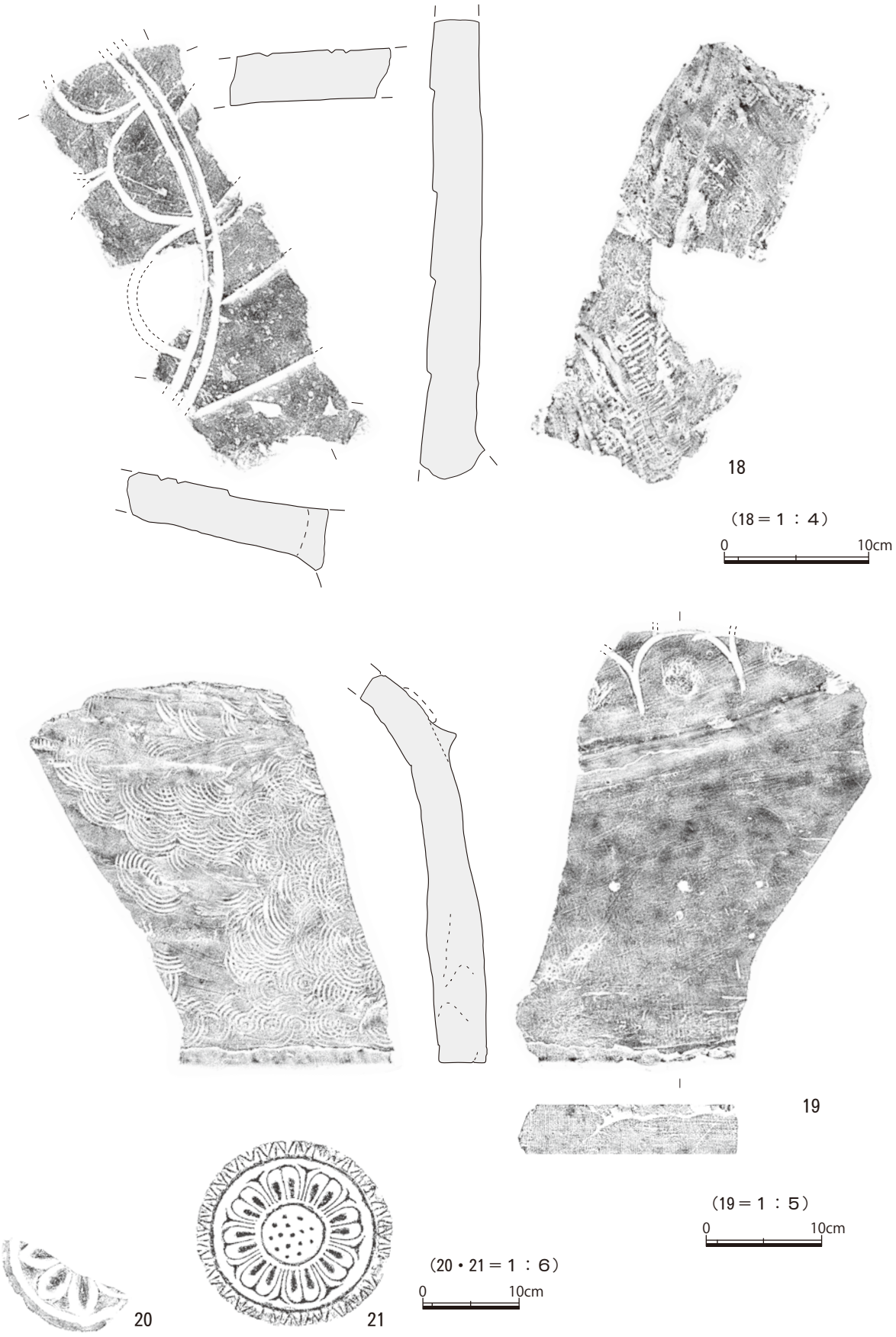
第８図　上原南遺跡鴟尾（７・８）と軒丸瓦ⅠＣ型式（９）



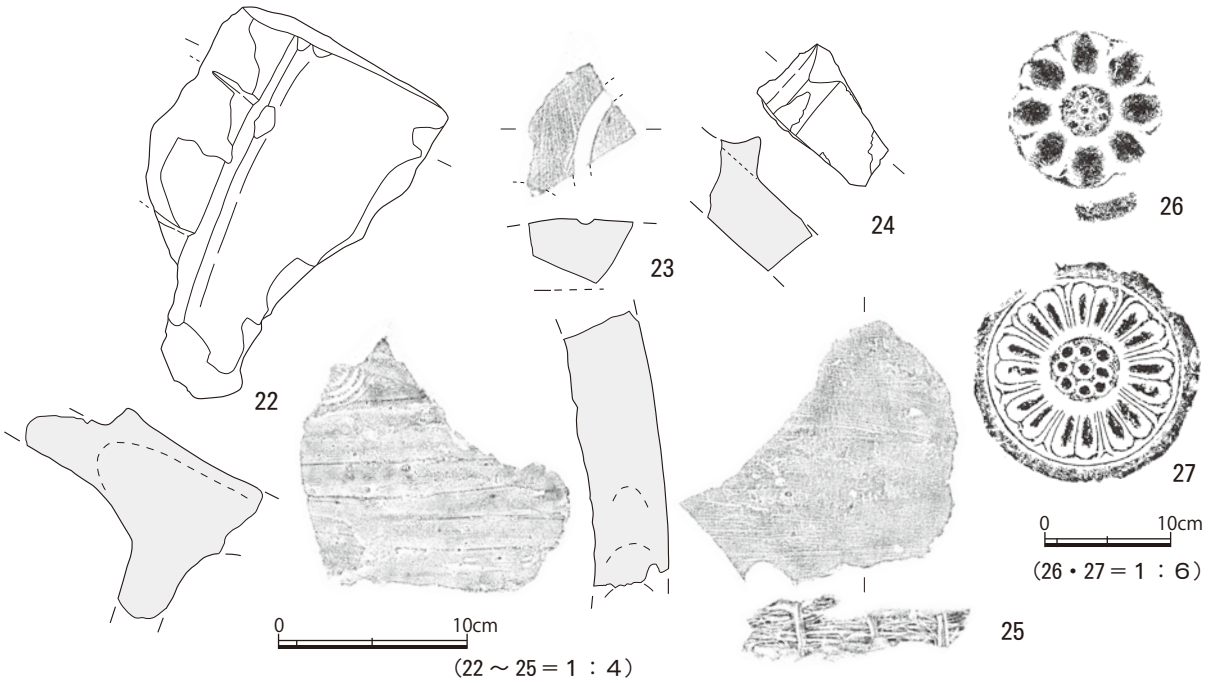
第９図　土師百井廃寺Ａ（10・11）・Ｂ（12）の鴟尾と
軒丸瓦Ⅱ類・軒平瓦Ⅰ類（13）



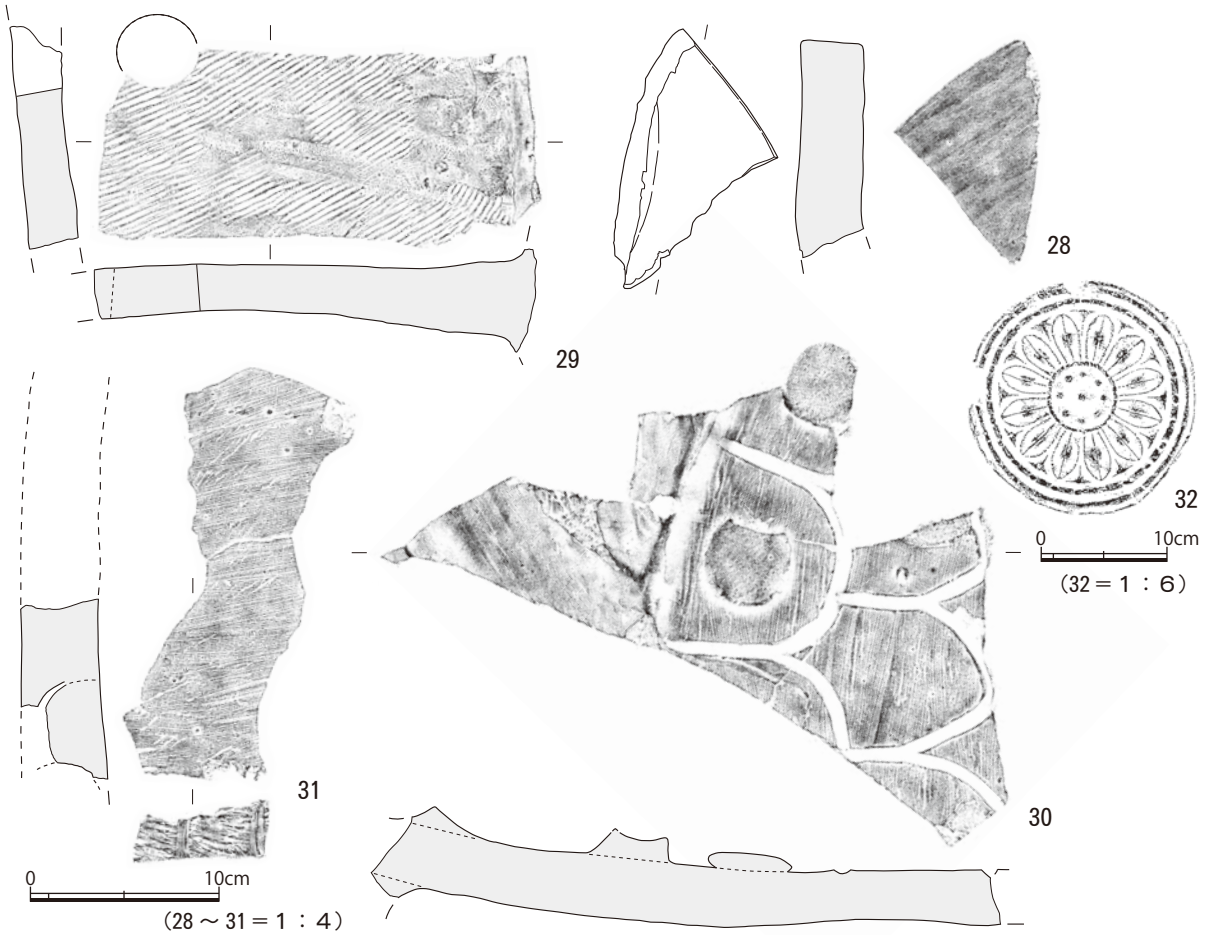
第 10 図　奥谷窯跡鴟尾（14 ～ 16）と軒丸瓦（17）



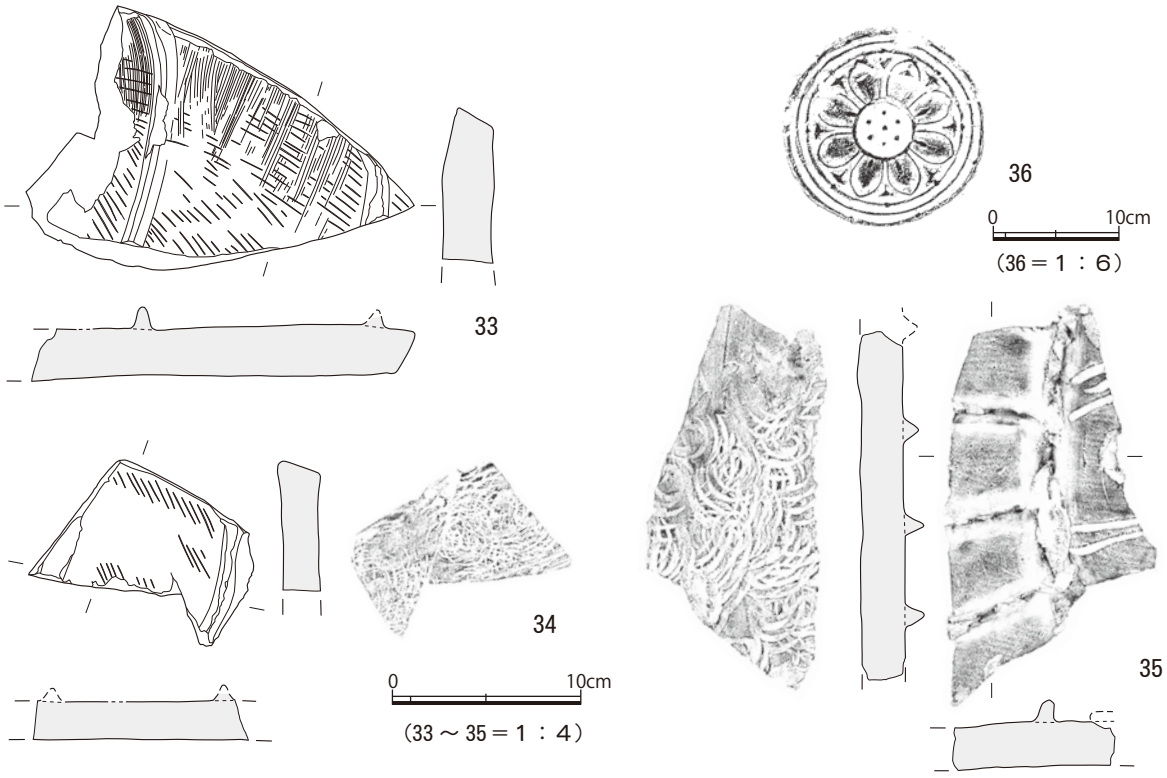
第 11 図　野方弥陀ヶ平廃寺Ａ（18）・Ｂ（19）の鴟尾と軒丸瓦Ⅰ類（20）・Ⅱ類（21）



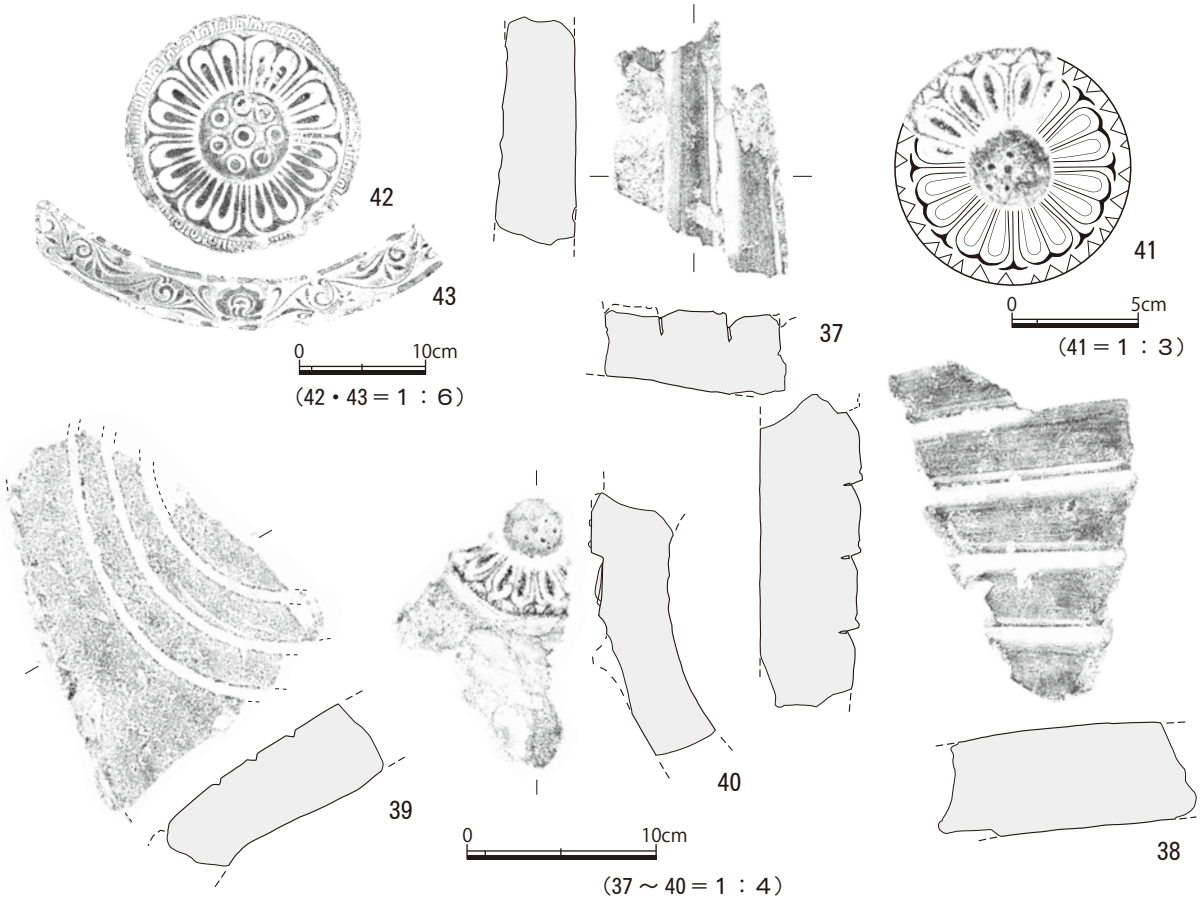
第 12 図　大御堂廃寺Ａ（22）・Ｂ（23 ～ 25）の鴟尾と軒丸瓦Ⅰ類（26）・Ⅱ類ａ（27）



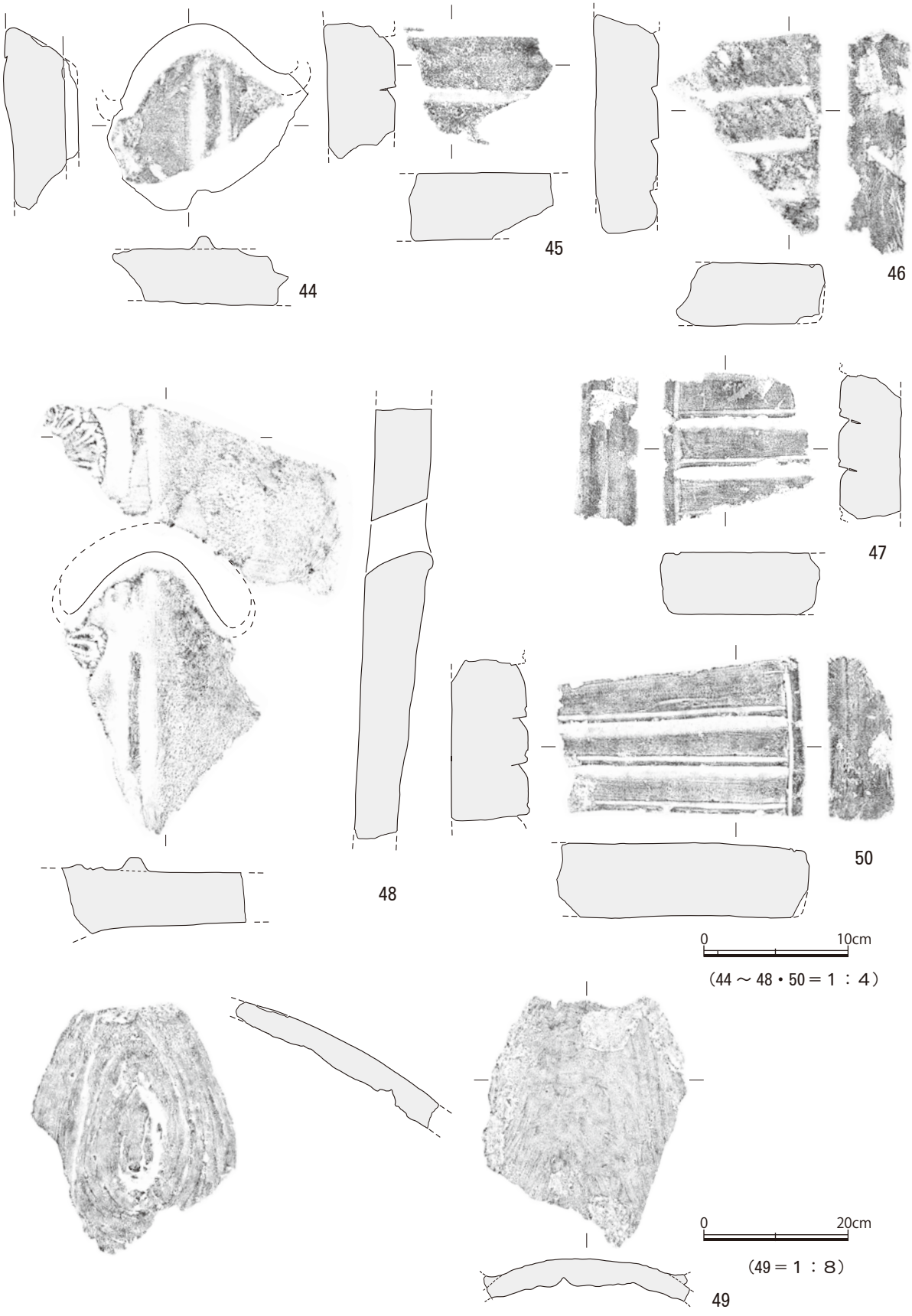
第 13 図　上淀廃寺Ａ（28 ～ 31）の鴟尾と軒丸瓦Ⅰ類（32）



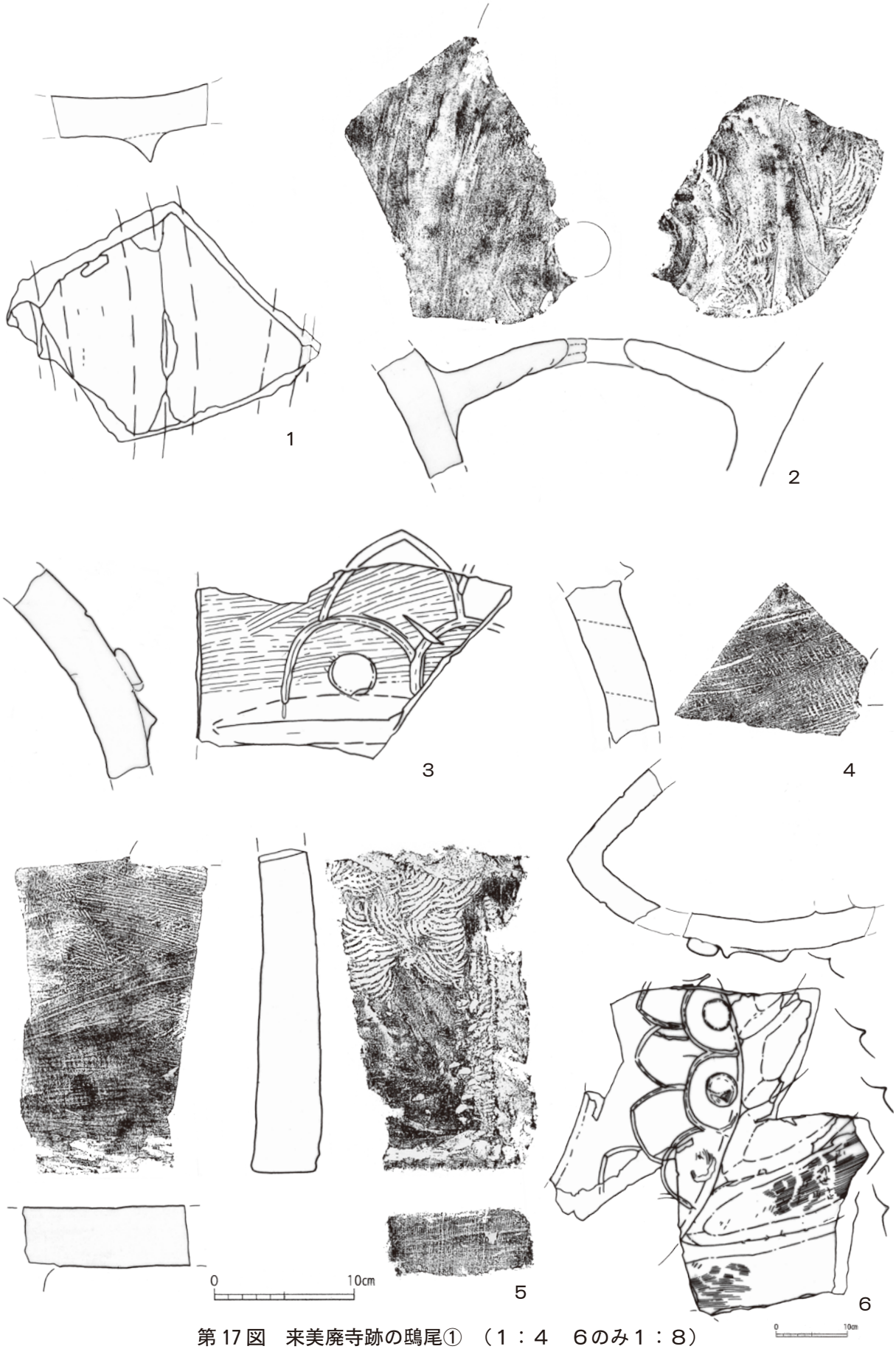
第 14 図　上淀廃寺Ｂ（33）・Ｃ（34・35）の鴟尾と軒丸瓦Ⅱ類（36）



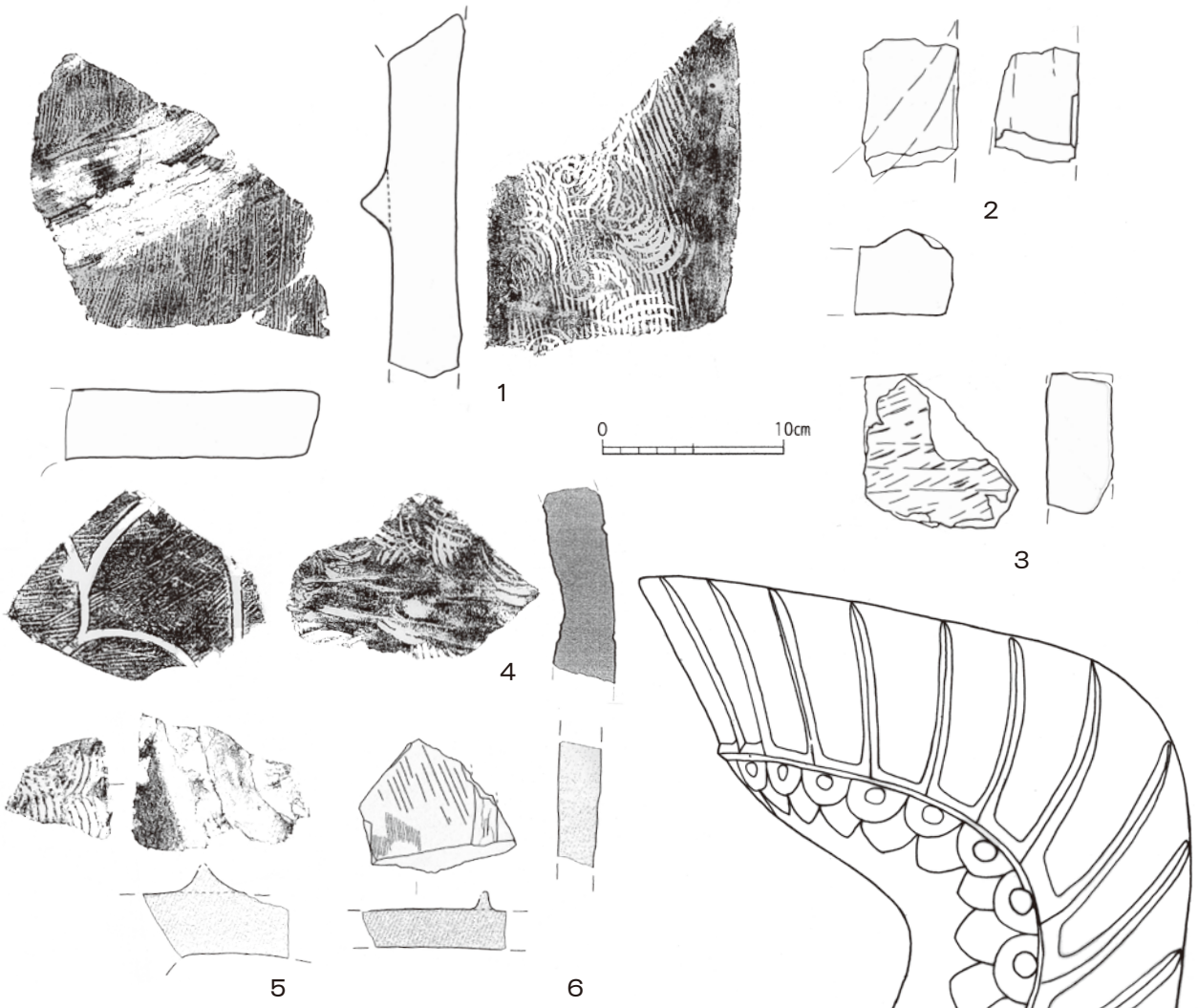
第 15 図　斎尾廃寺の鴟尾（37 ～ 40）と蓮華文復元模式図（41）及び軒丸瓦Ⅰ類（42）・軒平瓦Ⅰ類（43）



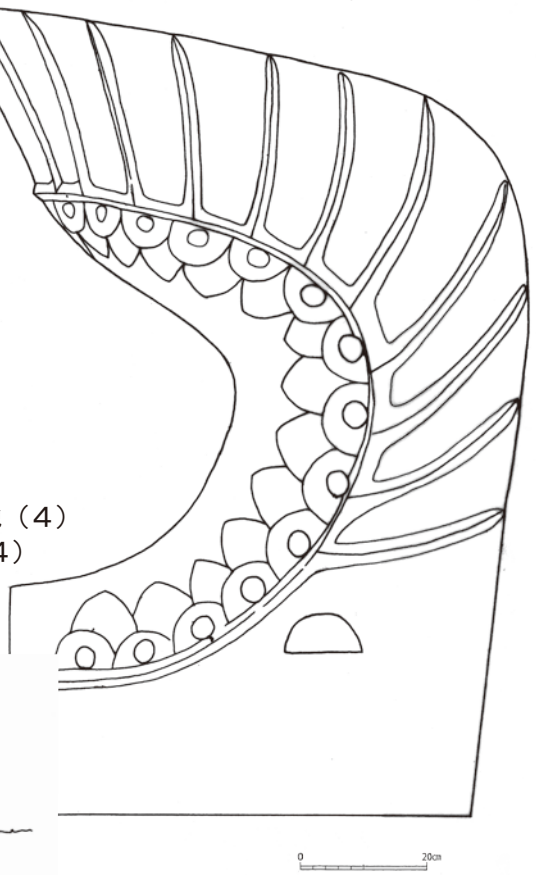
第 16 図　斎尾廃寺の鴟尾（44 ～ 50）



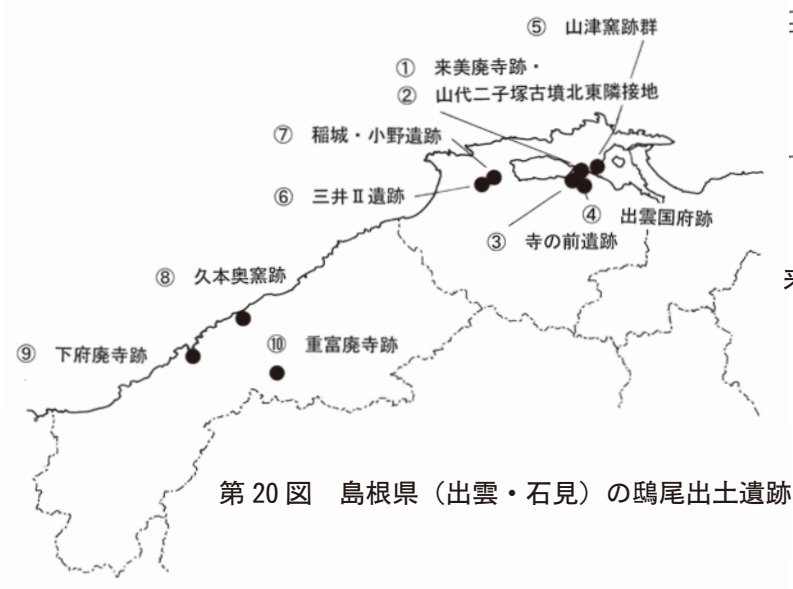
第 17 図　来美廃寺跡の鴟尾①　（１：４　６のみ１：８）



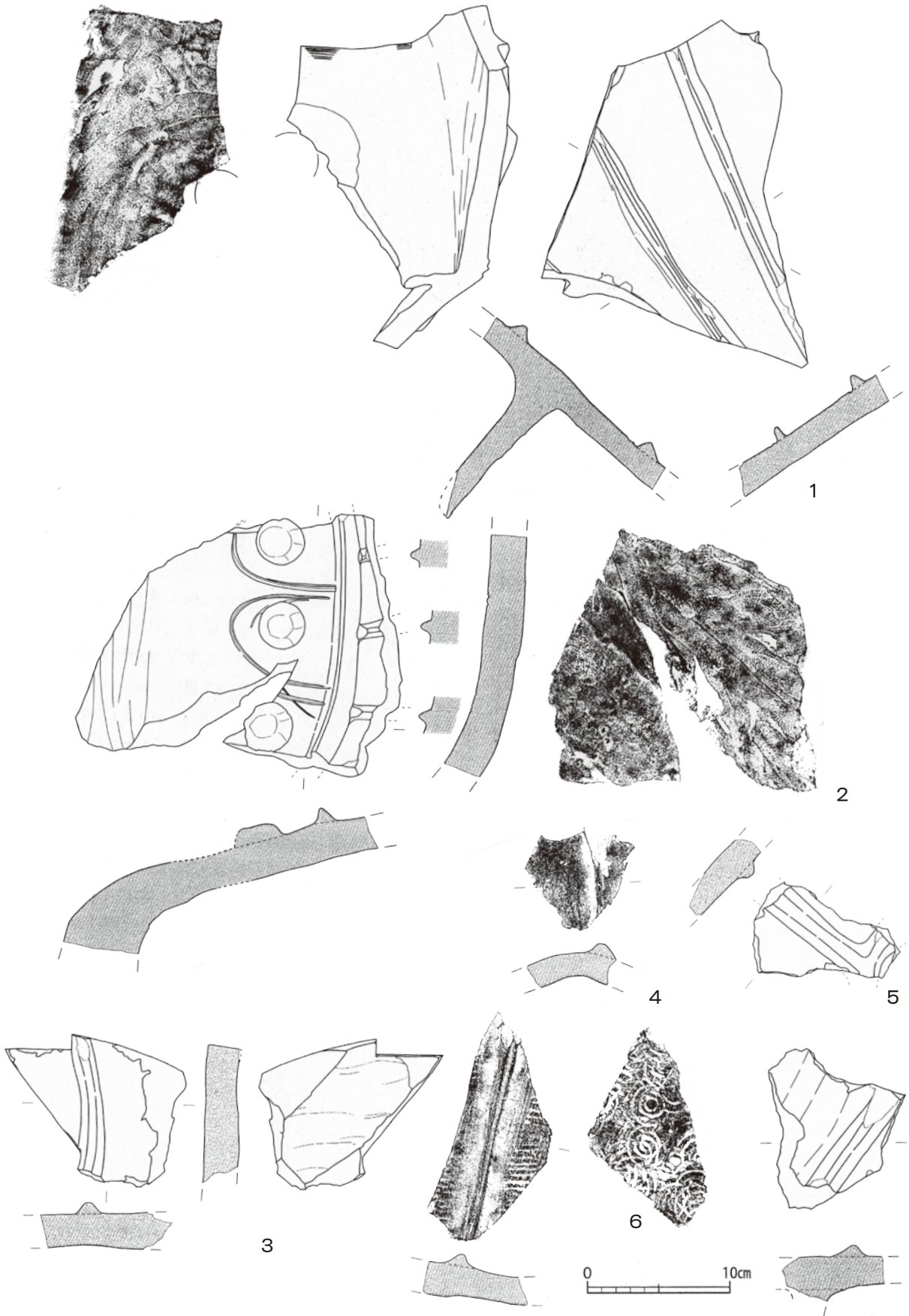
第 18 図
来美廃寺跡の鴟尾②（１～３）および山代二子塚北東隣接地（４）
・寺の前遺跡（５）と出雲国府跡（６）の鴟尾　（１：４）



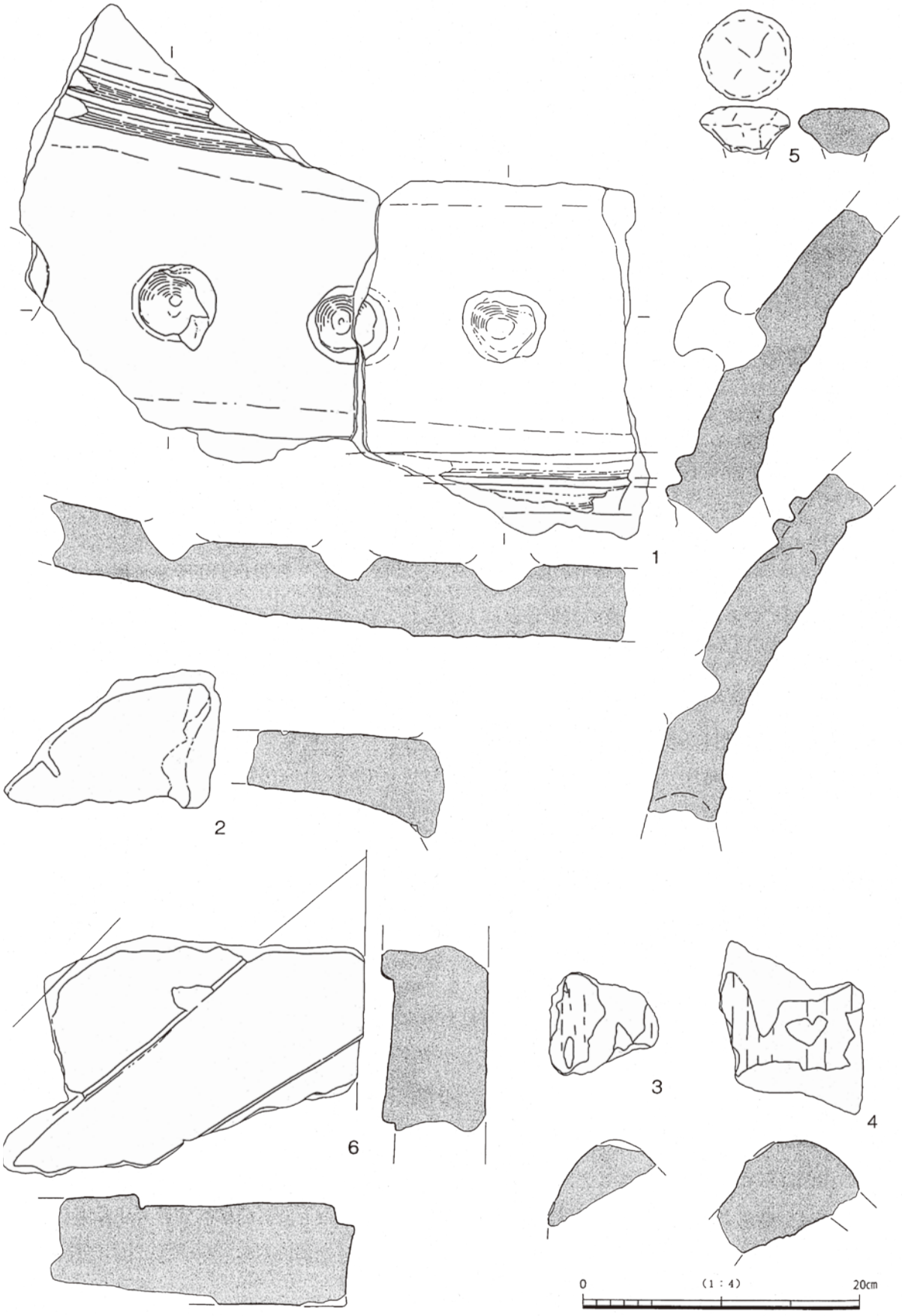
第 19 図
来美廃寺跡の鴟尾復元図　（１：12）



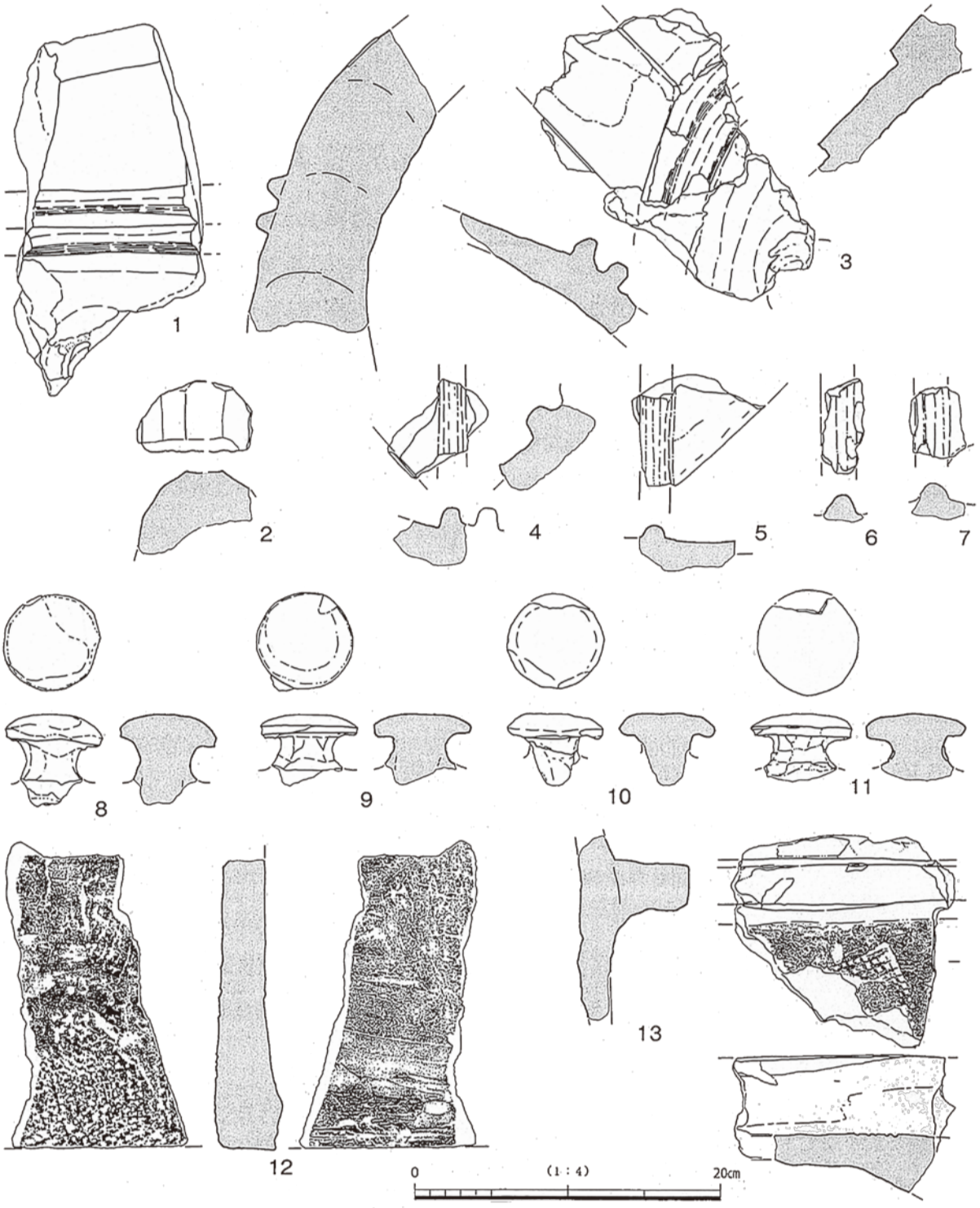
第 20 図　島根県（出雲・石見）の鴟尾出土遺跡



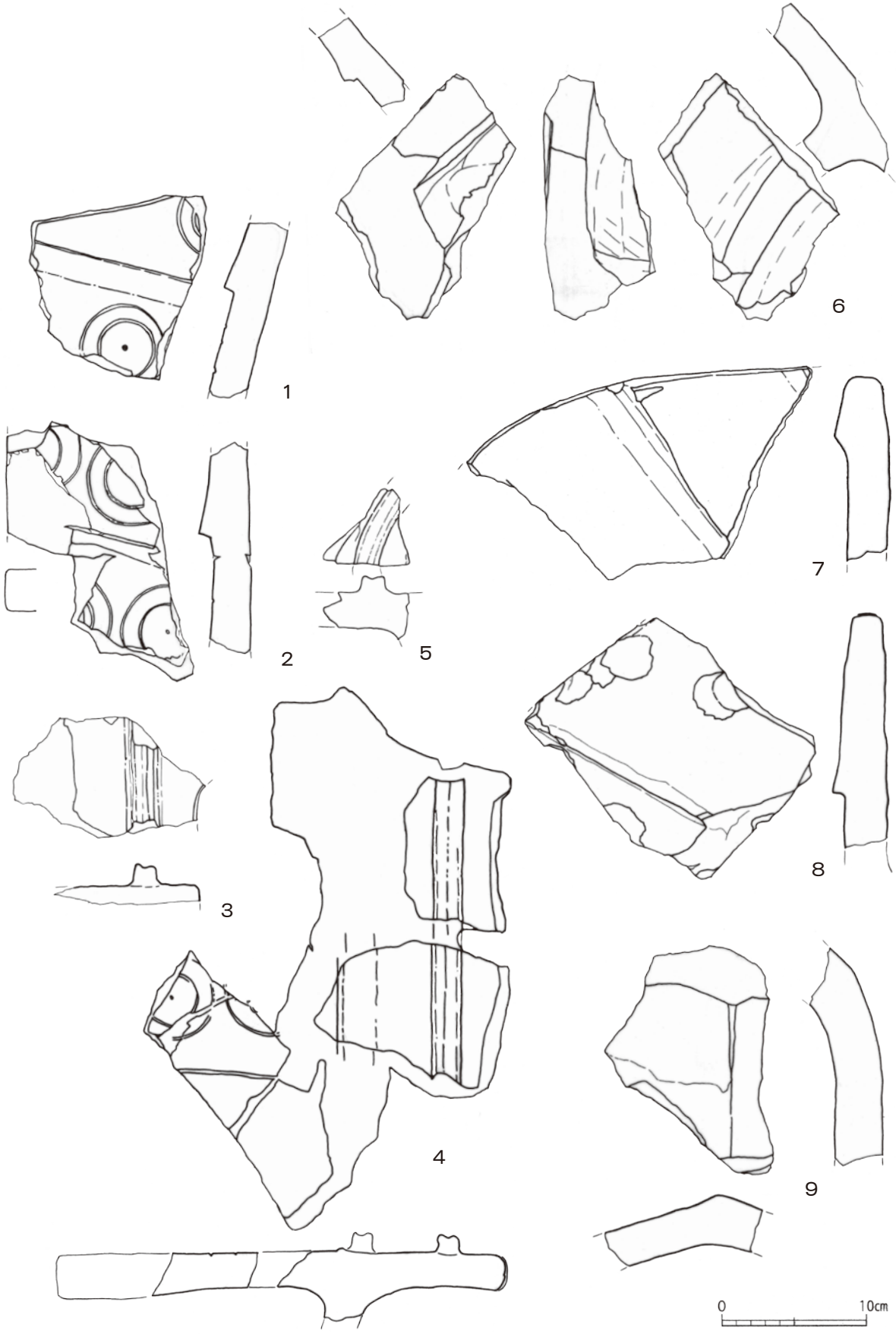
第 21 図　山津窯跡群の鴟尾（１：１号窯，２：２号窯）
および稲城・小野遺跡の鴟尾（３～７）（１：４）



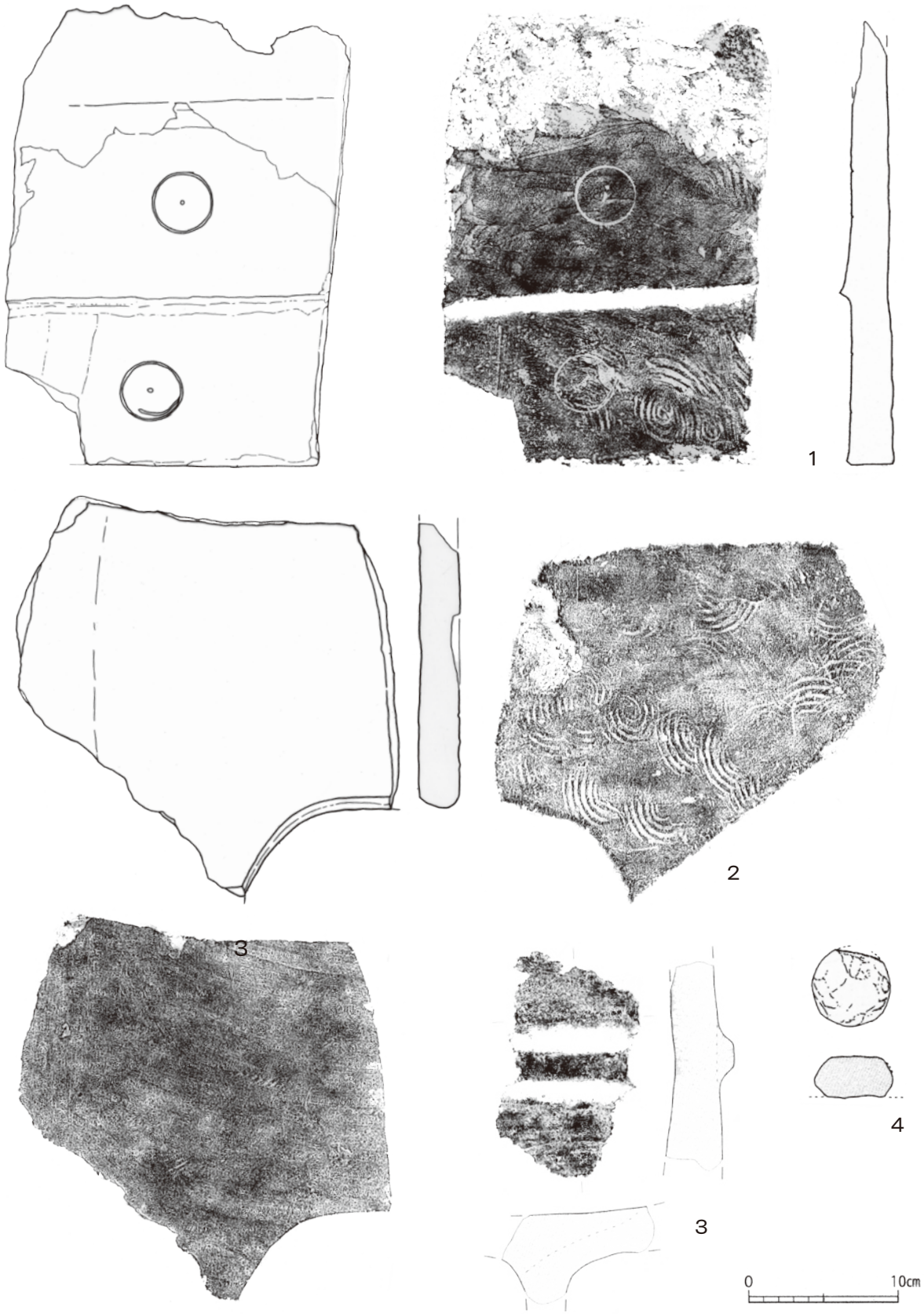
第 22 図　三井Ⅱ遺跡の鴟尾①　（１：４）



第 23 図　三井Ⅱ遺跡の鴟尾②　（１：４）



第 24 図　久本奥窯跡の鴟尾①（１：４）



第 25 図　久本奥窯跡の鴟尾②（１・２）および下府廃寺跡（３）と
重富廃寺跡（４）の鴟尾（１：４）

8　九州地方の鴟尾

比嘉　えりか

A　はじめに

九州における瓦生産は6世紀末から7世紀初頭頃に始まり、その技術は朝鮮半島や畿内からの影響を受けつつ、独自に発展してきた。それは、鴟尾についても同様であろう。ただし、九州島内での鴟尾の出土事例は管見の及ぶ範囲で確認したところ11例と少なく、かつ破片資料が大部分であること、さらに所属時期の特定が困難であることなど、検討には多くの障壁がある。

今回は、九州から出土する鴟尾について、破片資料から分かる製作技法の特徴や、共伴瓦の様相を検討することにより、九州における鴟尾の受容と展開について考えてみたい。

B　九州出土の鴟尾

i　筑前

那珂遺跡群（福岡県福岡市、第2図）　福岡平野の北部、御笠川と那珂川に挟まれた沖積丘陵北端部に位置する。北側に接する比恵遺跡群は、6世紀後半の大型倉庫群とそれを囲む特殊な3本柱柵列が確認され、宣化天皇元年（536）に設置された「那津官家」の推定地とされている。那珂遺跡群でも総柱建物群や区画溝などが確認されており、那津官家に関連する施設と推測される。那珂遺跡群において特に注目されるのは、初期瓦の存在である。初期瓦は6世紀末から7世紀初頭頃に出現し、7世紀中頃まで断続的に存在が認められる。初期瓦は大野城市牛頸窯跡群で生産されたことが分かっており、後述する月ノ浦Ⅰ号窯跡出土軒丸瓦の同笵品（第2図3）も出土している。

鴟尾は、34次調査で2点のみ出土している。いずれも鰭部の破片で、内外両面に正段で表現される。所属時期について、報告者は「時期を限定しがたいが、7世紀後半から8世紀前半におさまるもの」としている（福岡市教育委員会編1994）。

ウトグチ瓦窯跡（福岡県春日市、第3・4図）　福岡平野背後の牛頸山系から派生する春日丘陵の西端、標高45m前後の小丘陵の西側斜面に位置する。この地域では古くから瓦が採集されており、「白水廃寺」の存在が想定されているが、関連する遺構は確認されていない。発掘調査により2基の窯跡が確認され、複弁8葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦、複弁8葉蓮華文の鬼板などが出土した。また、平瓦には、内面に同心円当て具痕を残すものもある。操業時期は、7世紀中頃と考えられる。軒丸瓦と鬼板は、その文様構成から「山

田寺系」と位置づけられており、畿内系の工人集団の指導のもと、在地の須恵器工人を動員して瓦生産が行われたと推測される。

鴟尾は、46点出土した。比較的大きな破片もある。太めの粘土紐を使用して基底部から積み上げ、ヘラケズリないしナデ調整で仕上げている。文様構成から、２つの型式に分けられる。Ａ型式は、鰭部を内外両面ともに正段型で構成し、縦帯をもたない。胴部は漸次的に正段型から段もしくは沈線による羽根形文様に変わり、頂部にいたる。脊稜の羽根形文様は、単弁状の子葉を表現する。Ｂ型式は、Ａ型式と同様に鰭部に正段型が内外両面に表現される。胴部も同じく幅広い正段型で表現され、段の線はわずかに上反りの曲線状に表現される。一部の個体には、成形のための平行叩きが残る。この有段鴟尾について報告者は、奈良県和田廃寺Ｂ例に類似し、軒丸瓦・鬼板と同様に畿内からの影響を受けた所産であるとしている（春日市教育委員会編 2004）。その他、胴部の弧型透し穴の破片（第３図３）も確認されるが、Ａ・Ｂどちらの型式に属するかは不明である。

牛頸月ノ浦窯跡群（福岡県大野城市、第５・６図）　牛頸山を中心に広がる九州最大規模を誇る牛頸窯跡群内に位置する。牛頸窯跡群は基本的に須恵器専業窯が多数を占めるが、一部に瓦陶兼業窯がみとめられる。瓦生産は、６世紀末から７世紀初頭とされる太宰府市神ノ前窯跡に始まり、７世紀中頃まで存続し、那珂遺跡群に供給している。月ノ浦Ⅰ号窯跡からは、窯跡群内唯一の軒丸瓦が２種類出土し、いずれも陰陽反転した素弁蓮華文軒丸瓦である。操業時期は、７世紀前半とされる。

鴟尾は、破片資料が多数出土した。鰭と腹部の開き方から見て、大型のものと考えられるが、全体像の復元にはいたっていない。鰭部は内外両面に正段型で表現される。縦帯はみとめられない。腹部にも文様が施される。

大宰府政庁跡（福岡県太宰府市、第７図）　大宰府は、古代律令体制における西海道諸国に対する内政総管の府、かつ外交・交易の拠点である。造営が開始された政庁第Ⅰ期（７世紀後半～）には、素弁軒丸瓦が数種類確認できるが、瓦葺きの建物はごく一部に限られていたと考えられる。大宰府が本格的に整備された第Ⅱ期（８世紀第１四半期後半～）には、瓦葺きの建物が主体となり、中央からの影響を大きく受けた造瓦が開始され、補修瓦も断続的に製作された。天慶４年（941）の藤原純友の乱で焼失したのち再建された政庁第Ⅲ期の建物群は、板葺きが中心であったと考えられる。大宰府政庁跡からは、７世紀後半から11世紀までにいたる軒丸瓦・軒平瓦各30～40型式が出土しているが、最も多く出土したセットは、第Ⅱ期の造営瓦である鴻臚館式軒瓦（大宰府史跡出土軒瓦型式・235型式－635型式のセット）である。棟端には鬼面文鬼瓦が使用され、観世音寺創建瓦である老司式軒瓦、鴻臚館式、鬼面文鬼瓦で構成されるいわゆる「大宰府系」瓦は、西海道諸国に広く伝播し、大宰府の影響力を示している。

鴟尾は、政庁域から６点、西側の蔵司地区から１点が出土しているが、いずれも破片資料である。大きく２種類に分けられ、Ａ類（第７図１・２）は鰭部が正段、縦帯が２条の

凸帯文で飾られ、縦帯外側の凸帯に重ねて型押しの連珠文が見られる。Ｂ類（第７図３～７）は、鰭部が正段で、縦帯が大粒の手びねりで作られた連珠文とその内側に１条の凸帯文を飾る。Ｂ類は､藤原純友の乱の兵火によって生じた焼土層から出土していることから、10 世紀中頃に取り片づけられたものと考えられている。Ａ類は、作りが丁寧で、胎土や焼成が老司式軒瓦に類似することから、政庁第Ⅱ期の所産と推測される（九州歴史資料館 2002)。

ⅱ　豊前

椿市廃寺（福岡県行橋市、第８・９図）　京都平野の北西、標高 20 ～ 25 ｍの扇状地に位置し、四天王寺式の伽藍配置を持つ寺院跡である。７世紀末から９世紀頃まで存続したと考えられる。百済・新羅・高句麗系といった朝鮮半島系の各種の軒丸瓦が出土しているほか、平城宮 6248 Ｆの同笵瓦が出土した。創建瓦は､「百済系単弁」軒丸瓦と重弧文軒平瓦と考えられ、竹状模骨丸瓦を伴う。

鴟尾は、破片で 30 点ほど出土している。色調や焼成などから少なくとも４個体の存在が想定される。鰭部外面には沈線で羽根形文様が表現され､内部が平坦なもの（第８図７）と、中央に鎬を持つもの（第８図５）がある。端部は、羽根形に縁取りする。頭部は内側に折り曲げられる。縦帯は、１条の沈線で施すもの（第８図１）と、段で胴部と鰭部を画すもの（第８図８）がある。白鳳期の所産と考えられる。

上坂廃寺（福岡県みやこ町、第 10 図）　豊前国分寺にほど近い、祓川中流域左岸の沖積地に位置する。７世紀末から９世紀前半まで存続したと考えられている。出土遺物は、百済系・老司系軒丸瓦、重弧文と老司系軒平瓦などが出土している。創建瓦は､「百済系単弁」軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセットである。

鴟尾は、４点の小片が確認され、鰭部の端部が残るものが１点ある。鰭は正段で表現され、その表現方法は後述する船迫堂がへり窯跡出土鴟尾と酷似する。白鳳期の所産と考えられる。

船迫堂がへり窯跡（福岡県築城町、第 11 図）　城井川西岸丘陵の北部、豊前国分寺の南東約３km に位置し、須恵器や瓦を生産した。生産された瓦は、上坂廃寺及び豊前国分寺所用瓦であると考えられる。平成７･９年度の発掘調査では、４基の地下式登窯が確認され、そのうち豊前国分寺所用瓦を生産した１・２号窯跡から鴟尾が出土している。その他、百済系・鴻臚館系軒丸瓦、法隆寺系忍冬唐草文軒平瓦、大宰府系鬼瓦が出土している。

鴟尾は、小型の百済系単弁４葉蓮華文をスタンプで施文した蓮華文帯や、扁行唐草文を線刻する唐草文帯など多彩な文様を持つ破片がみとめられるが、大脇潔氏により同一個体として復元されている。頭部側から唐草文帯、２条の羽根状文様（第 11 図２)、蓮華文帯と続き、胴部に大きな唐草文様（第 11 図８)、さらに蓮華文の縦帯を施し、鰭部には正段型の羽根状文様を２条めぐらす（第 11 図１)。鰭の端部は、羽根形に縁取りする。また、

腹部（第 11 図３）にも蓮華文のスタンプを押捺する。前述のように、上坂廃寺出土例と同タイプとみられ、上坂廃寺出土の「百済系単弁」軒丸瓦の同笵瓦が生産されていることからも、この窯から上坂廃寺に供給された可能性が高い。蓮華文や唐草文の様式からみて、白鳳期の所産であると考えられる。

伊藤田ホヤ池窯跡（大分県中津市、第 12 図）　中津市南東部に展開する伊藤田窯跡群の一つで、相原廃寺所用瓦の生産窯として知られてきた。溜池の岸壁の分布調査により、谷部の両斜面に向かい合う形で８基の窯跡の存在が確認されている。瓦陶兼業窯であり、７世紀初頭に操業を開始し、７世紀末に最盛期をむかえ、８世紀初頭頃まで存続したと考えられる。遺物は、「百済系単弁」軒丸瓦、重弧文軒平瓦が出土している。

鴟尾は、鰭部を残す破片が確認されている。鰭は正段で、縦帯は凸帯文で表現される。

ⅲ　肥後

立願寺廃寺（熊本県玉名市、第 13 図）　菊池川の下流、玉名平野の西側台地上にある立願寺廃寺は、複数の礎石や瓦の分布状況から古くから寺院の存在が推定されてきた。出土瓦は、外縁に線鋸歯文をめぐらす複弁８葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦のセットが創建瓦と考えられ、白鳳期から奈良時代まで存続した寺院と推測される。

鴟尾が出土しているが、詳細は不明である。

渡鹿廃寺（熊本県熊本市、第 14 図）　白川左岸の渡鹿台地にある寺院跡で、付近には託麻郡衙推定地とされる渡鹿Ａ遺跡がある。渡鹿Ａ遺跡からは、高い中房内に十字形の蓮子を持つ単弁８葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、白鳳期の所産と位置付けられる。渡鹿廃寺からは、鴻臚館式と老司式が融合したような凸鋸歯文を持つ複弁８葉蓮華文軒丸瓦と、鴻臚館系の均整唐草文軒平瓦、大宰府系の鬼面文鬼瓦が確認されている。渡鹿Ａ遺跡については、渡鹿廃寺の前身寺院とみる説もある。

鴟尾は、鰭部の破片が確認されている。鰭は表裏面ともに段型が施されている。白鳳期の所産とされている。

興善寺廃寺（熊本県八代市、第 15 図）　八代平野のほぼ中央部、渡場川の開析作用によって形成された小規模な扇状地の先端部に位置する。法起寺式の伽藍配置が想定されているが、詳細は不明である。瓦は、厨房に※形の文様を持つ剣菱形の素弁８葉蓮華文軒丸瓦と重弧文軒丸瓦が白鳳期の創建瓦と考えられ、奈良時代には老司系統の軒瓦や鬼面文軒丸瓦、鬼面文鬼瓦が確認できる。

鴟尾は、鰭部を段型に表現する破片が確認されているが、詳細は不明である。

Ｃ　九州出土鴟尾の特徴

以上、九州出土の鴟尾について遺跡別に概観した。その内容を整理すると第１表のよう

になる。九州島内では、鴟尾の全体像がわかる資料は船迫堂がへり窯跡出土品のみで、総括的な検討が非常に難しい。特に、肥後については検討材料が少ない。ここでは、筑前と豊前の鴟尾の特徴について、簡単ではあるが整理してみたい。

ⅰ　筑前の初期瓦・初期寺院に伴う鴟尾

牛頸月ノ浦Ⅰ号窯跡の鴟尾は、７世紀前半に遡る可能性もあり、九州の最古例である。牛頸窯跡群の初期瓦生産には、瓦工人の直接的関与が考えにくく、須恵器工人が試行を凝らして再現したものと考えられる。鴟尾についても、頂部の形態が特殊で、全体像も把握しづらく、果たして鴟尾の構造や製作技法を正確に理解して製作されたのか疑問である。那珂遺跡群出土鴟尾は所属時期が不明であるが、牛頸窯跡群で生産された瓦は那珂遺跡群にしか供給されていないため、初期瓦の段階にさかのぼる可能性は十分にある。

一方で、７世紀中頃のウトグチ瓦窯跡の段階になると、本格的な造瓦技術によってデザイン・成形された軒瓦や鬼板、丸・平瓦が生産されるようになり、瓦工人の関与が初めてみとめられる。粘土紐積み上げで成形され、全体をヘラケズリやナデで丁寧に仕上げている。胴部にも羽根形文様や段型を施し、百済様式の鴟尾といえよう。前述のように、ウトグチ瓦窯跡の造瓦には畿内系の技術を持つ工人の関与がみとめられ、鴟尾についても同様に畿内系の流れを汲むものと考えられる。

ⅱ　豊前の白鳳期寺院に伴う鴟尾

豊前地域では、椿市廃寺と上坂廃寺（船迫堂がへり窯跡から供給）で鴟尾が出土している。椿市廃寺の鴟尾は沈線で段を羽根状に表現する素朴なものであるが、一方の上坂・船迫出土品は鰭部端部を羽根形に成形し、縦帯には蓮華文や唐草文をあしらい、胴部にも唐草文や羽根形文様等を施文するもので、九州島内には類例のないつくりである。

縦帯の４葉蓮華文は百済様式であり、扁行唐草文は大和・坂田寺の手彫りの扁行唐草文軒平瓦に類似する。坂田寺の扁行唐草文軒平瓦は、小田富士雄氏が九州の「百済系単弁」の祖型とした百済系素弁７葉蓮華文軒丸瓦と組み合うものであり、この鴟尾の系譜についても、直接的に百済に求めるよりも、畿内との関係性を考える必要がありそうだ。

ⅲ　大宰府政庁第Ⅱ期に伴う鴟尾

大宰府政庁の棟端を飾る瓦といえば、大宰府系鬼瓦（鬼面文鬼瓦）の印象が根強いが、鴟尾の破片が数点出土している。いわゆる珠文帯鴟尾であり、鰭が頂部を回らない初唐様式に属するとされ、これもやはり九州島内では出土例がない。全体像が不明ではあるが、政庁第Ⅱ期の造瓦体制から考えると、中央からの影響によるものと考えたい。

D　鴟尾出土の意義

最後に、古代の九州において鴟尾が出土することの意義について、第２表に整理した７世紀から８世紀前半にかけての主要瓦出土地と出土遺物との関係性から考えてみたい。

まず、筑前地域の初期瓦は、牛頸窯跡群で生産され、那珂遺跡群に供給されたものであるが、飛鳥寺に始まる畿内の造瓦技術とは様相が全く異なり、朝鮮半島に直接系譜を求めることもできない。日本列島の玄関口である博多湾岸の整備に伴い瓦葺き建物が必要とされるなか、瓦のイメージをデザイン化して在地の須恵器工人により製作されたものが初期瓦であると、発表者は考えている。鴟尾についても、同様であろう。初期寺院の所用瓦を生産したウトグチ瓦窯跡では、畿内系の技術移入が想定されるものの、小郡市上岩田廃寺や筑紫野市塔原廃寺といった後続する白鳳寺院では、いずれも鴟尾は見つかっていない。特に、上岩田廃寺ではウトグチと同様に鬼板を使用するが、鴟尾は選択していない。

一方、豊前地域は、文献資料・考古資料ともに渡来系氏族の存在が確認でき、白鳳期末から奈良時代初めころにかけて、続々と古代寺院が建立された地域である。７世紀末頃に成立した寺院として、天台寺（田河郡）、椿市廃寺（京都郡）、上坂廃寺（中津郡）、垂水廃寺（上毛郡）、相原廃寺（下毛郡）、法鏡寺・虚空蔵寺（宇佐郡）の７カ寺がある。いずれも渡来系氏族の氏寺であり、軒瓦の同笵・同型品も多く、各寺院の関係性がうかがえるものの、鴟尾が出土しているのは、「百済系単弁」軒丸瓦の同笵関係で結ばれる椿市廃寺と上坂廃寺の２カ寺のみである。ここでもなんらかの選択が働いているとみられる。

また、大宰府政庁跡の鴟尾については、政庁第Ⅱ期の南門で使用されたと想定されている。しかし、その点数は非常に少なく、鬼面文鬼瓦が主流であり、大宰府郭内にある観世音寺や般若寺等の寺院、外交施設である鴻臚館跡でも鴟尾は出土していない。

以上により、九州において棟端瓦としての「鴟尾」という選択肢は、状況として大いにありえたものの、一部の寺院でしか採用されていないことがわかる。瓦の中でも大型の鴟尾は、高い成形技術と長い製作期間、焼成用の窯、運搬の労力等々、かなりの負担が伴う。対外的な視覚効果として那珂遺跡群で鴟尾が採用されたように、鴟尾は瓦屋根のシンボルとして棟端にかかせないものではあるが、コストの観点から、九州では選択されにくい傾向にあったのではないだろうか。

E　おわりに

以上、九州の鴟尾について概観した。出土例が少ないことに加え、全体像が復元できる資料が希少であり、製作技術に関する考察については今後の課題としたい。

（福岡市経済観光文化局）

参考文献

大野城市教育委員会編 1993『月ノ浦窯跡群』大野城市文化財調査報告書第 39 集

小田富士雄 1977『九州考古学研究　歴史時代編』 学生社

春日市教育委員会編 2004『ウトグチ遺跡Ｂ地点』春日市文化財調査報告書第 39 集

九州歴史資料館 2002『大宰府政庁跡』

築城町教育委員会編 1998『船迫窯跡群』築城町文化財調査報告書第６集

鶴島俊彦 1991「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学』 肥後考古学会

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』

福岡市教育委員会編 1994『那珂 10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 365 集

行橋市教育委員会編 1980『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書

行橋市教育委員会編 1996『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第 24 集

図版出典

第１図：発表者作成。

第２図：福岡市教育委員会編 1994『那珂 10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 365 集。

第３・４図：春日市教育委員会編 2004『ウトグチ遺跡Ｂ地点』春日市文化財調査報告書第 39 集。

第５・６図：大野城市教育委員会編 1993『月ノ浦窯跡群』大野城市文化財調査報告書第 39 集。

第７図：九州歴史資料館 2002『大宰府政庁跡』。

第８・９図：行橋市教育委員会編 1980『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書、
行橋市教育委員会編 1996『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第 24 集。

第 10 図：豊津町史編纂委員会編　1998 『豊津町史』上巻。

第 11 図：築城町教育委員会編 1998『船迫窯跡群』築城町文化財調査報告書第６集。

第 12 図：北九州市立歴史博物館編 1979『豊前の古瓦展』。

第 13 ～ 15 図：九州歴史資料館編 1980『九州古瓦図録』柏書房。

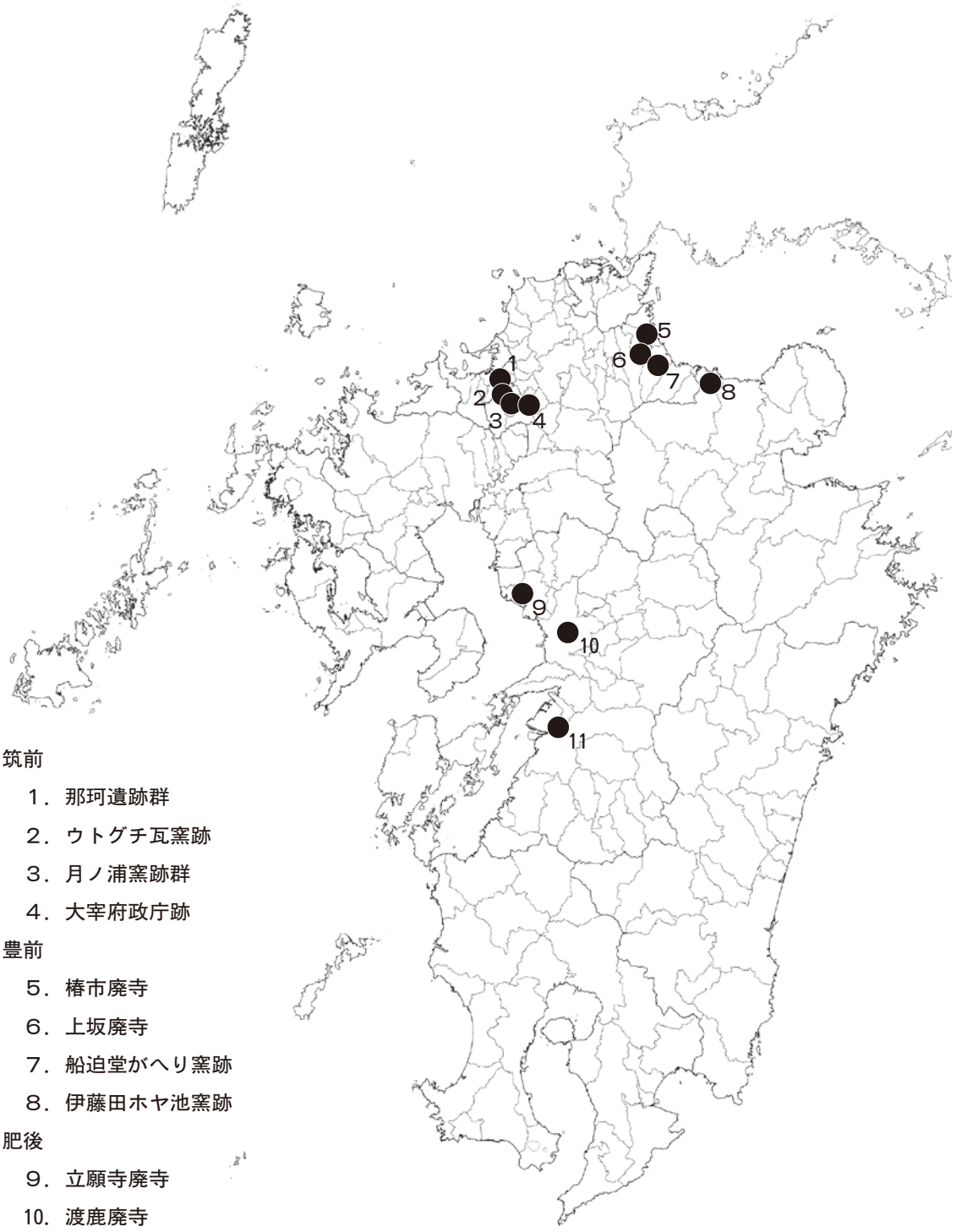
第 15 図：熊本県教育委員会 1980『興善寺１』熊本県文化財調査報告 45。

第１表　各遺跡出土鴟尾の製作技法

遺跡名		年代	胴部	縦帯		鰭部	
				区画	文様	外	内
那珂遺跡群		７ｃ代	—	—	—	正段	正段
ウトグチ瓦窯跡	A	７ｃ中頃	羽根形文様	なし		正段	正段
	B	７ｃ中頃	段型（正段）	２条凸帯？	—	正段	正段
月ノ浦窯跡		７ｃ前半	—	なし		正段	正段
大宰府政庁跡	A	８ｃ前半	—	２条凸帯	連珠文・型押し	正段	なし
	B	10 ｃ中頃	—	凸帯	連珠文・手びねり	正段	なし
椿市廃寺		７ｃ末～	無文	なし（段）		沈線	なし
上坂廃寺		７ｃ末～	—	—	—	正段	なし
船迫堂がへり窯跡		７ｃ末～	羽根形文様 唐草文	沈線	蓮華文・スタンプ	正段	なし
伊藤田ホヤ池窯跡		７ｃ末～	—	—	—	正段	—
立願寺廃寺		—	—	—	—	—	—
渡鹿廃寺		７ｃ末～	—	—	—	正段	—
興善寺廃寺		—	—	—	—	—	—

第２表　九州の主要瓦出土地と鴟尾の出土状況

国	遺跡名	時期	軒丸瓦							軒平瓦					丸瓦	鬼瓦・鴟尾		
			百済系	古新羅系	高句麗系	統一新羅系	老司系	鴻臚館系	畿内系	重弧文	統一新羅系	老司系	鴻臚館系	畿内系	竹状模骨	大宰府系鬼瓦	鬼板瓦	鴟尾
筑前	大宰府政庁跡	７世紀後半～					○	○				○	○			○		○
筑前	観世音寺	８世紀初頭～	○				○	○	○	○		○	○			○		
筑前	浜口廃寺	８世紀前半～						○					○			○		
筑前	鴻臚館跡	７世紀後半～					○	○				○	○			○		
筑前	塔原廃寺	７世紀後半～								○								
筑前	杉塚廃寺	８世紀前半～	○				○	○				○				○		
筑前	般若寺	８世紀前半～					○	○				○	○					
筑前	大野城跡	７世紀後半～	○	○				○					○			○		
筑前	牛頸窯跡群	７世紀初頭～		○														○
筑前	ウトグチ瓦窯跡	７世紀中頃							○	○							○	○
筑前	那珂遺跡群	７世紀初頭～	○	○	○										○			○
筑前	三宅廃寺	８世紀前半～					○					○			○	○		
筑前	老司瓦窯跡	８世紀初頭～					○					○						
筑前	大分廃寺	７世紀後半～			○	○					○							
筑前	長安寺廃寺	８世紀前半～						○					○			○		
筑後	上岩田遺跡	７世紀後半													○		○	
筑後	井上廃寺	８世紀前半～	○				○		○	○		○						
豊前	天台寺跡	７世紀末～	○	○	○	○				○	○				○			
豊前	椿市廃寺	７世紀末～	○		○		○		○	○	○				○			○
豊前	上坂廃寺	７世紀末～	○						○	○		○						○
豊前	木山廃寺	８世紀～	○						○	○		○			○			
豊前	船迫堂がへり瓦窯１・２号窯跡	７世紀末～	○					○						○		○		○
豊前	垂水廃寺	７世紀末～	○			○				○	○							
豊前	友枝瓦窯跡	７世紀末～	○			○				○	○							
豊前	相原廃寺	７世紀末～	○							○								
豊前	塔ノ熊廃寺	８世紀前半～				○										○		
豊前	伊藤田ホヤ池窯跡	７世紀末～	○							○								○
豊前	法鏡寺廃寺	７世紀末～	○					○	○					○	○	○		
豊前	虚空蔵寺跡	７世紀末～							○					○		○		
豊前	小倉ノ池廃寺	８世紀～						○						○				
豊前	弥勒寺跡	７世紀末～	○					○			○		○	○		○		
肥前	基肄城	７世紀後半～	○				○			○								
肥前	肥前国府跡	７世紀後半～					○	○				○	○					
肥前	塔の塚廃寺	８世紀～	○															
肥前	辛上廃寺	８世紀～						○					○					
肥前	大願寺廃寺	８世紀～	○					○		○								
肥前	寺浦廃寺	８世紀～	○					○		○								
肥後	鞠智城跡	７世紀後半～		○														
肥後	立願寺廃寺	７世紀末～								○						○		○
肥後	平原瓦窯跡	８世紀前半					○					○						
肥後	陣内廃寺	７世紀末～					○	○				○	○					
肥後	渡鹿廃寺	７世紀末～						○					○			○		○
肥後	興善寺廃寺	７世紀末～								○		○				○		○
日向	下北方塚原遺跡	８世紀前半	○															



筑前

1．那珂遺跡群

2．ウトグチ瓦窯跡

3．月ノ浦窯跡群

4．大宰府政庁跡

豊前

5．椿市廃寺

6．上坂廃寺

7．船迫堂がへり窯跡

8．伊藤田ホヤ池窯跡

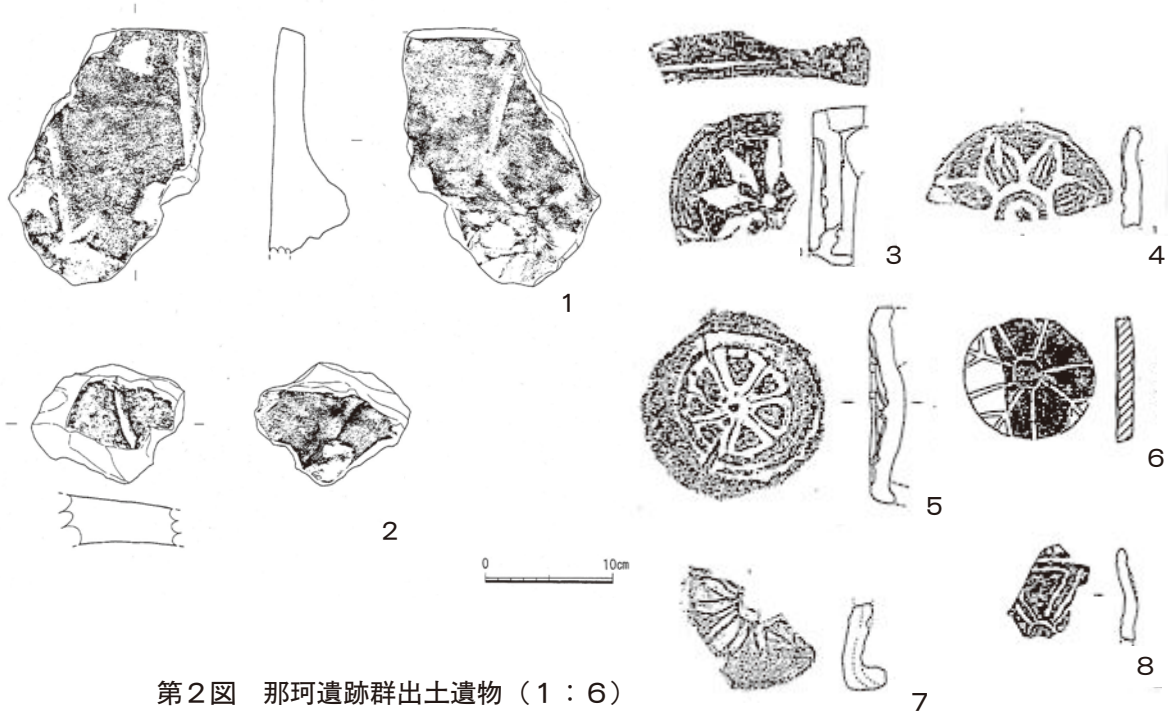
肥後

9．立願寺廃寺

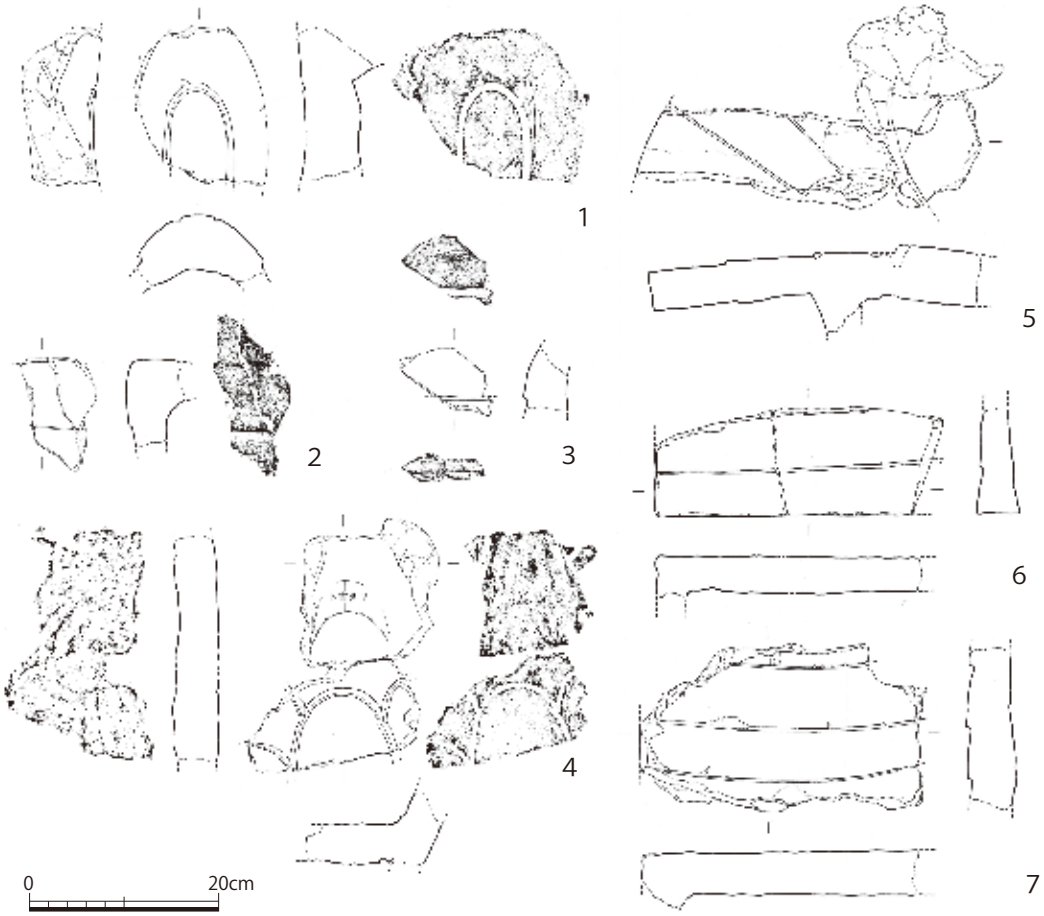
10．渡鹿廃寺

11．興善寺廃寺

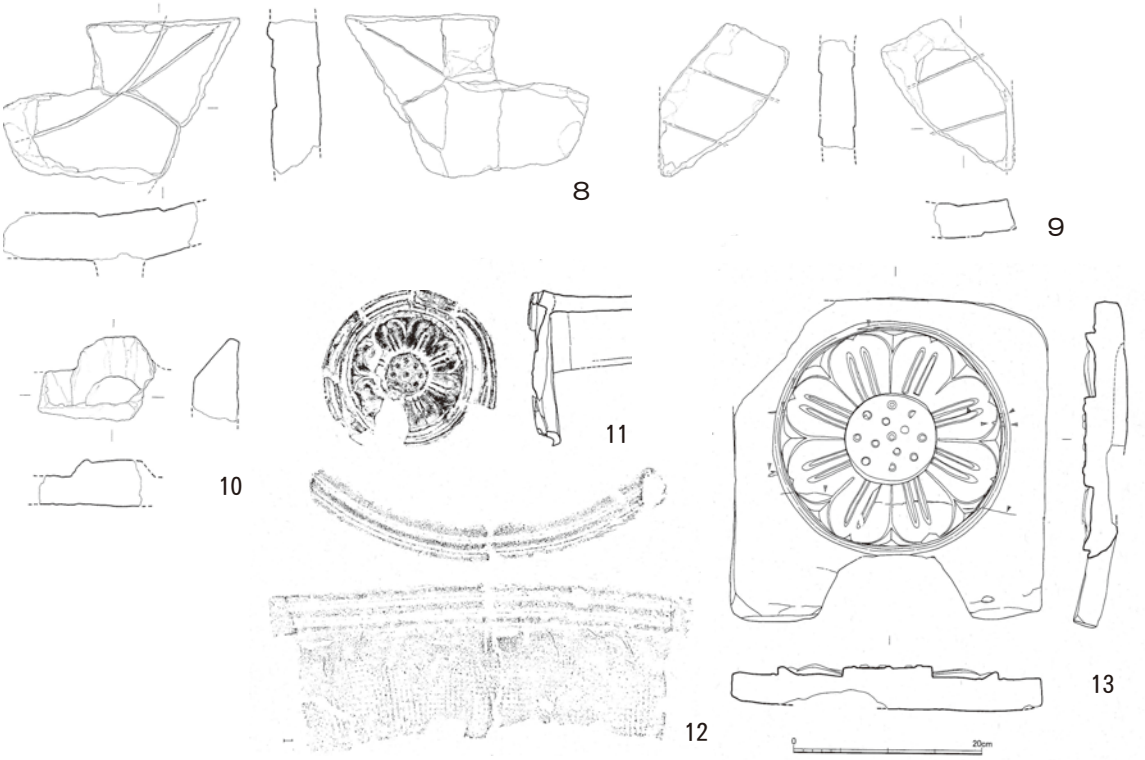
第１図　九州における鴟尾出土分布図



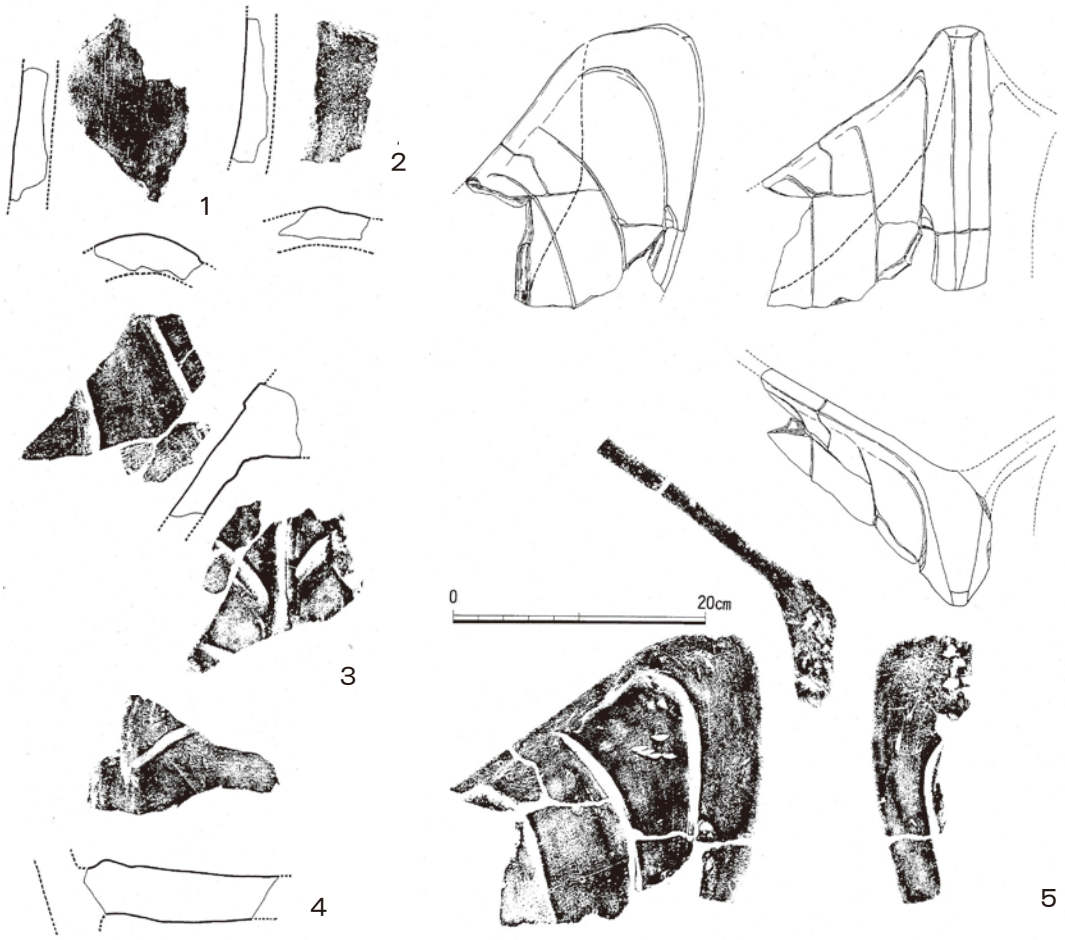
第２図　那珂遺跡群出土遺物（１：６）



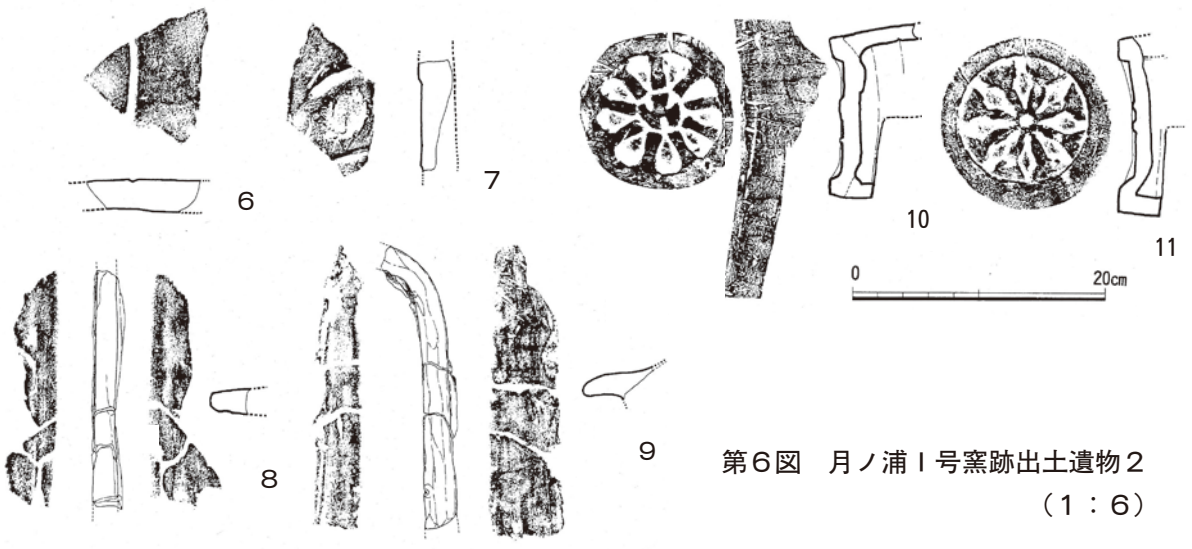
第３図　ウトグチ瓦窯跡出土遺物１（１：８）



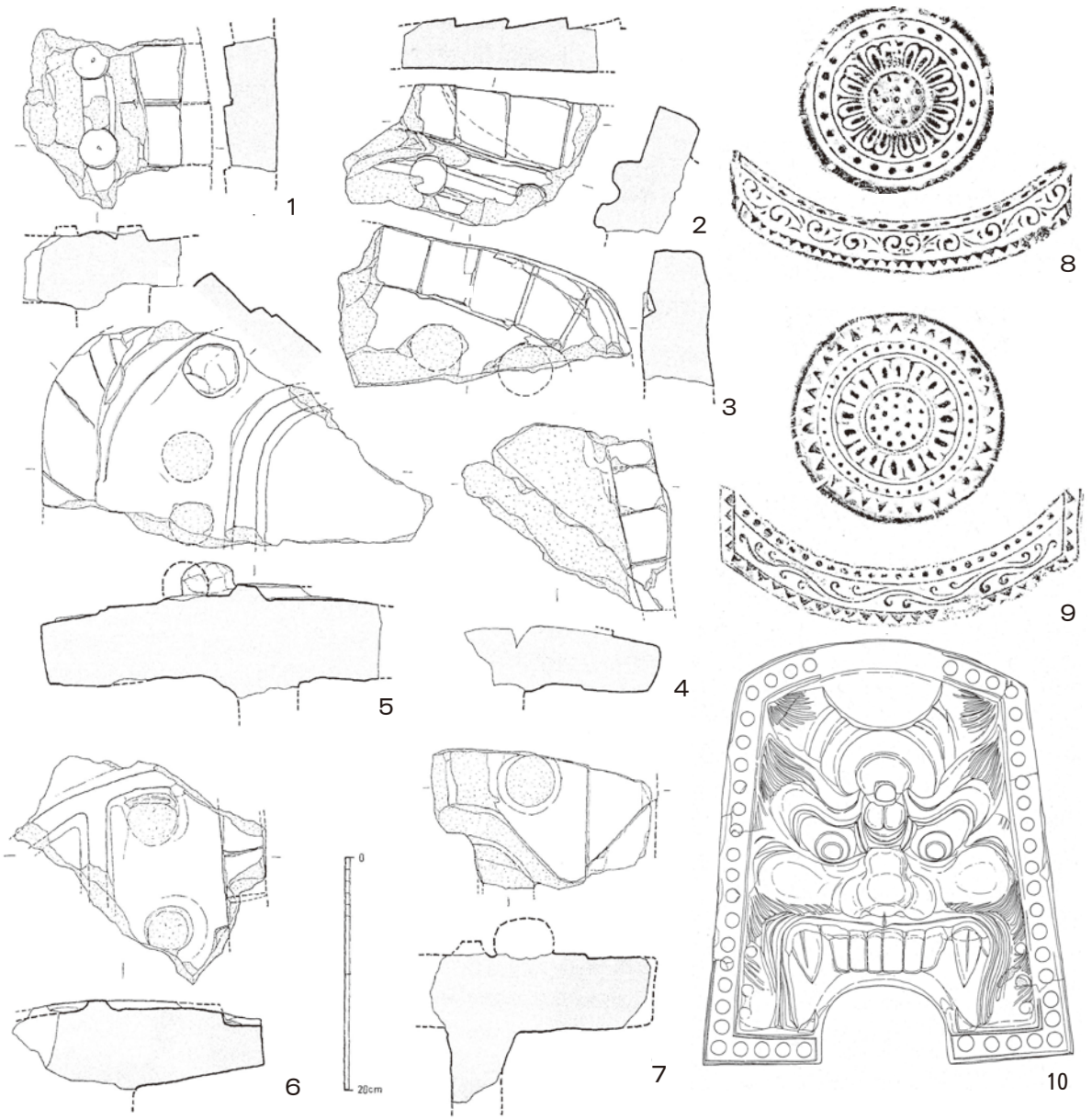
第４図　ウトグチ瓦窯跡２出土遺物（１：８）



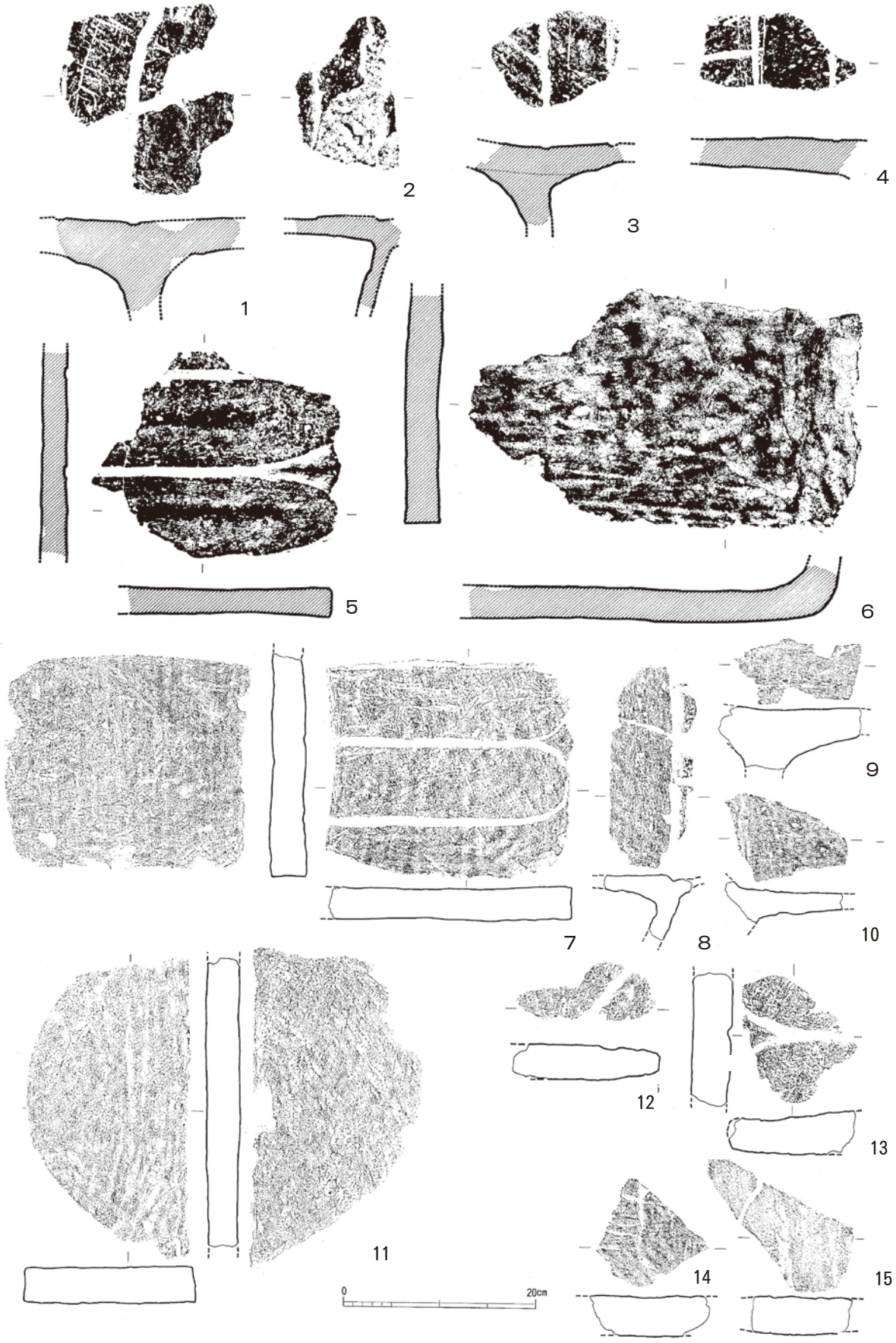
第５図　月ノ浦Ⅰ号窯跡出土遺物１（１：６）



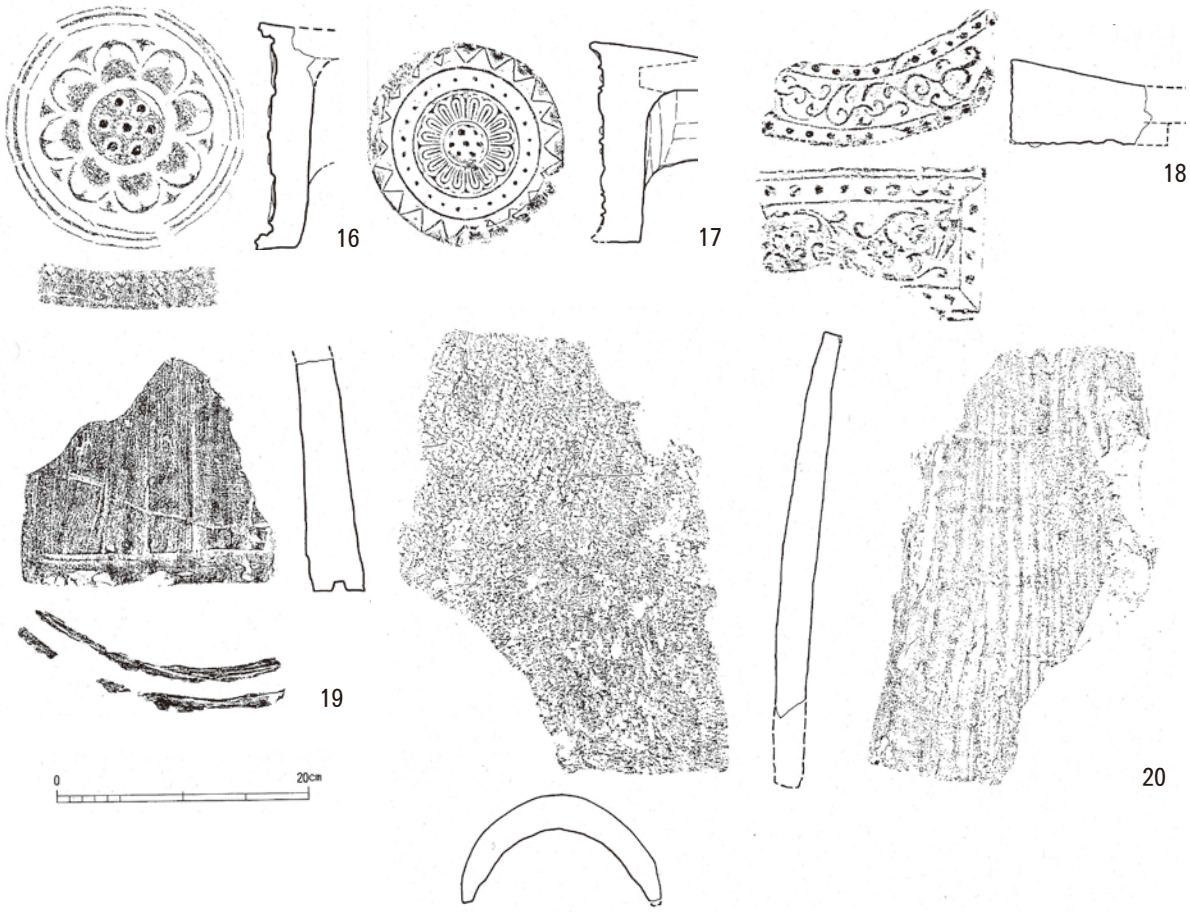
第６図　月ノ浦Ⅰ号窯跡出土遺物２
（１：６）



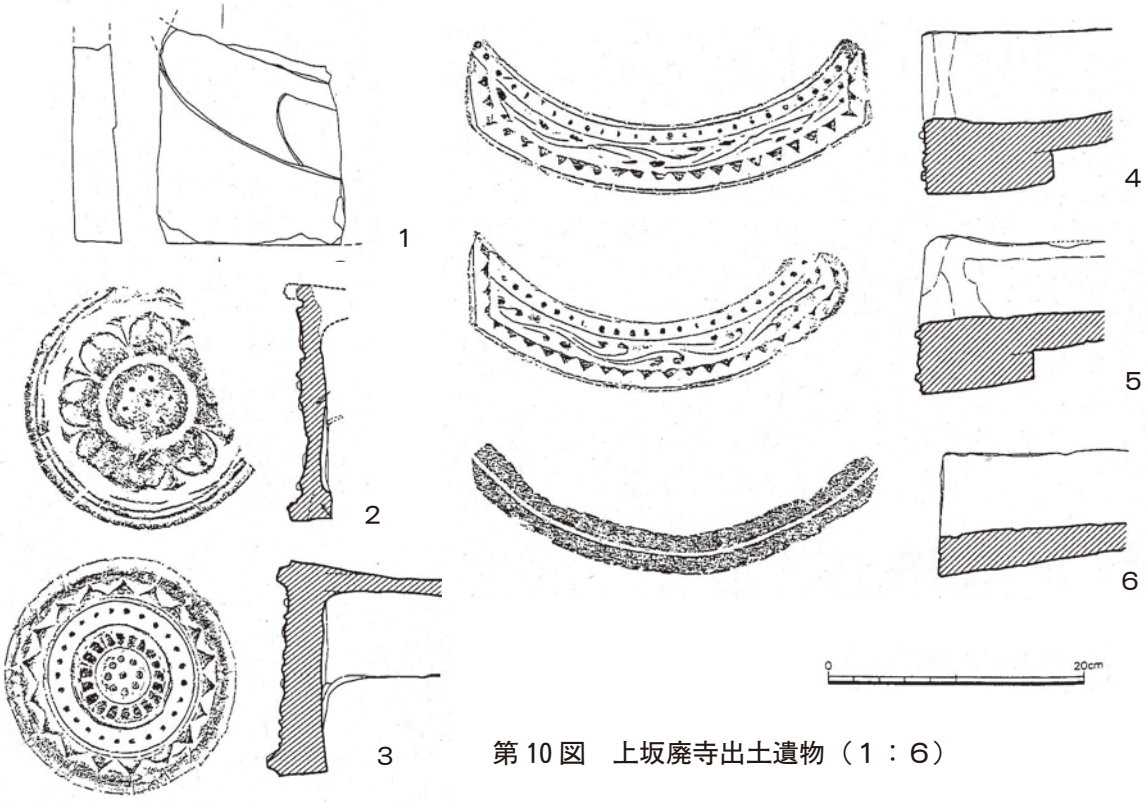
第７図　大宰府政庁跡出土遺物　（１：６　鬼瓦は１：８）



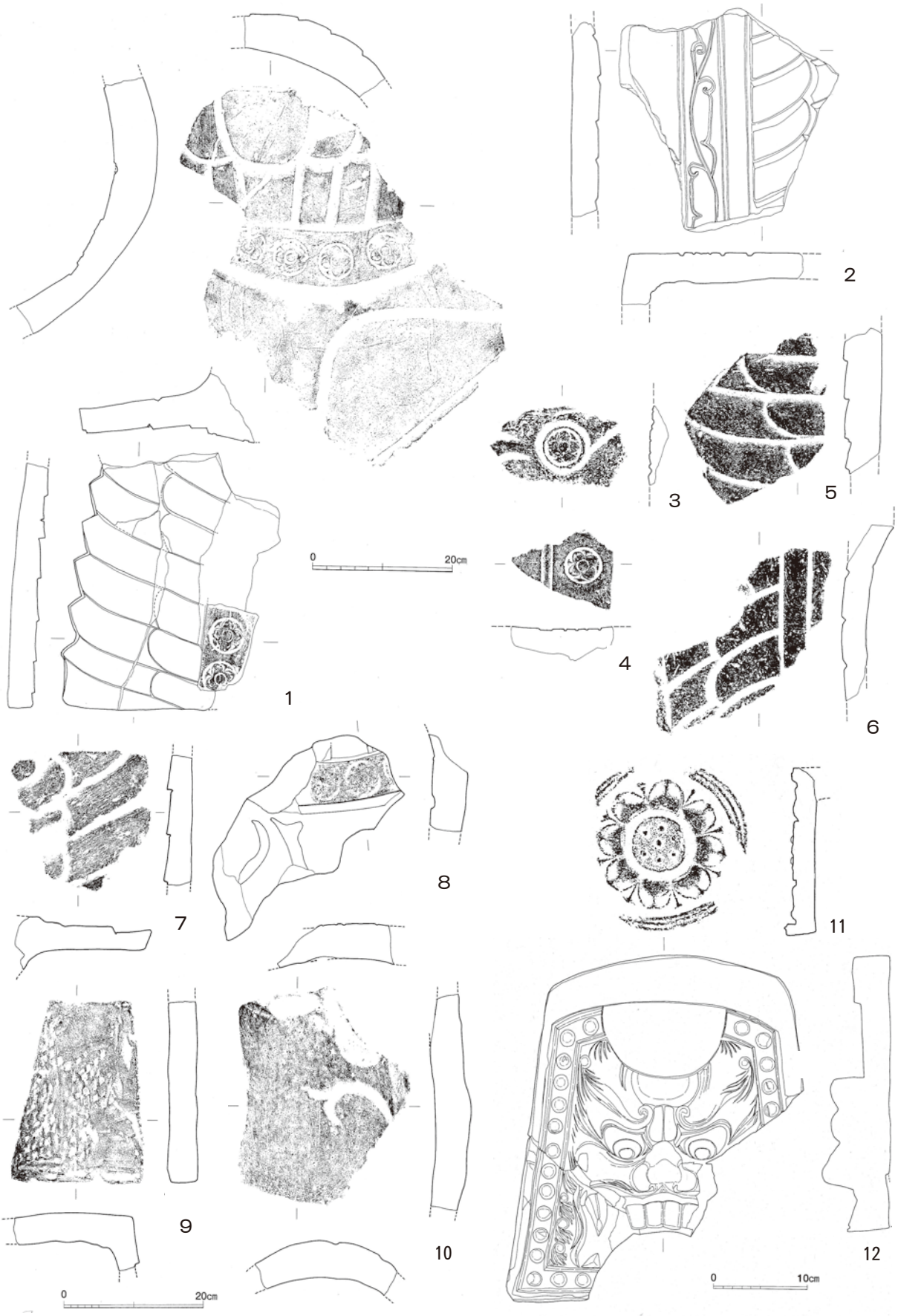
第８図　椿市廃寺出土遺物１（１：６）



第９図　椿市廃寺出土遺物２（１：６）



第 10 図　上坂廃寺出土遺物（１：６）

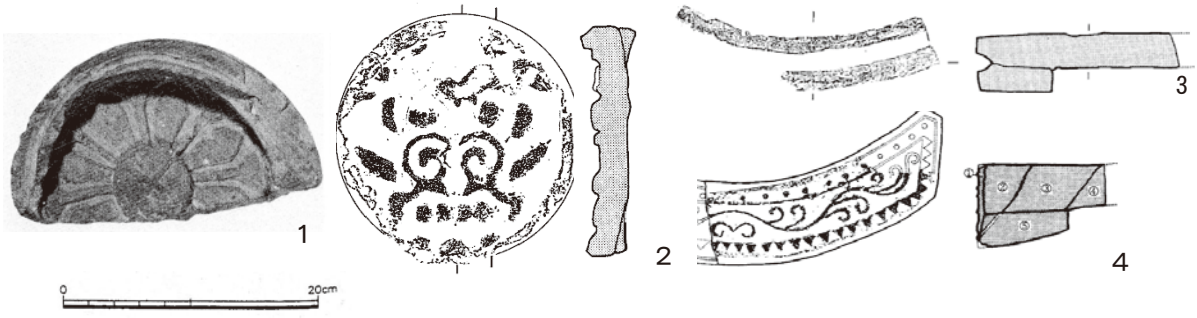


第 11 図　船迫堂がへり１・２号窯跡出土遺物（１：８　軒瓦は１：６）

第 12 図　伊藤田ホヤ池窯跡出土遺物（縮尺任意）

第 13 図　立願寺廃寺出土遺物（縮尺任意）

第 14 図　渡鹿廃寺出土遺物（縮尺任意）



第 15 図　興善寺廃寺出土遺物（１：６）

9　韓国の鴟尾

洪　パルグム（홍　밝음）
（翻訳：岩戸　晶子）

A　はじめに

鴟尾は瓦屋根の大棟両端にあげられる特殊瓦で、韓国において鴟尾がいつから製作され、いつまで使用されていたのかについては、正確に知られていない。ただし、中国の影響によって製作が開始されたと考えられており（徐 1976、羅・朱 1990、金有 1996）、4～5世紀の高句麗古墳の壁画で鴟尾が確認されていることから、おおよそ4世紀中・後半には登場したと把握されている。

韓国における鴟尾研究は 1979 年、徐聲勳によって百済の鴟尾が検討されて以降、1990 年代に金有植（1993・1996）、また羅采華・朱南哲（1990）によって古代の鴟尾に対する検討が加えられた。それ以後、2000 年代に入って皇龍寺中門復元のため、瓦磚の考証研究（李 2015、申・崔 2017）、統一新羅の鴟尾の製作方法についての研究（朴 2009）などが発表され、2018 年には特別展『鴟尾 天の声を仰ぐ』と国際学術シンポジウム「東アジアの鴟尾」が開催され、鴟尾研究の活性化に寄与した。

三国時代の鴟尾の中で完形に復元された鴟尾は、百済の鴟尾として知られる扶余・扶蘇山廃寺鴟尾（国立文化財研究所 1996）、扶余・弥勒寺址鴟尾（国立扶余文化財研究所 1996）、扶余・王興寺址鴟尾（国立扶余文化財研究所 2016）の3点、新羅の鴟尾として報告された慶州・皇龍寺址鴟尾（文化財管理局・文化財研究所 1984）など4点に過ぎない。

高句麗の鴟尾は安鶴宮出土鴟尾と定陵寺鴟尾が報告されているが、その全形が唐類型によるため、今後の検討が必要である。

南北国時代（訳者注：日本でいうところの統一新羅時代。渤海も含む際の呼称。）の鴟尾に関しては、金有植（1993・1996・2018）、朴昭姫（2009）、李善姫（2018）、申昌秀・崔英姫（2017）らの論文などを通じて言及されているが、南北国時代の鴟尾の変化過程を観察した資料は金有植（1993・1996）論文がほとんど唯一のものといえる。氏は新羅の鴟尾を3時期に分けて、1期は皇龍寺址鴟尾が製作された新羅期、2期は雁鴨池ならびに仏国寺址出土品のように鴟尾に宝珠形装飾板が取り付けられる統一新羅前期、3期は伝興輪寺址出土品のように鴟尾の胴部に唐草紋などが飾られる統一新羅後期と整理した（金有 1996）。その当時、出土事例が少ない鴟尾を対象として鴟尾の変化過程を3時期に分けて分析したことは大変刮目に値する成果である。ただ、正確な時期設定がおこなわれていない点、鴟尾の変化過程が曖昧に記述されている点などはやや惜しい部分である。

南北国時代の統一新羅鴟尾は慶州・雁鴨池鴟尾（文化財管理局 1978）、慶州・芬皇寺址鴟尾（国立慶州文化材研究所 2015）、慶州・四天王寺址鴟尾（国立慶州文化材研究所 2014）、慶州・仁容寺址鴟尾（国立慶州文化財研究所 2009）などがあり、渤海の鴟尾は上京龍泉府 1 号と 9 号寺址の鴟尾（国立扶余文化財研究所 2018）、中京顕徳府西古城鴟尾（吉林省文物考古研究所他 2007）などが報告されている。

また、南北国時代末から高麗初期の鴟尾として原州・法泉寺址鴟尾（江原考古文化研究院 2017）、清州・興徳寺址鴟尾（国立清州博物館 2017）、扶余・伝金剛寺址鴟尾（国立扶余文化財研究所 2018）が知られているが、正確な時期の比定については議論がある。

B　韓国古代の鴟尾が表現された美術資料

ⅰ　三国時代

三国時代鴟尾の姿を確認することができる絵画資料は、高句麗の古墳壁画および百済の外里出土山水文磚である。高句麗の古墳壁画に鴟尾の姿が確認されるのは、安岳 1 号墳、同 3 号墳、龍岡大墓、集安・通溝 12 号墳の殿閣図、遼東城墓などがある（第 1 表）。

鴟尾が確認される高句麗壁画古墳は概して 4 ～ 5 世紀に築造されており、ここで確認される鴟尾の姿は半円形の形態をなし、中国の龍門石窟・唐子洞（王 2018）、雲崗石窟 6 ・ 9 窟（張憲 2018）、敦煌・莫高窟 301 窟（北周、敦煌研究院 2001）などでも確認される。しかし、泗沘遷都以降に製作された百済の山水文磚の鴟尾は高句麗壁画に見られる鴟尾の表現とは異なり、脊稜がもう少し直立するように変化したことがわかる。これに類似した様相は隋代に描かれた敦煌莫高窟 423 窟（敦煌研究院 2001）などで確認される。

ⅱ　南北国時代

この時期の鴟尾が表現された美術資料としては、新羅の白紙墨書大方広仏華厳経の仏殿図（文化財庁ホームページ）、蔚山・中山里で収集された龍文磚（国立扶余文化財研究所 2018）と出土地未詳の慶州･殿閣文磚（国立扶余文化財研究所 2018）、青島･仏影寺磚塔（張憲 2018）、ヴィーチャシ（Vitiaz'）湾出土青銅製仏板鴟尾（E.V. シャフクノフ（E. V. Shavkunov）、A.L. イヴリーエフ（A.L.Ivliev）1992）などがある（第 2 表）。

龍文磚と殿閣文磚、清道 仏霊寺磚塔の鴟尾の形態はそれぞれ似ており、脊稜の角度が 90° 前後で折れ曲がった三国時代の鴟尾とは異なる姿で表現されていたことがわかる。このような鴟尾の形態は遡って中国隋代の邴法敬四面造像碑（河南博物院 2009）や河南城から出土した隋代の彩色陶房（河南博物院 2009）などで確認される。 日本では玉虫厨子須弥山図（百橋 1983）と頭塔（鷲塚 1978）でも確認され、玉虫厨子は概して 7 世紀中頃あるいは 7 世紀後半代に製作されたと考えられ（金珠 2003）、頭塔は 8 世紀中頃に築造されたと知られているため（呉 2016）、韓国でもこのような形態の鴟尾は南北国時代直前あ

るいは南北国時代から製作されたと推定される。すなわち、それ以前の時代のものとは脊稜の角度が異なる鴟尾が使用されたと判断でき、そのような鴟尾は統一新羅と渤海の都城遺跡からの出土品においても確認される。

８世紀中頃に描かれた新羅白紙墨書大方広仏華厳経仏殿図には、唐の絵画において主に確認されるタイプの鴟尾が描かれている。その鴟尾の形態については、胴部が無文で、縦帯は一重または二重で、装飾板は付されない。また、鰭も頂部まで続かずに途絶える様子が確認される。このような仏殿図鴟尾と似た中国の絵画例は敦煌莫高窟 215 南壁（初唐、敦煌研究院 2001）と 148 窟西壁（盛唐、敦煌研究院 2001）、そして９世紀代の山西・古青蓮寺碑刻（周原博物館 2000）などでも確認されている。このような鴟尾の形態は韓国の慶州雁鴨池出土鴟尾①とも類似する。

ヴィーチャシ（Vitiaz'）湾出土青銅製仏板（シャフクノフ・イヴリーエフ 1992）では大棟両端で鴟尾の姿が確認されるが、この中で特筆できることは頭部が龍頭の形態で大棟に噛みついている姿が具体的に表現されていることである。また、鰭の翼は渤海の出土品と同様、凸線で表現されており、鰭は頂部まで連続しない。このような鴟尾の形態について E.V. シャフクノフはその鴟尾の形態が渤海後期、すなわち９～ 10 世紀代に製作されたアブリコソフスキー寺院遺跡で出土した鴟尾と類似すると判断し、どちらも近い時期に製作されたと推定した（シャフクノフ・イヴリーエフ 1992、シャフクノフ 1996）。

C　韓国古代鴟尾の変遷過程

i　三国時代

三国時代の鴟尾の変遷過程に関する研究はさほど多くはないが、2018 年、筆者が百済泗沘期の出土鴟尾の考察（洪 2018）を発表し、皇龍寺鴟尾については、金有植（1996）と趙原昌（2012）が研究をおこなっている。そして、高句麗の鴟尾は先に言及したように安鶴宮と定陵寺址鴟尾が報告されているが、鰭が頂部まで及ばない点、胴部が無文で製作された点など、南北国時代の鴟尾と類似した点が多いため、今後の検討が必要だと思われる。ここでは百済と新羅の鴟尾を土台にして検討していく。

百済の鴟尾は概して扶余と益山で出土する。ただし、大部分が破片であり、正確な形態を把握するのは困難である。したがって、筆者は完形に復元された鴟尾とある程度その形態を把握することができる鴟尾を基に「百済泗沘期寺院址出土鴟尾の考察」という論文を発表したことがある（洪 2018）。

そこでは中国の鴟尾の変遷過程、そして韓国の寺院の変化過程を基に鴟尾が変遷する過程を観察し、計９点の鴟尾を対象にして百済の鴟尾を２類型に分けた（第３表）。まず、１類型は縦帯が１重の鴟尾で、1 類型は扶余ⅠＡ（扶余･陵山里寺址出土鴟尾）→ⅡＡ（扶余・金剛寺址出土鴟尾、扶余・定林寺址出土鴟尾）→ⅡＢ（扶余・王興寺址講堂址上層出

土鴟尾）式というように変化すると考えられる。すなわち､縦帯が沈線で表現されて以後、凸線に変化し、胴部も段を重ねたものから次第に無文に変化していくと考えた。

２類型は王興寺址、扶蘇山廃寺址、弥勒寺址出土品があり、縦帯内部の表現方法によって２－１類型と２－２類型に分けることができる。２－１類型は現在王興寺址東建物址と講堂址など王興寺址でのみ出土し、２－２類型は扶蘇山廃寺址、扶蘇山城、弥勒寺址出土品などがある。２－１類型鴟尾は縦帯内部を蓮華文と竹管文などで派手に飾るが、これに類する鴟尾は韓国において王興寺址鴟尾が唯一である。２－２類型は縦帯内部を沈線で表現したもので、扶蘇山廃寺、扶蘇山城、弥勒寺址出土品などが挙げられる。この類型の鴟尾は時代が下るにつれ縦帯の幅が広がり、胴部が無文化していく。

新羅の鴟尾は皇龍寺址の鴟尾のみが知られており、この鴟尾の製作年代においては６世紀後半説と７世紀中頃説とがある。かつて鴟尾に対する研究を牽引した金有植は、皇龍寺址鴟尾が講堂の位置しているまさに東北側の瓦廃棄遺構で出土し、この遺構の出土瓦は６世紀後半代の軒丸瓦が主流をなすため、皇龍寺址鴟尾は 584 年に製作されたとみた（金有 1996)。しかし、最近では皇龍寺址鴟尾が出土した瓦廃棄遺構で６世紀第４四半期の瓦当だけでなく７～８世紀前半の瓦当が共伴し、特に鴟尾に飾られた蓮華文が７世紀第３四半期に編年される瓦当と親縁性を見せることから、この皇龍寺址鴟尾も７世紀中頃に製作されたという見解が提起された（趙 2012)。

もちろん、皇龍寺址鴟尾が多くの時期の瓦とともに混じりあって出土するため、鴟尾が製作された時期を正確に判断することは難しい。しかし、百済の６～７世紀前半代の鴟尾は胴部に段を施文されて製作されるが、皇龍寺址鴟尾は、胴部が完全に無文化されている点、鴟尾に飾られた瓦当が７世紀第３四半期に編年される瓦当と類似する点などを考慮すると、６世紀後半よりは７世紀中頃前後に製作されたと考えられる。

ⅱ　南北国時代

南北国時代の完形鴟尾あるいはある程度形態が推定可能な鴟尾は第４表の通りで、統一新羅の 14 点、渤海の７点である。

これをもとに南北国時代の鴟尾の共通する特徴をよく見てみると、大きく縦帯の数、胴部の装飾の有無、そして装飾板の有無によって、その様相が異なる。縦帯は１重と２重に分類でき、胴部が無文のものと装飾されたもので分けられる。また、装飾板がない場合、半球形装飾板ないし宝珠形装飾板が付される場合に区分されるのに対し、韓国では縦帯が１重である場合には１重の縦帯内側に、縦帯が２重である場合には概して縦帯内部に装飾板が確認される。

三国時代の鴟尾の変化の過程をよく見ていくと、１重の縦帯と２重の縦帯の変遷過程が異なっており（洪 2018)、鴟尾の胴部が次第に無文化されて、南北国時代鴟尾として続いていく。ここでも縦帯を基準として大きく１類型（１重の縦帯）と２類型（２重の縦帯）

と分けて検討してみよう。

形態を推定することができる南北国時代の鴟尾は計 21 点あり、類型によって第５表で示したように変化する。ただし、これらの資料は出土位置などが明確でなく、その製作時期も明らかでないため、正確な時期を比定するのは難しい。したがって、ここでは鴟尾が移り変わる傾向のみを検討するにとどめるようにしよう。

１類型は計 12 点が確認でき、計５種の形態に分けることができる。１－２類型は確認されなかったが、１－３類型、すなわち縦帯１重＋胴部無文＋宝珠形装飾付の鴟尾が確認されており、中国の敦煌 莫高窟 338 号窟（初唐）と西安 大雁塔門楣石刻仏殿鴟尾（建筑科学研究院建筑史编委会 1980）などで確認されているから、このような文様の鴟尾は７世紀後半以降に製作されたものと推定される。

１－１類型は韓国の８世紀中頃の仏殿図で確認されており、７世紀後半代に築造されたと考えられる雁鴨池、高仙寺址、四天王寺址などで出土例がある（第２図）。また、中国の敦煌莫高窟 215 窟南壁（初唐、敦煌研究院 2001）、148 窟西壁（盛唐、敦煌研究院 2001）、そして山西省・古青蓮寺碑刻（周原博物館 2000）などにも描かれており、このような鴟尾は少なくとも９世紀前半までは製作されていたと推定される。渤海では出土した事例がないため、渤海でこのような鴟尾が製作されたかは今後の検討が必要である。

１－３類型の鴟尾は縦帯１重＋胴部無文＋法樹形装飾板付鴟尾で、雁鴨池②・③・④、東宮・月池、芬皇寺址など慶州で最も多くの出土事例が存在する（第３図１・２・３）。また、この類型の鴟尾は慶州・東宮・月池の７世紀後半の遺構で出土しており、慶州・感恩寺址や慶州・仏国寺などの創建に関する文献記録を見ると、その年代の上限は７世紀後半まで上がると考えられる。下限年代については慶州・芬皇寺址中門出土鴟尾が８世紀半ばと考えられており、概して８世紀中葉頃までは製作されたと判断できる。この時期、絵画では中国・莫高窟 127 窟（盛唐、敦煌文物研究所編 2007）においても確認できる。

１－４類型の最たる特徴は胴部装飾鴟尾という点であり、慶州・伝仁容寺址出土品が代表的である（第３図４）。胴部にこれと同様の装飾をもつ鴟尾について、金有植（1996）は新羅の最終段階に製作されたものとみなしたが、これは仁容寺址で出土した遺物の大部分が８世紀後半に属することと同様の理由と考えられる。すなわち、１－４類型の鴟尾は概して８世紀後半やそれ以後に製作された可能性が高いと思われる。ただし、このような出土品がまだ１点のみしか確認されていないため今後の検討が必要であろう。

２類型は２重縦帯鴟尾である。２－１類型は統一新羅と渤海の都城遺跡では確認されていないため正確な時期を把握するのは困難である。ただし、文様の変遷の様相を見ると、縦帯内部に半球形や宝珠形装飾板が付される鴟尾よりはもう少し早い時期に登場したと考えられる。

２－２類型は慶州・四天王寺址、中京顕徳府西古城でほぼ完形の鴟尾が報告されている（第４図）。慶州・四天王寺址西回廊址西側建物址①鴟尾は、報告書の検討から８世紀代に

製作されたことがわかる。また、中京顕徳府西古城１号宮殿址鴟尾もまた、上京城と西古城がほぼ同時期に造営された可能性があるため（鄭 2012）、それらの出土鴟尾も８世紀前半から半ば頃には製作されたとみることができる。

２－３類型の鴟尾は上京龍泉府９号寺址、中京顕徳府西古城２号宮殿址西側拝殿と東側拝殿、中京顕徳府西古城５号宮殿址などで出土した。先立って鄭昔培（2012）が言及したように上京城と西古城の築造時期はそれ程時代が隔たらないだろうから、このような形態の鴟尾は２－２類型鴟尾と近い時期に製作されたものと考えられる（第５図）。

最後に、２－４類型は胴部が装飾され、鴟尾の頭部が変化した様相が確認される鴟尾である（第６図）。慶州・芬皇寺址表採鴟尾は部分的にしか把握できず正確な鴟尾の形態を把握することはできないが、上京龍泉府１号寺址で出土した鴟尾の姿を見ると、鴟尾の頭部形態に変化があった可能性は排除しにくいと思われる。

中国で鴟尾の頭部が鴟吻に変化し始めたのは中唐とされており（大脇 2000）、完全な獣形をとる姿は９世紀中頃と考えられる（蔵 1999、張明 2016）。したがって、韓国でも９世紀前半あるいは半ばにはこのような鴟尾の頭部形態が登場したと推定される[1]。

ⅲ　南北国時代～高麗時代

現在まで報告された鴟尾の中で、その時期を正確に特定できない鴟尾は、原州・法泉寺址鴟尾、清州・興徳寺址鴟尾、扶余・伝金剛寺址鴟尾の３点がある（第６表、第７図）。

原州・法泉寺址鴟尾と清州・興徳寺址鴟尾はその形態がこれまでに確認された鴟尾と区別される。原州・法泉寺址鴟尾は全体的な形状が鳥の形態の雰囲気を帯びており、清州・興徳寺址鴟尾は脊稜、胴部、鰭などに波状文が施文され、特に腹部に竜あるいは鬼面文で飾られたことが特徴的である。

原州･法泉寺址鴟尾（江原考古文化研究院 2017）の製作と関連した資料を捜してみると、権相老は『韓国寺刹全書』において「春州之南 三十里 有山 曰飛鳳山 山下有寺 曰法泉 新羅古刹也」とし、法泉寺を新羅の時からの古刹とする。また、これを参考にした民族文化大百科事典には 725 年に創建されたとしているが、その信憑性は低い（江原考古文化研究院 2017）。ただし、韓国に伝播した法相宗唯識学の場合、景徳王（在位 742 － 765 年：訳者注）の時代に道証の弟子である太賢によって集大成され、宗派として成立した点をふまえ、法相宗唯識学の代表寺院だった法泉寺も８世紀末頃に創建されたと推測されている（江原考古文化研究院 2017）。ただし、法泉寺と関連した正確な記録は 928 年に釈超が法泉寺で賢眷律師に戒を受けたという内容である。

法泉寺において鴟尾は中心寺域南側で出土したが、この地点ではこれといった遺構が確認されず、法泉寺が運営された時期においても庭または広場のような空間だったと推定されている。鴟尾は不定形のいくつかのピット内で破損したまま多数の瓦片とともに出土した。出土状況から見て廃棄後に埋納されたものと考えられ、報告者は鴟尾と共伴した瓦片

から 11 世紀半ばから後半にかけて使用され、廃棄されたものと判断した（江原考古文化研究院 2017）。鴟尾の姿は鳥形を帯びているのが特徴であるが、特に鰭が既存の鴟尾のように段が施文されるのではなく粘土帯の貼り付けによって表現される点が特徴的である。

清州·興徳寺址鴟尾は 1980 年代の発掘調査で「大中３年」銘の瓦が発見され、849 年（新羅・文聖王 11 年）にはすでに興徳寺が存在したことがわかり（忠清大学博物館 1986）、講堂址の創建時期は積心石（割栗事業）の形態及び架構式基壇の様相をふまえ、統一新羅と推定されている。ただしよく整えた花崗岩板石を使った地覆石と面石の間に自然石の板石が混在しており、創建以降、１～２回にわたって改修があったと考えられる（国立清州博物館 2017）。鴟尾は講堂址北側で確認され、講堂が火の勢いで北側に埋没したものと推定される（国立清州博物館 2017）。鴟尾の全体的な形態は、腹部を龍面で飾り、脊稜には波状文が、鰭には樹枝文が施文されているのが特徴である。また、縦帯横に確認される装飾文様が芬皇寺址や雁鴨池で確認される宝珠形とは異なり、半球形の文様を付し、その上面と周囲に竹管状の文様を加えて表現するのが特徴である。

扶余の伝金剛寺鴟尾は現在、扶余郡恩山面琴公里に位置している金剛寺址寺域において確認されたものではなく、寺域の北側約 100 m離れた畑で２組が採集されたものである。

鴟尾の姿はどれも胴部が無文で、縦帯に約 4.5 ～ 5.0cm 程の長方形粘土板を付して、その上に半球型の文様を取り付けるのが特徴である。扶余伝金剛寺址鴟尾については科学的な分析が行われたが、黄鉉盛·申沿洪·李珉喜（2018）は金剛寺址で出土した三国時代（百済）から高麗時代にかけての瓦片 13 点と伝金剛寺址鴟尾２点について走査型電子顕微鏡とエネルギー分散型分析を実施し、伝金剛寺址鴟尾は同時期に製作され、統一新羅から高麗時代の資料とよく似た分布を見せることを確認した。また、OSL 年代測定も実施し、伝金剛寺出土鴟尾２点（RT －１～２）はそれぞれ A.D.818~1018 年と A.D.918~1118 年に製作されたことが確認された（国立扶余博物館 2018）。したがって、このような縦帯表現が統一新羅末期に登場した可能性は排除することができない。

D　おわりに

以上、これまでの検討内容を踏まえると、三国時代の鴟尾の変遷過程は、百済において最もよく把握できる。百済の寺院の鴟尾は縦帯の形態から２種の類型に分類できる。

１類型の縦帯は扶余・陵山里寺址出土品のように沈線で表現されて、後に突線に変化していく。胴部は古い段階から段を施文するが、時代が下るにつれ、王興寺址上層出土品のように胴部が無文に変化する。

２類型は縦帯の形態によって２－１と２－２類型に分類できた。２－１類型の最も代表的な出土品は扶余・王興寺址鴟尾で、最大の特徴は縦帯内部が装飾豊かに飾られるという点である。この類型の完形品は王興寺址東建物址出土品しかなく、正確な変遷の様相を把

握することは難しい。ただし、王興寺址東建物址出土品が非常に装飾豊かに製作され、かつ胴部下段の一部が無文化されたのを見ると、王興寺址よりもう少し早い時期の鴟尾が存在したことをうかがわせる。２－２類型の代表的な出土品は扶余・扶蘇山廃寺址、扶蘇山城、益山･弥勒寺址出土品があり、縦帯が２重に表現され、内部は沈線で施文されている。鴟尾は徐々に胴部が無文化され、縦帯の幅がより広いものに変化していく。

新羅の鴟尾は慶州・皇龍寺址鴟尾のみが知られていて、その変遷過程を詳かに把握することは難しい。ただし、鴟尾胴部の無文化、そしてこの鴟尾と共伴した遺物などを見ると、皇龍寺址鴟尾は７世紀半ば前後あるいはそれより遅い時期に製作されたと考えられる。

南北国時代の鴟尾は形態が多様で、大部分が破片で出土しているため、正確な姿を把握するのは難しい。ただし、その共通点を抽出し、どのような形態変遷をたどるかという傾向を検討した。先述したように南北国時代の都城では計６つの類型の鴟尾が確認された。

１類型は縦帯が１重の鴟尾で計４種類に分類できるが、そのうち３種の類型に関して遺物が確認できる。１－１類型は慶州・雁鴨池①、慶州・高仙寺址、慶州・四天王寺址西回廊址西側瓦廃棄遺構出土鴟尾が挙げられ、このような鴟尾は中国の初唐から晩唐に至るまで確認されているものである。また､韓国の８世紀中頃の仏殿図でも確認されることから、この鴟尾は南北国時代の全時期にわたって持続的に製作されたことがうかがえる。１－２類型はこれまで韓国で出土していなかったが､中国の敦煌莫高窟 338 窟（初唐）と西安･大雁塔門楣石刻鴟尾などで多数確認されているため、今後調査を進めるなかで出土が確認される可能性が高いと考えられる。

１－３類型は１重の縦帯＋胴部無文＋宝珠形装飾板鴟尾で、統一新羅で出土量が最も多い。この類型の登場は７世紀後半に造営されたと考えられる慶州・東宮・月池の１文化層から確認されているため、この類型の上限は７世紀後半代と考えられる。また、その使用時期は８世紀半ばに築造されたと考えられている芬皇寺中門、仏国寺、高仙寺址などで出土しているため、少なくとも８世紀半ば頃までは製作されたとみることができよう。

１－４類型の最も大きな特徴は胴部が飾られるという点である。このような鴟尾は伝仁容寺址鴟尾において確認されており、ここで出土する遺物の大部分が８世紀後半であることから、この鴟尾もおおよそ８世紀後半以降に製作されたと推定できる。

２類型は縦帯が２重である鴟尾で計４種に細分でき、そのうち３種が確認できる。２－１類型は南北国時代の都城遺跡では確認されなかったものの、益山・王宮里遺跡などで報告された資料がある。２－２類型は２重の縦帯＋胴部無文＋半球形装飾板付の鴟尾で、代表的なものは中京顕徳府西古城１号宮殿址で出土したものがある。西古城の築造時期は８世紀前半あるいは中頃とされているため、このような鴟尾は大体８世紀前半から半ばにかけて製作されたものであろう。また、四天王寺鴟尾は下部が破損しており、正確な姿を推定することができないが、概して同じ時期に製作されたものと推定される。２－３類型は２重縦帯＋胴部無文＋半球形装飾板付鴟尾で、西古城２号宮殿址東・西側拝殿と５号宮殿

址そして上京龍泉府９号寺址で出土しており、上京城と西古城の造成時期などを考慮するとおおよそ２－２類型と近い時期に製作されたものと考えられる。

２－４類型の最も大きい特徴は頭部が獣の形態に変化し、胴部が草花文などで飾られる点である。このような鴟尾は、現在までに上京城１号寺址でのみ報告されている。これまで報告された中国の資料を見ると、頭部の形態変化は中唐に初めて目にすることができ、晩唐すなわち９世紀中頃に完成形となり、獣の形態をかたどって製作されるようになる。したがって､この類型の鴟尾もほぼ９世紀代には製作され始めたものと推定される。慶州･芬皇寺址表採品は全体的な形態は把握できないが、胴部は草花文で飾られて、縦帯内部が２－２類型と２－３類型に比べてより装飾が多くなるのを見ると、おおよそこの時期に製作されたものと推定される。

最後に、原州・法泉寺址、清州・興徳寺址、扶余・伝金剛寺址鴟尾などに対して検討を加えよう。このような形態の鴟尾は、その形態が以前に報告されたものと異なり、その時期を推定するのは大変難しい。ただ、統一新羅の鴟尾の形態が維持される中で、多様な形態の姿を帯びるものとみて、羅末麗初あるいは高麗初期の鴟尾と推定したい。

以上のように韓国における鴟尾の変遷過程を検討してきたが、鴟尾は大体が１ｍ前後の大きさで製作され、出土する場合もほとんどが破片となっているため、鴟尾の形態を把握するには非常に多くの困難が伴う。また、鴟尾の復元作業も、扶余 王興寺址出土鴟尾を例に挙げればほぼ一年以上の時間がかかり、決して容易な作業とはいえない。ただ、このような理由のために鴟尾に対する緻密な研究がいまだおこなわれていない点は非常に残念である。したがって、このような諸般の事情に対して、ねばり強く鴟尾の復元と研究を持続的に進め、古代鴟尾の様相を明らかにすることができる日を期待したい。

＊本稿は、洪 2018・2019 を基に再構成したものである。

（韓国国立文化財研究所）

註

1　ただし、唐の泰陵の東南角闕において出土した鴟尾資料（726）を見ると（今井晃樹 2018 p.155)、その上限の時期はもう少し上げることができると思われる。

参考文献

〔韓国語〕

金　有植 1993「韓国古代鴟尾彫刻の考察」東国大学校大学院 碩士学位論文

金　有植 1996「新羅鴟尾についての一研究」『文化史学』19　韓国文化史学会

金　有植 2018「韓国古代鴟尾の変遷過程」『鴟尾 天の声を仰ぐ』　国立扶余文化財研究所

金　珠美 2003「玉虫厨子の製作時期と製作者に対する考察」『文化史学』19 韓国文化史研究会

羅　采華・朱　南哲 1990「鴟尾に関する研究」『大韓建築学会論文集』６巻２号 通巻 28 号

朴　昭姫 2009「統一新羅鴟尾の製作技法研究：慶州地域出土品を中心に」慶州大学校 碩士学位論文

呉　虎錫 2016「日本古代石塔の建立背景と展開」『美術史学研究』第 292 号　韓国美術史学会

徐　聲勲 1979「百済鴟尾考」『美術史学研究』第 140 号・第 141 号　韓国美術史学会
王　子奇 2018「中国古代鴟尾の起源と初歩的発展」『鴟尾 天の声を仰ぐ』　国立扶余文化財研究所
李　善姫 2017「鴟尾の規格と製作技法及び活用に関する研究」『皇龍寺中門復原設計のための考証研究』　国立文化財研究所
李　善姫 2018「南北時代鴟尾の変化過程」『鴟尾 天の声を仰ぐ』　国立扶余文化財研究所
E. V. シャフクノフ、A.L. イヴリーエフ　1992「沿海州で出土した仏板」（宋基豪訳）『美術資料』50　国立中央博物館
E.V. シャフクノフ 1996『ロシア沿海州と渤海の歴史』（宋基豪・鄭昔培訳）大宇学術叢書 翻訳 97
申　昌秀・崔英姫 2015「韓国・日本・中国 瓦磚の研究史」『皇龍寺 瓦磚及び鉄製遺物 復元考証研究』　国立文化財研究所
チャンサンリョル 1967「遼東城塔」『考古民俗』1　社会科学院出版社
張　憲徳 2018「建築学的に検討した鴟尾」『鴟尾 天の声を仰ぐ』　国立扶余文化財研究所
鄭　昔培 2012「渤海 上京城の都市計画」『渤海 上京城の昨日と今日そして明日』（冬季学術発表会 発表資料集）高句麗渤海学会
趙　原昌 2012「皇龍寺址出土大型鴟尾の編年と使用者の検討」『先史と古代』36 韓国古代学会
崔　普鎬 2011「渤海軒丸瓦の特徴と性格研究」檀国大学校 碩士学位論文
黄　鉉盛・申　沿洪・李　珉喜 2018「金剛寺出土鴟尾の造成成分および製作年代推定と国内出土鴟尾の造形性の比較　研究」『東アジアの鴟尾』（特別展 鴟尾 国際学術シンポジウム 発表資料集）　国立扶余博物館
洪　パルグム 2018「百済泗沘期寺院出土鴟尾の考察」『百済文化』59 輯
洪　パルグム 2019「南北国時代鴟尾の変化過程－都城出土品を中心に－」『古文化』94 輯
〔中国語〕
建築科学研究院建築史編委会 1980『中国古代建築史』中国建筑工芸出版社
馮双元 2011「鴟尾起源考」『考古與文物』1 期　陝西省考古研究所
趙青・馬莎 2007「鴟尾小考」『装飾』7 期　清華大学
臧　麗娜 1999「鴟尾考略」『東南大学学報（社会科学版）』第 1 巻第 4 期　東南大学
張　明皓 2016「東亜文化圏鴟尾的類型研究初探」『敦煌研究 総第 155 期』敦煌研究編集部
周源 2016「鴟尾越文化　起源考」『福建文博』2 期 福建省考古博物館学会・福建博物院
韓冰 2015「漢代建筑上的屋脊装飾」『中原文物』第 2 期　首都博物館
胡　正旗・李　芋均 2012「也 談“ 鴟尾 ”,“ 鴟吻 ”」『長江師範学院学報』第 28 巻第 9 期　長江師範学院学報編集部
傅　熹年 主編 2001『中国古代建築史』　中国建築工芸出版社
吉林省文物考古研究所他 2007『西古城』　文物出版社
〔日本語〕
廣岡孝信 1998「鴟尾と出土地－素材変遷と古代の終焉－」『橿原考古学研究所論集』13　吉川弘文館
今井晃樹 2010「中国の鴟尾・鴟吻」『平城宮第一次大極殿の復原に関する研究－ 4　瓦・屋根』（学報第 80 冊）奈良文化財研究所
今井晃樹 2018「東アジアにおける鴟尾の普遍性と多様性」『鴟尾 天の声を仰ぐ』　国立扶余文化財研究所
大脇　潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』　至文堂
金　誠亀・森　郁夫 2009『韓日の瓦』（帝塚山大学出版会 叢書）帝塚山大学出版会
百橋明穂 1983『日本の美術　No.204 飛鳥・奈良絵画』　至文堂
鷲塚泰光 1978『日本の美術　No.147 石仏』　至文堂
〔報告書〕
江原考古文化研究院 2017『原州 法泉寺Ⅲ』
国立文化財研究所 1996『扶蘇山城』
国立扶余文化財研究所 1996『弥勒寺 遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

国立扶余文化財研究所 2011『扶余 定林寺址』
国立扶余博物館・扶余郡 2000『陵寺』
国立博物館 1969『金剛寺』
国立文化財研究所 2007『中国上京城の古建築』（東アジア古代建築比較研究第 1 集）
国立慶州文化財研究所・慶州市 2015『芬皇寺 発掘調査報告書Ⅱ』（学術研究叢書 92）　国立慶州文化財研究所
国立慶州文化財研究所 2014『四天王寺Ⅲ』（学術研究叢書 86）　国立慶州文化財研究所
国立慶州文化財研究所·慶州市 2009『伝仁容寺址 発掘調査中間報告書』国立慶州文化財研究所学術研究叢書 54
国立文化財研究所 2007『建築遺跡 発掘調査資料集－ 寺院編Ⅱ 江原・慶北・慶南』
国立扶余文化財研究所 2018『鴟尾 天の声を仰ぐ』
国立清州博物館 2017『清州 興徳寺』
南北歴史学者協議会 2013『世界文化遺産 高句麗古墳壁画』
文化財管理局 文化財研究所 1989『弥勒寺 遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
文化公報部 文化財管理局 1976『仏国寺 復元工事報告書』
文化公報部 文化財管理局 1974『雁鴨池 発掘調査報告書』高麗書籍株式会社
文化財管理局 文化財研究所 1984『皇龍寺 遺跡発掘調査報告書 1』高麗書籍株式会社
国立文化財研究所・ロシア科学院 極東支部 歴史学考古学民俗学研究所 2007「沿海州の文化遺跡 1」
中国自然科学基金委員会・建設部科学技術司 2009『中国 古代建築史』中国建築工業出版社
敦煌文物研究所編 1999『中国石窟 敦煌莫高窟 五』文物出版社
敦煌研究院 2001『中国石窟 敦煌建築画巻』 商務印書館
周原博物館 2000『古文物称謂図典』
河南博物院 2009『河南博物院』文物出版社
〔インターネットサイト〕
http：//portal.nrich.go.kr/（国立文化財研究所 文化遺産研究知識ポータル）
http：//www.cha.go.kr/ （文化財庁）
http：//db.history.go.kr/ （韓国史データベース）
http：//hanchi.ihp.sinica.edu.tw/（漢籍電子文献資料庫）

図版出典

第 1 図：洪 2018 より転載。
第 2 図 1 ：文化財庁ホームページより転載。
　　2 ：国立扶余文化財研究所 2018 より転載。
第 3 図 1 ：国立慶州博物館 1995 より転載。
　　2 ：国立慶州文化財研究所 2014 より転載。
　　3 ：国立扶余文化財研究所 2018 より転載。
　　4 ：国立扶余文化財研究所 2018 より転載。
第 4 図 1 ：吉林省文物考古研究所他 2007 より転載。
　　2 ：国立扶余文化財研究所 2018 より転載。
第 5 図 1 ：国立扶余文化財研究所 2018 より転載。
　　2 ：国立扶余文化財研究所 2018 より転載。
　　3 ：吉林省文物考古研究所他 2007 より転載。
第 6 図 1 ：国立扶余文化財研究所ポータルより転載。
　　2 ：今井 2018 より転載。
　　3 ：国立慶州文化財研究所 2015 より転載。

第１表　鴟尾が確認される三国時代の美術資料

番号	資料名	時期	製作時期	出典
1	安岳１号墳 玄室 北壁	高句麗	４世紀後半	南北歴史学者協議会 2013 pp.128-129
2	安岳３号墳 前室東側 脇室 東西壁	高句麗	４世紀中頃	南北歴史学者協議会 2013 pp.34-35, 42
3	龍岡大墓 前室南壁	高句麗	５世紀中頃	南北歴史学者協議会 2013 p.56
4	薬水里古墳 前室西壁	高句麗	５世紀初	南北歴史学者協議会 2013 pp.172-173
5	遼東城墓	高句麗	４世紀後半	장상렬 1967 p.24
6	梅山里 四神塚北壁	高句麗	５世紀後半～６世紀前半	徐聲勳 1979 p.5
7	百済 山水文磚	百済	―	国立扶余文化財研究所 2018 p.51

第２表　鴟尾が確認される南北国時代の美術資料

番号	資料名	時期	出典	備考
1	新羅 白紙墨書大方広仏華厳経 仏殿図	754～755	文化財庁ホームページ	絵画
2	蔚山 中山里 収集品（龍文磚）	―	国立扶余文化財研究所 2018 p.84	磚
3	出土地未詳 収集品（殿閣文磚）	―	国立扶余文化財研究所 2018 p.18	磚
4	清道 仏霊寺 磚塔	―	장현덕 2018 p.189	塔
5	沿海州 ヴィーチャシ湾出土 青銅製仏板 鴟尾	―	E.V.Shavkunov・A.L.Ivliev著・ 宋基豪訳 1992 pp.1-2	仏板

第３表　形態を推定できる百済の鴟尾

番号	鴟尾名	出土地	出典	備考
1	扶余 陵山里寺址 鴟尾	中門址 南側 基壇面	国立扶余博物館 2000 p.190	1類型
2	扶余 金剛寺址 鴟尾	―	国立博物館 1969 図版43-1	
3	扶余 定林寺址 鴟尾	西回廊址 周辺	国立扶余文化財研究所 2015 p.225	
4	扶余 王興寺址 鴟尾	講堂址 上層	国立扶余文化財研究所 2016 p.69	
5	扶余 王興寺址 鴟尾	講堂址	国立扶余文化財研究所 2016 p.55	2-1類型
6	扶余 王興寺址 鴟尾	東建物址	国立扶余文化財研究所 2016 pp.132-133	
7	扶余 扶蘇山廃寺址 鴟尾	―	国立扶余博物館 1996 pp.37-39	2-2類型
8	扶余 扶蘇山城 鴟尾	―	国立文化財研究所 2018 pp.60-61	
9	益山 弥勒寺址 鴟尾	―	国立文化財研究所 1996 p.452	

第４表　形態を推定できる南北国時代の鴟尾

番号	時期	鴟尾名	出土地	参考文献
1	統一新羅	慶州 雁鴨池 鴟尾①	—	文化財管理局1978 pp.138-141
2	統一新羅	慶州 雁鴨池 鴟尾②	—	文化財管理局1978 pp.138-141
3	統一新羅	慶州 雁鴨池 鴟尾③	—	文化財管理局1978 pp.138-141
4	統一新羅	慶州 雁鴨池 鴟尾④	—	文化財管理局1978 pp.138-141
5	統一新羅	慶州 東宮・月池 鴟尾	２号石積遺構	国立慶州文化財研究所2013 p.292
6	統一新羅	慶州 高仙寺址 鴟尾	—	文化財管理局　慶州史跡管理事務所1977 p.65
7	統一新羅	慶州 仏国寺 鴟尾	—	文化公報部 文化財管理局1976 p.102
8	統一新羅	慶州 四天王寺址 鴟尾	西回廊址 西側瓦溜	国立慶州文化財研究所2014 p.288
9	統一新羅	慶州 四天王寺址 鴟尾	西回廊址 西側建物址①	国立慶州文化財研究所2014 p.287
10	統一新羅	慶州 四天王寺址 収集 鴟尾	収集	金有植1993 p.30
11	統一新羅	慶州 感恩寺址 鴟尾	—	国立慶州文化財研究所1997 p.165
12	統一新羅	慶州 芬皇寺址 鴟尾	１次再建 中門址	国立慶州文化財研究所2015 p.1282
13	統一新羅	慶州 芬皇寺址表採 鴟尾	表採	国立慶州文化財研究所2015 p.1283
14	統一新羅	慶州 伝仁容寺址 鴟尾	「＋」字形 建物址	国立慶州文化財研究所2009 p.116
15	渤海	上京 龍泉府 ９号寺址 鴟尾	—	国立扶余文化財研究所2018 p.112
16	渤海	中京 顕徳府 西古城 １号宮址 鴟尾	—	吉林省文物考古研究所他2007 p.101
17	渤海	中京 顕徳府 西古城 ２号宮址 鴟尾	西側拝殿	吉林省文物考古研究所他2007 p.171
18	渤海	中京 顕徳府 西古城 ２号宮址 鴟尾	東側拝殿	吉林省文物考古研究所他2007 p.186
19	渤海	中京 顕徳府 西古城 ５号宮址 鴟尾①	—	吉林省文物考古研究所他2007 p.281
20	渤海	中京 顕徳府 西古城 ５号宮址 鴟尾②	—	吉林省文物考古研究所他2007 p.281
21	渤海	上京 龍泉府 １号寺址 鴟尾	—	国立扶余文化財研究所2018 p.111

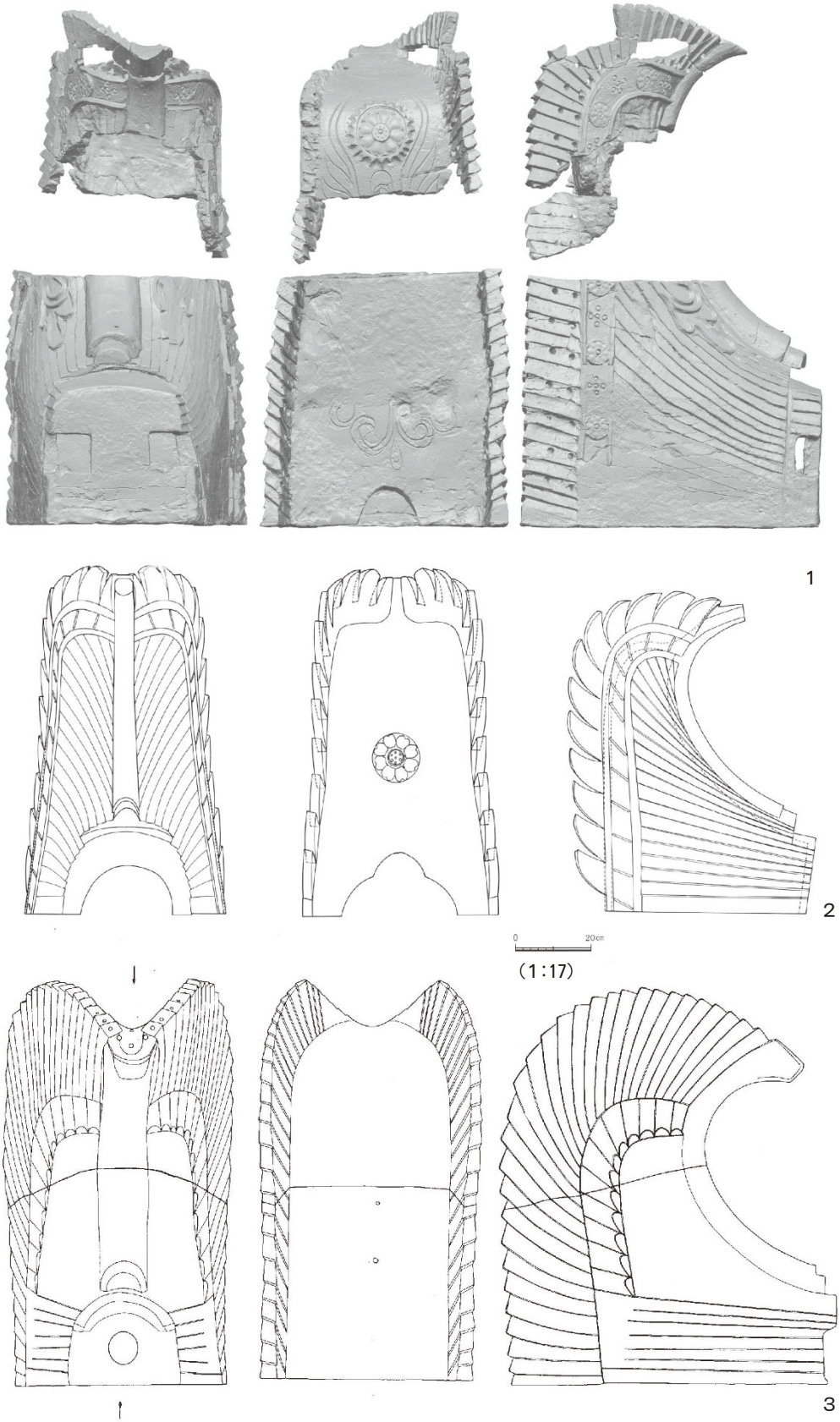
第５表　南北国時代 鴟尾の変遷過程

鴟尾名	1類型			
	1-1	1-2	1-3	1-4
慶州 雁鴨池 鴟尾①	■			
慶州 高仙寺址 鴟尾	■			
慶州 四天王寺址 西回廊址 西側瓦廃棄遺構 鴟尾	■			
慶州 雁鴨池 鴟尾②			■	
慶州 雁鴨池 鴟尾③			■	
慶州 雁鴨池 鴟尾④			■	
慶州 東宮・月池 鴟尾			■	
慶州 芬皇寺址 中門 鴟尾			■	
慶州 感恩寺址 鴟尾			■	
慶州 仏国寺 鴟尾			■	
慶州 四天王寺址 表採 鴟尾			■	
慶州 伝仁容寺址 鴟尾				■

鴟尾名	2類型			
	2-1	2-2	2-3	2-4
慶州 四天王寺址 西回廊址 西辺建物址① 鴟尾		■		
中京 顕徳府 西古城 1号宮址 鴟尾		■		
上京 龍泉府 9号寺址 鴟尾			■	
中京 顕徳府 西古城 2号宮址 東側拝殿 鴟尾			■	
中京 顕徳府 西古城 5号宮址 鴟尾			■	
中京 顕徳府 西古城 5号宮址 鴟尾			■	
中京 顕徳府 西古城 5号宮址 鴟尾			■	
慶州 芬皇寺址　収集 鴟尾				■
上京 龍泉府 1号寺址 鴟尾				■

第６表　統一新羅～高麗初 鴟尾

番号	鴟尾名	出土地	参考文献	遺跡 築造年代
1	原州 法泉寺址 鴟尾	中心寺域 南側	江原考古文化研究院 2017 p.525	725?／8世紀後半?／928?／11世紀（智光国師海麟）
2	清州 興徳寺址 鴟尾	金堂址 北側	国立清州博物館 2017 p.168	849?
3	扶余 伝金剛寺址 鴟尾	発見申告品	国立扶余文化財研究所 2018 pp.98-99	?



第１図　百済　泗沘期　鴟尾（１：扶余　王興寺址，２：扶余　扶蘇山廃寺，３：益山　弥勒寺址）

1. 新羅 白紙墨書大方広仏華厳経 仏殿図
（文化財庁　ホームページ）

２．慶州 雁鴨池出土 鴟尾①
（国立扶余文化財研究所 2018：92）

第２図　１-１類型の鴟尾

１．慶州 雁鴨池出土 鴟尾③
（国立慶州博物館 1995：173）

２．慶州 東宮・月池 鴟尾
（国立慶州文化財研究所 2014：379）

３．慶州 芬皇寺址中門 鴟尾
（国立扶余文化財研究所 2018：87）

４．　慶州 伝仁容寺址 鴟尾
（国立扶余文化財研究所 2018：95）

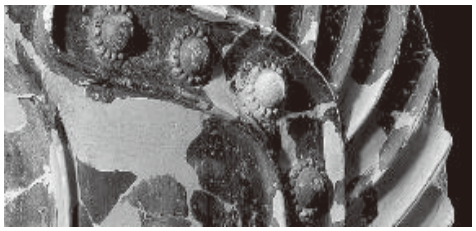
第３図　１－３類型の鴟尾（１－３）と１－４類型（４）

1．中京 顕徳府西古城１号宮殿址出土鴟尾
（吉林省文物考古研究所他 2007：図版30）

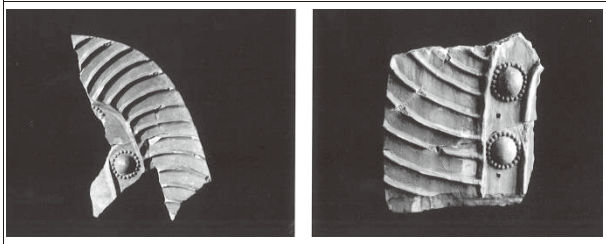
2．慶州 四天王寺西回廊址西建物址①出土鴟尾
（国立扶余文化財研究所 2018：91）

第４図　２－２類型の鴟尾

1. 上京 龍泉府９号寺址鴟尾
（国立扶余文化財研究所 2018：112）



2．上京 龍泉府９号寺址鴟尾　縦帯細部



３．中京 顕徳府西古城２号宮殿址西側拝殿（写真左）
及び５号宮殿址②（写真右）出土鴟尾
（吉林省文物考古研究所他 2007：図版30）

第５図　２－３類型の鴟尾

１．上京 龍泉府１号寺址鴟尾
上部（国立扶余文化財研究所
研究知識ポータル）

２．上京 龍泉府１号寺址鴟尾
下部（今井晃樹 2018：163）

３．慶州 芬皇寺収集品
（国立慶州文化財研究所 2015：1291）

第６図　２－４類型の鴟尾

１．原州 法泉寺址 鴟尾

（国立扶余文化財研究所 2018：103）

２．清州 興徳寺址 鴟尾

（国立扶余文化財研究所 2018：106）

第７図　統一新羅から高麗の鴟尾

10　東北地方の鴟尾

佐川　正敏

東北地方の鴟尾は、陸奥国南部にあたる宮城県仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙附属の郡山廃寺跡、福島県福島市腰浜廃寺跡、同市宮沢瓦窯跡、福島県相馬市黒木田遺跡から破片資料が出土、あるいは採集されている。いずれも７世紀後半～ 700 年頃のものである。

A　仙台市郡山廃寺跡出土の鴟尾

郡山遺跡Ⅱ期官衙の造営年代　仙台市郡山遺跡は、太白区 JR 長町駅の東方の住宅街に位置し、仙台市教育委員会文化財課の発掘調査の成果によって、国史跡に指定された（仙台市教育委員会 2005）。その遺構は、乙巳の変後の７世紀第３四半期に造営されたⅠ期官衙と７世紀末～８世紀初期の藤原宮期に造営されたⅡ期官衙に区分される。とくに、後者は ①外郭の平面形が 1400 小尺四方の正方形である、②正殿の南側に複数の建物が朝堂院のように対称的に配置されている、③外郭外の大溝の 150 小尺外側にほぼ正方形に外溝をめぐらし、その間を藤原宮のように空閑地とすることから、藤原宮をモデルとして造営されたと考えられている（今泉 2005）。そしてⅡ期官衙は、④正殿の東側にある方形池が奈良県明日香村石神遺跡の方形池に類似するので、ここが蝦夷服属儀礼の施設であったと推定されること、⑤郡山廃寺跡（第１図）は観世音寺式伽藍配置と推定され、その規模も陸奥国府多賀城付属の多賀城廃寺跡に類似することから、多賀城に先行する陸奥国府であったことが有力視されている。

郡山遺跡Ⅱ期官衙の年代については、藤原宮をモデルとすることに加え、粟田真人を執節使とする遣唐使（702）が 704 年に帰国すると、ほどなく平城京遷都の建議が検討されていることから、694 ～ 704 年ということになろう。また今泉隆雄氏は、Ⅱ期官衙で採用された尺度が１歩＝６大尺であること、方形池を使用した服属儀礼が大宝令より古い制度であることから、Ⅱ期官衙の造営年代を 700 年以前と推定した（今泉 2005）。

郡山廃寺跡の造営年代　以上の検討より、Ⅱ期官衙附属の郡山廃寺跡は、700 年までには造営が開始されていたと推定される。また岩永省三氏は、大宰府観世音寺跡の創建軒瓦である老司Ⅰ式の祖型が、藤原宮中期段階の藤原宮式軒丸瓦と考えて大過ないと指摘している（岩永 2009）。郡山廃寺跡と大宰府観世音寺跡は、ほぼ同時期に造営が開始されていたことになろう。所用軒丸瓦はＡ～Ｄ種があり、筆者はＡ種の笵傷Ⅰ段階→Ａ種の笵傷Ⅱ段階→Ｃ種が金堂、塔、講堂の創建用で、文様が退化したＢ種とＤ種は補修用と予想している（佐川 2012）。この補修の可能性は、南門跡に新旧二時期の柱穴があり、後

述する鴟尾の破片が新期の柱穴から出土したこととも整合する。さらに、金堂か講堂の屋根修理時に用いられた軒丸瓦２種と鴟尾は多賀城と多賀城廃寺跡から１点たりとも出土していないこと、郡山廃寺跡からロクロ成形の土師器杯が出土していることから、郡山廃寺跡は 724 年に国府を移転した後も、８世紀半ばまで機能していた可能性が指摘されている（仙台市教委 2005）。

郡山廃寺跡の鴟尾　鴟尾はすべて無文の破片で、鰭部も無段で縦帯もない。まず、第 46 次調査で検出された東向きの金堂跡の基壇外装抜き取り痕跡と推定される区画溝（報告書中の名称）である北辺溝 SD532 から１点、SD562 から２点が出土した。つぎに、第 12 次調査で検出された講堂跡掘込地業内北寄りの東西溝 SD95（佐川は基壇北辺の外装抜き取り溝と推定）からは１個体分と考えられる鴟尾の破片４点ほどが出土し、復原図が提示された（第２図）。さらに、外郭南門跡の新期柱穴２基の掘方から各２点、１点の鴟尾片が出土した。また、外郭塀北東辺の内側の井戸 SE157（方位から見て外郭や中心伽藍の造営より遅れる）の掘方と井戸枠埋土底面から各１点の鴟尾片が出土した（第３図）。以上の鴟尾は、出土位置から見て、金堂跡大棟の２点と講堂跡大棟の２点、計４点の一部であると推定される。そして、その出土状態から見て、建物や基壇の解体に伴って大棟から降ろされ、破壊され、その一部の破片が基壇外装抜き取り溝へ廃棄された可能性がある。鴟尾の破片が建て直された新期の南門跡の柱掘方と後出の井戸 SE157 に入り込んだ背景については、金堂跡と講堂跡の解体前に４点の鴟尾の一部が、大棟から降ろされたり、落下するような事態が発生したことが想定されるが、郡山廃寺跡の終末年代も考慮しながら検討を深める必要がある。

B　福島市腰浜廃寺跡および宮沢窯跡出土の鴟尾

腰浜廃寺跡と造営年代　腰浜廃寺跡は、福島県福島市内を流れる阿武隈川右岸に位置し、信夫評・郡家の付属寺院と推定される。1961 年に学術的発掘調査が実施され、鴟尾の破片を含む大量の瓦が出土し、礎石や根石と推定される遺構も断片的に検出されたが、寺院の堂宇の実態は不明であった（福島市史編纂準備委員会 1965）。その後、1978 ～ 1979 年に実施された発掘調査によって掘込地業をもつ基壇跡が検出され、金堂跡と推定された（福島市教育委員会 1980）。創建用軒丸瓦は、大小（100 型式と 101 型式）の類似する有稜素弁８弁蓮華文軒丸瓦である。筆者はやや小型で花弁が端正な 101 型式が滋賀県大津市の衣川廃寺跡例に酷似し、100 型式が花弁の端正さが劣るので、101 型式が 100 型式に先行すると推定する（佐川 2012）。丸瓦部の接合手法は、100 型式が広端凹面寄りを削った丸瓦用粘土円筒による嵌め込み式であり、101 型式が衣川廃寺例と同様の半截丸瓦による接合式である。両軒丸瓦の二種の接合手法は、二群の造瓦工人の前後した関与を示していよう。筆者は、腰浜廃寺跡創建用軒丸瓦の年代について、衣川廃寺跡の年代など後

述の理由により７世紀第３四半期と推定している。

不明の伽藍については、創建用軒丸瓦が貼付段顎の二・三重弧文軒平瓦とセットになること、後述の福島県相馬市の黒木田遺跡に存在する奈良時代を含む８世紀代の軒瓦をほとんど欠いていること、腰浜廃寺跡には９世紀後半の大規模な補修用と考えられる複数種の軒丸瓦や軒平瓦が大量に存在すること、それらのほとんどが腰浜廃寺跡専用であることから見て、複数の堂塔の存在が確実視される。したがって、創建段階には大小二組の軒丸瓦、および重弧文軒平瓦で葺いた伽藍がある程度完成していたと推定される。

腰浜廃寺跡の鴟尾　鴟尾は、1961 年の発掘調査で出土した１点（第４図上：福島市史編纂委員会 1965）と岩越二郎氏の採集品１点（第４図下）である。前者は、鰭部端面を残す左側面と腹部の取り付き部分からなる破片（横 34cm、縦 15cm、厚６mm）で、内外面ともに無文で、縦帯もない。後者は、鰭部端面をわずかに残す右側面と腹部の取り付きからなる破片であり、外面に段を思わせる弱い高まりが認められるが、ナデ調整の痕跡であり、内面には段もなく、縦帯もない。内面には布目痕がある。腹部からの出は、５cm 程度である。

宮沢窯跡と鴟尾　宮沢窯跡は、福島市街地から北東５km に位置し、1961 年の発掘調査で少なくとも３基（第１、４、５号）の瓦陶兼用窯跡が検出されたが、周囲にも複数の窯跡が埋蔵されていると推定された（福島市史編纂準備委員会 1965）。窯跡はすべて地下式無段登り窯であり、灰原も含めて出土した重弧文軒平瓦の特徴から見て、創建用瓦を焼成した窯跡である（第５図）。このうち第５号窯跡（第６図）からは、鴟尾の側面の小破片が２点出土し、うち１点には腹部の取り付き部分がわずかに残されていた 。

宮沢窯跡から３km 南には赤埴窯跡があり、1961 年の発掘調査によって、腰浜廃寺跡の９世紀後半の瓦を焼成したことが判明した（福島市史編纂準備委員会 1965）。この段階の瓦は、宮沢窯跡から１点も出土していないことから、宮沢窯跡は腰浜廃寺跡の主として創建段階（一部８世紀代を含む）の瓦を焼成したことは明らかである。したがって、鴟尾の破片は腰浜廃寺跡だけで出土したので、宮沢窯跡で焼成されて搬入されたといえる。

C　相馬市黒木田遺跡（中野廃寺跡）採集の鴟尾

黒木田遺跡の造営年代　黒木田遺跡は、福島県相馬市市街地の西方に位置し、宇多評・郡家の付属寺院と推定される（相馬市教育委員会 1990）。ここからは、方位を異にする礎石基壇跡が少なくとも２棟重複しており、出土した軒瓦にも７世紀後半から９世紀までのものがあるので、この寺院跡には２時期以上にわたる創建や再建、補修の経緯があったと考えられる（図７）。これらの瓦葺き礎石建物が南面する東西棟であるので、おそらくこの建物跡は金堂跡か講堂跡であろう。軒瓦の種類の多様さからみれば、その他の堂塔が建っていた可能性はきわめて高い。創建軒丸瓦は有稜素弁８弁軒丸瓦（黒木田軒丸

瓦Ｃ類）一種であり、薄手品と厚手品がある。組み合う軒平瓦がなく、平瓦の代用が考えられる。なお、軒丸瓦は点数が少なく、その文様は前期穴太廃寺跡（滋賀県大津市）出土例に類似するので、筆者は７世紀第３四半期に金堂から造営が開始され、８世紀代にかけて伽藍が完成したと推定している（佐川 2012）。

黒木田遺跡の鴟尾　鴟尾は、破片２点が採集され、うち１点は３片を接合したものである（第８図：相馬市史編纂委員会 2014）。２点ともに鰭部端面を留める左側面で、腹部との取り付きを残している。鰭部と腹部の湾曲の度合いから見て、第８図左は左側面中程の破片、第８図右は左側面の頂部の破片と推定される。２点ともに無文で縦帯もない。

Ｄ　考察

筆者は従前より、福島県中通り地区（阿武隈川中上流域）北端に位置する信夫評・郡家附属寺院の腰浜廃寺跡と福島県浜通り地区（太平洋沿岸）北端に位置する宇多評・郡家附属寺院の黒木田遺跡が、乙巳の変後の旧陸奥国（国造制施行域）、すなわち当時の日本の実行支配地北端に最初に造営された寺院であり、その目的は護国思想に基づき郡山遺跡Ⅰ期官衙を前線基地として、仙台平野までを安定した日本の領土とすることを周到に進行させるためと推定している（佐川 2012）。くしくも、その両寺院跡だけで鴟尾が葺かれ、旧陸奥国南端の白河郡家附属の借宿廃寺跡（白河市）と磐城郡家附属の夏井廃寺跡（いわき市）にはなかったことは、両寺院跡が特別な意図の下に造営されたからであろう。

また、両寺院跡出土の軒瓦を検討して、腰浜廃寺跡創建軒丸瓦が大津市の衣川廃寺跡出土例と酷似し、黒木田遺跡出土例が大津市の前期穴太廃寺跡例に類似することから、両寺院跡が７世紀第３四半期に創建されたこと、腰浜廃寺跡例が一種二類であることから金堂と塔、あるいは講堂の創建を、黒木田遺跡例が一種一類であることから金堂のみの創建を推定した。鴟尾は未知の金堂に使用されたのであろう。ちなみに、近江国の両寺院の伽藍配置は、最古の川原寺式の可能性が高く（森 2003）、異境に接する大宰府観世音寺跡と郡山廃寺跡、多賀城廃寺跡が川原寺式の系統の観世音寺式伽藍配置であることに鑑みれば、腰浜廃寺跡も黒木田遺跡も川原寺式か観世音寺式の可能性であったかもしれない（佐川 2012）。

仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙の造営年代は、前述したように藤原京遷都（694 年）～ 700 年と推定される（今泉 2005）ので、所用瓦や鴟尾を含む郡山廃寺跡の造営年代も 700 年頃であると推定される。その所用建物については、出土状況からも金堂跡と講堂跡と推定して大過ない。陸奥国府は 724 年に郡山遺跡Ⅱ期官衙から多賀城跡へ移転し、ほどなく附属の多賀城廃寺跡も造営されたが、郡山廃寺跡の軒瓦も鴟尾も多賀城跡と多賀城廃寺跡で再利用された例は１点もない。したがって、郡山遺跡Ⅱ期官衙段階において鴟尾を

載せた郡山廃寺跡は、大崎平野に立郡して日本の北端を拡張する政策の下、蝦夷の領域を慰撫する護国寺院として格の高い位置づけがなされていたといえよう。これは、７世紀第３四半期に創建された腰浜廃寺跡と黒木田遺跡で鴟尾が載せられた意義を継承するものであろう。

上記三寺院跡で鴟尾が使用されたことは、東国において希少な事例であり、鴟尾はすべて無文で、縦帯もないという共通点がある。この特徴を有する鴟尾は、大津市の穴太廃寺跡出土の「鴟尾３」であり（本書の福庭万里子氏の報告)、黒木田遺跡の創建軒丸瓦が穴太廃寺例をモデルとしたこととつながりがあるのかもしれない。

（東北学院大学）

参考文献

今泉隆雄 2005「付章　古代陸奥国と郡山遺跡」『宮城県仙台市郡山遺跡発掘調査報告書－総括編（1）－』（仙台市文化財調査報告書第 238 集）　仙台市教育委員会

岩永省三 2009「老司式・鴻臚館式軒瓦出現の背景」『九州大学総合研究博物館研究報告』第７号

佐川正敏 2012「寺院と瓦生産からみた律令国家形成期の陸奥国」『古代社会と地域間交流Ⅱ－寺院・官衙・瓦からみた関東と東北－』国士舘大学考古学会編　六一書房

仙台市教育委員会 2005『宮城県仙台市郡山遺跡発掘調査報告書－総括編（1）－』（仙台市文化財調査報告書第 238 集）

相馬市教育委員会 1990「４. 中野廃寺跡」『県営ほ場整備事業　相馬西部地区遺跡分布調査報告書』（相馬市文化財調査報告書第６集）

相馬市史編纂委員会 2014「114. 黒木田遺跡」『相馬市史　第４巻 資料編１原始・古代』

福島市教育委員会 1980『腰浜廃寺２』

福島市史編纂準備委員会 1965『腰浜廃寺』

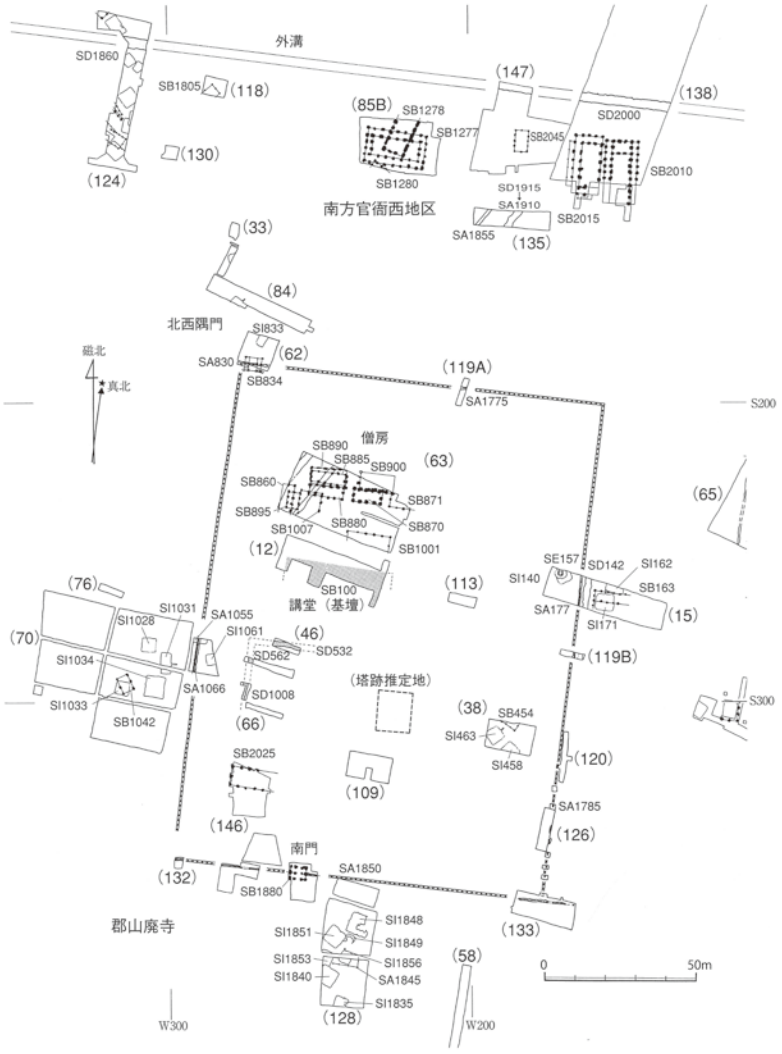
森　郁夫 2003「古代寺院研究上の問題」『学叢』第 25 号　京都国立博物館

図版出典

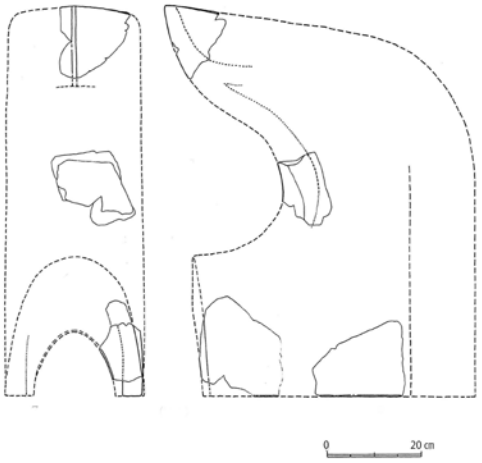
第１～３図：仙台市教育委員会 2005。

第４～６図：福島市史編纂準備委員会 1965。

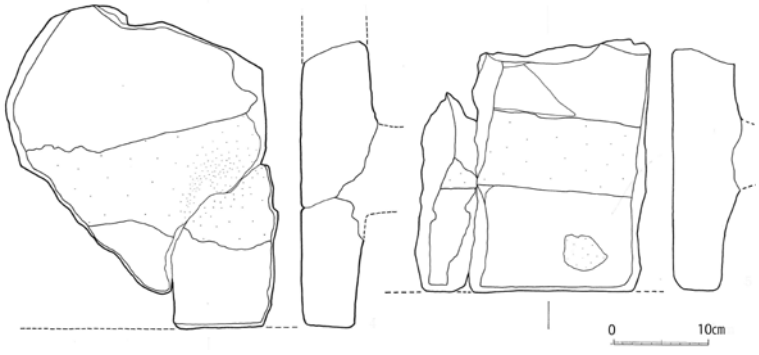
第７～８図：相馬市史編纂委員会 2014。



第１図　仙台市郡山廃寺跡発掘調査区（１：2,500）

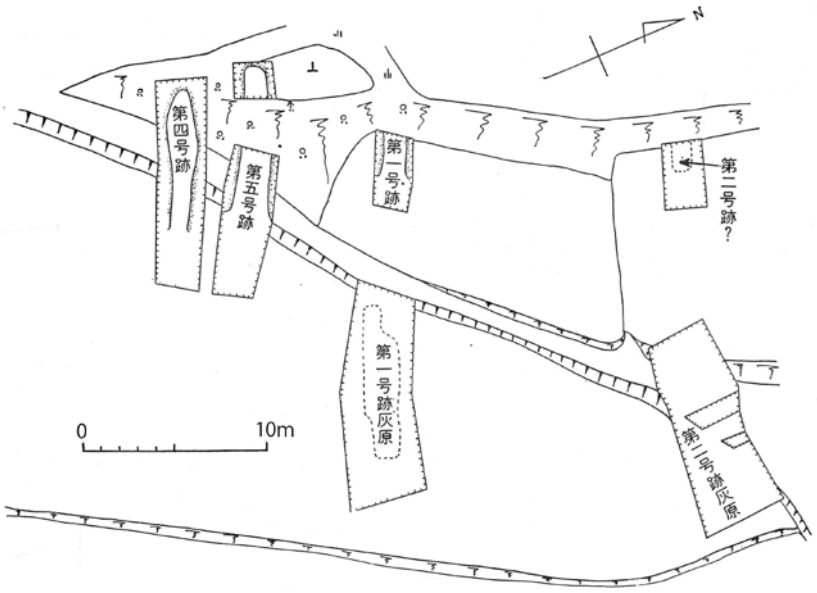


第２図　推定講堂跡出土の
鴟尾破片による復元図（１：16）

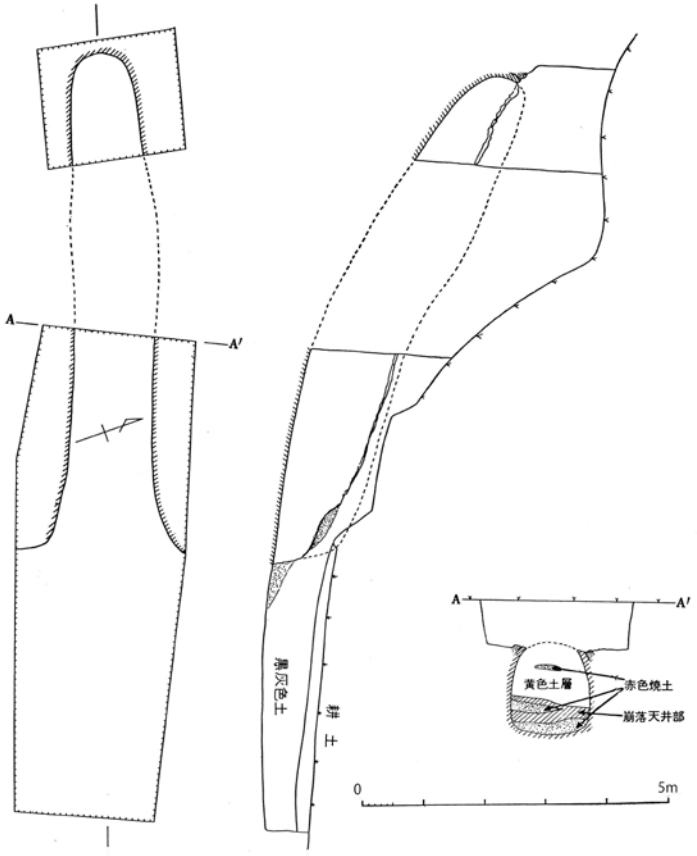


第３図　郡山廃寺跡井戸SE157
出土鴟尾片（１：８）

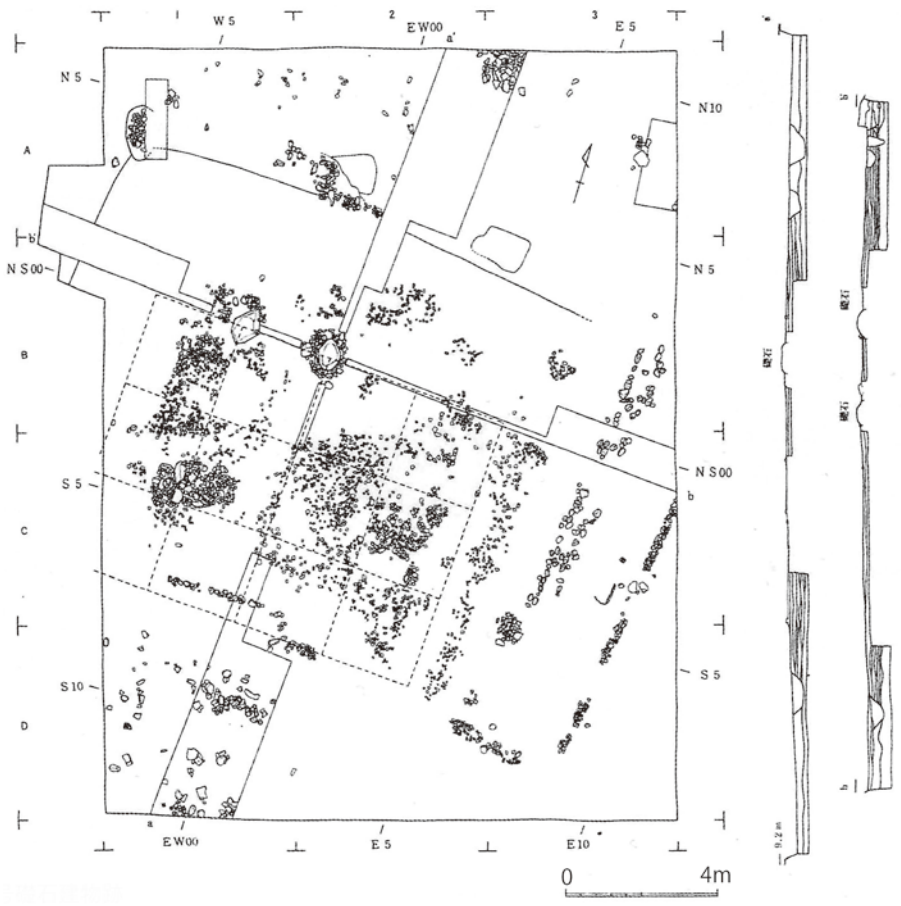
第４図　福島市腰浜廃寺跡
出土・採集の鴟尾



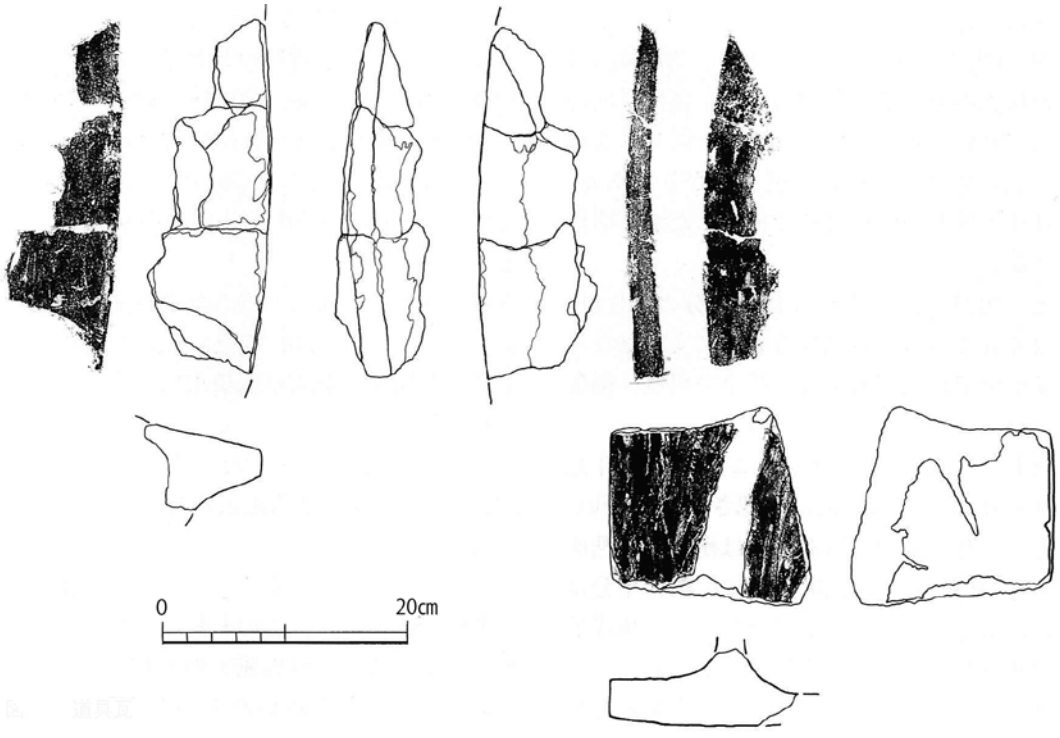
第５図　福島市宮沢窯跡平面図（1：400）



第６図　宮沢窯跡第５号窯跡（1：125）



第７図　相馬市黒木田遺跡遺構図（1：200）



第８図　相馬市黒木田遺跡採集の鵐尾破片（1：6）

11　関東地方の鴟尾

出浦　崇・皆川　貴之

A　はじめに

鴟尾は寺院等の建物の大棟の両端を飾る瓦で、陶製のものが一般的である。関東でも数多くの古代寺院が建立されており、発掘調査も各県で進められているが、鴟尾の出土は西日本に比べて非常に少ないのが現状である。

本報告では上野国群馬郡山王廃寺、下総国結城郡結城廃寺及びその瓦窯である結城八幡瓦窯で出土した鴟尾について報告する。なお、下総国埴生郡龍角寺で、かつて石製鴟尾と報告された資料があるが、手水鉢の誤認であると指摘されているため（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）、今回はとりあげない[1]。

B　上野国山王廃寺

i　山王廃寺の概要

山王廃寺は群馬県前橋市に所在し、７世紀後半に建立された寺院で、おそらく上野国では最古の寺院である。近年の調査により西に金堂、東に塔が並び、北に講堂を配し、回廊は講堂に取り付く法起寺式の伽藍配置を採用している。山王廃寺の特徴は豊富な出土遺物と精密に加工された石造物群の存在である。出土遺物は軒先瓦以外に塑像や金銅製品、銅椀、緑釉陶器などがある。また「放光寺」銘文字瓦の存在から、山王廃寺が「山上碑」や「上野国交替実録帳」定額寺項にみえる「放光寺」であることが明らかになった。山王廃寺では主要伽藍が整備される以前の建物群も複数検出されている。下層建物群には総柱式掘立柱建物や掘り込み地業を伴う建物も含まれる。

ii　石製鴟尾

山王廃寺では多くの石造物が確認されており、塔心礎、根巻石などとともに石製鴟尾が２体発見されている（尾崎 1971、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980、栗原 2004）。Ａは日枝神社境内に、Ｂは個人蔵であり、昭和 11 年に重要美術品に指定されている。鴟尾は陶製のものが主体であるが、石製のものは鳥取県大寺廃寺で確認されている。

鴟尾Ａ　頂部、鰭部の大部分、および基底部の一部を欠いているが、原形をよくとどめている。石材は角閃石安山岩で胴部、腹部は無文で鰭部は短い。頭部上面には幅約 2.5cm、深さ２cm の溝を穿ち、雨水の水切りと考えられる。また頭部上半には庇を設け、平瓦の

つきつけとし棟積を覆ったもので、庇の下部は方形に彫り込まれており、これは雨仕舞に対する配慮であると指摘されている。両側面には屋根頂部と降棟が取り付く仕口を設けているが、左右側面でその仕口に違いがみられる。左側面には頭部から丸瓦、平瓦の順に計４枚分の仕口があり、鰭部側には降棟の仕口がみられる。後者は二枚分の平瓦を受ける部分とその上部に丸瓦を受ける仕口が残る。右側面は頭部付近に屋根の丸瓦をうける仕口が１、降棟を受ける仕口２枚分の仕口が残されており、左側面とは大きく異なる。この違いは施工の段階で仕口を適宜設けた結果であると指摘されている。基底部底面には幅 30cm、高さ 15cm ほどの半円形状の溝が穿たれており、鴟尾を屋根に据えるための装置と考えられる。

推定復元から高さ 110cm、基底部前後 75cm、頭部の基底部幅 52.5cm と考えられる。

鴟尾Ｂ　頂部と基底部の一部を欠いているがほぼ完形品である。石材は硬質の輝石安山岩であり、胴部、腹部とも無文で、鰭部も同様である。Ａに比べ全体的に丸みを帯びており、頭部上面には大棟上部の平瓦を受ける仕口の痕跡が見られる。左右側面には降棟上に伏せる平瓦を受ける仕口が残るが、左右でその位置が異なる。底面には幅 17cm ほどの半円状の溝を穿っている。

復元高は約 110cm、基底部前後 75cm とＡに非常に似ているが、その形状からＡに後出するものと考えられている。また、２つの鴟尾は時期、形状、石材が異なることから別々の堂宇に使用されていたものと考えられている。

ⅲ　瓦製鴟尾

山王廃寺では平成 18 年の確認調査で瓦製鴟尾も確認されている（池田ほか 2007）。鴟尾は回廊北東コーナーやや北のＨ－ 12 号竪穴建物から出土している。この建物に関わる出土遺物をみると大半が瓦類であり、報告の中では８世紀中頃に意図的に創建期の瓦類（素弁八弁蓮華文・複弁七弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦）が廃棄されたものと考えられており、鴟尾も同様に廃棄されたものと述べられている。

鴟尾は６点が出土し、うち４点が接合、残り２点も同一個体と考えられる。いずれも鰭部の破片であり、鰭の最大幅 12cm、鰭部段は正段型で段の幅は９～ 11cm 前後と広い。また、鰭部の両面に段を設けている。残存長 71.5cm、残存最大幅 12cm、厚さ 3.5cm、粘土紐巻き上げで製作されたものと想定される。

ⅳ　小結

山王廃寺は関東でも最古に属する古代寺院である。鴟尾については石製２体、瓦製１体が確認されている。なかでも石製鴟尾は塔心礎や根巻石とともに精微な石材加工が施されており、その技術は卓越したものがある。周辺には総社古墳群が存在し、７世紀中葉に築かれた宝塔山古墳では角閃石安山岩を用いた精美な切石切組積の横穴式石室が確認されて

おり、石室には漆喰を塗布している。また石室には輝石安山岩製の刳抜式家形石棺が置かれており、石棺底面には格狭間が刳り込まれている。家形石棺の採用やこれらの石材加工技術は畿内との関係性で理解されている。さらに格狭間の存在など仏教の影響が色濃く反映したものと考えられており、山王廃寺の創建に際しても塔心礎、石製鴟尾などに宝塔山古墳と同様の高度な石材加工技術がみられ（尾崎 1966、津金澤 1983）、総社古墳群を築造した上毛野氏が寺の創建にも大きく関与していたものと考えられている。（出浦）

C　下総国結城廃寺・結城八幡瓦窯

ⅰ　結城廃寺

結城郡の郡寺で、これまでの調査により金堂、塔、講堂、中門、回廊、僧坊、寺院地の区画溝が確認されている（結城市教委 1999）。

鴟尾は区画溝の東辺から 140 m東に位置する竪穴建物跡（SI － 5）から出土した。SI － 5 は SI － 6 を掘り込んで作られ、北壁にカマドをもつ。遺物の出土状況が明示されておらず遺構に伴う遺物が判別できないが、８～９世紀の土師器や灰釉陶器が出土している。

出土した鴟尾は内外面ともナデ整形を施す脊稜部で、無文の鴟尾と思われる。厚さ 4 cm の胴部に幅 9 cm、厚さ 1.5cm の粘土紐を貼り付けて脊稜が表現される。途中で粘土の切れ目があるので、数本の粘土紐をつぎ足しながら成形されたのだろう。焼成はやや軟質、灰白色を呈する。外面調整が丁寧になされているのに対し、内面調整はやや粗雑である。横方向に粘土を積んだ痕跡がみられ、粘土紐積み上げによる製作であることがうかがえる。また、わずかに反る形状や厚み、粘土紐の積み方から頭部に近い部分の破片と想定できる。

ⅱ　結城八幡瓦窯

結城廃寺の瓦を中心に焼成した窯で、下総国衙やその周辺に想定されている寺などにも瓦を供給した。結城廃寺から北西約 1 km の地点に所在し、これまでに 4 基の窯が確認されている（高井 1964、結城市教委 2003）。

鴟尾は昭和 28 年調査の半地下式有階無段登窯と、平成 12・13 年度調査の包含層から出土している。後者については 1 点が胴部として報告されているものの、粗雑な作りで形状・部位など判然としない。前者は窯の燃焼室から胴部や鰭部の破片が 15 点出土した。いずれも全体的にナデや削りによる整形をほどこす無文の鴟尾である。胴部の破片は一方の湾曲が若干強くなることから頭部付近と推定され（高井 1964）、左側面にあたることを示す。内面に幅約 4 cm の粘土紐積み上げの痕跡が残る。厚さは 3.5 ～ 4 cm で焼成は軟質、黒褐色を呈する。

寺の資料とは部位が異なり同一個体であるかどうかは判断できないが、いずれにしても結城廃寺で用いられる鴟尾はその他の瓦同様、結城八幡瓦窯跡で焼かれたものであること

がうかがえ、生産地と消費地の両方から鴟尾が出土しているのは特筆すべき点である。

結城八幡瓦窯跡で焼かれた瓦は複弁八葉蓮華文、単弁十葉蓮華文、単弁十六葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文、四重弧文、五重弧文、均整唐草文軒平瓦などがある。均整唐草文軒平瓦は下野薬師寺軒平瓦 203A の影響を受けて成立したもので、730 ～ 740 年代もしくは 740 年代末から 750 年代前半の年代が与えられる（山路 2018）。重弧文の軒平瓦はこれに先行するため、結城八幡瓦窯跡では 8 世紀前葉頃には瓦の生産がおこなわれていたと考えられる。（皆川）

D　おわりに

関東における鴟尾の出土は非常に少ないが、陶製だけではなく石製鴟尾の存在なども特徴的である。今後は、これまで鴟尾と認識されてこなかった不明瓦製品などを含め、再検討していきたい。

（伊勢崎市教育委員会 / 公益財団法人茨城県教育財団）

註

1　この２遺跡以外では群馬県高崎市に所在する綿貫遺跡で昭和 58 年の調査の際に鴟尾らしき破片が数点出土している（高崎市教委 1985）。また、平成 30 年度の調査でも同一個体らしき破片が出土しているが、現在整理中であり、後日、公表したい。

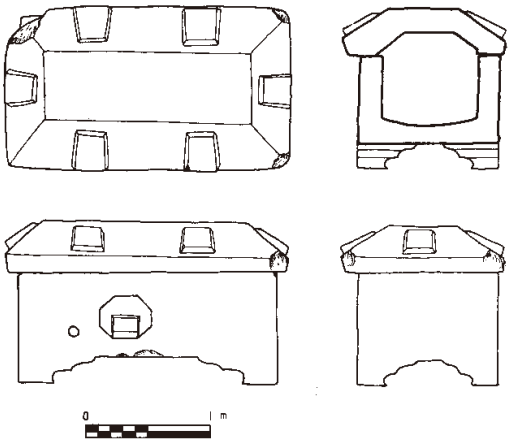
参考文献

池田史人ほか 2007『山王廃寺』平成 18 年度調査報告　前橋市教育委員会
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』
大脇　潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』　至文堂
尾崎喜左雄 1966『横穴式古墳の研究』　吉川弘文館
尾崎喜左雄 1971「在地豪族の権威を示す山王廃寺跡」『前橋市史』1　前橋市史編さん委員会
栗原和彦 2004「山王廃寺の石造物と塔跡」『信濃』56 － 9
高井悌三郎 1964『常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』　甲陽史学会
高崎市教育委員会 1985『綿貫遺跡』
津金澤吉茂 1983「古代上野国における石造技術の一試論」『群馬県立歴史博物館紀要』 4
山路直充 2020「関東地方東部の一本づくり・一枚づくり」『古代瓦研究Ⅸ』　奈良文化財研究所
結城市教育委員会 1999『結城廃寺跡』
結城市教育委員会 2003『結城八幡瓦窯跡』

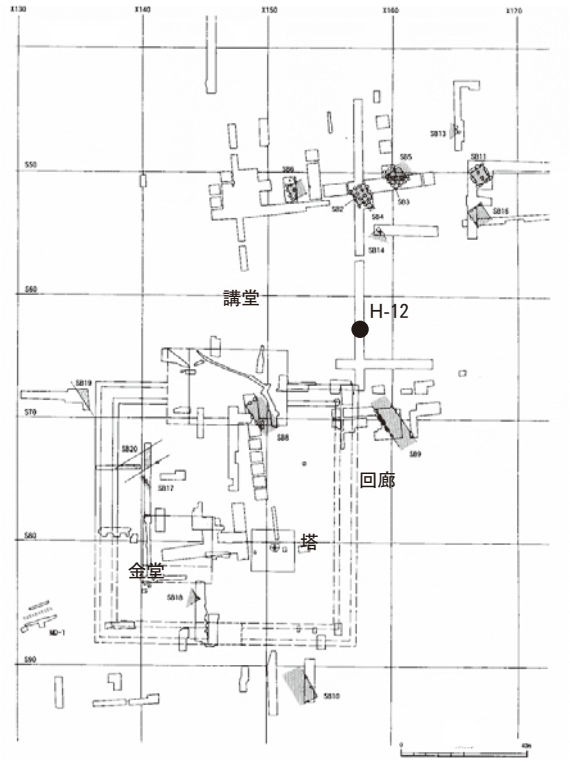
図版出典

第１図：筆者作成。
第２・４図：1983 津金沢論文より。
第３・７・８図：池田ほか 2007『山王廃寺』平成 18 年度調査報告　前橋市教委。
第５図：奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980 より。
第６図：前橋市教委提供。
＊写真１・２は筆者撮影。

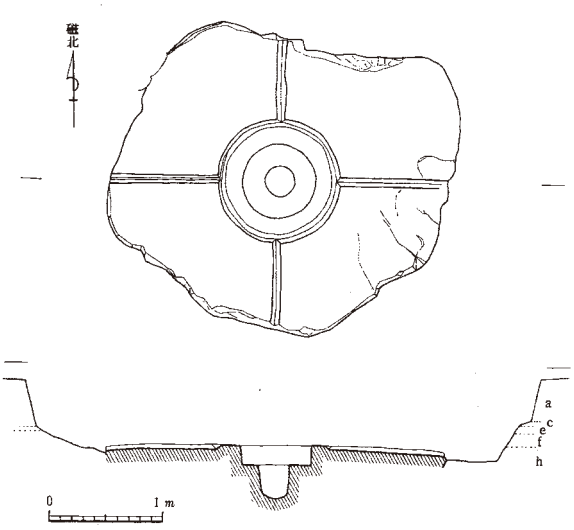
第１図　遺跡位置図



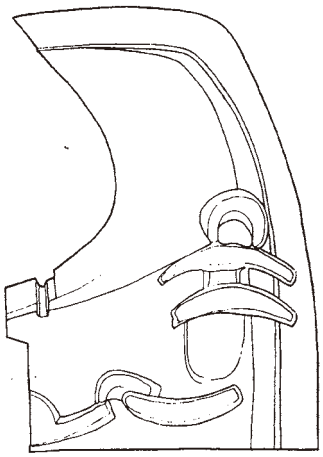
第２図　宝塔山古墳家形石棺（１：60）



第３図　山王廃寺全体図（１：2,500）



第４図　山王廃寺塔心礎（１：70）

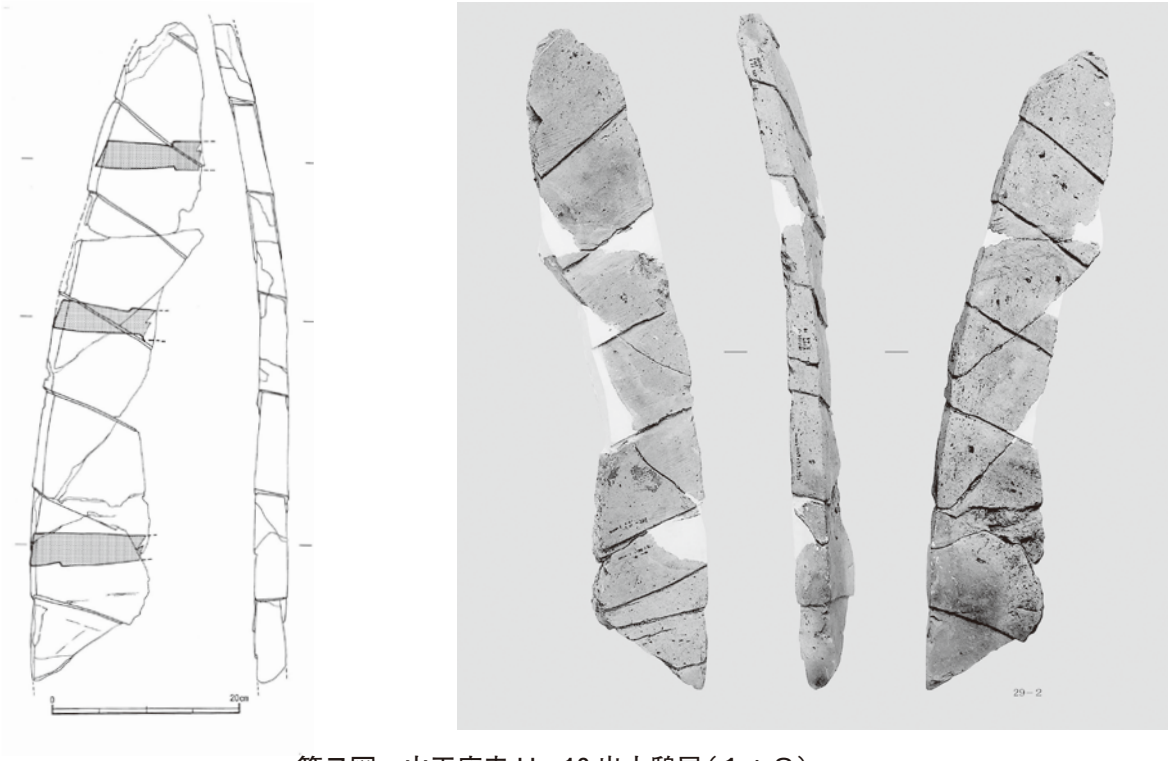


第５図　鴟尾Ａ復元図

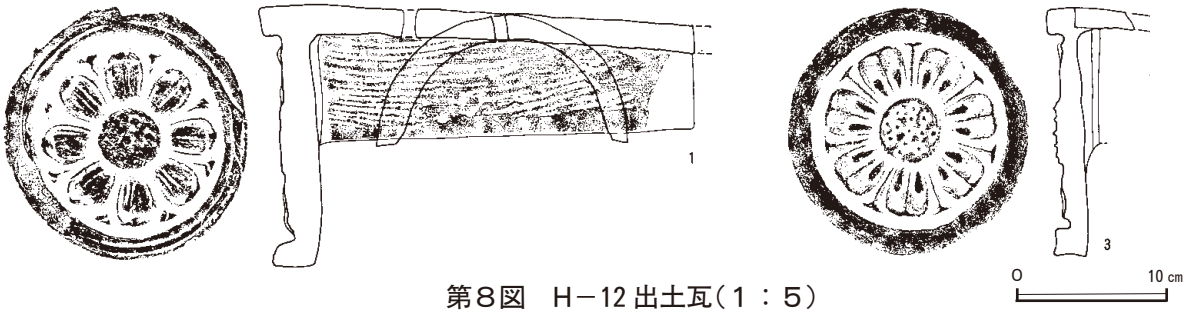
写真１　鴟尾Ａ左側面

第６図　鴟尾Ｂ実測図

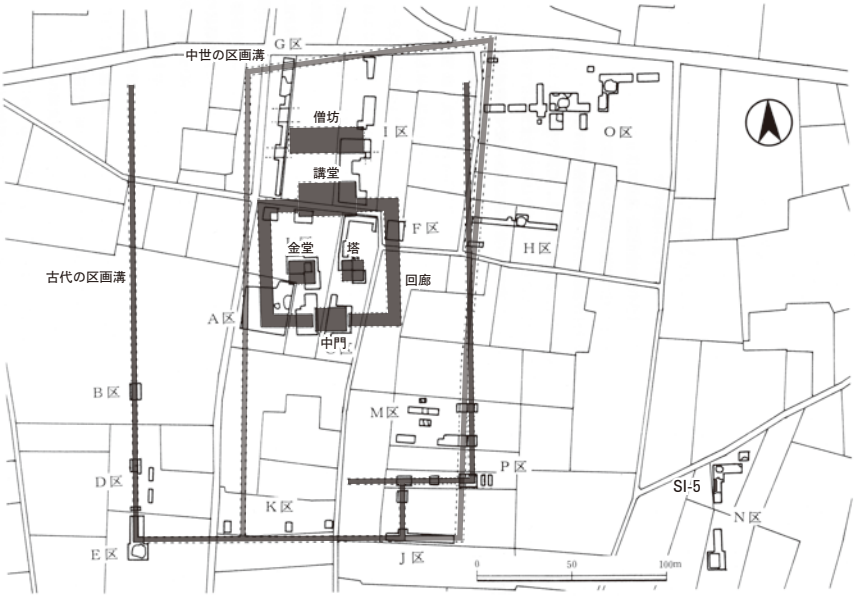
写真２　鴟尾Ｂ左側面



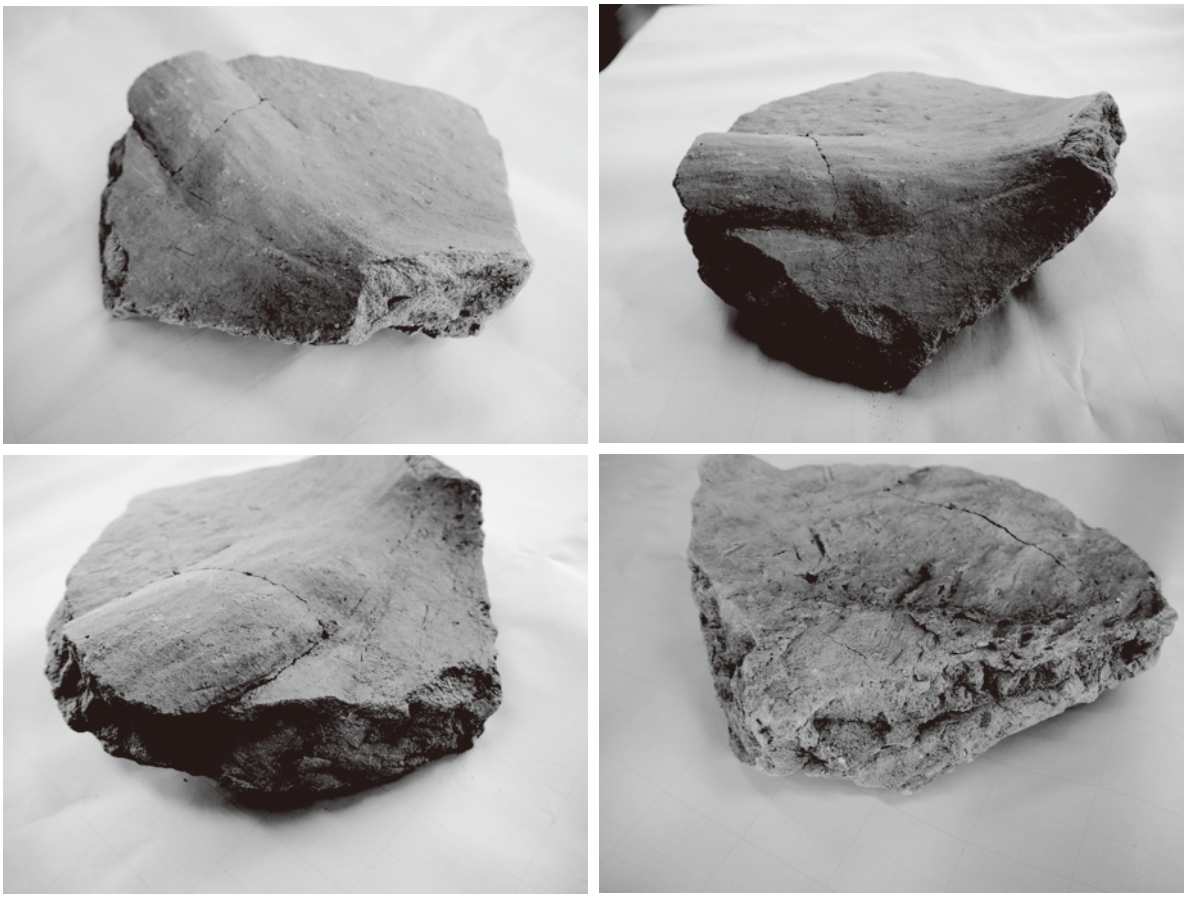
第７図　山王廃寺Ｈ－12 出土鴟尾（１：８）



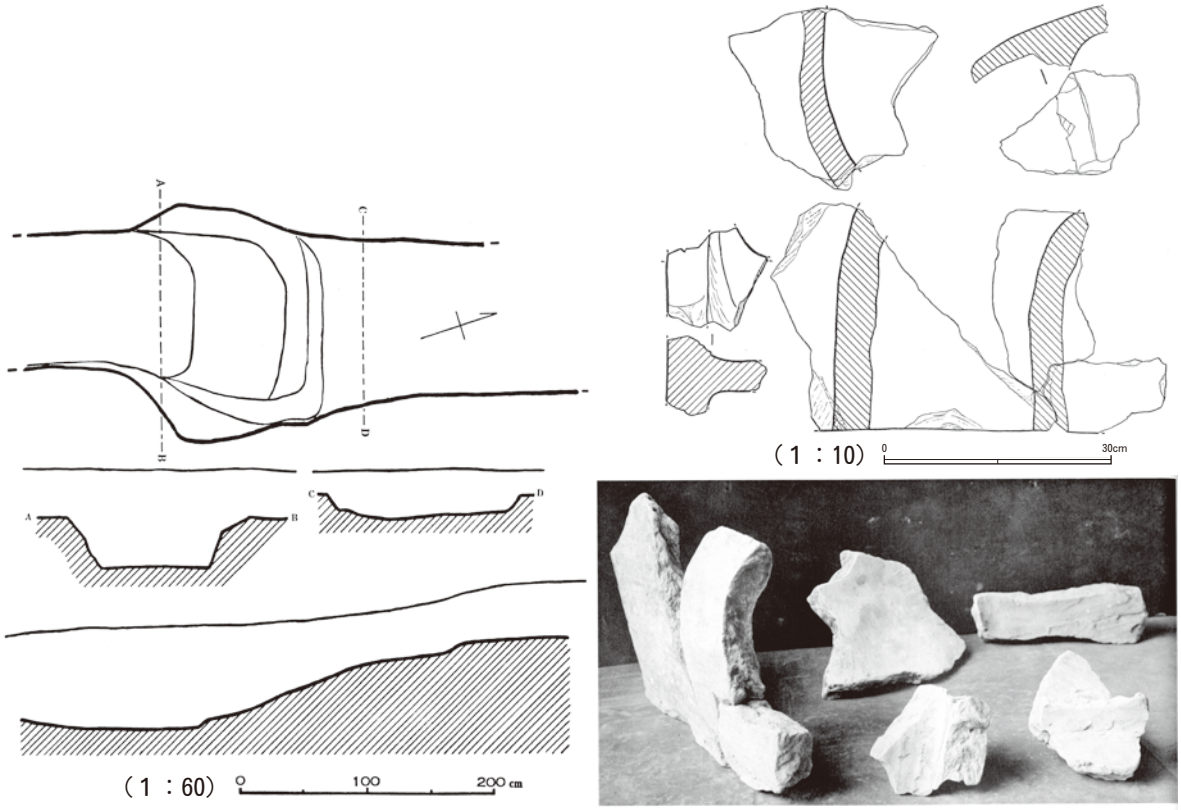
第８図　Ｈ－12 出土瓦（１：５）



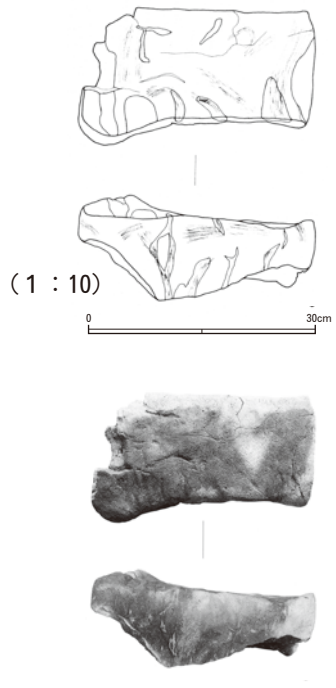
第９図　結城廃寺全体図（１：4,000）



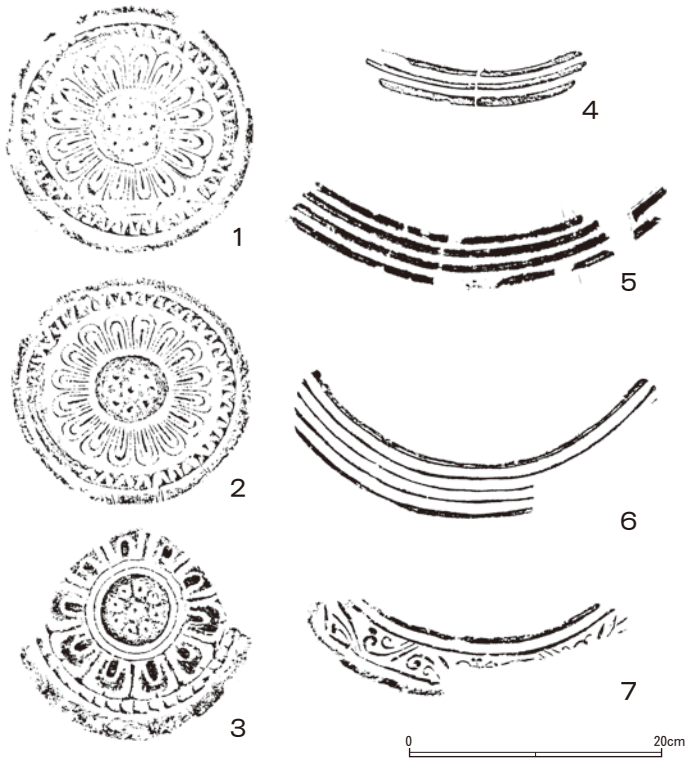
第 10 図　結城廃寺 SI－5 出土鴟尾



第 11 図　結城八幡瓦窯跡と出土鴟尾（昭和 28 年調査）



第 12 図　結城八幡瓦窯跡出土鴟尾
（平成 12・13 年度調査）



第 13 図　結城廃寺・結城八幡瓦窯跡出土瓦（1：6）

12　北陸地方の鴟尾

熊谷　葉月

A　はじめに

北陸地方における鴟尾の資料は非常に少なく、報告例は４遺跡にとどまる。新潟県で１例、石川県で２例、福井県で２例、富山県では現在のところみられない。古代において、瓦出土遺跡が比較的少ない地域であることも一因として考えられる。

今回、二ツ梨豆岡窯跡（石川県）、王子保窯跡（福井県）の２遺跡の資料を実見したが、横滝山廃寺（新潟県）、瓦谷２号窯（福井県）については参考文献からの内容となる。力不足のため、実見した資料の分も含め、不十分な報告になることをご容赦いただきたい。

B　鴟尾の出土例

ⅰ　新潟県

横滝山廃寺（新潟県長岡市（旧・寺泊町））　1976 ～ 1984 年に４次まで調査が実施され、東西約 12m、南北約 10m の建物基壇１基が検出されている。厚板で基壇を取り巻く木造基壇外装と呼ばれる珍しい構造とされる。瓦溜土坑２基が検出されているが、鴟尾、軒丸瓦、塼仏は、昭和 30 年代に採集されたものである。軒丸瓦は素弁八弁蓮華文が２点採集されており、そのうち１類とされるものが７世紀後半、軒平瓦は三重弧文が１点報告されており（第２図）、鴟尾や基壇もこの時期とされる。他に９・10 世紀代の土器が出土している。

鴟尾片は、胴部右側面１点、脊稜１点、胴部と腹部の取り付き部１点の計３点である（第１図）。胴部は沈線を施し、幅広の段を表現する。鰭部内面と腹部は無文である。脊稜から胴部・鰭部に放射状に沈線が施される王子保窯跡出土品と酷似することが指摘されている。

ⅱ　石川県

二ツ梨豆岡向山窯跡（石川県小松市）　南加賀窯跡群に属する、８世紀～ 10 世紀の窯跡群である。鴟尾片は、床面に置台として転用されたものが主で、A 地区２号窯床から５点、B 地区８－Ⅱ号２次床から５点（３点接合）、B 地区グリッドから１点出土している（第３図）。灰原からの出土がなく、他からの搬入品と考えられる。特徴的なものでは、鰭部には拒鵲の穿孔があり、羽の表現は沈線とヘラケズリによる面の表現を併用している個

体や、胴部裏面に、粘土積み上げ後、頂部先端を閉塞する際の絞り込み痕跡が確認できる個体などがある。

鴟尾片出土窯からは８世紀前半の須恵器が出土しており、同じ窯跡群で、10 世紀代に瓦が生産されている。

ⅲ　福井県

瓦谷２号窯跡（福井県あわら市（旧・金津町））　1970 年の北陸自動車道建設工事にともない、福井県教委により緊急調査が実施されている。地下式無階無段窖窯で全長 10.4m、焼成部の最大幅 1.5m である。瓦陶兼業窯で、須恵器の年代は８世紀第１四半期とされており、最終面で瓦が置台として使用されており、瓦は先行する可能性も考えられる。

鴟尾片は８点確認されており、基底部から胴部にかけての厚みのある１片は上方に半円弧、横方向に高さ２cm の突帯を持つ珍しい形状である。鰭部と思われる比較的薄い数点の破片と同様に沈線で弧状の文様が施されている（第４図）。

軒丸瓦は花弁に蕨手状の子葉を持つ単弁十二弁蓮華文で、近隣に所在する東山廃寺と同型式である（第５図）。

王子保窯跡（福井県越前市（旧・武生市））　1989 ～ 1992 年の発掘調査で、D 地点の灰原から 1000 点あまりの鴟尾片が出土しており、鴟尾Ａ・Ｂとして２基が完形に復元されたほか、Ａと同型とされる１基分の破片がある（第６図）。いずれも脊稜から胴部・鰭部に放射状に沈線が施されるデザインで、形態、技法に大きな違いは見られないが、胴部の透かし孔の有無の違いから別の建物のために製作されたと考えられている。完全復元のため、裏面観察不能であったが、外面は、鴟尾Ａは胴部・腹部にはハケ調整後、ナデもしくは幅広の工具でのケズリ調整が見られた。胴部には一部消し残しの布目や、放射状の文様とは別に割り付け線のような細く浅い沈線が残っていた。

同窯跡は、７世紀後半の瓦陶兼業窯で、瓦や須恵器の他、陶硯、塼、塼仏などの特殊な遺物が出土している。瓦の供給先として7.5km 離れた野々宮廃寺跡が有力視されている。

C　まとめ

資料数が非常に少ないが、共通事項としてはすべて７世紀後半から８世紀初めの白鳳期に属することがあげられる。また、王子保窯跡出土品と横滝山廃寺出土品の酷似が注目される。脊稜から鰭部に放射状の沈線を施す形状や調整方法などから、工人の移動の可能性も指摘されている。

謝　辞

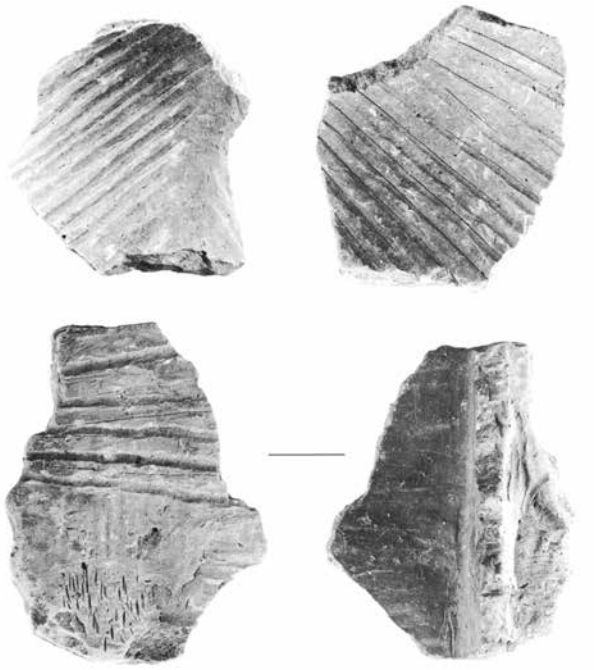
今回、資料調査にあたり、小松市教育委員会、越前市教育委員会に大変お世話になりました。感謝申し上げます。

参考文献

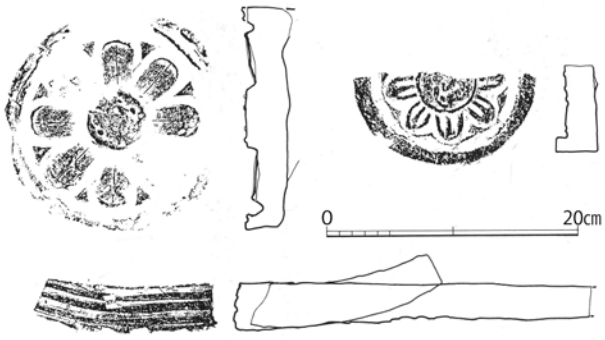
大脇　潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』　至文堂
久保智康 1987「瓦谷２号窯」『北陸の古代寺院』　桂書房
小松市教育委員会 2005「小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ－二ツ梨豆岡向山窯跡・狐山遺跡－」
坂井秀弥 1987「横滝山廃寺」『北陸の古代寺院』　桂書房
武生市教育委員会 1995『王子保窯跡群Ⅶ　第７次発掘調査概要報告』
武生市教育委員会 1999『たけふの文化財』
寺泊町教育委員会 1977 ～ 1984『横滝山廃寺発掘調査概報』（全４冊）
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』
野澤雅人 2016「土器と瓦を焼く 古代の窯業」『文化財から見る越前市の歴史文化図鑑』　越前市
福井県教育委員会 1971『瓦谷２号窯址発掘調査報告書』

図版出典

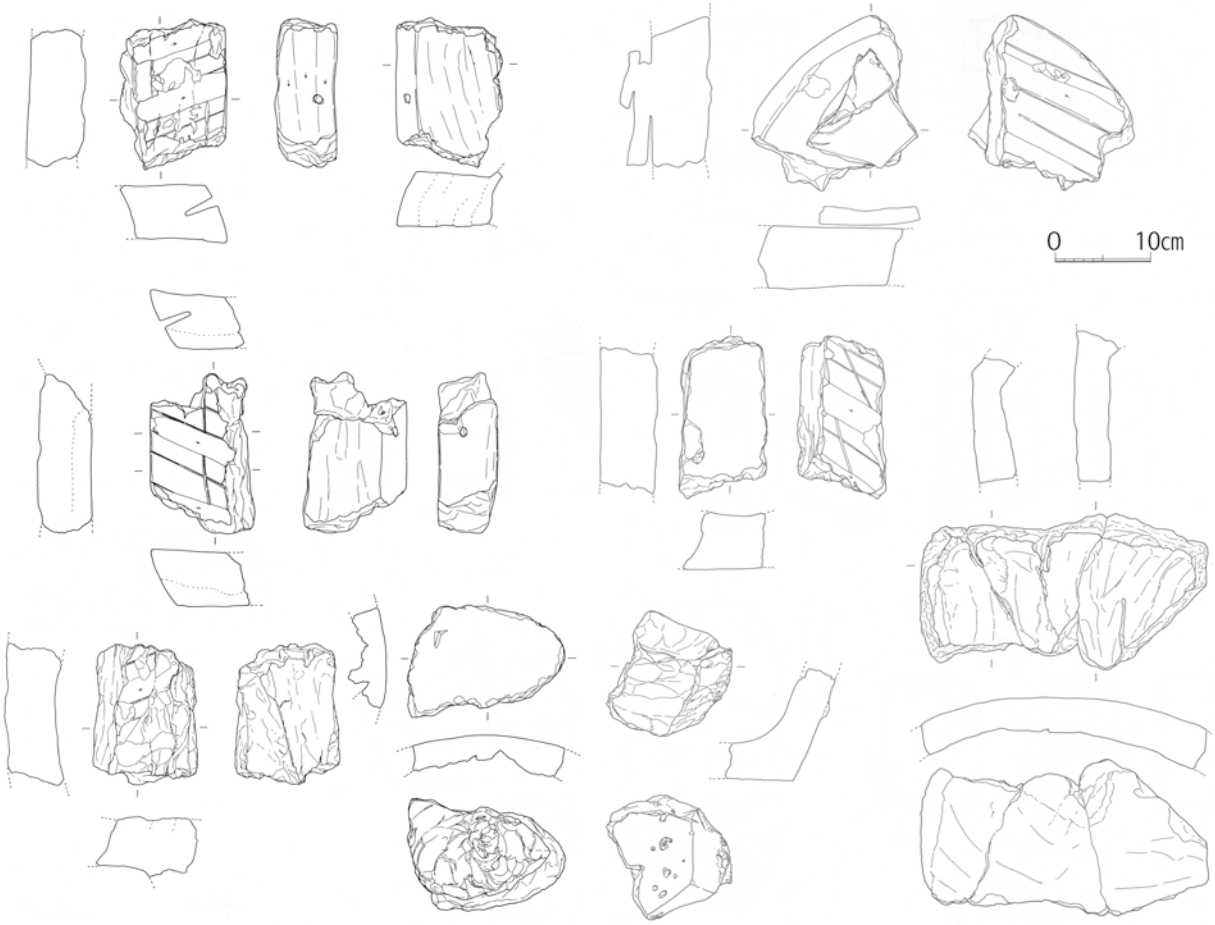
第１図・第２図：坂井 1987。
第３図：小松市教育委員会 2005。
第４図・第５図：久保 1987。
第６図：武生市教育委員会 1995。



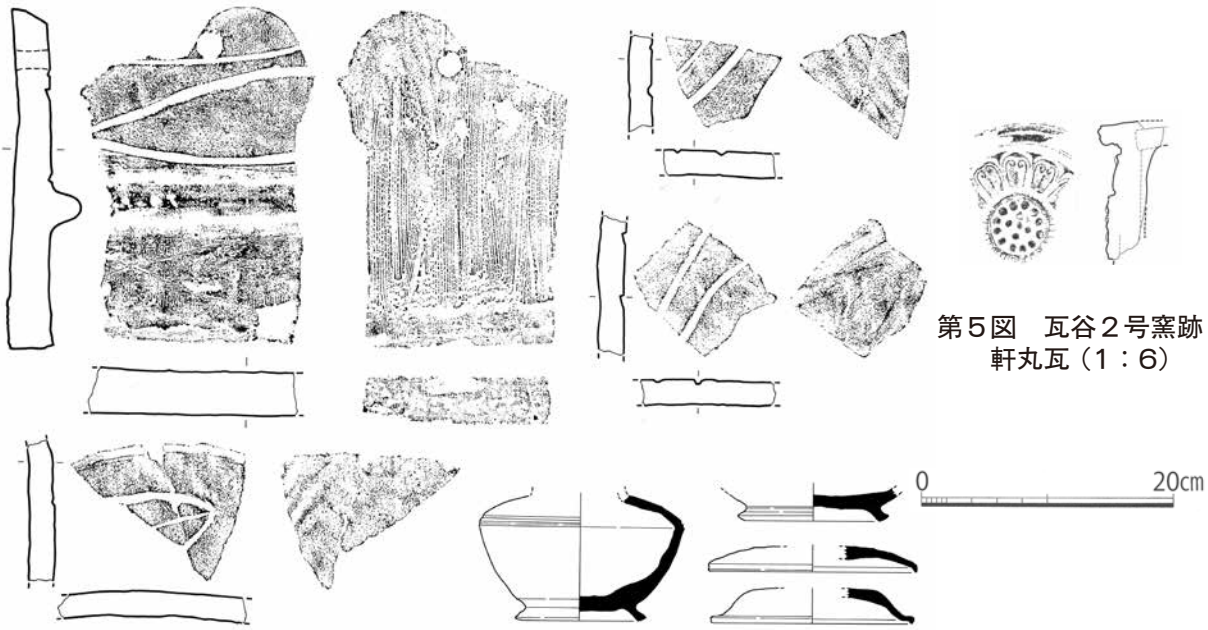
第１図　横滝山廃寺　鴟尾



第２図　横滝山廃寺　軒瓦（１：６）

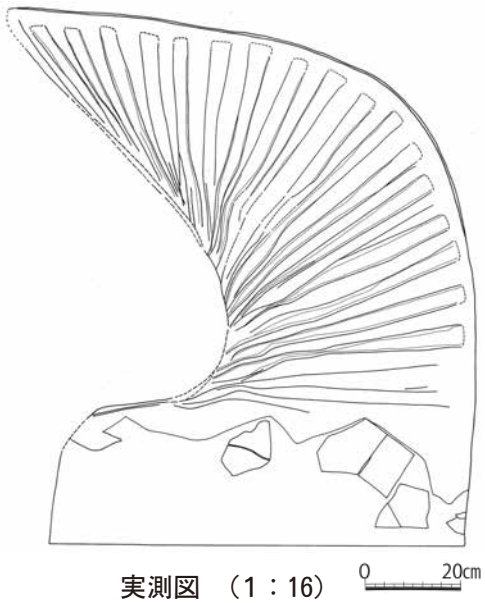


第３図　ニッ梨豆岡向山遺跡　出土鴟尾（１：８）



第４図　瓦谷２号窯跡　鴟尾・須恵器（１：６）

第５図　瓦谷２号窯跡
軒丸瓦（１：６）



実測図　（１：16）

第６図　王子保窯跡　鴟尾

13　中部地方の鴟尾

三好　清超・小林　新平

A　はじめに

中部地方では発掘調査報告書等で鴟尾の出土が知られ、甲斐１遺跡１点、信濃５遺跡９点、飛騨３遺跡 12 点、美濃８遺跡 55 点と、旧国単位での出土遺跡数や出土点数に粗密がある（第１図）。

古くから研究があるのは美濃で、コンパスによる連珠文が注目されてきた。『日本古代の鴟尾』では柄山古窯跡を事例に、２条の沈線間のコンパス連珠文Ａ、沈線間のコンパス連珠文Ｂ、型板による連珠文Ｃ、突帯上のコンパス連珠文Ｄなど、少なくとも４種類があるとされている（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。渡辺博人は、須衛宮東１号窯跡を事例に、コンパスによる連珠文をｂ型、コンパスによる二重の小型連珠文をｃ型、コンパスによる二重の大型連珠文をｄ型、型板による沈線状連珠文をｅ型、型板による連珠文をｆ型、型板による幅広の二重連珠文をｇ型、型押しによる小型連珠文をｈ型と、８種に分類した（渡辺 2000）。武田寛生は、東海地方の鴟尾の文様を分類し、「工具をコンパス状に回転して描いた連珠文が施された」３類の特徴を「美濃に集中して分布し、飛騨にもその影響が及んでいる」と述べた（武田 2009）。現在では、このコンパス利用の連珠文を持つ鴟尾は愛知県内でも出土が認められる（豊田市教委 2019）。また、川原寺式軒瓦を伴う遺跡でコンパス利用の連珠文を持つ鴟尾の出土が多いとする大脇潔の指摘もある。大脇は、コンパス利用の柄山瓦窯跡例や厚見寺跡例、型板利用の山田寺跡例や平蔵寺跡例に触れ、「川原寺式軒瓦の波及とともに、美濃を中心にコンパス利用の珠文帯鴟尾が発展し」たと考えた（大脇 1999）。

研究の進む美濃以外でも近年資料が増加している。これらを議論の俎上に載せるためにも、今回の報告では資料紹介を主として中部地方の現況を提示したい。本稿は美濃出土分を小林が集成の上Ｂⅳを執筆し、それ以外を三好が執筆した。

B　中部地方の鴟尾

ⅰ　甲斐（第２図）

川田瓦窯跡　山梨県甲府市に所在する。微高地の南辺を流れる水路から、軒丸瓦などとともに１点採集された（山梨県埋文センター 1990、山梨県 1998）[1]。

１は頂部片である。両側面が鰭部に当たり正段を持つ。内外面とも胴部から頂部方向へケ

ズリ調整を施す。断面では、胴部の粘土板に鰭部の粘土紐を接着しているように観察できる。このため、胴部から腹部にかけて一連の粘土紐で作り、後に鰭部を接合したと考えられる。当瓦窯からは７世紀後半建立の寺本廃寺跡に瓦を供給している。寺本廃寺跡からの出土はないものの、鴟尾も同時期に造られた可能性がある。

ⅱ　信濃（第３～５図）

元善町遺跡　長野県長野市に所在する。中世の溝で１点出土した（長野市教委 2006・2009）。

２は鴟尾の胴部から鰭部にかけての基部片である[2]。外面をナデ調整により仕上げ、無文とする。鰭部の表現は確認できない。胴部内面にナデオサエ痕が残る。鰭部内面と腹部外面には平行叩き痕が残る。底面に布目痕が残る。粘土は胴部から鰭部にかけてが一連で、腹部を接合している。鰭部内面に残る平行叩きには、叩き板の端部が認められる。同地点出土の須恵器には叩き板の端が出ているものはない。また須恵器の叩き痕跡より幅が広い一方、同遺跡出土の瓦類の叩き痕跡には近似するものがあった。このため瓦作りに関わって鴟尾が製作された可能性が高い。細片であり、年代の判断は難しい。

桜坂古窯跡　長野県安曇野市に所在する。発掘調査に伴い、１号住居跡で１点（３）、灰原で３点（４～６）の鴟尾が出土した（明科町教委 1998）。

３は報告書№55 として掲載されている。屈曲する形状から、胴部上方から頂部付近の破片と想定される。胴部両側面は、頂部から胴部方向にケズリ調整を施すことにより、中心に脊稜を作出する。胴部側の割れ口では、粘土板を積み上げた痕跡が見られる。鰭部側の割れ口には、布目痕も観察され、粘土板の接合部分で割れたものと推測される。

４は強く屈曲する形状から、胴部上方の頂部へ向かう部分と考えられる。外面は胴部中央から両側面方向へＶ字状にナデ調整を施す。脊稜は明確でない。内面のナデ調整は粗い。下方は粘土接合部分で割れており、割れ口で粘土接合痕が確認できる。

５は内湾する形状から、胴部下方の破片と考えられる。外面には、径 1.5cm 程度の竹管押圧による円文が施される。ヘラ状工具による沈線が浅く１条引かれるが、意図的かは判断できない。内外面にナデ調整を施し、外面を丁寧に仕上げる。粘土紐の接合痕は観察できない。

６は報告書で写真のみ掲載されている。全体的に弧状を描く破片で、鋭角に折れ曲がる。円孔を持ち、器壁は円孔がある部分が厚く、徐々に薄くなる。このような形状から、円孔を持ち厚みがある部分が胴部右側面の基部に近く、厚みの薄くなる部分が胴部の上方、折れ曲がった部分は頭部端面に相当すると考えられる。胴部内外面にナデ調整が施され、頭部端面と胴部外面はより丁寧に仕上げられる。胴部右側面は粘土の接合面で割れており、粘土紐積み上げにより作られたと推測される。頭部の屈曲部も別粘土を貼り付けている。

当古窯跡は、７世紀後半に建立された明科廃寺跡に瓦を供給した窯である。このため、

３～６も７世紀後半の可能性がある。一方で、明科廃寺跡でも後出する可能性がある素弁十二弁蓮華文軒丸瓦が当古窯跡から出土しているため、７世紀末以降となる可能性もある。

明科廃寺跡　長野県安曇野市に所在する。鰭部破片の１点が知られる（長野県 1988）。

７は鰭部の破片である。外面にヘラにより浅く作出された幅６cm 程度の正段を持つ。各段にはヘラによる円文と半弧で珠文を表現する。各円文の深浅及びヘラを抜く位置に統一性が認められることから、型を当てていた可能性がある。内外面にナデ調整が施され、外面はより丁寧に仕上げられる。内面は摩滅が著しい。粘土の接合痕などを断面で観察できなかった。明科廃寺跡は７世紀後半に建立されたと考えられており、同時期のものの可能性がある。

大村遺跡　長野県松本市に所在する。３点の鴟尾が出土し、大きさ、胎土、形状から１対の鴟尾の破片と考えられている（松本市教委 2009）。うち２点は接合している。

８は、胴部から鰭部左側面の破片である。胴部は無文である。鰭部には前部から後部方向へ沈線を引く。これを１条の貼り付け突帯で表現した縦帯が区画する。内外面に基部から頂部へのケズリ調整を施す。調整と文様については、全面ケズリ調整、粘土紐を貼り付けによる縦帯、棒状工具による沈線で鰭表現の順である。水平方向の粘土接合部で割れているように観察できるため、粘土は胴部から鰭部にかけて一連で、後に腹部が接合する。

９は、胴部から鰭部左側面の基部を含む破片である。鰭部は胴部に対してＶ字状に外側に広がる。胴部は無文である。鰭部には前部から後部方向への沈線を 13 ～ 15cm 間隔で引く。これを１条の貼り付け突帯で表現した縦帯が区画する。縦帯は腹部接合部と鰭部端面の間の鰭部寄りで、基底部下端から 1.2cm を始点とする。腹部には半円形刳り形がある。内外面に基部から頂部方向へのナデ調整を施すが、部分的に平行叩き痕と布目痕が残る。腹部を貼り付けた痕跡が残り、胴部から鰭部にかけて水平方向の粘土接合部のひび割れが観察できるため、胴部から鰭部にかけて一連の粘土紐で作り、後に腹部を接合したと考えられる。平行叩きが部分的に残るが、瓦類や須恵器との叩き痕跡の比較検討をおこなうことができなかった。

当遺跡からは寺院に関わる遺構を現在まで確認できておらず、年代の判断は難しい。

上川路廃寺跡　長野県飯田市に所在する。軒丸瓦・丸瓦等とともに鴟尾２点が工事中に出土したとされる（遮那ほか 1984、長野県 1988）[3]。

10 は凸型に盛り上がる割れ口を上部、平坦な割れ口を下部と考え、湾曲する形状から胴部右側面と想定した。胴部外面は無文で、ケズリ調整を施す。内面に縦方向のナデ調整を施す。

ⅲ　飛騨（第６～８図）

下野羽根坂古窯跡　岐阜県飛騨市に所在する。鴟尾１点を採集した（飛騨市教委 2019）。

11 は胴部から鰭部右側面の破片である。胴部外面にコンパスによる二重連珠文を施す。鰭部に幅５cm 程度の正段を持つ。これらを削り出しにより作出した１条の縦帯が区画する。連珠文の胴部側に１条の沈線を施すため、胴部に何らかの施文があった可能性がある。その場合、縦帯が内郭と外郭に分かれ、外郭に二重連珠文を施文していたものと想定することもできる。採集資料であり、年代は判断しがたい。

信包中原田古窯跡　岐阜県飛騨市に所在する。発掘調査で鴟尾片が５点が出土した（飛騨市教委 2017）。

12 は腹部片である。凸型の割れ口を上部、補強粘土を貼り付けた部分を胴部側と考え、腹部破片と判断した[4]。内外面にナデ調整を施し、外面を内面より丁寧に仕上げる。

13 は胴部片である。外面には４条を一組とした二重コンパスによる珠文を施す[5]。珠文の半径は 4.6cm である。内外面にナデ調整を施し、外面を内面より丁寧に仕上げる。

14 は胴部から縦帯右側面の破片である。外面に４条を一組とした二重コンパスによる珠文を施す。これに接するように３本の沈線を縦帯として施文し、胴部側２本の沈線間にハシゴ状沈線を施す。内外面にナデ調整を施す。外面を内面より丁寧に仕上げ、内面にはユビオサエ痕が残る。

15 は湾曲する形状とコンパスによる珠文に隣接して縦帯が見られないことから、胴部右側面下部の破片と推測される。胴部外面には、４条を一組とした二重コンパスによる珠文を施す。内外面にナデ調整を施す。外面を内面より丁寧に仕上げる。内面にユビオサエ痕が残る。

16 はコンパスによる珠文はあるが縦帯がない。割れ口を粘土紐接合部と、また内面の剥離した部分を腹部接合部と考え、胴部右側面の破片と想定した。外面に１条のコンパスによる珠文が施される。内外面にナデ調整が施される。外面は内面より丁寧に仕上げられる。底部側と鰭部側とは粘土接合部で割れている。

当古窯跡は７世紀後半建立とされる寿楽寺廃寺跡に瓦を供給した窯跡である。鴟尾は破片が多いが、13 で珠文の半径を計測でき 4.6cm であった。寿楽寺廃寺跡の鴟尾片では直径 9.2cm と判明しているため、同じ工具で作られた可能性が高いと考えられる。したがって、二重コンパス珠文の鴟尾 13 ～ 15 も７世紀後半のものと考えられる。

寿楽寺廃寺跡　岐阜県飛騨市に所在する。発掘調査で鴟尾破片 318 点が講堂と想定される１号基壇跡付近から出土した（㈶岐阜県文化財保護センター 2002）。

17 は最も残りがよく、丁寧に接合と復元が行われているため、断面観察に制約がある。胴・鰭部右側面から腹部にかけての破片である。胴部には４条一組とした二重コンパスによる珠文[6]を施す。鰭部には幅５cm 程度の正段を持つ。これらを２本の沈線による縦帯で区画する。腹部に円孔がある。胴部から鰭部の外面にケズリ調整を施す。内面にはナデ調整を施すが、一部布目圧痕が残る。腹部には内外面にナデ調整を施すが内面は荒い。胴部から鰭部に外面には水平方向の割れが目立つ。胴部から鰭部にかけて一連の粘土紐で作

り、腹部を接合した可能性が高い。腹部にも水平方向のひび割れが目立つ。断面観察では、中心ラインでの接合が認められるため、内側と外側とは別の粘土紐を交互に積み上げたと考えられる。

18は湾曲する胴部と頭部端面があることから、胴部右側面下部の破片と推測される。胴部外面には4条を一組とした二重のコンパスによる珠文が水平方向に2つ並ぶ。内外面にナデ調整を施す。割れ口は粘土紐の接合部分で剥がれている。

19は湾曲する胴部と頭部端面があるため、胴部左側面下部の破片と考えた。胴部外面に4条を一組とした二重コンパスによる珠文が水平方向に2つ並ぶ。内外面にナデ調整を施す。

20は湾曲する胴部と頭部端面があることから、胴部右側面下部の破片と推測される。また、割れ口に一部布目圧痕が残るため、基底部近くの可能性もある。胴部外面に4条を一組とした二重コンパスによる珠文が水平方向に2つ並ぶ。内外面にナデ調整を施す。割れ口は粘土紐の接合部分で剥がれている。

21は正段で表現した鰭と沈線で表現した縦帯にかけての鰭部左側面の破片である。鰭部の各段には段に沿ったナデ調整が見られるため、沈線を入れた後に削って正段を表現したと考えられる。鰭部端面と内面にはナデ調整を施す。割れ口は粘土紐の接合部分で剥がれている。

22は腹部片である。円孔があるため、上方の破片と想定される。内外面ともナデ調整を施すが内面は粗い。断面からは胴部との接合箇所で剥がれたと推測される。このため、鴟尾本体は胴部から鰭部にかけて連続した粘土紐で作り、後に腹部を接合したと考えられる。

寿楽寺廃寺跡は7世紀後半に建立したと考えられている。鴟尾は、発掘調査において講堂と想定される基壇周辺から出土しており、建立時のものの可能性が高い。

ⅳ　美濃（第9～13図）

美濃地域の概況　美濃地域は、現在の岐阜県のほぼ南半部にあたる。7世紀後半から8世紀初頭と考えられる川原寺式軒瓦が集中的に分布する地域である。

今回取り上げる鴟尾は7世紀後半から8世紀初頭の資料がほとんどと考えられ、その前後の状況は明らかでない。また、出土する鴟尾も破片資料が多く断片的な情報しか得られないが、窯跡出土資料からある程度の年代を得ることができると考えられる。

美濃地域における鴟尾の最大の特徴はコンパス状の工具や型板による施文であり、東海地方各地でもその影響が散見される。ここでは、7世紀後半から8世紀初頭にかけての美濃地域における概況を述べる。

厚見寺跡　岐阜県岐阜市に所在する。多数の瓦が出土しており、中には「厚見寺」銘を有する瓦が出土するほか、川原寺式軒丸瓦Ａ種と同文である軒丸瓦が出土する。鴟尾は1点

が知られる（第９図）。23 の出土位置は不明である。連珠文が確認できるため、縦帯の一部と考えられる。連珠文はコンパス状工具により表現する。コンパスの軸穴は貫通しない。また、連珠文は隣同士がほぼ接している。なお、柄山古窯跡から出土する瓦に「厚見寺」銘を有する平瓦や厚見寺跡出土鴟尾と同型式の資料が出土することから、厚見寺跡は柄山古窯跡から瓦を供給されたと考えられている（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980、小川 2004）。

山田寺跡　岐阜県各務原市に所在し、鴟尾３点が知られる。24 は塔心礎の北西の地点から出土したと伝わる頂部の大型破片である（第９図）。外面にケズリ調整、内面にナデ調整を施す。胴部は無文、鰭部は正段である。縦帯は、鰭部側を貼り付けによる突帯で画するが、胴部側は省略する。縦帯には連珠文を施す。圏線の内面に回転させた痕跡が残るため、型板によって施文したと考えられる。また、型板の軸は貫通する。ほかにも、頂部先端付近は両側面に複数の穿孔が確認できる（各務原市埋文センター 2010）。

野口廃寺跡　岐阜県各務原市に所在し、鴟尾１点が知られる（第９図）。25 はピット埋土中から出土した。裏面は剝落しているが、端部が一部残存する鰭部と考えられる。焼成は良好である。上部付近の部位と推定され、正段と考えられる（各務原市埋文センター 2005）。

平蔵寺跡　岐阜県各務原市に所在し、鴟尾５点が知られる。26 は出土位置が不明である（第９図）。連珠文が確認できるため、縦帯の一部と考えられる。外面に丁寧なハケメ調整、内面にナデ調整を施す。縦帯の連珠文は型板を用いた二重の円弧である（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980）。

矢田廃寺跡　岐阜県美濃加茂市に所在し、鴟尾４点が知られる（第９図）。27 ～ 29 の所用建物等の詳細は不明である。27 は鰭部端面の破片である。鰭部は正段で、内外面ともにナデ調整を施す。鰭部縦帯側は接合痕に沿って剥離している。このため、鴟尾本体は胴部から腹部にかけて連続して作られ、下から積み上げながら鰭部を接合したと考えられる。28・29 は胴部から縦帯の基底部で、接合する。内外面ともにナデ調整を施す。縦帯を貼り付けにより画するが、文様の有無については不明である。基底部は平滑で、木質痕等は確認できない。厚さはやや薄手である。また、28 は接合面をヘラによって傷つけていることから、輪積みする際に固着の強化を図っていたと考えられる。

須衛宮東１号窯跡　岐阜県各務原市に所在する須衛宮東１号窯は、古墳時代から古代の窯跡群である美濃須衛古窯跡群を構成する古窯跡の一つである。宅地の擁壁工事に際して多数の遺物が出土したため、緊急調査を実施した。窯体はすでに削平されたと考えられるが、灰原から多数の遺物が出土した。灰原からは鴟尾の他に須恵器が出土し、その年代は７世紀第３四半期から第４四半期にかけてとされる。鴟尾は 32 点が出土し、報告書中でａ～ｋ型まで型式分類される（渡辺 2000）。本報告では報告書分類に沿って概観し、型式設定されていない資料についても若干触れる（第 10・11 図）。

a 型は胴部文様が正段となる資料である。30 は胴部と縦帯の破片である。縦帯の連珠文を型板により施文し、内面に当て具痕が残るナデ調整を施す。なお、30 は後述する g 型にも分類できる。31 は胴部の一部と考えられ、内面に当て具痕が残る。32 は縦帯と胴部の一部と考えられる。縦帯の連珠文は型板により施文され､内面に当て具痕が残る。なお、32 は後述する g 型にも分類できる。33 は胴部・縦帯・鰭部の破片である。縦帯胴部側の界線は凹線、鰭部側の界線は削り出しによって作り出されている。縦帯の連珠文は二重コンパス文で、内面は当て具痕が残るナデ調整である。鰭部は正段である。なお、33 は報告書では d 型に分類されるが、胴部正段型の特徴を有するためここで報告した。

b 型は縦帯の連珠文をコンパスにより施文する（34・35)。いずれの資料も胴部は確認できない。また、円弧は一重となり、内外面ともにナデ調整を施す。なお、35 は連珠文同士が接している。

c 型は縦帯にコンパスを利用して二重の小型連珠文を施文する。36 は縦帯の破片で、内面にナデ調整を施す。

d 型は縦帯にコンパスを利用して二重の大型連珠文を施文する。先述の 33 が該当する。

e 型は縦帯に型板を回転させ、周囲が沈線状にくぼむ連珠文を施文する。37 は胴部から縦帯の破片である。胴部は無文で、縦帯鰭部側の界線を削り出しにより表現する。縦帯の連珠文は型板により施文し、型板の周囲が沈線状に円形にくぼむ。鰭部は正段で、内面にナデオサエ痕が残る。38 も同様の特徴を有するため、同一個体の可能性もある。

f 型は縦帯に型板を回転させた連珠文を施文する。39 は縦帯から鰭部にかけての破片である。縦帯胴部側の界線は無く、鰭部は正段である。連珠文は型板で施文し、型板の軸が内面にまで貫通している点が他型式と異なる。このように軸が貫通する例は他には山田寺跡出土例（24）のみで、コンパス、型板いずれの工具を使用する場合であっても本型式のみである。鰭部は正段で、内面にはナデ調整を施す。

g 型は円弧の幅が広い型板を回転させた二重の連珠文である。40 は縦帯の連珠文が確認できるのみである。連珠文は型板により施文され、円弧の幅が広く二重となる。また、内面には当て具痕が残る。41 は縦帯から胴部の破片である。胴部は無文で、縦帯胴部側の界線は削り出しにより表現される。縦帯の連珠文は型板により施文され、円弧の幅が広く二重となる。内面はナデ調整が施される。

h 型は貼り付けによる小型の連珠文である。42 は全体に丸みが強く、頂部付近の破片の可能性がある。縦帯の小型の連珠文は剝落の痕跡が残ることから、貼り付けによると推定される。内面はナデ調整を施す。なお、貼り付けによる連珠文を持つ鵜尾は美濃地域でも本型式のみである。

i 型は削り出しによる細い縦帯の突帯を持つ資料である。43 は縦帯から鰭部にかけての破片である。縦帯鰭部側の界線は削り出しによる細い突帯が確認できる。鰭部は正段である。内面はナデ調整を施す。

j 型は貼り付けによる縦帯の突帯が確認できる資料である。44 は縦帯から鰭部にかけての破片である。縦帯鰭部側の界線は貼り付けによる突帯である。連珠文は外周がわずかに残るのみで、コンパス・型板いずれによって施文されたかは不明である。鰭部は正段である。内面はナデ調整が施される。

k 型はヘラ描き沈線による唐草文もしくは蕨手文の資料である。45 は内面に腹部の接合痕が確認できることから、鰭部の可能性がある。外面にヘラ描きの浅い沈線で唐草文もしくは蕨手文の輪郭が表現されるが、詳細は不明である。

なお、ほかにも須衛宮東窯址群ではコンパスによる円弧の内側に複数の小型の連珠文を施文する資料が表採されている（46）。縦帯は貼り付けで、内面調整は剝落しているため詳細不明である。

柄山古窯跡群　岐阜県岐阜市に所在し、６点３種類の鴟尾が確認されるが、いずれも表採資料である（第 11 図）。47 は拓本資料のため調整等の詳細は不明であるが、基底部付近の縦帯及び胴部の破片と推定される。縦帯は型板による連珠文が施され、胴部側にもＬ字に続くと考えられる。縦帯胴部側及び鰭部側に突帯による区画が確認される。48 は縦帯の破片である。縦帯の区画線は凹線、連珠文はコンパスの可能性がある。円弧はやや小さい。49 は胴部・縦帯・鰭部にかけての破片である。やや平面的な印象を受ける。胴部は無文で、縦帯胴部側及び鰭部側を凹線により区画する。連珠文はコンパスにより施文されたと考えられる。鰭部は正段である（小川 2004）。

各務御坊山南遺跡群（10 号窯）　岐阜県各務原市に所在する各務御坊山南遺跡群 10 号窯は須恵器専焼窯であったが、後に鴟尾専焼窯に造りかえられたことが明らかとなっている（各務原市理文センター 2007）。鴟尾３点が知られる（第 12 図）。50 ～ 52 はいずれも窯体から出土したと考えられるが、破片資料のため詳細な部位については不明である。外面には沈線で曲線を施している。厚さは須衛宮東１号窯などの鴟尾と比べると厚手である。

C　おわりに

中部地方の鴟尾の初現と展開　渡辺は、須衛宮東１号窯跡の須恵器から、同遺跡出土の鴟尾の時期を７世紀第３四半期から第４四半期と考えた（渡辺 2000）。また、厚見寺跡に供給していた柄山古窯跡群例がコンパス連珠文であり、同類のものが須衛宮東１号窯跡で b・c・d 型として確認できること、平蔵寺跡や山田寺跡の型板連珠文が須衛宮東１号窯でも出土していることから、厚見寺跡、平蔵寺跡、山田寺跡など美濃周辺の古代寺院は、７世紀第３四半期から第４四半期のほぼ同時期に建立に着手した可能性が高いと考えた。

コンパス利用の連珠文は、飛騨では寿楽寺廃寺跡など全３遺跡で、信濃では明科廃寺跡でヘラ描き連珠文を確認し、これらも７世紀後半の時期と考えられている。このため、中部地方の鴟尾の初現は７世紀後半代と考えられる。

このように、連珠文のあり方で細かく分類されるが大きな時期差は認めがたく、その先後関係については判然としない。また、コンパス連珠文は尾張・三河でも出土が知られる（豊田市教委 2019）。このため、展開についてはそれらの地域も含めた今後の検討課題としたい。なお、縦帯の区画線は、柄山古窯跡例では 47 のように胴部・鰭部双方に貼り付けられるものがあるものの、須衛宮東 1 号窯跡例では 31 が凹線のみであり、38 が胴部側を区画しない。これを細部の省略化と捉えることができるかもしれない[7]。その場合、飛騨寿楽寺廃寺跡例は胴部側に区画のない個体ばかりのため、美濃の事例より後出することになる。さらに、鰭部にヘラ描き連珠文が施文される信濃明科廃寺跡例は、より後出する可能性が想定される。

コンパス利用の連珠文以外の鴟尾については、年代観の検討が難しい状況であった。

鴟尾を生産した工人　生産した工人について考えることができる事実は２つであった。１つ目は、美濃須衛宮東 1 号窯跡出土の 31・32 で内面に当て具痕が残ることである。これについて渡辺は、鴟尾の造形が「須恵器製作の範疇には存在しなかった」ことから鴟尾工人が指導して須恵器工人が製作した可能性を想定している（渡辺 2000）。２つ目は、信濃元善町遺跡出土の２に叩き痕跡が残ることである。叩き板端部と叩きの幅が、同遺跡から出土する須恵器よりも瓦の叩き痕跡に近似する状況から、瓦工人の関与が想定された。鴟尾工人が既存の工人集団に組み込まれた経緯や背景については検討に至らなかった。

（飛騨市教育委員会 / 岐阜県環境生活部）

謝　辞

本稿を作成するにあたり、下記の機関や方々にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

安曇野市教育委員会、飯田市上郷考古博物館、岐阜県文化財保護センター、岐阜県博物館、各務原市埋蔵文化財調査センター、東海古瓦観察会、長野市教育委員会、飛騨・世界生活文化センター、松本市考古博物館、美濃加茂市民ミュージアム、山梨県立考古博物館、飯島哲也、市澤英利、一之瀬敬一、一ノ瀬幸治、大嶌正之、澤村雄一郎、柴田洋孝、竹原学、土屋和章、長屋幸二、前田清彦

註

1　川田瓦窯跡は、甲斐で最古の寺院される寺本廃寺跡に瓦を供給した窯跡である。山梨県による報告では、中嶋正行により鴟尾が採集される（山梨県埋文センター 1989、山梨県 1998）。一方で、中嶋は「今回窯趾から出土されたものには（中略）鴟尾等は一枚も発見されていない。」と報告しており、採集経緯に齟齬が生じている状況である（中嶋 1948）。その間の 1954 年に刊行された『法隆寺国宝保存修理報告書』第 14 冊で鴟尾出土遺跡を集成した「鴟尾に関する資料表」には、川田瓦窯跡の記載がある（法隆寺国宝保存修理委員会 1956）。

2　当資料は、発掘調査時は道具瓦と考えられていた（長野市教委 2006）。その後の調査で鴟尾と判明し、その際には「胴部外面と鰭部に平行叩き具による成形痕が残存して」いると考えられた（長野市教委 2009）。ここでは本文に記載した通り、平行叩きが残る部分を胴部内面と考えた。

3　資料を収蔵している飯田市上郷考古博物館において、今回は 10 のみ実見可能であった。しかし、正段を持ち、鰭部の破片と考えられる破片もかつて出土したようである（遮那ほか 1984）。

4　報告書では胴部片とされる（飛騨市教委 2017）が、ここでは本文に記載の理由から腹部片と考えた。

5　報告書には型押し技法と記載される（飛騨市教委 2017）が、沈線内に残る筋状の痕跡からコンパス状の工具

を回転させたものと判断した。同遺跡で出土する全ての連珠文が残る個体も同様に考えた。

6　報告書には型押し技法と記載される（岐阜県文化財保護センター 2002）が、沈線内の筋状の痕跡からコンパス状の工具を回転させたものと判断した。同遺跡で出土する全ての連珠文が残る個体も同様に考えた。

7　小林の指摘による。

参考文献

明科町教育委員会 1998『桜坂古窯跡　－主要地方道穂高明科線改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』明科町の埋蔵文化財第５集

井川祥子 1996「古代美濃国における軒瓦の様相」『岐阜市歴史博物館研究紀要』８　岐阜市歴史博物館

市澤英利 2015「上川寺廃寺と伊那郡衙考」『飯田市美術博物館研究紀要』25　飯田市美術博物館

大脇　潔 1987「岐阜市厚見寺跡出土鴟尾の復元」『岐阜市歴史博物館研究紀要』創刊号　岐阜市歴史博物館

大脇　潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』　至文堂

小川貴司 2000『厚見中林寺・柄山窯址の研究』　言叢社

小川貴司 2004『古代地方都市の成立』　言叢社

各務原市 1983『各務原市史　考古・民俗編　考古』

各務原市埋蔵文化財センター 2000『須衛宮東１号窯址発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告第 29 号

各務原市埋蔵文化財センター 2005『野口廃寺Ｃ・Ｄ地区発掘調査報告書』各務原市文化財資料調査報告書第 42 号

各務原市埋蔵文化財センター 2007『各務御坊山南遺跡群発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告書第 47 号

各務原市埋蔵文化財センター 2010『山田寺跡』各務原市文化財調査報告書第 50 号

岐阜市 1979『岐阜市史　資料編　考古・文化財』

岐阜県文化財保護センター 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺』岐阜県文化財保護センター調査報告書第 74 集

柴田洋孝 2018「長野県における古代瓦出土地点（東北信編）」『長野県埋蔵文化財センター年報』34　長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

柴田洋孝 2019「長野県における古代瓦出土地点（中南信編）」『長野県埋蔵文化財センター年報』35　長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

遮那真周・遮那藤麻呂 1984「伊那谷南部における初期仏教文化とその歴史的背景」『長野県考古学会誌』49 号　長野県考古学会

武田寛生 2009「資料調査報告　東ノ谷瓦窯跡」『浜松市博物館報』第 21 号　浜松市博物館

豊田市教育委員会 2019『寺部遺跡ＩＸ－ 16H・17A ～ 17C 区－』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 81 集

中嶋正行 1948「甲斐国分寺瓦窯址発見経過報告」『郷土研究』第２号　山梨郷土研究会

長野県 1988『長野県史　考古資料編　遺構・遺物』全１巻（４）　長野県史刊行会

長野市教育委員会 2006『長野遺跡群　善光寺門前町跡』－㈱竹風堂善光寺大門店地点－　長野市の埋蔵文化財第 115 集

長野市教育委員会 2009『長野遺跡群　元善町遺跡（２）』－善光寺仲見世通りガス管布設工事地点－　長野市の埋蔵文化財第 123 集

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』

飛騨市教育委員会 2017『信包中原田古窯跡　－圃場整備事業に伴う発掘調査報告書－』　飛騨市文化財調査報告書第 14 集

飛騨市教育委員会 2019『飛騨市遺跡詳細分布調査報告』飛騨市文化財調査報告書第 14 集

法隆寺国宝保存委員会 1956『法隆寺国宝保存工事報告書』第 14 冊

松本市教育委員会 2009『大村遺跡Ⅵ緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告 177

美濃加茂市 1980『美濃加茂市史　通史編』

美濃加茂市教育委員会 1993『土の中からのメッセージ』（美濃加茂ふるさとファイル№ 4）

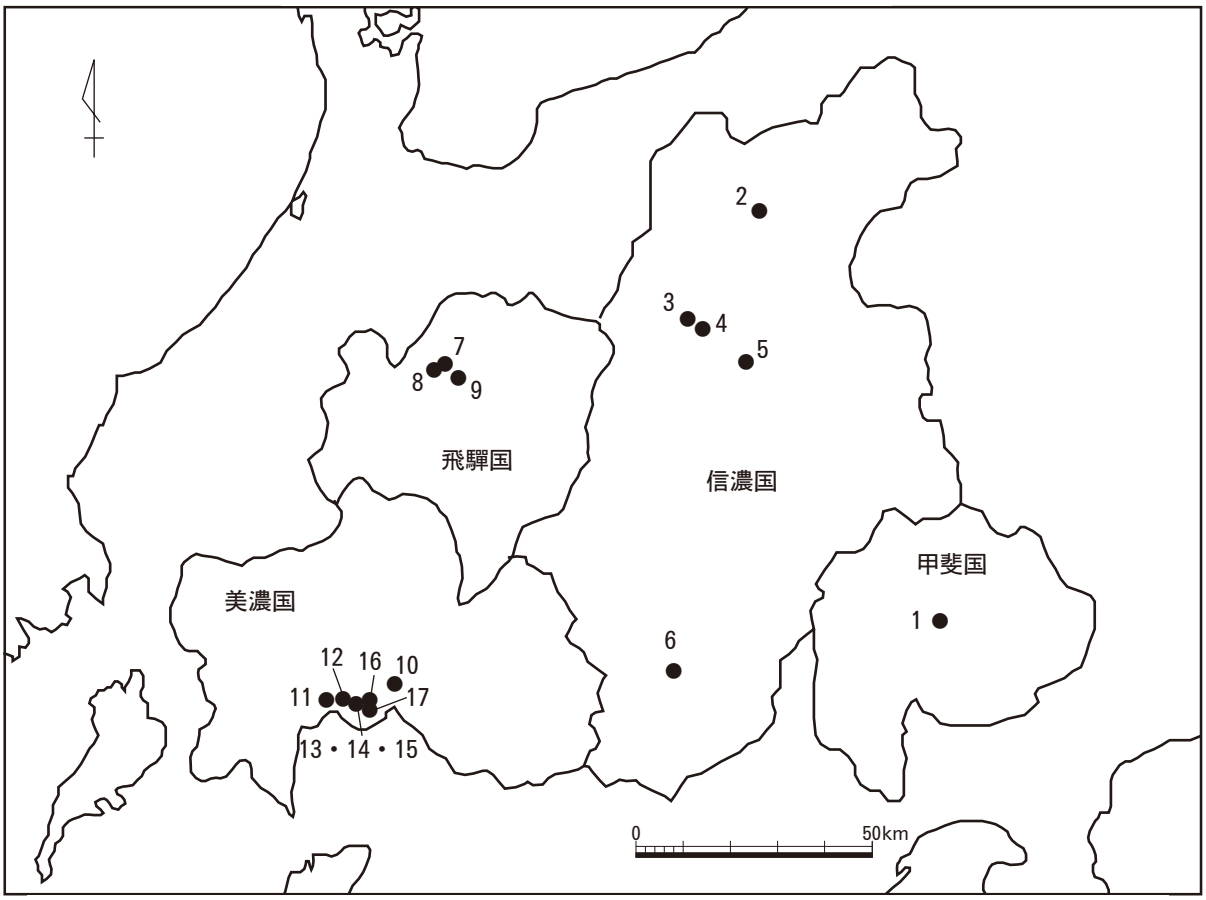
山梨県 1998『山梨県史　資料編１　原始・古代１』

山梨県埋蔵文化財センター 1990『山梨県生産遺跡分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 51 集

山梨県立考古博物館 2018「願いをかなえてほとけさま－甲斐の古代寺院－」平成 30 年度夏季企画展資料
渡辺博人 2000「第 4 章考察」『須衛宮東 1 号窯址発掘調査報告書』各務原市文化財調査報告第 29 号

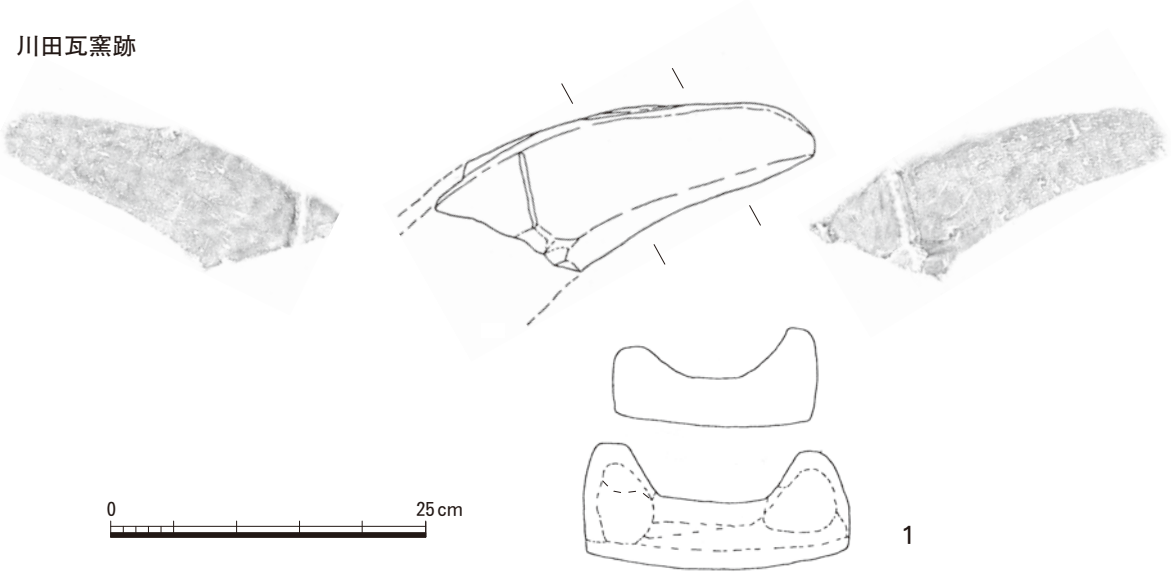
図版出典

第 1 図：筆者ら作成。
第 2 図：1 は山梨県埋文センター 1990 を、三好が採拓・補足実測して一部改変。
第 3 図：2 は長野市教委 2009 を一部改変（長野市教育委員会所蔵）。3 は明科町教委 1998 を三好が補足実測して一部改変。4 は柴田洋孝が採拓、三好実測。5 は柴田が実測、三好がトレース。
第 4 図：6 は三好実測。7 は柴田が採拓、三好実測。
第 5 図：8・9 は松本市教委 2009 を柴田・三好が補足実測し、一部改変。10 は三好実測。
第 6 図：11 は飛騨市教委 2019 より転載。12 ～ 16 は飛騨市教委 2017 を、三好が補足実測して一部改変。
第 7・8 図：17 ～ 22 は㈶岐阜県文化財保護センター 2002 を、三好が補足実測して一部改変。
第 9 図：23 は岐阜市 1979 より転載。24 は各務原市埋文センター 2010 より、25 は同センター 2005 より転載。26 は小川 2004 より転載。27 ～ 29 は小林実測（美濃加茂市教育委員会所蔵）。写真は小林撮影。
第 10・11 図：30 ～ 46 は各務原市埋文センター 2000 より転載。47 ～ 49 は小川 2004 より転載。
第 12 図：50 ～ 52 は小林写真撮影（各務原市教育委員会所蔵）。50 は三好実測。
第 13 図：小川 2004 より転載。



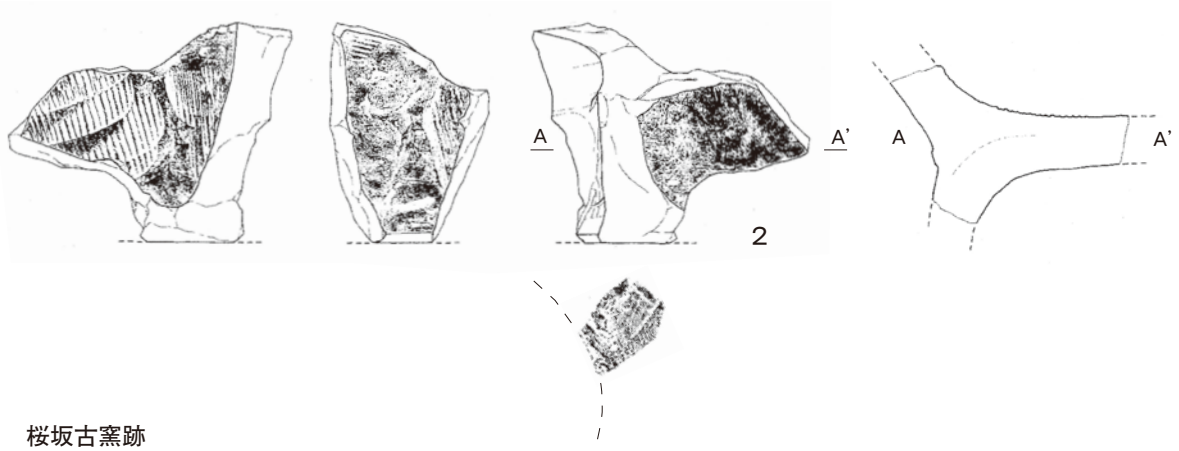
1:川田瓦窯跡(山梨県甲斐市)　2:元善町遺跡(長野県長野市)　3:桜坂古窯跡(長野県安曇野市)　4:明科廃寺跡(長野県安曇野市)
5:大村遺跡(長野県松本市)　6:上川路廃寺跡(長野県飯田市)　7:下野羽根坂古窯跡(岐阜県飛騨市)　8:信包中原田古窯跡(岐阜県飛騨市)
9:寿楽寺廃寺跡(岐阜県飛騨市)　10:矢田廃寺(岐阜県美濃加茂市)　11:厚見寺跡(岐阜県岐阜市)　12:柄山古窯跡群(岐阜県岐阜市)
13:山田寺跡(岐阜県各務原市)　14:野口廃寺(岐阜県各務原市)　15:平蔵寺跡(岐阜県各務原市)　16:須衛宮東1号窯(岐阜県各務原市)
17:各務御坊山南遺跡群(10号窯)(岐阜県各務原市)

第１図　中部地方の鴟尾出土遺跡位置図（１：1,600,000）

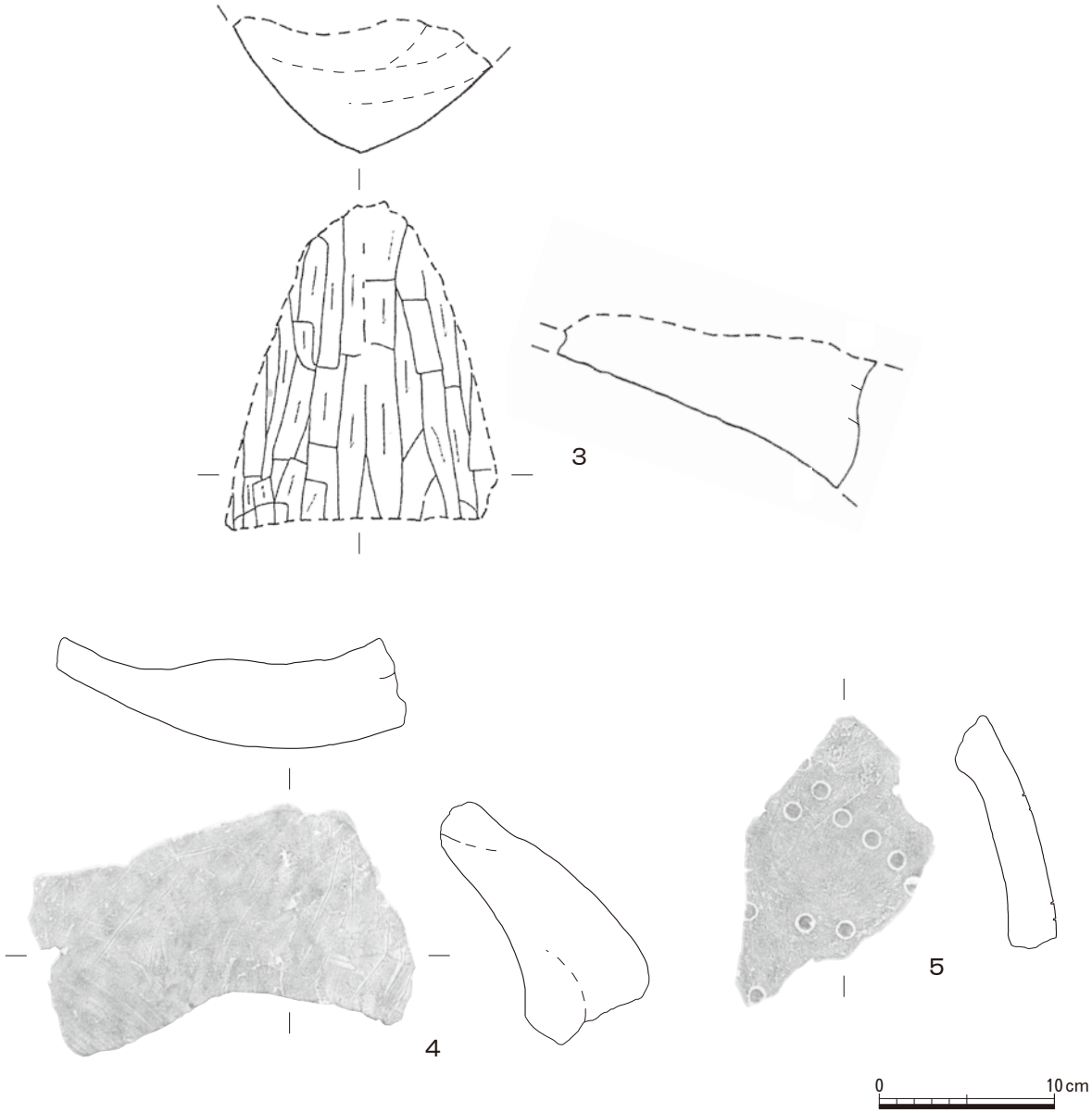


第２図　甲斐出土の鴟尾実測図（１：６）

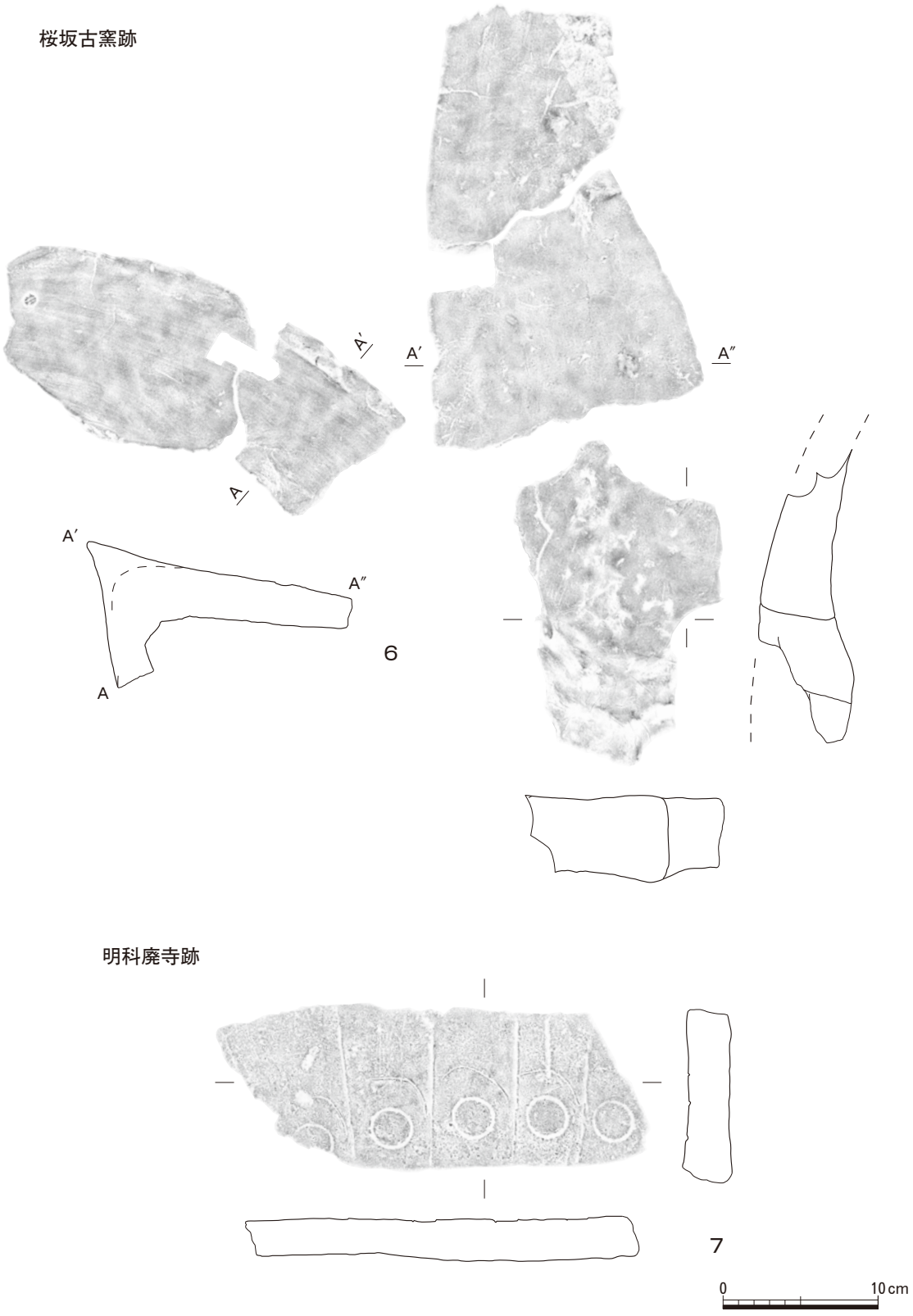
元善町遺跡



桜坂古窯跡

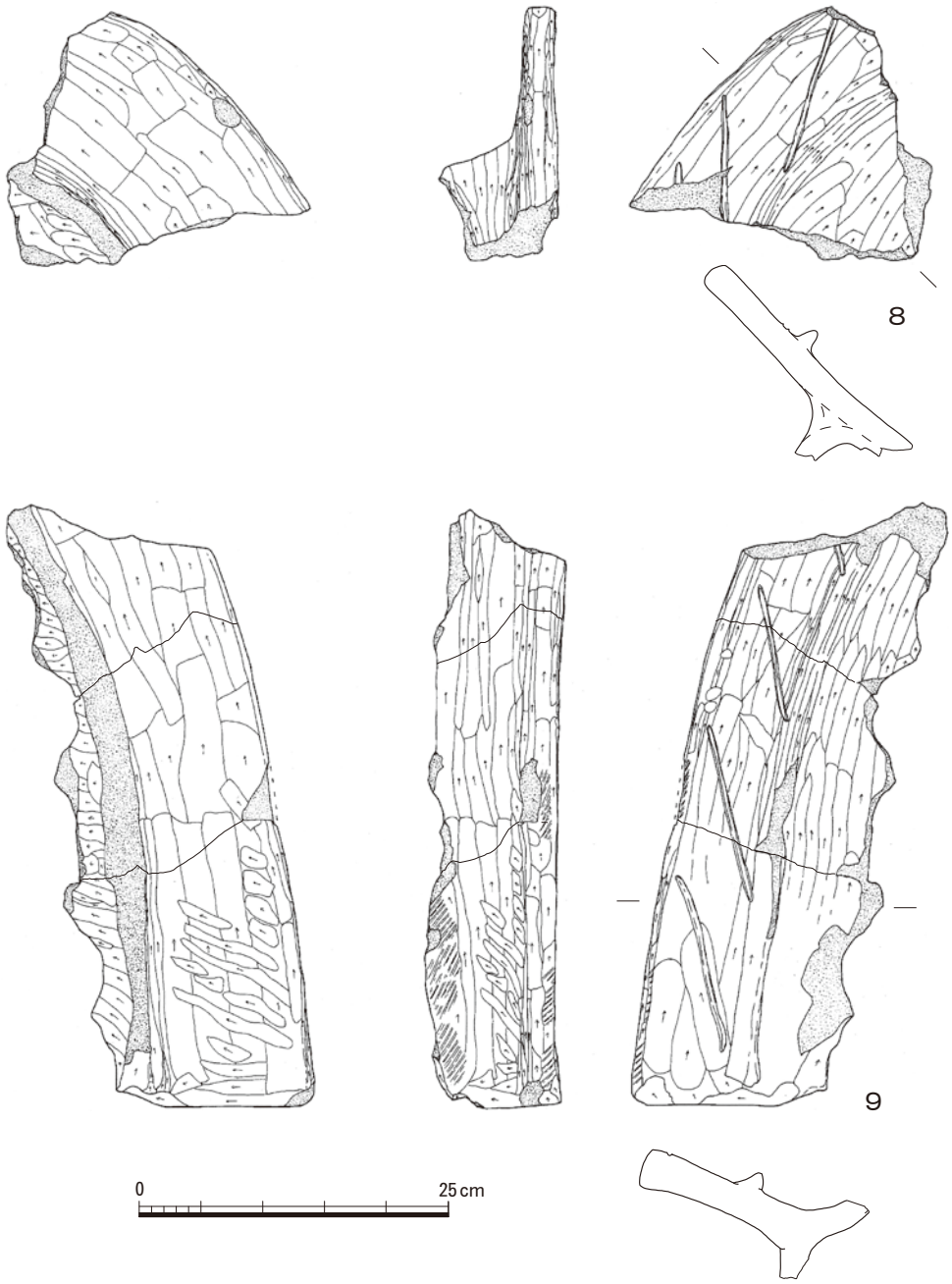


第３図　信濃出土の鴟尾実測図１（１：４）

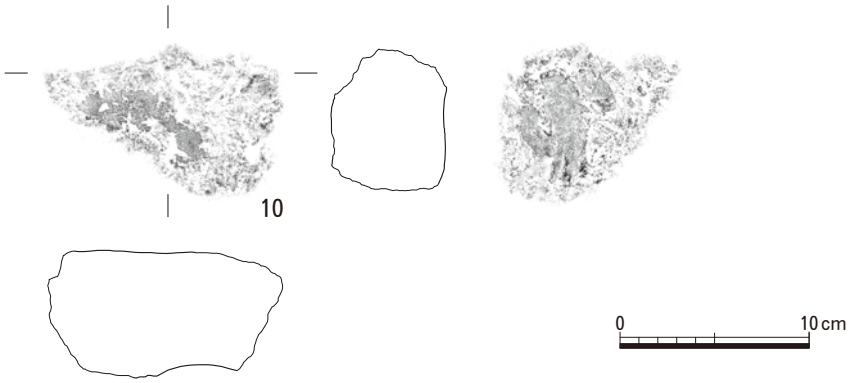


第４図　信濃出土の鴟尾実測図２（１：４）

大村遺跡

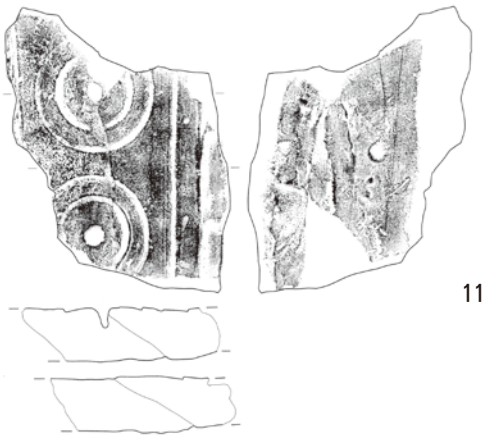


上川路廃寺跡

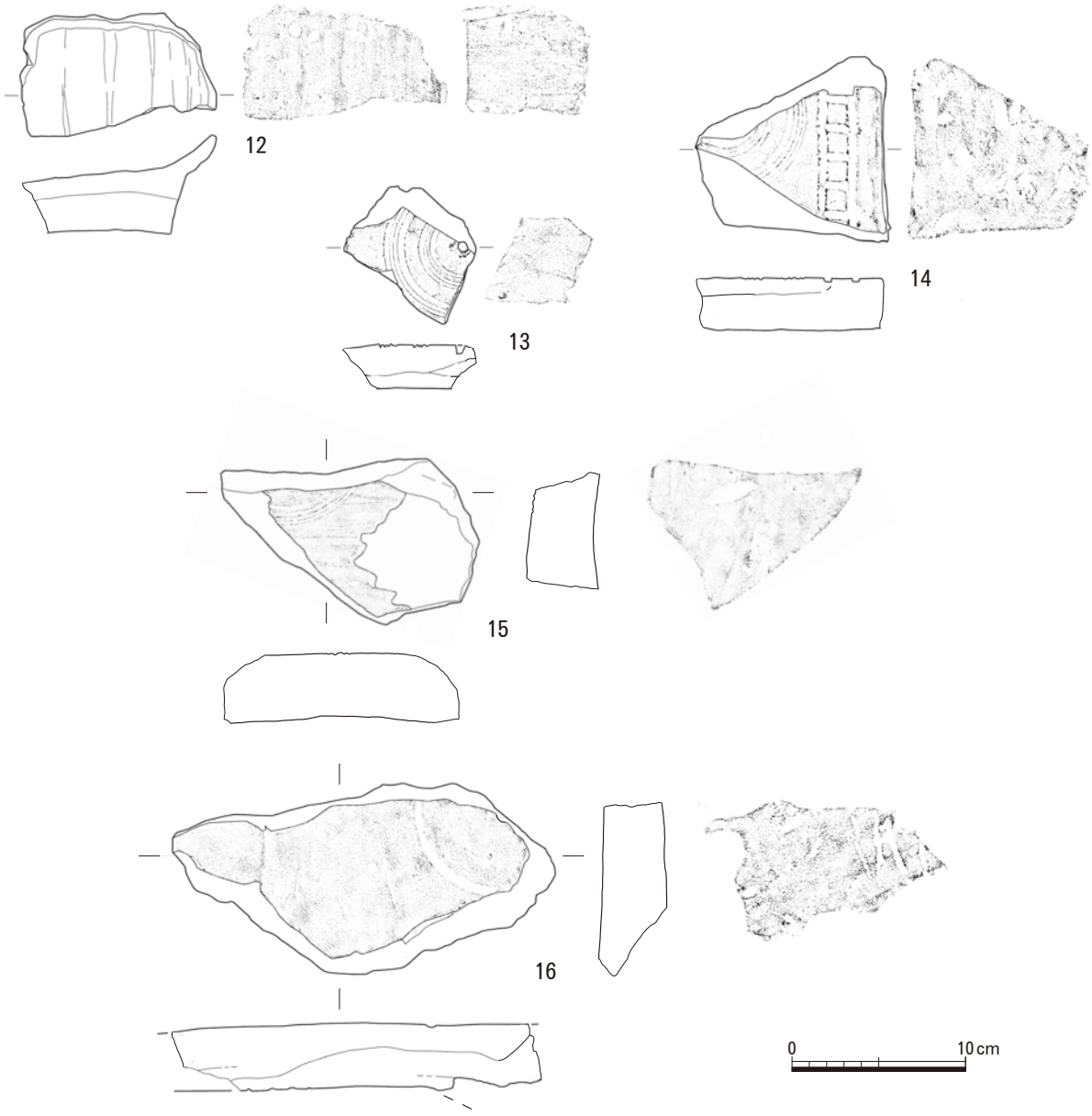


第５図　信濃出土の鴟尾実測図３（８・９＝１：６　10＝１：４）

下野羽根坂古窯跡

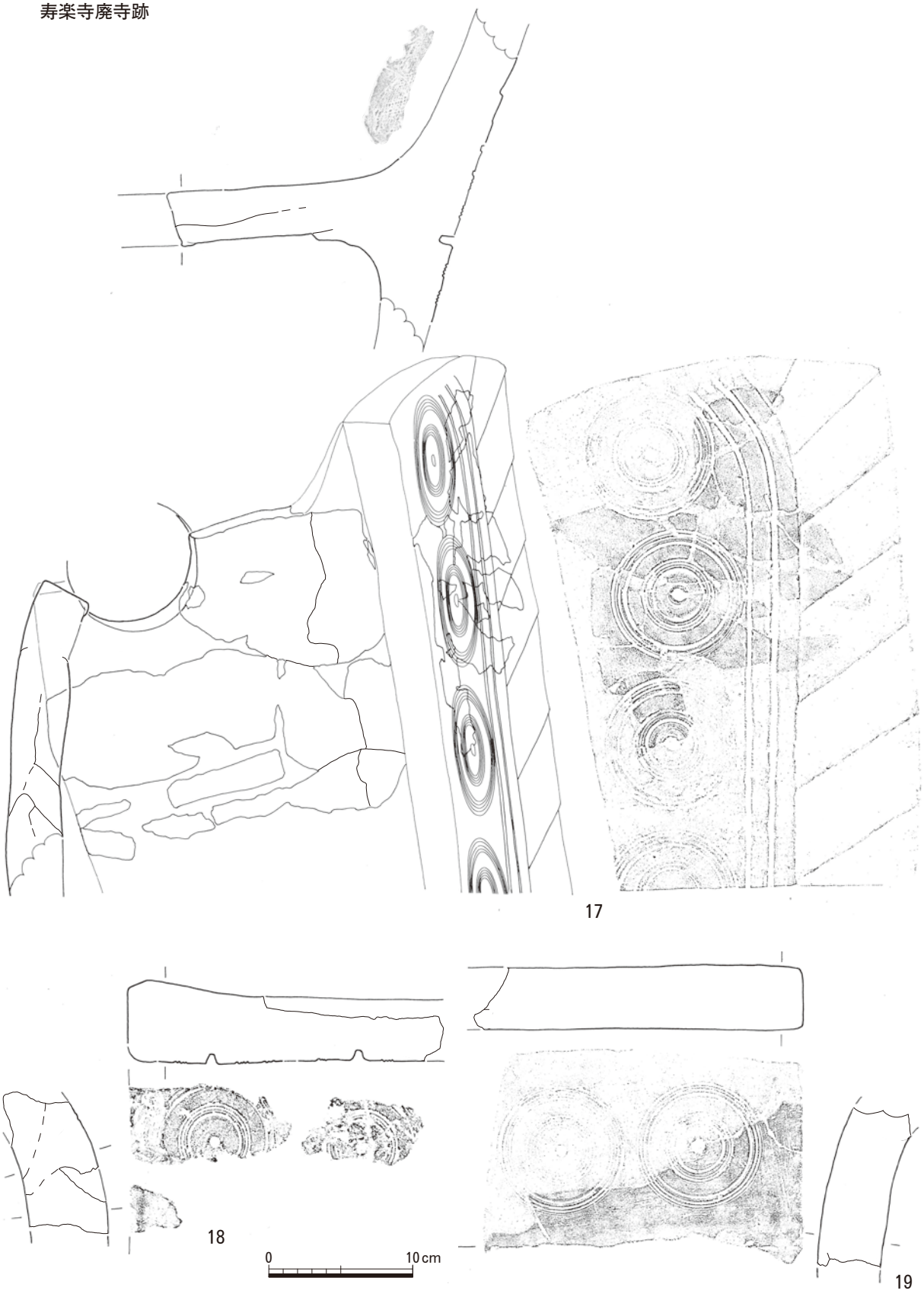


信包中原田古窯跡

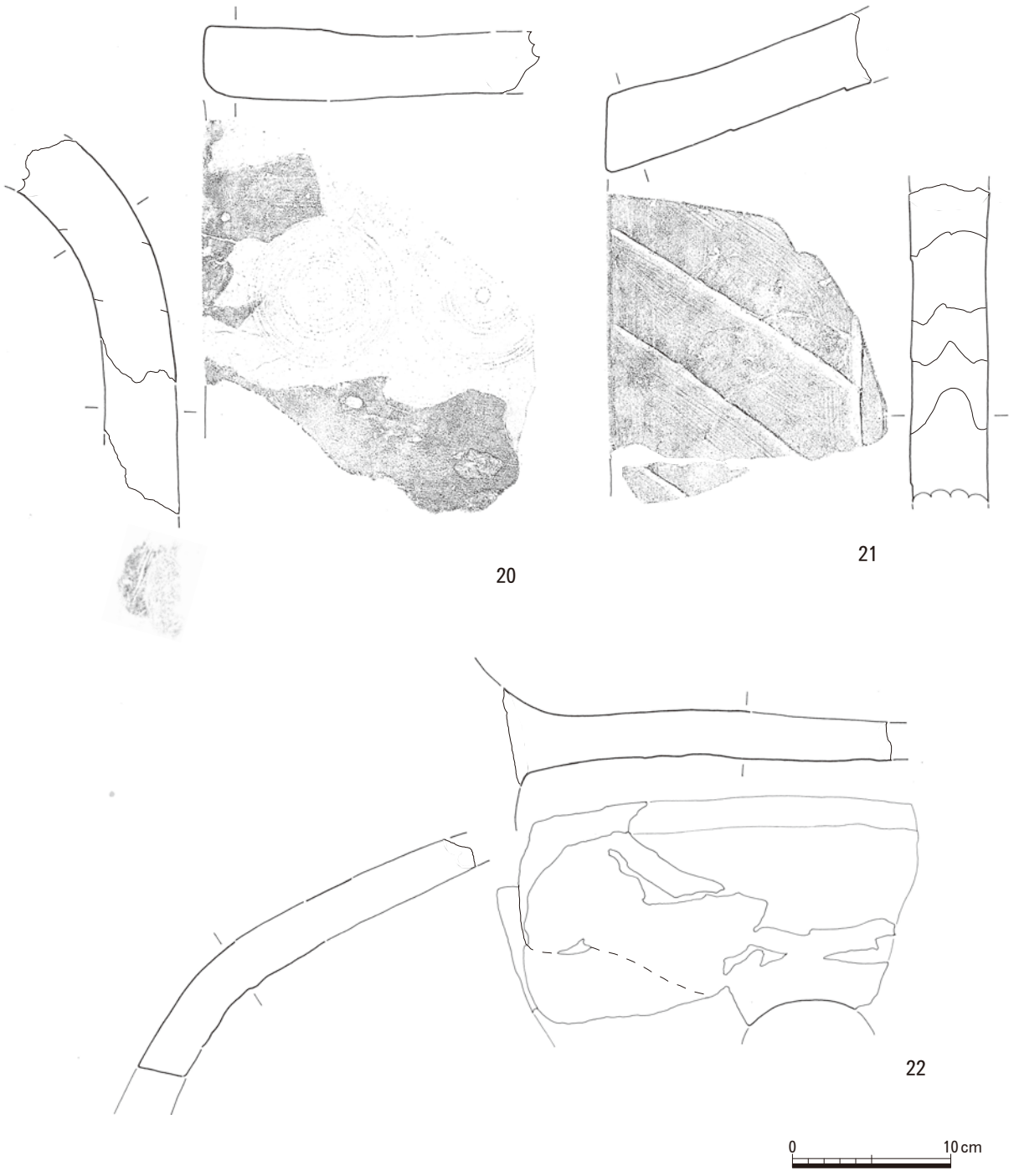


第６図　飛驒出土の鴟尾実測図１（１：４）

寿楽寺廃寺跡

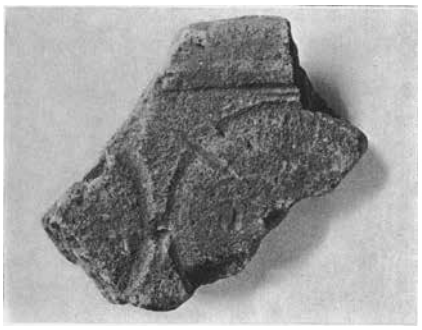


第７図　飛騨出土の鴟尾実測図２（１：４）



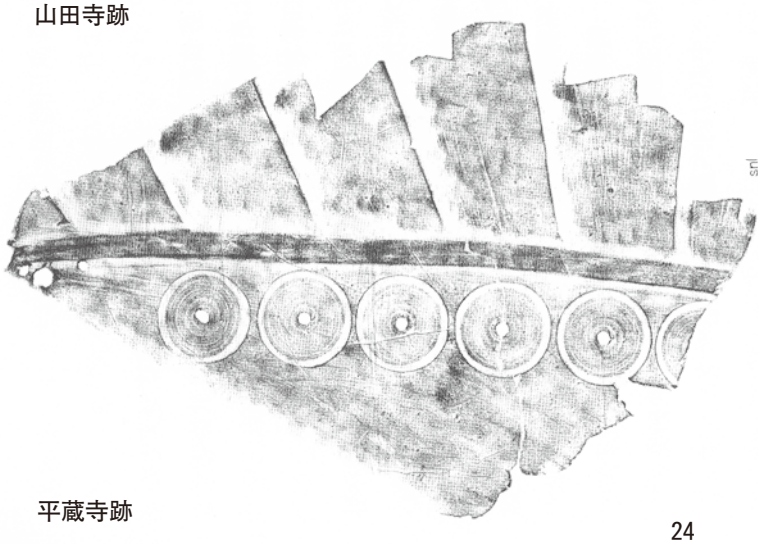
第８図　飛騨出土の鴟尾実測図３（１：４）

厚見寺跡



23

山田寺跡

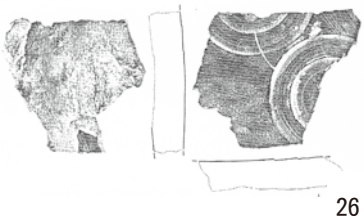


24

野口廃寺跡

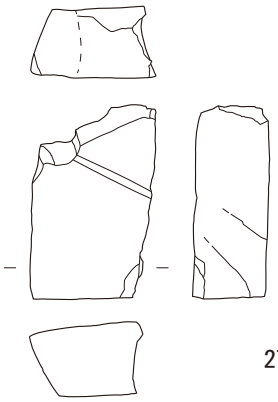
25

平蔵寺跡

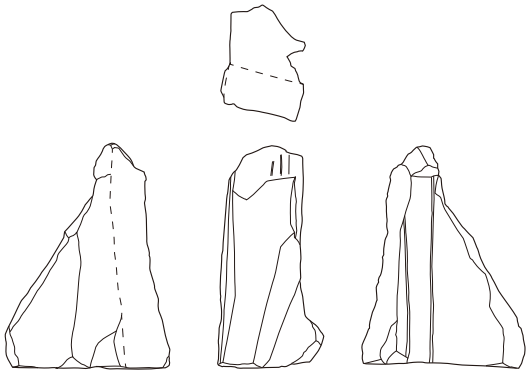


26

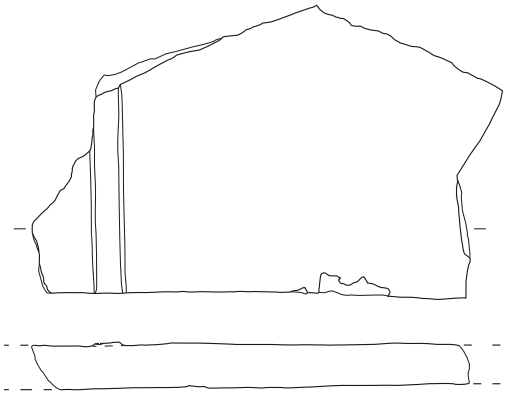
矢田廃寺跡



27



28



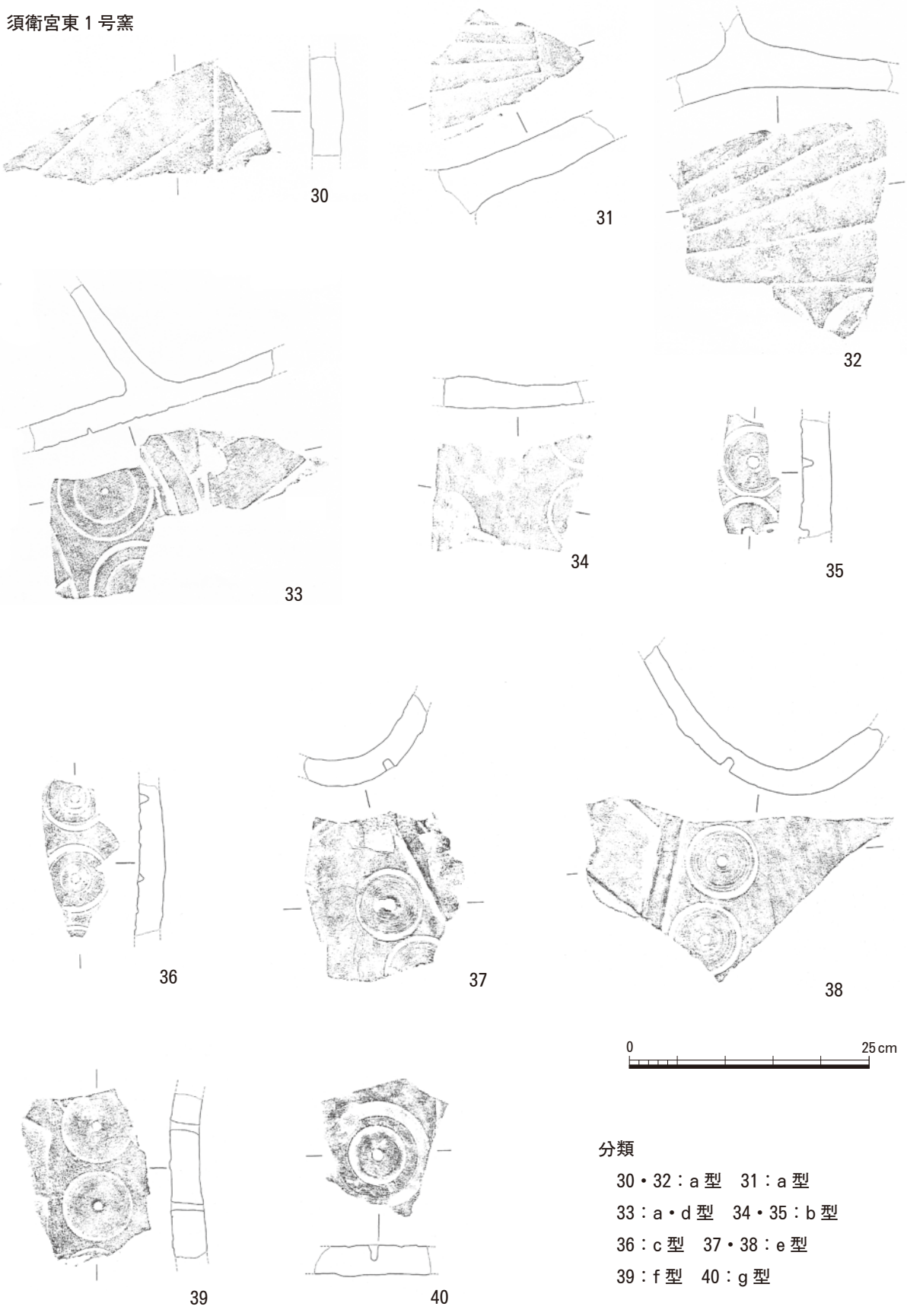
29

28・29

0　25cm

第９図　美濃出土の鴟尾実測図１（１：６）

須衛宮東１号窯



分類

30・32：a 型　31：a 型

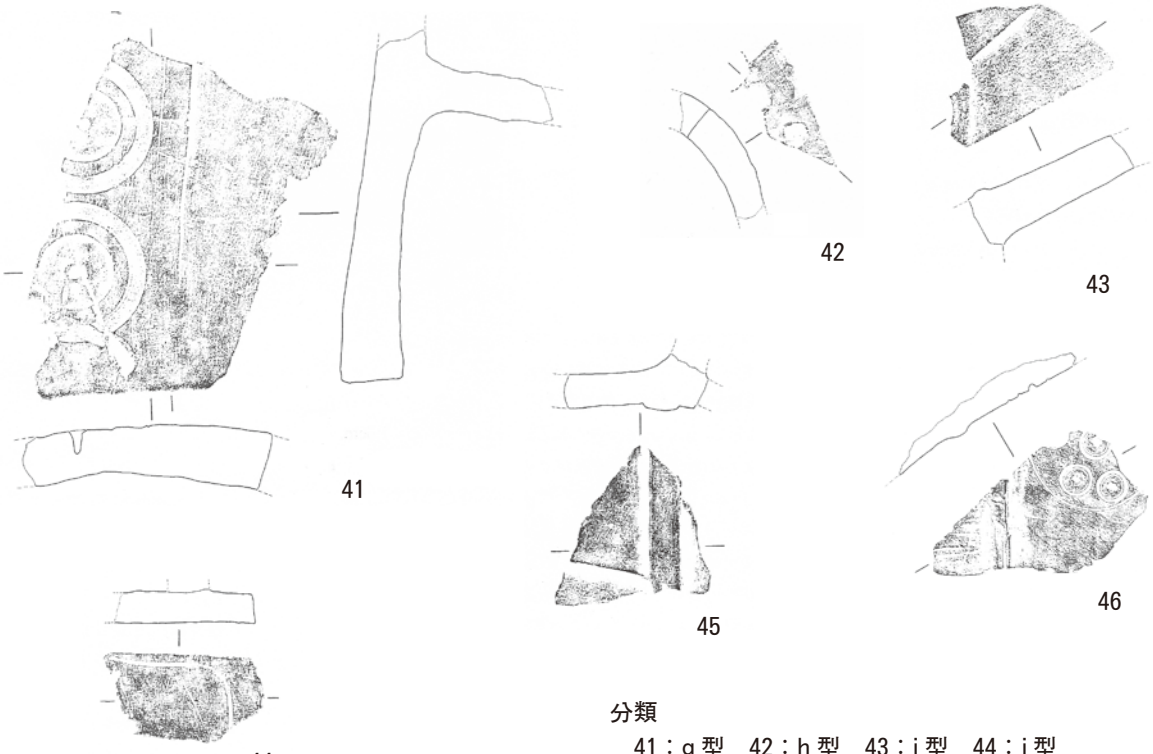
33：a・d 型　34・35：b 型

36：c 型　37・38：e 型

39：f 型　40：g 型

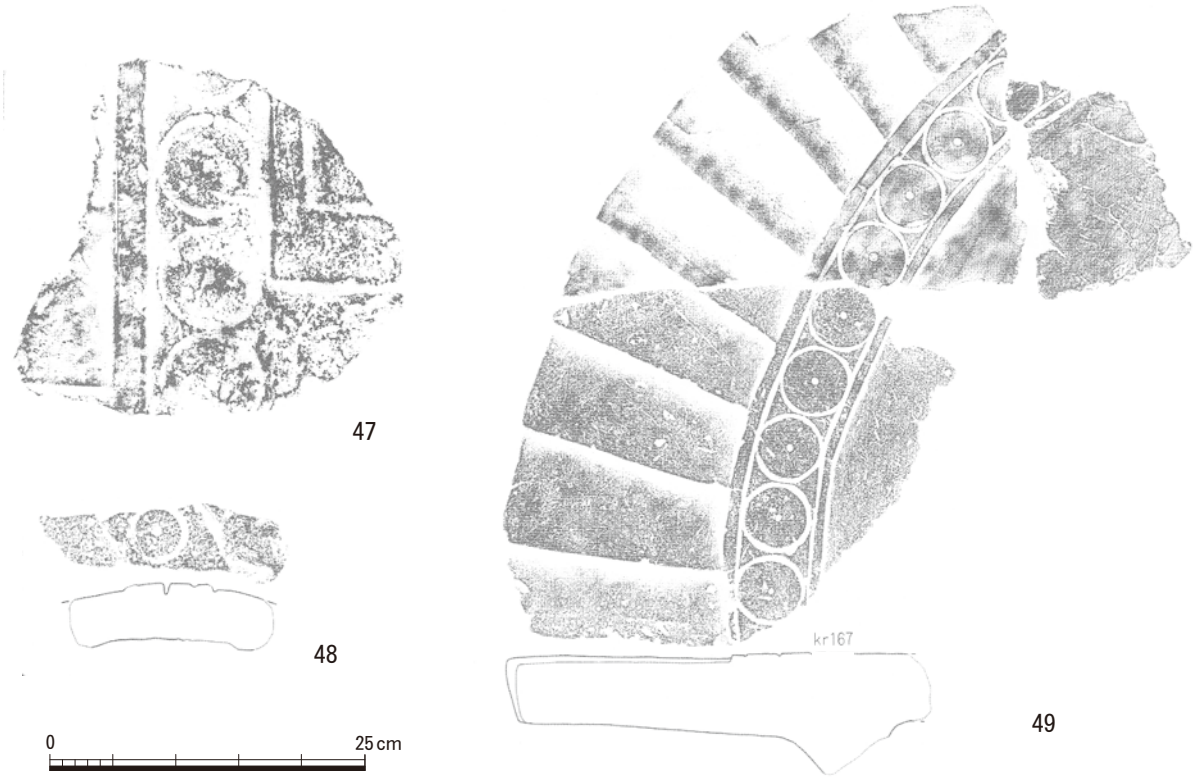
第 10 図　美濃出土の鴟尾実測図２（１：６）

須衛宮東１号窯



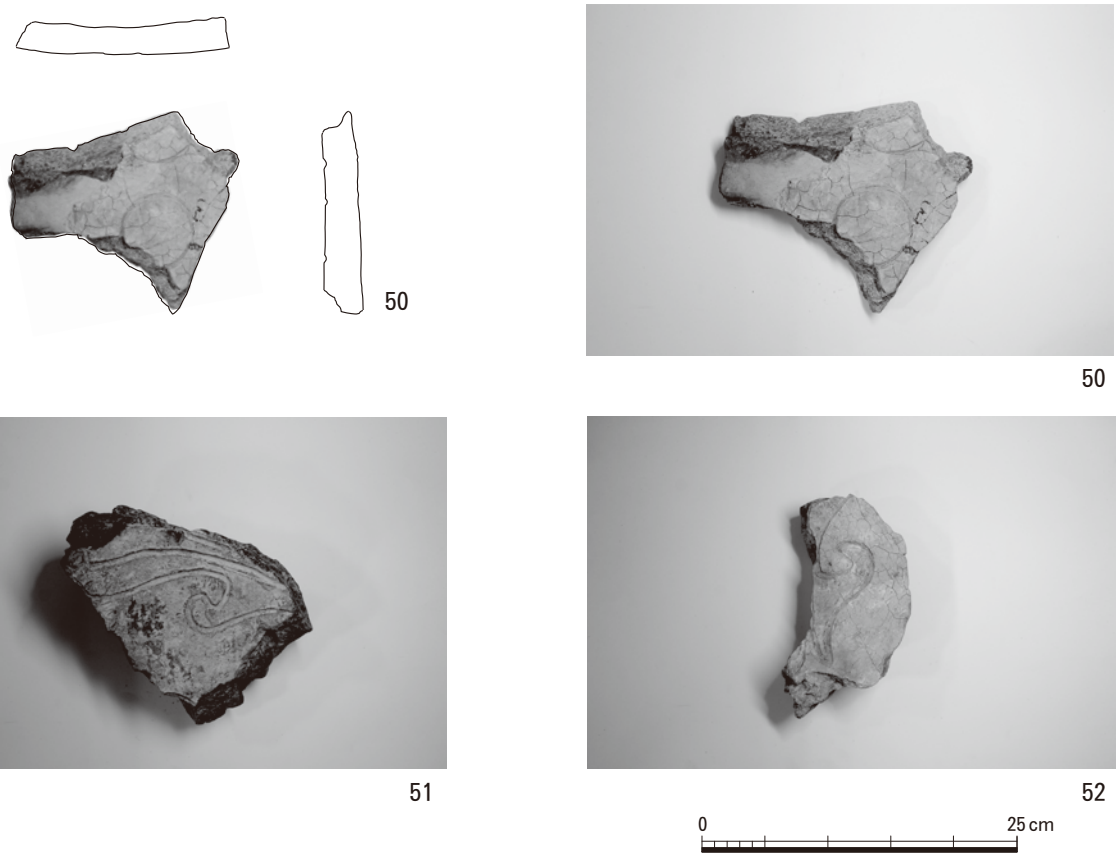
分類
41：g 型　42：h 型　43：i 型　44：j 型
45：k 型　46：型式無し

柄山古窯跡群



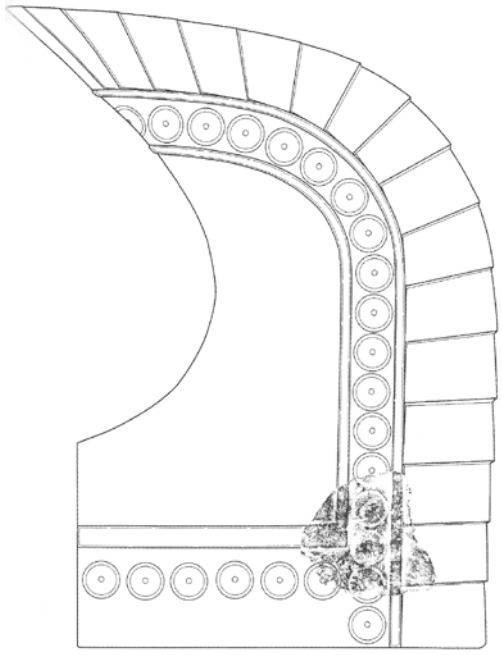
第 11 図　美濃出土の鴟尾実測図３（１：６）

各務御坊山南遺跡群 10 号窯

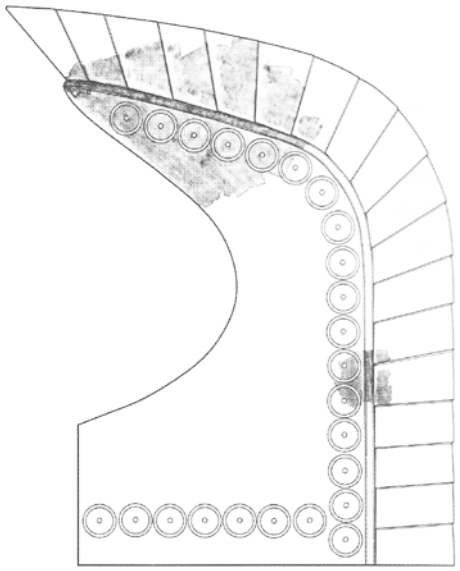


第 12 図　美濃出土の鴟尾実測図４（１：６）

柄山古窯跡



山田寺跡



第 13 図　美濃地域出土鴟尾復原図（小川2004より転載）

14　討　　議

質疑応答

1　奈良の鴟尾（道上祥武報告）について

上原真人　　大変面白い発表ありがとうございました。坂田寺のＥ類というのは、８世紀の後半というふうに報告されていますけれども、坂田寺では８世紀の軒瓦って出ていないんですよね。基本的に７世紀の瓦ばかりで。そうすると、８世紀の建物は基本的に檜皮葺が推定できますが、坂田寺Ｅ類は檜皮葺の屋根に乗っていたと理解してよろしいですか。

道上祥武　　ありがとうございます。報告では坂田寺Ｅ類の時期を８世紀後半と言ってしまったんですが、本来はもう少し古くて良いと思っています。その根拠としましては、唐招提寺のものと違って縦帯が底部に延長しない点と、鰭部の頂部の納め方が河内の鳥坂寺例に近く、やや古手と捉えられる点で、８世紀前半頃まで上げてもよいと考えています。

実際の坂田寺の遺構と鴟尾の関係ですが、今回、Ｅ類の出土分布をまとめたところ、調査区全体で広く出土していて、個別の建物との直接の関連を確定することはできませんでした。したがって、厳密にどの建物に使用されていたか、檜皮葺の建物に使用されたかどうかは結論が出せていないことになります。ご指摘ありがとうございました。

３　大阪・和歌山の鴟尾（丸山香代報告）について

佐藤　隆　　大阪市の佐藤です。どうもお疲れさまでした。

難波宮の資料、４点紹介いただいているんですが、1997 年度の調査で葡萄の房っぽい破片が出ており、葡萄唐草の一部であろうと考えています（佐藤隆 2000「難波宮期の遺構と遺物」『難波宮址の研究第十一』大阪市文化財協会）。資料に挙げていただいている３番（本誌集成表難波宮跡鴟尾３）は奈良時代、難波宮の後期だと思いますが、この貼り付けの唐草の文様のところで、唐草だけではなくて、なにかかたまりが外れている部分があるので、その部分に葡萄があったのではないかと考えられます。現在、大阪歴史博物館の展示では、そうした要素を全部含めた形で、確証はないですが、模型を作っています。小さな破片なので、鴟尾ではないとご判断されたのかと思ったのですが、お考えを聞かせていただければと思います。

丸山香代　　すみません、ご指摘いただきありがとうございます。

難波宮の資料につきましては、実物を実見できていませんでしたので、もう一度ちゃんと確認させていただきます。

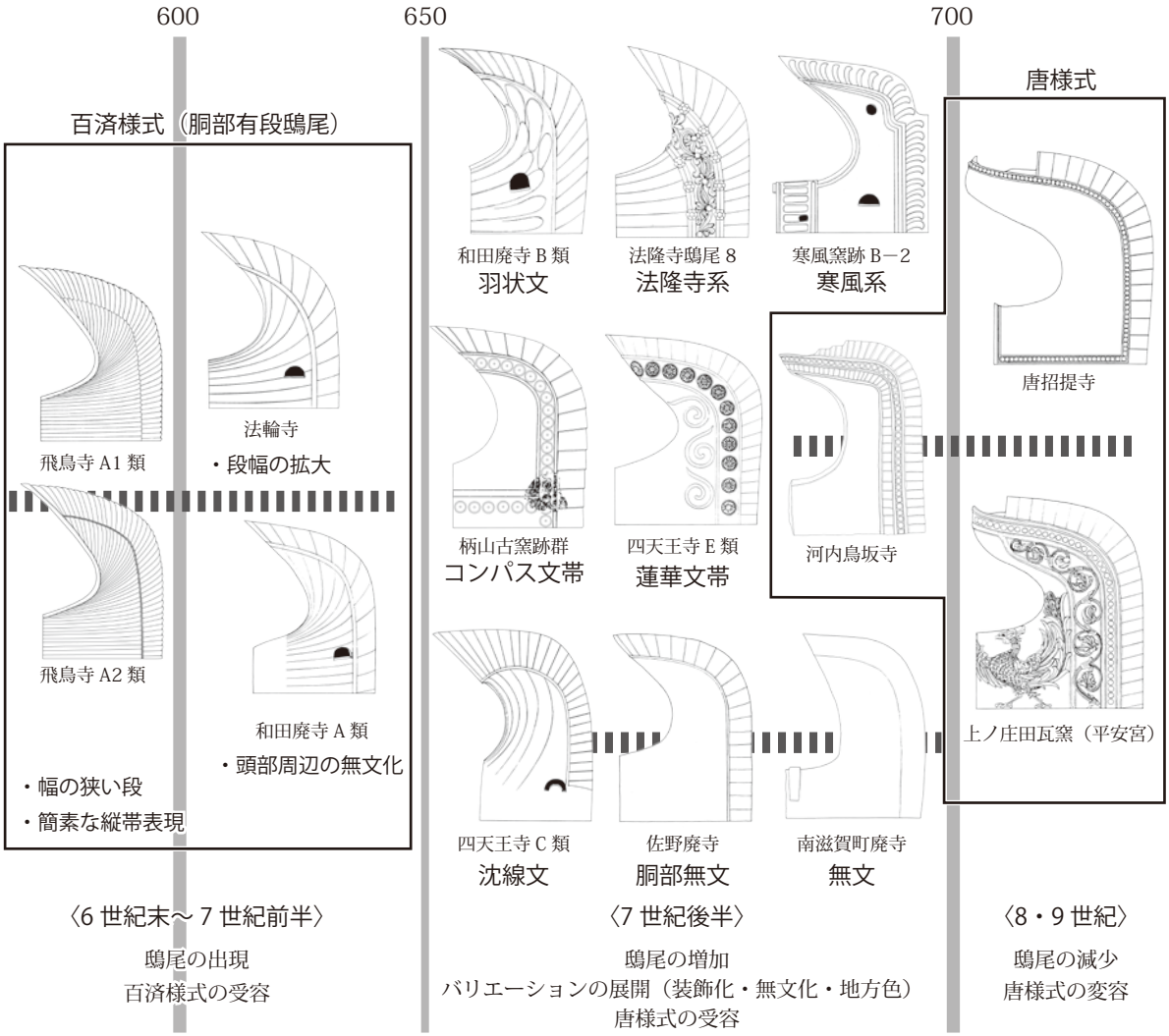
６　東海地方の鴟尾（武田寛生報告）について

道上　　尾張元興寺の鴟尾について教えていただきたいのですが、出土している破片は縦帯と鰭部の辺りのみでしょうか。先程スライドにあがっていた復元図は、頭部付近で段が消滅するように表現されていたと思いますが、これは段が途中で消える資料があったということでしょうか。あるいは不明ということでしょうか。

武田寛生　　尾張元興寺の鴟尾については、３点ほどの破片を見せていただいたんですが、胴部先端の破片はありませんでした。縦帯の辺りの破片が２点ほどありまして、縦帯の幅が多少違っていましたので、正確には２個体があると思います。破片から頑張って復元しすぎたところもありますが、ご容赦いただきたいと思います。

総合討議

司会（今井晃樹）　　ただいまからシンポジウムを始めたいと思います。私、昨日から司会をしておりますが、そのままシンポジウムの司会をいたします。よろしくお願いします。



第 1 図　日本の鴟尾の変遷

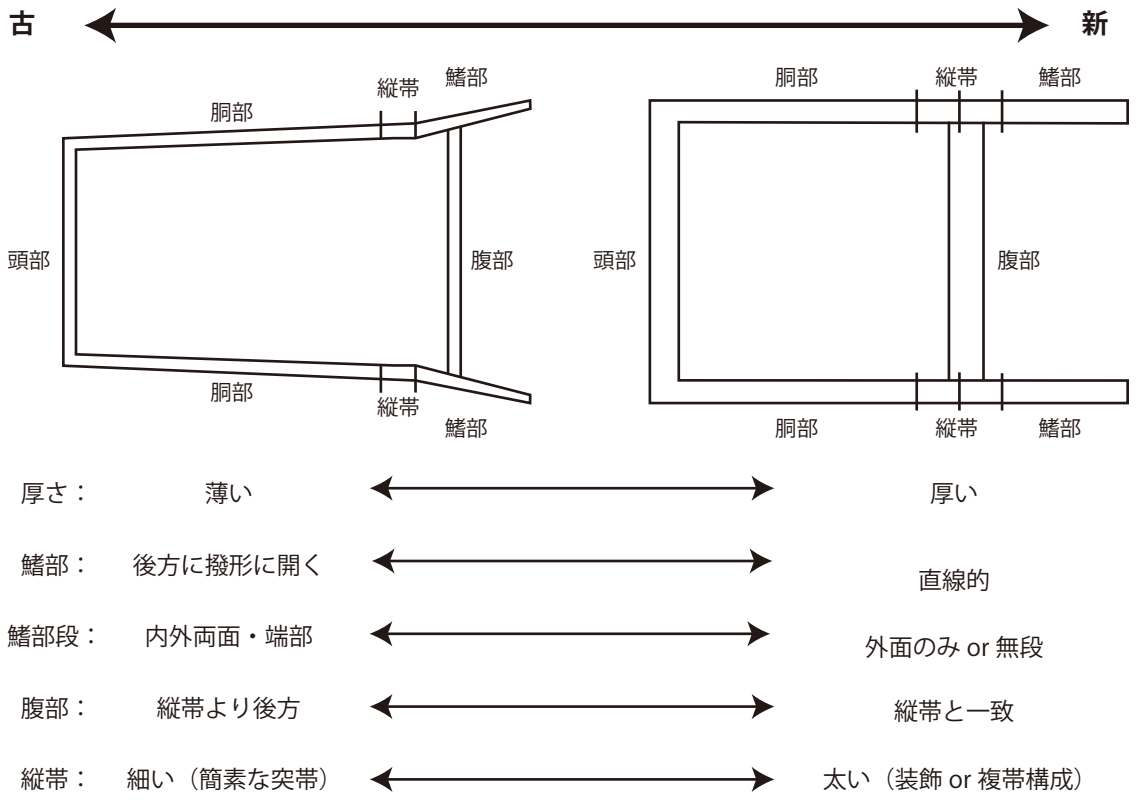
まず最初に、今回の鴟尾はこれまでの瓦のシンポジウムと違い、特殊な遺物ですので、分かっている方には必要ないんですが、少しだけ鴟尾の概要説明をさせていただこうと思います（第 1 ・ 2 図）。

まず今回、皆さんのご協力で鴟尾の集成をしていただきました。その結果は全国で 301 遺跡でした。内訳としては近畿圏が 177 遺跡なので、全体の半分くらいは近畿圏です。そのほかの地域でもそれぞれ増加しており、出土傾向に大きく変化はありませんが、数は大幅に増えたことになります。

今回、みなさまのご報告の中でいろんな鴟尾の名称があったと思います。大脇潔さんがかつて概要をまとめられましたが、古い時期の鴟尾は胴部全体に段を削り出すものです（胴部有段鴟尾）。そこから沈線文や無文など様々な鴟尾、さらに、縦帯に珠文をもつ珠文帯、蓮華文をもつ蓮華文帯、胴部に羽根状の文様をもつ羽状文など多様化し、頂部の先端が欠けた胴部無文の唐様式と呼ばれるものが現れ、奈良、平安の鴟尾へと続いていきます。

これを時代別に並べますと、7 世紀前半には有段鴟尾が優勢で、山田寺や和田廃寺など羽状文様をもつものが 7 世紀中葉頃に現れてきます。そして 7 世紀後半には、本日皆さんに発表していただいたように、鴟尾が多様化します。まさに、白鳳寺院が各地に広がっていってどんどん作られた時期に、鴟尾もそれに合わせて多様化しているということがいえると思います（第 1 図）。

8 世紀以降になると鴟尾はシンプルなデザインのものが多くなり、数もぐんと減ります。第 1 図は量の大小も反映していますが、7 世紀前半は事例が比



第２図　鴟尾の横断面形の変化

較的少なく、７世紀後半になると多くなり、また８・９世紀で少なくなっていきます。８・９世紀の鴟尾の出土は宮殿や都に限られるような状況で、文様もかなり画一化したものになってくるというような流れが指摘されてきました。

個々の文様も時代によって違いがあり、ざっとまとめますと、例えば胴部の段は初期の鴟尾が非常に狭い段を削り出すのに対して､時代が下るにつれて、広くなっていきます。こうした簡略化の中で段の沈線化や無文化の経過をたどることができます。特に鰭部の段は、当初は内外両面に削り出されていますが、新しいものは外面だけに省略されていきます。

さらに、初期の鴟尾は胴部の段と鰭部の段が互い違いになっており、縦帯をもたないものもあるんですが、多くは削り出しの細い突帯で縦帯を構成します。それがだんだん太くなっていって、貼付突帯に変わっていきます。さらに縦帯に装飾をほどこすようになり、７世紀後半には珠文帯と段部が２列に並ぶような複帯構成をとるものが現れてきます。この縦帯を飾る珠文ですが、当初は削り出して作られていたのが、後の時代には別に作ったものを貼り付けるようになっていきます。

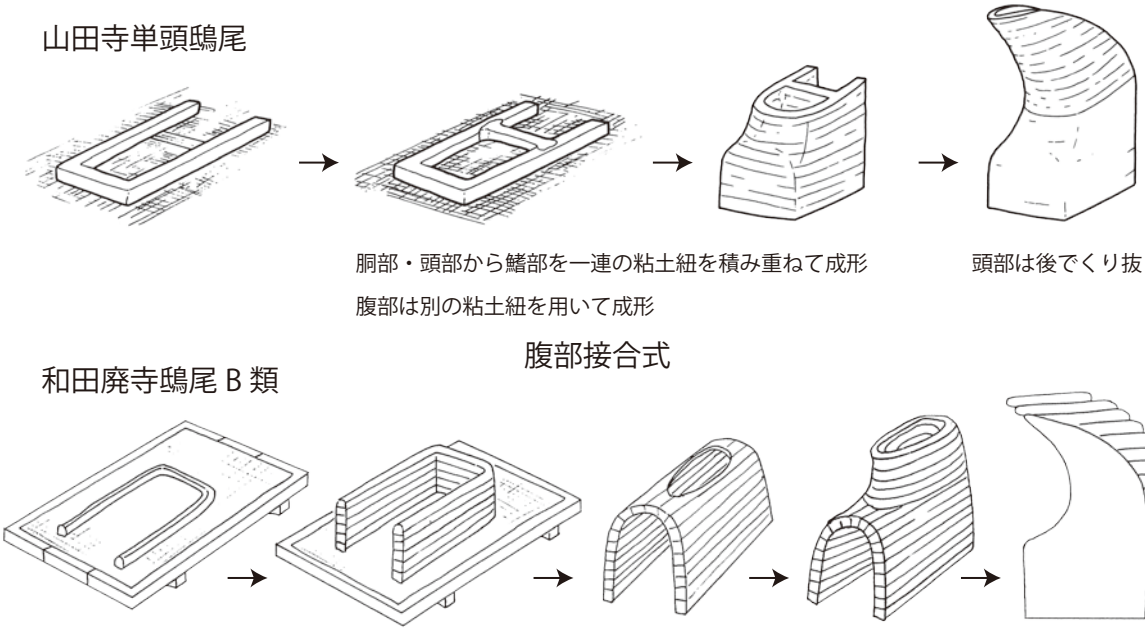
全体として、最初期の鴟尾は非常に薄いです。当初厚さ２cm 程度だったのが、だんだん厚くなっていきます。７世紀後半から８世紀にかけて、鴟尾自体が大きくなっていくので、それにともなって厚みも６～７cm と、かなり厚くなります。

それから、基底部を横断面で切ったとき、古いものは頭部よりも鰭部のほうが撥状に開いているんですが、これが開かなくなり、頭部と鰭部の幅の差がなくなってくるという傾向があります。

また、腹部の位置ですが、古い時期は縦帯よりも後方にくるんですが、これが大体縦帯の裏側の位置まで移動してくるという傾向もあります。

さて、早速本題に入ります。時間も限られてますので、内容を絞って進めます。

最初にお話ししますのは、鴟尾の製作技法です。今回の発表でいろいろな作り方が出てきましたので、それを話していきたいと思います。それから、胴部無文とか、蓮華文帯とか、文様を取り上げて話をしていきます。個々の地域に限定されるような文様についてはそれぞれ発表していただいたので、シンポジウムでは地域を越えて、複数の発表者に関わるような文様を取り上げて、各地の関係に迫るよう



第３図　山田寺単頭鴟尾・和田廃寺鴟尾B類の製作技法

な話を中心にしていきたいと思います。最後に、鴟尾の生産のありかたについて。どういうところでどういう人たちが作っていたのか、生産体制が７世紀から８世紀でどう変化するのかというところをまとめていく予定です。

それでは、まず最初に鴟尾の製作技法について話していきたいと思います。ここでは道上さんのネーミングを使わせていただきますが、従来、腹部折り曲げ式というものと腹部接合式という２通りの作り方が知られてきました（第３図）。これらの作り方がいつから存在するのかということを道上さんから説明いただきたいと思います。

道上　腹部折り曲げ式は、和田廃寺Ｂ類を例に指摘されてきた製作技法です。

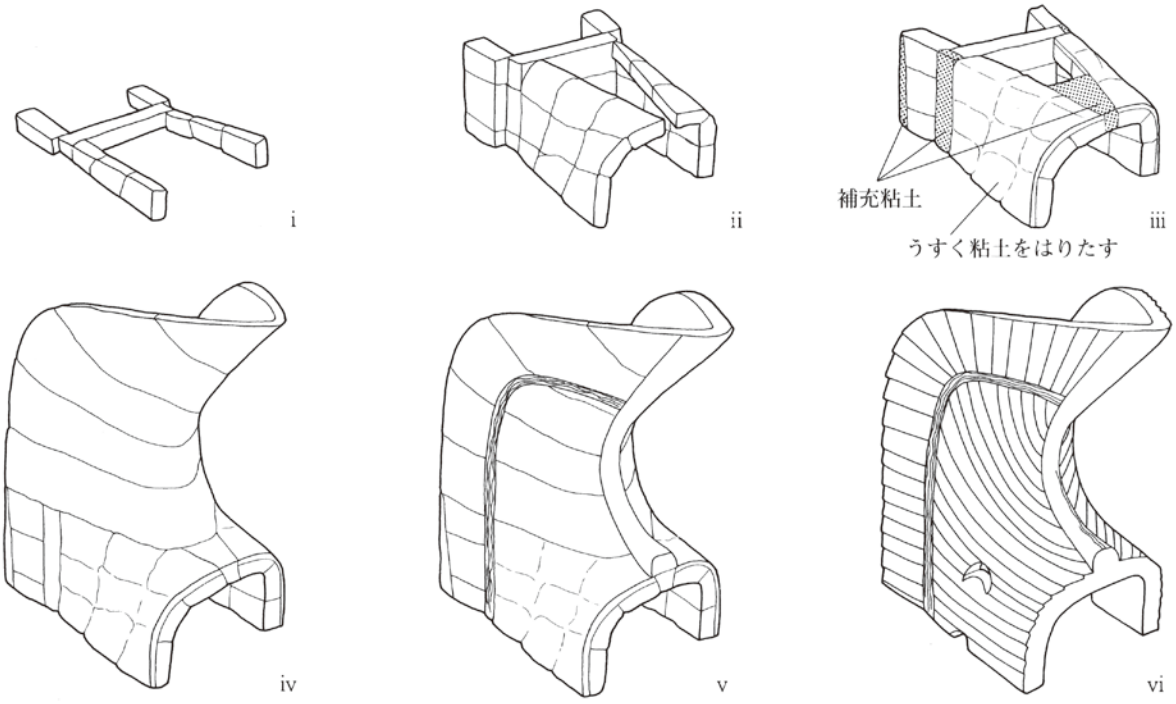
今回の検討で、飛鳥寺創建期の鴟尾とみられる飛鳥寺B1類が腹部折り曲げ式であることを確認しました。一方、飛鳥寺B1類と同時期とみられるB2類は明らかに腹部接合式とみられるものでした。これらはその形態から７世紀初頭前後の鴟尾と推定できます。つまり、鴟尾の導入当初より、既に腹部折り曲げ式と腹部接合式の両方が存在したということを報告で申し上げました。

その他奈良県内の資料をみると、腹部接合式が広く確認できるのに対し、明確な腹部折り曲げ式はこの他に確認できませんでした。和田廃寺Ｂ類は腹部折り曲げ式ですが、７世紀後半頃の資料です。細々と折り曲げ式が残っていたのか、あるいは部分的な使用に留まるものなのかは不明です。

司会（今井）　ありがとうございます。

鴟尾の製作技法について、当初から２通りの作り方があったということが分かってきました。そのほかにもう１つ、新堂廃寺の例について、この２つとは違う技法があることを提示されていたのが岩戸さんです。それについて説明をしていただけますか。

岩戸晶子　新堂廃寺の７型式といって、新堂廃寺で出ている一番最後の鴟尾で、南門の柱の礎盤として出土したものです。一応、片面がほぼほぼ出てきまして、その破片を組み上げていく中で、製作技法が大体復元できました（岩戸晶子 2001「南門柱掘方出土鴟尾の復元」『新堂廃寺』大阪府教育委員会）。今回の発表でも粘土紐の積み上げが圧倒的に多かったと思いますが、粘土紐とはいえないぐらいの、粘土ブロックを用いて成形されています。やや幅が薄い粘土ブロックを積み上げ、最終的に表と裏に薄く粘土を貼り足して表面を仕上げ、そこから段を削り出すという製作技法が復元できました（第４図）。



第４図　新堂廃寺出土鴟尾の製作技法

この粘土を薄く貼り足す技法は、今回発表いただいた事例の中でもいくつか挙げていただいたと思います。時代や地域は離れますが、最近、中国の北魏洛陽城の鴟尾など、非常に古い段階の鴟尾でも、こちらは粘土ブロックではないですが、粘土紐を積み上げて成形し、その後、表裏両面に薄く粘土を貼り足すという技法を確認しました。この場合、断面は３層構造になります。

司会（今井）　ありがとうございます。

これに関連して、昨日の報告の中でもしかしたら似ているのかなと思ったのが、山陽地域、寒風窯跡の鴟尾です。香川さんのご発表の中で、粘土が剝がれたという話があったと思うんですが、その作り方と新堂廃寺の粘土ブロックづくりは似てるのか似てないのか、簡単にコメントをいただけますか。

香川将慶

粘土がはがれたというのは縦帯に貼り付けられた円盤状の粘土塊のことだと思います。これに当てはまるのがA型式で、蓮華文帯をアレンジした円盤状の粘土塊を貼り付け、それが剥がれたものと考えられます（157頁第１図）。寒風の鴟尾は表裏に粘土は貼らないので少しニュアンスが違うのかなと思います。

司会（今井）　ありがとうございます。

それではもう１つ、道上さんから奈良の尼寺廃寺のほうでまた違った作り方があるということでしたので、それを説明してください。

道上　尼寺廃寺の３種としているもので、橿原考古学研究所の廣岡孝信さんに教えていただいたものです（第５図）。尼寺廃寺３種は胴部片になると思われる破片が出土しています。側面が生きていて、破断面が両面にあって、片方がへこみ、もう片方が膨らんでいる資料です。おそらく膨らんでいる側が前方で、へこんでいる側が後方となって、アーチ状に胴部を構成していく作り方の破片として理解できるんじゃないかということをご教示いただきました。ただ、破片から想定される全体規模は小さいものと思われますので、小さいからこそできる作り方といえるのかなと思います。

司会（今井）　ありがとうございました。

従来の折り曲げ式、接合式のほかにブロック式、そして、頭部の部分を粘土紐を平積みするんじゃなくて、むしろ縦にアーチ状のものを接合していくという作り方があるという話でした。

もしかしたら他にも違う作り方があるかもしれませんが、今回、全国のものを集めたことで、少なくとも４つぐらいの作り方が分かってきました。今後鴟尾を見ていくときには、こういった製作方法を頭

第５図　尼寺廃寺鴟尾３種
（香芝市教育委員会蔵）

に浮かべながら観察していくと、もっと違う方法が見つかっていくかもしれません。

それからもう１つ、製作技法のほうで、京都の熊谷さんから、滋賀県の山ノ神遺跡の報告がありましたが、窯の中で木を井桁状に組んだ上に鴟尾が乗っていたというご指摘がありました。また、滋賀の大宝寺や大阪の鳥坂寺で、鴟尾の底面に布目圧痕がある、あるいは底面から両脇の高さ３cm ぐらいのところまで布目圧痕があるものも報告されておりました。鴟尾を作るときには、台座とその上に布を敷いて、その上に積んでいくということが考えられるということだったと思います。その辺を少し説明していただきたいと思うんですが、北村さん、お願いします。

北村圭弘　滋賀県の北村です。今日は当たらないだろうと思って、すごく油断していました。

滋賀県の鴟尾には、底部に布目圧痕が付く場合と付かない場合があります。山ノ神の場合は、台座に布を敷いた痕跡がなく、大津市の田中久雄さんも山ノ神は布を敷いてないなという感想をもたれました。一方、大宝寺については底面から高さ３cm ぐらいまでの両面に布目圧痕がある（61 頁第 10 図 15）。また、東近江市が持ってきた山本遺跡の鴟尾なんですが、底面から高さ５～６cm ぐらいのかなり高い位置まで両面に布目圧痕があるので（64 頁第 18 図１・２）、底面辺りの布目圧痕の付き方には２パターンあるのかなという印象を持っています。

こうした布目圧痕の付く意味ですが、４つくらいの布の使い方が想定できそうです。一つは型作り。もう一つは台座に敷いて鴟尾本体と台座とが付着しないようにすること。それから三つ目はよく言われるのですが、最初に作る底部（下部）が、全体を作っている間に、先に乾いてしまわないように、保湿目的で布を敷くことがあげられます。ただし、最後の保湿目的の布敷きには若干、疑問があります。確かに底部は最初に作りますが、水分は上部に積み上げた粘土から下部に向かって下がってくるので、最初に底部を作ったとしても、他の部位よりも先に乾くようなことはないんじゃないか。その意味で保湿目的で布を敷くことはやや疑問です。

そうしたことを踏まえて考えていることが四つ目です。山本遺跡のほか、八坂東遺跡（63 頁第 14 図 11）、法堂寺廃寺（64 頁第 17 図５）、宮井廃寺（64 頁第 19 図１・２）で見られるような、底部からけっこう高い位置に布目圧痕が付く例については、最後まで乾かない柔らかい底部（下部）を支えるために、型ではない何か、たとえば底部を押さえる（支える）ものを置いて、それと鴟尾本体との間に布を入れるのかなと考えているところです。

なお、二つ目の、鴟尾本体と台座とが付着しないように布を敷く場合では、ある程度鴟尾の形が出来てきたら、布をはずしてしまう場合も想定できるのかもしれません。このことを考える手掛かりになりそうなのが大宝寺例です。大宝寺では底面に対して垂直に突帯をつけることが多いのですが、今日、後ろに展示しているものは、鴟尾本体の底面にも突帯の底面にも、両方に布目圧痕が付く。他方、これとは別に高島市がもっている破片をみると、本体の底面には布目圧痕が付くが、なぜか突帯の底面には布目圧痕が付かない。突帯を貼り付ける段階では、もしかしたら最初に敷いてあった布ははずされているのではないかとも思われるのですが、大宝寺を見ても他遺跡を見ても、最初に敷いた布をはずした痕跡（布をはずした後、底面を台座に直置きした場合、

底面の布目圧痕が擦れてつぶれたような痕跡）は認めにくい。これらのことをどう考えるかついては、まだ考えがまとまっておりません。以上です。

司会（今井）　ありがとうございます。

今のお話に関連して、東海にもやはり、底面や腹部の内面に布目がくるという報告がありました。今のお話を聞かれて、武田さん、東海のほうの布目のイメージについて、教えていただければと思います。

武田寛生　東海で底面の布目が残っているのは松阪市辻垣内瓦窯の鴟尾です（181 頁第１図）。底面が残る破片と復元されている鴟尾２体、いずれも布目が残っています。あと、底面が残っている資料として、浜松市篠場瓦窯がありますが、こちらは布目はなくて、木目だけが残っています（185 頁第５図）。

内面の痕跡というお話がありましたが、篠場瓦窯では、腹部の上方の内面に竹笹類を縦横に組んだような痕跡が残っています（185 頁第５図）。

もう１つ、愛知県寺部遺跡の鴟尾でも内面に痕跡が確認されています。184 頁第４図左上の図です。こちらは角材をＴ字状に組んだものです。これも破片は接合できていませんが、報告書では屈曲部近くの腹部の破片で、内側にこういった痕跡が見られるということで報告されています。

篠場瓦窯では底面に木目が残っていましたし、腹部の破片がありましたので、木目を追っかけていけば山ノ神のような組んだ台座なのかどうか分かるんじゃないかと期待したんですが、腹部のほうの破片の底面が磨滅しており、木目の方向など何も分からない状態なので、板状の台座か、組んだものなのかは判別がつきませんでした。

腹部内面の痕跡については、おそらく上のほうで粘土がだらっと垂れてきそうな部分に当たりますので、張りぼての骨組じゃないですが、粘土を支えるような工夫がされていたのかなと思っています。

司会（今井）　ありがとうございました。

鴟尾は立体のものですので、順番に下から粘土を積み上げていっても、低いものでも３尺ぐらいあるんでしょうか。それを作っていく過程で、中に何か支えがないと、やっぱり途中で崩れてくるのかなという印象を持っています。今後、製作技法を考えていくときに、作る過程で内側に何か支えのようなものがあるということを想定しながら遺物を観察することが必要かなと思います。

話は戻りますが、台座の件について。山ノ神遺跡の例は台の上に乗った状態で窯跡にあったということですが、鴟尾を成形した場所から窯跡への運搬機能も台座に含まれているのでしょうか。北村さんに聞いてみたいなと思います。

台座をそのまま窯の中に置いて焼いているんですけど、この台座の意味として、別のところで作って、そのまま運べるようにという意味で必要なのかなと。その辺はどうでしょうか。

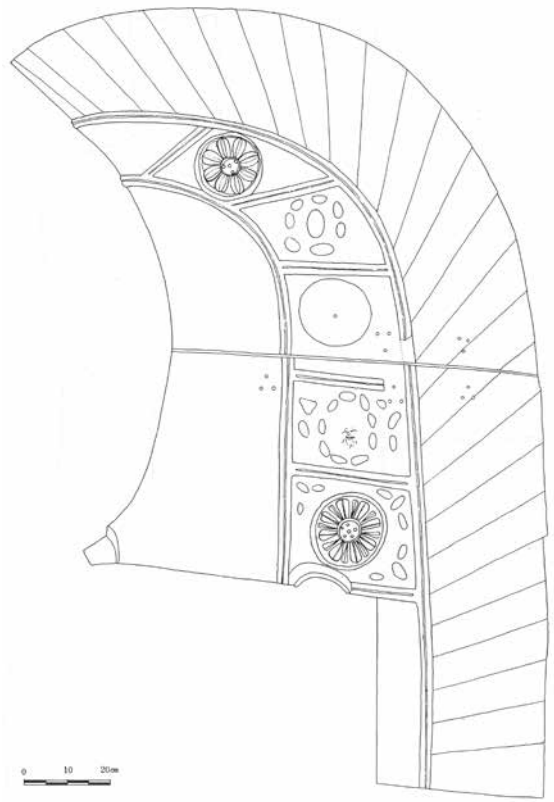
北村　おそらく台座の上で作って運ぶのですが、台座から鴟尾を外せないと思うんです。そのまま一緒に燃やしてしまうので、ああいう感じで残っているんだと思います。ですので、作って運ぶまでの機能があるというふうに考えます。

司会（今井）　製作の過程でも、鴟尾の中に支持をするような道具や運ぶような道具、台座みたいなものも考えていかなければいけないんだなということが分かってまいりました。

話が変わりますけども、数年前に奈良の坂田寺の鴟尾をこの研究会にもってきまして、わら状の圧痕があるということが話題になったと思います。今回、鴟尾の研究会になって、改めてそれが検討対象になったわけですけども、このわら状圧痕について、報告者の道上さんから、どんなイメージをもたれているのか、ご説明いただきたいと思います。

道上　本日、久保さんから類例を紹介していただきましたが、あくまで坂田寺Ｃ類の例から私が考えた案ということを前提にお聞きください。１つ可能性としては、分割して焼成した痕跡ではないかと考えています。韓国にも鴟尾を分割して焼くという例はあると思うんですけど、例えばある程度まで積み上げた段階で、一度わらの編み物を敷いて、再び積み上げていくと、おそらくその編み物のところで分割することができると思います。それで、それぞれ分割した状態で窯に入れるのではないかと考えています。その場合、上半分の部品のくぼみを維持したままで焼く必要があるので、山形の台などを用意する必要が生じてきますが。それで焼き上がった上で、もう１回はめ込むという方法を考えています。韓国では鴟尾を水平に裁断して針金で結んでという例がありますが、それに近いものなのではないかという案を提示させていただきます。異論をお待ちしております。

司会（今井）　韓国皇龍寺の例などがありますが、真ん中で分割されています。小さい穴が縁にあって、



第６図　新羅皇龍寺の鴟尾

おそらく針金か何かでずれないように留める穴だと思うんですけど、加えてこの例はＬ字状に仕口がしてあり、はまるように作ってあります（第６図）。韓国では糸切りですぱーんと切って重ねている例もあるんですけど、このイメージの日本版が道上さんのイメージかなと思います。

同じようなものが今日、鳥取の大御堂廃寺にもあるとおっしゃっていました。このコメントを聞いて、久保さん、今どんなイメージをもたれているのか、感想をいただければと思います。

久保穣二朗　出土例は大御堂廃寺のＢと、上淀廃寺のＡの鴟尾です（204 頁第 12 図・第 13 図）。底部のところに「網みワラ」の圧痕を確認することができます。坂田寺の資料よりも経糸の間隔が 3.7cm から４cm と狭いと思います。私はこの圧痕を確認した時に、花谷浩さんと相談し、どうも粘土紐が乾燥するのを防ぐために、「網みワラ」で覆ったのであろうと考え、そのような内容を『山陰の鴟尾』に書き留めました。大御堂廃寺の拓本と断面図を載せております（204 頁第 12 図 25）。断面には逆「Ｕ」字形の接合面を破線で入れております。恐らくこれもワラの圧痕の名残ではないかと思います。上淀廃寺ですが、明らかに逆「Ｕ」字形のところで、クラックが入っています（204 頁第 13 図 31）。これらの鴟尾は坂田寺のような大きな鴟尾ではありませんので、以上のように考えた次第です。

司会（今井）　ありがとうございました。

この課題はなかなか類例も少なくて、今ここで解決するってわけにいかないんですけども、こういう資料も増えてきたということなので、今後ほかの方も遭遇する機会があったら、考えていただければと思います。

今回、いろいろ資料を見させていただきまして、１つ感じたことがあります。というのも、鴟尾の表面にタタキがたくさんあるものや、内側に当て具痕があるものというのが、結構いろんな時期に出ています。今思いつくだけでも寒風のものは特徴的ですし、平安宮のものや山陰の鴟尾についてもたくさん圧痕が残っている例がありました。

これはあくまで私が不勉強な上での印象なんですが、大和とか関西の鴟尾を見ていますと、こういう痕跡はあまりないんですね。鴟尾の製作工程の中にタタキという工程があるのかどうか。最初に説明した鴟尾の製作工程の中にタタキという工程を書いた方がいらっしゃるんですけど、こういうふうにたくさん出てくると、タタキというのが鴟尾という立体物を作るために必要な作業なのか、あるいは地域色として、やるところとやらないところがあるのかというところが非常に気になったところです。

代表としまして、寒風のタタキについて、さっと説明を簡単にしていただきたいと思います。香川さん、お願いします。

香川　寒風のタタキなんですけども、基本的に各型式にタタキが見られます。Ｂ－１・３・５など、一部の型式では、ヘラケズリして消してしまうものもあるんですけども、基本、Ａ型のものなどは、裏面側に同心円文の当て具をして、タタキ部をばんばん叩きます。須恵器工人とか、須恵器を作っていた人がそのままの作りを援用して、タタキと当て具を併用しながら鴟尾を作っていったのかなと思います。

昨日の発表の通り、このタタキはかなりのバリエーションがあります。裏面側にも一部タタキをしているものがありまして、該当するものは今回分からなかったんですけども、寒風ではかなり全般的に見られるような形だと思います。

以上です。

司会（今井）　ありがとうございました。

その一方で昨日、奈良の発表で藤原京右京から出た資料というのが紹介されたんですが、それによりますと、粘土紐を積み上げた後タタキをして、タタキの上に粘土を貼り付けて、最後に段を削り出すということでした。つまり大和で、実は中にタタキをしているという例があったので、表面上にタタキが出ていなくても、工程としてはタタキがあるという可能性も、１つ挙げられるわけですね。

あとはタタキをしても最後の調整で、ケズリなりナデなりで消してしまっているので見えないというのもあります。タタキをするというのが地域差なのか、時期差なのか。あるいは全部、工程としてはあるんだけど、最後の仕上げで消すか消さないかという選択があるのかというところが１つ、鴟尾の作業工程の復元において、私は重要かなと思って取り上げております。ぜひ、今回のシンポジウムで会場の方にもできるだけ参加してもらおうと思っていまして、今の１点につきまして意見がある方、どなたかお一人ぐらい、いらっしゃいませんか。なかなか難しいですね。

私の個人的な感想としては、仮に調整で最後にナデとかケズリで消しても、タタキをやっていれば何か消し忘れ、削り忘れが残るんじゃないかなと。それが見えないということは、特に近畿辺りの鴟尾としては、タタキはしてないのかもしれない。逆にいうと、タタキを残しているところはそういう地域色で、あえてタタキを見せようと思ってやっているということがいえるかもしれません。

製作技法につきまして、もう１つ気になったのが、ハケメ調整というのがありました。奈良では和田廃寺が一生懸命、段のところをハケメをして仕上げているんです。非常にこだわりを感じるぐらいしつこくハケメをしております。そんな例がほかの地域でもありまして、沈線文の東播系のものにもハケメをするなどの特徴がありますし、その他の地域でもハケメが出ているんですけども、これも各地域の個性でやるかやらないかは決めているのかもしれません。

今回誌上発表していただきました北陸の資料にハケメをもつものがあったので、ここで北陸の鴟尾を紹介するという形で、説明をお願いしたいと思います。熊谷さん、お願いします。

熊谷葉月　熊谷です。北陸の鴟尾ですが、沈線文系といわれますが、私はあまり沈線文系というふうに認識しておりませんでした。王子保窯跡の鴟尾（268 頁第６図）は破片が非常に多くて、写真を載せたもののほかにもう１つ、同様のものがあるんですけれども、これのことを沈線文系といっていただいたかと思います。沈線というか、脊稜から線を入れ始めるところは細いんですけれども、そのまま鰭部に向かってどんどん幅広になっていくので、広い意味では沈線かなとは思っています。

それでハケメの問題なんですけども、復元してあるものを外から実際に見たら、腹部のところにハケメが結構残っていたのと、鰭の先のほうで、すり消してはあるんですけど、ちょっとハケメが残っていたりとか、そういうのは見えました。

あと北陸はとにかく資料が少ないので、あまりいえないんですけども、ちょっと離れたところに王子保窯跡と多分同じ形のものだろうといわれているものがあります。新潟県長岡市にある横滝山廃寺のものでして、破片なんですけれども、よく似た形ということです。こちらのほうは実見できていないので、ハケメがあるのかは確認ができておりません。

司会（今井）　ありがとうございました。

製作技法につきましては、今ずっとお話ししてきましたように、今回いろいろな鴟尾を集成しまして、どんな技法があるのかというのを、このシンポジウムで一堂に並べて、皆さんに知っていただこうというのが意図でして、特に一定、個々の問題について、これを何か解決しましょうということは将来の研究に委ねたいと思います。

最後に製作技法のまとめとして一言申し上げたいのは、タタキとか当て具というのが、もちろん瓦にもあるんですけども、一般的にいうと、やっぱり須恵器とかを作る人たちの技術としても認識されている技法だと思います。

それからハケメについてですけども、これも陶棺だったり、ちょっと時代が違いますけど埴輪だったり、そういった瓦とは違う技法として認識できるんじゃないかなということもあります。この話は後に続いていくんですけども、それを浮き彫りにするということで、ここで製作技法の話をひとまず終えたいと思います。

今度は文様に注目をしまして、話を進めていきたいと思います。最初に話したように、胴部有段鴟尾

とか珠文帯鴟尾というふうに分類がされていますが、それにのっとって、それぞれの分類の鴟尾が、どのような時期変遷を辿って、どのように展開していくのかというところを中心に話していきます。

ただし、ここにいらっしゃるパネラーの方にできるだけお話ししていただきたいので、個々の分類に関する深い議論は、時間の問題があり難しいと思います。ですので、この目的としましては、とにかくここでどういう文様がどんなふうに展開するのかというのをざっと皆さんに分かっていただくような形で検討をしていきたいと思います。

まず最初に、一番時代の古い胴部有段鴟尾を取り上げたいと思います。ご存じのように、胴部有段鴟尾の一番古いものは飛鳥寺で出た６世紀末の資料であります。これにつきまして、昨日の道上さんの発表では、この鴟尾の焼成の度合いが軒瓦の飛鳥の星組と共通するんじゃないかという話がありました。それはほかの時期の、７世紀前半の鴟尾についてもいえることですか。

道上　ある程度、星組という存在が想定できる初期の例としては、飛鳥寺創建期の６世紀末、７世紀初頭の鴟尾、あるいは古宮遺跡、若草伽藍の中でも胴部有段の古手の鴟尾が挙げられます。

司会（今井）　その意見を聞いて、拡大解釈しますと、この段階は軒瓦を作っていた人たちが鴟尾も作っていたという可能性も考えられますか。

道上　今のところはそう考えています。ただ、７世紀のかなり早い段階に限られると思います。

司会（今井）　ありがとうございます。

この有段鴟尾につきましては、もちろん百済から工人たちが来て飛鳥寺の瓦を作ったということなんですが、今回、韓国から洪さんがいらっしゃっていますので、ぜひ日本の最初期の鴟尾と百済の鴟尾のどの辺りが非常に近いのか、あるいは百済のどういったものが影響しているのかということについて、お聞きしたいと思います。参考に私がそうかなと思うものを今スライドに挙げていますので、それについてコメントをいただければと思います。

洪パルグム　飛鳥寺Ａのタイプの場合は、側面の図を見てみますと、胴部が沈線になっているんですけれども、陵山寺跡から出たものがちょっと似ているかなと私は思っております。

スライドの下の方にある扶蘇山で出土したものと、定林寺、王興寺の場合は突線で表現されている鴟尾なんですが、６世紀後半から７世紀前半ぐらいだと考えております。

司会（今井）　ありがとうございます。

韓国のほうも大分鴟尾の資料が増えてきまして、直接日本の鴟尾にどの遺物が影響を与えたのか、関係あるのかというのがだんだん分かってまいりました。今日は話しませんけど、実は中国のほうも分かってきていまして、中国、韓国、日本というつながりが見えてきているのが、最近の状況です。

また話を戻しますが、この有段鴟尾が７世紀の最初期からずっとあり、７世紀中頃になってきますと、大和や摂津以外の、例えば播磨や尾張のほうにも出てくるという報告があったと思います。それの時期と、それから、どういうところで作られたのかということについて、播磨の例につきまして垣内さん、それから尾張の例につきまして武田さんにそれぞれコメントをいただきたいと思います。

垣内拓郎　播磨の有段鴟尾なんですけれども、昨日もお話ししましたが、河合廃寺例が一番古い胴部有段鴟尾のものになります。これがどちらで作られたかは分からないんですけれども、同じ賀茂郡で出土している吸谷廃寺例と、あと江ノ下遺跡という例があります（119頁第２図）。江ノ下遺跡というのは、一応、窯跡と考えられている遺跡なので、この胴部有段鴟尾については播磨で作られているのではないかなと。

年代に関しては、菱田先生とかが東播系鴟尾の研究をされているときに、東播系よりも古いというような位置づけ、つまり７世紀中葉ぐらいを想定されておられまして、一応、私もその年代に乗っかって考えております。以上です。

司会（今井）　ありがとうございます。

それでは続きまして、尾張について、武田さん、お願いします。

武田　尾張は尾張元興寺からしか、この手のものは出ておりません。年代についてですが、出ている破片が全部遺構にともなうものではないものですから、なかなか難しいところはあります。創建期のものとすれば、７世紀の第３四半期前半というのが名古屋大学の梶原先生によるこの遺跡の位置づけですので、その頃になるのかなと思います（梶原義実2010「第１章総論　第３節　編年及び編年表　軒瓦」『愛知県史』資料編４　愛知県）。

あと、どこで作られたのかは、生産している瓦窯

が発見されていませんので、よく分かりませんが、近くに窯を造って、そこで作っているのかもしれないなと、そんな気がしています。

司会（今井）　ありがとうございました。

もう１点、この有段鴟尾が７世紀中頃か、あるいは後半ぐらいになるんでしょうか、九州のウトグチ窯で出ているというご報告がありました。これについて比嘉さん､先ほど説明いただいたんですけども、年代と有段鴟尾の状況について、畿内というか大和の有段とどの辺が違うのか、似ているのかという話をしていただければと思います。

比嘉えりか　私の資料223頁第３図６が胴部有段のものになります。こちらの特徴としては、頭部の端部近くに平行文のタタキの跡が残っているというのが挙げられると思います。

このウトグチ窯跡では、おそらく畿内から、瓦の工人が来て指導をおこなった上で、現地の須恵器工人が瓦を作っていたんじゃないかと考えております。鴟尾の作り方に関しましても、畿内系の技術をもった指導者によって、現地の須恵器工人が現地の道具を使いながら作っていったものではないかと考えております。

司会（今井）　ありがとうございました。

今ご紹介いただきましたように、有段鴟尾につきましては、７世紀中頃から後半にかけて、畿内からかなり離れたところでも出土してくると。少なくとも播磨や九州に関しては現地で生産しているということが分かってきていますので､普通に考えますと、畿内で流行していた有段鴟尾を見て、それに近いようなものを作っていったのかなということが考えられます。

一方で、大和のほうでは、この有段鴟尾は７世紀後半までずっと続いていくという状況があります。そういった意味では、ほかの地域と比べますと、有段鴟尾というのは奈良、大和の特徴なのかなということもいえるかと思います。

こうした有段鴟尾は、この後、７世紀後半になりますと、さらに広がります。会場の後ろにも並べましたけど、滋賀の大宝寺などからもたくさん鴟尾が出ております。ただ、よく見ていきますと、やっぱり大和の有段鴟尾とは違っていて、これも近江のほうの地域色が出ているのかなという印象も受けるような資料が出てきています。

そんなふうに、有段鴟尾というのは日本最初期の鴟尾の形態として出発して、７世紀中頃には畿内以外にも普及していくと。そして、大和では一応、７世紀後半になってもずっと作り続けているということが分かってくると思います。

７世紀第４四半期ぐらいに出てくる唐様式の資料として、ドウジョウ遺跡の例があり、胴部に段をもつ鴟尾だということが分かります。ですので、これだけ挙げても、大和において、有段鴟尾というのは長く続くのかなという印象があります。そんなふうに、有段鴟尾については展開していくということが分かってまいりました。

この問題につきましても、本当はたくさんテーマがありまして、深めれば幾らでも深められるんですけども、今回はなるべく多くの文様について取り上げたいと思いますので、次に沈線文鴟尾のほうに移りたいと思います。

沈線文鴟尾につきましては、昨日の垣内さんの報告にありますように、播磨の、しかも東のほうで集中的に出ておりまして、これまでの研究でも東の播州､東播系の鴟尾の特徴として認識されてきました。そして、その生産地も高丘窯をはじめ、どこで作ったかということもあきらかになってきております。

１つ、その沈線文鴟尾について今回出した資料なんですが、今、スライドに出ている資料、これは若草伽藍から出ている鴟尾でして、部位としましては頭部の部分。ここが底面になります（第７図)。ここが頭部の面が生きているところで、今、ちょうど頭部のこの辺、側面を見ているんですが、ちょっと暗いところがあるんですけど､ここに沈線があって、もう１つ、ここに沈線があるんです。これまであまり取り上げられてきてないんですけども、まずはこれがいわゆる沈線文なのかどうかというところ。そして、もしこれが沈線文だとすると、若草伽藍出土ですから、創建期と考えればかなり７世紀の早い段階でありますし、若草伽藍の途中で作られたと考えても、やっぱり７世紀中頃ぐらいかな、古いかなという気もしますが、それについて考えてみたいと思います。道上さんにコメントをいただきたいと思います。

道上　スライドに若草伽藍の沈線文の鴟尾ではないかという資料を出していただきましたけれども、結論として私は、これは沈線文をもった鴟尾と考えています。その根拠の１つとして、豊浦寺の金堂の近くで出てきた豊浦寺Ａ、頭部に玉縁がついている

第７図　若草伽藍出土の沈線をもつ鴟尾

ものですが、胴部の段の一部を沈線で表現している部分があります。今回の報告では７世紀初頭頃の資料と想定していますが、大和でも早い段階に沈線で段を表現するという手法が存在することが、若草伽藍の鴟尾を沈線文の鴟尾と見てもよいのではないかと考える根拠になっております。

司会（今井）　ありがとうございました。

この資料につきまして、沈線文の本家本元の播磨の垣内さんの目から見て、どのような印象を受けますか。

垣内　基本的に沈線文鴟尾は、あくまで棒状のもので施文し、段を１本の沈線で表現するというものをそう呼んでいるだけなので、これは沈線文鴟尾でいいんじゃないかなと思います。例えば工具を使って、まず外面に対して直角に線を入れて、その後、下側に何か切り込みを入れて、削り取って段を作り出そうというような意図が働いているんだったら有段になるのかなと思いますけども。ですので、これを見ている限りは基本的に１本の線だけなので、沈線文鴟尾でいいんじゃないかなと思います。東播系と呼んでいるような播磨で作られているものとの関連は分かりません。

司会（今井）　ありがとうございます。

この点は、あまりこれまで認識されてこなかったので、この場で提示することによって、今後若草伽藍の鴟尾を播磨の沈線文鴟尾の祖型とみるのかどうかというところが課題となってくると思います。

それからもう１つ、沈線文鴟尾で話題にしたかったのは、垣内さんの分類でⅡ'類とした、凹線施文と分類されている資料があります。これ、大脇さんは有段鴟尾の末期の頃の鴟尾だといっておられたんですけど、今回、垣内さんは沈線文でいいんじゃないかということだったと思います。

そこを突っ込むんではなくて、これは半ば無理やりなんですが、例えば今回、口頭発表されている中で、播磨との関係を考えさせる鴟尾が北陸にあります。先ほども紹介されたんですが、王子保窯の鴟尾もやはり凹線文の表現がされています。厳密にいうと大分違うところもあるんですけども、その辺の関係があるのかないのか、他人の空似かもしれませんが、コメントをいただければと思います。

熊谷（葉）　私、先ほど、すごく否定的なコメントをしてしまったんですけど、これはそういう系統と見ていいのかと、動揺していたのでそういうふうに言ってしまいました。沈線系で認めていただけるのであれば、ぱっと見、沈線系という、大きな意味での言い方もあるのかなということです。

先ほど言いましたように、端のほうへ行くと、凹線系といいますか、浅い凹線状のものになって、同じような幅の普通の地の部分があって、また次に、同じ形に沈線が始まって、凹線があるような作りです。そういう意味でいうと、北陸では二ツ梨豆岡窯の鴟尾も同じです。多分、線が描いてあるところが鰭部で、ほとんどがそうだと思うんですけれども、一部に細い沈線を描いて表現しているのと、凹線のような幅広で非常に浅い凹線で表現しているものがあるなと。今、話を聞きながら思いました。

司会（今井）　ありがとうございました。ちょっと無茶な質問だったかもしれません。

昨日報告があった京都の木野墓窯から出たものが沈線文ではないかという報告があって、これは窯跡から出ているので、現地産なのかなという気がしております。さらにもう１つ、大阪、和泉の野々井遺跡からも沈線文じゃないかといわれている鴟尾が報告されたと思います。それぞれについて、京都の熊谷さん、それから大阪の丸山さんに、これらをいわゆる沈線文という分類として考えていいのかどうか。そして、それが現地で生産されたかどうかとい

うところについて、コメントをいただければと思います。じゃあ、熊谷さんのほうからお願いします。

熊谷舞子　京都の木野墓窯で出ている鴟尾は沈線文でいいと思うんです。ただこれは、発掘などで出たわけではなくて、木村捷三郎先生の採集品になります。これ１点だけなので何ともいえないんですけども、垣内さんの分類ではおそらくⅡＢ類の今宿遺跡に似ているというふうに紹介していただきました。属性としては、確かに突帯を貼り付ける点は似ているのかなと思うんですけども、木野墓窯の時期とその編年、垣内さんの編年と比較しても、鴟尾自体の時期がはっきり分からないので何ともいえません。現地生産かどうかというのも、これだけでは、はっきり分からないなというのが正直なところでございます。

司会（今井）　ありがとうございました。では、丸山さん、お願いします。

丸山　大阪の出土の例としましては、１つ、四天王寺の例、『日本古代の鴟尾』で大脇先生がＣと分類されている分に関しては、すべて沈線による施文となっております。

それ以外につきましては、先ほどあった野々井遺跡というのが陶邑古窯跡群のすぐ近くということで、こちらのほうは現地生産というふうに考えてもいいかなと思います。ただし野々井のほうに関しては、沈線文ですが、ほとんど奈良時代のものなので、ちょっと時期が降るかなと。

司会（今井）　ありがとうございます。

この質問の意図として、沈線文は東播系の鴟尾の特徴として考えられてきたんですけども、最初に言いました若草伽藍のような例も沈線文の分類に入るとするならば、東播系よりも古い時期からそういう文様があったんじゃないかということ。

それから、生産地としまして、今、木野墓窯については何ともいえないということだったんですけども、和泉の野々井については陶邑の近くで現地生産していてもよいのではないかという意見でした。

そうしますと、沈線文が播磨の高丘以外でも作られてくるといったようなことが見えてきたかなと。これは非常に限られた資料の中での議論ですので、今後もっと残りのいい資料が増えた上で再検討しなければいけないと思うんですけども、こういう資料が出てきたことで、高丘以外の生産地を考えてもいいのではないかということが見えてきたかなと思います。

沈線文につきましてはこれぐらいにしておきまして、今度は珠文帯鴟尾を取り上げていきたいと思います。珠文帯鴟尾は、実は非常に多岐にわたりまして、なかなかある一定の地域にまとまっているという資料でもないんです。今回はその中でも特に、珠文帯でも古い時期といわれています、コンパスを使ってぐるっと円を描くような文様をつけるものを取り上げたいと思います。その地域はいわゆる美濃、飛騨といわれている地域に顕著だということが、今回、中部地域の報告でありました。

これにつきましても、誌上発表ですので簡単になんですけども、その特徴をここで説明していただきたいと思います。特に美濃と飛騨で一重、二重といったコンパスの違いがあるようなので、その辺の違いや共通点を含めて、三好さんに説明をお願いしたいと思います。

三好清超　飛騨市教育委員会の三好です。よろしくお願いします。

美濃と飛騨でコンパスの珠文が多いんですけども、ほとんど破片で、１個体丸々分かる事例というのはございません。その中での検討になりますが、例えば289頁第11図48や49が岐阜の柄山窯という事例にみられる、２本の区画線の間に一重のコンパスを施文するというような状況が一番古いんじゃないかというようなことを、軒瓦の検討を進めている小林新平さんが指摘されています。

それがだんだん変わってくると、例えば288頁第10図37や38の破片がそうなんですけども、鰭部側には区画線がある一方で、頭部側にはないというようになってくる。38を見ますと、一重のコンパス文で、内側に筋が見えますので、この時点で、後ろの展示にあるような型板を使っている可能性が高いということを考えています。

それが飛騨に来たときですが、資料集の285頁第７図17とかが分かりやすいんですけども、やはり鰭側に区画線があります。これは寿楽寺廃寺というところの鴟尾で、そこで見えるコンパス文は二重一組のものだということです。

つまり、初めは２本の区画線の間に一重のコンパス文があるというのが、だんだん型板とか二重を使うようになってくると、胴部側の区画線がなくなるというような流れになるんじゃないかなと考えています。

ただ、美濃の事例も発掘調査で７世紀第３四半期の終わりぐらいから第４四半期にかけて、寿楽寺廃寺も軒瓦の検討から７世紀第４四半期ということを考えていますので、あまり時間差がないかなということは考えています。それから最後になんですが、信濃の明科廃寺のほうに行きまして、それが 282 頁第４図７になります。これは鰭の中にヘラで円を描くというような形に変わっていくのかなと考えています。

司会（今井）　ありがとうございました。

このコンパス文で１つお話ししたいのは、前のパワーポイントにも出ていますけども、法隆寺で出土した鴟尾です。縦帯のところにコンパス文があります。これが、今説明していただいた美濃や飛騨のものと比べまして､かなり径の小さいコンパス文です。大体直径２cm ぐらいですかね。それに対して、飛騨とかのは 10cm ぐらいあるんですか。コンパスを使っていることはいいんでしょうけども、これが径に関係あるのかどうかというところですね。この問題は、ここで解決しないと思いますが、こういったものがあって、もしかしたら法隆寺の影響が美濃、飛騨に行っているのかもしれないということで、１つ資料を挙げておきたいと思います。

それから、コンパス文以外で、珠文を削り出す珠文帯鴟尾、あるいはもう少し時代が下りますと、珠文を貼り付ける珠文帯鴟尾が出てきます。それに加えて、これらに似ているのか似ていないのかというような資料も出てきております。

まず日本の例では、東海の三重県の辻垣内のものが１つ、貼付けの珠文帯鴟尾の典型例だと思うんです。その隣には韓国、新羅の四天王寺から出ている鴟尾が出ておりますが、これも貼付けの珠文帯ということです。これらについて、三重について武田さんと、それから韓国の洪さんに、まず時代が近いのかどうかというところをいっていただいた上で似てる似てないを考えたいと思います。

そうしましたら、武田さんから。似ているとかはいいので、時代ですね。７世紀後半、どれぐらいなのかというところをもう一度いっていただけたらと思います。

武田　辻垣内瓦窯のものについては、須恵器を焼いていない鴟尾専用窯ですので、なかなかこれでいつかというのは難しいんですけども、同じようなもので篠場瓦窯の鴟尾、珠文がもうちょっとまばらになってくるものがあるんですけども、それが７世紀末葉に位置づけられますので、７世紀の後葉ぐらいのものかなと思っています。

司会（今井）　ありがとうございます。

韓国では四天王寺を取り上げましたけど、この珠文帯鴟尾は韓国の中でいつ頃から出てきますか。

洪　四天王寺の場合、７世紀後半に造営されたと考えられています。ただ、その鴟尾は、前の建物が破壊した後、再建された建物から出土したものですので、私は遅れて８世紀ぐらいのものではないかというふうに思っております。

司会（今井）　ありがとうございます。

なかなか時代は合わないようなんですけども、この珠文帯をもつ鴟尾は四天王寺以外にも幾つかあったと思うんです。それがいつ頃から出てくるのかというところはまた改めて検討しなければいけないと思うんですけども、それも今後の課題ということにします。珠文帯鴟尾については、本当はほかにもたくさんあるんです。細かいことを言いますと、珠文を差し込んで接合するというような話が三重県とかにありましたし、山陰のほうでもキノコのようなものを差し込んでいるといわれていて、地域によっていろいろ特徴があると思うんですけども、またそれは後日深めたいと思います。ではこれで珠文帯鴟尾の話は終わりたいと思います。

ここで 10 分ほど休憩を入れたいと思います。

（休　憩）

司会（今井）　それでは、シンポジウムを再開します。

１つ、耳寄りな情報が入りました。先ほど休憩の前に山陰で笠形の珠文ですか、キノコのような形の差し込む珠文というのがあったんですが、実はあの類例が渤海にあるそうです。中村亜希子さんという渤海の瓦を研究されている方がさっきコメントを残して帰られたんですけど、ぜひ言ってくださいと。まさに形も、差し込むという方法も一緒だそうなので､参考までにということでお知らせしておきます。山陰と渤海、近いといえば近い（笑）。東海のほうがどうかはちょっとまだ分かりませんが。

とにかく、これから資料が増えていったら、それが証明されるかもしれないし、全く他人の空似かもしれませんけども、この会としてはできるだけ情報を集めて、今後の研究に貢献できればと思っておりますので、よろしくお願いします。

では、続きまして蓮華文帯鴟尾について取り上げたいと思います。こちらも今まで大脇さんや菱田さんが研究されていまして（大脇　潔 1983「古代寺院の造営と工人の移動－蓮華文帯鴟尾を中心として－」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所、菱田哲郎 1988「鴟尾の生産と地域色－東播系と西播系の鴟尾－」『古代文化』40 － 6　古代学協会）、今回の垣内さんも非常に丁寧に分類、そして考察をされています。ここでも本家本元の蓮華文帯については繰り返さずに、これがちょっと離れた地方に出ている例について議論をしたいと思います。

まずは山陰の斎尾廃寺について、先ほどご報告があったと思います。そこで出てきたのが１つ、鰭の段について。断面をみると非常にきれいな曲線を描いていて、これは普通に削ったのではなくて、何か型を使わなければ、作れないだろうという話があったと思うんです。この型板で段を作るということについては、昔、大脇さんが指摘されていることですね。改めてそういうお話を聞かれた上で本家本元の播磨の型板によって作る段についていうと、報告のほうでは、よく分からなかったというお話だったと思います。その点について、改めて斎尾廃寺の話を聞いた上で、垣内さんに何かコメントをいただければと思います。

垣内　予稿集の文章で分からないと書いたのは、型板を使用しているかどうかが分からないということです。実際に段を作るときには、基本的に切り取ったり、あるいは削り取ったりとかしているんだと思います。先ほど沈線の鴟尾でもお話ししましたけど、段を作るときに、まず鰭に対して、おそらくへら状の工具を直角に差し込んで、それに対して、今度は段を作る方向に斜めにまた差し込んで、切り取って段を作るというのが、基本的に蓮華文帯鴟尾の段の作り方になっています。

さらにその後、その切り取った場所、要はその段の角になっているところを、おそらく指でつまんで、なでて、へら筋を消していくような作業が幾つか見受けられます。それが一番分かりやすいのが溝口廃寺（131 頁第 15 図 17 －鴟尾１）や、市之郷廃寺（131 頁第 15 図 19 －鴟尾８- ８・９）になります。これらの断面を見ていただきますと、段のところに筋が見えまして、ここをおそらく指ないしはなめし革みたいなのをもって、つまみ上げるような感じでなでて、段を調整しています。

例えば第 15 図 19 －鴟尾８- ９なんかを見ていますと、大脇先生が書かれているような、カーブしたような型を使ってやっているという表現ではなかなか難しいかなと。ただ、８- ９というのは、後ろに展示していますけれども、ケズリの痕跡が残っています。

私、蓮華文帯の鴟尾の一覧表を作っていますけども（128 頁）、大脇先生は型板を使用しているんじゃないかというのを、１類と呼んでおられます。先生が調査研究されたときに確認されているのは、この下太田廃寺とか中井廃寺、溝口廃寺、美作の大海廃寺などで、市之郷廃寺は入っていません。溝口廃寺につきましては、写真の実物は実際見てはいるんですが、おそらく鰭の頂部の、とさかの大きくカーブする手前のところの破片なんです。その理由は、やはりもともと形としてカーブしている場所なので、鰭の段自体も直角に作るというよりも、削り出した時に必然的にカーブになる場所なんだと思います。

もう１つの下太田廃寺の資料も（129 頁第 13 図 25 －鴟尾７）、中井廃寺の例も断面がカーブしていて（129 頁第 13 図 27 －鴟尾２- ５）、これもおそらく型板を使用したというふうな判断になるんだと思うんですけども、やっぱり実物を見ますと、表面を同じように切り取った後にナデをしているんです。型を使ってなでているというよりも、普通にナデ調整をしているような形なので、やはり段のカーブ自体はナデによるカーブであったり、あるいはもともとの大きな鰭部としてのカーブに左右されているものもあるんじゃないのかなと思いまして、型板の使用というのは判断できなかったというふうな表記になっています。以上です。

司会（今井）　ありがとうございました。これもまた違った目で見ていって、型板なのか、そうじゃないのかというところを今後の課題にしていきたいと思います。

それともう１つ、斎尾廃寺にこだわるんですが、久保さんの今日の報告で、山陰に１点しかない蓮華文帯鴟尾について、つくりを見ても、模様を見ても、まさに播磨産じゃないかということをおっしゃっていて、最後には播磨の工人が来て現地で作ったというお話があったと思います。一方で胎土を見ますと、搬入という可能性がないのかどうかというところをちょっと聞きたいなと思ったんですけども、その辺についてコメントをいただければと思います。

久保　その前に型板の話も。垣内拓郎さんの先のご説明のなかで挙げられている131頁第15図19－鴟尾8-8は蓮華文帯鴟尾の中でも新しい時期の資料だと思うのですが。

垣内　それは違うと思います。

久保　違いますか。と言いますのは、鰭部の端部に縦方向に条線が走っています。これは四天王寺のEの鴟尾の端部に非常に近いと思います。蓮華文帯鴟尾のなかでも新しく、型板を使用する時期の鰭部ではないのではないかと私は思うからです。

今回、西播磨地域の蓮華文帯鴟尾を実測させていただきましたが、鰭部正段の断面の曲面（弧状）はきれいに成形・調整されています。ナデるとその単位が現れるのですが、それは見られません。この曲面を作り出すには単なるナデでは困難じゃないかと思います。私は型板によるナデ仕上げのほうに賛同したいと思います。確かに、市之郷廃寺（131頁第15図19－鴟尾8-9）などは、縦帯付近の資料で型板による曲面がみられません。突帯近くはヘラケズリしか残っておらず、確かに、ここではきれいな曲面は見られません。しかし、これをもって型板が使用されていないというのは、ちょっとどうかなと思います。

山陰ですと、私の資料の図を見ていただけるでしょうか（205・206頁第14～16図）。鰭部の断面を見ると、正段が緩やかな「S」字状の曲面になっています。38・47の「V」字状断面の片面（頂部側の面）には、非常に幅の狭い凹線が平行して横方向に走っています。これは横方向に何度も型板でナデた痕跡だと思っています。私はまだ型板の使用ということは捨て切れないと思っています。

先程の搬入品のお話ですが、例えば、斎尾廃寺の鴟尾片を西播磨地域の蓮華文帯鴟尾のなかに入れ込んでしまった場合、どの破片が斎尾廃寺の鴟尾か分からないと思います。それぐらい精巧にできています。最終的には大脇潔さんがご指摘されているように、理化学的な胎土分析をする必要があるのではないかと思っています。

司会（今井）　ありがとうございました。

蓮華文帯鴟尾についてはいろいろあるんですが、また韓国との関連で、蓮華文帯鴟尾、かなり目立った一群の鴟尾だと思います。これが日本で生まれたのか、そうじゃないのかというところが気になります。韓国に似たような例として、ここに挙げた皇龍寺の鴟尾がありまして、側面に蓮華文が飾ってあります。韓国でもこれは珍しいですけども、洪さんには、こういうふうに蓮華文を飾る鴟尾が、ほかに韓国で例があるかどうか、教えていただきたいです。

洪　類似した例で申し上げますと、王興寺がお話をしたものとちょっと似ていると思います（244頁第1図1）。縦帯に蓮華文を装飾して、その後、また竹管文を施している。そういうことを繰り返して、連続して文様が施されているものはあります。

しかし、縦帯の蓮華文を連続で並べているタイプのものはそれ以外にないです。

司会（今井）　ありがとうございました。

確かにこういうタイプのものは皇龍寺ぐらいしかないんですけども、これも関係があるのかないのかの検討につきましても、資料が増えていったら解決していくのかもしれません。

次に寒風系の鴟尾について取り上げたいと思います。こちらにつきましては、香川さんから詳しい報告がありましたので、内容をちょっと振り返ります。1つ、今回の報告の中でいわゆる寒風系といわれた鴟尾が、讃岐にも出ているということが分かってきました。それから、今回、大和の奥山廃寺というところからも出たんですけども、これについては胎土分析をされて、寒風から讃岐、あるいは奥山、あるいはほかへも運ばれたんじゃないかというふうな報告だったと思います。これについてもう少し詳しくお聞かせ願いたいと思います。香川さん、お願いします。

香川　今回、寒風型の鴟尾を中心に見ていきましたが、大脇先生から理化学的な分析をして産地の同定をしたほうがいいんじゃないかなという意見がありました。それをうけて、岡山県の松尾佳子さんが主体的に分析する資料を選定してくださいました。分析は岡山理科大学の白石先生にすべてお願いすることになりまして、その結果が掲載されています（171～173頁第17～19図、第1表）。

結果として、寒風窯跡や宮嶺窯跡といった生産地の鴟尾の分布を示す実線枠の中に、願興寺、石井廃寺といった東さぬき市の資料や、高松市の片山池1号窯の資料などが入ったので、これらも寒風産の可能性があるという見解を紙面上でいただいています。この点で補足なんですけども、分析をした資料がそれぞれ1点ずつという状況で、おそらく瀬戸内市と高松平野の土壌は結構似ていることもありまし

て、今回寒風の分類領域の中に入ったということも考えられるので、今後点数を増やして検討する必要があるかなと私は思っております。今回、石井廃寺の資料ももってきているんですけども、肉眼で胎土の状況を見ますと、石井廃寺や願興寺の資料は、寒風古窯跡で生産したものに比べて、ちょっと胎土が細かかったりするので、おそらくは似た胎土で作ったために、結果としてこの領域に入ってしまったのかなと考えております。

ですので、石井廃寺と願興寺のものはスタンプ形蓮華文帯のタイプになるんですけども、今、寒風古窯跡の中でこういった資料は採取をされてないというのが現状です。おそらくは昨日、垣内さんからご説明があったような形で、寒風の工人が移動してきたか何かで、いろいろアレンジが加えられた新しいタイプのものが讃岐にある可能性というのも考えられるんじゃないかなと思っております。ただ、奥山廃寺のほうは技法ですとか、胎土の状況とかも似ているので、これは寒風から直接行ったものかなということを思いました。

司会（今井）　ありがとうございました。

従来、その文様や製作技法等々から似ていることが指摘され､そこから､肉眼で胎土の観察をおこなったうえで、遠いところで生産されたものが搬入されたんじゃないかと考えられてきた中で、胎土分析という理化学的な目で分析されて、１つの結果が得られたということだと思います。特に讃岐のほうに関しては、やっぱりもう少し資料を増やしたいということですので、また今後、そういう機会がありましたら、どんどんやっていっていただきたいなと思います。今回の結果で、またこれから研究する見方が変わってくると思いますので、こういうことを寒風に限らずほかの地域でもやっていければいいかなと思いました。

それから、寒風でもう１点だけ確認しておくところがあります。兵庫県の早瀬瓦窯というところで、寒風のＢの鴟尾が出ているということだったと思うんですが、これは現地生産ということでよろしいんですかね。垣内さん、お願いします。

垣内　寒風のＢのケースではなくて、その要素に近いものが早瀬瓦窯という、早瀬廃寺の近くで造られた窯跡から見つかっています。ですので、あくまで寒風窯系の特徴をもっているものが現地生産されているということです。

司会（今井）　なるほど。ここでも寒風系の鴟尾を作っているわけではないということですね。

今後資料が増えていけば、寒風系の鴟尾が寒風古窯群の周囲だけじゃなくて、ほかからも出てくるかもしれませんし、やはり寒風の鴟尾は寒風古窯一帯でしか作ってないんだということになるかもしれません。いろんな資料を検討することで、その辺も詰めていければと思います。

最後に、なかなかこれまでの議論では取り上げられなかったんですが、胴部無文や無文鴟尾という類型があります。これについては確かにいろんなところで出ているんですが、特に今回、誌上発表していただいた関東と東北のほうで、こういった鴟尾が出ております。誌上発表でしたので、ぜひこの場で、時間としては大変短いんですけれども、出浦さんと佐川さんに、それぞれ関東と東北の鴟尾について、簡単にご説明をいただきたいと思います。

出浦　崇　群馬県の出浦と申します。よろしくお願いします。

関東地方の鴟尾ということなんですが、関東は非常に鴟尾の出土が少なくて、群馬県、上野国の山王廃寺のほうで石製の鴟尾が２体、それから瓦製のものが１つ見つかっております。それから、下総国の結城廃寺のほうで確認されておりまして、その結城廃寺の瓦窯である結城八幡瓦窯のほうで確認されております。

山王廃寺につきましては、石製の鴟尾のほうが非常に有名で、そちらにつきましては、２体とも胴部が無文のものになります。それから、瓦製のものにつきましては、鰭部のものだけになりますので、胴部についてはちょっと分からないような状況になっております。生産地につきましても、山王廃寺については、おそらく県内の窯で作られているのかなというふうに考えておりますが、現在のところは生産地については不明です。

結城廃寺につきましては、こちらも数点確認されておりまして、瓦窯のほうからも確認がされております。こちらにつきましては、小さな破片が幾つか見つかっている程度ですので、おそらく結城廃寺のほうは胴部のものになるかなと思うんですけれども、どちらも無文のものになります。こちらの結城廃寺の鴟尾につきましては、結城八幡瓦窯で生産されておりますので、現地で生産されているということが分かっております。

司会（今井）　ありがとうございます。

続きまして、佐川さんから東北地方についてお願いします。

佐川正敏　私が今日、お配りをした別紙をご覧いただきたいと思います。多賀城前身の陸奥国府と考えられている仙台市の郡山遺跡の附属寺院の郡山廃寺跡。それから福島県中通りの福島市の腰浜廃寺跡。ここでは近くの宮沢瓦窯跡で瓦生産がおこなわれました。もう１つ、福島県の太平洋側の浜通り地区北端に相馬市がありますが、そこの黒木田遺跡。鴟尾が使用されたのは、この３つの寺院であります。

順序は、郡山廃寺跡のほうを先に書いたんですが、私自身は、年代的には福島市の腰浜廃寺跡と相馬市の黒木田遺跡、この２つが東北では一番古い寺院であるということを10年以上ぐらい前から事あるごとに発言してまいりました。

その大きな根拠というのは、この文章の中にも書いてありますが、まず、滋賀県の大津にある衣川廃寺跡の軒丸瓦と腰浜廃寺跡のものが非常によく似ているということです。それから、黒木田遺跡のものについては、よく似ているというほどではないにしても、穴太廃寺跡の前期のものと類似するということです。

この２つの寺院については、軒丸瓦が大津の２つの寺院との関連性が考えられるということで、年代的には、それに遅れる７世紀の第３四半期ということで想定しています。

鴟尾はいずれも段も縦帯もない無文であるということなのですが、改めて昨日と今日の発表を顧みますと、やはり滋賀県の南滋賀廃寺跡、あるいは穴太廃寺跡との関連が浮かび上がってきます。理由はなぜかといわれるとすぐにはよく分からないのでますが、近江とのつながりが改めて補強されてきているのかなというふうに感じています。

それから、それよりも後の郡山廃寺跡につきましては、郡山遺跡Ⅱ期官衙が藤原宮をモデルにした可能性が非常に強いということで、694年から700年ぐらいの間に造営が始まっていたと考えられています。したがって、郡山廃寺跡についても700年前後ぐらいの年代が想定されます。

郡山廃寺跡は観世音寺式伽藍配置と推定されますが、鴟尾は講堂と金堂からの出土です。これもいずれも無文、そして段もないという特徴があります。これが果たして北関東との関連があるかどうかです。つまり郡山廃寺造営段階の700年ぐらいに、陸奥国の各郡の附属寺院の瓦が出てきます。これが北関東の上野や下野辺りと非常に深いつながりがあり、鴟尾もそれと関連するのか、それともやはりそれ以前の黒木田遺跡と腰浜廃寺跡の鴟尾の存在を背景とするからなのか。いずれにしても当時、後者２つの寺院、それからやや遅れる郡山廃寺跡というのは、当時の日本が実行支配していた７世紀後半における一番北端にあるということです。それから最初の陸奥国府の附属寺院の郡山廃寺跡にしても、蝦夷等と対峙している領域の寺院であるということが、やはり鴟尾使用と強く結びついているだろうと考えております。

司会（今井）　ありがとうございました。

これまで長い間、いろんな文様の鴟尾を個別に取り上げて、いろいろなコメントをいただいてきました。そろそろ時間となりましたので、最後に、今回の報告を聞いて、鴟尾をどんな人たちがどんなふうに作ったのかという私の個人的なイメージを、ここで簡単にですけども、申し上げてまとめとしたいと思います。

まず６世紀末から７世紀前半、大和で鴟尾作りが始まったわけです。その頃は先ほどの道上さんの話ですと、星組の軒瓦と非常に焼きも似ていたので、この段階ではまだ瓦を作った人たちが鴟尾を作っていたのかなというイメージが１つ出てくるかなと思います。もともと飛鳥寺の段階で瓦を作る職人は日本にいなくて、須恵器工人が百済の人たちに鍛えられて瓦を作るようになったので、もともとは瓦職人じゃないのかもしれませんけど、それがしばらくした後も、もしかしたら瓦を作りながら鴟尾を作っていたかもしれないと。ただ、この点も、例えば豊浦寺だと、軒瓦は隼上がり瓦窯というちょっと離れたところで作っているということもありますので、本当に軒瓦を作った人たちが鴟尾も作ったのかどうか。あるいはもともと一緒に瓦を作っていたけど、ある段階では鴟尾作りに専念するような人たちもいたのかもしれません。この辺は今後、いろいろ検討を加えながら考えていったらいいかと思います。

その後、７世紀後半になりますと、各地域で鴟尾が作られるようになりました。今日お話ししましたように、少なくとも蓮華文帯とか、寒風系とか、沈線文というのは、播磨あるいは岡山の寒風古窯で作っているということがあきらかになりました。そ

この製品がある一定の範囲までは普及しているということで、生産地と消費地の関係があきらかになりつつあります。それを見ますと、７世紀後半は、普通、寺院のそばに瓦窯兼業窯があって、その寺院の瓦を作ったりということがあると思います。しかし、必ずしも鴟尾はほかの瓦を作っているところで一緒に作っているんじゃなくて、多少離れても生産拠点となる東播磨か、あるいは寒風で作ってもってきているということが７世紀後半のモデルとして１つ浮かび上がってきたと思います。

こういうことがほかの地域にもあるのかなということが知りたくて、それぞれのコメンテーターの方にこういう特徴のある鴟尾はどこで作っていたのかということをしつこく聞いてきたわけです。今申し上げた３つの地域以外はまだまだ資料が足りなくて、なかなか断定するに至らないということでした。とはいえ、このようにある一定の瓦窯に、鴟尾の生産拠点が集中して（広域に）普及するというようなことが７世紀後半の鴟尾作りの１つのモデルケースだということを考えて、ほかの地域でも同様のことがあるのか、ないのかということを検討していったらいいんじゃないかと思いました。

それともう１つ、皆さんの報告の中でそれぞれおっしゃっていたと思うんですけども、鴟尾を作った工人というのは、やはり瓦を作った工人ではなくて、各地の須恵器を作った人たち、あるいは陶棺を作った人たちが作ったんじゃないかというような発表があったと思います。このシンポジウムの最初のほうで製作技法の話をしたと思うんですけど、やっぱり今までの瓦生産と比べまして、全く違う作り方をしている遺物だということが分かると思うんです。粘土紐を積み上げて、立体のものを作って、しかも手作りだというところ。一方、瓦は杵や桶を使って、いったら型作りの大量生産の製品ですから、その点からいってもおのずと鴟尾と瓦作りは全然違う技法ではないかと思います。

あとは、鴟尾が１つの寺院について必要な量が非常に少ないので、瓦みたいにかなり一定期間継続して作るようなものじゃなくて、多分、発注は１寺院につき１回か２回、しかも数個、金堂に２つ、門に乗せるとしても合わせて４つぐらい。瓦がレディーメード、大量生産であれば、鴟尾はオーダーメードという性格があって、やっぱりこの点から見ても、違う技術傾向をもった集団が作っているんじゃないかなということが皆さんの発表を聞いていえるんじゃないかと思います。それがタタキとか当て具、あるいはハケメなどといった、あまり瓦ではメジャーでない技法が鴟尾に残っているというところからも裏づけられるんじゃないかなと思います。

ですから今後は、今日の寒風の発表のように、どこで作ってどこまでもっていかれたのか、あるいは工人が移動したのかという点に関しては、資料が増えることと、胎土分析等々、いわゆる肉眼の観察とは別の方法で検証していくことが重要かなと思っております。

それと、最後なんですが、いわゆる唐様式以降の鴟尾については、時間がなくて全く議論ができなかったんですけども、これについても、簡単にですが私の勝手なイメージを申し上げます。７世紀後半、全国にこれだけ大量の鴟尾がばーっと増えるんですが、８世紀になりますと、ぱっと見ぱたっと鴟尾の生産が止まったように見えます。７世紀の第４四半期には唐様式というのが大和でできるんですけども、それもそんなに地域的には広がらないですね。やっぱり畿内中心ぐらいが主流で、それがそのまま少し簡略化して奈良時代に、そして平安時代に鴟尾の文様が変わってくるんですけど、まず数が非常に少ないというのがあります。例えば平城宮では出てません。その前の藤原宮でも出ておりません。平城京で出ているのは、現状のところ、西大寺と唐招提寺の２点なんですね。

それからあと、奈良時代中葉の後期難波宮、それからあとは長岡京、そして平安京のものですけども、使っているところを見ますと、宮殿ないしは官寺、天皇が作ったお寺ぐらいに限られてきます。今日、九州の報告で、大宰府がありましたけど、大宰府は地方の官衙としては別格だということで、天皇直轄というか、非常に近い施設として考えると、８世紀以降の鴟尾は、中央政府から使用に関して規制がかかったんじゃないかなというイメージを勝手に持っております。それまでの７世紀後半には各地で鴟尾を作った技術があったわけですから、その後、８世紀になっても作れるはずだと思うんですけども、作らなくなったのは、１つはお金がかかるから、作るのが大変だからという理由があるかもしれません。一方で、もしかしたら鴟尾を使用するのは天皇の宮殿か、あるいは官寺に限ったんじゃないかということも想像できるんじゃないかと思います。

そんなふうにして、唐様式以降の部分については議論できなかったんですが、イメージだけ申し上げました。これについていろんな意見、異論があると思いますので、またそれは今後のどこかの機会で議論をしていただこうかと思います。

それでは、これでシンポジウムを終わりたいと思います。パネラーの皆さん、どうもお疲れさまでした。ありがとうございました。（拍手）

少し時間があるので、もし会場から、質問がある方があれば、ここで。はい、どうぞ。

下山繁明　埼玉の下山です。多くの人が気がついていると思いますけども、鴟尾の胎土をよく観察してみますと、相当大きな粒の砂が入っているんですね。ですから、この砂のおかげで形がうまく保てたという気がするんです。韓国の人にも聞きましたら、やっぱり同じように砂を大量に入れていると。だから、在地の技術者は砂を入れたらしっかりするということが分かっていて、それを入れたのかなと。

それで、不思議に思ったのは、坂田寺の型式をずっと見ていますと、A、B、C、Dまでずっと砂が入っているのに、突然E式になって砂の粒が小さくなるんです。だから、そこで何か技術革新みたいなのがあったのかという気がしたんですけど。ただ、坂田寺とか和田寺とか山田寺は初期に大量に砂を使っているんです。だから、砂がどれぐらい、例えば30％入っているとか25％入っている、もう少しこういうところを詳しく調べると、何か解けるんじゃないかなという気がするんです。

道上　ご指摘ありがとうございます。

確かに砂粒が入っている鴟尾というのはかなり大きく、例えば坂田寺の例でいうと、CとかDとか、分厚いものに特にざらざらの土が入っていると思います。E類については、わりと細かい土を使っているというのはご指摘のとおりです。そして、砂粒が入っている理由ですが、7世紀初頭の古いほうの鴟尾にはむしろ細かいタイプがあって、あまり砂粒を含まないもののほうが多いので、大きいものに関しては、もしかしたらそういう砂粒なり混和剤なり、そういうのも入れて頑丈にするという工夫をしたのかもしれないなと思っております。

司会（今井）　道上さん、ありがとうございました。

はい、どうぞ。

中岡敬善　奈良県の中岡と申します。今日はありがとうございました。

久保さんのお話の中で、陶棺と鴟尾の関係が時間的に言及されなかったんですけど、それの辺り、ちょっと補足願いたいので、よろしくお願いします。

久保　蔵見3号墳から見つかった「鴟尾付陶棺」と呼ばれるものです（197頁附図）。7世紀末から8世紀初頭頃の所産と考えられており、因幡地域特有の「中高式天井」の横穴式石室から出土しています。陶棺蓋の棟部の両端に小形の鴟尾（復元後の高さ20cm前後）が差し込まれる構造になっております。胴部には山形の沈線文が施されています。鱗状の沈線文でないのが、私としては残念ですね。

司会（今井）　ありがとうございました。これで質問を終わりたいと思います。

それでは、これでシンポジウムを終わります。ありがとうございました。パネラーの方もお席に戻られて結構ですので、よろしくお願いします。お疲れさまでした。（拍手）

それでは、この2日間の発表あるいはシンポジウムを終えた上で、最後に今回の研究会の講評を大脇さんにいただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

今日、A3の資料をご用意いただきましたので、講評と併せて、少しそちらも説明していただければ。大体3時半ぐらいをめどにお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

大脇　潔　46年間かかっていますので、10分ぐらいじゃちょっと無理なんですけど。皆さん、お手元に資料、お持ちでしょうか（313～316頁第8・9図）。

私が鴟尾と関わりをもったのは1974年、奈良文化財研究所に入って2年目の4月に藤原へ飛ばされまして、8月から和田廃寺の現場が始まり、即担当者を命じられました。何とも人使いの荒い研究所だなと思ったんですけども、初日に縄張りをして、広い範囲だったので、バックホーで上の土を取り始めました。すると、ががががっとバックホーが変な音を出しまして、ちょっと待って待ってと飛んでいって、掘り広げていきますと、ほぼ1個体分の鴟尾が出てきました。そこで私は、これで鴟尾と一生付き合わなきゃいけないなという悪い予感がしたんです。

その後、1980年の春に、今度は飛鳥資料館で鴟尾展をやるということになりました。私は鴟尾はやりたくなくて、塼仏の展覧会をやりたいと当時の学

芸室長にいったんですけど、却下されました。それから半年かけて、学芸員３名プラス当時神戸大学の大学院の小田誠太郎さんに加わっていただいて、半年間でほぼ東北から九州まで回って、大急ぎで作りました。でも結局、オープンの日には図録が間に合わなくて、庶務室長から「前代未聞」だとこっぴどく叱られたという記憶もありますが、それがその後の私の研究の１つの柱にもなったので、よかったなというふうに今は思っています。

19年後の1999年に至文堂から『鴟尾』（大脇潔1999『日本の美術No.392　鴟尾』至文堂）を出して、その後の研究の進展をまとめてみました。今年、2020年、ちょうど1980年の「日本古代の鴟尾」展から勘定すると40年後ですね。和田廃寺が46年前、鴟尾展が40年前、この会場にはまだその頃は生まれてなかった人も結構おられると思います。大昔の話ですね。

日本の鴟尾については、今日の研究会が再出発のスタート地点になって、これからは放っておいても大勢の方に鴟尾の研究を続けていただけるので、もう私は安心しています。

それから韓国の鴟尾についても、今日見えられました洪さんをはじめ、最近熱心に鴟尾の出土品について研究を進めておられます。昔に比べると、韓国の鴟尾についてもかなり分かってきたので、こちらも進んでいくだろうと思います。

中国のほうは広大ですから、お寺の数でも何千という感じで分からないことが多いんですが、最近ようやく北魏だとか、東魏・北斉時代の古い鴟尾の実態が分かってきたり、あるいは唐代の鴟尾についても数が増えてきて、今井さんがいくつか論考を書かれておりまして、私もこれを読ませていただいて大変参考になりました。中国の鴟尾についてもこれから研究が進んでいくんだろうと思います。

今日お配りした資料は、日本や韓国、中国の鴟尾など、これから進むであろうところは入っていませんが、それ以外の鴟尾の大きな流れを示しています。１頁目に「中国の棟飾り、鴟尾から鴟吻･鳥頭鴟吻･鯱・竜への突然変異図」と書いているように、まさに突然変異といえるくらい、鴟尾はどんどん変化していくわけです。はじめは左上の後漢の陶屋のように、屋根の大棟や軒先が平坦だと見てくれが悪いので、どうしても反らせたくなる。そのほうが格好よく見えるので、その反らせるというところから鴟尾が生まれてくる。「無機質な瓦積みから想像の翼をひろげ、辿り着いたフィクションの世界」と書いていますが、これ、みんなフィクションですよね。竜にしろ、鯱にしろ、フィクションですけども、そういったものがどんどん突然変異を繰り返し、いろんな遺伝子が入ってきて、変な形に変わっていく。人間ってすごいものを考え出すんだなということがよく分かる図だと思います。

中国の古い鴟尾は第８図の左上のところに載せていますが、これは今井さんに上手にまとめていただいたので分かると思います。陶屋の下に後漢の石闕の図を載せていますが（第８図８）、その屋根に短い棟がのっていて、よくみると、棟の端に軒丸瓦を幾つか詰め込んで飾っているわけです。ここから鬼瓦に発展していきます。若草伽藍に複数の蓮華文を散りばめた鬼板があります。あれは一体式になった一番古い日本の鬼瓦ですけども、それ以前にはおそらく組合せ式で、そのお寺が潰れちゃうと軒丸瓦と見分けがつかなくなっちゃって、鬼瓦だったということが分からなくなってしまった組合せ式の鬼瓦も多分あったんでしょう。飛鳥寺で古い鬼瓦がまだ１点も出てないというのは、多分そういう組合せ式のこれと似たような鬼瓦があったんじゃないかなというふうに想像しています。それが平安時代ぐらいになると組合せ式の獅子口になって、一体式の獅子口へ進んでいくという、こういう流れがあります。

一方、複数の蓮華文を並べた鬼瓦からは、それが１個になって、豊浦寺とか山田寺とか、そこからまた今度は、鬼面文になって、こういう一体式の鬼瓦がそれからずっと今まで屋根を飾っているわけですけど、そういう流れがある。もう１つの流れとしては､そういう軒丸瓦を棟の端に詰めるんじゃなくて、側面の反り上がりを強調して、どんどん熨斗瓦を積み重ねていって、鴟尾の原形、組合せ式の鴟尾のようなものができます。でも、それじゃあ壊れやすいので、一体式の鴟尾が北魏の段階で完全に出てきている。それがこの古い形です。こういう図を見ていますと、昔、こんな絵が敦煌の壁画にあって、すごい直立した鴟尾だなと思っていたんですが、このほうが作りやすい。大きく屈曲した鴟尾だと作りにくく、こういう寸胴の、先だけが飛び出している鴟尾のほうが作りやすいので、初期の鴟尾はわりと直立に近い鴟尾だったんだなということが､北魏だとか、東魏・北斉時代の鴟尾を見ていると分かってきまし

た。

それから、下のほうになりますけれども、おもしろいなと思ったのが唐の秦陵東南角闕出土の「鳥頭鴟吻」です（第８図18）。「鳥頭鴟吻」と勝手に私が呼んでいます。図には復元していないのですが、その右側の復元した鴟吻をみると、鳥の頭が突き出している。これはおそらく、上にあります隋だとか唐代の鴟尾の脊稜の先端がぐっと飛び出して、とんがって、鳥のくちばし状になっている。それを見ていた人が、これに目玉をつけたら鳥になる、くちばしになるというような発想が出てきて、こういう鴟尾が762年ぐらいには出てきます。その系列が後蜀の孟知祥墓（第８図19）、あとは敦煌の980年といわれている431窟（第８図20）とか南宋（第８図21）、これは絵なので、年代はよく分からないんですけど、こういうふうに鳥の系列、鳥の系譜、鳥のイメージが続いていきます。

一方で、日本の鯱につながっていく魚のイメージが出てきます。第８図右上には、北京の紫禁城の屋根にたくさんこういう正吻とか垂獣だとか脊獣だとかというのがのっているわけですが、そういったものを並べてあります。これが韓国やベトナムにも影響を与えていくというのを第９図に示しています。

第９図です。ここには、「韓国・日本・ベトナムの棟飾り―竜頭・竜頭（脊獣）・鴟頭・竜・竜頭瓦・鯱・鳳凰―」として、上に韓国、ベトナム、下に日本を並べています。午前中、たまたま隣に立命館大学の高正龍先生が座られたので、韓国のことをちょっと聞きましたら、一番左側の皇龍寺のものは、韓国では「雑像」と呼んでいるそうです（第９図29）。中国では走獣といって、紫禁城なんかでも軒先に小さい動物だとか、ずらっと並んでいますよね。それから変化したもので、ちょっと特殊な例だということです。あと海印寺の鴟頭とか、竜頭とか、そういうのはたくさんあるという話でした。これは最近、韓国でも研究が進んでいて、論文を教えていただきました。今日帰って読んでみますけど、韓国でも５人ぐらいの方がこうしたものを研究されているとのことなので、このあたりも新しく分かってくると思います。

それともう１つ、2013年に古代寺院史研究会の皆さんと韓国に行ったときに、寶林寺（全羅南道長興郡有治面）の屋根の真ん中に獅子がいて、その両側に竜の全身像がある建物を見て、韓国にも竜の全身像があることを知りました。高先生に聞きましたら、ソウルにもあるということで、韓国にもこういう竜の全身像があるみたいです。

韓国の竜頭とか鴟頭は、中国の影響がかなり強く出ています。一方で、日本にはこういう鴟頭か竜頭はほとんど来てないです。ただ１例だけ、第９図左下に、山口市の乗福寺の鴟頭と竜頭の断片をのせています（第９図39）。大内義弘という戦国武将が、自分は百済の王子の末裔だなんていうことを言い出して、高麗からおそらく工人を呼び寄せて、そして現地の山口の土で作ってもらったのが乗福寺にのっていて、それがたまたま発掘調査で出てきたものです。これは高麗の鴟頭、竜頭そのものです。日本では特殊な例ですね。それ以外には中国や韓国の鴟頭だとか、そういうものは日本には来ていない。

右上はベトナムです。ベトナムには２回ぐらい行き、ハノイのタンロン皇城の展示を、もちろんガラスケース越しですが、見ました。これが非常におもしろい。ベトナムの場合は何度か中国の支配を受けているので、その時期はやっぱり中国の影響がすごく強くなっていて、例えばタンロン皇城の10世紀の棟飾りがあります（第９図36）。中国の戦国時代にもありそうな棟飾りですね。太陽だという人もいるし、炎だという人もいるし、そういうのが中国からに入ってきているんじゃないかと思います。

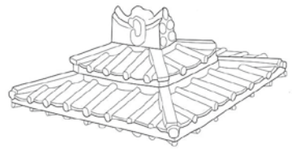
その右側に15世紀とか16世紀ぐらいの竜だとか、垂獣だとかいったものが出てくるんですね（第９図33・37・38）。これも中国のものとあまり見分けがつかない。中国の影響が強く入ってきている時期のものだということが分かります。

それに比べて、11世紀から12世紀ぐらい、タンロン皇城で李朝と呼んでいる時期ですけども、この時期はベトナムが独立をしている時期です。中国の影響をもちろん強く受けて、竜だとか、鳳凰だとか、そういうものを用いるようになっているんですけども、独自の屋根飾りをもった大きな宮殿が造られているということが分かる（第９図32）。この辺も非常に面白いなというふうに思いました。

第９図下は日本です。日本では1598年、秀吉が有馬温泉に湯の山御殿を造ったときに、竜をその建物の上に飾っていたみたいですね（第９図44）。この辺から竜の全身像を飾る例が豊臣家、徳川家関連の建物にありますし、あるいは仙台の芭蕉の辻なんかにも、江戸時代の終わりぐらいのものですが、こ

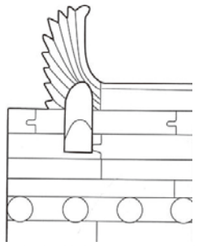
1. 陶屋穀倉（後漢）

この頃から鴟尾と鬼瓦が派生する

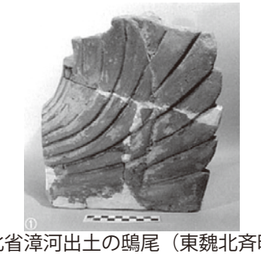


8. 石闕（後漢）

2. 何庄村出土の鴟尾（東魏北斉時代）



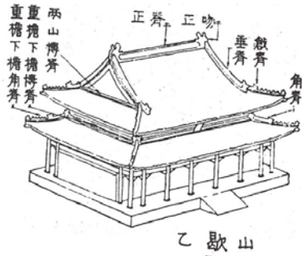
9. 陝西省華陰県楊舒墓墓門の鴟尾（517 年）



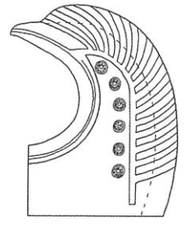
3. 河北省漳河出土の鴟尾（東魏北斉時代）

10. 隋仁寿宮井亭出土鴟尾（高 46.5cm　7 世紀前半）

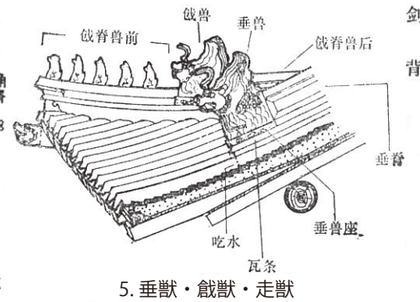
11. 唐九成宮出土鴟尾（高 113cm　7 世紀後半）



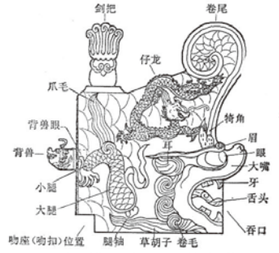
4.「歇山」入母屋屋根の部分名称



12. 唐華清宮星辰湯出土鴟尾（高 52.4cm　8 世紀）



5. 垂獣・戯獣・走獣

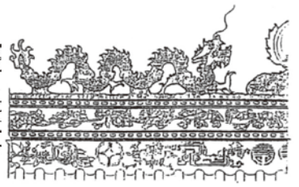


13. 清代正吻の部分名称

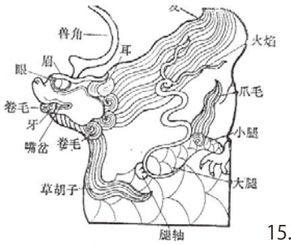
6. 正吻

竜のイメージ

竜の系譜



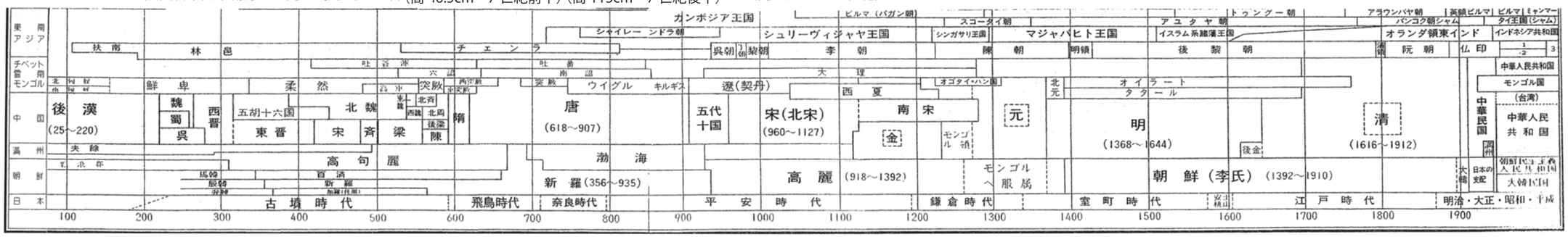
7. 嶺南広東



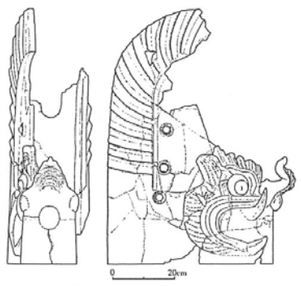
14. 清代垂獣・戯獣の部分名称

15. 永楽宮三清殿鴟吻（元代）

16. 嶺南福建



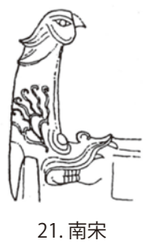
17. 唐華清宮出土三彩鴟吻（8 世紀）



18. 唐秦陵東南角闕出土「鳥頭鴟吻」（高 80cm　762 年）

19. 後蜀孟知祥墓墓門「鳥頭鴟吻」（934 年）

20. 敦煌 431 窟（980 年？）



21. 南宋

鳥のイメージ

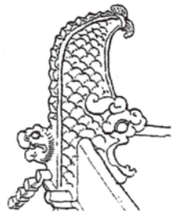
鳥の系譜

唐代鴟尾の脊稜先端から鳥の嘴のイメージが生まれた？

22. 楽山龍泓寺摩崖鴟尾（唐代）

23. 慶陵東陵
興宗墓壁画（1054 年没）

24. 大同華厳寺
薄伽教蔵殿鴟吻（遼）



25. 大同華厳寺
木彫鴟吻（遼）

魚のイメージ

魚の系譜

26. 江南

27. 嶺南広州

28. 嶺南広州

第８図　中国の棟飾りー鴟尾から鴟吻・「鳥頭鴟吻」・鯱・竜への突然変異図ー

ー無機質な瓦積みから想像の翼を広げ、辿り着いたフィクションの世界ー大伯黙風 200201 作成

韓国

29. 新羅皇龍寺址
出土雑物（高 53cm　高麗）

金銅八角塔降り棟先に
使用例あり

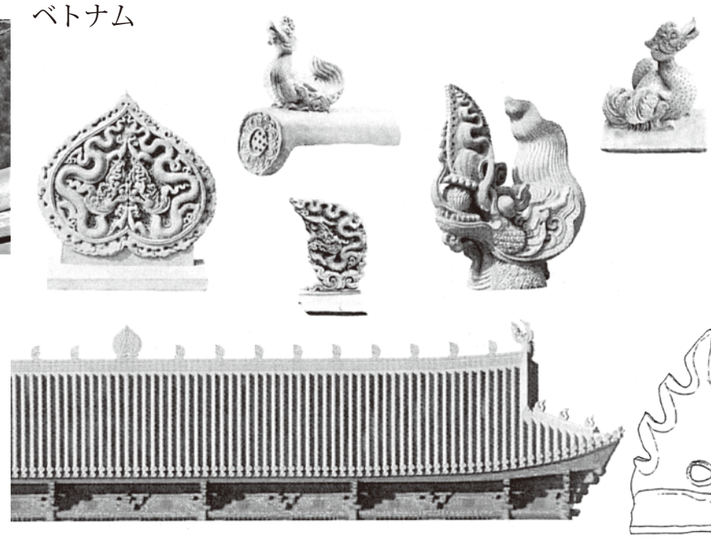
30. 海印寺鴟頭

31. 寶林寺の竜頭

34. 寶林寺冥府殿の竜

35. 海印寺竜頭

ベトナム



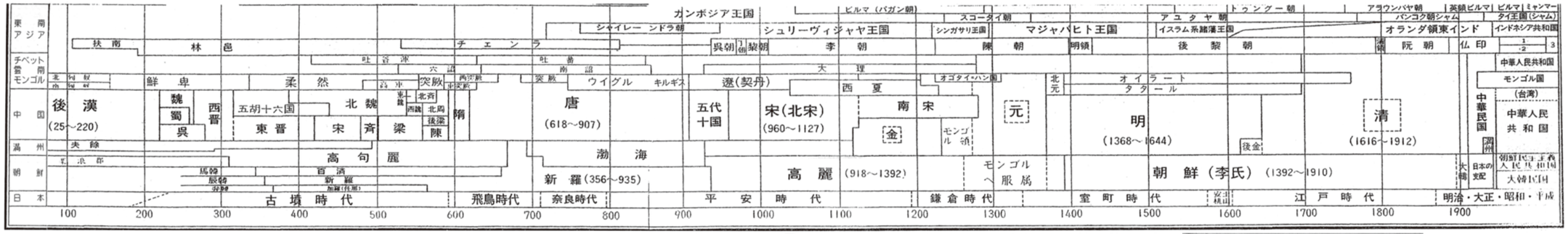
32. ハノイ　タンロン皇城（11 ～ 12 世紀）

36. タンロン皇城出土棟飾り瓦（10 世紀）

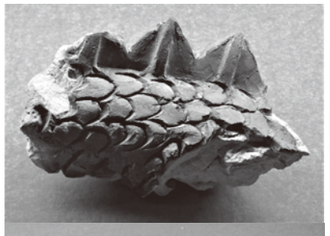
33. タンロン皇城（15 世紀）

37. タンロン皇城出土垂獣（15 世紀）

38. タインホア省ラムキン遺跡
出土垂獣（15 ～ 16 世紀）



日本

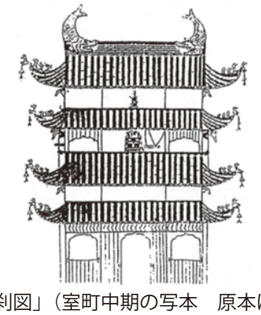


44. 神戸市有馬温泉「湯の山御殿」
出土の竜（1598 年）

鷲頭断片

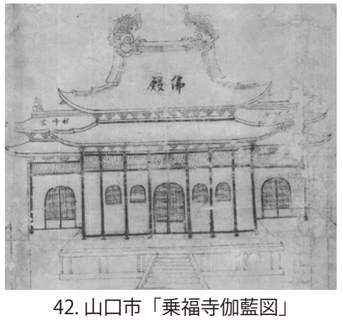
竜頭断片

39. 山口市乗福寺
（14 世紀後半～末）



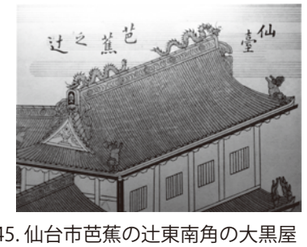
40. 金沢市大乗寺蔵　重文「五山十刹図」（室町中期の写本　原本は 13 世紀頃か）

41.「男衾三郎絵詞」浄見寺
楼門上の鯱（13 世紀末）

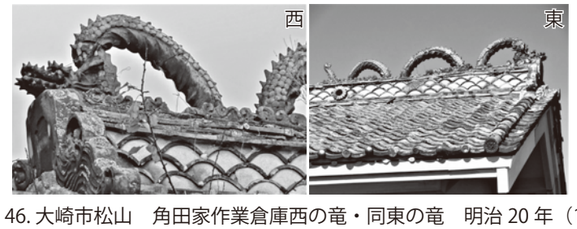


42. 山口市「乗福寺伽藍図」
仏殿上の鯱（14 世紀後半）

43. 安土城出土鯱（1576 年）



45. 仙台市芭蕉の辻東南角の大黒屋
二階櫓の錦絵 二匹の竜と唐獅子・兎（19 世紀後半）



46. 大崎市松山　角田家作業倉庫西の竜・同東の竜　明治 20 年（1887）

47. 明石市報恩寺址出土竜頭瓦（1393 年）

鯱は禅宗様の建築様式と
ともに伝わったか。

48. 福山市明王院門降り棟先の竜頭瓦（1614 年？）

第９図　韓国・日本・ベトナムの棟飾りー竜頭・竜頭（脊獣）・鷲頭・竜・竜頭瓦・鯱・鳳凰ー用語の整理が難しい

ういう竜の全身像を飾るというのがあります（第９図45）。宮城県の大崎市の松山には農家の蔵の上に立派な竜がのっていました（第９図46）。

それともう１つ、竜頭瓦があります。竜の頭の部分だけ作って、鬼瓦でもない、鯱でもない、竜頭瓦としか呼びようがないんですが、明石の報恩寺で1393年の年号を刻んだ鬼瓦と一緒にこの竜頭瓦が出ています（第９図47）。これはかなり復元が入っていますが、その右側は福山市の明王院表門の降り棟の竜頭瓦です（第９図48）。降り棟全体が見方によっては竜に見えるんです。そういった屋根も一時期あって、竜の系譜も日本でずっとつながっていく。

右上は鯱です。鯱は今まで『男衾三郎絵詞』にでてくる13世紀末の絵が一番古いと考えていたんですが（第９図41）、最近、金沢市大乗寺がもっている重文の『五山十刹図』に鯱が乗っているのを見つけました（第９図40）。中国の禅宗寺院のいろんな建物の絵だとか、儀式の様子を描いたもので、これは写本ですけれども、原本は13世紀中頃のものかといわれるなど、論争があるみたいです。鯱は教科書的にいうと禅宗様の建築様式とともに日本に伝わったということになりますが、山口市の乗福寺の禅宗様の伽藍、これは14世紀前半ですけども、これも大きな鯱がのっていますね（第９図42）。実例では安土城が一番古くなる（第９図43）。その辺から城郭建築に鯱が飾られていくということになります。

長くなりますが、もうちょっとだけ。今日、私は、この突然変異図で種をまいているんですね。この図を見た人の中から１人でも２人でも、10年後、20年後にこの辺をやってみたら面白そうだな、ベトナムも面白そうだな、中国も韓国も面白そうだ、日本の鯱も竜頭瓦も面白そうだなと思ってやっていただければいいなと思っているわけです。

昨日今日のシンポジウムを聞いていて、心に残った話というか、念願の話です。私が生きているうちには多分できないと思うので、皆さんにやっていただきたいのは、法隆寺の西院金堂に鴟尾をぜひ乗せていただきたいという話です。ラフスケッチですけども、復元図（小田誠太郎氏作図）はできています。今、３Ｄの技術がかなり発達していますので、法隆寺から出土した西院金堂のきれいな唐草文のついた鴟尾、あれを３Ｄでかたどって、それを組み合わせれば、かなり正確なレプリカができると思います。それをもとに瓦製の鴟尾を作って、ぜひ、次の法隆寺金堂の解体修理のときにのせて下さい。

この話を以前、鈴木嘉吉先生と生駒の山本瓦工業の山本清一社長にお話ししたら、ちょっと一遍登ってみるわといって、金堂に登って何とかのせられないかと検討していただいたんですが、ちょっと瓦をのけて、棟を換えるぐらいじゃやっぱり無理だ、屋根全体を下から全部組み直さないと乗らないということで、次の修理を待てということでした。何年先になるかは分かりませんけど。

それと、もう一つは新堂廃寺の鴟尾です。私は星組が作ったんじゃないかなと思っているんですが、飛鳥時代初期の鴟尾の中では残りがかなりいいですよね。これも３Ｄで飛鳥時代初期の鴟尾を復元していただけるとうれしいなと思います。

あと、今日、北陸の横滝山とか王子保の鴟尾が報告されていましたが、ひょっとしたら奈良の只塚廃寺の鴟尾も似ているんじゃないかなと思っています。只塚廃寺の鴟尾は小さい破片しか出ていませんが、このぐらいの幅で断面が浅いＵ字形で削り込んでいて、すごくよく似ているなと思います。これも、また機会があれば。

あと、羽曳野市の埴生廃寺、善正寺とも言いますが、今、後ろに藤沢先生が昔採集された資料、頂部の破片が並んでいますが、もう１種類、縦帯が２本の鴟尾も埴生廃寺からたくさん出ています。これが香芝市の尼寺廃寺の鴟尾と胎土も含めよく似ていると、前から思っていましたので、もし機会があれば、実物同士を並べて皆さんで見ていただいて、同じ工人が作っているのか、そうじゃないのかというのを調べていただければと思います。

あと、飛鳥の坂田寺の鴟尾と、それから山陰の上淀廃寺と大御堂廃寺の鴟尾の中に謎のわらの圧痕がある。あれはわら状圧痕とか、いろいろいわれてきましたが、私はむしろ桶巻作り平瓦の桶の下に藁座をぐるっと一周させて巻くのと同様のものだと思います。それは、ほとんど削っちゃうから残らないけれども、ごくまれに平瓦の広端面に削り残した藁座の痕が点々と残っている事例があります。去年の秋、元興寺文化財研究所の狭川さんにお願いして、飛鳥寺で一番古い花組の平瓦、大型の平瓦を見せていただきました。そこには凸面にわらの圧痕が長々とついていて、よくみると、単なる縄じゃなくて、縛り目がかなり離れているので、これもやっぱり藁座を

外すときに偶然ついた痕跡だなと思いました。

だから、瓦作りにとって藁座というのはすごく身近なもので、それと同じようなものを鴟尾の製作段階に使っている。太い藁座を鴟尾の上にぐるっと乗せて、そこでまた積み上げている。それはなぜかというと、先ほどいわれましたように、一旦それで積み上げて、乾燥させて、焼成段階に窯の中に大きな鴟尾をそのまま入れることが難しいので、上下に分割して焼成して、もう一度焼成後に組み合わせる方法があったという話になります。それぐらいしか、これは考えられないなと思いました。

あと、山田寺の回廊隅にのせた双頭単尾の復元鴟尾、あれは40年前の鴟尾展のときに既に破片は出ていたんです。破片は存在したんですけども、私の目では見抜けなかった、双頭の鴟尾なんて実際にあると思っていなかったので。でもその後、発掘で出てきて、回廊の隅に鴟尾がのってたんでびっくりしたんですけどね。

その後、京都市の上ノ庄田瓦窯でどうも平安宮にも双頭の鴟尾があることがわかりました。後ろに並んでいますけど。それをきっかけに、今建て始めていますが、平城宮の第一次大極殿院の南門から回廊が巡りますね、何年後になるんでしょうかね、私が生きているうちに造ってほしいんですけども、その回廊の隅に双頭双尾の鴟尾をのせる復元案があります。これももう原形ができているんだけど、公表できないので、今回はもってこなかったのがあります。それも形だけでも、紀要にでも載せていただくとうれしいなという感じですね。

そういうことです。46年間、鴟尾と付き合ってきて、まだまだいろいろ気になることはありますが、きりがないのでこの辺で終わりにします。どうも皆さん、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

司会（今井）　大脇さん、ありがとうございました。

それでは最後になりますけども、考古第三室長の清野より閉会の挨拶をいたします。

清野孝之　皆さん、２日間、どうもお疲れさまでした。最初に申し上げましたけども、この鴟尾の企画を考えたときに、どれぐらい人が来てくれるのかというのが非常に心配でした。でも蓋を開けてみたらこんなにたくさん、しかも討論までこれだけ残っていただけるというのは、本当にうれしい誤算といいますか、主催者側としては安心しました。

あと、今回の要旨集400頁、これは本当に皆様方のご協力あってのことでして、今日報告いただいた方もそうですし、共同執筆で書いていただいた方、あるいは巻末の一覧表の作成に関わっていただいた方、あと今回の研究会で鴟尾をもってきてくれといって、あんな重たくて大きいものを果たしてどれぐらいもつてきていただけるのかと心配していたんですけれども、これもたくさんもってきていただいて、本当にありがとうございました。1980年の大脇先生の集成が120で、40年後の2020年でこれが300近くになったと。これは資料の増加もさることながら、全国の皆様方にご協力いただいたというところも非常に大きいのではないかと思います。最後になりましたけれども、関係していただいた皆様方に厚く御礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

最後には大脇先生から46年の想いを熱く語っていただいて、時間もいい感じになってまいりました。来年は鴟尾に続きまして鬼瓦を扱います。これも、ぜひともたくさんの方々に来ていただきたいと思っておりますし、ご協力を賜りたいと思っておりますので、ここにおられる皆さん、ひょっとしたらちょっと手伝ってといわれるおそれがあります。でも、この研究会はみんなでつくり上げていく研究会というのを目指しておりますので、ぜひとも嫌な顔をせずに引き受けていただければ、非常にありがたいと思います。

それでは、この２日間、どうもお疲れさまでした。ありがとうございました。（拍手）

図版出典

第１図　道上祥武作成（小川貴司2004『古代地方都市の成立』言叢社、東京国立博物館2002『瓦塔・鴟尾』、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1980『日本古代の鴟尾』より一部改変）。

第２図　道上祥武作成。

第３図　毛利光俊彦ほか2002『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所、大脇潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂を一部改変。

第４図　井西貴子・広瀬雅信・堀大輔・岩戸晶子・栄原永遠男・梶原義実 2001『新堂廃寺』大阪府教育委員会。

第５図　廣岡孝信撮影。

第６図　文化財研究所1984『皇龍寺　遺跡発掘調査報告書Ⅰ』高麗書籍株式会社。

第７図　森郁夫ほか 2007『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈良文化財研究所。
第８・９図　大脇潔作成。

第８・９図出典
１・23・41　奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』
２・３・８・９・10・11　王子奇 2018「中国古代鴟尾的起源及其初歩発展」『鴟尾、天の声を仰ぐ』扶余国立博物館
４　劉致平 1987『中国建築類型及結構』中国建築工業出版社
５・６・13・14　劉大可 1993『中国古建築瓦石営法』中国建築工業出版社
７・16・26・27・28・40　中国芸術研究院 2017〈中国建築芸術史〉『中国建築芸術史　上・下』編写組編文物出版社
12・17・18　今井晃樹 2018「東アジアにおける鴟尾の普遍性と多様性」『鴟尾、天の声を仰ぐ』扶余国立博物館
15・24・25　傅熹年 1999「関于展子虔〈遊春図〉年代的探討」『傅熹年書画鑒定集』河南美術出版社
19・20・22　祁英涛 1978 年「中国古代建築的脊飾」『文物』1978 年－３期　文物出版社
21　中国建築史編写組 1979『中国建築史』中国建築工業出版社
29　国立慶州文化財研究所 2013『新羅皇龍寺』より図化
30・31・33 ～ 39・44・46・48　大伯黙風（大脇潔）撮影
32　Bui Minh Tri 2018「Vietnam Palatial Architecture in the Ly Period Similarities and Distinctive Differences in Architectural History of East Asia」『東アジアの鴟尾』韓国瓦学会国立扶余博物館
36・38　大伯黙風図化
42　木村忠夫 2001「紙本墨画淡彩乗福寺伽藍図　乗福寺蔵」『山口県史 史料編 中世二 』付録　山口県
43　大脇潔 1999『日本の美術№ 392　鴟尾』至文堂
45　大脇潔 2013「みちのく甍紀行－宮城・福島県の被災地を歩いて－」『民俗文化 第 25 号』近畿大学民俗学研究所
47　発掘された明石の歴史展実行委員会 2015『明石の中世』

Ⅱ 鴟尾出土一覧表

1　宮城県

宮城県の鴟尾出土遺跡

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

1．郡山廃寺跡（仙台市太白区郡山）

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	Ⅱ期												金堂跡SD532	i
2	Ⅱ期												金堂跡SD562	i
3	Ⅱ期												講堂跡SD95	i
4	Ⅱ期												外郭南門跡新規柱穴掘方	i
5	Ⅱ期												外郭塀北東辺井戸SE157	i
備考	胴部無文。金堂および講堂所用か。郡山遺跡Ⅱ期官衙（７世紀末～８世紀初頭）付属寺院。													

文献		掲載鴟尾
i	仙台市教育委員会 2005『宮城県仙台市郡山遺跡発掘調査報告書－総括編（１）－』（仙台市文化財調査報告書第238集）	1－5

2　福島県

1　腰浜廃寺跡
2　宮沢窯跡
3　黒木田遺跡（中野廃寺跡）

福島県の鴟尾出土遺跡

1．腰浜廃寺跡（福島市腰浜町・浜田町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○	○				1961年調査	i
2	白鳳							○	○				岩越二郎氏採集品	i
備考	金堂と塔、あるいは講堂所用か。													

文献		掲載鴟尾
i	福島市史編纂準備委員会 1965『腰浜廃寺』	1，2

2．宮沢窯跡（福島市岡島字笹森）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○					○				第５号窯跡	i

文献		掲載鴟尾
i	福島市史編纂準備委員会 1965『腰浜廃寺』	1

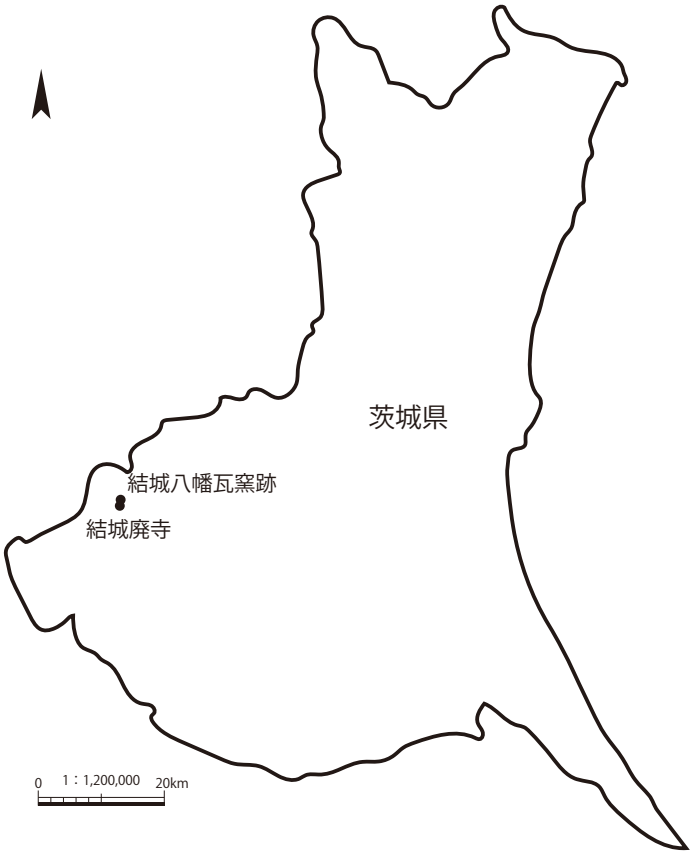
３．黒木田遺跡（中野廃寺跡）（相馬市中野字明神前）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○				○	○				採集品	i
備考	金堂所用か。													

文献		掲載鴟尾
i	相馬市史編纂委員会 2014「114. 黒木田遺跡」『相馬市史　第４巻 資料編１原始・古代』	1

3　茨城県



茨城県の鴟尾出土遺跡

1．結城廃寺（結城市大字矢畑）

遺跡種別	時代
寺院	奈良－中世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良				○								SI－5	i
備考	出土遺構は報告済みだが、鴟尾についての記載はなく未報告の資料。													

文献		掲載鴟尾
i	結城市教育委員会 1999『結城廃寺跡』	1

2．結城八幡瓦窯跡（結城市大字上山川）

遺跡種別	時代
瓦窯	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良			○				○					燃焼室底面	i
2	奈良			△									包含層	ii
備考	2は詳細不明。													

文献		掲載鴟尾
i	高井悌三郎 1964『常陸台渡廃寺跡・下総結城八幡瓦窯跡』甲陽史学会 p.86	1
ii	結城市教育委員会 2003『結城八幡瓦窯跡』p.24	2

4　群馬県

群馬県の鴟尾出土遺跡

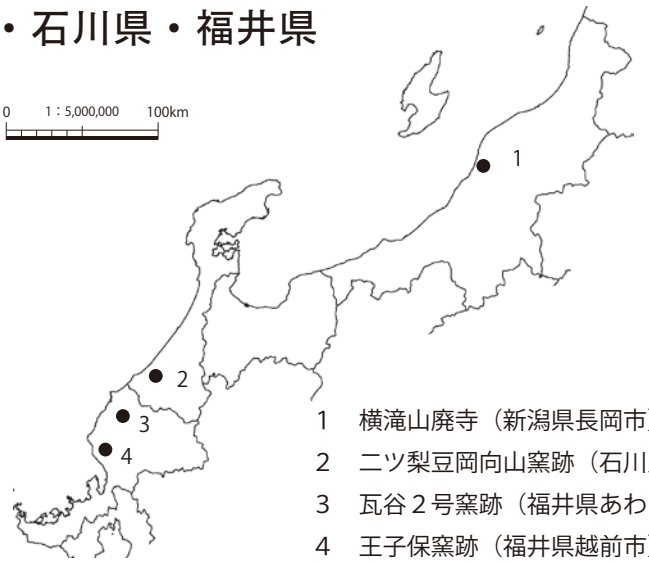
1．山王廃寺（前橋市総社町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A	○	○	○	○	○	○	○	52.5	75	110	不明・伝日枝神社境内	i , ii
2	白鳳	B	○	○	○	○	○	○	○		75	110	不明・個人蔵	i , ii
3	白鳳							○					H－12号竪穴建物	iii

文献		掲載鴟尾
i	尾崎喜左雄1971「在地豪族の権威を示す山王廃寺跡」『前橋市史』 1	1，2
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1980『日本古代の鴟尾』	1，2
iii	池田史人ほか2007『山王廃寺』平成18年度調査報告　前橋市教育委員会	3

5　新潟県・石川県・福井県



1　横滝山廃寺（新潟県長岡市）
2　二ツ梨豆岡向山窯跡（石川県小松市）
3　瓦谷２号窯跡（福井県あわら市）
4　王子保窯跡（福井県越前市）

新潟県・石川県・福井県の鴟尾出土遺跡

1．横滝山廃寺（新潟県長岡市寺泊竹森）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳、平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○	○				○				基壇建物（金堂か塔）	i－iii

文献		掲載鴟尾
i	北陸古瓦研究会 1987『北陸の古代寺院－その源流と古瓦』	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』	1
iii	寺泊町教育委員会 1977～1984『横滝山廃寺発掘調査概報』（全４冊）	1

2．二ツ梨豆岡向山窯跡（石川県小松市二ツ梨町）

遺跡種別	時代
窯跡	古墳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良							○	○				A地区２号窯床	i
2	奈良			○				○	○				B地区 ８－Ⅱ号窯 ２次床、B地区灰原	i
備考	２腹部は頭部脊稜の張り出し部分の可能性もあり（文献ｉ）。													

文献		掲載鴟尾
i	小松市教育委員会 2005「第２項　鴟尾」『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』pp.112－115	1，2

3．瓦谷２号窯（福井県あわら市東山）

遺跡種別	時代
窯跡	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○				○					窯体内　灰原	i，ii

文献		掲載鴟尾
i	北陸古瓦研究会 1987『北陸の古代寺院－その源流と古瓦』	1
ii	福井県教育委員会 1971『瓦谷２号窯址発掘調査報告書』	1

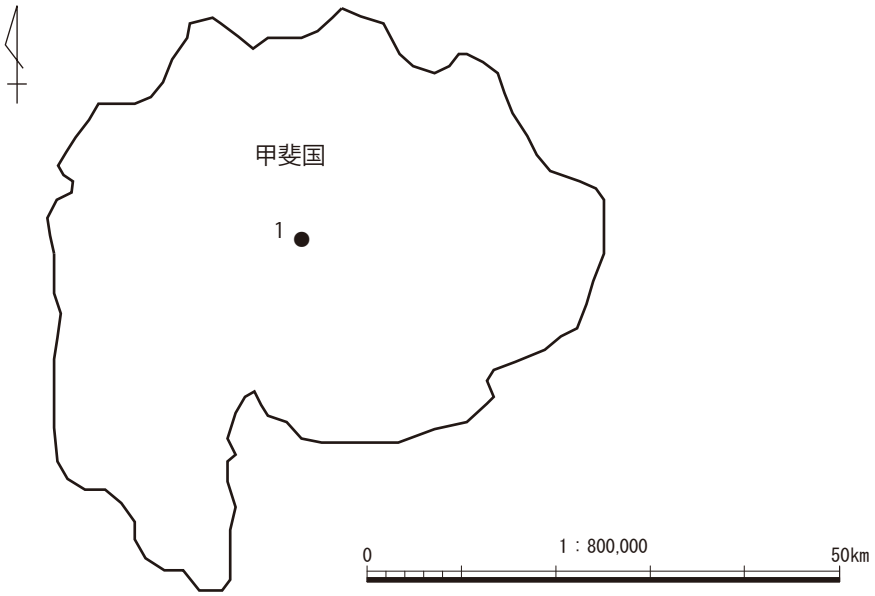
４．王子保窯跡（福井県越前市春日野町）

遺跡種別	時代
窯跡	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○	○	○	○	○	○	○	43.5	88.0	112.5	灰原	i，ii
2	白鳳		○	○	○	○	○	○	○	40.0	87.0	113.0	灰原	i，ii

文献		掲載鴟尾
i	福井県武生市教育委員会 1995『王子保窯跡群Ⅶ第７次発掘調査概要報告』	1，2
ii	武生市 1999『たけふの文化財』	1，2

6　山梨県



山梨県の鴟尾出土遺跡

遺跡種別	時代
古窯	古墳－白鳳

1．川田瓦窯跡（甲府市川田町）

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳					○		○						i，ii

	文献	掲載鴟尾
i	山梨県 1998『山梨県史　資料編 1　原始・古代 1』（「242　川田瓦窯跡」）pp.712－713	1
ii	山梨県埋蔵文化財センター 1990『生産遺跡分布調査報告書』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告第51集）p.28	1

7　長野県

長野県の鴟尾出土遺跡

1．元善町遺跡（長野市長野）

遺跡種別	時代
古窯	白鳳－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○				○	○					i，ii

文献		掲載鴟尾
i	長野市教育委員会 2006『長野遺跡群　善光寺門前町跡－竹風堂善光寺大門店地点－』（長野市の埋蔵文化財第115号）p.27	1
ii	長野市教育委員会 2009『長野遺跡群　元善町遺跡（２）－善光寺仲見世通りガス管敷設工事地点－』（長野市の埋蔵文化財第123号）p.24	1

2．桜坂古窯跡（安曇野市明科）

遺跡種別	時代
古窯	古墳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○	○								1号住居跡	i
2	白鳳			○									灰原	i
3	白鳳			○									灰原	i
4	白鳳		○	○									灰原	i

文献		掲載鴟尾
i	明科町教育委員会 1998『桜坂古窯跡－主要地方道穂高明科線改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』（明科町の埋蔵文化財第５集）pp.40，51	1－4

3．明科廃寺跡（安曇野市明科）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						i

文献		掲載鴟尾
i	長野県 1988『長野県史　考古資料編　遺構・遺物』（全１巻（４））長野県史刊行会　p.981	1

4．大村遺跡（松本市大村）

遺跡種別	時代
集落跡	奈良－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良			○			○	○	○					i
2	奈良			○			○	○	○					i
備考	1，2は同一個体と考えられる。													

文献		掲載鴟尾
i	松本市教育委員会 2009『大村遺跡Ⅵ緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告177 pp.91－92	1，2

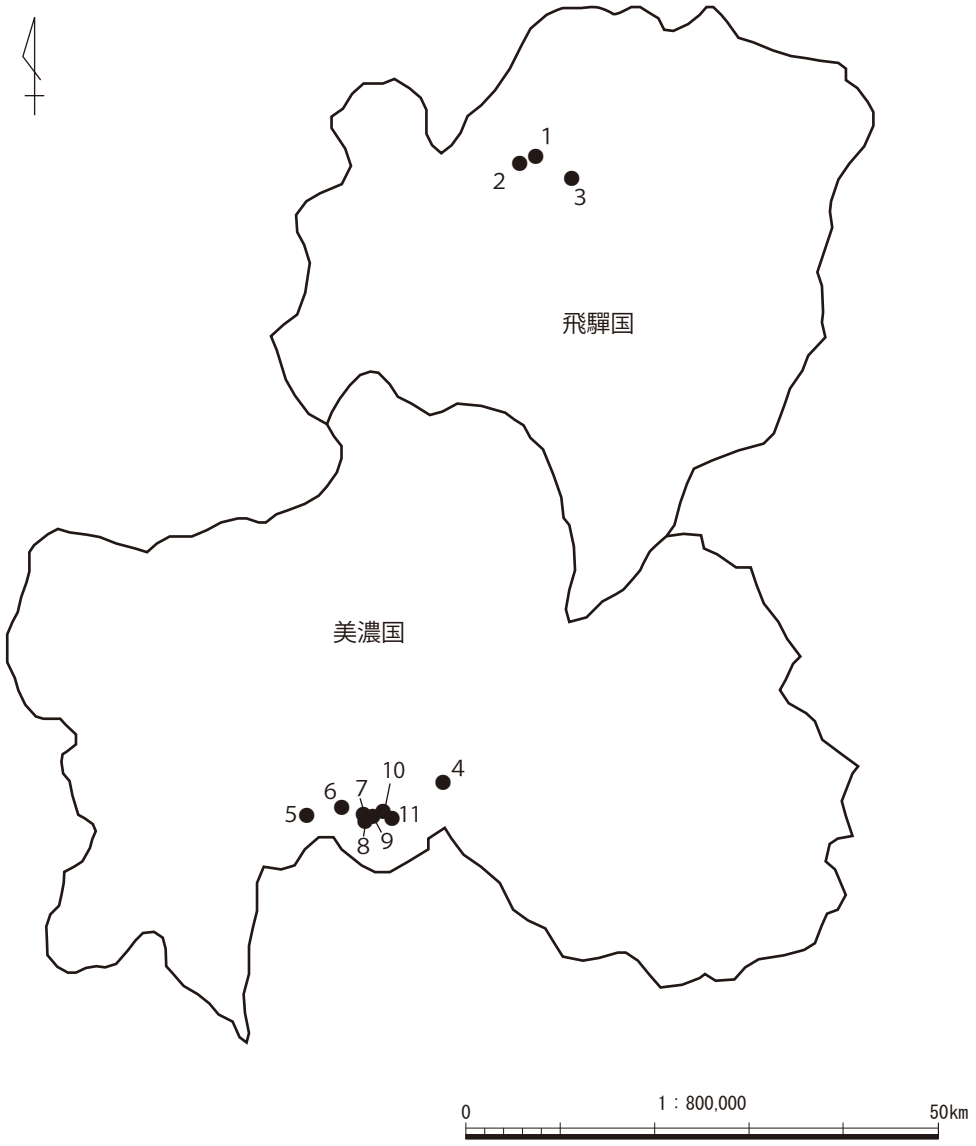
5．上川路廃寺跡（飯田市竜丘上川路）

遺跡種別	時代
寺院	－

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	?			○										i，ii
2	?							○						i，ii
備考	1，2は同一個体と考えられる。													

文献		掲載鴟尾
i	遮那真周・遮那藤麻呂 1984「伊那谷南部における初期仏教文化とその歴史的背景」『長野県考古学会誌』49号　長野県考古学会 p.46	1，2
ii	長野県 1988『長野県史　考古資料編　遺構・遺物』（全1巻（4））長野県史刊行会　p.981	1，2

8　岐阜県



岐阜県の鴟尾出土遺跡

1．下野羽根坂古窯跡（飛騨市古川町）

遺跡種別	時代
古窯	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○						i
備考	戦前に採集されたと伝わる。採集品には須恵器杯H・杯G・杯A、灰釉陶器などがある。													

文献		掲載鴟尾
i	飛騨市教育委員会 2019『飛騨市遺跡詳細分布調査報告－古川町・神岡町－』（飛騨市文化財調査報告書第14集）p.52	1

２．信包中原田古窯跡（飛騨市古川町）

遺跡種別	時代
古窯	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳								○					i
2	白鳳			○										i
3	白鳳			○			○							i
4	白鳳			○										i
5	白鳳			○										i
備考	灰原からの出土と考えられる。													

文献		掲載鴟尾
i	飛騨市教育委員会 2017『信包中原田古窯跡－圃場整備事業に伴う発掘調査報告書－』（飛騨市文化財調査報告書第11集）p.40	１－５

３．寿楽寺廃寺跡（飛騨市古川町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○	○				講堂	i
2	白鳳		○	○									講堂	i
3	白鳳		○	○									講堂	i
4	白鳳		○	○									講堂	i
5	白鳳						○	○					講堂	i
6	白鳳								○				講堂	i
備考	講堂と想定されている１号基壇の東西端から318点の破片が出土。２個体分を確認。													

文献		掲載鴟尾
i	岐阜県文化財保護センター 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書第74集）pp.172－173	１－６

４．矢田廃寺（美濃加茂市太田町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					詳細不明	
2	白鳳						○						詳細不明	
3	白鳳			○			○						詳細不明	
備考	鴟尾２・３は接合する。縦帯の文様は不明。													

文献		掲載鴟尾
i	井川祥子1996「古代美濃国における軒瓦の様相」『岐阜市歴史博物館研究紀要』８ 岐阜市歴史博物館 p.17	－
ii	美濃加茂市1980「第五章　古代寺院址」『美濃加茂市史　通史編』p.176	－
iii	美濃加茂市教育委員会 1993『土の中からのメッセージ（美濃加茂ふるさとファイルNo.４』	－

5．厚見寺跡（岐阜市寺町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○						詳細不明	i
2	白鳳			○									詳細不明	ii
備考	幅の狭い縦帯に直径約5.5cmの連珠文を施す。柄山古窯跡で焼成された鴟尾と同型式。													

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（100　厚見寺跡）p.146	1
ii	小川貴司 2000「第２章　瑞龍寺・柄山窯址出土の古瓦」『厚見中林寺・柄山窯址の研究』言叢社 p.77	2

6．柄山古窯跡群（各務原市那加桐野町）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A					○	○					詳細不明	i－iii
2	白鳳	B					○						詳細不明	i－iii
3	白鳳	C					○						詳細不明	i－iii
4	白鳳	D					○						詳細不明	i－iii
5	白鳳	E					○						詳細不明	i－iii
備考	縦帯のコンパス文の直径や施文方法により分類される。型式は文献iiiより。													

	文献	掲載鴟尾
i	小川貴司 2000「第２章　瑞龍寺・柄山窯址出土の古瓦」『厚見中林寺・柄山窯址の研究』言叢社 p.77	1－5
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（101　柄山古窯跡）p.146	1－5
iii	大脇潔 1987「岐阜市厚見寺跡出土鴟尾の復原」『岐阜市歴史博物館研究紀要』創刊号、岐阜市歴史博物館 pp.21－29	1－5

7．山田寺跡（各務原市那加門前町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳					○	○	○					詳細不明	i，ii
2	白鳳						○	○					詳細不明	i，ii
3	白鳳						○						詳細不明	i
備考	大型の破片で塔心礎の北西から出土したと伝わる。頂部の左右に３点の小孔が穿たれる。													

	文献	掲載鴟尾
i	各務原市埋蔵文化財調査センター 2010『山田寺跡』（各務原市文化財調査報告書第50号）p.283	1－3
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（102　山田寺跡）p.147	1，2

8．野口廃寺（各務原市蘇原新栄町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					詳細不明	i

文献		掲載鴟尾
i	西村勝広 2005「第４章　遺物　第１節　C地区の遺物について」『野口廃寺C・D地区発掘調査報告書』（各務原市文化財資料調査報告書第42号）各務原市埋蔵文化財調査センター　p.24	1

9．平蔵寺跡（各務原市蘇原熊田町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○						詳細不明	i
備考	型板を回転させた二重のコンパス文を施す。													

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（103　平蔵寺跡）p.148	1

10. 須衛宮東１号窯（各務原市須衛）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	a型		○				○					詳細不明	i
2	白鳳	b型					○						詳細不明	i
3	白鳳	c型					○						詳細不明	i
4	白鳳	d型					○	○					詳細不明	i
5	白鳳	e型					○	○					詳細不明	i
6	白鳳	f型					○	○					詳細不明	i
7	白鳳	g型					○	○					詳細不明	i
8	白鳳	h型				○							詳細不明	i
9	白鳳	i型						○					詳細不明	i
10	白鳳	j型						○					詳細不明	i
11	白鳳	k型							○				詳細不明	i
備考	b～g型はコンパスもしくは型板を利用した連珠文である。型式は文献ｉより。													

文献		掲載鴟尾
i	渡辺博人 2000「第２章　遺物」『須衛宮東１号窯址発掘調査報告書』（各務原市文化財調査報告第29号）各務原市埋蔵文化財調査センター pp.９－22	1－11

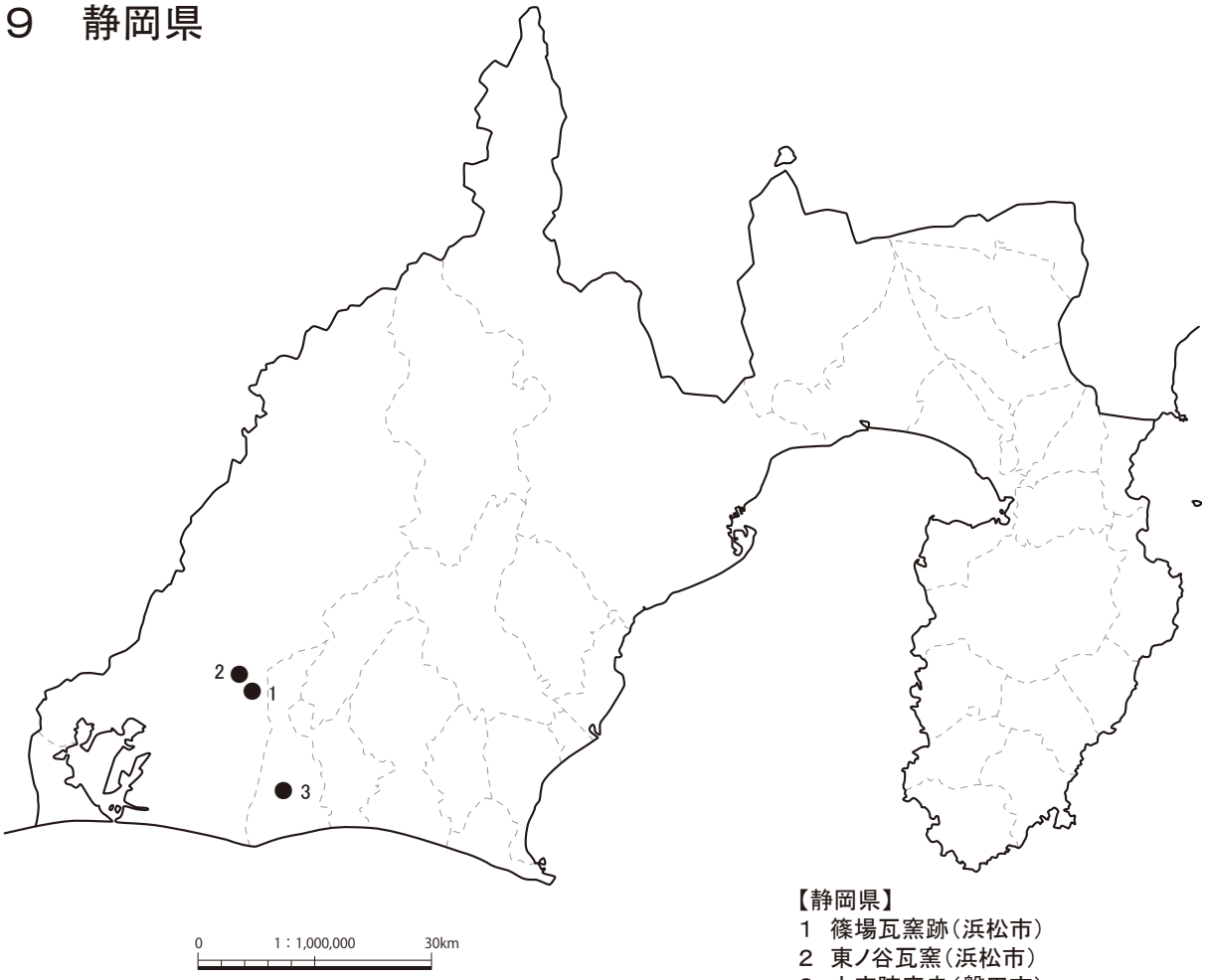
11. 各務御坊山南遺跡群10号窯（各務原市各務東町）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳								○				詳細不明	i
2	白鳳								○				詳細不明	i
3	白鳳								○				詳細不明	i
備考	ヘラ描きによる施文で、唐草文もしくは蕨手文か。窯体は鴟尾を焼成するために造り変えており、窯体を造り変える前は７世紀後半の須恵器を焼成する窯である。													

文献		掲載鴟尾
i	西村勝広 2007「第３章　遺構と遺物」『各務御坊山南遺跡群発掘調査報告書』（各務原市文化財調査報告書第47号）各務原市埋蔵文化財調査センター pp.27－30、図版39	1－3

９　静岡県



【静岡県】
1　篠場瓦窯跡（浜松市）
2　東ノ谷瓦窯（浜松市）
3　大宝院廃寺（磐田市）

静岡県の鴟尾出土遺跡

1．篠場瓦窯跡（浜松市浜北区根堅）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A	○	○	○	○	○	○	○	44	95	132	3号窯灰原	i
2	白鳳	B	○	○	○	○	○	○	○				瓦集中遺構、大溝	i
備考	1は基底面に木目痕、腹部内面に竹笹類による支えの痕跡、製作時に生じた亀裂の修復粘土が残る。 2は推定される規模から3号窯の焼成と推定される。													

文献		掲載鴟尾
i	武田寛生編 2013『篠場瓦窯跡・上海土遺跡』静岡県埋蔵文化財センター	1－2

2．東ノ谷瓦窯跡（浜松市浜北区尾野）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○	○					i
備考	採集資料。発掘調査歴なし。													

文献		掲載鴟尾
i	武田寛生 2009「資料調査報告東ノ谷瓦窯跡」『浜松市博物館報』21 浜松市博物館	1

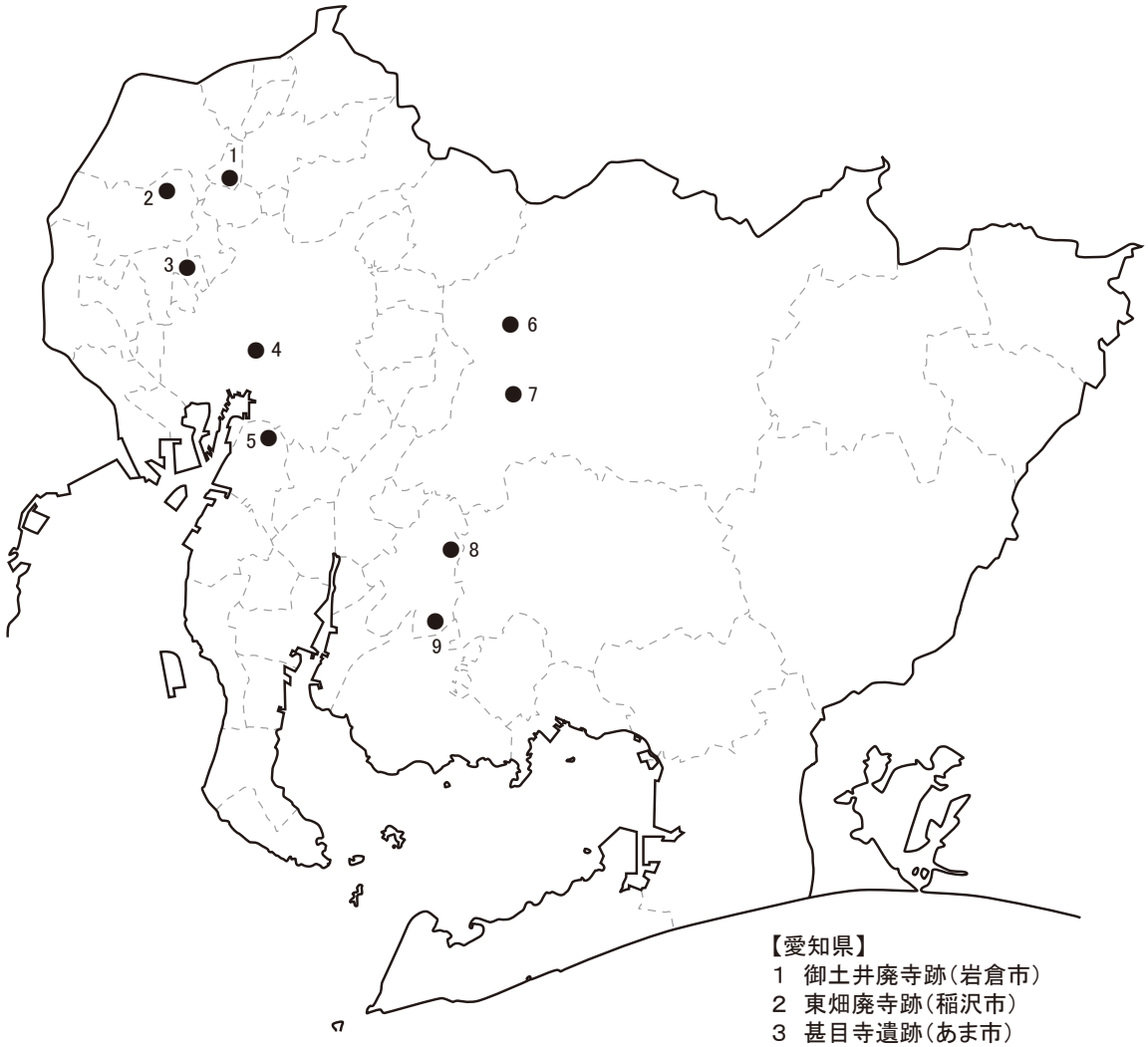
3．大宝院廃寺跡（磐田市中泉）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－近世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1							○	○	○				土坑	i
2								○					溝	i
3							○	○	○				包含層	i
備考	3は小型の鴟尾。													

文献		掲載鴟尾
i	佐口節司 1996「第5章遺物　第3節瓦・塼」『大宝院廃寺跡－第7次発掘調査報告書－』磐田市教育委員会 pp.75，107	1－3

10　愛知県



【愛知県】
1　御土井廃寺跡（岩倉市）
2　東畑廃寺跡（稲沢市）
3　甚目寺遺跡（あま市）
4　尾張元興寺跡（名古屋市）
5　トンメキ遺跡（東海市）
6　舞木廃寺（豊田市）
7　寺部遺跡（豊田市）
8　別郷廃寺（安城市）
9　寺領廃寺（安城市）

愛知県の鴟尾出土遺跡

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－中世

1．御土井廃寺跡（岩倉市稲荷町）

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳か							○						i

文献		掲載鴟尾
i	浅野清春編 1983「Ⅲ　御土井廃寺」『岩倉市稲荷町・大山寺町　岩倉南部土地区画整理事業地内所在埋蔵文化財発掘調査報告』岩倉市教育委員会 pp.8，40	1

2．東畑廃寺跡（稲沢市稲島町）

遺跡種別	時代
寺院	古墳－近世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						i
2	白鳳						○	○						i
3	白鳳						○	○						ii
備考	2は文献iiで瓦塔から鴟尾に訂正されている。 2・3は小型の鴟尾で、同一個体の可能性がある。													

	文献	掲載鴟尾
i	北條献示 1993「Ⅳ　出土遺物」『東畑廃寺発掘調査報告書（Ⅴ）』（稲沢市発掘調査報告40）稲沢市教育委員会 pp.18－21	1，2
ii	北條献示 1995「Ⅳ　出土遺物」『稲沢市内遺跡発掘調査報告書（Ⅰ）』（稲沢市発掘調査報告42）稲沢市教育委員会 pp.20－22	3

3．甚目寺遺跡（あま市甚目町）

遺跡種別	時代
寺院・集落	弥生－近世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○							i

	文献	掲載鴟尾
i	内山伸也 1993「第４章　遺物」『甚目寺町文化財報告書Ⅳ　甚目寺遺跡』甚目寺町教育委員会 pp.45－56	1

4．尾張元興寺跡（名古屋市中区正木）

遺跡種別	時代
寺院・集落	飛鳥－中世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥						○	○						i
2	飛鳥						○	○						i
3	飛鳥			○			○	○						ii
備考	1・2と3は縦帯の幅が異なっており、別個体。													

	文献	掲載鴟尾
i	服部哲也 1994「第５章　遺物」『尾張元興寺発掘調査報告書』（名古屋市文化財調査報告28）　名古屋市教育委員会 p.48	1，2
ii	市澤泰峰 2010「第５章　調査の成果」『尾張元興寺跡第14次発掘調査報告書』名古屋市教育委員会 pp.19－23	3

5．トヽメキ遺跡（東海市名和町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳か							○						i

	文献	掲載鴟尾
i	立松彰 1988「Ⅳ　遺物」『トヽメキ遺跡』東海市教育員会 p.15	1

6．舞木廃寺（豊田市舞木町）

遺跡種別	時代
寺院	古墳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1				○										i

文献		掲載鴟尾
i	永井邦仁 2011「三河国賀茂郡の古瓦」『豊田市史研究』２ 豊田市 pp.115－117	1

7．寺部遺跡（豊田市上野町）

遺跡種別	時代
集落	縄文－中世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○	○					i
2	白鳳			○			○							i
3	白鳳			○										i
4	白鳳								○					i
5	白鳳								○					i
6	白鳳								○					i
7	白鳳								○					i
備考	１－７は接合しない破片であるが、同一個体として推定される。 腹部内面に支えとみられる木材の痕跡が残る。													

文献		掲載鴟尾
i	仲座琢磨 2019「第Ⅲ章　調査の成果」『寺部遺跡Ⅸ』（豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第81集）豊田市教育委員会 pp.99－103	１－７

8．別郷廃寺（安城市別郷町）

遺跡種別	時代
寺院	弥生－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○	○					－
備考	報告書刊行に向けて、現在整理作業中。													

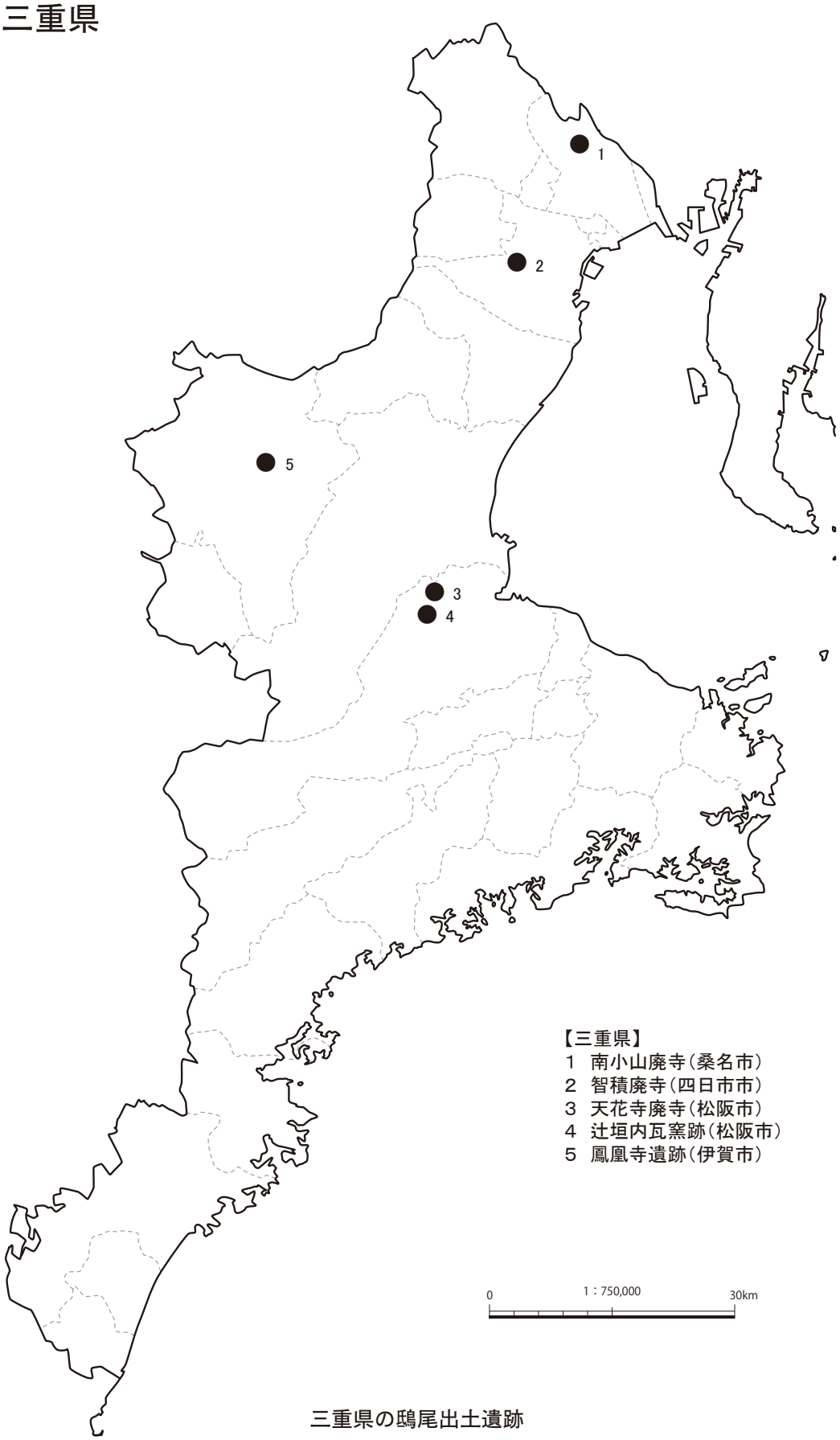
9．寺領廃寺（安城市寺領町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－中世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1			○											i
2							○	○						i
備考	２は松韻寺所蔵資料。													

文献		掲載鴟尾
i	永井邦仁 2004「第７章　瓦」『寺領廃寺』（安城市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集）安城市教育委員会 pp.102－106	１－２

11　三重県



三重県の鴟尾出土遺跡

1．南小山廃寺（桑名市多度町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○						i，ii
備考	球形の珠文から捻り出した突起を、体部の指で空けた穴に差し込んで接着する。1以外にも、報告書に掲載されていない腹部・鰭部・縦帯・珠文等の破片が約40点出土している。													

文献		掲載鴟尾
i	伊東春夫 1986「Ⅳ　遺物」『南小山廃寺発掘調査報告』多度町教育委員会 pp.6－9	1
ii	岡田登 2002「第七節　南小山廃寺」『多度町史　資料編Ⅰ考古・古代・中世』多度町 pp.215－220	1

2．智積廃寺（四日市市智積町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○							i
2	白鳳				○									i
3	白鳳			○										i

文献		掲載鴟尾
i	藤井功・石井則孝 1968「第4章 遺物」『智積廃寺発掘調査報告書』（四日市市埋蔵文化財調査報告第3集）四日市市教育委員会 pp. 15－16	1－3

3．天花寺廃寺（松阪市嬉野天花寺町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳か							○						i

文献		掲載鴟尾
i	山田猛 1981「Ⅸ　一志郡嬉野町　天花寺廃寺」『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財調査報告44）三重県教育委員会 pp.84，92	1

4．辻垣内瓦窯跡（松阪市嬉野釜生田町）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○	○	○	○	○	○	○				2号窯窯体内	i
2	白鳳		○	○	○	○	○	○	○				2号窯窯体内	i
3	白鳳						○		○					i
備考	1～3の基底面には、布目痕が残る。他に、未報告の胴部や縦帯の破片が4点出土している。破片には灰の融着が顕著にみられる。													

文献		掲載鴟尾
i	竹内英昭 1988「第2章　出土遺物」『辻垣内瓦窯跡群』嬉野町教育委員会 pp.7－10	1－3

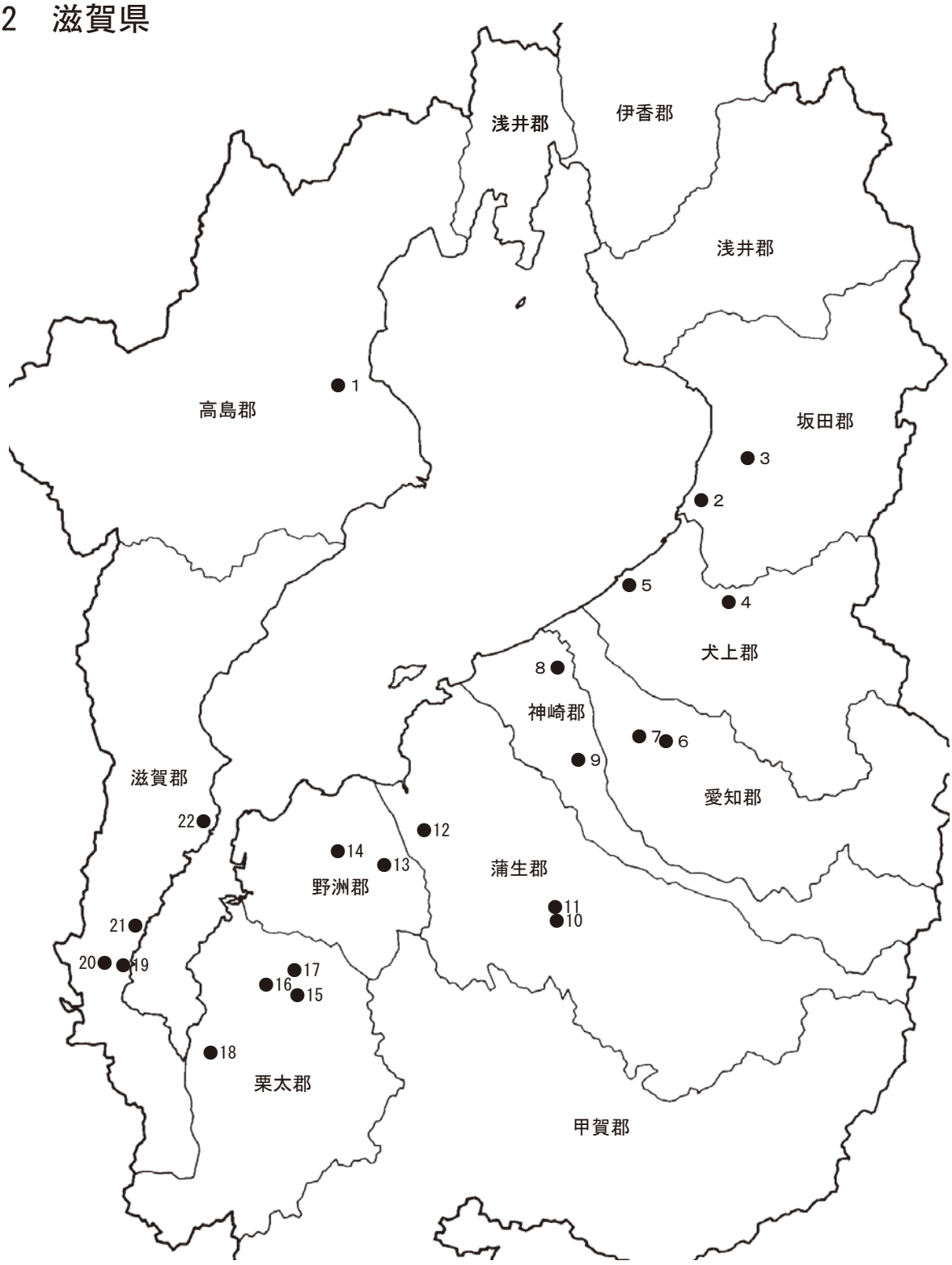
5．鳳凰寺遺跡（伊賀市鳳凰寺）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－中世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1							○	○						ii
2							○	○						ii
3			○											i
4							○	○						i
5							○	○						i
6			○	○										i
備考	１・２は薬師寺保管。６は小型の鴟尾。													

文献		掲載鴟尾
i	境宏 1988「白鳳・奈良時代瓦類」『鳳凰寺遺跡発掘調査報告書』 大山田村教育委員会 pp.50－51	3－6
ii	山本雅靖 1988「付編　薬師寺保管の鳳凰寺廃寺関係遺物について」『鳳凰寺遺跡発掘調査報告書』 大山田村教育委員会 pp.71－78	1，2

12　滋賀県



滋賀県の鴟尾出土遺跡

1．大宝寺跡（高島市新旭町熊野本・安井川）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	Ⅰ		○	○	○	○	○						iii，iv
2	白鳳	Ⅰ				○								iii，iv
3	白鳳	Ⅱ		○	○	○	○	○						iii，iv
4	白鳳	Ⅱ				○								iii，iv
5	白鳳	Ⅲ	○	○	○	○	○	○						iii，iv
6	白鳳	Ⅲ	○											iii，iv
7	白鳳	Ⅲ(A)	○											i，ii
8	白鳳	Ⅲ(B)	○					○						i，ii
	高島市教育委員会と飛鳥資料館の保管分をあわせた破片数は101点以上ある。今回は充分な観察ができなかったため、今後、個体数等をふくめて内容全般が見直される可能性がある。													

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（45　大宝寺廃寺）pp.101－102	7，8
ii	林博通 1989「大宝寺跡」『近江の古代寺院』同刊行会 pp.618－628，図版232－235	7，8
iii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1991『飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察』pp.5，51－53	1－6
iv	大脇潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 p.44，第23，96図	1－6

2．磯堂谷遺跡（米原市磯）

遺跡種別	時代
寺院か瓦窯か	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○					瓦窯か	i，ii
2	白鳳	A		○			○	○					瓦窯か	ii－vii
3	白鳳	B					○	○					瓦窯か	iii，iv，vi
備考	破片３点あり。複数の地元住民が採集（文献vi）。１，２は同一個体の可能性あり。２には鰭部の粘土剥離面にヘラ描きのコンパス文がある。個人蔵（長浜市長浜城歴史博物館寄託）。													

	文献	掲載鴟尾
i	西田弘 1977「近江の古瓦Ⅱ湖西・湖北」『文化財教室シリーズ18』財団法人滋賀県文化財保護協会 pp.79－80	1
ii	滋賀県立近江風土記の丘資料館 1978『78秋季特別展「近江の瓦」』p.20	1，2
iii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（48　磯廃寺（堂谷廃寺））p.104	2，3
iv	西田弘 1988「近江の古瓦ⅩⅢ補遺１（湖西・湖北）」『文化財教室シリーズ98』財団法人滋賀県文化財保護協会 p.242	2，3
v	米原町教育委員会 1988「４　堂谷遺跡」『米原町内遺跡分布調査報告書』（米原町埋蔵文化財調査報告Ⅷ）p.８，図版第５	2
vi	西田弘 1989「磯廃寺」『近江の古代寺院』同刊行会 pp.535－538，図版198	2，3
vii	米原町教育委員会 2010「堂谷遺跡（磯廃寺）」『天野川流域の古代寺院　壬申の乱から聖武行幸へ－地方寺院の役割－』p.６	2

3．法勝寺廃寺（米原市高溝）

遺跡種別	時代
寺院	縄文－中世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○	○					i
備考	４点あり。互いに接合しないが、胎土はいずれも砂粒を含む細かな粘土で、おおむね硬質に焼成され、色調は暗灰色を呈す。同一個体とみられる。外面は全面をヘラ削り後、ヘラ描きにより段型と縦帯を表現する。内面に同心円文痕あり。米原市教育委員会蔵。													

文献	掲載鴟尾
i　近江町教育委員会1990『法勝寺遺跡』（近江町文化財調査報告第６集）写真図版41	1

4．鳥籠山遺跡（彦根市正法寺町）

遺跡種別	時代
窯	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○				○					窯跡	i，ii
備考	外面は素文だが、珠文１個（直径7.5cm）が貼り付けられる。そして、その珠文付近から外側（鰭側）はヘラ状工具によって磨いた後、端縁に沿って削る。内面は腹部の取り付けの剥離痕を境界として、外側（鰭部側）はヘラ状工具によって磨き、内面は粘土紐の積み上げ痕とそれを指で押さえた痕跡をそのまま残す。彦根市蔵。													

文献	掲載鴟尾
i　彦根市教育委員会 1992『鳥籠山遺跡発掘調査概要報告書』写真図版７	1
ii　谷口徹 1992「彦根の古代寺院（一）」『彦根城博物館　研究紀要第３号』（「一　正法寺瓦窯跡」）pp.１－４	1

5．八坂東遺跡（彦根市八坂町）

遺跡種別	時代
寺院	古墳－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○	○				瓦溜	i
2	白鳳							○					瓦溜	i
備考	破片37点あり。鴟尾１と２の胎土や焼成等の特徴に顕著な差異は認めにくい。胴部等の破片についてはいずれとも判別しがたいため、ここでは便宜的に鴟尾１の一部とした。一部は報告書（ｉ）に未報告。彦根市蔵と滋賀県教育委員会蔵がある。													

文献	掲載鴟尾
i　滋賀県教育委員会 1995『（仮称）滋賀県立大学整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書八坂東遺跡』pp.51－52，図版23	1，2

6．塔ノ塚廃寺（愛荘町軽野）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	B	○											i
2	白鳳	A						○						i

備考	破片３点あり。鴟尾１は砂粒を含む胎土で、焼成は硬質、色調は灰褐色を呈する。外面は格子叩きをヘラで消し、頭部の縁取りとして、幅２cm程度、高さ0.5cm程度の突帯を貼り付ける。内面には指頭圧痕がある。鴟尾２は砂粒を多く含む胎土で、焼成はおおむね硬質で、色調は黄灰色だが、鉄分の沈着が多くみられる。外面の突帯は幅1.7cm、高さ１cmで、それと端縁との間に２条の段差を削り出し、段型を表現する。滋賀県教育委員会1979『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ４』に未報告。愛荘町立歴史文化博物館蔵。

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（47　塔の塚廃寺）pp.102－103	1－2

7．野々目廃寺（愛荘町野々目）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳				○								溝	i
備考	破片２点あり。胎土はいずれも砂粒をわずかに含む細かい粘土で、焼成はあまく、色調は灰白色から褐色を呈する。脊稜は幅2.8cm、高さ0.8cmの突帯で表現され、その両側に１条、もしくは２条のヘラ描き沈線で段型を示す。滋賀県教育委員会1978、1979『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ，Ⅵ－５』に未報告。愛荘町立歴史文化博物館蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（47　野々目廃寺）pp.103－104	1

8．法堂寺遺跡（東近江市佐野町）

遺跡種別	時代
寺院	縄文－古代・室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳				○	○	○	○	○				金堂北瓦溜ほか	i，ii
2	白鳳			○	○	○	○	○	○				金堂北瓦溜ほか	i，ii
備考	破片72点あり。胎土や焼成から、２個体分以上が混じるとみられるものの、多くが小破片であるため、区別することは難しい。東近江市埋蔵文化財センター蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	能登川町教育委員会 1999『滋賀県史跡法堂寺廃寺跡－法堂寺遺跡公園発掘調査報告書』（能登川町埋蔵文化財調査報告書第47－２集）pp.115－122，図版51－52	1，2
ii	東近江市埋蔵文化財センター・帝塚山大学附属博物館 2018『東近江の古代寺院とその源流～東アジアからの道～』pp５，８	1，2

9．山本遺跡（東近江市五個荘山本町）

遺跡種別	時代
寺院か	縄文－古墳・平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳								○				大型土坑	i－iii
2	白鳳								○				大型土坑	i－iii
備考	破片７点あり。腹部だが、基底部ではない可能性がある。東近江市埋蔵文化財センター蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	五個荘町教育委員会 1997『滋賀県神崎郡山本遺跡第３次調査』（五個荘町文化財調査報告書33）p.30 fig.26，写真図版PL８，18	1，2
ii	五個荘町歴史博物館 1999『神崎地宝』p.35，写真・図No.162	1，2
iii	東近江市埋蔵文化財センター・帝塚山大学附属博物館 2018『東近江の古代寺院とその源流～東アジアからの道～』p.10	1，2

10. 宮井廃寺（東近江市宮井町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳・平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○					○				GGRMⅢ	i
備考	破片２点あり。発掘調査報告書（蒲生町教育委員会・滋賀大学考古学ゼミナール1985『宮井廃寺』）に未掲載。東近江市埋蔵文化財センター蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	東近江市埋蔵文化財センター・帝塚山大学附属博物館 2018『東近江の古代寺院とその源流～東アジアからの道～』pp.11－13	1

11. 野瀬遺跡（東近江市宮井町）

遺跡種別	時代
集落（寺院周辺）	弥生－古代・室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○						第５調査区C地区SK527	i
備考	鬼瓦、もしくは鴟尾の可能性があると報告されている。素文の縦帯の可能性がある。最大厚は６cmである。全体をナデ調整する外面に、断面半円形の突帯（幅２cm、高さ２cm）２条が縦位に貼り付けられる。内面は指頭で粗くナデつけた痕跡がのこる。東近江市埋蔵文化財センター蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	蒲生町教育委員会 1989『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（蒲生町文化財資料集７）p.116　第101図，pp.118－119，図版102	1

12. 安養寺廃寺（近江八幡市安養寺町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						i
備考	鴟尾片は２点ある。胎土は長石粒が混じる粘土である。おおむね硬質に焼成され、色調は外面が淡灰褐色、断面が灰黒色である。厚さ4.2cmを測り、外面に直径4.2cmの珠文がつく。内面はナデ調整する。もう１点は未報告だが、珠文の有無を除けば同じ特徴をもつ。同一個体であろう。滋賀県教育委員会蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	滋賀県教育委員会 2017『県道安養寺入町線補助道路整備工事に伴う発掘調査報告書安養寺遺跡』pp.105，147，図版53	1

13. 福林寺遺跡（野洲市小篠原）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						△	△						i
備考	文献ｉでは２点に分かれて掲載されるが、接合する。縦帯の一部か。野洲市教育委員会所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	野洲市教育委員会 2005「福林寺遺跡」『1995年　埋蔵文化財調査年報』pp.53，61	1

14. 八夫遺跡（野洲市八夫）

遺跡種別	時代
集落	弥生－江戸

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○	○				井戸跡	i
2	白鳳								△					ii
備考	鴟尾とみられる破片２点あり。鴟尾１の色調は灰白色で焼成はやや軟質であり、鰭部側と腹部側ともに約４cmの厚みがある。鴟尾２は端面に刻み線があり、鰭部への接合面とみられる。野洲市教育委員会蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	中主町教育委員会 1985「第３章　八夫遺跡　第１次発掘調査」『中主町文化財調査報告書 第３集』p.28 図版14，17	1
ii	野洲市教育委員会 2005「第２章　八夫遺跡第12次発掘調査」『平成16年度 野洲市内遺跡発掘調査概要Ⅱ』p.12	2

15. 手原遺跡（栗東市手原）

遺跡種別	時代
寺院・官衙・集落	古墳－近世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						i
備考	断片１点が出土。色調は灰白色で，焼成はやや軟質である。厚み約６cmで、線刻などから鰭部の破片とみられる。栗東市出土文化財センター蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	栗東町教育委員会・栗東町文化体育振興事業団 1999『1980～1982年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』（「手原遺跡（81R025－04）」）pp.13－14	1

16. 下鈎東遺跡（栗東市蜂屋・下鈎）

遺跡種別	時代
寺院・集落	弥生－近世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○	○				トレンチ９	i
2	白鳳							○	○				トレンチ11	i
備考	鴟尾１の色調は灰白色で、焼成はやや軟質である。0.4cm程度と浅い段型を表す鰭部の破片が複数確認できる。鰭部の厚みは４cm程度である。鴟尾２の色調は灰褐色で、焼成はやや軟質である。鰭部や胴部とみられる破片がある。粘土紐貼り付け突帯による縦帯に、直径約４cmの珠文が付く。鰭部の厚みは４cm程度で、表面のケズリにより浅く段型が表されている。細片が多く全形は不明だが、コンテナ２箱程度出土。栗東市出土文化財センター蔵。													

文献	掲載鴟尾
i　栗東市教育委員会・栗東市文化体育振興事業団 2011『下鈎東遺跡発掘調査報告書』栗東市文化財調査報告書32 pp.38－39，51，84，巻頭カラー図版	1，2

17. 蜂屋遺跡（栗東市蜂屋）

遺跡種別	時代
集落	縄文－近世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			△		○	○	○	○					i，ii
2	白鳳						○	○	○					ii
備考	2018年度調査で法隆寺式軒瓦などとともに出土。鴟尾はコンテナ11箱分の破片が出土しており、少なくとも２個体が確認できる。滋賀県埋蔵文化財センター保管。													

文献	掲載鴟尾
i　滋賀県文化財保護協会 2018『おうみ文化財通信 vol.38』	1
ii　滋賀県文化財保護協会 2019『レトロ・レトロの展覧会2019　初夏の特別ミニ陳列　法隆寺から伝来した近江の瓦』	1，2

18. 山ノ神遺跡（大津市一里山三丁目）

遺跡種別	時代
窯・工房	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○	○	○	○	○	○	○	42	104	(147)	4号窯（新）	ii
2	白鳳		○	○	○	○	○	○	○	43	109	(149)	4号窯（新）	ii
3	白鳳		○	○	○	○	○	○	○	40	104	140	4号窯（新）	ii
4	白鳳		○	○	○	○	○	○	○	41	104	138	4号窯（新）	ii
5	白鳳					○		○	○		(50)	(70)	遺物包含層	i
備考	鴟尾１～４は、ほぼ同形同大。焼成途中で窯の天井崩落により埋没していた。鴟尾５は小型鴟尾。１～４は大津市歴史博物館保管、５は大津市埋蔵文化財調査センター保管。													

文献	掲載鴟尾
i　大津市教育委員会 2005『山ノ神遺跡発掘調査報告書Ⅲ －重要遺跡山ノ神遺跡に係る確認調査－』大津市埋蔵文化財調査報告書（38）p.21	5
ii　大津市教育委員会 2012『山ノ神遺跡出土鴟尾調査報告書』大津市埋蔵文化財調査報告書（64）pp.13－33，図版６－19	1－4

19. 南滋賀町廃寺（大津市南志賀一丁目ほか）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A				△	○	○					第３号・第４号トレンチ	i，iii
2	白鳳	A				○	○	○					伝南滋賀町廃寺出土	ii
3	白鳳	B	△	△	△	△		○	○		(94)	(127)	第３号・第４号トレンチ	i，iii
備考	鴟尾１・２は暗灰色で外面に段型を表す（『日本古代の鴟尾』報告のA）、鴟尾３は灰白色で無文（『日本古代の鴟尾』報告のB）。１・３は戦前の調査で遺物の現所在は不明。２は高浜市やきものの里かわら美術館蔵。													

文献	掲載鴟尾
i　柴田實 1940『大津京阯（上）　南滋賀の遺蹟とその遺物』（滋賀県史蹟調査報告第９冊）滋賀県 pp.70－72，81－82，図版第38，図版第45	1，3

ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（43　史跡 南滋賀町廃寺）pp.99－100	2
iii	林博通 1989「南滋賀廃寺 付 榿木原瓦窯」『近江の古代寺院』 近江の古代寺院刊行会 pp.215－216	1，3

20. 榿木原遺跡（大津市南志賀一丁目）

遺跡種別	時代
集落・瓦窯・工房	弥生－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	B		○				○	○				1号窯，2号窯，3号窯	i，ii，iv
2	白鳳	B						○	○				A支群灰原	iii，iv
備考	榿木原窯では，南滋賀町廃寺へ供給する瓦を生産。鴟尾は，南滋賀町廃寺出土の鴟尾３と同様で厚さ３～４cmの破片約50~60点が出土した（文献ｉ・iii）。腹部の基底幅は推定約45cm（文献ii）。													

	文献	掲載鴟尾
i	滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1975「第４章 遺物 第１節 瓦類」『榿木原遺跡発掘調査報告』p.34，図版32，図版64	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1980『日本古代の鴟尾』（44　榿木原瓦窯跡）pp.100－101	1
iii	滋賀県教育員会・滋賀県文化財保護協会 1981『榿木原遺跡発掘調査報告Ⅲ』（本文編）p.73，（図版編Ⅰ）図版77	2
iv	林博通 1989「南滋賀廃寺 付 榿木原瓦窯」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 p.229	1，2

21. 穴太遺跡（大津市穴太二丁目ほか）

遺跡種別	時代
集落・寺院・瓦窯	縄文－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A	○	○	○			○		(47)	(76)	(127)	再建寺院金堂跡	i，ii
2	白鳳	A						○					再建寺院金堂跡	ii
3	白鳳	B				○		○					再建寺院金堂跡	ii
備考	鴟尾１・２は胴部・鰭部に段型を表す。１は全形復元されている。２は、１よりひと回り小型と推定され破片３点がある。３は、無文とみられる大型破片１点が出土。滋賀県埋蔵文化財センター蔵。													

	文献	掲載鴟尾
i	林博通 1989「穴太廃寺」『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 p.229	1
ii	滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・滋賀県文化財保護協会 2001「第６章 遺物 第１節 瓦類 ３.道具瓦 ①鴟尾」『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』pp.146－147	1－3

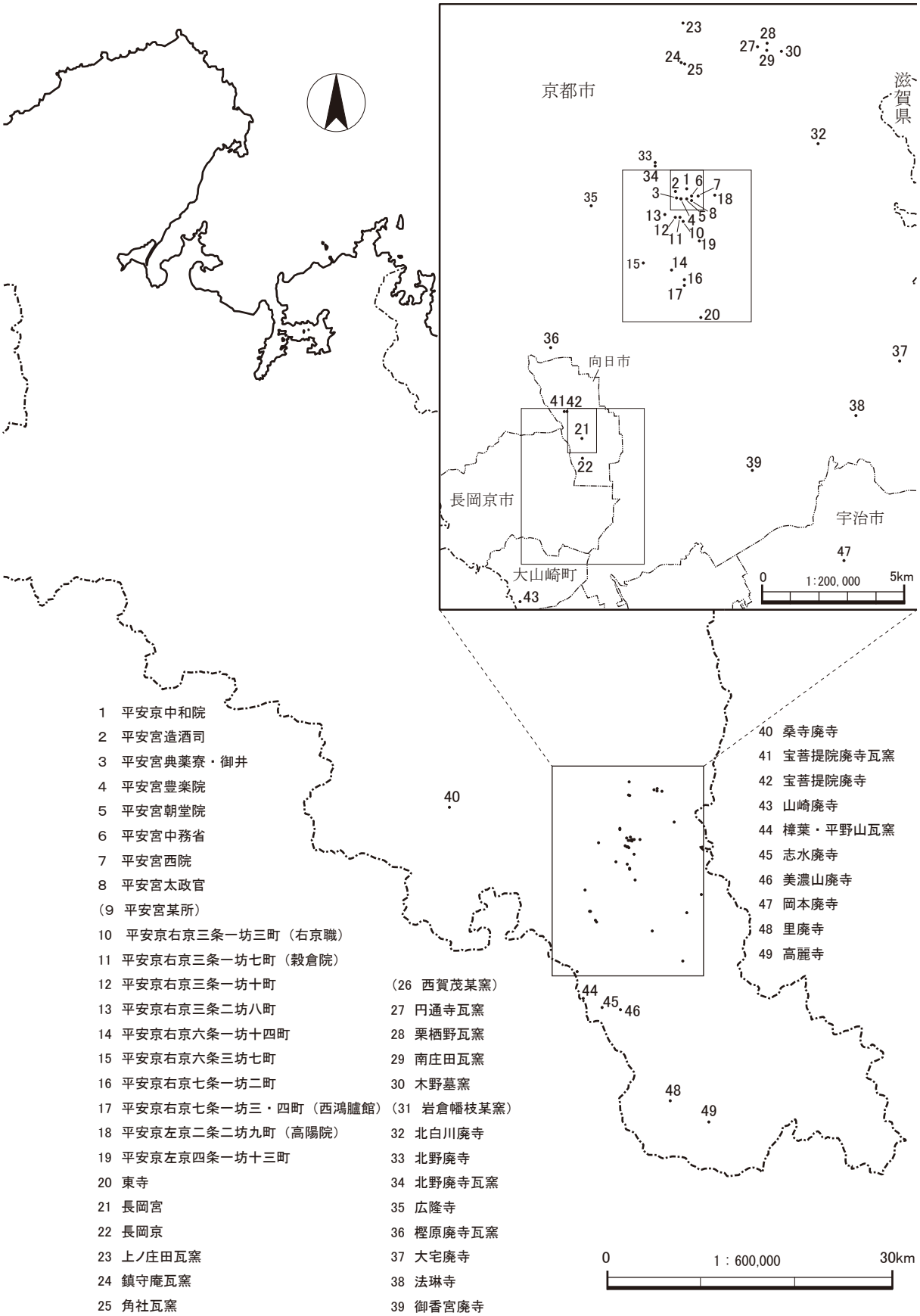
22. 真野廃寺（大津市真野一丁目・二丁目）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○										SX3	i
備考	頭部（残存幅約15.3cm）の破片１点。突帯上に珠文貼り付けのための刻み線が認められる。大津市埋蔵文化財調査センター保管。													

	文献	掲載鴟尾
i	大津市教育委員会 2014『真野廃寺発掘調査報告書Ⅰ』 大津市文化財調査報告書82 pp.23，38	1

13　京都府



1　平安京中和院
2　平安宮造酒司
3　平安宮典薬寮・御井
4　平安宮豊楽院
5　平安宮朝堂院
6　平安宮中務省
7　平安宮西院
8　平安宮太政官
（9　平安宮某所）
10　平安京右京三条一坊三町（右京職）
11　平安京右京三条一坊七町（穀倉院）
12　平安京右京三条一坊十町
13　平安京右京三条二坊八町
14　平安京右京六条一坊十四町
15　平安京右京六条三坊七町
16　平安京右京七条一坊二町
17　平安京右京七条一坊三・四町（西鴻臚館）
18　平安京左京二条二坊九町（高陽院）
19　平安京左京四条一坊十三町
20　東寺
21　長岡宮
22　長岡京
23　上ノ庄田瓦窯
24　鎮守庵瓦窯
25　角社瓦窯
（26　西賀茂某窯）
27　円通寺瓦窯
28　栗栖野瓦窯
29　南庄田瓦窯
30　木野墓窯
（31　岩倉幡枝某窯）
32　北白川廃寺
33　北野廃寺
34　北野廃寺瓦窯
35　広隆寺
36　樫原廃寺瓦窯
37　大宅廃寺
38　法琳寺
39　御香宮廃寺
40　桑寺廃寺
41　宝菩提院廃寺瓦窯
42　宝菩提院廃寺
43　山崎廃寺
44　樟葉・平野山瓦窯
45　志水廃寺
46　美濃山廃寺
47　岡本廃寺
48　里廃寺
49　高麗寺

京都府の鴟尾出土遺跡

1．平安宮中和院（京都市上京区小山町）

遺跡種別	時代
宮殿	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安							○					近世土取穴出土	i
2	平安												⑲地区出土	ii
備考	鴟尾２には緑釉が施される。													

	文献	掲載鴟尾
i	木下保明 1980「平安宮中和院跡」『平安京跡発掘調査概要 昭和54年度』京都市文化観光局，京都市埋蔵文化財研究所 p.12	1
ii	本弥八郎 1995「40　中和院－内蔵寮跡」『平安宮跡Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所 p.175	2

2．平安宮造酒司（京都市中京区聚楽廻松下町）

遺跡種別	時代
宮殿	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安							△					攪乱	i

	文献	掲載鴟尾
i	梶川敏夫 1975「造酒司跡推定地発掘調査概要」『平安宮跡』（京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅰ）京都市文化観光局文化財保護課 p.27	1

3．平安宮典薬寮・御井（京都市中京区西ノ京車坂町）

遺跡種別	時代
宮殿	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○	○	○				重機掘削中	i ：図16
備考	報告書では、鬼瓦の破片である可能性も指摘されている。													

	文献	掲載鴟尾
i	布川豊治 2014『平安宮典薬寮・御井跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014－２）京都市埋蔵文化財研究所 p.15	1

4．平安宮豊楽院（京都市中京区聚楽廻西町ほか）

遺跡種別	時代
宮殿	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○							i ：No.699
2	平安												豊楽院北西隅付近	ii
3	平安			○			○						豊楽殿階段化粧石抜取り跡（北廊築成土）	iii ：図版16－17，iv ：図55・図版32－1，viii
4	平安												豊楽院南西部（近世遺構，攪乱）	v
5	平安						○	○					区画溝SD19	vi ：図３
6	平安					○	○	○					東華堂東側	vii ：図７
7	平安						○						清暑堂南側近世土坑	ix ：図42
備考	鴟尾２は鳳凰浮彫と緑釉を有す。なお，豊楽院出土鴟尾については、各出土資料が同一型式かどうか判断できないものが多いため、出土地点ごと（＝報告ごと）に鴟尾１，２，３…とした。													

文献		掲載鴟尾
i	平安博物館 1977『平安京古瓦図録』解説編 pp.431－432，図版編 p.183	1
ii	家崎孝治 1984「朝堂院，豊楽院跡」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.132	2
iii	鈴木久男 1989「平安宮豊楽院（1）」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年度』京都市文化観光局 p.4	3
iv	鈴木久男 1995「豊楽院跡」『平安宮跡 Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所 pp.36－47	3
v	伊藤潔 1995「44 豊楽院－治部省跡」『平安宮跡 Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所 p.177	4
vi	伊藤潔・小松武彦 1998「平安宮豊楽院跡」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.4	5
vii	梶川敏夫・馬瀬智光 1999「平安宮豊楽院東華堂跡」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成10年度』京都市文化市民局 p.9	6
viii	大脇潔 1999「奈良，平安時代の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 pp.78－80	2，3
ix	西森正晃 2008「平安宮豊楽院跡，鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 p.38	7

5．平安宮朝堂院（京都市中京区聚楽廻西町ほか）

遺跡種別	時代
宮殿	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安					△							昌福堂西側	i：図42
2	平安						○						大極殿西側	ii：第18図・図版第19
3	平安			○			○						大極殿付近，延休堂北側，宴松原	iii：No.689－698・700
4	平安							○						iii：No.703
5	平安					△							修式堂北東近世土坑	iv：図７・10・図版２
6	平安			○									龍尾壇付近	v：第43図・図版第21
7	平安												龍尾壇付近	v：第43図
8	平安												大極殿南東付近	vi：図版Ⅶ
9	平安												大極殿南西側	vii
10	平安												宣政門	viii
11	平安												延休堂北東側近世土坑	ix
12													朝堂院南西部	x
13	平安					○							大極殿東面回廊東方土坑２	xi：図６
14	平安			○									大極殿南東近世瓦溜	xii：図４・図版32
15	平安			○									大極殿東面回廊近世整地層	xiii：図10・図版32
16	平安							○					延禄堂南側及び朝堂院西回廊近世整地層	xiv：図25－61
備考	鴟尾１，２，８，９，13は緑釉を施す。鴟尾３，６は鳳凰文浮彫を有し緑釉を施す。鴟尾７は比較的小型。鴟尾10は熨斗瓦の可能性あり。鴟尾14は鳳凰文の破片で三彩を施す。なお、朝堂院出土鴟尾については、各出土資料が同一型式かどうか判断できないものが多いため、基本的に出土地点ごと（＝報告ごと）に鴟尾１，２，３…としたが（鴟尾３は複数地点の出土資料。宴松原出土資料を含むと思われるが、一括掲載されたどの個体がそれに該当するか不明のため、本項に含めた。）、同一報告内でも別型式と報告されるものには別番号を付した。													

	文献	掲載鴟尾
i	浪貝毅・梶川敏夫 1976「平安宮朝堂院跡発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告 1975』京都市文化観光局文化財保護課 p.76	1
ii	片岡肇 1977「道具瓦」片岡肇ほか（編）『平安宮大極殿跡の発掘調査』（平安京跡発掘調査報告書第１輯）古代學協會 pp.37－38	2
iii	寺島孝一 1976「689～700　緑釉鴟尾」平安博物館『平安京古瓦図録』解説編 pp.431－432，図版編 pp.180－185	3，4
iv	前田義明 1981「平安宮朝堂院跡」『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター，京都市埋蔵文化財研究所 p.８	5
v	植山茂 1983『平安宮朝堂院跡－京都市上京区主税町所在－』（平安京跡研究調査報告第９輯）古代學協會 p.46	6，7
vi	谷口俊治 1983「瓦類」鈴木忠司ほか（編）『平安宮推定大極殿跡発掘調査報告書－京都市上京区小山町所在－』古代學協會 p.18	8
vii	家崎孝治 1984「朝堂院，豊楽院跡」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.132	9
viii	長戸満男 1995「平安宮朝堂院宣政門」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成６年度』京都市文化観光局 p.21	10
ix	平田泰 1995「17 朝堂院跡」『平安宮跡 Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所 p.155	11
x	小檜山一良ほか 1999「平安宮左馬寮－朝堂院跡，平安京右京一，二条二～四坊」『平成９年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.20	12
xi	長谷川行孝・堀大輔 2003「平安宮大極殿院跡東方，聚楽遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成14年度』京都市文化市民局 p.６	13
xii	吉崎伸・吉本健吾 2007「平安宮朝堂院跡、聚楽遺跡」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 p.５	14
xiii	能芝勉 2007「平安宮朝堂院跡、聚楽遺跡」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局 p.９	15
xiv	西森正晃 2016「平安宮朝堂院跡，聚楽遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成27年度』京都市文化市民局 p.35	16

６．平安宮中務省（京都市上京区中務町）

遺跡種別	時代
宮殿	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安							△						i

	文献	掲載鴟尾
i	辻裕司 1990「平安宮中務省（２）」『平安京跡発掘調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 p.19	1

７．平安宮西院（京都市上京区中務町）

遺跡種別	時代
宮殿	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安												土坑90	i

	文献	掲載鴟尾
i	上村和直 2003「平安宮西院跡，聚楽遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成14年度』京都市文化市民局 p.47	1

8．平安宮太政官（京都市上京区主税町）

遺跡種別	時代
宮殿	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○	○						i：図版46
2	平安						○						排土	ii：図６－23・図版17－23

文献		掲載鴟尾
i	長宗繁一 1979「平安宮太政官跡」『平安京跡発掘調査概要』（京都市埋蔵文化財研究所概要集1978）京都市文化観光局，京都市埋蔵文化財研究所 p.58	1
iii	吉本健吾 1997「平安宮太政官跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成８年度』京都市埋蔵文化財研究所 p.６	2

9．平安宮某所（京都市上京区小山町ほか）

遺跡種別	時代
宮殿	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○	○						i：図版第43，iii
2	平安						○	○					伝出土	ii：第167－168図，iii：36
備考	鴟尾２は縦帯に忍冬文を飾り、緑釉を施す。													

文献		掲載鴟尾
i	梅原末治 1934「岩倉村幡枝の窯址」『栗栖野瓦窯址調査報告』（京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告 第15冊）京都府 p.35	1
ii	大脇潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 pp.78－80	2
iii	宮川禎一ほか 2007「緑釉鴟尾残闕」『藤原道長』京都国立博物館 p.256	1，2

10．平安京右京三条一坊三町〔右京職〕（京都市右京区西ノ京椹尾町）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安							○						i

文献		掲載鴟尾
i	小檜山一良・小松武彦 1996「平安京右京三条一坊１」『平成６年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.93	1

11．平安京右京三条一坊七町〔穀倉院〕（京都市右京区西ノ京小倉町）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安							○					七町南面築地の南側瓦落（15次調査）	i：図17・図版８

文献		掲載鴟尾
i	本弥八郎ほか編 2002『平安京跡右京三条一坊三，六，七町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002－５）京都市埋蔵文化財研究所 p.18	1

12. 平安京右京三条一坊十町

（京都市右京区西ノ京永本町ほか）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安							○					掘立柱建物SB３の柱穴	i

文献		掲載鴟尾
i	大立目一 2002『平安京跡右京三条一坊十, 十五町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001－２）京都市埋蔵文化財研究所 p.11	1

13. 平安京右京三条二坊八町

（京都市右京区西ノ京原町ほか）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安												園池SK8上面出土	i

文献		掲載鴟尾
i	堀内明博・木下保明 1989「平安京右京三条二坊」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.31	1

14. 平安京右京六条一坊十四町

（京都市下京区中堂寺粟田町）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○	○					川跡SD34	i ：図102

文献		掲載鴟尾
i	平尾政幸ほか編 2002『平安京跡右京六条一坊，左京六条一坊跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002－６）京都市埋蔵文化財研究所 p.74	1

15. 平安京右京六条三坊七町

（京都市右京区西院追分町）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安							○					流路 SR4200埋土最上層出土	i ：図版第23

文献		掲載鴟尾
i	堀内明博 2004「瓦類」堀内明博ほか編『平安京右京六条三坊』（平安京跡研究調査報告 第20輯）古代學協會 p.51	1

16. 平安京右京七条一坊二町

（京都市下京区朱雀堂ノ口町ほか）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1													二町南東側の朱雀大路西側溝及び路面上	i
備考	本資料については、南側三、四町の西鴻臚館所用の可能性あり。													

文献	掲載鴟尾
i　平尾政幸・本弥八郎 1987「平安京七条一坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.32	1

17. 平安京右京七条一坊三, 四町〔西鴻臚館〕

（京都市下京区朱雀堂ノ口町ほか）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安			○			○	○						i

文献	掲載鴟尾
i　鈴木久男 1987「平安京右京七条一坊の軒瓦について」『長岡京古瓦聚成』本文編（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集）向日市教育委員会 p.208	1

18. 平安京左京二条二坊九町〔高陽院〕

（京都市中京区丸太町ほか）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安					○								i，ii：図版第316－1052
2	平安						○	○						i，ii：図版第316－1053
3	平安						○	○						i，ii：図版第316－1055

文献	掲載鴟尾
i　平尾政幸・辻純一 1982「左京二条二坊（２）高陽院跡」『平安京跡発掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局，京都市埋蔵文化財研究所 p.13	1－3
ii　林屋辰三郎編 1983『史料京都の歴史』第２巻 考古　京都市 p.104	1－3

19. 平安京左京四条一坊十三町

（京都市中京区壬生坊城町）

遺跡種別	時代
都城	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○						SG158出土	i：図15

文献	掲載鴟尾
i　伊藤潔・近藤章子編 2006『平安京跡左京四条一坊十三町跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006－10）京都市埋蔵文化財研究所 p.16	1

20. 東寺（京都市南区東寺町）

遺跡種別	時代
寺院	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安			○									表採	i：第８図
2	平安													ii：図版40－400
3	平安			△										ii：図版40－401

4	平安												ii：図版40－402
備考	鴟尾１は胴部に鳳凰文の浮彫を有す。鴟尾２は剣頭文が施され、鴟尾３は唐草文の浮彫を有す。鴟尾４には緑釉が施される。												

文献		掲載鴟尾
i	南孝雄 1996「東寺」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所 pp.20－21	1
ii	高橋潔 2002「瓦類」吉崎伸ほか編『東寺（教王護国寺）旧境内』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001－７）京都市埋蔵文化財研究所 p.23	2－4

21. 長岡宮（向日市鶏冠井町ほか）

遺跡種別	時代
宮殿	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良							○					朝堂院西方官衙（宮第２次）	vii：表１，viii：付表４
2	奈良							○					朝堂院（宮第３次）	vii：(18)，viii：(18)
3	奈良						○						宮第14次	vii：表１，viii：付表４
4	奈良						○						朝堂院（宮第19次）	vii：表1，viii：付表５
5	奈良						○	○					朝堂院南方官衙（宮第74次）	vii：(30)，viii：(30)
6	奈良							○					朝堂院西方官衙回廊ピットNo.４，６（宮第84次）	vii：(4) (5)，viii：(4) (5)，xii
7	奈良						○	○					朝堂院南方官衙石溜りSX9003（宮第90次）	i，vii：(15)，viii：(15)
8	奈良			○				○					朝堂院南方官衙（宮第96次）	ii，vii：(14)，viii：(14)
9	奈良			△									北辺官衙　表採	vii：表１，viii：付表４
10	奈良		○	○				○					第二次内裏西面柵列SA1010ピット２（宮第110次）	iii：第27図・図版33，vii：(6) (10) (27) (34)，viii：(6) (10) (27) (36)－(38)
11	奈良												朝堂院西部外郭包含層（宮第115次）	ix
12	奈良							○					朝堂院西面築地西側排水溝SD1613下層（宮第116次）	iv：第23図，vii：表１，viii：付表４
13	奈良			○			○	○					朝堂院西方官衙溝 SD14001（宮第140，150次）	v：第６図・図版第４，vi：第27－28図，vii，viii
14	奈良							○					朝堂院西方官衙井戸 SE17805（宮第178次）	viii：(32)，x：第53図・図版第30
15	奈良		○				○						内裏西外郭（宮第331次）	xiii

16	奈良		○	△								朝堂院東第二堂（宮第378次）	xi
備考	長岡宮出土鴟尾については，各出土資料が同一型式か判断できないものが多いため、基本的に出土地点ごと（＝報告ごと）に鴟尾１，２，３…とした。ただし、鴟尾10は２型式に細分可能と報告される。また、鴟尾12は調査報告（文献iv）で磚と報告されているものがこれに当たると思われる。												

文献		掲載鴟尾
i	山中章ほか 1980「長岡宮跡第90，96次（７AN15E－Ⅲ，Ⅴ地区）発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第６集』向日市教育委員会，長岡京跡発掘調査研究所 p.29	7
ii	石尾政信 1981「長岡宮跡第96次（７AN15E－５地区）～朝堂院南方官衙～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第７集』向日市教育委員会 p.11	8
iii	山中章ほか 1982「長岡宮跡第110次（７AN９J地区）～内裏外郭築地～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第８集』向日市教育委員会 pp.44，53－54	10
iv	國下多美樹ほか 1983「長岡宮跡第116次（７AN15H地区）～朝堂院西第四堂～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第10集』向日市教育委員会 p.36	12
v	増田孝彦 1984「長岡宮跡第140次発掘調査概要（７AN15J地区）」『京都府遺跡調査概報 第11冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.８－10	13
vi	渡辺博 1985「長岡宮跡第150次（７AN15M地区）～朝堂院西方官衙～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第17集』向日市教育委員会 pp.35－38	13
vii	渡辺博 1986「長岡京出土鴟尾資料集成」中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』同朋社出版 pp.307－320	1－10，12，13
viii	渡辺博・山中章 1987「鴟尾」『長岡京古瓦聚成』（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集）向日市教育委員会　本文編 pp.98－103，図版編 第48－54図，図版42－43	1－10，12－14
ix	山中章 1987「宮域」『長岡京古瓦聚成』（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集）向日市教育委員会　本文編 p.15	11
x	渡辺博 1988「長岡宮跡第178次（７AN19E地区）～朝堂院西方官衙～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第22集』向日市教育委員会 p.69	14
xi	松崎俊郎 2000「１　長岡宮跡第378次（７ANEYT－７地区）～朝堂院朝庭、乙訓郡衙跡～発掘調査報告」國下多美樹編『向日市埋蔵文化財調査報告書　第50集』向日市埋蔵文化財センター，向日市教育委員会 pp.２－６	16
xii	百瀬正恒 2003「２　長岡宮跡第65，84次（７AN19C－１，２地区）～朝堂院西方官衙～発掘調査報告」山中章，國下多美樹編『長岡宮跡』（長岡京跡発掘調査研究所調査報告書）長岡京跡発掘調査研究所，向日市埋蔵文化財センター pp.51－52	6
xiii	國下多美樹 2006「１　長岡宮跡第331次（７ANEHJ－２地区）～第二次内裏西外郭～発掘調査報告」梅本康弘編『長岡宮跡第二次内裏「東宮」西外郭　長岡京跡左京三条条間北小路』（向日市埋蔵文化財調査報告書 第74集）向日市教育委員会 p.69	15

22. 長岡京（向日市，長岡京市，京都市，大山崎町）

遺跡種別	時代
都城	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良						○	○					左京二条大路北側溝SD12026，同南側溝SD12028，東二坊第一小路東側溝SD12031，同西側溝SD12032（左京第120次調査）	i：第136図・図版第56，ii：(9)(10)(17)(19)，iii：(9)(10)(17)(19)
2	奈良						○						左京二条二坊十五町（左京第162次調査）	ii，iii，iv：第105図，v
3	奈良		○	○									二条大路南側溝（左京第387次調査）	vi

4	奈良						○						三条条間北小路と東二坊坊間西小路交差点付近（左京第425次調査）	vii
備考	鴟尾４は縦帯内の連珠文部。												

文献		掲載鴟尾
i	秋山浩三ほか 1986「長岡京跡左京第120次（７ANFAN－２地区）～二条大路，東二坊第一小路，東二坊坊間小路交差点～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書第18集』向日市教育委員会 pp.185－186	1
ii	渡辺博 1986「長岡京出土鴟尾資料集成」中山修一先生古稀記念事業会編『長岡京古文化論叢』同朋社出版 pp.307－320	1，2
iii	渡辺博・山中章 1987「鴟尾」『長岡京古瓦聚成』（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集）本文編　向日市教育委員会 pp.98－103	1，2
iv	渡辺博・山中章 1987「鴟尾」『長岡京古瓦聚成』（向日市埋蔵文化財調査報告書第20集）図版編　向日市教育委員会　第48－54図，図版42－43	2
v	渡辺博ほか 1989「長岡京跡左京第162次（７ANEKD地区）～左京二条二坊十五町，二条条間大路，東二坊大路交差点～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書 第27集』向日市教育委員会 p.202	2
vi	中嶋信親 1986「長岡京跡左京第387次（７ANEMR－３地区）～二条大路，左京三条三坊八町，鶏冠井清水遺跡～発掘調査報告」中塚良編『長岡京跡，森本遺跡，野田遺跡』（向日市埋蔵文化財調査報告書 第65集（第１分冊））向日市埋蔵文化財センター pp.73－74	3
vii	中嶋信親 2006「長岡京跡左京第425次（７ANEKS－３地区）～三条条間北小路、東二坊坊間西小路、左京三条二坊一，二町～発掘調査報告」梅本康弘編『長岡京跡第二次内裏「東宮」西外郭　長岡京跡左京三条条間北小路』（向日市埋蔵文化財調査報告書第74集）向日市埋蔵文化財センター pp.102－103	4

23. 上ノ庄田瓦窯（京都市北区西賀茂上庄田町）

遺跡種別	時代
瓦窯	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安			○			○	○					表採	i：図版16－18・92・93，iii：第170図
2	平安						○	○					工房排水溝SD１	ii：図版10
3	平安			○			○	○	○				１，３号窯構築材	iv：図60
備考	鴟尾２は胴部に鳳凰浮彫を持つものと持たないものが、大きさに大、中、小があり、それぞれ高さ180、120、90cmと推定。													

文献		掲載鴟尾
i	原山充志 1996「上ノ庄田瓦窯跡」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所 pp.14－15，115－116	1
ii	南孝雄 1998「上ノ庄田瓦窯跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 p.８	2
iii	大脇潔 1999「奈良，平安時代の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 pp.78－80	1
iv	南孝雄 2003「上ノ庄田瓦窯跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.63	3

24. 鎮守庵瓦窯（京都市北区西賀茂鎮守庵町）

遺跡種別	時代
瓦窯	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○						1号窯内，2号窯灰原	i：写真第42・43
2	平安												表採	ii
3	平安												土坑（鴟尾を多量に廃棄）	iii
備考	鴟尾1の破片の大多数は1号窯出土。													

文献		掲載鴟尾
i	吉本堯俊・井上満郎・佐野修 1972「西賀茂鎮守庵瓦窯跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告1971』京都市文化観光局文化財保護課，鳥羽離宮跡調査研究所 p.18	1
ii	吉村正親 1996「西賀茂瓦窯跡（鎮守庵瓦窯跡，角社瓦窯跡）」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所 p.15	2
iii	上村和直編 2012「昭和54年度の試掘，立会調査概要」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.196	3

25. 角社瓦窯（京都市北区西賀茂角社町）

遺跡種別	時代
瓦窯	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安					○	○	○					東群表採，東群Ⅰ号窯付近	i：第17図・図版第28・35－37，ii：701・702・704，iii：第15－17図
2	平安						○	○					表採	i：図版第28
3	平安			○									表採	i：図版第37
4	平安												表採	iv
5	平安			△									表採	v：図44－22
備考	鴟尾1の一破片と、鴟尾2はしばしば小野瓦窯出土と誤って報告される。小野瓦窯の項参照。鴟尾2は宝相華唐草文を飾る。鴟尾3は鳳凰文の一部と見られる浮彫を有する。													

文献		掲載鴟尾
i	梅原末治 1934「西賀茂の窯址」『栗栖野瓦窯址調査報告』（京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告 第15冊）京都府 pp.40，46－47	1，2，3
ii	寺島孝一 1977「701 鴟尾」「702 鴟尾」『平安京古瓦図録』平安博物館　解説編　p.432，図版編 pp.184－185	1
iii	近藤喬一 1978『平安京跡研究調査報告 第4輯　西賀茂瓦窯跡』古代學協會 pp.35－36	1
iv	吉村正親 1996「西賀茂瓦窯跡（鎮守庵瓦窯跡，角社瓦窯跡」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所 p.16	4
v	吉崎伸・鈴木久史 2012「角社瓦窯跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局 pp.55，60	5

26. 西賀茂某窯（京都市北区西賀茂角社町）

遺跡種別	時代
瓦窯	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安					○	○	○					表採	i：144－146
2	平安						○	○					表採	ii：図版第217，iii：図版第28，iv
備考	鴟尾１はどの瓦窯での採集か不明。鴟尾２は縦帯に宝相華唐草文浮彫を有す。伝小野瓦窯（高野廃寺）出土とされ、破片２点があるが、この破片について文献iiiには、西賀茂角社瓦窯の出土であって高野廃寺出土とするは文献ii の誤りである旨が、入手の経緯を含めて明記されている。													

	文献	掲載鴟尾
i	廣田長三郎 1989『古瓦図考』ミネルヴァ書房 p.41	1
ii	石田茂作（編）1930『古瓦圖鑑』大塚工藝社 p.46	2
iii	梅原末治 1934「西賀茂の窯址」『栗栖野瓦窯址調査報告』（京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告 第15冊）京都府 pp.40，46	2
iv	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（42　小野瓦窯（伝高野廃寺）pp.31－32，99	2

27. 円通寺瓦窯〔幡枝西窯，福枝西瓦窯〕（京都市左京区岩倉幡枝町）

遺跡種別	時代
瓦窯	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安			○		○	○	○					表採	i，ii：図版13・図版90，iii：第169図
備考	縦帯には宝相華唐草文浮彫を有す。													

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（41　史跡　栗栖野瓦窯跡群）pp.32，98	1
ii	津々池惣一・能芝妙子 1996「幡枝西窯跡（円通寺窯跡）」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所　pp.11－12，112－113	1
iii	大脇潔 1999「奈良，平安時代の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 pp.78－80	1

28. 栗栖野瓦窯〔福枝瓦窯〕（京都市左京区岩倉幡枝町）

遺跡種別	時代
瓦窯	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○						東群表採，東群Ⅰ号窯付近	i：294
2	平安			○										ii
3	平安						○	○						iii：図45・図版43
4	平安						○	○					21－23号窯ほか	iii：図45・図版43，iv
5	平安						○						7－11号窯灰原	v：図版20
備考	鴟尾２は鈴をくわえた鳳凰の浮彫を有する。鴟尾４は緑釉が施される。													

文献		掲載鴟尾
i	木村捷三郎編 1980『坂東善平収蔵品目録』京都市埋蔵文化財研究所 pp.45，61	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』(41　史跡　栗栖野瓦窯跡群) pp.4，29，98	2
iii	吉本健吾 1992「栗栖野瓦窯跡」『京都市内遺跡立会調査概報 平成３年度』京都市文化観光局，京都市埋蔵文化財研究所 p.58	3，4
iv	本弥八郎 1993「栗栖野瓦窯跡の調査（その１）」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報 平成４年度』京都市文化観光局，京都市埋蔵文化財研究所 p.14	4
v	吉村正親 1993「栗栖野瓦窯跡の調査（その２）」『栗栖野跡発掘調査概報 平成４年度』京都市文化観光局，京都市埋蔵文化財研究所	5

29. 南ノ庄田瓦窯（京都市左京区岩倉幡枝町）

遺跡種別	時代
瓦窯	平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○						表採	i
2	平安			○			○							ii：図15・写真10
備考	鴟尾２は古墳の北東上部に存在したとされる瓦窯からもたらされた可能性が高い。													

文献		掲載鴟尾
i	津々池惣一・能芝妙子 1996「南庄田瓦窯跡」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所　p.12	1
ii	網伸也 1993「その他の遺物」『岩倉幡枝２号墳－木棺直葬墓の調査－』(京都市埋蔵文化財研究所調査報告第12冊) 京都市埋蔵文化財研究所　pp.26－27	2

30. 木野墓窯（京都市左京区岩倉幡枝町）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○					表採	i：図版14・91

文献		掲載鴟尾
i	網伸也 1996「木野墓窯跡」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所 p.13	1

31. 岩倉幡枝某窯（京都市左京区岩倉幡枝町）

遺跡種別	時代
瓦窯	飛鳥－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○	○					表採	i：図版第20
2	飛鳥							○					落ち込み１	ii：図102－47
3	平安			○									落ち込み１	ii：図102－46
備考	栗栖野、円通寺、南庄田のいずれかの瓦窯出土。													

文献		掲載鴟尾
i	梅原末治 1934「西賀茂の窯址」『栗栖野瓦窯址調査報告』(京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告 第15冊) 京都府 pp.34－35	1
ii	上村和直 2008「妙満寺窯跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 p.103	2，3

32. 北白川廃寺（京都市左京区北白川大堂町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○						i ：図版20
2	白鳳						○	○					塔基壇版築土内	ii

文献		掲載鴟尾
i	梅原末治 1938「北白川廃寺阯」『京都府史蹟名勝天然紀年物調査報告 第19冊』京都府 p.28	1
ii	吉村正親 1996「北白川廃寺塔跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成７年度』京都市文化市民局，京都市埋蔵文化財研究所 p.７	2

33. 北野廃寺（京都市北区上白梅町ほか）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1								○					推定寺域北辺	i ：図６， ii

文献		掲載鴟尾
i	鈴木久男 1987「第10次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局，京都市埋蔵文化財研究所 pp.５－７	1
ii	吉崎伸・鈴木久男 1989「北野廃寺１」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.85	1

34. 北野廃寺瓦窯（京都市北区下白梅町）

遺跡種別	時代
瓦窯	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A		○	○		○							i， ii
2	白鳳	B		○										i， ii

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（34　北野廃寺）pp.90－91	1，2
ii	上村和直編 2012「北野廃寺２」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.164	1，2

35. 広隆寺（京都市右京区太秦蜂岡町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1														i
2	飛鳥												表採	iii ：図版205・207
3	白鳳	A					○	○					表採	ii ：図版217，iv
4	平安	B					○	○						iv
備考	鴟尾１は朱彩あり。													

文献		掲載鴟尾
i	梅原末治 1923「太秦廣隆寺」『京都府史蹟勝地調査會報告 第５冊』京都府 p.43	1
ii	石田茂作編 1930『古瓦圖鑑』大塚工藝社 p.46	3
iii	石田茂作 1936「廣隆寺」『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉賛会 p.394	2
iv	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（33　広隆寺）pp.90－91	3，4

36. 樫原廃寺瓦窯（京都市西京区樫原内垣外町）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○		○				表採	i，ii：巻頭図版第８・図版第20
備考	鴟尾１は腹部に複弁蓮華文の浮彫を有する。													

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（35　史跡 樫原廃寺）pp.91－92	1
ii	梅本康広編 2001『宝菩提院廃寺瓦窯跡』（向日市埋蔵文化財調査報告書 第48集）向日市埋蔵文化財センター	1

37. 大宅廃寺（京都市山科区大宅鳥井脇町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○					講堂（中央建物）	i：第18図，ii
2	白鳳						○						中心伽藍南縁付近	iii：図６
備考	鴟尾１は縦帯に押捺された蓮華文が大阪，四天王寺例と同笵で、これに先行する（文献ｉ）。鴟尾２は軒丸瓦状の瓦当文様に似た唐草文を笵押しする。													

文献		掲載鴟尾
i	有光教一・坪井清足 1959「大宅廃寺の発掘調査概報」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』京都府教育委員会 p.６	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（36　大宅廃寺）pp.20，92－93	1
iii	平方幸雄・菅田薫 1988「大宅廃寺」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.108	2

38. 法琳寺（京都市伏見区小栗栖丸山）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳				○		○	○					表採	i：93－95，ii：1034，iii：236－238
2	白鳳						○	○					表採	ii：1033
備考	鴟尾１には縦帯にヘラ描きの渦文を飾る。朱彩の痕跡もあり。													

文献		掲載鴟尾
i	京都府立山城郷土資料館 1983『山城の古瓦』p.12	1
ii	近藤智子 1996「法琳寺跡（同瓦窯跡，小栗栖瓦窯跡を含む）」『木村捷三郎収集瓦図録』京都市埋蔵文化財研究所 pp.180－181	1，2
iii	星野猷二 2000『鹽澤家藏瓦図録』伏見城研究会 p.37	1

39. 御香宮廃寺（京都市伏見区御香宮門前町ほか）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1														i

文献		掲載鴟尾
i	前田義明 1999「伏見城跡，御香宮廃寺」『平成９年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 p.188	1

40. 桑寺廃寺（亀岡市千代川町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	平安						○						包含層	i ：第37図－15・図版14－15

文献		掲載鴟尾
i	水谷寿克・引原茂治・田代弘・森下衛 1985「千代川遺跡第６，７次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第14冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター p.52	1

41. 宝菩提院廃寺瓦窯（向日市寺戸町）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○					溝SD58110Ａ（灰原）	i ：第21図・図版第11－１

文献		掲載鴟尾
i	新倉香・梅本康広 2001「瓦類」梅本康広編『宝菩提院廃寺瓦窯跡』（向日市埋蔵文化財調査報告書 第48集）向日市埋蔵文化財センター p.34	1

42. 宝菩提院廃寺（向日市寺戸町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○									中世包含層	i ：第47図

文献		掲載鴟尾
i	梅本康広 2005「瓦塼類」梅本康広・松崎俊郎編『宝菩提院廃寺湯屋跡』（向日市埋蔵文化財調査報告書 第64集（第２分冊））向日市埋蔵文化財センター p.99	1

43. 山崎廃寺〔山崎院〕（大山崎町字大山崎）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1				○					○				1－F区	i：第27図

文献		掲載鴟尾
i	寺嶋千春 2003「土器類，その他の遺物」寺嶋千春編『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第25集　大山崎町教育委員会 pp.40－41	1

44. 樟葉・平野山瓦窯（八幡市橋本平野山）

遺跡種別	時代
瓦窯	飛鳥－白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1				○			○	○	○				3，4号窯埋土上面の包含層，及び周辺包含層，4号窯床面，5号窯，6号窯床面	i：図版第11・33
備考	1号窯の調査を枚方市がおこなっており，大阪府の集成に別に項を設けた。													

文献		掲載鴟尾
i	奥村清一郎編 1985『平野山瓦窯跡発掘調査概報』pp.12－16	1

45. 志水廃寺（八幡市八幡月夜田）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1								○					1－F区	i：第12図，ii

文献		掲載鴟尾
i	江谷寛 1976『志水廃寺跡発掘調査報告』八幡市教育委員会　pp.16－17	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（37　志水廃寺）p.93	1

46. 美濃山廃寺（八幡市美濃山）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥，白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥－白鳳			○			○	○	○		35.0	25.2	落ち込みSX20	i
2	飛鳥－白鳳						○				12.7	10.6	落ち込みSX20周辺	i
3	飛鳥－白鳳						○				11.8	9.9	堆積層SX486	i
4	飛鳥－白鳳							○			16.6	17.4	瓦溜まりSX21	i
備考	1～3は同一個体の可能性あり、縦帯内に連珠文1は鰭が逆段。4は鰭が正段。													

文献		掲載鴟尾
i	京都府埋蔵文化財調査研究センター 2012『京都府埋蔵文化財情報』第117号 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013『京都府遺跡調査報告集』第154冊	1－4

47. 岡本廃寺（宇治市五ヶ庄）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1				○			○	○	○					i：第41図・図版第34，ii

文献		掲載鴟尾
i	杉本宏ほか 1987「岡本廃寺，岡本遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会 p.85	1
ii	大脇潔 1999「百済様式の展開」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 p.56	1

48. 里廃寺（相楽郡精華町里）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1							○						表採	i
備考	鴟尾1は唐草文の浮彫を有す。													

文献		掲載鴟尾
i	星野猷二 2004「里廃寺（法光寺跡）」『器瓦録想』伏見城研究会 pp.116－117	1

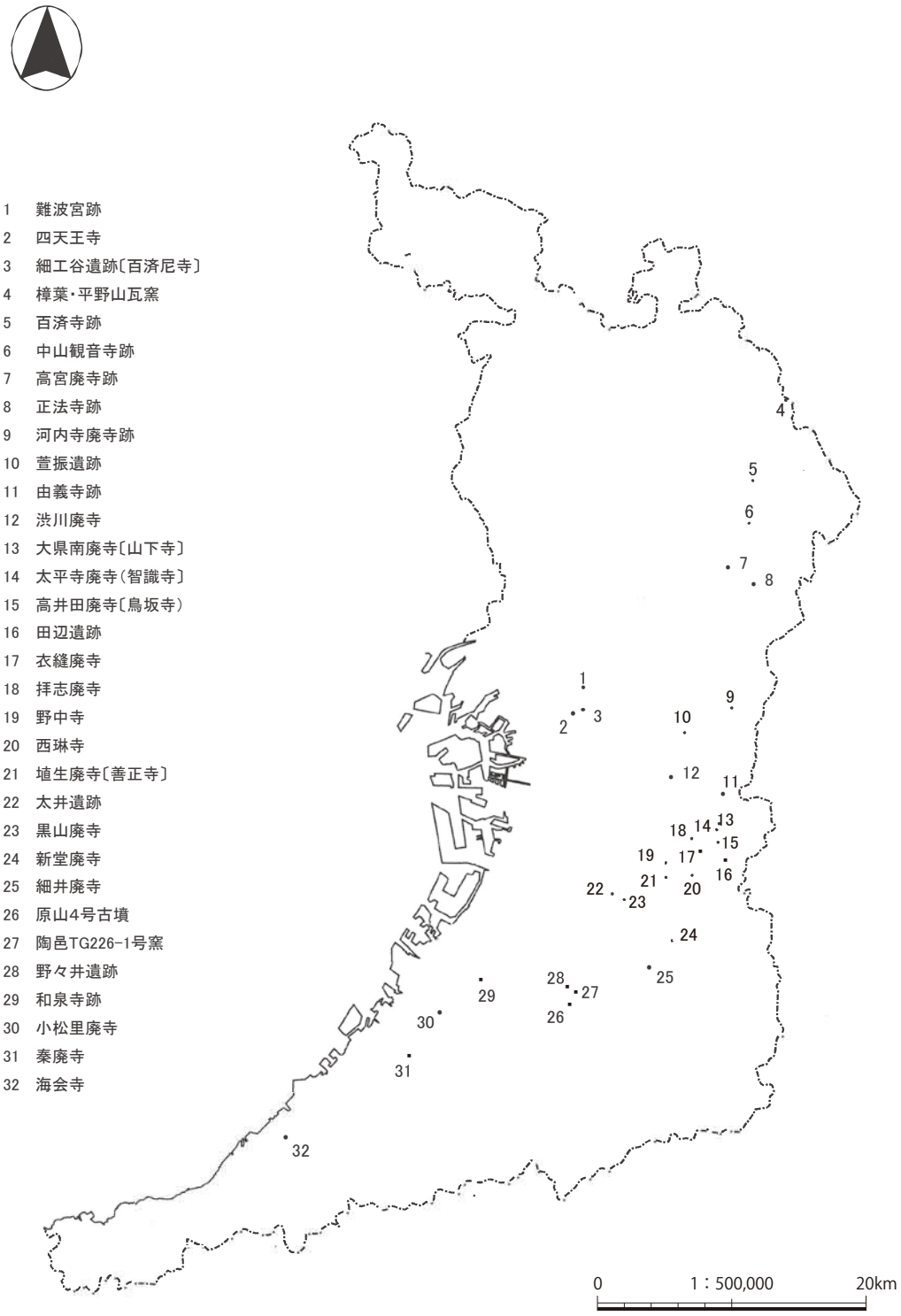
49. 高麗寺（木津川市山城町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A	○	○			○	○					金堂周辺，講堂北側溝SD115，南門瓦落	i：第107－108図・図版第67，ii：第150図，iii
2		B						○	○				講堂北側溝SD115	i：第108図
3		X						○					南辺築地SA301北側瓦堆積層	i：第109図
4							○	○					南門	iii：巻頭図版

文献		掲載鴟尾
i	中島正1989「遺物」中島正編『史跡 高麗寺跡』（京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第７集）山城町教育委員会 pp.106－110	1－3
ii	大脇潔 1999「初唐様式の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 p.66	1
iii	中島正 2007『史跡高麗寺跡第７次発掘調査概報』（京都府山城町埋蔵文化財調査報告書第38集）山城町教育委員会 p.5	1，4

14　大阪府



大阪府の鴟尾出土遺跡

1．難波宮跡（大阪市中央区法円坂）

遺跡種別	時代
都城	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥	A		○		○		○					宮内下層遺跡	iii
2	白鳳	B		○	○		○	○	○				前期難波宮	ii
3	奈良	C					○	○					後期難波宮	i
4	奈良	D							○				後期難波宮、朝堂院西第三堂	iv
備考	鴟尾２－ミニチュア品。　鴟尾４－拒鵲鴟尾。													

	文献	掲載鴟尾
i	山根徳太郎 1956「難波朝堂の発掘」山根徳太郎編『難波宮址の研究』難波宮址研究会 p.37	3
ii	難波宮址顕彰会 1969「第30次発掘調査概報」『昭和43年度（第30次） 難波宮跡調査報告書』p.５	2
iii	八木久栄 1981「第85次発掘調査概報」（４．宮域西辺部の調査）『難波宮跡研究調査年報　1975～1979，６』大阪市文化財協会 p.83	1
iv	中尾芳治 1995「難波宮出土の「拒鵲」鴟尾について」［補遺　出土資料］『難波宮の研究』吉川弘文館 pp.265－292	4

2．四天王寺（大阪市天王寺区四天王寺）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥～現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥	A		○				○					講堂	ii
2	飛鳥	B		○			○	○					中門	ii
3	白鳳	C	○	○	○	○	○	○	○	68.0	110.5	127.2	講堂	i，ii
4	飛鳥	D		○	○		○						講堂	ii
5	白鳳	E		○									講堂	i，ii
6	白鳳	F	○	○	○		○	○					中門	iii
備考	Eは蓮華文帯													

	文献	掲載鴟尾
i	藤沢一夫 1967「第四章　遺物　第一節 風鐸，鴟尾」『四天王寺』（埋蔵文化財発掘調査報告第６）文化財保護委員会記念物課 pp.212－217	3，5
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（22　史跡 四天王寺）pp.76－78	1－5
iii	谷崎仁美・緒方侑美 2018「七世紀後半の寺院造営」「コラム④四天王寺の鴟尾」平成30年春期名宝展 企画展『地より湧き出した難波の大伽藍－四天王寺の考古学－』四天王寺勧学部 pp.16－17，21	6

3．細工谷遺跡（大阪市天王寺区細工谷）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳～平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	ⅠA		○				○						i
2	白鳳	ⅡA		○			○	○	○					i
備考	ⅠA寒風窯系。ⅡA打越瓦窯系。													

文献		掲載鴟尾
i	八木久栄1999「4　道具瓦」『大阪市天王寺区 細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』大阪市文化財協会 pp.106 －107	1，2

4．楠葉・平野山瓦窯（枚方市北楠葉町，八幡市橋本平野山）

遺跡種別	時代
瓦窯	飛鳥

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥	A		○			○	○					1号窯	i
2	飛鳥	B						○					1号窯	i
3	飛鳥	C		○			○	○					1号窯	i
4	飛鳥	D						○	○				1号窯	i
5	飛鳥	E		○			○	○					1号窯	i
備考	型式分類は文献 i による。鴟尾２は四天王寺の鴟尾２（中門所用）と同一型式。第６号窯でも鴟尾が出土したが、報告は京都府八幡市による（文献iii）ため、京都府の集成に含めた。													

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（23　楠葉東遺跡第１瓦窯跡）pp.78－80	1－5
ii	瀬川芳則 1980「河内楠葉の飛鳥瓦窯跡を持つ遺跡 大阪府枚方市楠葉東遺跡」（文化財レポート）『日本歴史』第388号 日本歴史学会 pp.87－92	3
iii	瀬川芳則 1986「１．楠葉，平野山瓦窯群」枚方市史編纂委員会編『枚方市史』第十二巻 枚方市 pp.114－125	3，5

5．百済寺跡（枚方市中宮西之町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳				○								北西回廊周辺出土	i，iv
2	白鳳												東方建物周辺	i，iv
3	白鳳			○			○		○				西塔，西南回廊周辺	ii
4	白鳳							○					南大門南方（攪乱層）	iii
5	白鳳							○					金堂周辺出土	iv
6	白鳳												東門周辺出土	iv
7	白鳳			○									外郭南面築地築地基底部	iv
備考	鴟尾１，２は文献 i に出土のみ記載され詳細不明。６は鰭もしくは基底部下端か。 １～７は一個体と考えられる。													

文献		掲載鴟尾
i	田代克己 1967「C 道具瓦」『特別史跡 百済寺跡公園』枚方市 p.11	1，2
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（30　特別史跡 百済寺）pp.87－88	3
iii	森井啓次 1996「最近の発掘調査から」『ひらかた文化財だより』p.1	4
iv	狩野美那子 2015「第５章　第３節　瓦塼類」『枚方市文化財調査報告第80集　特別史跡　百済寺跡－本文編－』枚方市教育委員会 p.288	1，2，5－7

6．中山観音寺跡（枚方市香里ヶ丘）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－中世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○	○					i，ii

文献	掲載鴟尾
i 桑原武志 1976「中山観音寺跡」枚方市文化財研究調査会編『枚方市における遺跡調査概況 1968～1976年』枚方市文化財研究調査会 pp.47－49	1
ii 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（29　中山観音寺）pp.86－87	1

7．高宮廃寺跡（寝屋川市高宮）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良、室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○					○					中門周辺	i－iii

文献	掲載鴟尾
i 丸山香代 2015「出土遺物について」『国史跡高宮廃寺跡　内容確認発掘調査概要Ⅱ』寝屋川市教育委員会 p.8	1
ii 丸山香代 2016「出土遺物について」『国史跡高宮廃寺跡　内容確認発掘調査概要Ⅲ』寝屋川市教育委員会 p.6	1
iii 丸山香代 2018「第4章　遺物　6　道具瓦」『寝屋川市文化財資料30 国史跡高宮廃寺跡発掘調査報告書』寝屋川市教育委員会 p.69，図版45	1

8．正法寺跡（四條畷市中野本町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○					瓦だまり	i

文献	掲載鴟尾
i 四條畷市教育委員会 2002『正法寺跡発掘調査概要報告書－四條畷市清滝所在－』p.19 図版14－10	1
ii 四條畷市教育委員会 2006「四條畷にも、お寺が建てられた」『わたしたちの四條畷』	1

9．河内寺廃寺跡（東大阪市河内町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					表採	i，ii

文献	掲載鴟尾
i 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（30　河内廃寺）p.88	1
ii 才原金弘 2007「Ⅴ　出土遺物　（2）寺創建～廃絶時の遺物」『河内寺廃寺発掘調査報告書』東大阪市教育委員会 pp.45，48	1

10．萱振遺跡（八尾市萱振町周辺）

遺跡種別	時代
寺院	弥生－室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良						○						中世の井戸（SE8029）	i
備考	SE8029は奈良、平安時代の瓦片を積み上げた井戸。隣接する西郡廃寺の瓦を利用したと考えられる。													

文献	掲載鴟尾
i　井西貴子・広瀬雅信1992「第11項　中世の遺物」広瀬雅信（編）『萱振遺跡』本文編（大阪府文化財調査報告第39輯）大阪府教育員会 pp.289－290	1

11. 由義寺跡（八尾市東弓削）

遺跡種別	時代
寺院	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良								○				塔跡	i
備考	2019年６月29日「摂河泉古代寺院研究会　由義寺跡出土瓦見学会」で発表。													

文献	掲載鴟尾
i　樋口薫 2019「八尾市・由義寺出土瓦の検討」第88回摂河泉古代寺院研究会（口頭発表）	1

12. 渋川廃寺（八尾市渋川町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○	○		○	○	○				西大溝	i

文献	掲載鴟尾
i　金親満夫 2004「附章　渋川廃寺第１次調査の出土遺物」坪井真一，金親満夫（編）『渋川廃寺＜第２次調査，第３次調査＞』（八尾市文化財調査研究会報告79）八尾市文化財調査研究会 pp.153－156	1

13. 大県南廃寺（山下寺）（柏原市大県）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○						包含層	i

文献	掲載鴟尾
i　花田勝広 1985「３　遺物」『大県南遺跡－山下寺跡寺域の調査』柏原市教育委員会 p.59	1

14. 太平寺廃寺（智識寺）（柏原市太平寺）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	1		○			○						不明	i－iv
備考	縦帯に葡萄唐草文。													

文献	掲載鴟尾
i　帝室博物館 1937「鴟尾」『天平地寶』 p.58	1
ii　稲垣晋也「鴟尾」『飛鳥，白鳳の古瓦』 奈良国立博物館編 p.227	1
iii　大脇潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 p.72	1
iv　奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』(32　太平寺廃寺（智識寺跡）) pp.88－89	1

15. 高井田廃寺（鳥坂寺）（柏原市高井田）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A	○	○	○	○	○	○	○	47.0	90.0	(135)		i－iv，iv－x
2	白鳳	B					○	○	○					vii，viii
3	白鳳	C					○	○	○				金堂基壇外出土、金堂所用	v，vii，viii
4	白鳳	C´					○	○					金堂	viii
5	白鳳	D					○	○	○				創建講堂	v，vii，viii
6	白鳳	D´							○				講堂	viii
7	白鳳	E		○									金堂	viii
備考	C´はCと縦帯内郭の段が逆、D´はDより内面縄叩きが目立つ。Eは百済様式。													

	文献	掲載鴟尾
i	大阪朝日 1929「奈良朝盛期の瓦鴟尾を発掘す」「新聞初見」『考古学學會雑誌』第19巻第６号考古學會 pp.411－412	1
ii	池田谷久吉 1930「鳥坂寺址出土発掘鴟尾」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯　大阪府 pp.145－151	1
iii	池田谷久吉 1932「鳥坂寺址出土発掘鴟尾に就いて」『大阪府の史蹟と名勝』１史蹟名勝天然記念物保存協会大阪支部	1
iv	坪井清足 1962「Ｈ　鴟尾」『河内高井田廃寺発掘調査概要』大阪府教育委員会 pp.９－10	1
v	河原純之 1968「四、発掘の遺物」『河内高井田，鳥坂寺跡』（大阪府文化財調査報告第19輯）大阪府教育委員会 p.33	３，５
vi	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（25　高井田廃寺（鳥坂寺））pp.81－82	1
vii	大脇潔2002「大阪府柏原市鳥坂寺（高井田廃寺）出土鴟尾の考古学的調査」『瓦塔，鴟尾』（東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書）東京国立博物館 pp.27－48	１，２，３，５
viii	桑野一幸編 2011『鳥坂寺跡発掘調査報告書』柏原市教育委員会 pp.98－99	１－７
ix	大脇潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 pp.67，73	1
x	稲垣晋也 1970「鴟尾」『飛鳥，白鳳の古瓦』奈良国立博物館編　pp.225，220－221	1

16. 田辺遺跡（柏原市田辺）

遺跡種別	時代
集落	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						i

	文献	掲載鴟尾
i	北野重 2002【瓦類】『田辺遺跡－国分中学校プール建設に伴う　遺物編』柏原市教育委員会	1

17. 衣縫廃寺（藤井寺市惣社）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥							○					寺域北側落ちこみ	－

文献		掲載鴟尾
i	未報告。天野末喜1998『国府遺跡』藤井寺市教育委員会	－

18. 拝志廃寺（藤井寺市林）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					包含層	i
備考	鰭にコンパス文。													

文献		掲載鴟尾
i	上田睦 1987「３　拝志廃寺」上田睦編『藤井寺市及びその周辺の古代寺院』（下）（藤井寺市の遺跡ガイドブックNo.３）藤井寺市教育委員会 p.39	1

19. 野中寺（羽曳野市野々上）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥		○					○					塔跡	i
2	白鳳				○	○		○					講堂跡？	ii，iii

文献		掲載鴟尾
i	内藤俊哉 1986「遺物」森田和伸，加藤勝己編『野中寺－塔跡発掘調査報告－』羽曳野市教育委員会 pp.66－68	1
ii	内藤俊哉 1988「遺物」（「野中寺」）笠井敏光ほか編『古市遺跡群Ⅸ』（羽曳野市埋蔵文化財調査報告書16）羽曳野市教育委員会 p.106	2
iii	吉澤則夫 1994「野中寺旧伽藍」（「野中寺」）北野耕平編『羽曳野市史第三巻　史料編１』羽曳野市 p.474　図版一三八	2

20. 西琳寺（羽曳野市古市）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○									包含層	i
2	白鳳							○					瓦溜出土（講堂）	iv
3	白鳳		○	○	○		○	○	○	(50)	(90)	130	瓦溜出土（塔）	ii，iii，v

文献		掲載鴟尾
i	中井貞夫ほか 1978「② ２S－135区の調査」『西琳寺跡範囲確認調査概要Ⅰ』大阪府教育委員会 pp.８－９	1
ii	伊藤聖浩ほか 1995「西林寺跡」『古市遺跡群ⅩⅥ』（羽曳野市埋蔵文化財調査報告書32）羽曳野市育委員会p.56	3
iii	大脇潔 1999『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 p.11，41，70	3
iv	伊藤聖浩 2001「西琳寺」『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成10年－』（羽曳野市埋蔵文化財調査報告書42）羽曳野市教育委員会 pp.84	2
v	伊藤聖浩 2002「西琳寺出土の鴟尾」『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成11年－』（羽曳野市埋蔵文化財調査報告書46）羽曳野市教育委員会 pp.90－96	3

21. 埴生廃寺（善正寺）（羽曳野市はびきの）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○		○	○	○	○					i－iv，vi，vii
2	白鳳		○		○									v

文献		掲載鴟尾
i	藤井直正 1959「瓦　鴟尾　河内埴生廃寺（羽曳野市埴生）」『大阪府埋蔵文化財資料第１集』大阪府教育委員会	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（24　善正寺跡）pp.80－81	1
iii	笠井敏光 1981「７　第16調査区（善正寺）」『古市遺跡群Ⅱ』羽曳野市教育委員会	1
iv	笠井敏光 1981「17　古市小学校所蔵遺物整理報告」『古市遺跡群Ⅱ』羽曳野市教育委員会	1
v	近藤康司 1988「５．鴟尾」「馬野繁蔵氏寄贈　採集資料報告〔Ⅳ〕－瓦片〔Ⅰ〕－」『関西大学　考古学資料室紀要　第５号』	2
vi	北野耕平 1994「善正寺跡」北野耕平編『羽曳野市史第三巻　史料編１』羽曳野市 p.483図版一四三	1
vii	中尾芳治 1995「難波宮出土の「拒鵲」鴟尾について」〔補遺　出土資料〕『難波宮の研究』吉川弘文館p.268	1

22. 太井遺跡（堺市美原区黒山，太井）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良						○	○	○				中世の溝出土（B地区）	i，ii
備考	黒山廃寺所用と考えられる。													

文献		掲載鴟尾
i	森屋美佐子 1996「道具瓦」江浦洋編『太井遺跡』（近畿自動車道松原すさみ線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書）大阪府教育委員会，大阪府文化財調査研究センター p.74	1
ii	奥村茂樹 2002「351　鴟尾」『摂河泉発掘資料特選Ⅱ』大阪府文化財センター p.104	1

23. 黒山廃寺（堺市美原区黒山）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良					○	○							i

文献		掲載鴟尾
i	包丁道明 1980「６　鴟尾」（第４章　出土遺物）『黒山廃寺発掘調査概要－南河内郡美原町黒山所在－』美原町教育委員会 p.７	1
ii	市本芳三 2007「黒山廃寺」『河内古代寺院巡礼』（平成19年度春季特別展図録）大阪府立近つ飛鳥博物館）p.48	1

24. 新堂廃寺跡（富田林市緑が丘町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥	Ⅰ					○	○						v，vii
2	飛鳥	Ⅱ		○			○							ii－v，vii
3	飛鳥	Ⅲ		○	○		○	○	○					ii－v，vii
4	飛鳥	Ⅳ		○	○									ii－v，vii
5	白鳳	Ⅴ		○	○		○	○	○					ii－v，vii
6	白鳳	Ⅵ					○	○						ii－v，vii
7	白鳳	Ⅶ	○	○	○	○	○	○	○	(45)	61	90	南門柱掘方から礎板として転用された状態で出土。南門所用か	v－vii
8		薄手鴟尾		○	○		○	○	○					viii
9		薄手鴟尾		○				○	△					viii
備考	文献 ii でも鴟尾の型式分類がなされているが、図面などのデータがなく、現在照合不可能なため、文献vii及びviiiの型式分類のみを挙げた。													

文献		掲載鴟尾
i	藤直幹・北野耕平 1961「河内新堂廃寺」（第一期調査概要報告）大阪大学文学部国史研究室，大阪府教育委員会	2－6
ii	藤澤一夫 1961「五　遺物」『河内新堂，烏含寺跡の調査』（大阪府文化財調査報告書第12輯）大阪府教育委員会 p.17	2－6
iii	北野耕平 1981「歴史時代の富田林」北野耕平編『富田林市史』第一巻　富田林市役所	2－6
iv	北野耕平 1985「一　新堂廃寺と出土瓦」（第六章　歴史考古学から見た富田林　第三節　古代寺院址と瓦窯）北野耕平編『富田林市史』第一巻　富田林市役所 pp.202－213	2－6
v	岩戸晶子 2000「第６節　道具瓦」『新堂廃寺』（大阪府埋蔵文化財報告2000－１）大阪府教育委員会 pp.104－106，123－125	1－7
vi	岩戸晶子 2000「南門柱掘方出土鴟尾の復元」『新堂廃寺』（大阪府埋蔵文化財報告2000－１）大阪府教育委員会 pp.197－202	7
vii	岩戸晶子 2000「道具瓦からみる新堂廃寺～鴟尾と鬼瓦を中心に－」『新堂廃寺』（大阪府埋蔵文化財報告2000－１）大阪府教育委員会 pp.203－213	1－7
viii	栗田薫 2003「10　鴟尾」『新堂廃寺跡　オガンジ池瓦窯，お亀石古墳』（富田林埋蔵文化財調査報告 35）富田林教育委員会本文編 pp.239－242，図版124，125　写真150，151	8，9

25. 細井廃寺（富田林市錦織）

遺跡種別	時代
集落か	飛鳥－白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A		○	○			○	○				盛土から出土	i，ii
2	白鳳	B		○				○	○				瓦溜110出土	i
備考	ミニチュア品、ほぼ完形。													

文献		掲載鴟尾
i	小林義孝 1985「４．鴟尾」小林義孝，河内一浩編『錦織細井廃寺跡発掘調査概要』（『大阪府文化財調査概要　1984年度』大阪府教育委員会 pp.28－34	1，2
ii	大脇潔 1999「羽根を飾る鴟尾の系譜」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 pp.61－62	1

26. 原山４号古墓（堺市南区庭代台）

遺跡種別	時代
墓	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○	○	○	○	○	○	40.6	140	140.5	火葬墓内で再利用	ⅰ－ⅲ
備考	TG64号窯の製品。土坑に２基の円筒形須恵器の蔵骨器を埋め、その上部に破砕した鴟尾片を敷く。													

文献		掲載鴟尾
ⅰ	中村浩 1980「原山古墓群」『陶邑』Ⅱ［大阪府文化財調査報告書第29輯］大阪府教育委員会　pp.42－43	1
ⅱ	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（26　原山４号古墓）pp.82－83	1
ⅲ	中村浩，宮野淳一，矢柄あさ代 1990「４号古墓」『陶邑Ⅶ』［大阪府文化財調査報告書第37輯］大阪府教育委員会　pp.111－125	1

27. 陶邑窯跡群（TG226－１号窯）（堺市南区桃山台）

遺跡種別	時代
窯跡	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○	○	○	○	○					灰原	ⅰ，ⅱ
2	白鳳		○	○	○			○					TG226－Ⅰ，Ⅱ号窯灰原	ⅲ
備考	灰原はTG223、TG226－１のものと重複しており、遺物の焼成窯の特定は困難。													

文献		掲載鴟尾
ⅰ	中村浩 1980「栂第226－１（TG226－１）号窯」『陶邑Ⅱ』［大阪府文化財調査報告書第29輯］大阪府教育委員会　pp.78－80	1
ⅱ	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（27　陶邑TG223号窯跡）pp.82－83	1
ⅲ	大阪府教育委員会 1987「TG226－Ⅰ，Ⅱ号窯灰原出土の遺物　瓦類」『陶邑Ⅱ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］pp.389－390，図版458－１～11	2

28. 野々井遺跡（堺市南区野々井）

遺跡種別	時代
集落	弥生，古墳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良						○	○					SD1－17	ⅰ
2	奈良			○									包含層	ⅱ
3	奈良				○								野々井７号墳周溝及びその周辺	ⅲ
4	奈良			○	○								SD3D－01	ⅳ
5	白鳳							○					SD4－B	ⅴ
6	白鳳			○	○			○					TG226－1，2	ⅵ
7	白鳳			○				○					SX4－01	ⅶ
8	奈良			○				○					SX4－22	ⅷ
9	奈良		○	○									SX4－14	ⅸ
10	奈良			○									SX4－17	ⅹ
11	奈良			○									SX4－24	ⅺ
12	奈良						○	○					ピット	ⅻ
13	奈良							○					７区表面採集	ⅹⅲ

14	奈良							○					11区表面採集	xiv
15	奈良						○	○					11区表面採集	xv
16	奈良			○									7区包含層	xvi
17	奈良			○									包含層	xvii

文献		掲載鴟尾
i	大阪府教育委員会 1987「野々井第1調査区　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］p.139　図版281－4	1
ii	大阪府教育委員会 1987「野々井第1調査区　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］p.213 図版311－6	2
iii	大阪府教育委員会 1987「野々井7号墳周溝及びその周辺の遺物　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］図版312－2	3
iv	大阪府教育委員会 1987「SD3D－01出土の遺物　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第36輯］p.326 図版437－1	4
v	大阪府教育委員会 1987「SD4－Bの出土の遺物　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第37輯］p.385 図版451－9	5
vi	大阪府教育委員会 1987「TG226－Ⅰ，Ⅱ号窯灰原出土の遺物　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］p.389～390 図版458－1～11 注記は全てTG226－2	6
vii	大阪府教育委員会 1987「SX4－01出土の遺物　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］p.393 図版454－2～4	7
viii	大阪府教育委員会 1987「SX4－22出土の遺物　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］pp.399～400 図版465－3～5	8
ix	大阪府教育委員会 1987「SX4－14出土の遺物　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］p.395 図版466－1	9
x	大阪府教育委員会 1987「SX4－17出土の遺物　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］p.396 図版466－2	10
xi	大阪府教育委員会 1987「SX4－24出土の遺物　瓦類」『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］pp.401～402 図版466－3	11
xii	大阪府教育委員会 1987『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］図版466－4	12
xiii	大阪府教育委員会 1987『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］図版473－8	13
xiv	大阪府教育委員会 1987『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］図版473－9	14
xv	大阪府教育委員会 1987『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］図版473－10	15
xvi	大阪府教育委員会 1987『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］図版474－2	16
xvii	大阪府教育委員会 1987『陶邑Ⅵ』［大阪府文化財調査報告書第35輯］図版474－7	17

29. 和泉寺跡（和泉市府中町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○		○				Ⅴ層，土坑001	i

文献		掲載鴟尾
i	土屋みずほ 2013「第3項 瓦」『和泉寺跡，府中遺跡 Ⅱ』大阪府教育委員会　pp.164－169	1

30. 小松里廃寺（岸和田市今木町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○	○				整地層	1

文献	掲載鴟尾
i　近藤利由 1984「遺物」『昭和58年度　発掘調査概要』岸和田市教育委員会 p.15	1

31. 秦廃寺（貝塚市半田地内）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○				○						i
2	白鳳			○				○						i
3	白鳳			○	○									i
備考	10点以上出土し、６点報告。１と２は同一個体の可能性もあり。出土地点は推定南門付近の瓦溜り。													

文献	掲載鴟尾
i－iii　森屋直樹　1997「秦廃寺出土軒瓦（7）し尾」『秦廃寺，麻生中下代遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会 p.30　図版18－19	1－3

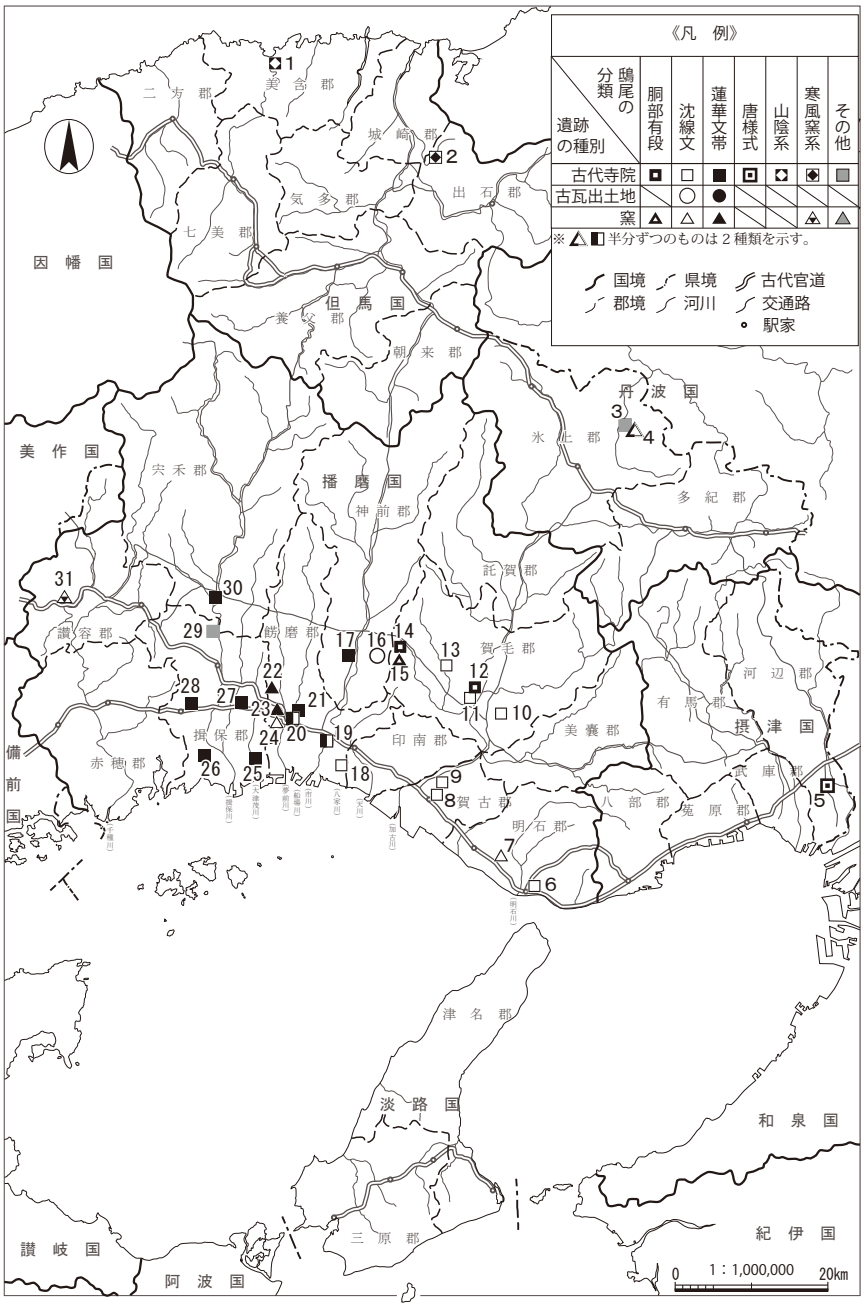
32. 海会寺（泉南市信達大苗代）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○						瓦溜り中層	i
2	白鳳			○			○	○	○				瓦溜り中層	i
3	白鳳				○	○	○						窯４　灰原３層	ii
備考	伽藍地出土の鴟尾は全46点出土し、13点報告。２個体以上。採用堂塔は不明。													

文献	掲載鴟尾
i　岡田直樹 1987「第７章 遺物 ④ 鴟尾」『海会寺』泉南市教育委員会 pp.78－81	1，2
i　河田泰之 2003「第２章 瓦塼類の分類 第７節 鴟尾」『海会寺跡発掘調査報告書－埋蔵文化財センター建設に伴う瓦窯の調査』［泉南市文化財調査報告書 第41集］pp.17－18	3

15　兵庫県



1　長見寺廃寺	9　石守廃寺	17　溝口廃寺	25　下太田廃寺
2　三宅廃寺（薬琳寺跡）	10　広渡廃寺	18　見野廃寺	26　金剛山廃寺
3　三ツ塚廃寺	11　新部大寺廃寺	19　市之郷廃寺	27　中井廃寺
4　天神窯跡（3・4号窯）	12　河合廃寺	20　今宿遺跡	28　中垣内廃寺
5　猪名寺廃寺	13　繁昌廃寺	21　辻井廃寺	29　香山廃寺
6　太寺廃寺	14　吸谷廃寺	22　打越窯跡	30　千本屋廃寺
7　高丘古窯跡群	15　江ノ下遺跡	23　赤坂窯跡（1号窯）	31　早瀬瓦窯跡
8　野口廃寺	16　姥懐古墓	24　桜峠窯跡（5号窯）	32　伝伊勢村例（※）

（※）出土地不詳のため位置図に掲載しない。

兵庫県の鴟尾出土遺跡

1．長見寺廃寺址（美方郡香美町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳					○		○					包含層	i，ii
備考	鴟尾１は、頂部の破片１点と鰭部の破片３点。鰭部については、鰭部の段を細い貼付突帯で表現しており、「山陰系（山陰型）鴟尾」の系統に位置づけられる。兵庫県立考古博物館保管。													

文献		掲載鴟尾
i	山田清朝 2007「Ⅳ.鴟尾（第３章　調査の成果、第２節　調査の成果、４.古墳時代後期～奈良時代の遺構と遺物、（８）瓦類）」兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編『香美町　長見寺廃寺址－国道178号香住道路ランプ部道路改良事業に伴う発掘調査－』（兵庫県文化財調査報告第315冊）兵庫県教育委員会 pp. 87－88	1
ii	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要６』鳥取県埋蔵文化財センター p.58	1

2．三宅廃寺（豊岡市三宅）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○										表採	ii
2	白鳳						○	○					表採	i，iii，iv，v
3	白鳳						○	○					表採	v，vi
備考	鴟尾１は井内古文化研究室旧蔵、明石市立文化博物館所蔵。鴟尾２は文献ｉでは縦帯部と鰭部の破片の写真あり。文献ii，iiiに拓影のみの掲載あるも、縦帯部と鰭部の拓本は合成。縦帯部のみ所在確認。豊岡市歴史博物館所蔵。鰭部については、所在確認できず。鴟尾３は、縦帯部と鰭部の破片。豊岡市歴史博物館蔵。鴟尾２、３は、縦帯に単弁七葉蓮華文を押捺する「蓮華文帯鴟尾」。鰭部外面は削り出して正段となるが、鰭部段の先端が蕨手状に湾曲する特徴から「寒風窯系」と関連性が指摘されている。													

文献		掲載鴟尾
i	石田松蔵 1965『目で見る豊岡の文化史』豊岡市教育委員会 p.12	2
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（64　三宅廃寺（薬琳寺跡））pp.117－118	1
iii	潮崎誠・瀬戸谷浩 1993「第５章　歴史時代の遺跡と遺物　５．３．薬琳寺遺跡」豊岡市教育委員会編『豊岡市史　史料編　下巻』豊岡市 pp.263－265	2
iv	大脇潔 1999「飛鳥白鳳時代の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 p.59	2
v	前岡孝彰 2007「但馬の古代寺院とその軒瓦」小笠原好彦先生退任記念論集刊行会編『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真陽社 p.886	2，3
vi	但馬国府・国分寺館編 2014「第７回特別展　山陰と山陽－南北文物の交流」『但馬国府国分寺館ニュース』（第36号）p.６	3

3．三ッ塚廃寺（丹波市市島町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○						遺跡南西の円形落ち込み	i
2	白鳳								○				遺跡南西の円形落ち込み	i，ii
備考	鴟尾１、２は、文献ii掲載時は辰馬考古資料館蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	丹波三ッ塚遺跡発掘調査団 1975「（３）鴟尾片」（Ⅲ 出土の遺物　A 瓦類）『丹波三ッ塚遺跡Ⅱ』兵庫県氷上郡市島町　p.25，図版15	1，2
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（56　史跡　三ッ塚廃寺）pp.111－112	2

4．天神窯跡（丹波市市島町）

遺跡種別	時代
窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	Ⅱ39	○	○	○	○	○	○	○	37	89	79	4号窯床面	i，ii
2	白鳳	Ⅱ40	○	○	○	○	○	○	○	38	87	79	4号窯床面	i，ii
3	白鳳	Ⅱ41	○	○		○	○	○	○	42	(108)	?	3号窯床面	i，ii
備考	天神窯三ッ塚廃寺に瓦を供給する、寺院近接の半地下式登窯。鴟尾１、２は、胴部と鰭部に正段をもつ「胴部有段鴟尾」。鴟尾１～３は丹波市教育委員会所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	梶原義実 2000「２ 鴟尾」（第Ⅱ部 天神窯跡発掘調査報告、第３章 出土遺物）丹波三ッ塚廃寺発掘調査団『丹波三ッ塚遺跡Ⅳ』兵庫県氷上郡市島町　pp.55－63，図版16，17	1－3
ii	大脇潔 2002「鴟尾の変遷」東京国立博物館編『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術報告書　瓦塔，鴟尾』東京国立博物館　pp.63－65	1－3

5．猪名寺廃寺（尼崎市猪名寺）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－中世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○						講堂跡	ii－vii
2	白鳳			○									塔跡	i，iii，iv，v，vii
備考	鴟尾１は、縦帯は削り出し突帯で画する複帯構成。内郭に２条１組の突帯で画して断面山形と谷形の段を削り出し、両側を各１条の突帯で画す外郭に連珠文を削り出す。僅かに残る鰭部の基部は、内外面に逆段を表す。腹部の一部も残り、平面長楕円形状の文様が削り出されているが全体像は不明。ドウジョウ遺跡や川原寺出土例と類似。鴟尾２は、胴部に蕨手状の文様が施される。類似例として出土地不詳の資料（天理参考館所蔵）あり。鴟尾１，２は尼崎市教育委員会所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	尼崎市教育委員会編 1952『猪名寺廃寺址発掘調査報告（第一期）』尼崎市文化財調査報告第１集　写真第十七、p.15	2
ii	奈良国立博物館編 1970『飛鳥白鳳の古瓦』図版560	1
iii	村川行弘 1980「１　猪名寺廃寺跡」（尼崎の考古資料　四 歴史時代）『尼崎市史』第11巻　尼崎市役所　巻頭図版20、pp.309，319	1，2
iv	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（62　猪名寺廃寺）pp.18，115－116	1，2
v	岡田務 1984「５．鴟尾」（第４章 遺物、第１節 瓦類）尼崎市教育委員会『尼崎市猪名寺廃寺跡』（尼崎市文化財調査報告 第16集）pp.67－68，図版29	1，2
vi	大脇潔 1999「飛鳥白鳳時代の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 p.65	1
vii	大脇潔 2002「鴟尾の変遷」東京国立博物館編『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術報告書　瓦塔，鴟尾』東京国立博物館　pp.72，73	1，2

6．太寺廃寺（明石市太寺）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－中世

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○					○				表採	i，ii
2	白鳳			○			○	○					第４次調査　高家寺本堂北側，東側	iii－vi
3	白鳳							○					第４次調査　高家寺本堂北側，東側	iii，vi
4	白鳳		○	○		○	○	○	○				第１次，25次調査　塔跡北東側，東側，南東側	vi
5	白鳳			○				○					第４次調査　高家寺本堂北側，東側	vi
備考	鴟尾１～５は、鰭部の段や縦帯部を細い沈線で表す「沈線文鴟尾」。鴟尾１は沈線文が僅かに残る胴部と腹部の接合部分の破片１点。鴟尾２（２－１～４）は沈線文が施される鰭部の破片２点（２－１・２）、胴部の破片１点（２－３）、鰭部、縦帯部、胴部の破片１点（２－４）。２－４は鰭部、胴部の段及び縦帯を篦書き沈線で表現。いずれも表面が燻し（炭素吸着）で黒色。第４次調査出土。鴟尾３は鰭部の破片１点。やや灰色で燻しがほぼ無い焼成。鴟尾４は４－１～11の計11点の破片。４－１は頂部の破片外面に篦書きで細い沈線で段を表現。４－２は、縦帯部、鰭部、胴部、腹部の破片１点。縦帯部、鰭部の段を篦書き沈線で表現。４－３～６は鰭部の破片４点、篦書きの細い沈線で段を表現。４－７・８は頭部から胴部の破片２点。胴部外面に篦書き沈線で段を表現。４－９は頭部とみられる破片１点。４-10・11は腹部の破片２点。４-11は刳り形がある基底部の破片。表面灰色で燻しの無い焼成。第１次、第25次に調査出土。鴟尾５は胴部または鰭部の破片１点。外面に篦書き沈線で段を表現し、さらに一部の沈線にはそれを中心線にしてコンパス文を重ねて施す。※この他に発掘調査で出土した未報告資料が４点あり。表面灰色で燻しのない焼成の破片３点と燻しのある破片１点。前者は、鰭部の破片２点、頭部の破片１点。後者は鰭部とみられる破片。鴟尾の個体数は少なくとも２個体以上存在するとみられる。鴟尾１は、井内古文化研究室旧蔵。明石市立文化博物館所蔵。鴟尾２～５は、明石市立文化博物館所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（66　太寺廃寺）p.119（図なし）	1
ii	井内古文化研究室 1990「１　太寺廃寺」（Ⅰ　旧明石郡域）『東播磨古代瓦聚成』真陽社　PL.２	1
iii	稲原昭嘉 2003「13. 太寺廃寺跡第4次」明石市立文化博物館編『明石市埋蔵文化財年報』pp.62－65 第85図	２，３
iv	稲原昭嘉 2013「8. 太寺廃寺」（Ⅱ　明石の古代遺跡）発掘された明石の歴史展実行委員会編『明石の古代』pp.34－38	２
v	春成秀爾 2013「Ⅳ　明石の古瓦集成」発掘された明石の歴史展実行委員会編『明石の古代』p.98 図版10	２
vi	明石市 2020『太寺廃寺Ⅰ』明石市文化財調査報告第９冊　pp.82－87，PL.22－24	２－５

7．高丘古窯跡群（明石市大久保町）

遺跡種別	時代
窯	飛鳥・白鳳・奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A，第１号	○	○	○	○	○	○	○	41	85	（123）	３号窯焼成室	i－iii，v－ix，xi，xii
2	白鳳	B，第２号	○	○	○	○	○	○	○	38	90	（121）	３号窯焼成室	i，ii，vi，vii，xii
3	白鳳	C		○			○	○					３号窯焼成室	ii

4	白鳳											３号窯焼成室	vi，xii
5	白鳳			○	○		○	○				17号窯表採	x，xii
6	白鳳			○	○			○				18号窯表採	xii
7	白鳳			○								17，18号窯表採	xii
8	白鳳						○	○	○			谷八木表採（高丘窯産）	iv，xi，xii
9	白鳳			○			○	○	○			谷八木表採（高丘窯産）	iv，xi，xii
備考	鴟尾１～４、８は明石市立文化博物館所蔵。鴟尾５、６、８は井内古文化研究室旧蔵。鰭部、胴部の段を細い沈線で表現する「沈線文鴟尾」。鴟尾１～４は縦帯部に２条の平行する突帯の間に連珠文を粘土で貼り付ける。鴟尾５、８、９は、縦帯部を平行する２条の細い沈線を施す。 ※３号窯からは、既報告分の鴟尾１～４の他にも未報告の破片資料が複数あるが、鴟尾３、４との接合、復元が確認できていない。文献ⅱでは「三個」（三個体）を製作とし、文献ⅵでは、「４個体分の鴟尾が採取」されたとする。確認できた破片資料には、腹部頂部の粘土塊閉塞痕をもつものが１点認められることから、少なくとも３個体存在すると考えられる。 ※鴟尾８、９は、春成秀爾氏が高丘古窯跡群から南側に離れた明石市大久保町谷八木で表採した資料だが、文献ⅲにおいて高丘窯付近からの土取り造成土に含まれていたものとみられ、鴟尾の特徴が鴟尾１、２と類似することから高丘窯産と想定されている。表採した鴟尾は、７個体分とされているが、ここでは同一個体が判明したものを鴟尾８として抽出し、その他を鴟尾９としている。 ※文献ⅴp.64表８では、20号窯の遺物として鴟尾が記されるも、p.68の20号窯の文章では未記載につき、誤記とみられる。												

文献		掲載鴟尾
i	井内功，井内潔 1967「播磨の鴟尾（上）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集６（376号） pp.１，235－237 井内功，井内潔 1967「播磨の鴟尾（下）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集７（377号） pp.251－260（図なし）	１，２
ii	井内功，井内潔 1967『高丘第三窯跡発掘調査報告』明石市教育委員会　pp.11－16、第７，８図、図版六～八	１－３
iii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（61　高丘３号窯跡）pp.10，114－115、	１
iv	春成秀爾 1983「明石発見の鴟尾新資料」 古代を考える会編『藤澤一夫先生古希記念古文化論叢』藤澤一夫先生古希記念論集刊行会　pp.549－551，570	８，９
v	真野脩 1985「高丘古窯跡群」（六、 奈良時代） 黒田義隆編『明石市史資料（考古編第四集）』明石市教育委員会　pp.62－70　第37図	１
vi	竹原伸二 1987「鴟尾」（Ⅳ　主要な遺跡群と遺物　（３）高丘古窯址群　２、３号窯）同志社大学考古学研究室編『明石市域の遺跡詳細分布調査（Ⅰ）－1984，1985年度の調査－』明石市教育委員会　pp.39－48	１，２，４
vii	井内古文化研究室 1990「４　高丘窯跡」（Ⅰ　旧明石郡域）『東播磨古代瓦聚成』真陽社　pp.12－17，PL.９、巻頭図版1	１，２
viii	大脇潔 1999「飛鳥白鳳時代の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂　p.52、第27図	１
ix	大脇潔 2002「鴟尾の変遷」東京国立博物館編『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術報告書　瓦塔・鴟尾』東京国立博物館　pp.72－73　（※復元図）	１
x	井内潔 2013「明石，高丘窯の屋瓦と鴟尾」『帝塚山大学考古学研究所研究報告　ＸＶ』帝塚山大学考古学研究所　p.91	５
xi	稲原昭嘉 2013「14．高丘古窯跡群」（Ⅱ　明石の古代遺跡）発掘された明石の歴史展実行委員会編『明石の古代』pp.49－55	１，８，９
xii	春成秀爾 2013「Ⅳ　明石の古瓦集成」発掘された明石の歴史展実行委員会編『明石の古代』　pp.93－97，図版５－９	１，２，４－９

8．野口廃寺（加古川市野口町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○					塔跡西側調査区	i
備考	鴟尾１は、細い沈線で鰭部、縦帯部の文様を表す「沈線文鴟尾」。加古川市教育委員会所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	西川英樹 2004「（３）鴟尾」（第２章　調査の成果、第３節　遺物、１．瓦）加古川市教育委員会編『野口廃寺発掘調査報告』（加古川市文化財調査報告19） pp. 27，33，写真図版19	1

9．石守廃寺（加古川市神野町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○				○					表採	i
備考	鴟尾１は、文献ｉの小破片の写真では細い沈線文が認められる。井内古文化研究室旧蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	井内古文化研究室 1990「３　石守廃寺」（Ⅱ　旧加古郡域）『東播磨古代瓦聚成』真陽社　p.30　PL.32	1

10．広渡廃寺（小野市広渡町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良，平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○				○					「金堂跡やその付近」	i －iv
2	白鳳		○	○			○	○	○				南大門瓦溜め	v
3	白鳳		○	○			○	○	○				南大門瓦溜め	v
4	白鳳							○	○				報告書未記載	v
備考	鴟尾１～３は、鰭部、胴部の段や縦帯部を細い沈線で表す、「沈線文鴟尾」。 鴟尾１は、破片４点あり、文献ｉにおいて同一個体、あるいは少なくとも「対応個体」とみなされている。鴟尾２は、須恵質に焼成される一群。鴟尾３は、表面が炭素吸着して黒色を呈する瓦質の一群で、未報告の破片資料も数点あり。鴟尾４は未詳のため、３、４に分けられない一群。 鴟尾１～４は、小野市教育委員会所蔵。														

文献		掲載鴟尾
i	高井悌三郎 1980「３　鴟尾等」（Ⅳ　出土の遺物、Ａ　古瓦類）広渡寺廃寺跡発掘調査団編『播磨広渡寺廃寺跡　発掘調査報告』兵庫県小野市教育委員会　p.34　図版19	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（65　広渡寺廃寺（土橋廃寺））p.118	1
iii	井内古文化研究室 1990「９．広渡廃寺」（Ⅳ　旧賀毛郡域）『東播磨古代瓦聚成』真陽社　pp.83－84　PL.80	1
iv	岸本直文 1997「33　国史跡　広渡廃寺跡」（第二章　小野市の考古資料　第５節　古代）小野市史編纂委員会編『小野市史』第四巻　史料編Ⅰ　小野市 pp.132－137，264　図版90	1
v	西田猛・久語紀子 2005「鴟尾」（６　出土瓦について、（６）　その他の瓦類）小野市教育委員会編『国史跡広渡廃寺跡発掘調査』小野市文化財調査報告第26集　pp70－73、図版37－38	２－４

11. 新部大寺廃寺（小野市新部町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○									未報告につき不明	ⅰ，未報告
備考	鴟尾１は、文献ⅰの文章上での言及が初出。昭和47年調査未報告資料。細い沈線で胴部の段を表す「沈線文鴟尾」。小野市教育委員会所蔵。													

文献		掲載鴟尾
ⅰ	菱田哲郎 1988「鴟尾の生産と地域色－東播系と西播系の鴟尾－」古代學教會『古代文化』第40巻６号（通巻第353号）p.23（図なし）	1

12. 河合廃寺（小野市河合中町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○	○				表採	ⅰ，ⅱ，ⅳ，ⅴ
2	白鳳				○		○	○	○				表採	ⅰ－ⅴ
備考	鴟尾１、２は、鰭部及び胴部の段を削り出して表現する、「胴部有段」鴟尾。鰭部の内面に段を有するか欠失しているため不明。鴟尾１は、文献ⅳのPL73－９、鴟尾２は、文献ⅳのPL73－10。いずれも井内古文化研究室旧蔵。													

文献		掲載鴟尾
ⅰ	井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（上）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集６（376号）p.234 井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（下）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集７（377号） pp.260－261（図なし）	1，2
ⅱ	井内潔 1971「播磨の古瓦資料１　河合廃寺」『井内古文化研究室報６』井内古文化研究室　pp.98－99	1，2
ⅲ	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（55　河合廃寺）pp.109－111	2
ⅳ	井内古文化研究室 1990「８　河合廃寺」（Ⅲ　旧賀毛郡域）『東播磨古代瓦聚成』真陽社　pp.76，78　PL.73	1，2
ⅴ	岸本直文 1997「31　河合廃寺跡」（第二章　小野市の考古資料　第５節　古代）小野市史編纂委員会編『小野市史』第四巻　史料編Ⅰ　小野市　pp.122－127	1，2

13. 繁昌廃寺（加西市繁昌町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○	○								SB01付近（金堂所用か）	ⅰ－ⅲ
2	白鳳							○					SB01付近（金堂所用か）	ⅰ，ⅲ
3	白鳳						○	○					SB01付近（金堂所用か）	ⅰ，ⅲ
備考	鴟尾１～３は、鰭部，胴部の段および縦帯を細い沈線文を施す「沈線文鴟尾」。鴟尾３は、縦帯部に２条の沈線文の上に竹管を押捺した粘土玉を貼り付けて珠文をつくる。鴟尾１～３は、加西市教育委員会所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	菱田哲郎 1987「１　鴟尾」（Ⅳ　出土遺物　１　瓦類　Ｃ　鴟尾，熨斗瓦，隅切瓦加西市教育委員会，甲陽史学会，六甲山麓遺跡調査会編『播磨繁昌廃寺　寺跡と古窯跡』加西市教育委員会　p.49、図版17	１－３
ii	井内古文化研究室 1990「２　繁昌廃寺」（Ⅳ　旧賀毛郡域）『東播磨古代瓦聚成』真陽社　p.54　PL.52	1
iii	菱田哲郎 2010「考古代25　繁昌廃寺」（第５章　加西の古代　第２節）加西市史編纂委員会編『加西市史』第７巻史料編Ⅰ考古 p.462	１－３

14. 吸谷廃寺（加西市吸谷町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					表採	i
備考	鴟尾１は、鰭部の破片。文献ii の写真では、鰭部外面および内面に正段を削り出しているのが認められる。井内古文化研究室旧蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（117　吸谷廃寺）p.154　表のみ（図なし）	1
ii	井内古文化研究室 1990「４　吸谷廃寺」（Ⅳ　旧賀毛郡域）『東播磨古代瓦聚成』真陽社　PL.59	1

15. 江ノ下遺跡（加西市谷口町長近）

遺跡種別	時代
窯	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○					包含層	i，ii
2	白鳳			○	○								包含層	i
3	白鳳			○									包含層	i
4	白鳳								○				SX05	i
備考	鴟尾１は、鰭部，胴部に段をもつ「胴部有段鴟尾」。鰭部は外面，内面ともに正段に削り出す。鴟尾１～４は、加西市教育委員会所蔵。鴟尾４については、文献ｉではSX20出土と図版に記載されていたが、加西市教育委員会から最近の整理作業の結果、SX05から出土しているとのとご教示いただいた。													

文献		掲載鴟尾
i	中村浩「第５章　江ノ下遺跡」1992　兵庫県加西市教育委員会編『江ノ下，西ノ側－窯跡群等の発掘調査報告書－』加西市埋蔵文化財報告９　図版四八	１－４
ii	永井信弘 2010「考古代22　江ノ下窯跡」（第５章　加西の古代　第２節）加西市史編纂委員会編『加西市史』第７巻史料編Ⅰ考古 p.444	2

16. 姥懐古墓（神崎郡福崎町）

遺跡種別	時代
墓	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○	○	○		○	○	○	36	64	?	墓	i －vii
備考	鴟尾１は、鰭部外面に沈線文で段を表現する「沈線文鴟尾」。縦帯部は、２条の突帯を貼り付け、その間に沈線で半円状の文様を連続して施す。胴部は無文。頭部上辺が庇状に張り出す。竪穴状の古墓の中に、焼けひずみの大きい個体が棺として転用されており、内部には人骨が残っていた。京都大学総合博物館所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	梅原末治 1935「棺に利用されたる鴟尾」『建築史』（第２巻第２号）建築史研究会	1
ii	梅原末治 1941「第五　八千種村の特殊古墓」兵庫県『兵庫県史蹟名称天然紀念物』第十五輯 p.48	1
iii	井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（上）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集６（376号）p.237（図なし） 井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（下）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集７（377号）p.263（図なし）	（1）
iv	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（63　姥ヶ懐古墓）p.26, 116－117	1
v	菱田哲郎 1988「鴟尾の生産と地域色－東播系と西播系の鴟尾－」『古代文化』第40巻６号　p.23	1
vi	松本正信 1990「２　八千種鍛冶屋の鴟尾棺」福崎町史編集専門委員会『福崎町史』第三巻資料編Ⅰ　兵庫県 p.109	1
vii	大脇潔 1999「飛鳥白鳳時代の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂　p.38	1

17. 溝口廃寺（姫路市香寺町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○				○	○				表採	i，ii
2	白鳳							○					表採	ii
3	白鳳			○									表採	iii
備考	鴟尾１は、先端に近い頂部側の鰭部破片。鰭部には削りや切り取り（切り出し）によって正段が作り出される。切り出してできた段差の縁辺は段に沿って連続したヨコナデ調整。また切り出し面もヨコナデ調整されて丸味を帯び、段差側の面は浅く窪み、段が波打つようみえるようになっている。面のナデ調整には板状工具（接触面が曲線を持つ）を用いた可能性がある。内側は全体にナデ調整され、頂部側の腹部が欠失した痕跡がある。鴟尾２は、胴部，鰭部，腹部の破片（文献ii：ＰＬ105－10）。焼成が軟質のため、外面は摩滅が激しいが、縦帯部の文様（内側の１条の突帯と蓮華文部分か）が剥離したとみられる痕跡が観察できる。腹部と鰭部は別粘土を接合。鴟尾１、２は井内古文化研究室旧蔵。 鴟尾３は、唐草文を表現したとみられる４条の沈線が残る胴部の破片。兵庫県立考古博物館蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（「59　溝口廃寺」）pp.112, 114	1
ii	井内古文化研究室 1990「２　溝口廃寺」（Ⅵ　旧神前郡域）『東播磨古代瓦聚成』真陽社　pp.106－111　PL.105	1，2
iii	今里幾次 2010「Ｔ45）溝口廃寺」（５　官衙と寺の時代）姫路市史編纂専門委員会編『姫路市史』第七巻下　資料編　考古　姫路市 pp.752－755	3

18. 見野廃寺（姫路市四郷町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○					表採	i
備考	鴟尾１は、縦帯部と鰭部の段を細い沈線で表現する「沈線文鴟尾」。「MINO 34.　3．18」の注記あり。姫路市埋蔵文化財センター所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	姫路市埋蔵文化財センター 2010『考古学－播磨の先人　浅田芳朗－』平成22年度　冬期企画展展示解説用パンフレット　p.18	1

19. 市之郷廃寺（姫路市市之郷町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良，平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○					H12年市調査（寺域北西部）	iii，iv，vii，viii，x
2	白鳳						○						H12年市調査（寺域北西部）	iv－vi，x
3	白鳳						○						H９年市調査（寺域北西部の推定築地）	i，ii
4	白鳳			○	○								H12年市調査（寺域北西部）	iv，viii
5	白鳳							○					寺域南側推定塔跡周辺？	vii
6	白鳳							○					寺域南側推定塔跡周辺？	vii
7	白鳳								○				寺域南側推定塔跡周辺？	vii
8	白鳳	Ⅰ類		○		○	○	○	○				主に推定金堂基壇跡周辺	ix
9	白鳳	Ⅱ類						○	○				推定金堂基壇跡上部，周辺	ix
備考	鴟尾１～８は、「蓮華文帯鴟尾」。鴟尾１～３、８-９は、縦帯部に２条の突帯の間に面違鋸歯文縁複弁六蓮華文（笵A'，華文飾板Ⅰ型）を連続して貼り付ける。鴟尾１、５～７、８-１～３・８・９は、鰭部外面には削り出し（切り出し）によって正段を作る。鴟尾４、８－４・５は、胴部に唐草文を表現したとみられるやや深い沈線が残る。鴟尾１～８は、須恵質に焼成される。 鴟尾９-１～３は、鰭部外面に細い沈線で段を表現する「沈線文鴟尾」。鴟尾９-４は、粘土塊で閉塞した痕跡がある腹部頂部の破片。鴟尾９-５は、半円形の孔を持つ腹部基底部側の破片。鴟尾９は、外面は燻しによって炭素が吸着し、軟質に焼成される。鴟尾１～４は、姫路市埋蔵文化財センター所蔵。鴟尾５～９は、兵庫県立考古博物館所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	今里幾次 1997「第３章　龍野市奥村廃寺の古瓦」龍野市教育委員会編『奥村廃寺－調査の概要と出土瓦の研究－』p.56	3
ii	秋枝芳 1999「姫路駅周辺第３地点遺跡（第２次調査）」『TSUBOHORI　平成９年度（1997）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会 p.17（図なし）	（3）
iii	中川猛 2002「（仮称）姫路駅周辺第３地点遺跡　新福祉センター建設予定地」姫路市教育委員会『TSUBOHORI 平成12年度（2000）姫路市埋蔵文化財調査略報』 裏表紙	1
iv	大谷輝彦 2002「餝磨郡，神前郡，揖保郡（一部）の古代寺院」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨』第３回播磨考古学研究集会 資料集 p.72	1，2，4
v	大谷輝彦 2003「餝磨郡，神前郡，揖保郡東部の古代寺院」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨　－第３回播磨考古学研究集会の記録－』第３回播磨考古学研究集会 記録集 p.49	1，2
vi	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007『特別展　西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』たつの市立埋蔵文化財センター図録４　pp.17，44	1，2
vii	山田清朝 2005「Ⅳ　鴟尾」（第４章　遺物のまとめ　第５節　瓦）兵庫県教育委員会『姫路市　市之郷遺跡　－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う発掘調査１－』兵庫県文化財調査報告　第286冊　（本文編）pp.347－349，（図版編）図版77、写真図版177，178	1，5－7
viii	今里幾次 2010「T08）市之郷廃寺」（５　官衙と寺の時代）姫路市史編纂専門委員会編『姫路市史』第七巻下　資料編　考古　姫路市　pp.584－585、巻頭写真図版10	1，2，4
ix	垣内拓郎 2013「第３節　市之郷廃寺出土瓦」（第５章　総括）兵庫県教育委員会『姫路市　市之郷遺跡Ⅴ　ものづくり大学校整備事業に伴う市之郷遺跡，市之郷廃寺発掘調査報告』兵庫県文化財調査報告第454冊　pp.139－192，巻頭写真図版37、図版167，168，写真図版180，182，199	8，9
x	姫路市埋蔵文化財センター編2017『姫路の古代寺院をたずねて』 姫路市教育委員会 巻頭図版４	1，2

20. 今宿遺跡（姫路市西今宿）

遺跡種別	時代
散布地	弥生～戦国

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A類					○	○					瓦集積	i，ii
2	白鳳	B類		○	○		○	○					瓦集積	i，ii
3	白鳳			○					○				瓦集積	iii
4	白鳳								○				瓦集積	iii
5	白鳳			○									瓦集積	iii
6	白鳳			○									瓦集積	iii
備考	鴟尾１は、縦帯に突帯と面違鋸歯文縁複弁六葉蓮華文（笵A’，華文飾板Ⅰ型）を貼り付ける「蓮華文帯鴟尾」。笵傷があり、市之郷遺跡鴟尾１～３、鴟尾８-９等の笵A’と同笵。鴟尾１-４は、鰭部外面に削り出し（切り出し）て正段を作る。鴟尾２は、鰭部外面にやや太い沈線で段を表現する。また、脊稜近くの胴部にも段を同様の沈線で表現する。縦帯部には１条の突帯が残るも２条になるか不明だが、「沈線文鴟尾」に分類。脊稜上には拒鵲とみられる孔が複数穿たれている。鴟尾３、４は、胴部外面にやや太い沈線で段を表現する。鴟尾５は、胴部外面に唐草文の一部とみられる低い突帯を削り出して表現する。鴟尾６は、胴部の基底部分とみられる破片である。今宿遺跡には、中世以前に付近の古代寺院から多量の瓦が運ばれて集積されたとみられ、そこから鴟尾１～６が見つかっている。１、２は兵庫県立考古博物館所蔵。３～６は姫路市埋蔵文化財センター所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	篠宮正 2008『今宿遺跡Ⅰ　緊急街路整備事業山吹線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書１』兵庫県教育委員会　pp.22－23，45，48、図版58、写真図版４，73－75	１，２
ii	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007『特別展　西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』たつの市立埋蔵文化財センター図録４　pp.18，44	１，２
iii	姫路市埋蔵文化財センター編 2020『今宿遺跡－第４次発掘調査報告書－』姫路市埋蔵文化財センター調査報告第98集　姫路市教育委員会　図版５，８	３－６

21. 辻井廃寺（姫路市辻井）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良，平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○					未詳	i，vi，vii
2	白鳳						○	○	○				第24次調査SD01	ii－v，vii
3	白鳳			○									第24次調査？	iii，vi
備考	鴟尾１は、鰭部外面に削り出し（切り出し）て正段を作る。鴟尾２には、縦帯部に突帯と面違鋸歯文縁単弁蓮華文（華文飾板Ⅲ型（後にⅣ型に変更））を貼り付ける「蓮華文帯鴟尾」。鴟尾３は、胴部に削り出しで低い凸型の唐草文を表す。鴟尾１～３は、姫路市埋蔵文化財センター所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	今里幾次 1995「揖保川町金剛山廃寺の古瓦－律令制における地方豪族のあり方－」『播磨古瓦の研究』真陽社　pp.232－233　（※1985年初出　原題「播磨，金剛山廃寺の古瓦」『兵庫史の研究』神戸新聞出版センター」	1
ii	大谷輝彦，小柴治子 1999「２．辻井遺跡〔辻井廃寺〕（第24次調査）」姫路市教育委員会『TSUBOHORI　平成９年度（1997）　姫路市埋蔵文化財調査略報』pp.７－８	2
iii	大谷輝彦 2002「餝磨郡，神前郡，揖保郡（一部）の古代寺院」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨』第３回播磨考古学研究集会　資料集　p.77	2，3

iv	大谷輝彦 2003「餝磨郡，神前郡，揖保郡東部の古代寺院」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨　－第３回播磨考古学研究集会の記録－』第３回播磨考古学研究集会　記録集　p.56	2
v	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007『特別展　西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』たつの市立埋蔵文化財センター図録４　pp.16，44	2
vi	今里幾次 2010「Ｔ07）辻井廃寺」（５　官衙と寺の時代）姫路市史編纂専門委員会編『姫路市史』第七巻下　資料編　考古　姫路市　pp.576－577，巻頭写真図版10	1　3
vii	姫路市埋蔵文化財センター編 2017『姫路の古代寺院をたずねて』姫路市教育委員会　巻頭図版４	1，2

22. 打越窯跡群（１号窯）（姫路市白鳥台）

遺跡種別	時代
窯	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳					○		○					１号窯表採	iv，vi，xii
2	白鳳								○				１号窯表採	iv，vi，xii
3	白鳳						○	○					伝 峰相山周辺採集	i － xiii
備考	１号窯の詳細な位置は不明。鴟尾１は、鰭部外面に正段を作り出す。鴟尾２は腹部外面に凹型（陰刻）の唐草文を施す鴟尾１、２は今里幾次氏所蔵。鴟尾３は、２条の突帯の間に面違鋸歯文複弁蓮華文（笵Ｂ，華文飾板Ⅱ型）を連続して貼り付ける「蓮華文帯鴟尾」。鰭部外面は、削り出し（切り出し）によって正段を作る。鴟尾３の出土地については、「太市村付近で発見」、「傳西脇廃寺」、「峰相山鶏足寺出土」、「打越窯跡」等、諸説あり。確かな出土地については不明のため、「伝　峰相山周辺採集」あるいは「推定打越窯跡周辺採集」という理解にとどめておく。本城家、大貫繁次や宇野信四郎等の複数の所有者を経て、現在国立歴史民俗博物館所蔵。※鴟尾３の他に、文献ⅱには同じく「太市村附近で発見」された蓮華文帯鴟尾（香呂藤次氏当時所蔵）の鰭部，縦帯部の破片１点が掲載されるが、打越窯跡の出土資料か不明。													

	文献	掲載鴟尾
i	大貫繁次 1937「図版第参　傳播磨峰相山発見鴟尾瓦」『郷土文化』第５輯　巻頭図版　（写真の掲載のみ）	3
ii	鎌谷木三次 1942「西脇廃寺」『播磨上代寺院址の研究』成武堂　p.261 第98図、図版70	3
iii	宇野信四郎 1957「兵庫県揖保郡鶏足寺址出土の鴟尾について」歴史考古学会『歴史考古』１　p.24	3
iv	井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（上）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集６（376号）p.233（図なし）、B371 井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（下）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集７（377号）pp.261－263（図なし）	（1－3）
v	大貫繁次 1969「伝峯相山鶏足寺址出土の鴟尾瓦に就て」『郷土文化』第９輯 pp.１－３　（図なし）※1934年執筆。原本には写真添付。	（3）
vi	今里幾次 1980「播磨打越窯址の鴟尾瓦」『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会図版７（※初出1960「播磨打越窯址の鴟尾瓦」歴史考古学研究会『歴史考古』４）	1－3
vii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（「57　打越瓦窯址」）pp.20，112	3
viii	井内古文化研究室 1990「２　溝口廃寺」（Ⅵ　旧神前郡域）『東播磨古代瓦聚成』真陽社　p.111 図92	3
ix	今里幾次 1995「播磨古瓦研究序説」『播磨古瓦の研究』真陽社 p.20	3
x	大脇潔 1999「飛鳥白鳳時代の鴟尾」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 p.58	3
xi	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007『特別展　西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』たつの市立埋蔵文化財センター図録４　pp.11，44	3
xii	今里幾次 2010「Ｔ27）　打越窯跡」（５　官衙と寺の時代）姫路市史編纂専門委員会編『姫路市史』第七巻下　資料編　考古　姫路市 pp.662－663	1－3
xiii	姫路市埋蔵文化財センター編 2017『姫路の古代寺院をたずねて』姫路市教育委員会　p.29，裏表紙	3

23. 赤坂窯跡（１号窯）（姫路市石倉）

遺跡種別	時代
窯	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					１号窯窯体内船底状ピット	ⅰ－ⅲ，ⅴ，ⅵ
2	白鳳						○						１号窯窯体内船底状ピット	ⅰ－ⅵ
備考	須恵器、陶棺も出土。鴟尾とともに出土した須恵器は、８世紀前葉（平城Ⅰ～Ⅲ併行）の所産と位置づけられている。辻井廃寺等と同笵の複弁八葉蓮華文軒丸瓦の破片も出土。 鴟尾１は、鰭部外面を削り出し（切り出し）て正段に作る。鴟尾２は、縦帯部の単弁十一葉蓮華文（華文飾板旧分類のⅢ型、新分類のⅣ型）が剥離したもの。同笵の蓮華文を持つ鴟尾は、辻井廃寺（鴟尾２）からも出土している。鴟尾１、２は姫路市埋蔵文化財センター所蔵。													

文献		掲載鴟尾
ⅰ	山本博利 1992「赤坂１号窯跡」『兵庫県史』考古資料編 p.684	1，2
ⅱ	今里幾次 1995「播磨古瓦研究序説」『播磨古瓦の研究』真陽社 p.20	1，2
ⅲ	今里幾次 1996「２　太子町付近の古代寺院」（第三章　古代の太子町　第四節　古代の寺社と文化）太子町史編集専門委員会『太子町史』第一巻 p.368	1，2
ⅳ	今里幾次 1997「第３章　龍野市奥村廃寺の古瓦」龍野市教育委員会編『奥村廃寺－調査の概要と出土瓦の研究－』p.55	2
ⅴ	山本博利，山本和子 2010「Ｔ26）　赤坂窯跡」（５　官衙と寺の時代）姫路市史編纂専門委員会編『姫路市史』第七巻下　資料編　考古　姫路市 p.661	1，2
ⅵ	姫路市埋蔵文化財センター編 2017『姫路の古代寺院をたずねて』姫路市教育委員会　p.29，巻頭図版４	1，2

24. 桜峠窯跡（５号窯）（姫路市太市中）

遺跡種別	時代
窯	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A		○				○	○				５号窯　表採	ⅰ
2	白鳳	B		○				○	○				５号窯　表採	ⅰ
備考	鴟尾１－３は、鰭部に沈線で段を表現。鴟尾１－４は、腹部に沈線で格子目を施す。鴟尾２－２～４は、鰭部または腹部に鴟尾１よりも太い縦方向および斜方向沈線文を施す。鴟尾１、２とも所在確認できず。なお、同時に、須恵器も表採されている。※同じ峰相山麓周辺の窯跡群では、大池窯跡（１、２号窯）から鴟尾が出土しているとの情報もあるが、所在も含め詳細不明。													

文献		掲載鴟尾
ⅰ	加藤史郎 2010「Ｔ22）　桜峠５号窯跡」（５　官衙と寺の時代）姫路市史編纂専門委員会編『姫路市史』第七巻下　資料編　考古　姫路市 p.642	1，2

25. 下太田廃寺（姫路市勝原区）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳～平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○					表採	ⅲ，ⅴ－ⅷ，ⅻ－ⅹⅴ
2	白鳳			○									第４次調査第７トレンチ SK01　※推定講堂付近	ⅺ－ⅹⅲ，ⅹⅴ

3	白鳳					○		○					第２次調査第５トレンチ 回廊状遺構西溝　※東側回廊	x，xii，xv，xvi
4	白鳳							○					第４次調査第７トレンチ 盛土中　※推定講堂付近	xi，xii
5	白鳳							○					表採	i，ii，v，vii
6	白鳳							○					第１次調査第１トレンチ 井戸（SK10） ※寺域北西付近	ix，xii，xv，xvi
7	白鳳							○					表採	xii，xiii
8	白鳳						○	○					第４次調査第７トレンチ 盛土中　※推定講堂付近	xi－xiii
9	白鳳			○			○						第３次調査第２区SX01 ※寺域北側付近	xi－xvi
10	白鳳						○						第３次調査第２区SX01 ※寺域北西側付近	xi，xii，xv
11	白鳳						○	○					第３次調査第１区SP96 ※寺域北西側付近	xi－xiii
12	白鳳						○						第１次調査第２トレンチ ※寺域西側周辺	viii，ix
13	白鳳						○	○	○				表採	ii，v，vii，xii，xiii
14	白鳳							○					第３次調査第２区SX01 ※寺域北西側付近	xi，xii
備考	発掘調査で、講堂、金堂、南門、回廊、寺域の基壇の一部が検出されており、南面する四天王寺式の伽藍配置をとると考えられている。 鴟尾１～８が同一型式の一群、鴟尾９～14が、同一型式の一群に分類可。鴟尾１、９はいずれも２条の縦帯の間に蓮華文を貼り付ける「蓮華文帯鴟尾」。鴟尾１は、面違鋸歯文縁複弁八葉蓮華文（笵A、華文飾板Ⅰ型）、鴟尾９、10、12、13は、線鋸歯文縁単弁九葉蓮華文（華文飾板今里旧分類Ⅳ型。新分類Ⅴ型）。鴟尾１、２は胴部に凸型に削り出した唐草文を施す。鴟尾１、２～８の一群、鴟尾11、14の一群はともに、鰭部外面を削り出し（切り出し）て正段を作る。鴟尾１、５、７、13は、大塚元治所蔵、現在の所在未確認。鴟尾２～４、６、８～12、14は姫路市埋蔵文化財センター所蔵。													

	文献	掲載鴟尾
i	武藤誠 1936「第五　下太田廃寺趾」（揖保郡）兵庫県『兵庫懸史蹟名勝天然紀念物調査報告』第十三輯　図版第十三	5
ii	鎌谷木三次 1942「下太田廃寺」『播磨上代寺院址の研究』成武堂 p.127、図版38・39	5，13
iii	井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（上）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集６（376号）pp.231－232 井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（下）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集７（377号）pp.261－263（図なし）	1
iv	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（57　打越瓦窯址）pp.112－113（図なし）	（1）
v	今里幾次 1995「太子町の古瓦出土遺跡」『播磨古瓦の研究』真陽社　p.334 （※初出1989『太子町史』第三巻）	1，5，13
vi	今里幾次 1995「播磨古瓦研究序説」『播磨古瓦の研究』真陽社 p.20、図版六	1
vii	今里幾次 1996「２　太子町付近の古代寺院」（第三章　古代の太子町　第四節　古代の寺社と文化）太子町史編集専門委員会『太子町史』第一巻 p.368	1，5，13
viii	今里幾次 1997「第３章　龍野市奥村廃寺の古瓦」龍野市教育委員会編『奥村廃寺－調査の概要と出土瓦の研究－』p.44	1，12
ix	大谷輝彦 1997「１　下太田廃寺（第１次調査）」『TSUBOHORI　平成７年度（1995）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会 p.６	6，12

x	大谷輝彦 1998「１　下太田廃寺（第２次調査）」『TSUBOHORI　平成８年度（1996）姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会 p.12	3
xi	大谷輝彦 1999「４　下太田廃寺（第３次，第４次調査）」『TSUBOHORI　平成９年度（1997）　姫路市埋蔵文化財調査略報』姫路市教育委員会 p.６	２，４，８－11, 14
xii	大谷輝彦 2002「餝磨郡，神前郡，揖保郡（一部）の古代寺院」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨』第３回播磨考古学研究集会　資料集 pp.83－84	１－４，６－11，13，14
xiii	大谷輝彦 2003「餝磨郡，神前郡，揖保郡東部の古代寺院」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨　－第３回播磨考古学研究集会の記録－』第３回播磨考古学研究集会　記録集 p.61	１，２，７－９，11，13
xiv	たつの市立埋蔵文化財センター編2007『特別展　西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』たつの市立埋蔵文化財センター図録４　pp.14，44	１，９
xv	今里幾次2010「Ｔ17）下太田廃寺」（５　官衙と寺の時代）姫路市史編纂専門委員会編『姫路市史』第七巻下　資料編　考古　姫路市 pp.628，629	１－３，６，９，10
xvi	姫路市埋蔵文化財センター編 2017『姫路の古代寺院をたずねて』姫路市教育委員会 巻頭図版４	３，６，９

26. 金剛山廃寺（たつの市揖保川町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○	○								表採	ⅰ－vii
備考	鴟尾１は、鈍い稜線を持つ山形の脊稜を挟んで、両側の胴部に凸型に唐草文を削り出す。萩本忠市氏旧蔵。現所在不明。文献ⅱによれば、鴟尾１の所在については、今里幾次氏の教示で昭和23年９月の播磨郷土文化協会の例会で萩本氏が初めて供覧されたとし、萩本氏他界後に竜野市立図書館に寄贈されたとの情報をもとに確認したが所在不明だったという。													

文献		掲載鴟尾
ⅰ	井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（上）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集６（376号）p.233（図なし） 井内功・井内潔 1967「播磨の鴟尾（下）」史迹と美術同攷会『史迹と美術』第37集７（377号）p.261－263（図なし）	（１）
ⅱ	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（116　金剛山廃寺）p. 154（図なし）	（１）
ⅲ	今里幾次 1995「揖保川町金剛山廃寺の古瓦－律令制における地方豪族のあり方－」『播磨古瓦の研究』真陽社 p.221　（※1985年初出　原題「播磨，金剛山廃寺の古瓦」『兵庫史の研究』神戸新聞出版センター」）	1
ⅳ	岸本道昭 2001「金剛山廃寺」（Ⅱ　揖保川町の考古資料　３　河内地区の考古資料）揖保川町史編纂専門委員会（編）『揖保川町史』第３巻（史料編）　揖保川町 p.265	1
ⅴ	岸本道昭 2002「揖保郡南部の古代寺院　－金剛山、小犬丸中谷、中垣内、小神、中井、奥村の各廃寺－」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨』第３回播磨考古学研究集会 資料集 p.95	1
ⅵ	岸本道昭 2003「揖保郡南部の古代寺院」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨　－第３回播磨考古学研究集会の記録－』第３回播磨考古学研究集会　記録集 p.71	1
ⅶ	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007『特別展　西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』たつの市立埋蔵文化財センター図録４ p.34	1

27. 中井廃寺（たつの市龍野町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良，平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○						表採	i
2	白鳳			○	○		○	○					表採	ii－v
備考	鴟尾１は、１条の突帯と面違鋸歯文縁の一部が残る「蓮華文帯鴟尾」縦帯部の破片。文献ｉでは、鴟尾１とは別の鰭部の破片１点についても記載される。井内古文化研究室旧蔵。鴟尾２－１は、「蓮華文帯鴟尾」縦帯部の蓮華文（笵A、華文飾板Ⅰ型）の破片。鴟尾２－２は、脊稜に山形の稜線をもち、胴部に唐草とみられる文様が凸型に削り出される。鴟尾２－３・４は突帯をもち、鴟尾２－４・５は鰭部外面に削り出し（切り出し）て、正段を作り出す。鴟尾２－１～５は、稗田三郎氏たつの市埋蔵文化財センター所蔵。※これらの破片の他に、未報告資料として縦帯部，鰭部，腹部が残存する破片１点が採集され、たつの市埋蔵文化財センターに所蔵されている。縦帯部には１条の突帯と、蓮華文（おそらく笵A，華文飾板Ⅰ型）の剥離痕が２箇所認められる。また、腹部の内面には、同心円文の当て具痕も認められる。													

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（60　中井廃寺）pp. 111, 114	1
ii	今里幾次 2001「龍野市中井廃寺の蓮華文帯鴟尾」神戸史学会編『歴史と神戸』第40巻第１号	2
iii	岸本道昭 2002「揖保郡南部の古代寺院　－金剛山、小犬丸中谷、中垣内、小神、中井、奥村の各廃寺－」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨』第３回播磨考古学研究集会　資料集 p.106	2
iv	岸本道昭 2003「揖保郡南部の古代寺院」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨　－第３回播磨考古学研究集会の記録－』第３回播磨考古学研究集会　記録集　p.79	2
v	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007「中井廃寺」『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』pp.12，44	2

28. 中垣内廃寺（たつの市揖西町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良						○	○					表採	ｉ，ii
備考	鴟尾１は、縦帯部に単弁八葉蓮華文（華文飾板の今里新分類Ⅲ型）を貼り付ける「蓮華文帯鴟尾」。破片のため不明瞭だが、外側に１条の突帯を貼り付けているとみられる。鰭部外面には削り出し（切り出し）て正段を作る。たつの市埋蔵文化財センター所蔵。 ※鴟尾１は、一般個人表採資料。岸本道昭氏（たつの市）によれば、当該個人の表採資料の出土地については信憑性に欠けるため、実際の出土地については今後の発掘調査資料との検証が必要との意見を得ている。													

	文献	掲載鴟尾
i	今里幾次 2007「西播磨の古代寺院－蓮華文帯鴟尾とその背景－」『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』講演会資料	1
ii	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007「中垣内廃寺」『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』pp.13，44	1

29. 香山廃寺（たつの市新宮町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良，平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○	○				第１次調査Ｓ１地区 ※推定金堂跡	i
備考	鴟尾１は、縦帯部に１条の突帯を貼り付けているが、鰭部、胴部には文様は認められない。たつの市埋蔵文化財センター所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	新宮町教育委員会 1987「（ｄ）古瓦」（第３章　香山廃寺の調査　第２節　出土遺物）香山遺跡発掘調査団編『香山』新宮町文化財調査報告７ 新宮町教育委員会 p.30	1

30. 千本屋廃寺（宍粟市山崎町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○									建物跡Ⅲ東面付近 ※推定講堂跡	i －iv
2	白鳳							○					建物跡Ⅰ北面瓦落ち中 ※推定塔跡	i －iii
3	白鳳			○									表採	iv
備考	鴟尾１は、胴部外面に凹型の渦巻き状の唐草文を浅く削り取って作り出す。鴟尾２は、鰭部外面を削り出し（切り出し）て正段を作る。いずれも宍粟市教育委員会所蔵。鴟尾３は、やや太い沈線で唐草とみられる文様を施した胴部の破片。たつの市埋蔵文化財センター所蔵。													

文献		掲載鴟尾
i	五十川伸矢 1982「３　鴟尾」（Ⅳ　出土の遺物）千本屋廃寺跡発掘調査団編『播磨千本屋廃寺』山崎町教育委員会 p.23	1，2
ii	義則敏彦 2002「宍粟郡の古代寺院　－千本屋－」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨』第３回播磨考古学研究集会　資料集 p.130	1，2
iii	義則敏彦 2003「揖保郡北部、宍粟郡の古代寺院」第３回播磨考古学研究集会実行委員会『古代寺院からみた播磨　－第３回播磨考古学研究集会の記録－』第３回播磨考古学研究集会　記録集　p.99	1，2
iv	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007「千本屋廃寺」『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』p.35	1，3

31. 早瀬瓦窯跡（佐用郡佐用町上月）

遺跡種別	時代
窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○	○	○			○	○				３号窯２回目改修操業面下層整地層	i －iii
2	白鳳							○					埋土上層	ii
3	白鳳							○					近世の谷状落ち込み	ii
4	白鳳												３号窯２回目改修操業面下層整地層	ii
5	白鳳		○	○	○			○	○				瓦堆積層	ii
6	白鳳							○					１回目改修操業面に伴う瓦集積層，窯壁崩落層	ii

7	白鳳							○					表採	ii
8	白鳳			○	○								表採	ii
9	白鳳								○				表採	ii
10	白鳳			○									表採	ii
11	白鳳		○										表採	ii
備考	早瀬廃寺北側に近接して５基の瓦窯が見つかっている。３号窯は、発掘調査によって焼成部が部分的に検出されており、半地下式有階登窯であることが分かっている。出土した鴟尾は、主に３号窯の２回目操業面の下層の整地層中に階段状の瓦列として検出されている。文献ⅰ，ⅱでは、鴟尾には青灰色還元硬質焼成された一群（鴟尾１～３）と橙色酸化軟質焼成（鴟尾４～11）の一群に大別できるとし、それぞれの破片から２種類の復元図が提案されている。〔還元硬質焼成の一群〕鴟尾１-１、２は、鰭部外面を削り出し（切り出し）て正段を作る。段の輪郭は端部の手前に向かって曲線を描き、端部は帯状に縁取られたような表現となり、鰭部の上方端部には抉り込みが入る。鴟尾１-３は、頂部に近い突帯状の脊稜と正段をもつ胴部の破片で、脊稜は両縁に円形の抉り込みを一定間隔空けて連続に施して鋸歯状を呈する。鴟尾１-４は正段を持つ胴部。鴟尾１-６は、頭部の上部前端の破片で上面に凸型長楕円形の飾りが貼り付けられる。〔酸化軟質焼成の一群〕鴟尾４-１は、鰭部外面に削り出して正段を作る。鴟尾７は、鰭部端部に幅広い帯状の縁取りを持つ。鴟尾４-２～６は、胴部～頭部の破片だが、特に文様は施されない。鴟尾８は、正段の表現と鴟尾１-３の脊稜の表現に似た鋸歯状の抉り込みの一部が残る幅広の突帯をもつ。鴟尾１-６、４-５から、いずれの頭部も前面部が内側に入る、ソケット状になっていたとみられる。鴟尾１～11は、佐用町教育委員会所蔵。													

文献		掲載鴟尾
ⅰ	藤木透 2004「５　早瀬瓦窯」佐用郡教育委員会『平成14年度　埋蔵文化財調査年報』佐用郡文化財報告８　pp.11，12	1
ⅱ	藤木透 2006「第3節　遺物」（第３章　調査の方法と成果）『早瀬瓦窯』佐用町文化財報告書14　佐用町教育委員会 pp.51－56，61－64，81，82，図版14，15，17，18，20－23，27，28	1－11
ⅲ	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』p.37	1

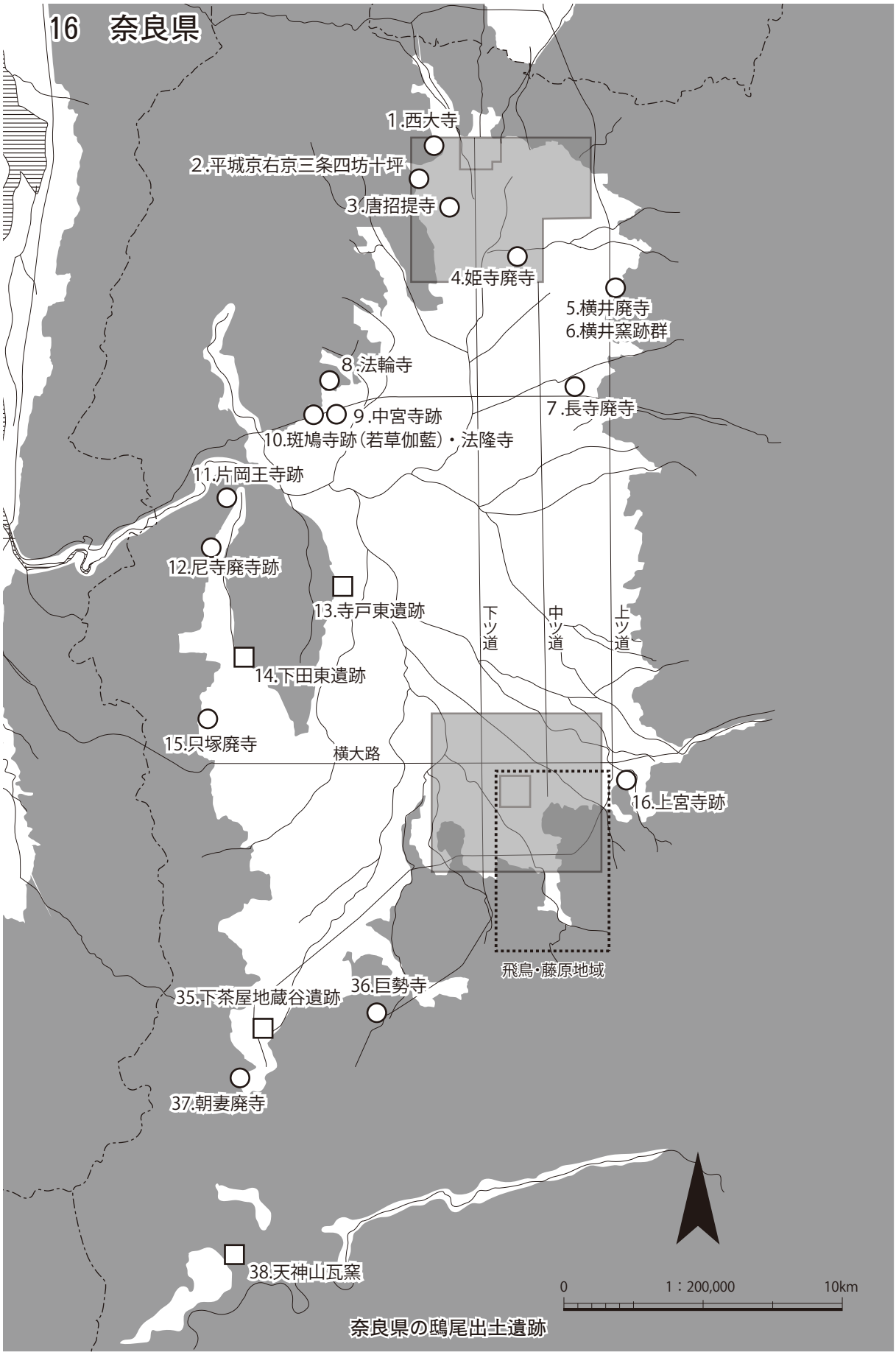
32. 伝 伊勢村

遺跡種別	時代
不明	不明

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○						表採地不詳	ⅰ－ⅵ
備考	鴟尾１は、縦帯に１条突帯と一つの面違鋸歯文縁複弁六葉蓮華文（笵型A、華文飾板Ⅰ型）が貼り付けられる「蓮華文帯鴟尾」の縦帯部分の破片である。文献ⅰでは、大貫繁次氏が「数年前」に姫路市の「師範学校蔵古瓦を一見」した際に、伊勢村出土といわれる「蓮華文の下方に凸状の一帯を有す」る資料を見つけたことが記載されている。また、今里幾次氏は、文献ⅱでは、『大貫繁次拓本集』に「伊勢村」と注記した瓦製鴟尾の拓本を取り上げ、また文献ⅳで、「赤松啓介拓本（旧姫路師範学校所蔵瓦　神戸市立博物館寄託）」を取り上げ「揖保－伊セ」の注記がある鴟尾の拓本を大貫繁次氏の拓本とともに掲載している。詳細な採集場所は不明だが、峰相山窯跡群周辺で採集された可能性は高い。実物資料については現所在不明。													

文献		掲載鴟尾
ⅰ	大貫繁次 1969「伝峯相山鶏足寺址出土の鴟尾瓦に就て」『郷土文化』第９輯 p.１（図なし）※1934年執筆。	（１）
ⅱ	今里幾次 1980「竜野付近の古代寺院」『播磨考古学の研究』p.343（図なし）（※1978年初出　「龍野付近の古代寺院と駅制」『龍野市史』第一巻　龍野市）	（１）
ⅲ	大脇潔 1983「古代寺院の造営と工人の移動－蓮華文帯鴟尾を中心として」奈良国立文化財研究所創立30周年紀念論文集刊行会編『文化財論叢』 p.306（図なし）	（１）
ⅳ	今里幾次 1995「揖保川町金剛山廃寺の古瓦　－律令制における地方豪族のあり方－」『播磨古瓦の研究』真陽社　p.232　（※1985年初出　原題「播磨，金剛山廃寺の古瓦」『兵庫史の研究』神戸新聞出版センター」）	1

v	今里幾次 2007「西播磨の古代寺院－蓮華文帯鴟尾とその背景－」『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』講演会資料	1
vi	たつの市立埋蔵文化財センター編 2007「千本屋廃寺」『西播磨の古代寺院と蓮華文帯鴟尾』p.44	1


16 奈良県
1.西大寺
2.平城京右京三条四坊十坪
3.唐招提寺
4.姫寺廃寺
5.横井廃寺
6.横井窯跡群
8.法輪寺
7.長寺廃寺
9.中宮寺跡
10.斑鳩寺跡（若草伽藍）・法隆寺
11.片岡王寺跡
12.尼寺廃寺跡
13.寺戸東遺跡
下ツ道
中ツ道
上ツ道
14.下田東遺跡
15.只塚廃寺
横大路
16.上宮寺跡
飛鳥・藤原地域
35.下茶屋地蔵谷遺跡
36.巨勢寺
37.朝妻廃寺
38.天神山瓦窯
0
1：200,000
10km
奈良県の鴟尾出土遺跡

飛鳥・藤原地域の鴟尾出土遺跡

1．西大寺（奈良市西大寺町）

遺跡種別	時代
寺院	奈良－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良		○	○			○	○					寺所蔵品・旧境内出土・食堂院地区出土	i －iv
備考	i は寺所蔵資料。胴部下端に珠文帯があるのは唐招提寺と同じスタイル。『西大寺資財流記帳』より、薬師金堂には金銅製鴟尾が使用されていたとわかる。													

	文献	掲載鴟尾
i	小澤毅 1990「iii 道具瓦・塼」（第３章 遺物、３ 瓦塼）奈良県教育委員会・奈良国立文化財研究所編『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺 p.126	1
ii	奈良市埋蔵文化財調査センター 2006『西大寺寺地から出土した鴟尾』（奈良市埋蔵文化財調査センター速報展示資料23）	1
iii	今井晃樹・林正憲 2007「７　出土遺物 瓦塼類」（「西大寺食堂院・右京北辺の調査－第404・410・415次」）『奈良文化財研究所紀要2007』奈良文化財研究所 p.136	1
iv	今井晃樹・林正憲 2007「２　瓦類」『西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告』奈良文化財研究所 p.22	1

2．平城京右京三条四坊十坪（奈良市菅原町）

遺跡種別	時代
宅地	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良							○					時期不明の土坑SK1121	i，ii
備考	鰭部の上端片（外面は正段型、内面は逆段型）と思われ、厚さは５～5.5cmと比較的厚い。鰭の上端面はやや内傾する。粘土紐による成形。													

	文献	掲載鴟尾
i	大西貴夫 2000「平城京跡1999年度発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1999年度 第１分冊』奈良県立橿原考古学研究所 pp.35－37	1
ii	大西貴夫 2011「11区の調査」奥井智子編『平城京右京三条三坊・四坊』奈良県立橿原考古学研究所 pp.54－55	1

3．唐招提寺（奈良市五条町）

遺跡種別	時代
寺院	奈良－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良						○	○					金堂・講堂間出土	iii
2	奈良			○			○						金堂東・礼堂南間出土	iii
3	奈良			○			○						寺蔵品	i －iv
4	奈良		○	○	○	○	○	○	○	44.2	85.4	120.4	金堂大棟西方所用	i，ii，iv－vi
備考	鴟尾４は完形で、平成大修理の際に大棟西方から降ろされた。表面の風食を根拠として、創建時には大棟東方に据えられたとされる（文献iv）。現状のひび割れ破損状況から推測すれば、粘土紐による成形と思われる。特に頭部につながる胴部のアーチ部分には横方向のアーチ状のひび割れが明瞭で、粘土紐をアーチ状に並べて成形した可能性がある。以下は文献viによる。腹部の上部には猪ノ目形の穿孔（約半分の遺存）があり、後補とされる瓦質の蓋（ハスの葉をかたどる）を伴うが、蓋の年代は不明。基底部には木目痕、胴部外面に製作時の布目痕・薄い粘土による補修痕あり。胴部内面の屈曲部にはコモ圧痕があり、製作時の支柱使用が想定される。縦帯の突帯は断面半円形の型引きで、連珠文は半球形の型で１点ずつ型押しされる。腹部の基底部中央には蒲鉾形の刳り形がある。鰭端面にはコモ状圧痕ありとされる（ただし、縄叩き痕の可能性もあり）。													

	厚さは部位によって大きく異なり、頭部で約５cm、胴部屈曲部で約10cm、腹部の上部で1.5cm前後。鴟尾１～鴟尾３も同型式。

文献		掲載鴟尾
i	沢村仁 1969「瓦」奈良六大寺大観刊行会編『唐招提寺Ⅰ』（奈良六大寺大観 第十二巻）岩波書店 pp.46－47	3，4
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（20　史跡 唐招提寺）pp.63－64	3，4
iii	平松良雄 1995「瓦磚」前園実知雄編『唐招提寺防災施設工事･発掘調査報告書』唐招提寺 pp.131－133	1－3
iv	大脇潔 1999「天平の甍」『日本の美術　No.392 鴟尾』至文堂 pp.76－77	3，4
v	奈良県教育委員会文化財保存課・文化財保存事務所 2002『国宝唐招提寺金堂保存修理事業現場公開 現地説明会資料』奈良県教育委員会文化財保存課・文化財保存事務所	4
vi	奈良県教育委員会事務局文化財保存事務所 2009「瓦調査編」『国宝唐招提寺金堂修理工事報告書[瓦調査・発掘調査編]』奈良県教育委員会 pp.１－３	4

４．姫寺廃寺（奈良市東九条町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳				○	○							寺域北部	i，ii

文献		掲載鴟尾
i	山本忠尚 1977「姫寺跡」佛教藝術學會『佛教藝術』第116号 毎日新聞社 pp.42－44	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（19　姫寺廃寺）p.72	1

５．横井廃寺（奈良市藤原町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥			○		○		○					伝講堂付近	i，ii
備考	粘土紐による成形。脊稜・縦帯の突帯は、線刻による接合キズを加えたのちに粘土紐の貼り付けで成形される。縦帯の中央には沈線１条が線刻される。													

文献		掲載鴟尾
i	原田憲二郎・島軒満 1997「横井廃寺の軒瓦について」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1996』奈良市教育委員会 pp.４－５	1
ii	廣岡孝信 2005「薬師寺蔵西川文庫 横井廃寺の鴟尾」加藤朝胤編『薬師寺』第144号 法相宗大本山薬師寺 pp.26－30	1

６．横井窯跡群（奈良市藤原町）

遺跡種別	時代
瓦窯	飛鳥

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥												表採	i
備考	詳細未報告。													

文献		掲載鴟尾
i	中井公・立石堅志 1984「Ⅲ 出土遺物（３　横井窯群の調査）」『奈良市埋蔵文化財調査報告書 昭和59年度』奈良市教育委員会 pp.４－５	1

7．長寺廃寺（天理市柳本）

遺跡種別	時代
寺院か	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳か							○	○				溝	i

文献		掲載鴟尾
i	青木勘時 1995「長寺遺跡第14次調査」『天理市埋蔵文化財調査概報平成６年度国庫補助事業』天理市教育委員会 pp.20－21	1

8．法輪寺（生駒郡斑鳩町三井）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥			○		○	○	○	○				講堂跡出土	i，ii
2	飛鳥			○									塔北側瓦溜	iv，v
3								○					金堂北側近世の瓦溜	iii，v
4								○					塔北側瓦溜	iv，vi
備考	外面にはいずれも赤色顔料（ベンガラ）が付着。鴟尾１と鴟尾２が接合（文献vi）。鰭部片には、粘土紐成形に起因する剥離痕が認められる。													

文献		掲載鴟尾
i	森郁夫 1977「鴟尾残闕」町田甲一編『大和古寺大観』第一巻　法起寺 法輪寺 中宮寺 岩波書店 p.36	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（16　法輪寺） pp.69－70	1
iii	平田政彦 2007「５　法輪寺旧境内遺跡（第12次）」『斑鳩町内発掘調査概報平成13年度（2001）』斑鳩町教育委員会　pp.７－８、巻頭図版１	3
iv	平田政彦 2012a「（２）法輪寺旧境内遺跡（02－１次・第14次）調査」『斑鳩町内遺跡発掘調査概報平成15（2003）年度』斑鳩町教育委員会 斑鳩文化財センター　pp.14－15、22、図版22、巻頭図版２	2，4
v	平田政彦ほか 2012ｂ「法輪寺」斑鳩町教育委員会斑鳩文化財センター編『飛鳥時代の斑鳩と小田原』斑鳩町・小田原市 pp.19－22	2，3
vi	平田政彦 2013「（６）法輪寺旧境内遺跡（05－１次・第15次）調査」『斑鳩町内遺跡発掘調査概報平成17（2005）年度』斑鳩町教育委員会 斑鳩町文化財活用センター pp.12－21	4

9．中宮寺跡（生駒郡斑鳩町法隆寺東）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
－	飛鳥	A					○						現代土坑	i：正報告はiii
1	飛鳥	A		○									寺域南東隅付近	iii
2	飛鳥	A		○									金堂	iii
3	飛鳥	A		○									寺域北東部	iii
4	飛鳥	A		○									塔	iii
5	飛鳥	A		○									塔	iii
6	飛鳥	A		○									塔・金堂間	iii
7	飛鳥	A		○									南門	iii
8	飛鳥	A		○									塔	iii

9	飛鳥	A						○					–	iii
10	飛鳥	A						○					金堂	iii
11	飛鳥	A						○					金堂	iii
12	飛鳥	A					○	○					金堂	iii
13	飛鳥	A		○			○						塔	iii
14	飛鳥	A							○				塔	iii
15	飛鳥	A		○			○		○				寺域北東部溝	ii
16	飛鳥	A		○									金堂	ii
17	飛鳥	A					○	○					金堂付近の後世瓦溜まり	ii
18	飛鳥	A					○	○					金堂・塔間の近世瓦溜まり	ii
19	白鳳	B						○					金堂北側	ii
20	白鳳	B？							○				寺域西辺南北溝	ii
21	不明	不明											金堂	ii
備考	鴟尾１～14の胎土は、三井瓦窯出土瓦との類似が指摘される（文献iv）。鴟尾14の外面には線刻あり。A・B型式ともに粘土紐による成形で（文献ⅱ）、鴟尾Aの胴部片には赤色顔料、その基底部には布目痕の認められる個体がある。鴟尾Aは焼成堅緻で灰色を呈し、胎土に白色砂粒が目立つ。この特徴は中宮寺創建に採用された素弁８弁蓮華文軒丸瓦（奥山廃寺式）に類似する。													

文献		掲載鴟尾
i	荒木浩司 2008「中宮寺跡（第11次）調査」『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成16年度（2004）』斑鳩町教育委員会 p.10	–
ii	大西貴夫・岡田雅彦 2013「第Ⅱ章第３節３－（１）瓦塼」荒木浩司編『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』斑鳩町教育委員会斑鳩文化財活用センター pp.122－127	15－21
iii	平田政彦・荒木浩司・志賀崇 2013「第Ⅱ章第３節５－（６）道具瓦」 荒木浩司編『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』斑鳩町教育委員会斑鳩文化財活用センター pp.257－259	1 －14
iv	奥田尚 2013「石材の鑑定及び砂礫の観察」 荒木浩司編『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』斑鳩町教育委員会斑鳩文化財活用センター pp.272－277	1 －14

10. 斑鳩寺跡（若草伽藍）・法隆寺

（生駒郡斑鳩町法隆寺山内）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥	1			○	○		○	○				金堂跡出土（暗褐色土）	iii，iv，viii
2	飛鳥	2	○	○	○	○	○	○	○				玉虫厨子所用	iii，iv
3	飛鳥	3	○	○			○	○					金堂創建所用か（褐色土）	iii，iv，viii
4	飛鳥	4	○	○				○					塔跡出土、中門所用か（褐色土）	iii，iv，viii
5	飛鳥	5		○									金堂跡（KC45瓦溜） 出土	iii，iv，viii
6	飛鳥	6		○			○	○	○				大講堂西北部出土	iii，iv
7	飛鳥	7					○	○					大講堂北東（SE7074）出土	iii，iv
8	白鳳	8			○		○	○					伝法堂の礎石根石として出土、西院伽藍金堂所用	iii，v
9	白鳳	9	○	○		○	○						西院金堂、東室付近出土	iii，v
10	白鳳	10		○			○						綱封蔵、伝法堂出土	iii，v
11	白鳳	11											西院回廊東南隅（整地土）	iii，v
12	奈良	12		○					○				妻室出土、創建僧坊か金堂補修用か	iii，vi
13	奈良	13		○			○		○				同上	iii，vi

14	飛鳥							○					井戸7074、KA61土坑出土	viii
15	飛鳥							○					南大門南東の溝出土	vii
16	飛鳥			○	○		○	○	○				若草伽藍寺域北東部の古代整地土	ix，x
17	飛鳥			○									西院伽藍講堂北東側の平安時代包含層	xi
備考	型式は文献iiiによる。出土地の（）は文献iiiにおける出土遺構または土層。鴟尾１には胴部・腹部に、鴟尾８，９，12，13には腹部に羽根文様，鴟尾７は縦帯に唐草文、鴟尾10には縦帯に六花文あり。鴟尾16の脊稜・縦帯・段型は線刻下書きの後に削り出され、脊稜の中央には沈線１条がある。ただし、脊稜や段型の削り出しがやや不十分な点も認められる。粘土紐による成形。軒丸瓦７Ａ型式ｂ段階が共伴出土。鴟尾17は粘土紐による成形で、胴部外面には別途粘土を貼り付けた後に文様を削り出す。													

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』(14　若草伽藍跡（斑鳩寺跡)) pp.66－67	－
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（15　史跡 法隆寺）pp.67－69	６，８
iii	毛利光俊彦 1992「鴟尾」 法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝 瓦』 小学館 pp.271－276	１－13
iv	花谷浩 1992「１　飛鳥時代の瓦」法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝 瓦』小学館 p.357	１－７
v	花谷浩 1992「２　白鳳時代の瓦」法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝 瓦』小学館 p.359	８－11
vi	毛利光俊彦 1992「３　奈良時代の瓦」法隆寺昭和資材帳編集委員会『法隆寺の至宝 瓦』小学館 p.361	12，13
vii	平田政彦 2005「平成16年度 若草伽藍跡西方の調査概要」『平成16年度奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会 p.34	15
viii	今井晃樹 2007「２　遺構･遺物解説」（第Ⅱ章 遺構･遺物）森郁夫・深澤芳樹編『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈良文化財研究所 pp.67，83，113，123	１，３－５
ix	小林千夏 2008「史跡法隆寺旧境内（西院大垣)」大西貴夫他編『大和を掘る26』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 p.24	16
x	清水昭博 2009「瓦」奈良県教育委員会文化財保存事務所編『重要文化財法隆寺西院大垣（東大門北方）修理工事報告書』奈良県教育委員会 pp.87－89	16
xi	中野咲 2019「史跡法隆寺旧境内上御堂東南土塀」奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報2018年度（第１分冊)』奈良県立橿原考古学研究所 p .59	17

11. 片岡王寺跡（北葛城郡王寺町本町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥						○	○					伝出土	i，ii
2	飛鳥			○	○		○	○					伝出土	ii
3	白鳳							○					寺域北東部：近代造成土	iii，v
4	白鳳			○			○	○					寺域東辺部：古代整地土	iv，v
5	白鳳							○					寺域北東部：重機掘削時（近代造成土）	v
備考	鴟尾２は胴部と鰭部内･外面に正段型、縦帯は幅３～3.5cmの突帯、脊稜は幅７～10cmの断面方形（文献ii)。鴟尾３・鴟尾４（文献v図59－１・２）は、別途粘土を貼り付け後の段型・縦帯削り出し、ハケメ調整仕上げ、粘土紐成形、胎土･焼成が類似する。鴟尾４は縦帯幅４cm。鴟尾５（文献v：図59－３）は摩滅のため外面調整痕が認められず、鰭部とすれば鴟尾３・４とは鰭端部形態が異なる。粘土紐による成形。胴部透し穴片の可能性もあり。													

文献		掲載鴟尾
i	石田茂作 1936「片岡王寺」石田茂作編『飛鳥時代寺院址の研究』第一書房1977年復刻 p.314、図版第168	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（17　片岡王寺跡）pp.70－71	1，2
iii	廣岡孝信 2004「達磨寺遺跡」 奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報2003年』（第２分冊）奈良県立橿原考古学研究所 p.221	3
iv	鈴木一議 2007「片岡王寺跡第５次調査・達磨寺第17次調査」『奈良県遺跡調査概報2006年』（第２分冊）奈良県立橿原考古学研究所 pp.９－10	4
v	廣岡孝信 2013「鴟尾」『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』 奈良県立橿原考古学研究所 pp.90－91	３－５

12. 尼寺廃寺跡（香芝市尼寺）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥							○					伝出土	i －iii
2	白鳳	1	○	○			○	○	○				塔基壇堆積土・南面回廊南側	iv
3	白鳳	2						○					回廊北西隅の北側の土坑	iv
4	白鳳	3											回廊北東隅付近・塔基壇	iv
5	白鳳	1	○	○									南面回廊東端付近	v：鴟尾１
6	白鳳	1						○					南面回廊東端付近	v：鴟尾２
7	白鳳	1					○	○					南面回廊東端付近	v：鴟尾３
8	白鳳	1					○		○				南面回廊東端付近	v：鴟尾４
9	白鳳	1		○									北面回廊北側付近	v：鴟尾５
備考	鴟尾１の縦帯は、型押し連珠文の両側が型引きの断面半円形突帯２条によって区画され、鰭外面の正段型は、鰭端部を縁取る突帯まで続く。外面は基底部付近が無文である。製作痕跡は胴部の外面に縄叩き痕、内面に同心円文当て具痕が残る個体がある。基底部面にはワラ圧痕が残る破片がこの型式の胴部片と報告されるが、その基底面は直線的な平坦面とは言い難い例が大半である。厚さ５cm程度（文献iv）。胴部の透し穴とみられる弧状の切り取り面を残す破片も出土している。粘土紐による成形と考えられるが、入念な叩き締めのためか、粘土紐の接合単位は明瞭に見えない。 この鴟尾１の頭部～胴部の形態は、文献ivの第59図鴟尾１－１と文献ｖの第36図鴟尾1によって復元でき、頭部は開口せずに無文かつ平坦で、胴部外面に正段型を削り出し、頭部との屈曲部には断面半円形の突帯１条を型引きする。脊稜にも断面半円形の突帯１条が型引きされる。この２片の厚さは比較的薄く３～４cm程度。段型の幅は2.5～３cmである。頭部面から胴部へ約８cmの位置には胴部正段型に直交する断面半円形の型引き突帯２条が縦方向につけられる。この２片は上記の鰭部・胴部片に比べて粘土紐成形痕が比較的認めやすく、やや軟質の焼成である。したがって厚さ・粘土紐痕跡・焼成の点で異なる傾向にあるため、別個体の可能性も想定できる。 鴟尾２は鰭外面の正段型が鰭端部面にも及ぶ特徴があり、鰭部内面に縄叩き痕を残す破片がある（文献iv）。胴部付近は無文とみられ（文献iv：第61図鴟尾２－２、鴟尾２－３）、この２点が鴟尾胴部片であれば、胴部の下に成形台を用意したうえで、その上にアーチ状に粘土紐を被せることによって成形したような粘土紐の剥離痕が認められ、小型品の可能性がある。厚さ３～５cm。													

文献		掲載鴟尾
i	保井芳太郎 1932「片岡尼寺」『大和上代寺院志』大和史学会 図版第63	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（18　尼寺廃寺）pp.71－72	1
iii	太田三喜 1997「尼寺廃寺の瓦」天理大学附属天理参考館編『天理参考館報』第10号 天理大学出版部 pp.57－60	1
iv	山下隆次 2000「鴟尾」『尼寺廃寺Ⅰ－北廃寺の調査－』香芝市教育委員会 pp.73－77	２－４
v	西垣遼 2016「出土遺物」『尼寺廃寺Ⅱ』香芝市教育委員会 pp.51－53，62	５－９

13. 寺戸東遺跡（北葛城郡広陵町寺戸）

遺跡種別	時代
寺院か	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1								○					溝	i
備考	白鳳か。													

	文献	掲載鴟尾
i	松本洋明 1985「寺戸東遺跡発掘調査概報」奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報1984年度（第２分冊）』奈良県立橿原考古学研究所 p.233	1

14. 下田東遺跡（香芝市下田東）

遺跡種別	時代
寺院、官衙か	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳					○	○	○					葛下川旧河道	i，ii
2	白鳳						○	○					葛下川旧河道	ii
備考	鴟尾１の鰭部先端は階段状に途切れる特徴あり。鴟尾１・鴟尾２は同一個体の可能性があり、縦帯に削り出された連珠文はコンパス施文による割り付け後、削り出される（文献ii）。再検討の結果、２点ともに粘土紐による成形と判明し、鴟尾１の破断面には粘土紐２条を横並び一括で積み上げる痕跡も認められる。焼成時の焼き縮みによる亀裂が目立つ。													

	文献	掲載鴟尾
i	湯本整 2006「瓦」香芝市二上山博物館編『下田東遺跡発掘調査概報Ⅰ（平成13・14年度）』香芝市教育委員会 pp.33－35	1
ii	辰巳陽一 2011「瓦塼類」 小島靖彦・ 辰巳陽一編『下田東遺跡』 香芝市教育委員会 pp.235－236	1，2

15. 只塚廃寺（葛城市染野）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○						中世の井戸	i
2	白鳳							○					金堂相当建物上の後世の盛土	ii
3	白鳳							○					金堂相当建物上の後世の盛土	ii
4	白鳳			○									金堂相当建物の近辺	iii
備考	４点の胴部・鰭部の外面には段ではなく、匙面状の表現が共通し、同型式とみられる。鰭部内面には段型なし。粘土紐による成形。鴟尾４には腹部の欠損痕あり。													

	文献	掲載鴟尾
i	清水昭博 2003「第４次調査 出土遺物 鴟尾」大西貴夫編『只塚廃寺･首子遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所 pp.32－34	1
ii	大西貴夫 2003「第２、５次調査の遺物」大西貴夫編『只塚廃寺･首子遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所 pp.66、68	2，3
iii	神庭滋 2012「98703 只塚廃寺」『葛城市歴史博物館資料目録』 第４集　葛城市歴史博物館 pp.４－26	4

16. 上宮寺跡（伝 桜井市上の宮 採集）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○		○		○	○				個人蔵採集品	i，ii
備考	腹部には縦方向の段状表現があり、奈良県山田寺例に類似する。７世紀中頃か（文献ⅱ）。													

	文献	掲載鴟尾
i	岡幸二郎 1971「歴史時代 桜井市」伊達宗泰編『大和考古資料目録１』奈良県立橿原公苑考古博物館 p.102	1
ii	大西貴夫 2007「飛鳥・藤原京周辺の山寺（3）」大西貴夫編『春季特別展 山の神と山の仏』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 p.49	1

17. 安倍寺跡（桜井市安倍）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－鎌倉？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥	A類		○			○						金堂北西隅	i，ii
2	飛鳥	A類		○									中心伽藍北西部	iii，v
3	飛鳥	A類						○					寺域北縁部	iv，v
4	白鳳？	B類		○					○				不明	ii，v
備考	４は井内古文化研究所所蔵。													

	文献	掲載鴟尾
i	田中英夫 1970「第３章 ２遺物 瓦類」橿原考古学研究所編『安倍寺跡環境整備事業－発掘調査報告書－』桜井市 p.14 図版９	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（12 史跡 安倍寺跡）pp.64－65	1
iii	清水眞一 1991「１．国史跡・安倍寺の周辺地区発掘調査概要」桜井市教育委員会編『桜井市内埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書２』桜井市文化財協会 pp.２，５	2
iv	木場佳子 2008「安倍寺跡第20次発掘調査報告」桜井市教育委員会編『平成18年度国庫補助による発掘調査報告書』（桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告書第30集）桜井市教育委員会 pp.９－10	3
v	道上祥武 2021「安倍寺跡出土の鴟尾」『奈良文化財研究所紀要2021』奈良文化財研究所 pp.26－27	2－4

18. 山田寺跡（桜井市山田）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	単頭Ａ１		○	○			○	○				伝出土，南門SB001脇の溝SD629	i，iii，iv，v，vi：Ph.194－195
2	白鳳	単頭Ａ２	○	○				○	○	(47)			南門SB001脇の溝SD629	iii，iv，v，vi：Ph.194－195・197
3	白鳳	単頭Ｂ１		○				○	○				南門SB001脇の溝SD629 回廊東南隅	iv，v，vi：Ph.196－197
4	白鳳	単頭Ｂ２		○				○	○				南門SB001脇の溝SD629	iv，v，vi：Ph.196－197・199

5	白鳳	単頭C１	○	○						47			南門SB001と中門SB003の間	iv，v，vi：Ph.198－199
6	白鳳	単頭C２	○	○				○					塔と中門の間	iv，v，vi：Ph.198－199
7	白鳳	単頭D１	○	○				○					頭部片:土坑SK207（金堂北），胴部片:回廊東南隅	iv，v，vi：Ph.198－199
8	白鳳	単頭D２	○	○				○					塔西と講堂東	iv，v，vi：Ph.198－199
9	白鳳	単頭E１	○	○				○	○				東面回廊東	iv，v，vi：Ph.195－196・199
10	白鳳	単頭E２						○					金堂周辺	iv，v，vi：Ph.198－199
11	白鳳	双頭A１	○	○				○	○	(40)			金堂東の瓦敷や土坑SK206	iv，v，vi：Ph.200－201
12	白鳳	双頭B１	○	○				○	○				伝出土，東の瓦敷	iv，v，vi：Ph.200－202
13	白鳳	双頭C１	○	○				○	○	(38)		(100)	南門SB001脇の溝SD629	iv，v，vi：Ph.193，200
14	白鳳	双頭C２	○	○				○					南門SB001脇の溝SD629	iv，v，vi：Ph.201－202
15	白鳳	双頭D１		○					○				金堂東南隅付近の瓦敷	iv，v，vi：Ph.203
16	白鳳	双頭D２		○				○	○				寺域東南隅の築地SA535に伴う整地土	iv，v，vi：Ph.202－203
17	白鳳	双頭D３	○					○	○				回廊東北隅	iv，v，vi：Ph.202－203
18	白鳳	双頭D４						○	○				金堂西北隅，回廊西北隅の井戸	iv，v，vi：Ph.203
19	飛鳥			○									「伝山田寺出土」	i，vii
20	白鳳			○									「伝山田寺出土」	ii
備考	鴟尾１に天理参考館所蔵品、鴟尾12に高浜市かわら美術館所蔵品あり。													

文献		掲載鴟尾
i	保井芳太郎 1932「山田寺」『大和上代寺院志』大和史学会 p.39	1，19
ii	岡幸二郎 1971「歴史時代」伊達宗泰編『大和考古資料目録』第１集 奈良県立橿原公苑考古博物館 p.101	20
iii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（11 特別史跡 山田寺（浄土寺））pp.66－67	1，2
iv	花谷浩 2002「J 鴟尾（第Ⅴ章 遺物，２ 瓦塼類）」毛利光俊彦編『山田寺跡発掘調査報告』本文編 奈良文化財研究所 pp. 303－312	1－18
v	伊藤武 2002「F 鴟尾（第Ⅵ章 考察，３ 瓦の編年と使用堂塔の比定）」毛利光俊彦編『山田寺跡発掘調査報告』本文編 奈良文化財研究所 pp.519－524	1－18
vi	毛利光俊彦編 2002『山田寺跡発掘調査報告』図版編 奈良文化財研究所	1－18
vii	橋本輝彦 2002「旧桜井市図書館収蔵の瓦について」『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』（桜井市埋蔵文化財センター発掘調査報告第23集）桜井市教育委員会 p.42	19

19. 膳夫寺（橿原市膳夫町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？			○			○		○				詳細不明	i

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（10　膳夫寺跡）pp.62－63	1

20. 日向寺（橿原市南浦町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？							○					整地土	i

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所 1991「左京九条四坊の調査（第60－17次）」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報21』pp.23－25	1

21. 藤原京右京十一条二坊（橿原市和田町）

遺跡種別	時代
都城	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					中･近世耕作土出土	i
2	白鳳						○	○					古代遺構面直上出土	i
3	白鳳			○					?				古代遺構面直上出土	i
備考	鴟尾１～３は、同一個体か否か不明。一部の外面に平行叩き（再検討の結果、ハケメではなく平行叩きと判明）、また内面には同心円文当て具痕が残る。鰭部上端には別途粘土を貼り足し、線刻で鰭幅を割り付けしたのちに正段型を削り出す。鰭部上端の端面は内傾するように面取りされる。粘土紐による成形で、腹部は後付け。鴟尾３は腹部の可能性もあり。縦帯幅は4.8cm程度。東西16間×南北２間の長大な藤原宮期掘立柱建物の東半部付近で出土。古代整地土などからは、調査地北東に所在する田中廃寺同笵と思われる軒瓦も出土。													

文献		掲載鴟尾
i	廣岡孝信 2015「瓦塼」廣岡孝信編『藤原京右京十一条二坊』奈良県立橿原考古学研究所　pp.74－75	1－3

22. 和田廃寺（橿原市和田町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A	○	○			○	○	○					i，iii
2	白鳳	B１	○	○	○	○	○	○	○	48	76	127		i，iii
3	白鳳	B２		○				○						i
4	白鳳	C	○	○	○			○	○	(40)	(80)	(100)		iii
備考	鴟尾A類は胎土や焼成の異なるものが２個体分存在する。鴟尾B1類は完形に復元されている。													

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所 1975「和田廃寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報５』pp.39－43	1，4
ii	奈良国立文化財研究所 1976「和田廃寺第２次の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報６』pp.38－46	4
iii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（９　和田廃寺）pp.61－62	1，2，4

23. 古宮遺跡（高市郡明日香村豊浦・橿原市和田町）

遺跡種別	時代
庭園など	飛鳥

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥			○			○	○					包含層出土	i，ii
備考	6世紀末～7世紀初頭。豊浦寺創建期の鴟尾か。													

文献		掲載鴟尾
i	稲田孝司 1976「4　遺物」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告』Ⅰ 奈良国立文化財研究所 p.39	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（3　小墾田宮（小治田宮）推定地）p.55	1

24. 奥山廃寺（高市郡明日香村奥山）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○		○	○	○	○				金堂所用	i
備考	鰭部の正段や縦帯の意匠、成形手法が岡山県牛窓町寒風古窯址群出土例と酷似。立会調査で同様の小片が出土。													

文献		掲載鴟尾
i	西川雄大　2002「奥山廃寺（奥山久米寺）の調査 114－8次」『奈良文化財研究所紀要 2002』奈良文化財研究所 pp.72－74	1

25. 豊浦寺跡（高市郡明日香村豊浦）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥	A	○	○	○		○						金堂所用	iii
2	白鳳？	B		○			○	○					不明	i，ii
3	白鳳	C						○					向原寺南方	iv
備考	鴟尾B類は天理参考館所蔵。文献 ii では白鳳とするが、珠文が大きく、奈良時代のものの可能性がある。													

文献		掲載鴟尾
i	保井芳太郎 1932「向原寺」『大和上代寺院志』大和史学会 pp.141－144	2
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（2　豊浦寺跡（向原寺））pp.54－55	2
iii	清水昭博 1995「豊浦寺金堂跡の調査」清水昭博編『奈良県遺跡調査概報1994年度（第2分冊）』奈良県立橿原考古学研究所 pp.11－13	1
iv	奈良国立文化財研究所 1982『飛鳥・藤原宮発掘調査概報12』p.3	3

26. 竹田遺跡（明日香村飛鳥・東山他）

遺跡種別	時代
集落	飛鳥

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥			○									素掘り溝からの出土	i
備考	明日香村教育委員会の調査による。特徴から飛鳥寺創建期の鴟尾か。													

文献	掲載鴟尾
i　高橋幸治2012『竹田遺跡発掘調査報告書』明日香村教育委員会	1

27. 東山カワバリ遺跡（明日香村東山）

遺跡種別	時代
集落	飛鳥

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥			○	○								7世紀中葉の整地土下	i
備考	明日香村教育委員会の調査による。飛鳥寺創建期の鴟尾である可能性が高い。													

文献	掲載鴟尾
i　西光慎治・相原嘉之・清岡廣子 2000「(13) 1998－7次　東山カワバリ遺跡の調査」『明日香村遺跡調査概報　平成10年度』明日香村教育委員会 pp.31－34	1

28. 甘樫丘東麓遺跡（高市郡明日香村豊浦）

遺跡種別	時代
集落	飛鳥－白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥？			○									包含層	i

文献	掲載鴟尾
i　高田貫太 2007「瓦塼類」(「甘樫丘東麓遺跡の調査－第146次」)『奈良文化財研究所紀要2007』奈良文化財研究所 p.92	1

29. 飛鳥寺跡・飛鳥池遺跡（高市郡明日香村飛鳥）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥	A 1			○	○		○	○				中金堂・西金堂	i，v
2	飛鳥	A 2		○	○		○	○	○				飛鳥寺東方、飛鳥池東方遺跡	i，ix，x，xiii，xvii，xviii
3	飛鳥	B 1		○			○	○	○				西門	i，v，xi，xvii
4	飛鳥	B 2	○	○				○	○				飛鳥寺旧境内東南部	iii－viii，xi，xii，xv，xvii，xviii
5	白鳳	C	○	○			○	○					講堂所用	v，xv，xviii
6	白鳳	D	○	○			○	○					飛鳥寺東方・飛鳥池遺跡	ix，xiv，xviii
7	白鳳	E		○									北門付近	ii，v
8	白鳳	F		○			○	○	○				中金堂南側の参道付近、飛鳥寺北方	i，v，xvi，xvii
9	白鳳	G		○				○	○				東金堂の葺き替え。飛鳥寺北方	i，v
10	白鳳	H	○	○			○	○					東金堂周辺、飛鳥寺東北隅部	i，v，vi
備考	A～B類が創建期、C～Hは後の葺き替え時のものと考えられる。													

	文献	掲載鴟尾
i	坪井清足 1958「第五章　遺物」奈良国立文化財研究所編『飛鳥寺発掘調査報告』真陽社 p.35	1－4，8－10
ii	奈良国立文化財研究所 1978「飛鳥寺北方の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 8』pp.52－53	7
iii	奈良国立文化財研究所 1979「飛鳥寺東南部の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 9』pp.54－56	4
iv	奈良国立文化財研究所 1980「飛鳥寺東南部の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報10』pp.58－59	4
v	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（1　史跡　飛鳥寺跡（法興寺・元興寺））pp.51－54	1，3－5，7－10
vi	奈良国立文化財研究所 1983「飛鳥寺東北隅の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報13』pp.22－27	4，10
vii	奈良国立文化財研究所 1985「飛鳥寺西回廊（J地点）および西門（K地点）の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報15』pp.76－81	4
viii	奈良国立文化財研究所 1992「飛鳥池遺跡の調査（飛鳥寺1991－1次調査）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』pp.84－114	4
ix	奈良国立文化財研究所 1993「飛鳥寺の調査（1992－1次）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』pp.82－85	2，6
x	奈良国立文化財研究所 1994「飛鳥寺の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報24』pp.101－108	2
xi	花谷浩 1997「飛鳥寺の調査－1996－1・3次、第84次」『奈良国立文化財研究所年報（1997－Ⅱ）』p.47	3，4
xii	花谷浩・小澤毅・安田龍太郎・巽淳一郎 1999「飛鳥池遺跡の調査－第87次・第93次」『奈良国立文化財研究所年報（1999－Ⅱ）』奈良国立文化財研究所 pp.26－52	4
xiii	長尾充・西口壽生・花谷浩 1999「飛鳥池東方遺跡の調査－第92次・第91－6次」『奈良国立文化財研究所年報』（1999－Ⅱ）奈良国立文化財研究所 p.53－61	2
xiv	花谷浩・伊藤敬太郎・安田龍太郎 2000「飛鳥池遺跡の調査－第98次・第99－6次・第106次」『奈良国立文化財研究所年報（2000－Ⅱ）』奈良国立文化財研究所 pp.26－45	6
xv	西川雄大 2003「飛鳥寺の調査－第119－1次」『奈良文化財研究所紀要2003』奈良文化財研究所 p.107	4，5
xvi	玉田芳英 2007「飛鳥寺の調査－第143－6次」『奈良文化財研究所紀要2007』奈良文化財研究所 pp.106－107	8
xvii	石田由紀子・尾野善裕・土橋明梨紗・山本崇 2018「飛鳥寺北方の調査－第188－19次、第192－1・9次－」『奈良文化財研究所紀要2018』奈良文化財研究所 pp.106－109	2，3，4，8
xviii	土橋明梨紗ほか 2020「飛鳥寺旧境内の調査－第197－6次調査」『奈良文化財研究所紀要2020』奈良文化財研究所 pp.110－116	2，4－6

30. ドウジョウ遺跡（高市郡明日香村飛鳥）

遺跡種別	時代
不明	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳				○	○	○						ミロク石周辺で表採	i
備考	伝飛鳥板葺宮第1次調査中に耕作者から鴟尾断片の発見が報じられた。													

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所 1961「第1章　調査概要」『平城宮第1次・伝飛鳥板葺宮跡発掘調査報告』pp.17－20	1

31. 川原寺跡（弘福寺）（高市郡明日香村川原）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○		○	○						川原寺付近で表採	i
2	白鳳							○					川原寺北限	ii
備考	鴟尾１はドウジョウ遺跡や猪名寺廃寺例に酷似。弘福寺所蔵。													

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（20　史跡 川原寺跡（弘福寺））p.58	1
ii	小谷徳彦・筧和也 2004「D　道具瓦・その他の瓦磚類」（Ⅲ　出土遺物，４　瓦磚類）松村恵司・富永里菜編『川原寺地域北限の調査　飛鳥藤原第119－５次発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 p.30	2

32. 橘寺（高市郡明日香村橘）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥					○	○						不明	i，ii
備考	天理参考館所蔵。													

	文献	掲載鴟尾
i	保井芳太郎 1932「橘寺」『大和上代寺院志』大和史学会　pp.20－23	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（７　史跡 橘寺）p.59	1

33. 坂田寺跡（高市郡明日香村坂田）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥？	A	○	○		○	○	○	○	(40)			伽藍北西部	ii，iii，vi
2	白鳳	B		○			○	○	○				仏堂周辺	i，ii，vi，v
3	白鳳	C		○			○	○					伽藍北西部、一点は表採。	ii
4	白鳳	D	○	○					○				伽藍北西部	i，ii，v，vi
5	奈良	E	○	○		○	○	○	○	30	(80)	(100)	伽藍各地で出土	i－vi
6	飛鳥？	F		○		○	○	○					伽藍北西部	i

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所 1973「坂田寺跡の調査」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報３』pp.５－９	2，4－6
ii	奈良国立文化財研究所 1975「坂田寺第２次の調査」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報５』pp.33－38	1－5
iii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（４　坂田寺跡（金剛寺））p.56	1，5
iv	奈良国立文化財研究所 1991「坂田寺第６次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報21』pp.61－71	2，5
v	奈良国立文化財研究所 1993「坂田寺第８次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報23』pp.68－75	2，4，5
vi	奈良国立文化財研究所 1996「坂田寺の調査（1995－1次調査）」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』pp.87－89	1，4，5

34. 檜隈寺跡（高市郡明日香村檜前）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？	A		○			○						伽藍縁辺部	iv
2	白鳳？	B		○				○					伽藍縁辺部	iv－vi
3	白鳳？	C		○		○		○	○				南門推定地より出土	i－iv，vi

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所 1980「桧隈寺第１次（南門）の調査」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報10』pp.49－53	3
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（８　桧隈寺跡）p.60	3
iii	奈良国立文化財研究所 1983「桧隈寺第４次（門・東回廊跡）の調査」『飛鳥・藤原宮跡発掘調査概報13』pp.48－54	3
iv	若杉智宏・関広尚世・石田由紀子 2009「檜前寺周辺の調査－第155次」『奈良文化財研究所紀要2009』奈良文化財研究所　pp.99－108	1－3
v	黒坂貴裕・小田裕樹・木村理恵・渡辺丈彦 2012「檜前寺周辺の調査－第172次」『奈良文化財研究所紀要2012』奈良文化財研究所　pp.151－156	2
vi	前川歩・金宇大・山本亮・和田一之輔 2016「檜前寺周辺の調査－第184次」『奈良文化財研究所紀要2016』奈良文化財研究所　pp.108－112	2，3

35. 下茶屋地蔵谷遺跡（御所市下茶屋）

遺跡種別	時代
集落か	飛鳥－白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○	○	○	○	○	○	○	3.4	(7.6)	(9.0)	川跡	i
備考	鰭部の上端などを欠損するが、ほぼ完形・中実のミニチュア品。脊稜～頭部～底部に縦走する粘土接合痕があり、粘土塊２つからの成形か。鰭部・縦帯は削り出し成形。連珠文はコンパス施文。頭部･脊稜･胴部はミガキ調整。底部は断面蒲鉾形に抉り仕上げされる。													

	文献	掲載鴟尾
i	坂靖 2000「下茶屋地蔵谷遺跡」坂靖編『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所 pp.147－148	1

36. 巨勢寺（御所市古瀬）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥	小型						○	○				１号窯・灰原 講堂廃絶後の瓦堆積	i
2	白鳳	大型						○					講堂廃絶後の瓦堆積	i
3	白鳳	大型		○			○	○	○				講堂廃絶後の瓦堆積	i
備考	鴟尾１は薄手の作りで、胎土は比較的精良、やや軟質・灰白色の焼成。鰭の内・外面に正段を削り出す（文献ｉの第74図－16・17、第76図－９・10）。粘土紐or粘土板積み上げによる成形。鴟尾２は胎土に白色砂粒を多量に含み、硬質堅緻・灰色の焼成。鰭内面に段がなく、鰭端部をやや細く仕上げる。表面にハケメ調整が多用される（文献ｉの第74図－11・14、第76図－７）。胎土・焼成は同寺出土の巨勢寺式軒瓦（７世紀第４四半期頃）に一致する。粘土紐積み上げによる成形。鴟尾３は厚手の作りで、胎土に砂粒がやや多く、褐灰色～灰白色の焼成。鰭の段の幅が最も広く、内面には段がない。胴部や鰭内面に雑な波状文が線刻される例がある。表面にハケメ調整が多用される（文献ｉの第74図－12・13、第75図－１～４、第76図－５・８）。粘土紐積み上げによる成形。上記以外の２点（文献ｉの第74図－15、第76図－６）は、鴟尾ではないと考えられる。													

文献	掲載鴟尾
i　河上邦彦 2004「鴟尾」 河上邦彦・ 木下亘編『巨勢寺』 奈良県立橿原考古学研究所 pp.92－93	1－3

37. 朝妻廃寺（御所市朝妻）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？						○						推定金堂～西回廊間出土	i

文献	掲載鴟尾
i　関川尚功・中井公 1978「御所市朝妻廃寺発掘調査概報」前園実知雄編『奈良県遺跡調査概報1977年度』奈良県立橿原考古学研究所 pp.74－75	1

38. 天神山瓦窯（五條市今井町）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳－奈良		○	○			○	○	○	(62)	(98)	(145)		i－v
2	白鳳－奈良						○							v
3														i
4	白鳳						○							－
5	白鳳			○	○		○	○	○					vi
6	白鳳						○							vi
備考	鴟尾１は完形に復原されている。鴟尾２は鴟尾１と同型式ながら別個体（文献ｖ）、鴟尾４は天理参考館所蔵で他資料との関係は不明。鴟尾５・６は個人蔵の表採資料。鴟尾５は胴部無段だが、鴟尾６は有段。													

文献	掲載鴟尾
i　奈良県立考古博物館編 1971『大和考古資料目録』第１集 pp.119－120	1，3
ii　奈良県立考古博物館編 1975『大和考古資料目録』第３集 p.135	1
iii　岡崎晋明 1976「鴟尾・鬼瓦」『考古博物館展示解説』奈良県立考古博物館	1
iv　近江昌司 1977「五條市天神山瓦窯の遺跡と遺物」國學院大學編『國學院雑誌』第78巻第９号 國學院大學広報課 pp.67－68	1
v　奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（13　天神山瓦窯跡）pp.65－66	1，2
vi　岩戸晶子・ 道上祥武 2021「天神山瓦窯出土鴟尾の検討」『奈良文化財研究所紀要2021』奈良文化財研究所 pp.22－25	5，6

17　和歌山県

和歌山県の鴟尾出土遺跡

1．西国分塔跡（那賀郡岩出市西国分）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥			○										i
2	飛鳥			○										i

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（51　史跡　西国分廃寺）p.107	1，2

2．佐野廃寺（伊都郡かつらぎ町佐野）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○					塔基壇西側瓦層、西方基壇北辺	i
2	白鳳							○						ii

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（52　佐野廃寺）pp.107－108	1
ii	和田大作 2019「Ⅲ　整備に伴う発掘調査」『和歌山県指定文化財（史跡）　佐野寺跡整備報告書』かつらぎ町教育委員会 p.28	2

3．上野廃寺（和歌山市上野薬師壇）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○					中門周辺	i

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（53　史跡　上野廃寺（紀伊薬師寺））p.109	1

4．堂ノ谷瓦窯跡（田辺市秋津町田尻堂ノ谷）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○	○	○	○	○	○	○	(42)	(96)	(76)		i

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（54　堂ノ谷瓦窯跡）pp.21, 110	1

5．薬勝寺廃寺（和歌山市薬勝寺）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良						○	○						i，ii
備考	文献 i は記載のみで詳細不明。1 の縦帯は二条の中心点を有す円形連珠文帯の間に一条の正段を配する。													

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（鴟尾出土遺跡地名表（未調査及び所在不明））p.154	1
ii	和歌山県市史編さん委員会 1983「薬勝寺廃寺跡」『和歌山県史　考古資料』pp.424－425 PL.169	1

6．荒見廃寺（紀の川市荒見）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1			○	○			○	○	○					i
備考	縦帯に竹管状連珠文、胴部は正段、腹部側の鰭部は逆段、腹部に文様なし。													

	文献	掲載鴟尾
i	立岡和人 2012『荒見廃寺発掘調査概要報告書』pp.10－11、17－18	1

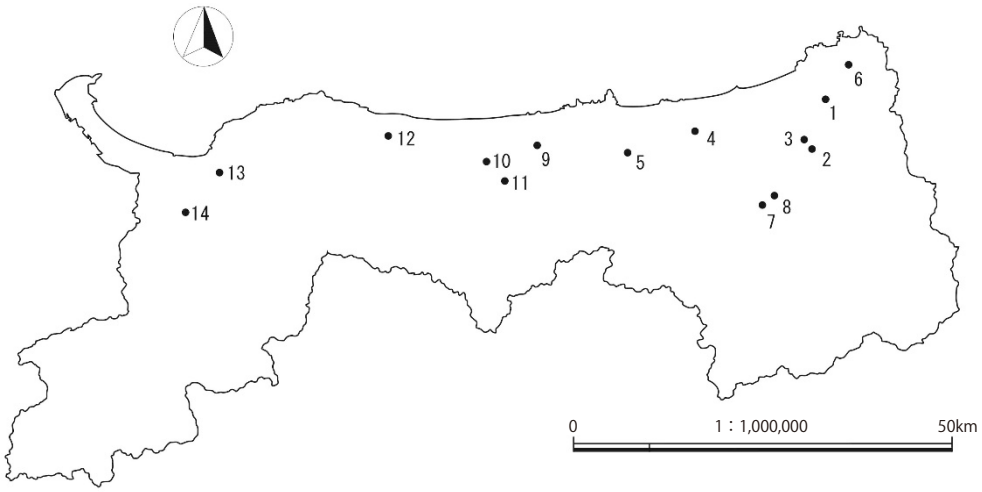
7．北山廃寺（紀の川市貴志川町北山）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鷗			○			○	○						i，ii
備考	文献 i 、ii は出土の記載のみで詳細不明。													

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（鴟尾出土遺跡地名表（未調査及び所在不明））p.154	1
ii	和歌山県市史編さん委員会 1983「北山廃寺跡」『和歌山県史　考古資料』p.151	1

18　鳥取県



1　蔵見３号墳
2　玉鉾等ヶ坪廃寺
3　大権寺廃寺
4　吉岡大海廃寺
5　上原南遺跡
6　岩井廃寺
7　土師百井廃寺
8　奥谷窯跡
9　野方弥陀ヶ平廃寺
10　大御堂廃寺
11　大原廃寺
12　斎尾廃寺
13　上淀廃寺
14　大寺廃寺

鳥取県の鴟尾出土遺跡

1．蔵見３号墳（鳥取市福部町）

遺跡種別	時代
古墳	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳										(15)	(22)	横穴式石室玄室他	i －vi

文献		掲載鴟尾
i	谷岡陽一・中原斉 1996「鳥取県福部村蔵見３号墳出土の鴟尾付陶棺」日本考古學會編『考古學雑誌』第81巻第４号 pp.95－105	1
ii	谷岡陽一，中原斉 1997「第Ⅴ章 第４節 蔵見３号墳の陶棺」谷岡陽一，中原斉編 『蔵見古墳群発掘調査報告書』（福部村埋蔵文化財調査報告書 第11集）福部村教育委員会 pp.42－45，図版21，22	1
iii	間壁忠彦 1997「第Ⅶ章 付論 蔵見の陶棺について」谷岡陽一・中原斉編 『蔵見古墳群発掘調査報告書』（福部村埋蔵文化財調査報告書 第11集）福部村教育委員会 pp.54－56	1
iv	大脇潔 1999「日本の鴟尾（さまざまな鴟尾）」『日本の美術 No.392 鴟尾』至文堂 第16図 p.38	1
v	谷岡陽一 2000「第一章 原始 第四節 古墳時代 四 特色ある古墳 蔵見三号墳」福部村編 『新編 福部村誌 上巻』福部村 pp.88－90	1
vi	豊島雪絵 2013「Ⅵ 仏教文化の受容 鴟尾のある陶棺」豊島雪絵編『平成25年度 特別展示図録 土の棺に眠る～美作の陶棺～』津山郷土博物館 pp.43－44	1

2．玉鉾等ヶ坪廃寺（鳥取市国府町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○	○					ii －iv，viii －xi
2	白鳳								○					viii，xi
3	白鳳							○						viii，xi
4	白鳳		○											viii，xi
5	白鳳							○						viii，xi
6	白鳳				○									viii，xi
7	白鳳							○						vi，viii，xi
8	白鳳								○					viii，xi
9	白鳳					○								viii，xi
10	白鳳							○						viii，xi
11	白鳳			○			○	○	○					i －iv，vi，viii－xi
12	白鳳							○						viii，xi
13	白鳳			○			○							viii，xi
14	白鳳					○								viii
15	白鳳			○			○	○						iii，iv，vi，viii，xi
16	白鳳			○										viii
17	白鳳			○										viii
18	白鳳			○										viii
19	白鳳			○										viii
20	白鳳			○			○	○						vi
21	白鳳						○							vi
22	白鳳						○							vi

備考	これらの鴟尾は山陰型鴟尾で、文献ⅱ・ⅵによると金堂跡周辺から出土したと考えられている。5は底部の資料でもある。

文献		掲載鴟尾
i	鳥取県教育委員会社会教育課 1960「附録 1 鳥取県奈良時代，平安時代初期廃寺一覧 鳥取県内古廃寺遺瓦の拓本 等ヶ坪廃寺（玉鉾廃寺）」『鳥取県文化財調査報告書』第1集 鳥取県教育委員会　拓7，8	11
ii	川上貞夫 1964「鳥取県岩美郡国府町等ヶ坪廃寺址の発見」『史迹と美術』第三十四輯ノ五（第三四五号）史迹美術同攷會 pp.178－184 口絵第1，2頁	1，11
iii	川上貞夫 1966「附録 3 等ケ坪廃寺」川上貞夫著『岡益の石堂』矢谷印刷所 pp.110－122	1，11，15
iv	川上貞夫 1968「8 玉鉾等ヶ坪廃寺趾」川上貞夫著『因幡のふるさと（国府町の歴史と文化）』矢谷印刷所 pp.75－85	1，11，15
v	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』(79 玉鉾廃寺（等ケ坪廃寺)) pp.131－132	－
vi	津川ひとみ 1991「Ⅵ 出土遺物（二）鴟尾」津川ひとみ編『玉鉾等ケ坪廃寺跡発掘調査報告書』（国府町文化財報告書7）国府町教育委員会 pp.8－14 図版10，12	7，11，15，20－22
vii	大脇潔 1999「飛鳥・白鳳時代の鴟尾（鴟尾の地域色　山陰系の鴟尾)」『日本の美術 No.392 鴟尾』至文堂 pp.68－69	－
viii	岸本浩忠 2003「(4）等ヶ坪廃寺」岸本浩忠編『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館 pp.18－26，136－141	1－19
ix	岸本浩忠 2004「鳥取県内の鴟尾－山陰系鴟尾を中心に－」『郷土と博物館』第49巻（通巻93号）鳥取県立博物館 pp.13－18	1，11
x	中原斉 2006「上淀廃寺式軒丸瓦と山陰型鴟尾」第34回山陰考古学研究集会事務局編『第34回山陰考古学研究集会　古代の隠岐』pp.9－22	1，11
xi	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1－13，15

3．大権寺廃寺（鳥取市国府町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳										(15)	(22)	横穴式石室玄室他	i－vi
備考	表採資料。山陰型鴟尾。													

文献		掲載鴟尾
i	鳥取県教育委員会社会教育課 1960「附録1．鳥取県奈良時代・平安時代初期廃寺一覧 鳥取県内古廃寺遺瓦の拓本 大権寺廃寺」『鳥取県文化財調査報告書第』第1集 鳥取県教育委員会　拓9	1
ii	川上貞夫 1966「付録 4 大権寺跡」川上貞夫著『岡益の石堂』矢谷印刷所 pp.123－132	1
iii	岸本浩忠 2003「(23）大権寺遺跡」岸本浩忠編『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館 pp.104－107，169－170	1
iv	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1

4．吉岡大海廃寺（鳥取市吉岡）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○									第9トレンチ攪乱土中	i－iv
備考	山陰型鴟尾。													

文献		掲載鴟尾
i	平川誠・船井武彦 1987「吉岡遺跡」平川誠・船井武彦編『面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査概要報告書』（鳥取市文化財報告書22）鳥取市教育委員会 pp.23－50 図版17	1
ii	岸本浩忠 2004「鳥取県内の鴟尾－山陰系鴟尾を中心に－」『郷土と博物館』第49巻（通巻93号）鳥取県立博物館 pp.13－18	1
iii	中原斉 2006「上淀廃寺式軒丸瓦と山陰型鴟尾」第34回山陰考古学研究集会事務局編『第34回山陰考古学研究集会　古代の隠岐』pp.9 －22	1
iv	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1

5．上原南遺跡（鳥取市気高町）

遺跡種別	時代
官衙	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1								○					大土坑SK016・019・022	i，iii，vi
2								○					大土坑SK016・019・022	i －vi
3								○	○				大土坑SK016・019・022	i，iii
4								○					大土坑SK016・019・022	i －vi
5							○	○					大土坑SK016・019・022	i，iii
6								○					大土坑SK016・019・022	i，iii，vi
7								○					大土坑SK016・019・022	i，iii
8								○					大土坑SK016・019・022	i，iii
9				○									西山麓畑地採集	iii
備考	これらの鴟尾は山陰型鴟尾で、１・７は底部から基底部の資料でもある。													

文献		掲載鴟尾
i	川根裕二ほか編 1986『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書　上原南遺跡・上原西遺跡・上原遺跡・山宮阿弥陀森遺跡』（気高町文化財報告書Ⅸ）気高町教育委員会 p.152 図版52	1－8
ii	気高町教育委員会 1987「Ⅲ上原南遺跡（飯里集落北部付近）出土の瓦について 六 鴟尾」『気高町埋蔵文化財発掘調査報告書』（気高町文化財報告書Ⅺ，１～５）pp.129－130 図版６，７	２，４
iii	志賀崇 1991「Ⅴ４．上原南遺跡大土坑出土瓦の調査（５）鴟尾 」山中敏史編『郡衙周辺寺院の研究－因幡国気多郡衙と周辺寺院の分析を中心に－』奈良文化財研究所 pp.69－74 PL.26－28	１－９
iv	岸本浩忠 2004「鳥取県内の鴟尾－山陰鴟尾を中心に－」『郷土と博物館』第49巻（通巻93号）鳥取県立博物館 pp.13－18	２，４
v	中原斉 2006「上淀廃寺式軒丸瓦と山陰型鴟尾」第34回山陰考古学研究集会事務局編『第34回山陰考古学研究集会　古代の隠岐』pp.9 －22	２，４
vi	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	１，２，４，６

6．岩井廃寺（岩美郡岩美町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					第７トレンチ	i －iv
2	白鳳							○	○				第７トレンチ	i －iv
備考	山陰型鴟尾。													

文献		掲載鴟尾
i	中島伸二 2002「第３章　2.岩井地区試掘調査」中島伸二編『岩美町内遺跡発掘調査報告書Ⅵ』（岩美町文化財調査報告書第25集）岩美町教育委員会 pp.６－18 図版３	1，2
ii	岸本浩忠 2004「鳥取県内の鴟尾－山陰鴟尾を中心に－」『郷土と博物館』 第49巻（通巻93号）鳥取県立博物館 pp.13－18	1，2
iii	中原斉 2006「上淀廃寺式軒丸瓦と山陰型鴟尾」第34回山陰考古学研究集会事務局編『第34回山陰考古学研究集会　古代の隠岐』pp.９－22	1，2
iv	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』６ 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1，2

7．土師百井廃寺（八頭郡八頭町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○	○				塔跡西畑（金堂跡）採集	i，iii－v
2	白鳳							○	○				塔跡西側採集	iv－v
3	白鳳			○	○								第３南トレンチ南側（中門東側）	ii，v
4	白鳳							○					第１トレンチ中央付近	vi
備考	１・２は胴部無文鴟尾、３・４は山陰型鴟尾。													

文献		掲載鴟尾
i	鳥取県教育委員会社会教育課 1960「六.史跡 土師百井廃寺跡」『鳥取県文化財調査報告書第』第１集 鳥取県教育委員会　pp.18－20　拓15，16	1
ii	吉村博恵 1979「第２章 第２節遺物１．瓦（４）鴟尾」吉村博恵・清水真一編『土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅰ』郡家町教育委員会 pp.14－18　図版９	3
iii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（81 史跡 土師百井廃寺）pp.133－134	1
iv	岸本浩忠 2003「（８）土師百井廃寺」岸本浩忠編『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館 pp.40－49，152	1，2
v	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』６ 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1－3
vi	久保穣二朗 2017「土師百井廃寺の瓦について」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』８ 鳥取県埋蔵文化財センター pp.１－32	4

8．奥谷窯跡（八頭郡八頭町）

遺跡種別	時代
窯跡	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○	○					i－iv
2	白鳳							○						iii－iv
3	白鳳							○	○					iii－iv
備考	窯跡表採資料。胴部無文鴟尾。													

文献		掲載鴟尾
i	鳥取県教育委員会社会教育課 1960「附録　1.鳥取県内奈良時代・平安時代初期廃寺一覧 鳥取県内古廃寺遺瓦の拓本 奥谷窯跡」『鳥取県文化財調査報告書』第１集 鳥取県教育委員会 拓26	1
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（84　奥谷瓦窯跡）pp.134－135	1

iii	岸本浩忠 2003「(24) 奥谷窯跡」岸本浩忠編『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館 pp.108－110，171	1－3
iv	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1－3

9．野方弥陀ヶ平廃寺（東伯郡湯梨浜町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○	○					i－vi
2	白鳳							○	○					iii，v，vi
3	白鳳							○	○					iii，v，vi
4	白鳳							○	○					iii，v，vi
5	白鳳			○			○	○						i，vi
6	白鳳			○			○	○						vi
7	白鳳							○						vi
8	白鳳			○			○	○						iv，vi
9	白鳳			○			○	○	○					vi
10	白鳳							○						vi
11	白鳳			○										iii，v，vi
備考	表採資料。1－4は山陰系鴟尾、5－11は山陰型鴟尾。4，5は底部から基底部、6は底部の資料でもある。													

	文献	掲載鴟尾
i	鳥取県教育委員会社会教育課 1960「附録 1.鳥取県内奈良時代，平安時代初期廃寺一覧 鳥取県内古廃寺遺瓦の拓本 彌陀ケ平廃寺」『鳥取県文化財調査報告書』第1集 鳥取県教育委員会 拓32－34	1，5
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』(80 野方廃寺（弥陀ケ平廃寺)) pp.132－133	1
iii	岸本浩忠 2003「(11) 野方弥陀ヶ平廃寺」岸本浩忠編『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館 pp.55－59，156	1－4，11
iv	岸本浩忠 2004「鳥取県内の鴟尾－山陰鴟尾を中心に－」『郷土と博物館』第49巻（通巻93号）鳥取県立博物館 pp.13－18	1，8
v	中原斉 2006「上淀廃寺式軒丸瓦と山陰型鴟尾」第34回山陰考古学研究集会事務局編『第34回山陰考古学研究集会 古代の隠岐』pp.9－22	1－4，11
vi	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1－11

10．大御堂廃寺（倉吉市駄経寺町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○									平成6年度試掘 T2	i，iii，iv
2	白鳳							○					平成6年度試掘 T1	iv
3	白鳳							○					松ヶ坪遺跡第1次	i，iii，iv
4	白鳳							○	○				松ヶ坪遺跡第1次	i－iv
5	白鳳			○			○	○	○				昭和49年度 興和紡績地内表採か？	i－iv
6	白鳳			○			○	○					平成6年度試掘 T1	i，iii，iv

7	白鳳							○					大御堂廃寺跡第２次　T３ SD01	i，iii，iv
8	白鳳							○					南区３層（松ヶ坪地区）	v
9	白鳳							○					南区３層（松ヶ坪地内）	v
備考	１－４，８，９は山陰型鴟尾、５－７は胴部無文鴟尾。２は底部の資料でもある。													

文献		掲載鴟尾
i	岡平拓也 2001「第４章第４節 鴟尾」眞田廣幸ほか編『史跡 大御堂廃寺跡発掘調査報告書』（倉吉市文化財調査報告書第107集）倉吉市教育委員会 pp.33－34 図版15	１，３－７
ii	岸本浩忠 2004「鳥取県内の鴟尾－山陰系鴟尾を中心に－」『郷土と博物館』第49巻（通巻93号）鳥取県立博物館 pp.13－18	４，５
iii	中原斉 2006「上淀廃寺式軒丸瓦と山陰型鴟尾」第34回山陰考古学研究集会事務局編『第34回山陰考古学研究集会　古代の隠岐』pp.９－22	１，３－７
iv	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』６ 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	１－７
v	小田芳弘 2019「大御堂廃寺（松ヶ坪地区）発掘調査　（２）遺物瓦類（鴟尾）」加藤誠司ほか編『倉吉市内遺跡分布調査報告書20』（倉吉市文化財調査報告書第154集）倉吉市教育委員会 pp.２－17	８，９

11. 大原廃寺（倉吉市大原）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					瓦溜（第３次調査Ｔ５）出土	i－iv
備考	山陰型鴟尾か。													

文献		掲載鴟尾
i	岡平拓也 1999「Ⅳ遺跡の概要 ２遺物 鴟尾」眞田廣幸ほか編『史跡 大原廃寺発掘調査報告書』（倉吉市文化財調査報告書第100集）倉吉市教育委員会 p.36	1
ii	岸本浩忠 2004「鳥取県内の鴟尾－山陰系鴟尾を中心に－」『郷土と博物館』第49巻（通巻93号）鳥取県立博物館 pp.13－18	1
iii	中原斉 2006「上淀廃寺式軒丸瓦と山陰型鴟尾」第34回山陰考古学研究集会事務局編『第34回山陰考古学研究集会　古代の隠岐』pp.９－22	1
iv	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター 調査研究紀要』６ 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1

12. 斎尾廃寺（東伯郡琴浦町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						iv
2	白鳳							○						iv，x
3	白鳳							○						x
4	白鳳							○						vii，viii，xi，xii
5	白鳳			○										v，vii，viii
6	白鳳			○			○							vi，xi，xii
7	白鳳						○							vi，xi，xii
8	白鳳			○										xi，xii
9	白鳳						○							vi，xii

10	白鳳							○						vi，xii
11	白鳳							○						vi，xii
12	白鳳								○					xii
備考	これらの鴟尾は蓮華文帯鴟尾で、文献ii・iiiなどによると鴟尾は金堂跡の東斜面から採集されたようである。													

文献		掲載鴟尾
i	梅原末治 1933「伯耆伊勢崎村の廢寺址と其古瓦」『寶雲』（第５冊）第二年第一冊 寶雲舍 pp.22－28	－
ii	上田三平 1935「法隆寺系廢寺阯の研究（特に伯耆國齋尾廢寺阯に就いて）」鵤故郷舍編『法隆寺研究.続』（夢殿；第14冊）鵤故郷舍 pp.95－110	－
iii	梅原末治 1944「伯耆齋尾廢寺阯と出土塼佛」『史迹と美術』第十五輯ノ九（第一六五號）史迹美術同攷會 pp.257－270	－
iv	鳥取県教育委員会社会教育課 1960「五、特別史跡 斎尾廃寺跡」鳥取県教育委員会社会教育課編『鳥取県文化財調査報告書』第１集 鳥取県教育委員会 pp.14－18 拓54－55	1，2
v	京都大学文学部 1968「東伯郡東伯町（伊勢崎村）斎尾廃寺 鴟尾破片」『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第２部 p.218	5
vi	東伯町誌編さん委員会 1968「歴史 第三（一）２．斎尾廃寺」『東伯町誌』東伯町長 pp.132－141	6，7，9－11
vii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（85 特別史跡 斎尾廃寺）pp.135－136	4，5
viii	大脇潔 1983「古代寺院の造営と工人の移動－蓮華文帯鴟尾を中心として－」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念文化財論叢』pp.301－319 図版３	4，5
ix	大脇潔 2002「第２部鴟尾 ４．鴟尾の変遷」東京国立博物館編『東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書 瓦塔・鴟尾』pp.67－68	－
x	岸本浩忠 2003「(18) 斎尾廃寺」岸本浩忠編『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館 pp.86－91，165－166	2，3
xi	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	4，6－8
xii	野口良也 2019「第３章第３節出土遺物（２）発掘調査によらない出土遺物」野口良也編『特別史跡斎尾廃寺跡Ⅰ－範囲確認調査報告書－』（琴浦町埋蔵文化財調査報告書第20集）琴浦町教育委員会 pp.27－33 PL.8	4，6－12

13. 上淀廃寺（米子市淀江町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					表採資料	i，v
2	白鳳			○		○		○					４次Ｃ区14Tr	ii，ix，x
3	白鳳				○								４次Ｄ区27Tr	ii，ix，x
4	白鳳							○					Ｅ区39Tr SD008	ii，ix，x
5	白鳳			○			○	○	○				４次Ｃ区14Tr SD003	ii，viii－x
6	白鳳							○	○				４次Ｃ区14Tr SD003	ii，ix
7	白鳳			○			○	○					４次Ｄ区21Tr SX001	ii，ix，x
8	白鳳							○	○				２次Ｄ区1Tr	ii，ix
9	白鳳			○									表採資料	ii，viii，ix
10	白鳳							○					４次Ｂ区６－２Tr	ii，ix，x
11	白鳳								○				４次Ｄ区３Tr SB002南	ii，ix，x
12	奈良			○				○					４次Ｂ区20Tr SX001	ii，viii－x
13	奈良							○					６次Ｂ区54Tr	iii，x

14	奈良						○					6次B区54Tr	iii
15	奈良						○	○				柳谷A区SD018	iv
16	奈良						○					柳谷 B区遺構外	iv
17	奈良			○								10次6・7Tr（中門付近）	vi
18	奈良						○	○				10次6・7Tr（瓦溜）	vi
19	白鳳						○	○				10次59Tr	vi
20	白鳳			○		○	○					14次4区拡張区	vii，x
21	白鳳						○					5次D区21Tr	x
22	白鳳						○	○				柳谷 A4－5Tr	x
23	白鳳		○									8次24Tr拡張	x
24	白鳳						○					4次D区27Tr SD002	x
25	白鳳							○				5次D区53Tr SD002	x
26	白鳳						○					12次C区67Tr	x
27	奈良					○	○					5次F区43－1Tr	x
28	奈良						○	○				4次D区3Tr SB002南	x
29	奈良						○					2次D区3Tr	x
備考	これらの鴟尾は山陰型鴟尾である。4，7，20，24は底部、26，29は底部から基底部の資料でもある。												

	文献	掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（83　上淀廃寺）p.134	1
ii	中原斉 1995「第5章第Ⅰ節瓦5.鴟尾」中原斉編『上淀廃寺』（淀江町埋蔵文化財調査報告書第35集）pp.110－114 図版54－56	2－12
iii	岩田文章 1997「第2章第2節上淀廃寺（第6次調査）」岩田文章編『淀江町内遺跡Ⅵ（平成7・8年度淀江町内遺跡詳細分布調査報告書）』（淀江町埋蔵文化財調査報告書第44集）淀江町教育委員会 pp.6－9 図版6	13，14
iv	岩田文章 2002「第3章第1節A区の調査」岩田文章編『福岡柳谷遺跡（上淀廃寺跡第9次調査含む）』（淀江町埋蔵文化財調査報告書第53集）淀江町教育委員会 pp.15－17，35－36 図版9	15，16
v	岸本浩忠 2003「(20）上淀廃寺」岸本浩忠編『鳥取県立博物館所蔵 古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館 pp.94－97，167	1
vi	岩田文章 2004「第3章第1節第10次調査」岩田文章編『上淀廃寺跡Ⅳ（第10次～第12次発掘調査報告書）』（淀江町埋蔵文化財調査報告書第57集）淀江町教育委員会 pp.5－16 図版10，12	17－19
vii	岩田文章 2004「第3章調査の概要」岩田文章編『上淀廃寺跡Ⅴ（第14次発掘調査報告書）』（淀江町埋蔵文化財調査報告書第60集）淀江町教育委員会 pp.5－8，12	20
viii	岸本浩忠 2004「鳥取県内の鴟尾－山陰鴟尾を中心に－」『郷土と博物館』第49巻（通巻93号）鳥取県立博物館 pp.13－18	5，9，12
ix	中原斉 2006「上淀廃寺式軒丸瓦と山陰型鴟尾」第34回山陰考古学研究集会事務局編『第34回山陰考古学研究集会　古代の隠岐』pp.9－22	2－12
x	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	2－5，7，10－13，20－29

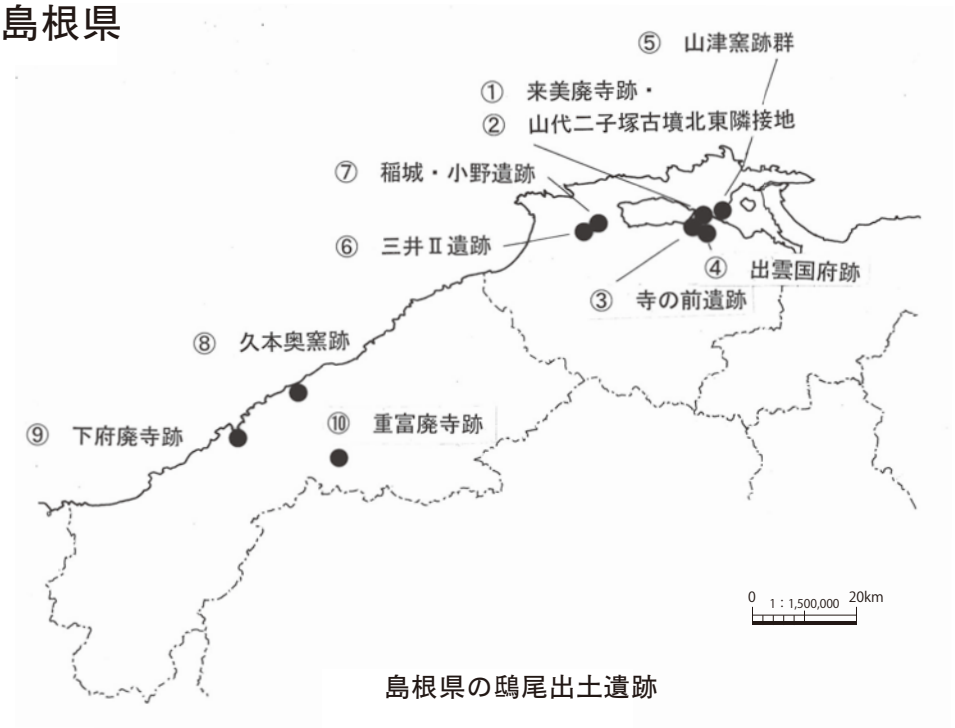
14. 大寺廃寺（西伯郡伯耆町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳									45	77	102	大寺地内	i －viii
備考	石製鴟尾。胴部は無文。													

	文献	掲載鴟尾
i	足立正 1922「伯耆長者原の遺址と紀成盛」民族と歴史編輯所『民族と歴史』第７巻 第１號（長者號）日本學術普及會pp.79－89	1
ii	倉光清六 1931「伯耆の石鴟尾および廢大寺」『史蹟名勝天然記念物』第６集 第10号 pp.55－67	1
iii	倉光清六 1932「第三編 第二章 第七節 佛教の状況 七．西伯郡幡郷村大字大殿字大寺廢寺」鳥取縣學務課編『鳥取縣郷土史』鳥取縣廳 pp.150－152	1
iv	鳥取県教育委員会社会教育課 1960「八、重要文化財 石製鴟尾」『鳥取県文化財調査報告書』第１集 鳥取県教育委員会 pp.16－17 写真94	1
v	鳥取県教育委員会社会教育課編 1967「６．出土遺物について（Ⅳ）その他の遺物 A 石製鴟尾」『大寺廃寺発掘調査報告書Ⅱ』（国道180号線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅱ）鳥取県教育委員会 p.20 第14図版	1
vi	鳥取大学歴史学研究会 1968「伯耆の古廃寺 研究への一考察 十一、大寺廃寺」『千代川』第６号 pp.24－25	1
vii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（86 大寺廃寺）pp.23, 135－136	1
viii	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター 調査研究紀要』６ 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1

19　島根県



島根県の鴟尾出土遺跡

1．来美廃寺跡（山代郷北新造院跡）（松江市来美町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	山陰型	○	○	○		○	○	○				金堂	ⅰ－ⅲ
2	白鳳	山陰型						○					金堂	ⅰ，ⅲ

文献		掲載鴟尾
ⅰ	柳浦俊一編 2002『来美廃寺「山代郷北新造院」推定地発掘調査報告書』八雲立つ風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書	1，2
ⅱ	林健亮編 2007『山代郷北新造院跡　－史跡出雲国山代郷遺跡群北新造院跡（来美廃寺）発掘調査報告書－』八雲立つ風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書	1
ⅲ	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6　鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1，2

2．山代二子塚古墳北東隣接地

（旧陸軍歩兵第63聯隊射撃場西南方　松江市山代町）

遺跡種別	時代
窯跡？	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	山陰型		○										ⅰ－ⅳ

文献		掲載鴟尾
ⅰ	島根県立八雲立つ風土記の丘資料館 1976『山陰の仏教考古』p.6	1
ⅱ	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（87　来美廃寺）p.137	1
ⅲ	花谷浩 2013「瓦礫陶拾遺　その３」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第３集　pp.40－41	1
ⅳ	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6　鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1

3．寺の前遺跡（松江市山代町）

遺跡種別	時代
寺院跡隣接	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良	山陰型		○			○	○						i，ii

	文献	掲載鴟尾
i	瀬古諒子編 1995『寺の前遺跡発掘調査報告書』松江市文化財調査報告書第62集　松江市教育委員会	1
ii	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6　鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1

4．出雲国府跡（松江市大草町）

遺跡種別	時代
国府跡	奈良－室町

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良	山陰型						○					正庁?	i，ii

	文献	掲載鴟尾
i	間野大丞ほか編 2009『史跡出雲国府跡』6，風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書19，島根県教育委員会	1
ii	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6　鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1

5．山津窯跡群（松江市大井町）

遺跡種別	時代
窯跡	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良	山陰型						○	○				1号窯跡	ii，iii
2	奈良	山陰型		○				○					2号窯跡	i，iii

	文献	掲載鴟尾
i	岡崎雄二郎編 2003『山津窯跡発掘調査報告書　－2・3号窯跡－』松江市埋蔵文化財発掘調査報告書第93集　松江市教育委員会	2
ii	藤原哲編 2006『大井窯跡群　山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』松江市埋蔵文化財発掘調査報告書第104集　松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団	1
iii	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6　鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1，2

6．三井Ⅱ遺跡（出雲市斐川町）

遺跡種別	時代
窯跡	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○	○		○	○	○					i
2	白鳳			○			○	○	○					i

文献		掲載鴟尾
i	花谷浩 2016「三井Ⅱ遺跡の瓦窯と瓦について」『杉沢遺跡・杉沢Ⅱ遺跡・杉沢横穴墓群　出雲斐川中央工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』出雲市の文化財報告31　出雲市教育委員会 pp.313－348	1，2

7．稲城・小野遺跡（出雲市斐川町）

遺跡種別	時代
官衙跡	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良	山陰型		○				○						i，iv
備考	出雲郡家跡。													

文献		掲載鴟尾
i	露梨靖子 2005『小野遺跡　県道木次直江停車場線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』斐川町文化財調査報告書第31集　斐川町教育委員会	1
ii	妹尾周三 2011「出雲へ伝わった仏教の特質　－古代寺院から見た地域間交流とその背景－」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県古代文化センター pp.167－183	－
iii	花谷浩・平野芳英・原俊二 2014「楯縫郡と出雲郡の古瓦　－収蔵瓦の再評価－」『しまねミュージアム協議会共同研究紀要』第４号 pp.17－26	－
iv	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6　鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1

8．久本奥窯跡（江津市嘉久志町）

遺跡種別	時代
窯跡	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	珠文帯		○	○		○	○	○					i，ii
2	奈良	珠文帯						○						i，ii
3	奈良							○						i

文献		掲載鴟尾
i	西尾克己・廣江耕史編 1995『一般国道９号線江津道路建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ（鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窯跡）』島根県教育員会	1－3
ii	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6　鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1，2

9．下府廃寺跡（浜田市下府町）

遺跡種別	時代
寺院跡	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良			○									金堂	i，ii

文献		掲載鴟尾
i	原裕二ほか 1993『下府廃寺跡－平成元年～平成4年度市内遺跡発掘調査概報－』浜田市教育委員会	1
ii	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6　鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1
iii	妹尾周三 2016「石見の古代寺院と瓦づくり」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社 pp.439－450	－

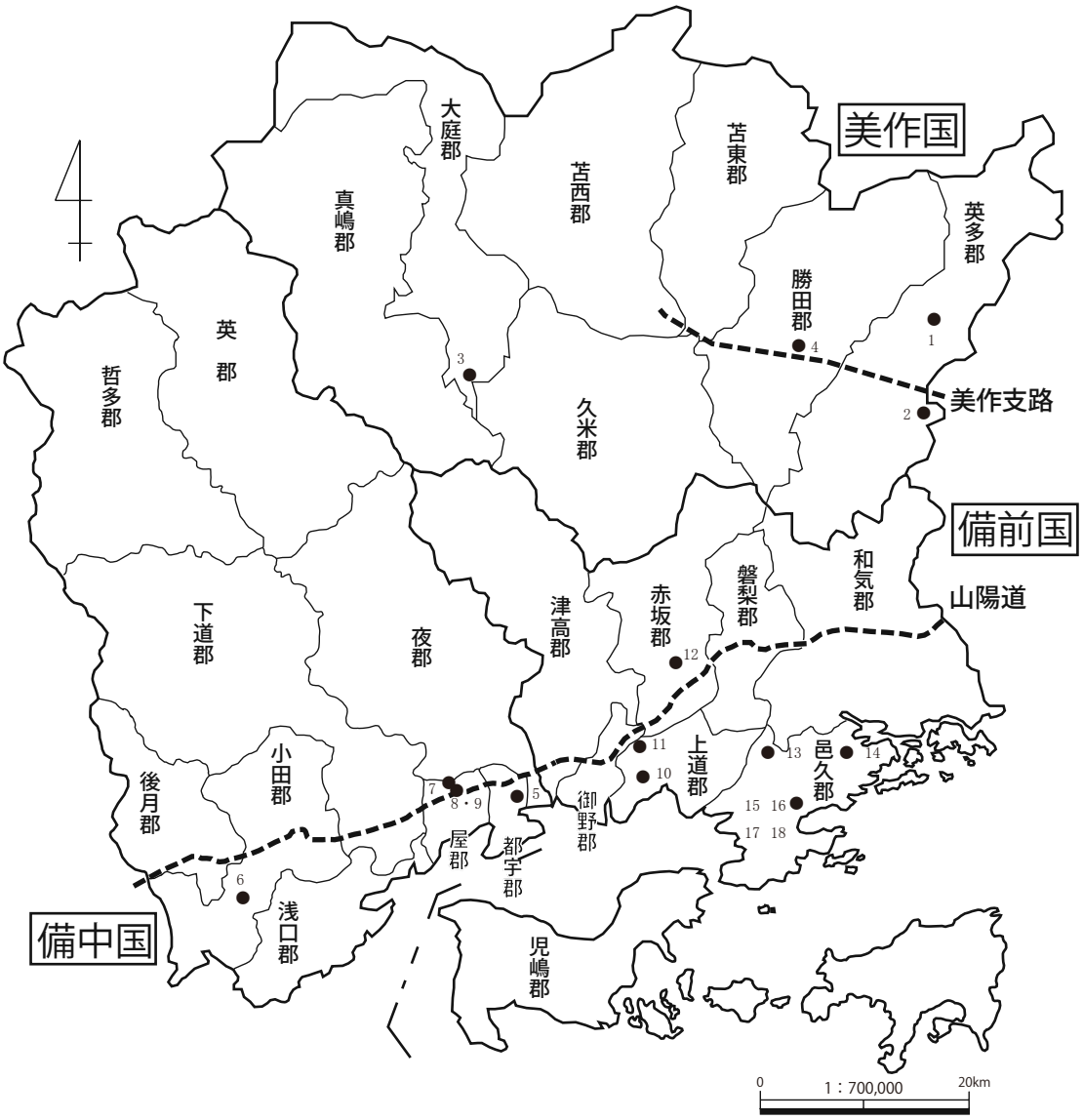
10. 重富廃寺跡（浜田市旭町）

遺跡種別	時代
寺院跡	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良			○										i，ii
備考	径５cmの貼り付け円文													

文献		掲載鴟尾
i	榊原博英・藤田大輔 2013『島根県浜田市遺跡地図Ⅴ（旭自治区）・浜田市治和町鰐石試掘調査』平成23年度市内遺跡発掘調査報告書 浜田市教育委員会 p.95	1
ii	久保穣二朗 2015「山陰の鴟尾」『鳥取県埋蔵文化財センター調査研究紀要』6 鳥取県埋蔵文化財センター pp.27－65	1
iii	妹尾周三 2016「石見の古代寺院と瓦づくり」須田勉編『日本古代考古学論集』同成社 pp.439－450	－

20　岡山県



岡山県の鴟尾出土遺跡

1．大海廃寺（美作市作東町山手大海寺）

遺跡種別	時代
寺院跡	白鳳－平安？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳						○	○						i
2	白鳳							○						ii

文献		掲載鴟尾
i	岡山県教育委員会1978『大海廃寺緊急発掘調査報告書』	1
ii	岡山県教育委員会1979『大海廃寺緊急発掘調査報告書』	2

2．土居廃寺（美作市作東町土居御茶屋）

遺跡種別	時代
寺院跡	白鳳？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？							○						i

文献	掲載鴟尾
i 岡山県教育委員会1976『楢原廃寺跡緊急発掘調査概報』	1

3．五反廃寺（真庭市久世町三崎字五反）

遺跡種別	時代
寺院跡	白鳳－平安後期

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？						○	○						i，ii

文献	掲載鴟尾
i 岡山県史編纂委員会1986「五反廃寺」『岡山県史』第18巻 考古資料　岡山県	1
ii 松本和男 1975「五反廃寺」『久世町史』久世町教育委員会	1

4．五反遊古墳（勝央町平）

遺跡種別	時代
古墳	飛鳥？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥？		○	○	○	○	○	○	○			19		i
2	飛鳥？		○	○	○	○	○	○	○			16.5		i
備考	東京国立博物館所蔵。													

文献	掲載鴟尾
i 美作町史編集員会 2007「美作地方の陶棺」『美作町史　通史編』美作市	1，2

5．日畑廃寺（倉敷市日畑）

遺跡種別	時代
寺院跡	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	不明			○									トレンチ17	i

文献	掲載鴟尾
i 小野雅明ほか2005『日畑廃寺』倉敷埋蔵文化財センター	1

6．関戸廃寺（笠岡市関戸字唐臼，前田，下前田）

遺跡種別	時代
寺院跡	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良？						○		○				トレンチ32	i
2	奈良？						○	○	○				表採	i

文献	掲載鴟尾
i 安藤康宏・岩崎仁司1997『関戸廃寺』笠岡市教育委員会	1，2

7．備中国分寺（総社市上林）

遺跡種別	時代
寺院	奈良－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良？			○			○	○						i
備考	他所からの伝世品である可能性がある。													

文献	掲載鴟尾
i　高橋護ほか1991「備中」『新修国分寺の研究』第４巻 吉川弘文館	1

8．末ノ奥古窯跡（総社市宿）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳													i
備考	記載のみ。													

文献	掲載鴟尾
i　山手村史刊行委員会 2003「末ノ奥古窯跡」『山手村史－史料編－』山手村	1

9．道金山古窯跡（総社市宿）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳								○					i
備考	全６点出土。													

文献	掲載鴟尾
i　山手村史刊行委員会 2003「末ノ奥古窯跡」『山手村史－史料編－』山手村	1

10．幡多廃寺（岡山市中区赤田）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？							○	○				P14	i
2	白鳳？						○	○	○					ii

文献	掲載鴟尾
i　草原孝典 2015『幡多廃寺』岡山市教育委員会	1
ii　岡山市教育委員会 1975『幡多廃寺発掘調査報告』	2

11. 賞田廃寺（岡山市賞田）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○					第1調査時出土	i
2	白鳳 奈良							○					東塔跡	i
3	白鳳			○			○							i
4	白鳳													i
5	白鳳							○						i
備考	他にも4点出土。													

文献	掲載鴟尾
i 高橋伸二ほか 2005『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会	1－5

12. 吉岡廃寺（赤磐市瀬戸町塩納）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳								○					i
備考	計4点出土。													

文献	掲載鴟尾
i 岡山県教育委員会 1982『吉岡廃寺』	1

13. 服部廃寺（瀬戸内市長船町服部）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－鎌倉

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○	○	○				講堂周辺	i
2	白鳳								○				講堂周辺	i
備考	計8点出土。													

文献	掲載鴟尾
i 池田浩ほか 1997『服部廃寺』長船町教育委員会	1，2

14. 大城谷南窯跡（備前市佐山）

遺跡種別	時代
窯跡	不明

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1														i
備考	文献に記載のみで詳細は不明。													

文献	掲載鴟尾
i 亀田修一 2006「切明窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市	1

15. 新林（宮嶺）窯跡（瀬戸内市邑久町尻海字新林）

遺跡種別	時代
窯跡	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？							○						i

文献	掲載鴟尾
i　亀田修一 2006「新林（宮嶺）窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市	1

16. 切明窯跡

（瀬戸内市邑久町尻海字切明、牛窓町長浜字寒風）

遺跡種別	時代
窯跡	古墳後－飛鳥 白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○										i
備考	寒風古窯跡から250m地点。													

文献	掲載鴟尾
i　亀田修一 2006「切明窯跡」『邑久町史　考古編』瀬戸内市	1

17. 寒風古窯跡（瀬戸内市牛窓町長浜等）

遺跡種別	時代
窯跡	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A		○	○	○	○	○					Ⅰ－1号窯跡焚口	i
2	白鳳	A		○			○	○					Ⅱ－1号窯跡焚口	i
3	白鳳	A		○			○	○					1号窯跡群灰原	i
4	白鳳	B－1												i，iii
5	白鳳	B－2												i，iii
6	白鳳	B－3												i，iii
7	白鳳	B－4												i，iii
8	白鳳	B－5												i，iii
9	白鳳	B－5						○					1号窯跡群灰原	i
10	白鳳	B－6						○					1号窯跡群灰原	i
11	白鳳	C－1					○	○					1号窯跡群灰原	i
12	白鳳	C－2					○	○						i
13		C－3												i，iii
14		C－4												i，iii
15		C－5												i，iii
16		C－6												i，iii
17	白鳳	C－7		○			○	○					Ⅰ－1号窯跡焚口	i
18	白鳳？	小型	○	○	○	○	○		○					ii
備考	他多数出土。瀬戸内市教育員会と吉備考古館等が発掘調査資料や寄贈資料を所蔵。													

	文献	掲載鴟尾
i	馬場昌一ほか2009「鴟尾」『史跡寒風古窯跡群』瀬戸内市教育委員会	1－17
ii	牛窓町史編纂委員会1997「寒風古窯跡」『牛窓町史　資料編Ⅱ』考古，古代，中世，近世　牛窓町	18
iii	大脇潔2017「寒風窯産の鴟尾再考」『岡山県備前市佐山東山窯にかかる須恵器窯の大型化をめぐる地域事例報告および備前焼の窯構造』窯跡研究会	4－8，13－16，他型式あり

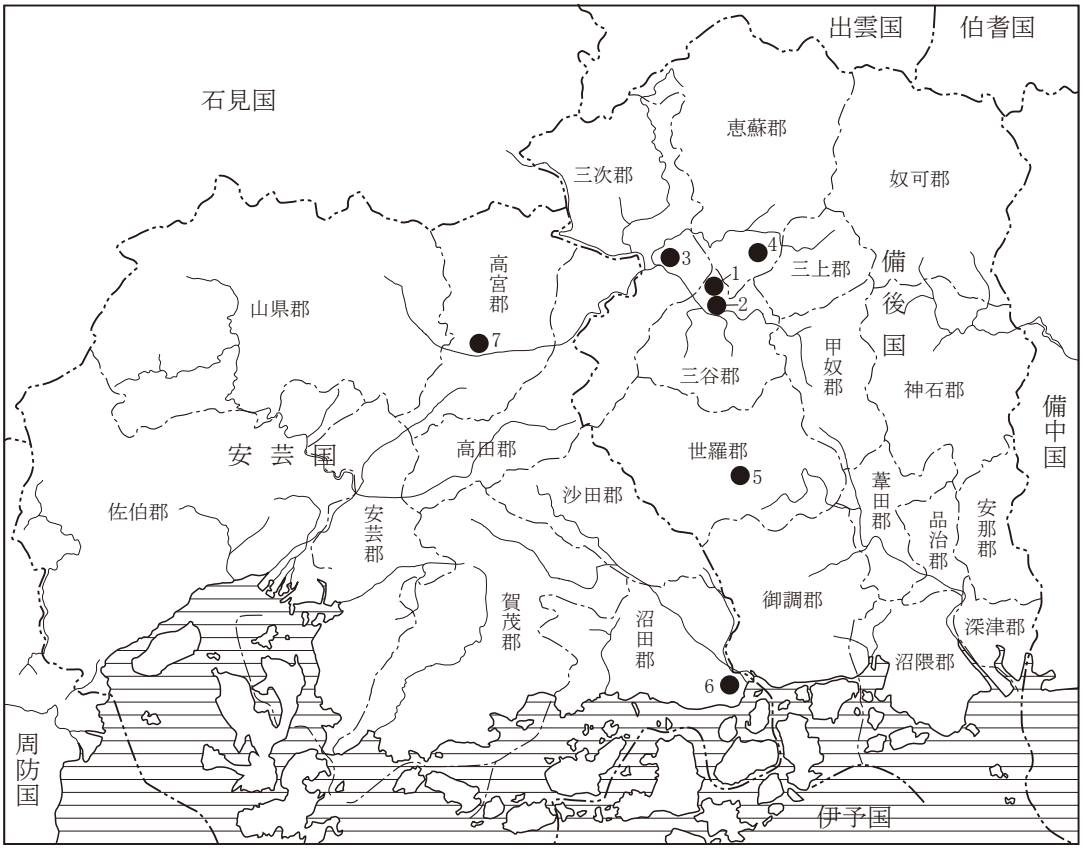
18. 寒風古墳（瀬戸内市牛窓町長浜）

遺跡種別	時代
古墳	飛鳥－白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	B－3						○					石室外	i

	文献	掲載鴟尾
i	馬場昌一ほか 2009「鴟尾」『史跡寒風古窯跡群』瀬戸内市教育委員会	1

21　広島県



1：寺町廃寺、 2：上山手廃寺、 3：寺戸廃寺、 4：法塔崎廃寺、 5：康徳寺廃寺
6：横見廃寺、 7：明官地廃寺

広島県の鴟尾出土遺跡

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

1．寺町廃寺（三次市向江田町）

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A		○		○	○		○				金堂東棟	ii－v
2		B					○	○	○					i，iii
3	奈良	C						○						ii
4	奈良	D					○	○	○					ii

文献		掲載鴟尾
i	広島県立府中高等学校地歴部 1979「広島県の古瓦類（府中高校所蔵資料の紹介⑧）」『地歴』第７集 pp.１－８	2
ii	三次市教育委員会 1980「Ⅴ　出土の遺物（１　瓦類）」『備後寺町廃寺－推定三谷寺跡第１次発掘調査概報－』pp.23－25	1，3，4
iii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980「75　寺町廃寺」『日本古代の鴟尾』pp.128, 129	1，2
iv	広島県立歴史民俗資料館 1998『ひろしまの古代寺院　寺町廃寺と水切り瓦』（平成10年度考古企画展）図録 p.15	1
v	和田崇志 2011「資料紹介　寺町廃寺跡の忍冬唐草文のある鴟尾－新発見の採集資料に関する報告－」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第８集 pp.54－63	1

2. 上山手廃寺（三次市向江田町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1		A		○		○	○	○	○					ii
2	白鳳	B		○	○		○	○						i，iii，iv

	文献	掲載鴟尾
i	広島県教育委員会 1980「Ⅳ　出土遺物（1．瓦類）」『上山手廃寺発掘調査概報』（2）p.16 図版10	2
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（76　上山手廃寺）pp.128－129	1
iii	広島県教育委員会 1981「Ⅳ　出土遺物（3．異形土器）」『上山手廃寺発掘調査概報』（3）p.12	2
iv	広島県立歴史民俗資料館 1998『ひろしまの古代寺院　寺町廃寺と水切り瓦』（平成10年度考古企画展）図録 p.23	2

3．寺戸廃寺（三次市三次町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	A					○	○						i，iii
2		B		○			○					5.3		i，ii，iv
備考	鴟尾B（小型鴟尾）は、瓦塔の屋根（棟）に乗せられていたものと考えられる。													

	文献	掲載鴟尾
i	三次市教育委員会 1970「Ⅴ　出土遺物（鴟尾）」『寺戸廃寺跡発掘調査概報－第1次－』pp.18－21	1，2
ii	福山市立福山城博物館 1975「備後の古代寺院」『備後の原始・古代－祖先の生活と文化－』（昭和50年秋季特別展）p.32	2
iii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（77　寺戸廃寺）pp.129－131	1
iv	亀田修一 2002「吉備の瓦塔」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』下　古代吉備研究会　pp.439－440	2

4．法塔崎廃寺（庄原市上原町）

遺跡種別	時代
寺院	奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良			○			○							－

	文献	掲載鴟尾
i	文献なし（未発表）。	－

5．康徳寺廃寺（世羅郡世羅町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○		○					i，ii

文献		掲載鴟尾
i	世羅町教育委員会 1995「Ⅴ．出土の遺物（鴟尾）」『備後康徳寺廃寺－発掘調査報告書－』pp.36，38	1
ii	広島県立歴史民俗資料館 1998『ひろしまの古代寺院　寺町廃寺と水切り瓦』（平成10年度考古企画展）図録 p.24	1

6．横見廃寺（三原市本郷町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳か	A	○	○				○						i，ii
2		B		○										i

文献		掲載鴟尾
i	広島県教育委員会 1972「Ⅴ　出土の遺物（鴟尾）」『安芸横見廃寺の調査Ⅰ　昭和46年度発掘調査報告』pp.25，28	1，2
ii	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（78　史跡　横見廃寺）pp.130－131	1

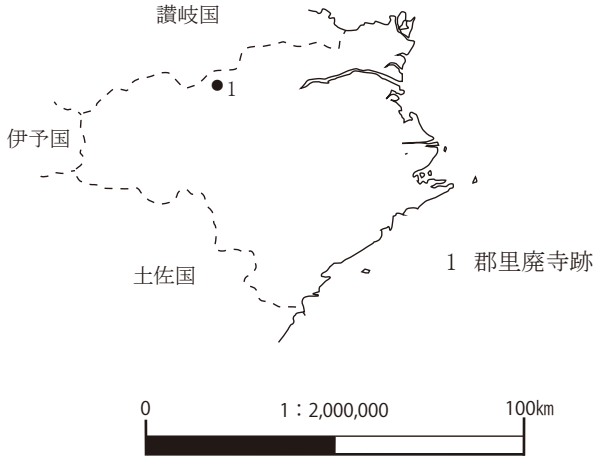
7．明官地廃寺（安芸高田市吉田町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○	○	○			○					建物Ａ北妻側（瓦積Ａ）	i，ii

文献		掲載鴟尾
i	広島県立埋蔵文化財センター 1987「Ⅴ．出土遺物（Ｂ．鴟尾）」『明官地廃寺跡－第１次発掘調査概報』pp.15，16	1
ii	広島県立歴史民俗資料館 1998『ひろしまの古代寺院　寺町廃寺と水切り瓦』（平成10年度考古企画展）図録 p.28	1

22　徳島県



徳島県の鴟尾出土遺跡

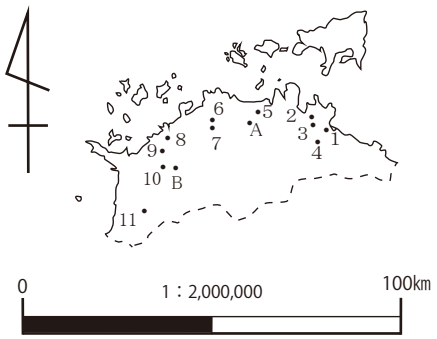
遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－奈良

1．郡里廃寺跡（美馬市美馬町銀杏木）

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥						○	○					4次調査　西外郭塀西溝	i
2	飛鳥							○					文献に記載なし	ii
3	飛鳥						○	○					文献に記載なし	ii

文献		掲載鴟尾
i	美馬市教育委員会編 2007『郡里廃寺跡第4次調査概要報告書』美馬市教育委員会	1
ii	美馬市教育委員会編 2018『郡里廃寺跡発掘調査報告書』美馬市教育委員会	2，3

23　香川県



1　石井廃寺
2　末古窯跡
3　願興寺
4　極楽寺跡
5　片山池1号窯跡
6　鴨廃寺
7　開法寺跡
8　仲村廃寺跡
9　田村廃寺跡
10　善通寺
11　大興寺
A　坂田廃寺
B　弘安寺

香川県の鴟尾出土遺跡

1. 石井廃寺（さぬき市寒川町石井）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○				○						i，ii
2	白鳳						○	○						i，ii
3	白鳳							○					表採	i，ii

文献		掲載鴟尾
i	高松市歴史資料館 1996『讃岐の古瓦展』	1－3
ii	川畑聰 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第5号 香川考古刊行会	1－3

2. 末古窯跡（さぬき市志度町）

遺跡種別	時代
窯跡	白鳳－奈良？

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○									表採	i

文献		掲載鴟尾
i	六車恵一・溝淵茂樹 1969「香川県須恵古窯跡発掘調査報告」『文化財協会報』特別号9 香川県文化財保護協会	1

3. 願興寺（さぬき市長尾町造田）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○			○							i，ii

文献		掲載鴟尾
i	高松市歴史資料館 1996『讃岐の古瓦展』	1
ii	川畑聰 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第5号 香川考古刊行会	1

4. 極楽寺跡（さぬき市寒川町石田東）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						i，ii

文献		掲載鴟尾
i	高松市歴史資料館 1996『讃岐の古瓦展』	1
ii	川畑聰 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第５号 香川考古刊行会	1

5．片山池１号窯跡（高松市西春日町）

遺跡種別	時代
窯跡	平安中頃

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳	寒風B－３					○	○					焚口部窯壁	i －iii
備考	白鳳期に創建と考えられる坂田廃寺が近接しており，そこで使用したものを転用したと考えられる。他１点。													

文献		掲載鴟尾
i	高松市歴史資料館 1996『讃岐の古瓦展』	1
ii	川畑聰 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第５号 香川考古刊行会	1
iii	渡邊誠 2009『片山池窯跡群確認調査報告書』高松市教育委員会	1

6. 鴨廃寺（坂出市加茂町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳		○	○										i，ii
2	白鳳		○	○										i，ii
3	白鳳						○	○	○					i，ii

文献		掲載鴟尾
i	高松市歴史資料館 1996『讃岐の古瓦展』	１－３
ii	川畑聰 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第５号 香川考古刊行会	１－３

7．開法寺跡（坂出市府中町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？			○			○		○					i，ii
2	白鳳						○							ii
備考	他１点（今井ほか 2020）。													

文献		掲載鴟尾
i	川畑聰 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第５号 香川考古刊行会	1
ii	今井和彦ほか 2020『開法寺跡Ⅰ』坂出市教育委員会	1，2

8．仲村廃寺跡（善通寺市富士見町）

遺跡種別	時代
寺院跡	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良？			○										i，ii

文献		掲載鴟尾
i	高松市歴史資料館 1996『讃岐の古瓦展』	1
ii	川畑聰 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第５号 香川考古刊行会	1

9．田村廃寺跡（丸亀市田村町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○									SP01	i
2	白鳳						○	○					SP04	i
3	白鳳	寒風A											SP07	i

文献		掲載鴟尾
i	東信男 2002『田村遺跡発掘調査報告書』丸亀市教育委員会　株式会社百十四銀行	1－3

10．善通寺（善通寺市善通寺町）

遺跡種別	時代
寺院跡	奈良－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳？							○					伝出土	i

文献		掲載鴟尾
i	川畑聰 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第５号 香川考古刊行会	1

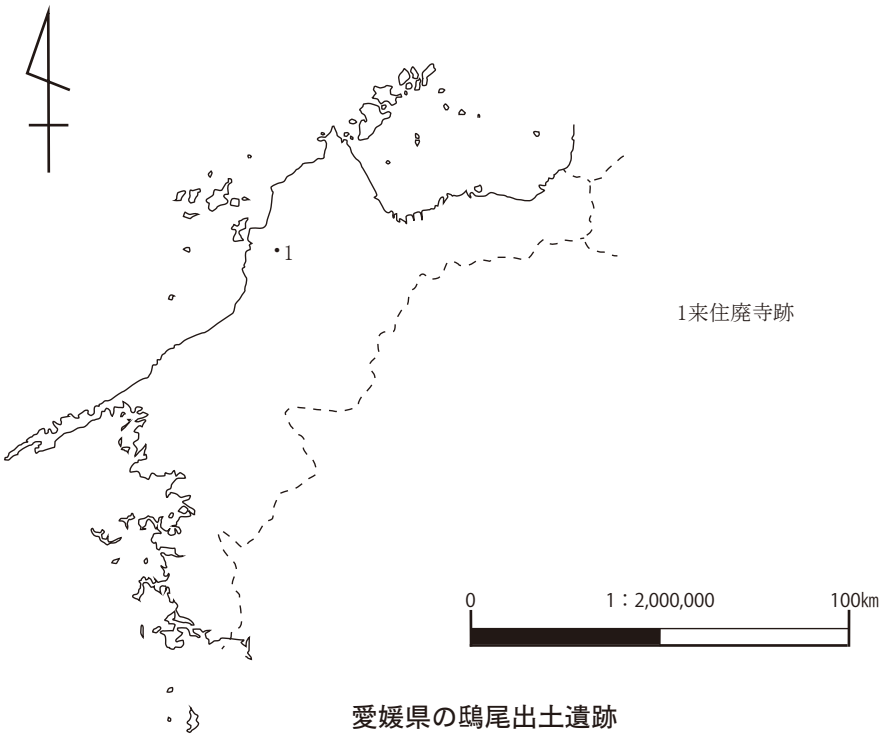
11．大興寺（三豊市山本町辻）

遺跡種別	時代
寺院跡	奈良？－現代

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良？						○	○						i
2	奈良？						○	○						i
備考	伝出土である。現物は紛失しており，拓本のみ。													

文献		掲載鴟尾
i	川畑聰 1996「古代讃岐の鴟尾」『香川考古』第５号 香川考古刊行会	1，2

24　愛媛県



愛媛県の鴟尾出土遺跡

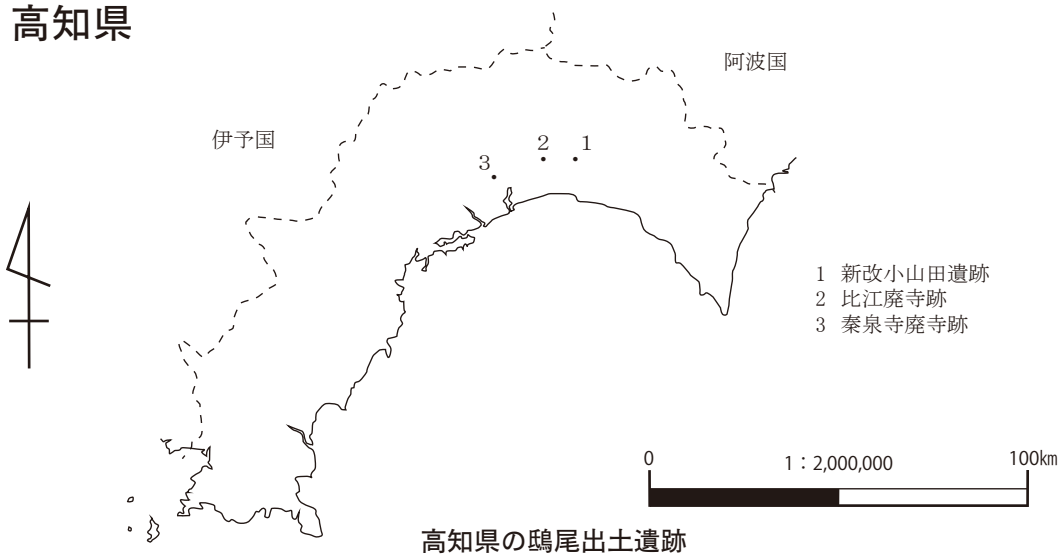
1．来住廃寺跡（松山市来住町）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥			○									２次調査　SD33	i，ii
2	飛鳥			○									２次調査　SD33	i
3	飛鳥			○				○					２次調査　SD33	i
備考	文献ii の本文では２次調査区のSD13から出土したとされているが、遺構配置図（図５－12）ではSD33という遺構名になっている。													

	文献	掲載鴟尾
i	小笠原好彦 1979「E　鴟尾」『来住廃寺』松山市教育委員会 pp.46－48	1 － 3
ii	森光晴 1986「12　来住廃寺」『愛媛県史資料編　考古編』愛媛県 pp.649－652	1

25　高知県



高知県の鴟尾出土遺跡

1．新改小山田遺跡（香美市土佐山田町）

遺跡種別	時代
窯跡?	飛鳥－平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥			○									Ⅱ区	i
2	飛鳥							○					Ⅱ区	i
3	飛鳥							○					Ⅱ区	i
4	飛鳥							○					Ⅱ区	i
5	飛鳥						○						Ⅱ区	i
6	飛鳥							○					Ⅱ区	i
7	飛鳥							○					Ⅱ区	i
8	飛鳥							○					Ⅱ区	i

文献		掲載鴟尾
i	土佐山田町教育委員会編 2002『新改小山田遺跡』土佐山田町教育委員会	1－8

2．比江廃寺跡（南国市比江）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥			○	○								S区 SK１埋土（Ⅱ層）	i

文献		掲載鴟尾
i	高知県教育委員会編 1991『比江廃寺跡発掘調査概報』高知県教育委員会	1

3. 秦泉寺廃寺跡（高知市秦泉寺）

遺跡種別	時代
寺院	飛鳥－奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	飛鳥							○					6次調査 包含層（SD2・3東）	ii
2	飛鳥				○								7次調査 SD4	iii
3	飛鳥				○								3次調査	i
4	飛鳥						○	○					3次調査	i

	文献	掲載鴟尾
i	山本哲也 1984『秦泉寺廃寺跡－第3次発掘調査－』高知市教育委員会	3，4
ii	高知市教育委員会編 2004『秦泉寺廃寺（第6次調査）』高知市教育委員会	1
iii	高知市教育委員会編 2018『秦泉寺廃寺跡（第7次調査）』高知市教育委員会	2

26　福岡県

福岡県の鴟尾出土遺跡

1．那珂遺跡群（福岡市博多区那珂）

遺跡種別	時代
集落	飛鳥

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1								○					34次調査周濠	i
2								○					34次調査周濠	i

文献		掲載鴟尾
i	福岡市教育委員会編 1994『那珂10』福岡市埋蔵文化財調査報告書第365集 p.100	1，2

2．ウトグチ瓦窯跡（春日市白水ヶ丘）

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1					○									i
2					○									i
3				○										i
4								○	○					i
5								○						i
6								○	○					i
7				○										i
8				○										i
9									○					i
10				○										i
11				○										i
12				○										i
13				○				○	○					i
14									○					i
15				○				○						i
16									○					i
17								○						i
18								○						i
19								○						i
20								○						i
21				○										i

文献		掲載鴟尾
i	春日市教育委員会編 2004『ウトグチ遺跡Ｂ地点』 春日市文化財調査報告書第39集 pp.134－140	1－21

3．月ノ浦窯跡群（大野城市牛頸）

遺跡種別	時代
窯	飛鳥

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1						○							Ⅰ号窯跡	i
2					○								Ⅰ号窯跡	i
3					○								Ⅰ号窯跡	i
4					○								Ⅰ号窯跡	i
5									○				Ⅰ号窯跡	i

6								○				Ⅰ号窯跡	i
7				○								Ⅰ号窯跡	i
8							○					Ⅰ号窯跡	i
9												Ⅰ号窯跡	i
10								○				Ⅰ号窯跡	i
11							○					Ⅰ号窯跡	i
12			○									Ⅰ号窯跡	i

文献		掲載鴟尾
i	大野城市教育委員会編 1993『月ノ浦窯跡群』 大野城市文化財調査報告書第 39集 pp.65－67	1－12

4．大宰府政庁跡（太宰府市観世音町）

遺跡種別	時代
官衙	奈良，平安

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	奈良	A					○	○					政庁南門前面外湟	ii
2	奈良	A				○	○	○					蔵司地区	i，ii
3	平安	B					○	○					政庁南面整地土，瓦溜り	i，ii
4	平安	B						○					政庁南面整地土，瓦溜り	ii
5	平安	B					○	○					政庁南面整地土，瓦溜り	i，ii
6	平安	B					○	○					政庁中門西側回廊北側雨落溝SD025	ii
7	平安	B					○	○	○				政庁南面整地土，瓦溜り	ii
備考	A類：８世紀第１四半期。B類：10世紀中頃。													

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』(97　特別史跡 大宰府跡) p.145	2，3，5
ii	九州歴史資料館 2002『大宰府政庁跡』p.210	1－7

5．椿市廃寺（行橋市福丸）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳								○					ii
2	白鳳								○					ii
3	白鳳								○					ii
4	白鳳							○						ii
5	白鳳							○						i，ii
6	白鳳			○										ii
7	白鳳							○					Ⅲ区	iii
8	白鳳								○				Ⅳ区４トレンチ	iii
9	白鳳								○				Ⅳ区３トレンチ	iii
10	白鳳								○				Ⅳ区３トレンチ	iii
11	白鳳							○					Ⅳ区３トレンチ	iii
12	白鳳							○					Ⅳ区３トレンチ	iii
13	白鳳							○					Ⅶ区20号土坑	iii
14	白鳳			○									Ⅳ区３トレンチ	iii
15	白鳳			○									Ⅴ区	iii

文献		掲載鴟尾
i	北九州市立歴史博物館編 1979『豊前の古瓦展』p.18	5
ii	行橋市教育委員会編 1980『椿市廃寺』行橋市文化財調査報告書 p.20	1 － 6
iii	行橋市教育委員会編 1996『椿市廃寺Ⅱ』行橋市文化財調査報告書第24集 p.37	7 －15

6．上坂廃寺（京都郡みやこ町上坂）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						i

文献		掲載鴟尾
i	豊津町町史編纂委員会編 1998『豊津町史』上巻	1

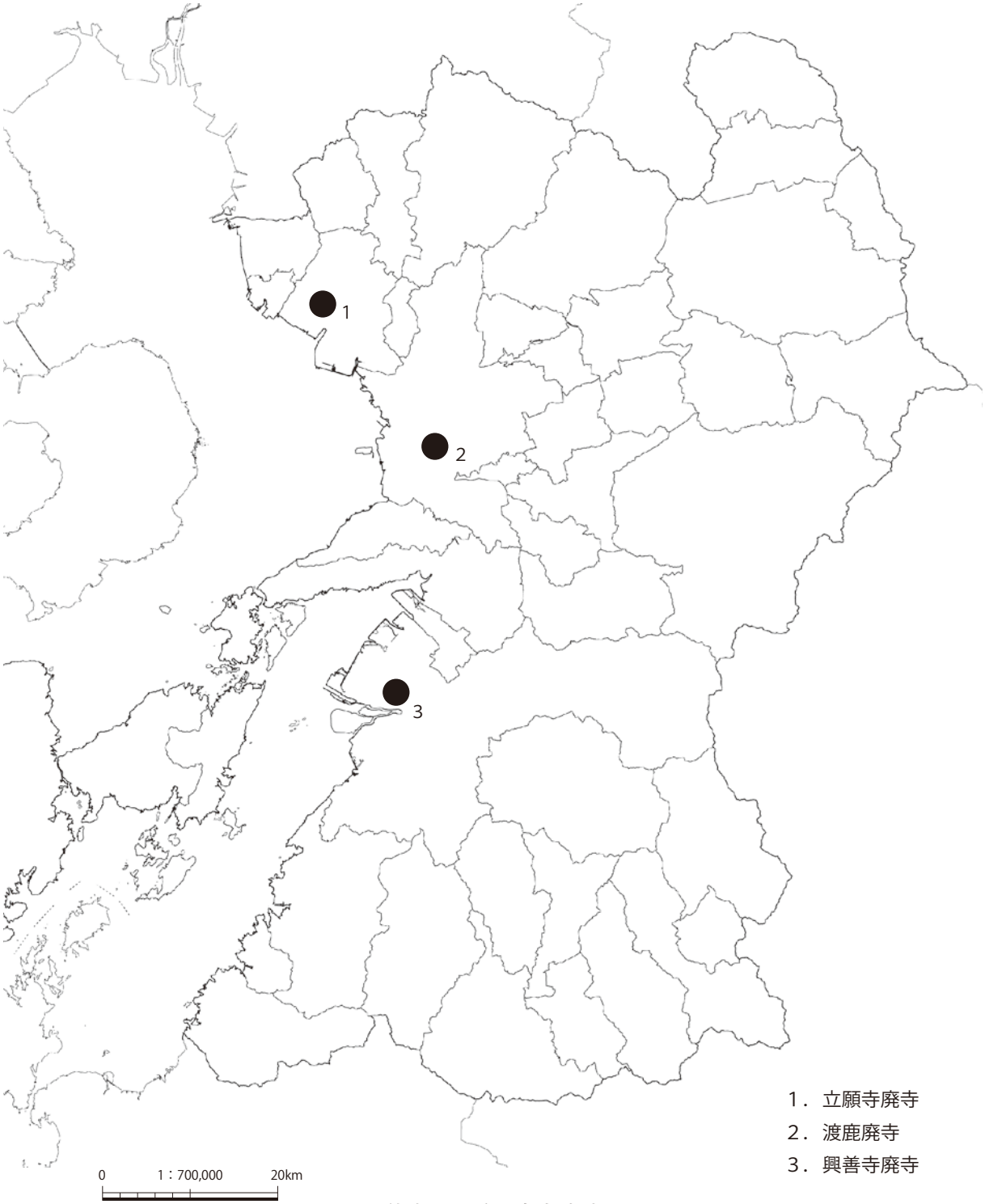
7．船迫堂がへり窯跡（築上郡築城町大事船迫）

遺跡種別	時代
窯	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳			○									1号窯跡4号トレンチ	iii
2	白鳳			○			○	○					2号窯跡焚口床面	iii
3	白鳳						○	○					2号窯跡2号トレンチ	iii
4	白鳳							○					2号窯跡焼成部	iii
5	白鳳								○				2号窯跡	iii
6	白鳳						○							iii
7	白鳳													iii
8	白鳳			○			○	○					5号トレンチ	iii
9	白鳳							○						iii
10	白鳳						○							iii
11	白鳳						○							iii
12	白鳳			○				○					1号トレンチピット	iii
13	白鳳							○						i，ii
備考	1・6に沈線の唐草文、8は縦帯に沈線の唐草文、2・3・6・10・11の縦帯に単弁4葉蓮華文のスタンプ。													

文献		掲載鴟尾
i	北九州市立歴史博物館編 1979『豊前の古瓦展』	13
ii	九州歴史資料館編 1980『九州古瓦図録』柏書房	13
iii	築城町教育委員会編 1998『船迫窯跡群』築城町文化財調査報告書第6集	1 －12

27　熊本県



熊本県の鴟尾出土遺跡

1．立願寺廃寺（玉名市立願寺）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1														i
備考	詳細不明													

文献		掲載鴟尾
i	玉名市 1994『玉名郡衙』	1

2．渡鹿廃寺（熊本市中央区大江）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						i

文献		掲載鴟尾
i	奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1980『日本古代の鴟尾』（99　渡鹿廃寺・渡鹿遺跡）p.145	1

3．興善寺廃寺（八代市興善寺町）

遺跡種別	時代
寺院	白鳳，奈良

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1														i
備考	詳細不明。													

文献		掲載鴟尾
i	鶴島俊彦 1991「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学』 肥後考古学会	1

28　大分県

1．伊藤田ホヤ池窯跡

大分県の鴟尾出土遺跡

遺跡種別	時代
瓦窯	白鳳

1．伊藤田ホヤ池窯跡（中津市伊藤田）

鴟尾	時代	型式	部位							法量			出土地・使用建物	文献
			頭部	胴部	脊稜	頂部	縦帯	鰭部	腹部	頭部幅	長	高		
1	白鳳							○						i

文献		掲載鴟尾
i	北九州市立歴史博物館編 1979『豊前の古瓦展』	1

2022年２月５日発行

古代瓦研究 XI

－鴟尾・鬼瓦の展開１　鴟尾－

著作権所有　独立行政法人　国立文化財機構
編集発行者　奈 良 文 化 財 研 究 所
奈良県奈良市二条町２－９－１

印 刷 者　（株）明新社
奈良県奈良市南京終町３丁目464番地